

奇譚クラブ

● 新しい風俗文献誌



5



昭和四十五年四月二十日印刷 昭和四十五年五月一日発行 五月号(第二十四卷第五号) 毎月一回(日発行) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十一年四月二十一日国鉄大島特別郵便承認第二〇号

奇譚クラブ

1970.5

都市出版社

東京都渋谷区代々木4-22-13
代々木シャトー102振替=71588



十年前『奇譚クラブ』に連載されるや三島由紀夫・遠藤周作・埴谷雄高・渋澤龍彦・倉橋由美子の諸氏を瞠目せしめ、その後中断されたままその完成と刊行の待望久しかった伝統的大幻想小説、遂に刊行なる

家畜人ヤプー

沼 正三著

解説〓奥野健男・金井美恵子
46判函入・四六四頁・挿画28枚・二〇〇〇円

■奥野健男〓本書は様々な愛玩器械になった家畜的極限でのみ味える女性の美とそれに仕える男の歓びを描いた衝撃的大作。最も幸福なのはアニマルと蔑まれながらイース貴族の快楽の必需品になった日本人の後裔であるヤプーだけだ。ここにヤプーの未来性と革命性したがって人間性まで予兆できる

■金井美恵子〓作者は汚物がマゾヒズムという人間の本質的性格の中で信仰の対象となることを見事に例証してみせた。私たちは一旦このグロテスクな樂園であり異様な悪夢の映し出される肉質万華鏡へ入り込むや、もはや容易には抜け出せないであろう

週刊文春〓これぞまさしく天下の奇書。その奇想天外ぶりは現物を……!!
平凡パンチ〓ヤプーという未来の日本人を想定した物凄いマゾSF小説
プレイボーイ〓この恐怖と悪夢の世界は凡人が夢想だにできないものだ

■初版忽ち品切・大增刷発売中

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

花と蛇 特集号

作・六・鬼・団

定価 五〇〇円 略号 『花』

団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気で満天下のSFファンを沸かせた傑作であります。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 口絵

美女羞恥責 花と蛇 画集

- 一、恐ろしい浣腸の末排泄を強要される美女
- 一、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 一、清純な美女に初めて縄掛けしていたふる
- 一、剃毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
- 一、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 一、俵のように縛られて宙吊りにされた美女
- 一、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
- 一、足吊りで強制浣腸を施される全裸の美女

本文内容見出し

発端 美女を狙う狼たち

第一章 清純な令嬢の屈服

(カメラと令嬢・女奴隷・口惜しき陶酔)

第二章 人身御供の令夫人

(燃ゆる美体・狼の酒宴・人身御供)

第三章 深窓の美少女とズベ公

(赤いしごき・再び奈落へ・奸計)

第四章 小夜子への執拗な調教

(鈴と縄)

第五章 変性色事師の登場

(二人のシスターボーイ・化物の計画・京子の哀泣)

第六章 生れかわるスター京子

(崩潰する京子・夏の嵐・地獄の宣誓・まんじの舞)

第七章 激しいスターへの訓練

(奈落への道・美女と白痴)

第八章 低脳男と令夫人の結婚

(奴隷の花嫁・二対一)

第九章 愛弟子を調教する静子夫人

(蛇の巣・悲しき決意)

第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊

(美花の踊り・薔薇と百合)

第十一章 悪魔たちの哄笑

(白い関係・調教日記・手鏡)

第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

(甘い調教・挫折)

第十三章 珍芸を開陳する令夫人

(おとし穴・筆と硯)

第十四章 淫靡な時代劇ショー

(三人の風来坊・時代劇ムード・牢獄にて・フランス式)

第十五章 華々しきショーの展開

(ショーの開幕・楽屋の中・松舞台)

第十六章 野卑な妾二人のいたぶり

(珍芸・姐の上)

第十七章 ズベ公達の邪悪な責め

(美女と野獣・ある日の回想)

第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち

(美女崩潰・別離)

第十九章 悪党の執拗ないたぶり

(鏡の部屋・卑劣な録音)

第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面

(鏡地獄・断髪令嬢・悲しき対面)

第二十一章 勝ち誇る悪党一味

(受難の姉妹)

第二十二章 中国伝来の秘法

(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい唄)

第二十三章 緊縛された美女の涕泣

(三悪女の狂態)

第二十四章 新しい餌食への触手

(義兄弟)

第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄

(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)

第二十六章 恐怖の責め続く

(地獄の接吻・巨大な責め)

第二十七章 結末なき責めの結末

(調教柱・復讐劇・肉の拷問・京子の珍芸)

奇譚クラブ
昭和四十五年四月二十日印刷
昭和四十五年五月一日発行
五月号(第二十四卷第五号)毎月一回、日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可
昭和四十二年四月二十二日国鉄大局特別扱承認第三〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



5月号 ¥350

△強烈な虐被女性▽

川路むら子子の狂態

本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあつと驚いた典型的なM女性川路むら子さんの要望によって彼女のあるゆる被虐の狂態を再び刻明に描写し、ここにファンの手元に提供することにします。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むつ

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むな

妖気溢れる開股責

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むま

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むや

うば、もう責め手の意のままに、どろろと開陳してゆく。

臀部舐し浣腸責め

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むわ

露出した全裸肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むゆ

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むえ

壮絶肛門責の妙技

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むお

悶悦海老縛り地獄

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むも

片足吊りの全裸像

大手札三枚一組 略号四〇〇円
川路むら子 略号八むみ

不安定な片足吊りで全身を舐めるように見られる羞しい苦痛。

編集部特写初産婦若妻臨月の資料案内

昭和四十三年三月号の奇クサロ誌上で「或る願望に托して」という告白を発表して、本誌の緊縛モデルになりたいたいというM女性と加子はその希望通りにした金原奈山本氏のカメラの前でその緊縛姿を公開したのであった。記事には八月号のカメラハントの妊娠した若妻の女体をカメラの前でさらすこととなった。満天下の緊縛マニアの方々は勿論のこと、緊縛と考える、ここに編集部の特写を試みたので、御希望の向きは打ち切りにならないように、大阪市阿倍野局私書箱第十四号、天竺社宛へ代金同封の上お申込み願いたい。

△妊婦緊縛の部▽

逆吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号八さめ

両手吊りの臨月婦

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さも

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さい

妊婦全裸縛り全身

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さに

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さみ

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さる

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さま

膨満妊婦乳房責め

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さむ

臨月腹全裸晒人形

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さち

躍動する妊婦裸像

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さほ

妊娠という異常美

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さへ

見てほしい臨月腹

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八さと

妊婦全裸全身肢体

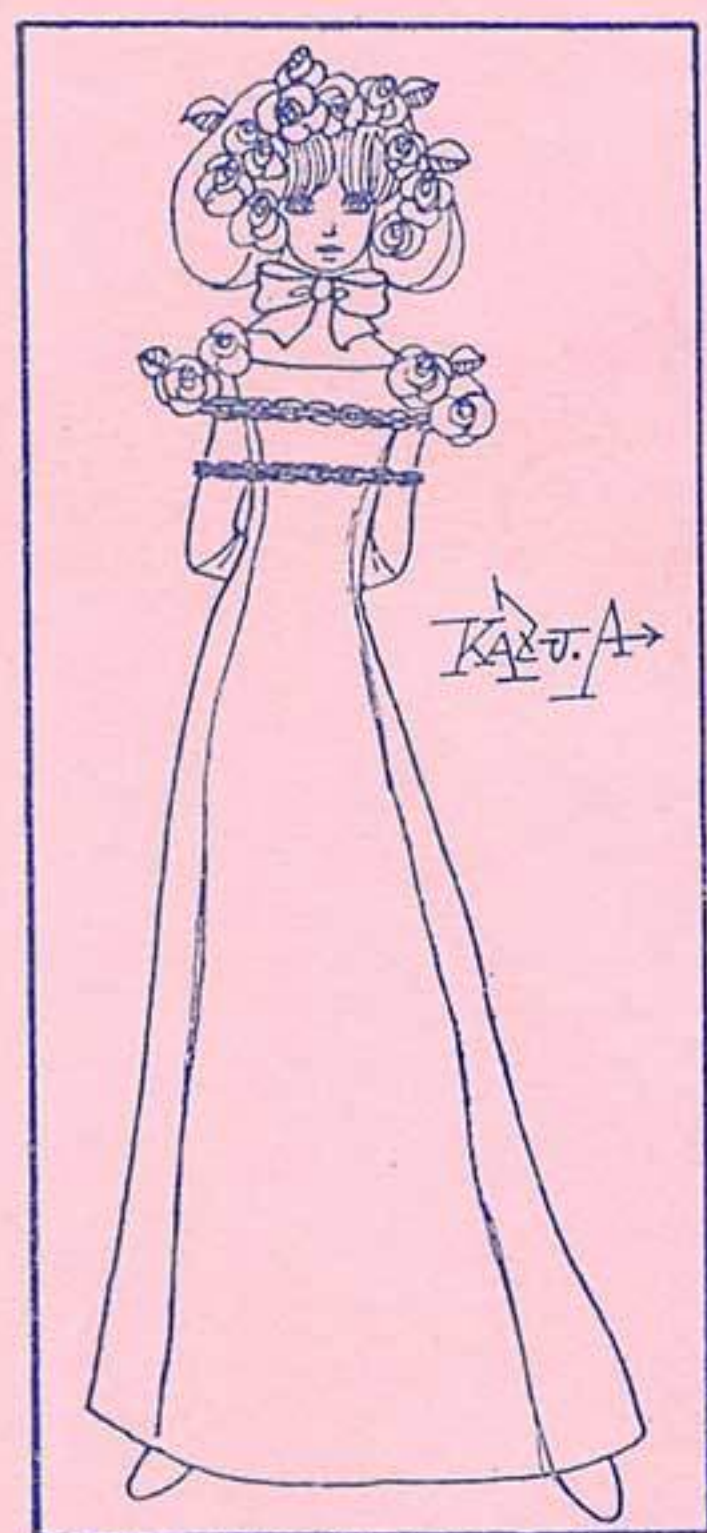
大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号八ささ

徹底の自粛本誌

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



奇譚クラブ

△第二四巻 第五号・通刊第二六五号▽

(昭和四十五年) 五月号 目次

△本 文▽

- 扉で一言『愛の拒絶反応』……………西宮 敏夫…(9)
- 部分的セクスアリス △ロマンス球菌△……………松原 千次…(10)
- フォト・ストーリー 私の『SM日記』……………小竹 一浩…(14)
- 懸賞入選 美しき強奪者……………暁 マサオ…(22)
- 連載小説 「大噴火」(20)……………千葉 青鬼…(36)
- 告白小説 △被虐の旅△……………由利美千子…(44)
- 怪奇の文学・沼正三「家畜人ヤプー」公刊……………とやま かずひこ…(54)
- 史実研究 切腹百年史 △女性篇Ⅱ5△……………中康 弘通…(56)
- 女斗美小説 「ふたり妻」(最終回)……………芦浦素舞夫…(60)
- 女責め図絵の系譜 高橋とみの場合……………南 彦造…(66)
- 秘聞・象牙の塔 助教授夫人凌辱譜……………風流極道軒…(68)
- おしめ性夜尿症者 私の執着……………岩手 信夫…(82)
- 青春の陥穽 『女郎蜘蛛』……………芳野 眉美…(90)
- SMフォト随想 わが「カメラ・ハント」……………三条 剛…(100)
- 読者論稿 対談「最近のKK誌について」……………新宿 町人…(103)

変態処方箋	守屋 文雄
フォト通信「逆吊り記録」	大橋美代子
縛り映画鑑賞「私の採点」	岡田 康彦
サロン楽我記 〈第七十一回〉	辻村 隆
牧高志先生へ捧ぐ妖しい日本美の探究	山本 五郎
最近号によせて「花ざかり」	菅原 敏夫
週刊誌記事「沼正三を捜せ」	とやま
短信往来 拝啓編集部殿	東 一郎
編集部だより	編 集 部
妊婦マニアのたわごと	高野 原美
新聞報道「怪事件に想う」	吉 田 生
イメージ画「雪原の女王」	赤ちゃん
「前田カオル」お前を逮捕する	井上 雅人
僕のイメージ画集「苦痛天国」	室井亜砂路
三月号を読んで「感想」	瞳 耀太郎
イメージ画「略奪」	遠藤 春一
二月号「カメラ・ハント」読後感	葛西 六郎
レポート「妻を縛る」	和田 平助
素晴らしい写真「二月号読後感」	仏山 逸富
Sコレクション「排物」	豪 城二
盗み撮りの魅力	桂木 洋助
ふんどし愛好「長い布」	間和志ノ男

三回分載(中) 小説「女狐」…………… 光谷 東穂…………… (106)

Mの傾斜「壺中の園」(1)…………… 真砂十四郎…………… (120)

告白 ゴム雨具拘束衣…………… 梅川 幸子…………… (129)

連載小説「花と蛇」〈続篇第六十二回〉…………… 団 鬼六…………… (132)

心理的羞恥責め 屋外プレイ…………… 東京Y・Y…………… (143)

連載小説「M派交友録」(5)…………… 鬼山 絢策…………… (146)

体験告白 私の少年期…………… 東 敏男…………… (155)

川路叢子さんの素顔

『片えくぼのマリア』…………… 塚本 鉄三…………… (158)

告白「沈静発泡酒」…………… 乃見 対造…………… (167)

シヨントメの哀歎『畏』…………… 香川 泳三…………… (168)

創作 歛びの育つ館…………… 宇光 仙…………… (180)

体験記 街で拾った「よしなしごと」…………… 石川 公一…………… (196)

フィアンセ・スワップینگなど…………… 松山 壮吉…………… (199)

武田家悪業 朱に染む柔肌…………… 高野 原美…………… (202)

SMカメラ・ハントへ続・秋山夫妻の巻V

『深夜の舞踏会』…………… 辻村 隆…………… (212)

読者通信…………… 編集部選…………… (252)

目次カット「マゾ人形」…………… あらい・かず
扉カット「兵隊人形」…………… 室井亜砂路

ここに凄い場面だけ抽出しました。

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号ハらて
臀部を力一杯鞭打てば自由にされ
狂う顔と肢体の表情の美しさ。

極致としてS人土にとっては垂死の車である。強烈なムチの連打

足吊りの被虐肢体

に晒して、さあいつでも鞭打つて

下さいといふ被虐ホースに炸烈するムチ。感泣にむせぶ妙な表情。

美しきマゾの境地

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△らせ
後手に縛られた全裸のままで前
面に出て突出した尻を乱打された

打ち好みのマゾ女性は、髪ふり羽

「申込先」ここに発表した分譲写真
は総て直接印画紙に焼付けた極
鮮明なものばかりです。お申込
は大阪市阿倍野局私書箱第14号
星社宛前金にてお願いします。

大手札三枚一組 四〇〇円

閔谷富佐子 略号ハラてい
全裸で後手に緊縛された女体の
臀部を力一杯鞭打てば自由にされ
ている両脚をばたつかせて悦虐に
狂う顔と肢体の表情の美しさ。

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号へらあゝ
 定評のある彼女の表情はマゾの
 極致としてS人土にとつては垂涎
 のものである。強烈なムチの連打
 に依つて絶妙の肢体を開陳する。

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号へらえ
両足を逆さに吊って臀部を眼前
に晒して、さあいつでも鞭打つて
下さいという被虐ポーズに炸烈す
るムチ。感泣にむせぶ妙な表情。

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号「ハ」(せう)
後手に縛られた全裸のまままで前
屈みに突出した尻を乱打された顔
打ち好みのマゾ女性、髪ふり乱
して悦虐にむせび泣いている。

眞は総て直接印画紙に焼付けた。摺
月なものばかりです。お申入る。

魚目混珠のいかに多いかを、大阪市の阿倍野局私書箱第14号王様宛前金にてお願いいたします。

関谷富佐子 略号八らてい
全裸で後手に緊縛された女体の

臀部を力一杯鞭打てば自由にさ
れている両脚をばたつかせて悦
狂う顔と肢体の表情の美しさ。

うねる鞭打ち肢体

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号八らあ

極致としてS人土にとっては垂死の車である。強烈なムチの連打

足吊りの被虐肢体

に晒して、さあいつでも鞭打つて

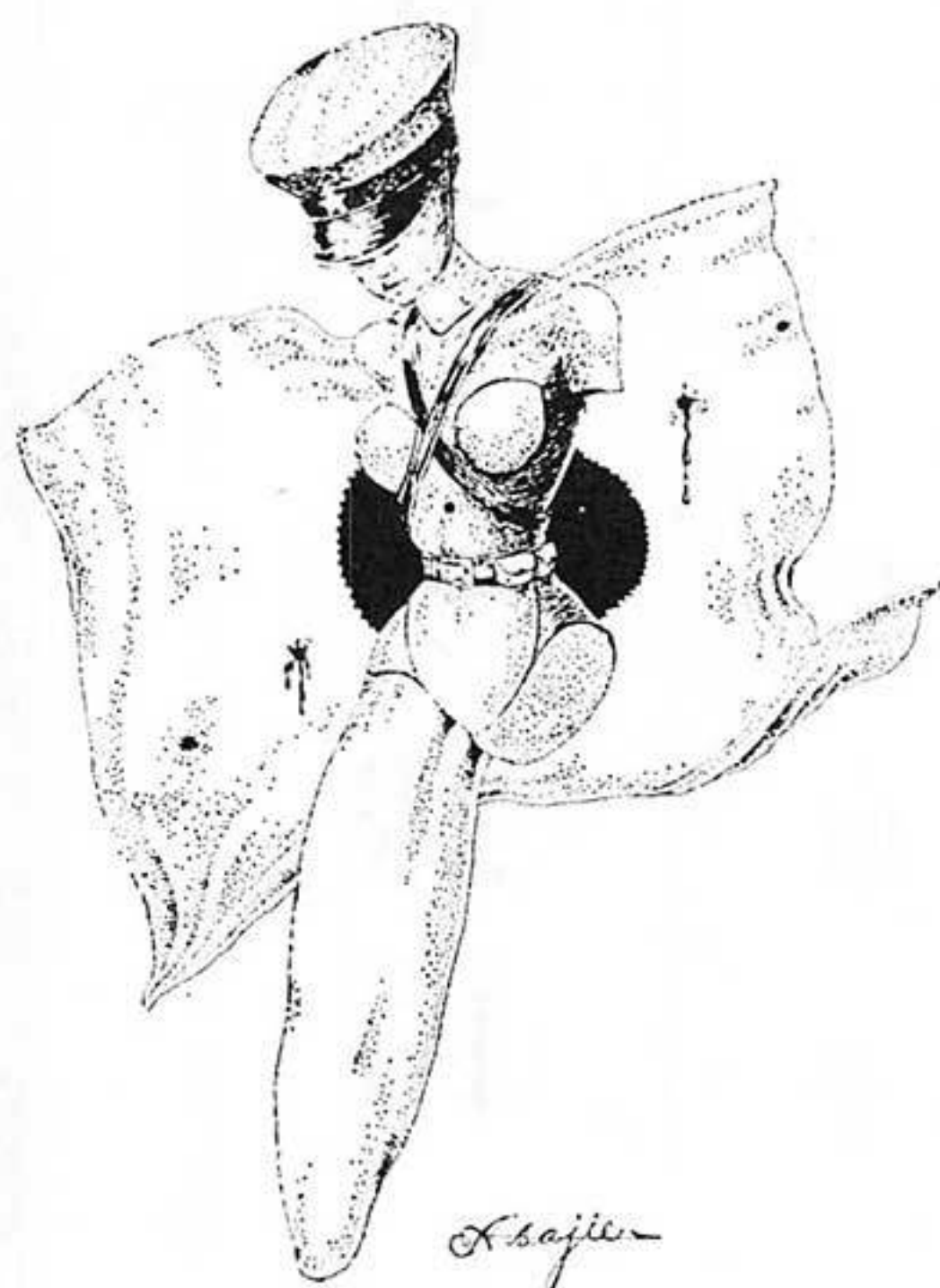
下さいといふ被虐ホースに炸烈するムチ。感泣にむせぶ妙な表情。

美しきマゾの境地

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△らせ
後手に縛られた全裸のままで前
面に出て突出した尻を乱打された

打ち好みのマゾ女性は、髪ふり羽

「申込先」ここに発表した分譲写真
は総て直接印画紙に焼付けた極
鮮明なものばかりです。お申込
は大阪市阿倍野局私書箱第14号
星社宛前金にてお願いします。



室井亜砂路・画

愛の拒絶反応

Sの男性にMの女性、Sの女性にMの男性という取り合わせは、誠に適当な相性といえるが、もし仮りにSの男性にSの女性と、Mの男性にMの女性という取り合わせだったら一体どうだろう。愛の拒絶反応が起こらないかと心配である。

他の条件がお互いにぴったりであったとしても、愛の生活に於いては中々スムーズにゆかないだろうと想像される。相性の上でのS性格とM性格を考えると、いうことは誠に大切なことであるといわねばならない。世の中には、あんな似合いの夫婦がといわれる人達でも不縁になることがあるし、あんな悪妻がと不審に思う女性を妻にしている生涯の伴侶として琴瑟相和している夫婦もある。

縁は異なるものの味なものと云われるが、両性の相性ほど不思議なものはない。愛の拒絶反応が起こらないように男性と女性のS性格とM性格について、もっと研究する必要があるように思う。

(西宮敏夫)

私の部分的なセクスアリス

ロマンズ球菌

松原千次



とにかくそのために病院がよいをはじめたのは事実だった。

いざとなって個人病院をさけ、比較的大きな病院にしたのは、他の診療もあって病気が目立たないだろうと思ったからであるが、看護婦を眺めているのも悪くないと思ったのも確かだ。

乳白液状の注射を射つのは痛いからと、尻を捲くることを看護婦は要求したが、私は腕が太いので、かいなにうってもらった。大きな病院のことで看護婦も多く、なかには若く割合綺麗な感じの子もあり、そのような子にあたった時は、幼時より持っていた、美しく若い女性にいじめられる願いにも似たものの内在精神が、なにか満たされてゆくようなところよさを、おぼえている自分に気付くのであった。

小学校の頃、昔は国民学校といっていた戦時中、四年生の私は窓ぎわで、先生の話も聞かずに、ぼんやりと校庭を眺め、小学二年生の可愛い色白の、おもいを掛けていた子が体操をしているのにみとれることを、内気で人前で話さえ出来なかった私の、秘密のたのしみとしていたものだ。

商店の看板の字も、先生の白墨で書かれる

皮ジャンパーをむぞうさにひっかけて、喫茶店を出て行く女を見ていて、長年のカンでははアと思った。

茶褐色の皮スカートが背の高い腰にすわって、二十六、七のくずれかかった、いやでも

おさえられた腰のまろみが螢光色に照りかえって光り、いとしみをおぼえさす肢体をかくした後姿に、普段なら、拾う気のないストリート・ガールを相手にしたのは、なんのせいだったのだろう。

数字の5も7も、眼につくものの全てがその子の顔に見え、夜は夜で寢床の楽しみは、彼女のブルマーになることを夢に描くことになった。

それは時には、腕力の強い喧嘩にいさむ大将の如き存在で、彼女に想われる私である図柄でもあったが、彼女をたすける私の次には又めぐって、ブルマーに、彼女の身につけるブルマーになってへばりついていたいという想いに、やみがたい私であり、性器さえ知らない当時の私が、彼女の上半身にまとわれる衣類は、少しも望みはしなかったのは確かなことで、ブルマーのよくのびるゴムをひっぱる夢に、子供ながら私のエロチシズムがふるえ、初恋少女のブルマーへのあこがれは、いやが上にも高まらずには、おれなかったものである。

そのようななつかしい甘い思い出もあって私の幼時体験が思わぬ形で頭をみせるような注射でもあった。

看護婦は、何故、腕に？　といぶかるのだったが、そのいぶかりさえ、私の内心のうれしさを増す要素でしかなかった。よくもんどいて、と針をぬく指先と、注がれている眼。意識しながら腕がふくらむのを見ず、自分の

眼は看護婦の唇の、そっけない動きを追うのだった。

診療室のドアを開いたり閉じたりして通う私は、今日は、綺麗な看護婦の番かどうか気がかり、しびれる陶酔への関門でもあったし、帰りぎわには、その看護婦の表情に浮かぶ相手にもしたくない男の注射処置がやるとすんだとでもいいかげん、唇が太くなるかなどりが、私のその日のしあわせのページのとじめでもあった。

ただ処置をすまし、おいだすだけの彼女たちが、その行為になれしたしむ内心の底には色白の顔立ちの故もあったであろうが、皮膚からつやが滲みでる若さに、クランケの中年男の視線のトリップを許すゆとりと、自信をそなえているのだろうか……とも思ってしまった。

戦時下を思い出すとサイレンが、警戒警報から空襲警報に変わると、学校から家路にむかう途中の男学童たちは、親がつとめに出て留守の、日頃から目をつけているシャンの家の防空壕にどっとおしかけたものだ。

狭い防空壕、我々をふくめてシャンとつめあわせて入ると、子供心にも、彼女の息ぶきのふきかかる位置を狙い、気はすかしながら

も皆が皆、うすぐらが表向きのつらをはがすのか、きそい合った憶えが、今、処置をしてくれるナースの息づきによりがえったのは大きな病院の雰囲気になした作用なのか。

警報が解除になるまで、わけのわからんことを皆がしゃべくり合い、シャンのそばでもまれ、女の本当の気持はわからないが、表向きいやであるという態度をされながら過ごす一時のたのしかったこと。今から思えば私達の親が家で気をもんでいたことだろうがゲームとしても、かくされたあこがれが噴出する秘密めいた穴ぐらの中は、その当時の子供に出来る精一ぱいの楽しみともいえた。

あれは確か小学生時代ではない。中学時代か、そう確かに中学時代だったと思うが『近代映画』雑誌の口絵に、籐の寝椅子に高峰三枝子が水着であおむきに寝そべっている写真を見て感じちゃったことがある。雑誌を開いてイメージ・セックスを持ったのはあれが最初だったろう。飛びついて姦す図だったり、腿でしめつけられてむりやりに征服される図であったりした。

その頃のイメージには肛門はなかった。それへの興味、それは新婚旅行の時、クリングスの異常さに、妻が神経過敏になった体験

に根づいている気がする。よけいにいやがるだろうの意識が、刺戟を受けたい思いに一つ加えたのだ。

その興味が形を整えて、つい口に出始めた頃、ある夜ついて来たホステスは、私の気持ちをためすように両面作戦命令を出した。その命令に諾々と従い、喜々として奉仕しようとする男性を、うつむきながらもふりかえる視線で刺し、見詰める女性。……諸君、わかってもらえるだろうか……？

診療室には、手術用の固い黒皮、いや黒ケミカルかも知れない小さいベッドが、真中に置かれてあり、「間違はなく痔です。いぼ痔です」と、カーテンで仕切った白布のベッドで、冷厳な口調で宣する医師の声も交互し、三、四人のナースは絶えず忙しげに行ききしている。緊急手術患者が運ばれてでもくればたちまちにして診療中の軽症クランケ達を待合室へおいだす役目にも変ずるひやかさをかくれる所なく露出した顔つきばかりと、見えるから不思議である。

血液も、検査のためとして採取されたが、さいわい綺麗なナースの手だったので、血をへらされている管の操作に、かいてもおらないナースの汗を見出して、我ながらほほえみ

がくりいでるのを、止めることが出来なかったものだ。

昔、盲人が赤線で、血でへばった唇を目あき人にさらしてからかわれ、女のメンスであったのを気づいて怒ったという話を聞いたがはたして、怒ったのか喜んだのか……と思ふ。

カンのするどい盲人のこと。知っていながら示したのでは？ と想像するのだが、ひが目だろうか。あこがれる気持はあっても実際の経験はないので、あまりの詮索もどうかと考えるが……。

左右交互に、腕をかえるのだが、毎日の注射針で荒らされて注射ダコが出来るのか、針の中には用をなさないものもあるし、下手な看護婦では何度ついても針の刺さらない腕にあきれた声と眼の光が映るようになってくると、腕のつけ根も盛り上がり、ペニシリンから他の薬品にかわったのが注射液の色で判別がつき、針も、もともと太針だったのが、より太針にしくはなくて、曲って危険でさえあるようになった。

綺麗なナースも、す早く、しかしながら慎重に注射器をあつかうようになると、あわれみの眼、親しみを示す声調を見せ始め、カル

テの書込みのふえるのと比例して、後背に青くさい恋情にも似たロマンチカルを描く私に変化しだした。中年男の色情は、若い肢体に對しては特になれしたしみたいのが普通だろうが、いわゆる性行為が頭に位置さえ得なかったのは、注射器の媒介をつかさえての支配を、私が受けていたのだろうか。現代に現出した私一人に対する魔女の場を彼女が精神的に持っていたと推定する。

恋情。恋情。幼時の恋情は苦しいものだ。沈み沈み、どこまでも深まっていくものだ。その当時の歌に○○子の名前を入れて口吟み自転車で彼女の家の前を過ぎる時の怖れと、ときめき。しかも見たい会いたい。

現代だけに限らず、流行歌の恋歌は、幼少期の体験に根ざして作詞され、歌われ、求められている面が、多々あるのではないかと、私はテレビを視聴しながら感じるものだ。

恋を恋しても、青年期には恋人が現出しな。それが私だった為かも知れないが。私としては、物語は面白くないが週刊文春に連載されているキーラーの話にそえられた写真に限りない恋情をいだいている。若年時代、中年に近づいた写真。どれにもとろかされる。モンローの、よだれのたれているあごに、狂

わんばかりに見惚れ、空涙で私の不運（モンローにかしげない）をなげいた青年時代にはおよばないが……。

モンローの死を新聞で知った時には、彼女の死体に、はずれない様にかたくかたく私の生き身をゆわえられ、一緒なら焼かれることさえ、私の生きがいと、どれだけ希求したとだろう。

モンロー。それは私の神以上のもの。女神だった。八千草薫の写真もよく切抜いて持っていたものだが、可憐へのあこがれ、可愛がり可愛がられたという、男前にはほど遠い私の、恋を恋するなぐさみだったと、今、振り返って推察してみる。モンローにしばらくはながらの焦熱地獄なら、まさしく快そのものだったろう。

しばらくといえば、ジョルジュ・バタイユはスピロヘータの苦しみに、ベッドにロープでしばられ、手を釘づけにされて死んだそうだが、私はよく、家内と自分はずれないよう動けないよう、晒しを使ってグルグル巻きにすることがある。動く隙間もないかたい結びで、動けないのに動こうとする妻。ひもは首にかからぬように口をゆわえたり、乳首をはみだしながらふくらみをしる。足はわざと

しばらくしない。

この時には髪の毛を無情に強くひっぱって荒々しくするのを、妻が好むのか。私が好むのか。

シユミーズ姿、ネグリジェ姿、寝姿、立姿のままで、突然に湧き上る臀部に噛みつきたい欲望。

頬をおもいきり妻になぐられたり、薄くなった頭髮をむちゃくちゃにひっぱられて、本気で怒られるのだが、つい可愛くなって（可愛くなるといっても、自分が可愛くなるのかも知れないが）思わず知らず欲望に負けてしまふ、はめにいたる。

ついには不本意ながら注射針は腕をあきらかに尻に移った。腕のつけ根がふくれ上り、アメリカン・フットボール状を示し始めてはせんない。尻では、後むきにそっと、ナースをぬすみ見するスタイルしかない。興味は半減した。神経に針があたった時には、異った痛みが走る。

異ったといえば、私の友人が、棒ずいきなるものを奥さんが好むとか話しておったが、農家のこと、納屋のすみに干しておく、ねずみが噛って困ると笑わせていたが、そういうものに凝った時分の私の記憶に、齒をかみ

しばらく、ふとん、たたみはいずれまわった、色黒で細身の、やくざのヒモを持った娼婦のことがある。

今思うに、あれがもし演技とすれば、迫真のものであったし、不思議でもあるし、立派とも思っている。その歩き方に似た想像をもたらししてくれるのは、病みつれた入院患者がたまに廊下を通る時だ。後姿が、いかにもあとで女性の話していた様子にそっくりだ。

待合室を、綺麗な看護婦が通る時もあるがだんだん彼女たちにもあいて来た。若々しいが所詮私になぐさみをもたらししてくれる女性ではないと、中年男性たる私には、あたり前の壁にふさがれて、精神から逃げだしたのだろうか。

青年には壁が恋慕を深めるが、世間の浪にただよう私には、一時々々ひとときの情も、隔日的に見ている間に処理されて消されてゆく。

私の連鎖状球菌が体内での活動をあきらめた頃には、ナースの球菌も去る運命にさらされた様だ。もう通うこともない病院よ、さらばだ。

中年男にはロマンス球菌の侵入する傷口もなさそうだ。



フォト・ストーリー

私の『S M 日記』

小 竹 一 浩

〈前文S M 雑記〉

思わぬ御無沙汰をしてしまったが、今回は一九六九年の後半（七月～十二月）から、二つのプレイを選んで報告してみたい。その前に、例によって一寸、雑記を……。

奥村チヨ唄うところの「恋の奴隷」は、確かに楽しかったし、S M P を念頭に置いて聞くと、プレイ意欲の増進剤となった。

あのトランジスタグラマーなヌードに縄を酷しく絡ませる想像も、ついしたくなるというもの。……少しく小生意気に見える唇を

割って、嵌口具を噛ませ、細い首に重い鎖のついた首輪をはめて、机の傍らに侍らせる。いじめてほしように、つぶらな瞳で振り仰ぐ彼女。こんなシーンを空想しては、少し行き過ぎかな？

兎に角、楽しくも妙な時代ではある。女性上位時代とも、S M 横行時代ともいうらしいが、私には、何をもって女性上位というのか解しかねるが、S M 人口が増加しつつあることは事実であるらしい。いずれにしても、私にとって喜ばしき時代といえよう……と思うのだが、こうした傾向も、奈良林先生にいわ

せると、実にけしからんとおっしゃる。

この点について、九月号で予世場良三氏が「S M は「上げ底」？」を書かれていたので同氏の文章に沿って、少しく私観を述べてみたい。

まず冒頭にいたいことは、『セックスに教科書があるだろうか？ いや、必要だろうか？』ということである。つまりセックスの方法はこうあるべきだという型や思想が、果たして必要なのか？ 私は、その対象を人道的に求めたもの（妻とか恋人とか e t c ）ならば、全くその必要を認めないし、十人十色で

あるからこそ楽しいのではなからうか？ と思う。

『その道の権威者』といわれるが、S Mの本質や効用についても権威者であるかどうか、甚だ疑問であり、食わず嫌いの感さえする。

ことS M Pに関しては、辻村氏を頂点としたピラミッドの底辺の一点たる私達S M P実践者の方が、はっきりした主張をもっている。と自負している。

予世場氏は、(縛られた女体に、非常な魅力を感じ、愛着を感じはするが、それがセックスに不可欠であるとはいえない)と断言されていられるが、誠に品行方正なかたとお見受けする。私などは第一に、(縛りさえしなければ、ホテルへ行ってもいい)とグラマーに誘われても、その頭から釘を刺され、これ見よがしに自慢の肉体を誇示されたら、恐らく二の足を踏むことだろう。つまり最近の私には、セックスを求めるためのハントは全く皆無で、極論すれば「セックスはS M Pの附属品」ということが出来よう。従って、私は完全なる「巷の蔓延部族の一人」となるのだろうか、それで結構だと思っている。

しかしながら、『マル秘的残酷趣味』とは全く嫌な言葉である。私達のいう「S (男)

M (女)プレイ」とは自ずとその趣きを異にしている。ただいじめて喜んでいたのでは、正しく気違いである。S M Pとは、そんなものではない。

予世場氏もおっしゃる如く、「それが生活に潤いをもたらす」というのも、S M Pのルールを守っているからこそいえるのである。プレイルルールを無視して、狂気に走ってしまったのは『マル秘的残酷趣味』と五十歩百歩になってしまふ。自惚れるつもりはないが、私のハントした女性(勿論、数少ない人数だが近いうちに御披露したいと思っている)で、嫌悪の表情を見せたのは一人もない。つまり一方通行ではなく、共に愉しむムードに溢れたものがプレイの本義であるとする限り、異常でもなければ変態でもないと考える。

何時ぞやの「S M 日記」にも書いた事だが、オーバーな表現を借りて、極論するならば、「S M プレイヤーとは、宇宙時代にふさわしい男っぽさ、或は女っぽさをもった最高のセクシアル・テクニシャンなり」……と。

『イモラル・トゥー・デイズ』

今回の「S M 日記」も、甚だサイケで、イモラリテイ(破廉恥)なものだが、不道德・

乱行等と解さないでほしい。少しく報告を憚るところもあり、他愛ないところもあるのだが、スリリングだったプレイについて、書き綴ってみたい。

八月十日(日)に行った伊豆の辺鄙な海岸で驚くべき水着を見た。といってもトップレスでも特殊なデザインでもなく、ありふれたセパレーツである。だから、もしそれを着用していた女性が、十人並だったら見過ごしてしまっていただろう。

ところが、その女性(多分二十五、六才)の肌の白いの白くないの。まったく透き通るような白さというべきで、それが、場所柄もあって一際目立っていたのである。その上、連れの男性が、ズバ抜けた長身だった。私より十糎以上も高かったから、恐らく百八十五糎位はあっただろう。

そこで私の目は、その二人に惹かれっぱなしになってしまったというわけ。

私は素知らぬ振り、彼らの傍らを歩んだが、彼女は波打ち際まで来ると、しきりに尻込みを始めた。水が恐いのかな? と思った。りしたが、彼氏に強引に引きずり込まれてしまふと、やっと背が立つ辺りで、結構楽しそ

うに泳ぎ出した。ところがである……

今度は、水から出るのを拒み出した。私は二人と同じ波間で泳ぎながら、チラリチラリと視線を走らせ、思わずドキリとした。

波の谷間が訪れる度毎に現われる彼女のブラジャーが、明らかに変化している。つまりその内側を、歴然と透き見させていたのだ。特殊な生地を使った自家製なのか、市販のもの裏地を剥いだのか知らぬが、入水前には確かになんら普通のブラジャーと変わりなかった筈だが……。

兎に角、こうなれば男として、次のものを期待しても不思議はなからう。

私は二人より先に波打ち際に出て、ユキを手招きした。

「いつまであの女を見てるの？」

「いいから黙って見てなよ、いいものが見られるから」

勿論、凝視するわけにはいかないが、固唾を飲む思いで待ちわびた。

しばらくは、彼氏に手を引っぱられたり、背中をつつかれたりしていた彼女も、ようやく決心したようにザブザブと駆けて来た。だがその恰好たるや、およそ海水浴場では見られないものだった。すなわち、その両手を

使ったのタオルなしの銭湯スタイルであったのである。砂浜に駆け上がった彼女は、つんのめるように腹這いになった。

砂をつけてカモフラージュを考えたのだろうが、二人は、明らかにプレイを楽しんでいる風情と見受けられた。

昼食を摂りに旅館に戻った私は、この刺戟のためか、矢鱈とプレイ意欲に駆られ、夜になってから行なう予定だった責めを、直ちにやってみたくなり、湯上がりで、化粧を直しているユキを呼ぶと裸になるように命じた。

宿の浴衣が肩から滑ると、ユキの体には、もう一糸も残っていないかった。

「あのう、お向かいの部屋から丸見えですワカーテンを閉めていいかしら？」

「よし、そのまま行っしてめてこい」

ユキは、畳を這うようにして窓辺に着くと慌ててカーテンを引いた。

ライトとカメラの準備を終えた私は、ロープ等を詰めたバッグを開いた。

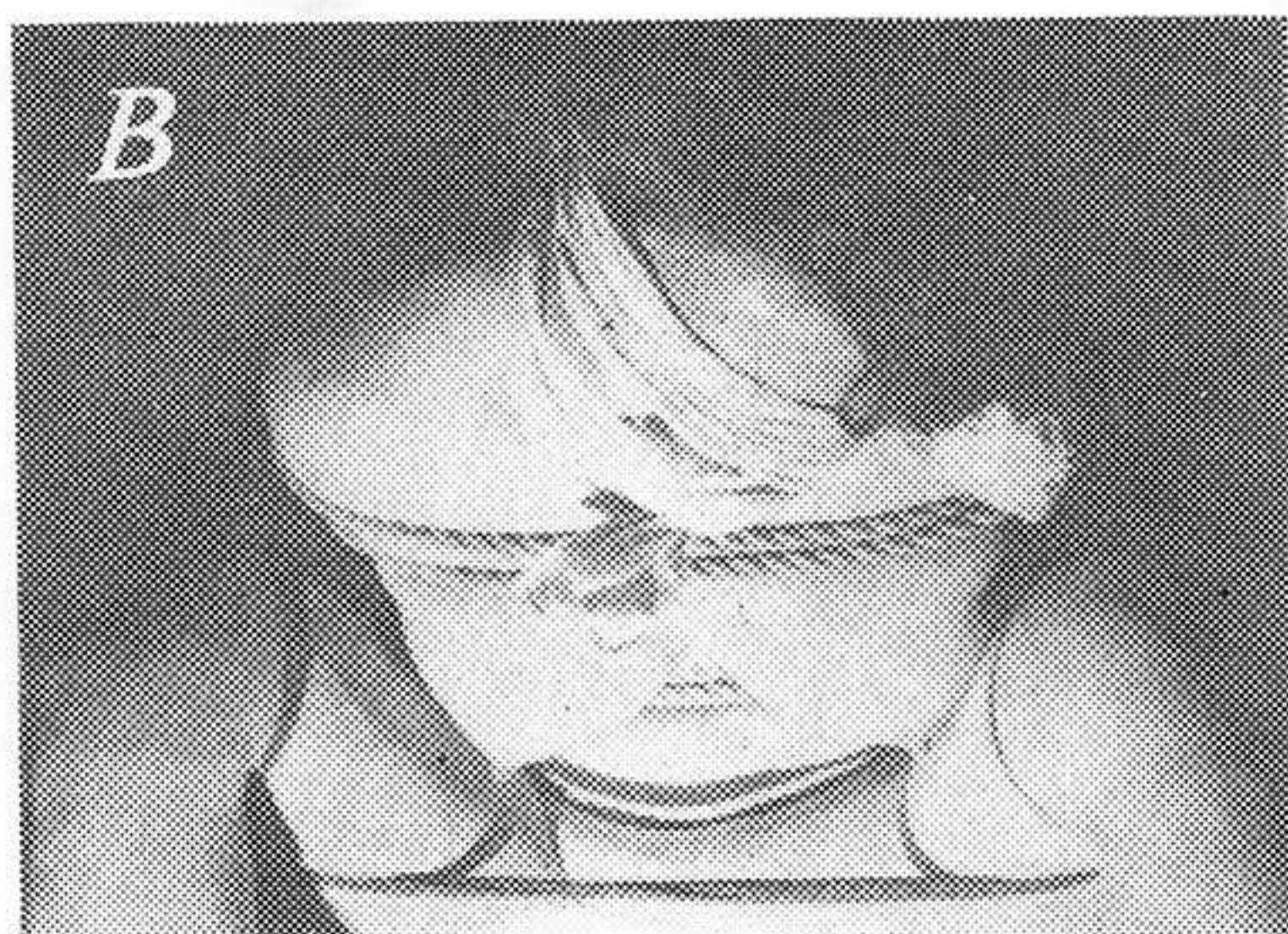
「あのう、まさか……」

「まさか、なんだ？」

「縛るんじゃあ……」

「そうだよ」

「えッ、でも」



「うるさいぞッ。ここへ来なさい」

唇を割って、晒布を噛ませ、残りをグルグル顔面に巻きつける。使い古した綿紐で胸部と腹部を縛ったあと太目のロープで思いっきり、グルグルと締め上げた。

「ウウウウ」

「どうした、痛いのか？」

ユキは、一度肯ずいたが、すぐに大急ぎで

首を振った。

「なんだ、どっちなんだ？」

今度は、体を小刻みに振る。

「トイレか？」

「ウウ」

私は、再びバッグを引き寄せて、生ゴムパ
ンティを取り出した。引っぱり出した布団の
上にユキを転がし、カット綿を四、五枚当て
がった上から生ゴムパンティをピッチリと穿
かせた。

しばらく様子を見ていたが、布団を気にし
てか、それともまだ限界が訪れていないのか

ユキはピクリとも身悶えようとしなかった。

待ちかねた私は、その速進を図るために、ユ
キの足首を握って板の間まで引きずっていつ
た。ビニールテープを乳房へベタベタと貼り
ポツンと取り残された一軒家のように顔を出
している乳首をつねり上げてやると、静かだ
った部屋に、急にユキの呻き声が拡がって行
った。(写真A)

「まだか？」

「……」

うなずくのを見ると私は、いきなり乳房の
テープを「ピッ、ピッ」とはがしていった。

最後の一本を思いっきり強くはが
した時、一段と高い呻きが猿轡の
中から挙がり、小刻みに震えてい
た腹部がピタリと止まると、生ゴ
ムパンティの中の異変を感じ取れ
た。

「それが冷えるまで寝てなさい」

私は、よく冷えたビールに舌鼓
を打ちながら、テレビと交互に見
入っていたが、ピクリとも動かず
微かに、腹式呼吸をみせるだけの
牝豚に飽きてしまった。

そこで、ズボンから鱧皮のバン

ドを引き抜き、背皮の方で思い切り臀部を打
ち据えてやった。いくら生ゴムパンティを穿
いているとはいえ、相当の痛みが頭へ抜けた
ことだろう。ユキはまるで飛び跳ねるような
激しい身悶えと共にゴロリと転がった。しか
し私は構わず、ユキの悶転に合わせて十数発
の鞭打ちをくれてやった。

フト見ると、何時の間に溢れ出たのか、板
の間は濡れて艶やかに光っていた。仕方なく
バンドを捨て、ユキのロープを解き放った。

しばらくはぐったりと板の間に動かなかった
ユキは、のろのろと起き上がると顔の晒木綿
を解いて、私の方へ怨めしそうな視線を投げ
ながら、フーッと大きな息を吐いていた。

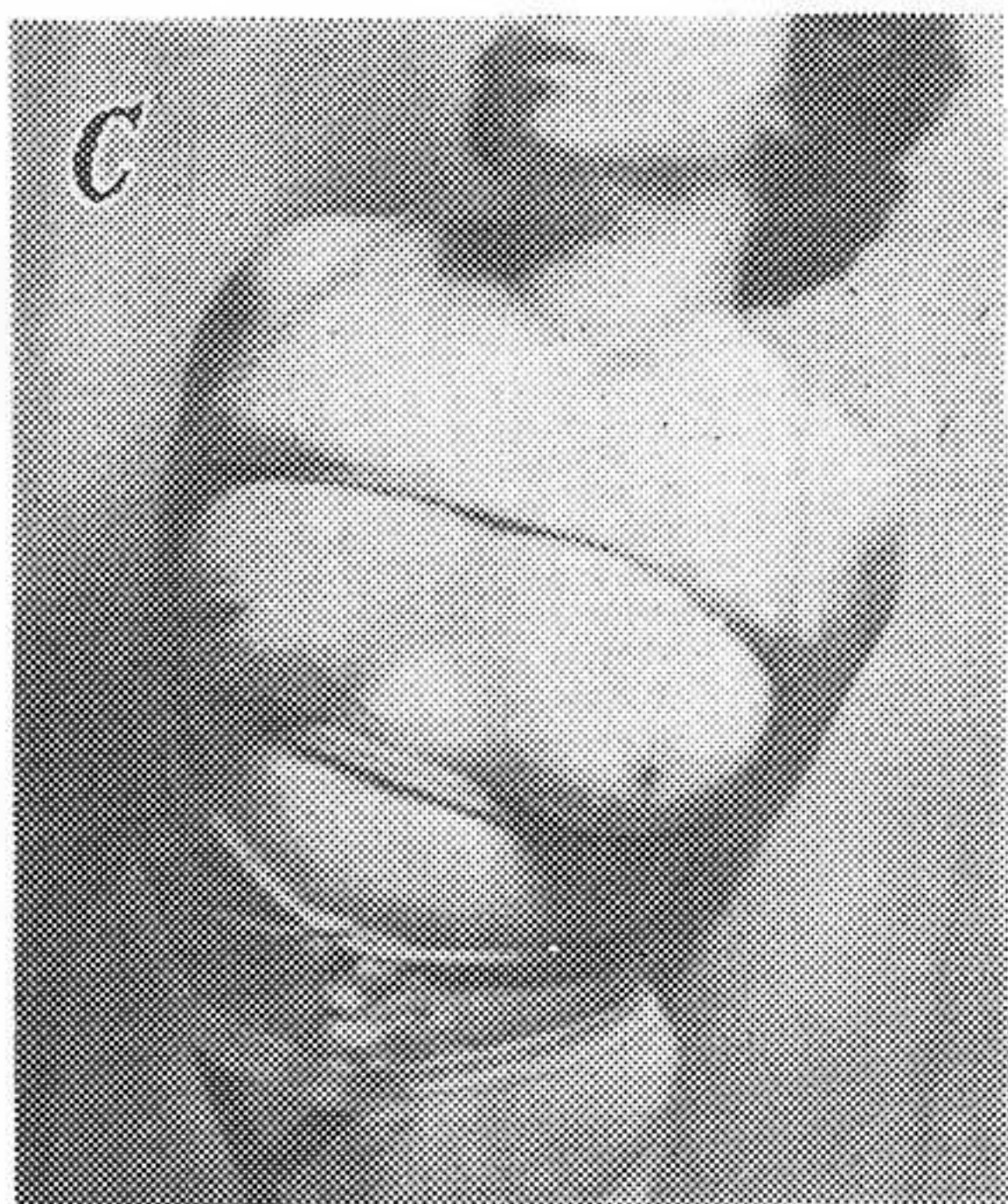
「痛かったか？」

「ええ、とっても」

「大丈夫さ、パンツの上からだからな。それ
より早くトイレへ行って、それを脱いでこい
よ。臭くってたまらないからな」

「まあ、ひどいわ」

顔をしかめて立ち上がったユキの右腿に、
スーッと一条、光の反射が這い落ちた。よく
見ると、溢れるわけである。カット綿が数枚
パンティの右内側の裾口に顔を出していたの
だ。これが吸いとったものを外へ吐き出す役



目をしていたらしい。

トイレからユキの声がした。

「あのう、お風呂へ入っていいでしょうか」

「ああ、いいよ。その代わり早く出てこい」

タオルを纏って出て来たユキに、

「タオルを捨てて、そこに立て」

と命じて、ゆっくり観察してみた。全身に

フッフツと汗をにじませた桜色の肌にロープ

の縄目と鞭の跡が、一層、色を増して、くっ

きりと浮き立っている様は、我が女房ながら

惚れ直すのに充分な美しさだった。

これで止めるつもりだったが、それを見て

もう少し縄目をつけてみたくなった。

「その縄を持って、ここへ来い」

「えッ、まだ？」

「当り前さ」

見事な赤味の縄目を避けて、新たにロープ

を緊めていった。再び、布で顔を巻き、布紐

で簡単な海老縛りを施した。(写真B)だが

責めが目的ではないので、ユキをそのままに

して、一風呂浴びることにした。

私は、バスを出るときに海水パンツを穿い

て、ユキを解き放った。

「ユキ、水着を着なさい」

顔の布をほどきながら、ユキはピクリと身

をふるわせる。

「あのう、まさか、また海へ行くんじゃない

でしょうね」

「行くんだよ」

「だって、こんなに縄の跡が……」

「だから行くんだ。そのために、わざわざつ

けたんじゃないか」

「そんな無茶な」

「無茶でもなんでもいい。いわれた通りにす

るんだッ」

「……」

「どうした」

予想した事だったが、ユキはさすがに強い

ためらいを示し、しゃがみ込んだままで立と

うとはしなかった。

ピシッ。ユキは、激しく叩かれて、鮮かな

手型の残った左頬を押えながらも、まだ「ハ

イ」とはいわなかった。

「ユキッ」

「お願いです。せめて、もう少し縄目が消え

てからにして下さい」

「黙目だッ。今すぐだ」

「でも」

「よし。それじゃあ、タオルを羽織っていい

よ。それならいいだろう。早くしろ」

「ハイ」

ユキは、やっと立ち上がると、まだ濡れて

いる水着を着けた。

宿を出た私達は、海岸のはずれで泳ぐこと

にした。しかし、そこでも相当数の海水浴客

がいた。ユキのタオルからはみ出した太腿に

クッキリと二筋の赤い線が走っているが、誰

も気付かぬようだった。

「ひと泳ぎしよう」

「でも」

ユキは、また「デモ」を口にすると、タオ

ルの下に目をやり、まだ鮮かに残っている縄

目を、そっと撫でていた。

「きょうは、デモが多すぎるぞ」

「だって」

屋内ならともかく、こう人がいたのでは、

まさかビンタをくれるわけにも行かないので

いきなりタオルを剥ぎ取ってやった。

「アッ」

ユキは小さな呻きを残して砂浜を蹴ると、

寄せ来る波中へ躍り込んで行った。いつもの

ユキらしくない物凄いスピードだったが、そ

れは却ってまわりの人の目を惹き寄せる結果

となってしまった。余り泳げるほうではない

ユキは、そう深い方まで入っていくこともで

きず、腰程の深さの所に身を沈めて、私の方を振り返った。

潮の高さに合わせて、身体を上下させているが、波の着物では、裸の腕を隠し切れるものでもなし、近寄った私も、わが仕業ながらドキドキする程、ロープのよじり目さえ歴然と見えるのだった。

「ひどいワ。みんなが私を見てみたい」

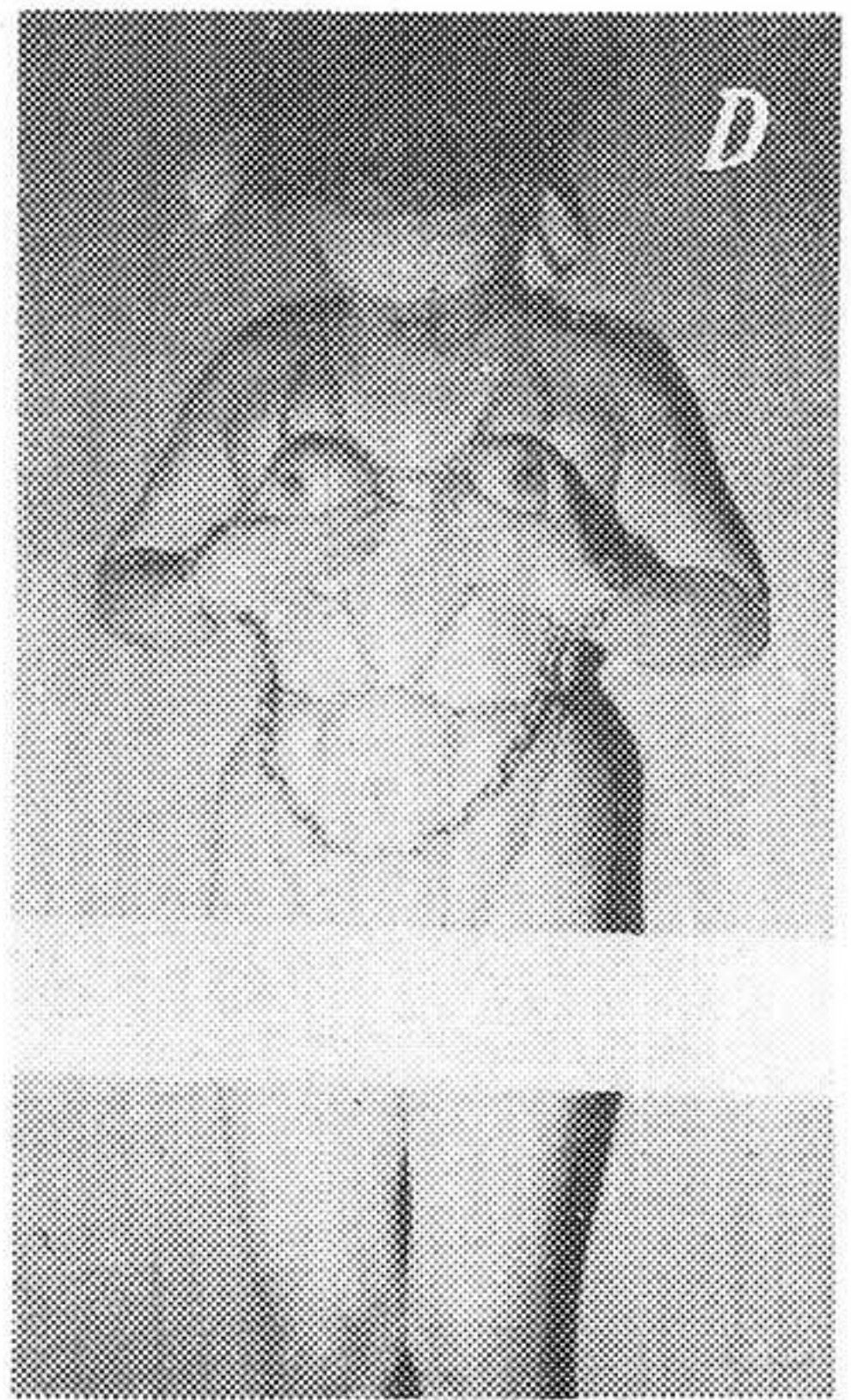
「そんなことないさ。誰も見てやしないよ」

とはいったものの、私も視線を感じる。

「もう少し、深い方へ行こう」

しばし時を稼いで辺りを窺っていたが、いつまでもそうしているわけにはいかない。

「ユキ、出るぞ」



「困ったワ。まだ消えないのに」

「サッとして、タオルをかけりゃ平気さ」

「でも」

「また、でもか」

私は、海中でユキの両手を後手に取り、思いきり捻じ上げてやった。

「アウツ、カンニンして」

「さあ行くぞッ。縄目は見

せるためにつけたんだ、堂々と見せてやれ。

みんな、どんな顔をするかな」

近くにいた二、三人が、無遠慮にユキを見つめていたが、私が視線を走らすと、すぐ顔をそむけて、もう反応を示さなくなってしまう。残念ながら、どうもS M愛好者が、その場には居合わせなかったようだ。

しかし、ユキに与えた心理プレイの効果は予想以上に大きく、彼女は全く身も世もあらぬ態で、宿に戻ってから、まだ激しく興奮の余韻を残していた。

些か長くなったので、その夜パチンコへ連れて行った時のユキの下着？ フォト（写真C）を添えて、真夏の狂演のペンを一旦、置

くことにする。

×

×

さて、もうひとつのイモラル・ディは十月二十五日（土）の午後、時雨ならぬ大雨が降る肌寒い日のことである。

「ユキ、買物に行くから、すぐ用意しろ」

「何を買いに？」

「お前の首輪につける鈴だよ」

「まあー」

「早く戸締りして、寝室へ来い」

ひと通り鍵を掛け終えたユキは、戻ってくると私が何もいわぬうちに、さっさと衣服を脱ぎ始めた。

鎖の下着を持ち出した私は、ユキの裸身に当てがって締めはじめた。

「アウツ、冷たいワ」

「すぐ暖かくなるさ、体の芯からな」

ユキに鎖を纏わせるたびに思うのだが、全くピッタリと着用させるには、何度も直さないと仲々うまくいかないものだ。

山本武男氏が、奴隷妻に施されたユニホームは実に見事だったが、色々苦心なされたことであろう。紐類と異なり伸縮性がなかっため実に難しい。ユキのは常時着用させるのではなく、その都度に用いるためフォト（D・

E)で御覧の如く、背面の二カ所で、簡単に止められるようにしてある。上臀部で止めた所に、一尺程余った鎖をそのままぶら下げてある。これは逆海老の時には利用できるし、他にも効用があるからである。

話が外れるが、いつぞや見たテレビで、これからの衣服の素材は鎖、金属板、プラスチック等を多く使うようになるだろう”といつて、アングラ的なファッションをみせていた。胸に幾本もの鎖をぶら下げて、乳房を見え隠れさせたり、乳房の半球も露わな衣服を着けたりしていたが、仲々に魅惑的なものである。近き将来に、そうしたファッションが銀座などでお目にかかれるようになってきたら楽しいと思う。

「どうだ、具合は。大丈夫か？」

「ハイ」

「歩けるな」

「ハイ、なんとか」

「よし。それじゃ、例の毛糸のワンピースを着て来い」

「えッ、あれを、じかに着るの」

「そうだよ」

「でも、あれは……」

「いう通りにしろッ」

ビシッ。

ユキは、鎖に締めつけられる痛みも忘れたかのように裸身を翻えして、思いきり叩かれた尻を撫でながら自室へ飛んで行った。

「あのう、やっぱりこれ一枚じゃあ」

そのワンピースは、私がユキに命じて編ませたもので、極太の毛糸を使ってサックドレス型に小さ目に作ったものである。着たところは、網にかかった魚のイメージを連想させる。そんなに大きい網目ではないが、肩・乳房・臀部等、盛り上がっている部分は、網目が広がって、かなり肌が露出し、チラチラと黄金色の鎖が見えてしまう。

「あのう……。まさかこの恰好で」

「そうだよ」

「ひどい。いくらなんでも、これじゃあ」

「いやか」

「ハイ。お願いですから、

他に何か着せて下さい。とても、これだけじゃあ」

「だめだッ」

「じゃ、せめて下着を」

「下着は着けてるだろ、鎖のを」

「そんな……カンニンして

え」

バシッ、バシッ。

今度はまともに往復ビンタをくらわした。

「いい加減にしろッ。さあ出掛けるぞ」

「は、はい、行きます。思い切って」

「外は物凄い降りだから、レインコートを着て行け、あの透明なのをな」

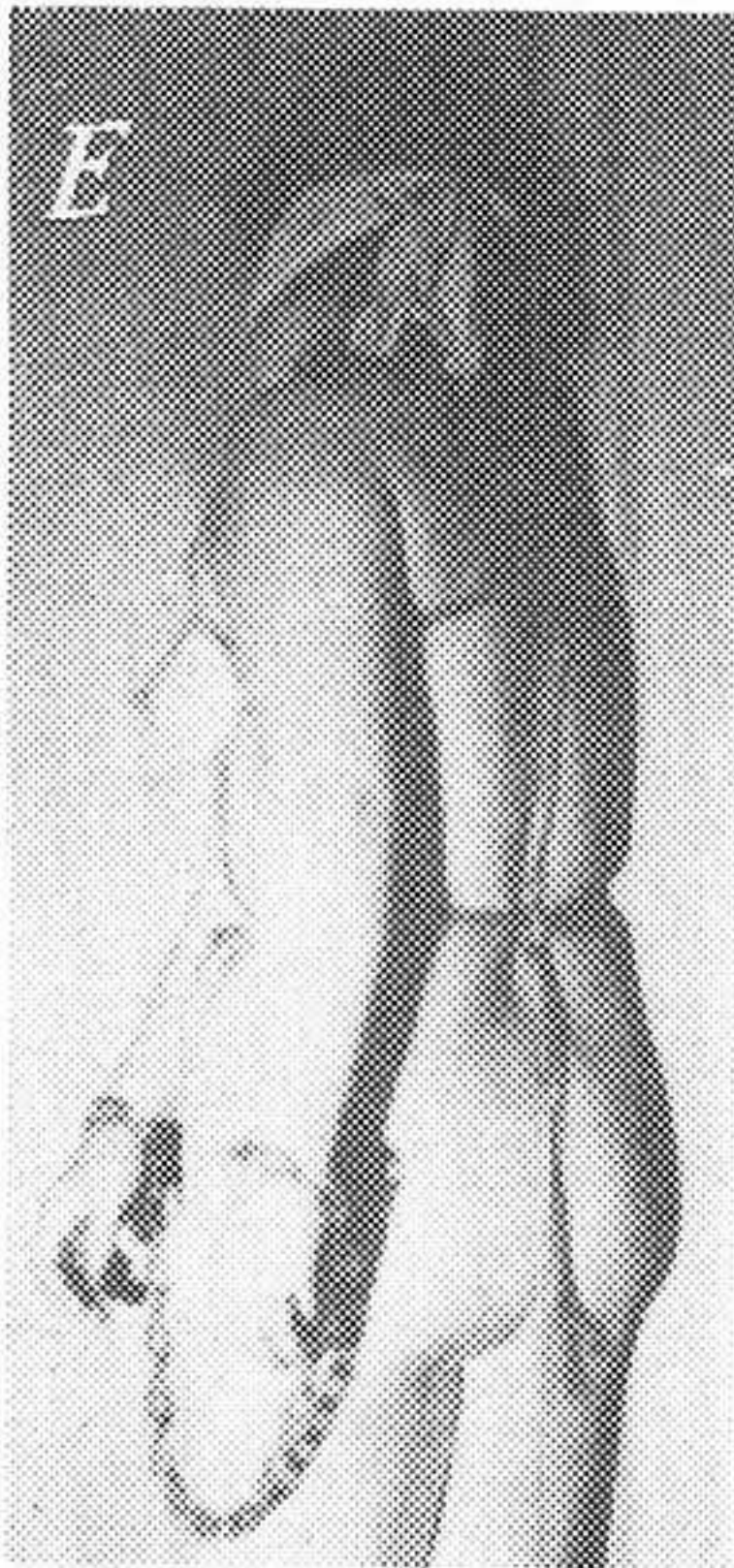
「ハイッ」

例によって、さかんに玄関で尻込みしていたユキも、人通りが殆どないのを知ると、ホッとしたように私に身を寄せて来た。叩きつけるような激しい雨の中を私達は、車を使わず、大分、遠い商店街へ向かった。

「どうだ、痛くないか？」

「ハイ。大丈夫です。でも少し寒くて」

途中、数人とすれ違ったが、余りの雨足の



強さに、とても他人のことに目をやるどころでなく、傘で身を守るのが精一杯だった。そんな調子なので、やっと着いた目的の商店街も驚く程、閑散としていた。釣具屋で鈴を買ったが、その老人は、ユキの方を見ようともしなかった。いつもは人目を避ける私達だが、この日は逆に物珍し気な野次馬的視線を求めて、食堂へ入った（やはりイモラリティだな）のである。

客はいなかったが、人待ち顔で立っていた二人の女子店員の四つの目が、当然私たちに集中した。ユキは、椅子に坐って露わな腿を気にしていたが、裾を引っぱれば網目が拡がり、もっと恥かしいことになる。注文を聞きに来た娘は、カウンターの所に戻ると、もう一人の娘に何か囁いていた。明らかにユキの鎖を見つけたようだ。

「あの娘達、しきりにお前を見てるぞ」

「恥かしいワ。早く出ましようよ」

「馬鹿ッ、食べないうちに出来るか」

「だって」

「どんな気分だ？ 見られる刺戟は」

「知らないッ」

時間のかかるのを承知で注文した五目釜めしが出来るまでに、私は銚子を二本、空にし

たが、その間、ユキは身の置き場もない風情で、時折うらめし気に私の顔を窺っていた。

「どうした、食べないのか」

私は、わざとゆっくり釜めしを口に運びながら訊いてやる。

「食べたくないんです。お願い、早く！」

「いや、全部、食べなきゃ帰らないぞ」

「ひどいわ」

カウンター越しに、コックもチラチラ覗き見していた。

「ねえ、あなた」

「あなた、じゃないだろう。奴隷タイムなんだぞ。忘れるな」

「御主人様。本当にお願ひですから、もう出ましよう」

「仕方ない奴だ」

小声でやり取りしている中に、ユキは微かにベソをかき始めていた。

私がカウンターで払いをしている間も、店員の視線は露骨にユキの背中を追っていた。

私も振り向いて見たが、縦横の鎖がはっきりと続いてみえる。

「さあ、帰るぞ」

再び雨の中をバシヤ、バシヤと歩き出すとユキは、耐えに耐えていたのか、私にしがみ

つくと身体を震わせて泣きじゃくった。

「馬鹿ッ。いい年して泣くな。家へ帰ったら思いっきり責めてやるからな。その時に充分泣けッ。いいな」

ユキは泣きじゃくりながらも、はっきり肯いた。両側は石垣で、普段でも人通りのない坂道に來ると、そこは恰も激流を思わせる有様だった。

「御主人様、わたくし、さっきから」

「ご用か？」

「ハイ」

「よし、その辺でしちやいな」

「ハイ」（犬のように四つん這いになり、片足上げてやれッ）と命じたかったが、ユキも大分、参っているようなので許してやった。

「いつかのように歩きながらできるか」

「ハイ」ユキは川の如き流れの中を静かに歩みながら、二度目の歩行放出を試みた。

寸時、立ち止まったが、すぐに又、そろりと歩き出した。注意してわづかに足を伝わるのを認めただけで、後は全く形跡の残らぬ雨中でのプレイだった。

家に辿り着いたユキは、命ぜられるままに裸になると、汚れた体を、私が用を足しているドアに寄せて、続く責めを持っていた。

懸賞入選創作



美 し き 強 奪 者

暁

マ サ オ

その夜も、クラブ「夜の瞳」は賑わっていた。歓楽街の裏通り。十時を過ぎると酔客がその細いゴミゴミした路地を流れ始める。クラブといっても、銀座や赤坂の一流の店とは訳が違う。広いめのスナックをちょいと大きくしたといってもいい程度の店だ。客も有名ななど来るわけではない。それにしても、割合、賑わっているのは料金が安いのと、若い

ホステスを揃えているからだろう。

大田利夫は、そのバーテンだ。まだ、その店に勤めて三カ月にしかない。入った時はズブの素人だった。こういう水商売の世界に初めて首を突っ込んだのだ。その時には古くからのバーテンがいて、彼は見習いというので採用されたのだが、二、三日前に、そのバーテンが辞めてしまったので、今は彼が何から何までしなければならぬ。

だが、それは彼にとって、決して悪いことではなかった。早く、バーテンの仕事を覚え

たかったのだ。スナック喫茶の店を持ちたいというのが彼の長年の夢だった。そのために身を粉にして働いてきた。金になる仕事なら何でもやった。牛乳配達から、今はやりのチリ紙交換業の手伝いなども……。勿論、普通の会社勤めをしながら、アルバイトとしてだが。

眠る間も惜しんで働き、三年の間に三百万の金を残したのだから、どれだけの苦勞をしたか、想像に難くないだろう。

そうして、二十九才の今、最後の仕上げに

バーテン修業を始めたのだ。彼にとって、この仕事は思ったより難かしいものではなかった。三カ月で大体の見当は付いた。目的を持って勤めているのだから、覚えるのも速いわけだ。普通の者では、そうはいくまい。

「あと三カ月もしたら……」

彼はグラスを磨きながら想像して楽しんでいる。「どこでも良い。どこかの小さな店の権利を買って開店だ。俺はマスター兼マネージャー兼バーテンで、女の子を二人ばかり入れて、こじんまりした店にしたい。昼は特別に美味しいコーヒーを飲ませる店にして、夜は酒の客を主にしよう。どれ位、儲かるか判らんがとに角、借金だけはせずに始めよう。金を借りるあてはあるが、あとで大変だからなあ……」

「ねえ。ちょっと！」

女の強い声が彼の夢を破った。

「は、はい……」

と慌てて見ると、このナンバーワンの深雪が、怖い目で睨んでいる。さっきから呼ばれていたのに、気づかなかつたらしい。

「……？」

と目顔で用を訊くのに、

「何度、同じこと言わせるのよッ！」

と深雪は尖った声で、きめつけた。

彼もムカツとするが、喧嘩は出来ない。もしやれば、マネージャーがスッ飛んで来て、たちまち首が飛んでしまうだろう。バーテンの代わりは幾らもいるが、売れっ妓ホステスの代わりはいないのだ。

「すみません……」

そう言って彼は一寸、頭を下げた。

「仕様が無いわねボヤツとして。お冷や！」

深雪の声は張りがあって、それが、切りつけるように言うものだから、思わずドキリとなる程だ。

割氷に水を注いでカウンターに出すと、深雪は立ったままで、水を口へ流しながら、上目使いに彼の顔を、じいっと見詰めている。

(まずいなあ……)

彼は、そう思った。何しろ、この店での深雪の勢力は大変なもので、マネージャーでさえ、この女に歯が立たない。以前、些細なことでマネージャーが深雪と喧嘩した時、深雪を始め、彼女のグループが一どきに辞めたことがあって、店の女が半分以上に減ったという。おまけに、深雪のグループは売れっ妓ばかり揃っているから客足がバツタリ途断え、

マネージャーは社長に怒鳴られて、深雪の許

へ謝まりに走つたらしい。彼はその当時、まだいなかったが、聞いた話では、マネージャーは深雪に両手をついて平謝りになって、ようやく、戻って貰ったということである。

前いたバーテンから、この店にいるつもりなら、深雪とは喧嘩するなと言われたこともあるし、そういう風に深雪のことを意識しているせいか、常でさえ、彼女と話をかわす時なんとなく、ついそわそわしてしまう。

(こんな店、いっそ辞めようか……)

そうは思う時もあるが、また、一から新しい所でバーテン見習として勤め直すのは気が重い。だいいち、三十近い男が見習をしてるのはさ、まにならない。

できることなら、このまま、もう少し我慢して腕を磨きたい。そのためには少しぐらいのことは目をつぶって我慢するべきだ。目的達成のためにも……

「深雪さん」

彼は、おずおずと小さく呼びかけた。深雪はコップを置いて彼を凝視した。

切れ長というのか、瞳の両端が、ほそく流れている。その冷やかな色の目に、自分から呼びかけたものの、彼は少し緊張した。

「考えごととして……済みませんでした……」

「勘弁して下さい」

情ないなあ——自分ながらそう思う。それでも、謝ってしまうと、ほっとする。

抜けるように色が白く、薄くて妙に色っぽい唇と細く高い鼻の人形みたいに整った顔が彼の言葉に小馬鹿にしたようなうす笑いを浮かべた。そして、そのあとにとび出した言葉は強烈だった。

「今日は大目にみたげるけど、あんまり、ボヤボヤしてるとクビにするわよ」

彼は驚いた。いくらなんでも、ホステス風情のいう言葉ではない。ポカンとして彼女の白い顔を見詰めてしまう。

「文句ある？」

しかし彼女は、挑むような言い方で、彼の顔をじいっと探るように、睨み返しているのだ。

彼は一瞬、言葉を失くした。何かいわなければ……。こんなことにまで我慢する必要はないのだ。人間には分というものがある。そう思っても、カッと血が昇った頭には、急に適当な言葉が浮かばない。

口ごもっている彼を尻目に、スッと深雪は背を向けて、そのまま、客席へ割り込んで行く。

深雪との対峙が解けたとたんには彼は大きく息を吐き出した。まだ胸の熱さは溶けない。だがそれは、怒りというより、じいんと胸の奥が灼けるみたいなの、なんともいえぬおかしな気持だった。

しかし、こんな気持になったのは初めてのことでない。たしかに以前にも覚えがあった。

そうだ、チリ紙交換のアルバイトの時だ。世田谷の方の大きな家へ行って、その家の庭先で古新聞を束にして結わえていたら、二才位の幼児が傍へ寄ってきて片言で喋りかけてきた。適当に答えてやっていると突然「メメちゃん。傍へ寄っちゃダメ!」と厳しい声がつんとできて、その子を制したことがあった。余りの激しさに思わずその声の方を見ると、しつとりと上品そうな美しい若奥さんが、まるで、汚らしいものを見る様な目で彼を眺めていたのだった。

その時も彼は、怒りより先に痺れて、ものが言えなかった。庭にうず高く盛ったクズ物を整理する間中、若奥さんはそんな目で、ずっと思張ってでもいるかのように眺めていて、彼の方は恥辱が高まって、一種の切ないような甘い気分にとらわれたことがあった。その

時の気持と今の気持が奇妙に一致するのだ。いや、そればかりではない。考えてみれば、そういうことは、その他にもあった。

牛乳配達のアアルバイトの時だ。水商売風の女の所に集金に行くと、いきなり「あんたの店は腐った牛乳を飲ませるのッ」と凄い見幕で怒鳴って、バサバサに乾いた臭い牛乳ビンを目の前に突きつけて、罵詈雑言を一方的に矢弾のように浴びせかけ、挙句に金は払わないと言うのだった。女は、出掛けるところらしく、綺麗に化粧していた。その時も彼は怒ることを忘れ、女の目の周りの青緑の深い影を、きれいだなあと感じながら、口汚ない罵りに、じいんと痺れたことだった。

しばらく忘れていた、そういう、一種の変な感情を、今、深雪によってかき立てられ、味あわされたのだ。だが、正直なところ、彼にとってそれは、それほど厭なものではなかった。

二

その夜は、それきり深雪とは顔を合わすことなく店はカンバンになった。

そして翌日、定刻の四時に少し遅れて店へ

出ると、マネージャーが先に来ていた。他の者は、まだだった。

彼はフロアーの掃除に取り掛かった。鍵を預かるマネージャーは、いつものことだが、彼が掃除を始めると、どこかへ出て行ってしまふ。他の者は定刻に来たことはない。結局店の掃除の大半は、毎日彼一人がやっているのだ。水商売の世界は水臭い。新入りは本当に、こき使われる。便所掃除も彼の役だし、カウンターのしも整理しなければならぬ。

出かけにマネージャーが

「もうすぐ、深雪さんが来るから、これを渡しておいてくれ」

そう言って、書類の入っているらしい封筒を手渡して出て行った。

深雪というのが気になったから封筒をのぞいてみると、領収書や請求書などが入っている。深雪はいつも、六時半頃にしか来ないが今日は早く来て集金にでも行くらしい。

うすい空色の生地白い水玉模様のワンピースを着て、白いコートをふんわり羽織り、華やかな美しさが店に咲いた。深雪だった。彼は急いでマネージャーからの預り物を渡す。昨夜のことをもちだされはしないかと、おっかなびっくりで、掃除に熱中する振りを

するが、全身で気配を窺う。

深雪は何も言わなかった。ボックスに坐つて封筒の中を見ていたようだったが、急ぐ素振りで、すぐ立ち上った。

(やれやれ……)

彼がホツとしたとたん、なにかを思い出した様子で、彼女はもう一度、坐り直した。

「ちょっと、あんた！」

振り向いて彼を呼びつけた。思わずドキッと緊張したが、それでも箒を手にしたまま歩み寄る。すると彼女は、

「靴の泥、落としてよ」

と、全く平然と言いつけたのだ。そのあまりにも、こともなげな態度に、彼の方が聞き違えたのかと思った。だが彼女は靴をつき出している。

「ねえ！ 時間が無いの。急いでやって！」

昨夜同様の、切りつけるような声がとんできた。

反射的に彼は「ハイ」と答えたものの、どうしていいのかわからない。おろおろしていると、彼女の舌打ちが聞こえた。彼は余計にうろたえる。

「ドジねえ、あんた。お絞りの乾いたのを、二、三枚、持ってきてくりゃあ、いいじゃない」

命令に近い口調である。彼はカウンターに引っかけたのを三枚程取り、大急ぎで戻って腰掛けている深雪の前へしゃがんだ。

と同時に、彼女の片足が無造作に突き出された。クリーム色のハイヒールだった。ヒールは五センチほどもあるだろう。靴先は恰好よく尖がり、まだ割合、新しい。なるほど両横に、かなりの泥がこびりつき、黒ずんでいる。昼頃まで雨が降っていたから、それで汚れたのだろう。

彼は布きれを右手に持って、そおと磨き始めた。相当、うわずっているせいか、恥ずかしいとも何とも考えなかった。

(靴を脱いでくれれば……)

その方が、ずっと磨き易くて綺麗になるのに……。そう思っただけだった。

その彼が、あの胸奥まで熱く痺れる気持ちになったのは、しばらくして深雪が、

「なにしてるのさ。へたねえ……」

と明らかに侮って言った時だった。とたんに、脳天をまっ赤な火柱が吹き抜けたように、彼の体から羞恥のかたまりが、外へはじけ出したように思えた。そしてそのあとに、あの痺れるような不可解な気持が、どっかりと腰を降ろしたかのようにだった。あの

切なく甘い不思議な感情が、たぶたと心の中に充ち始めるのを感じとったのだった。

「あの——足にさわっても構いませんか？」

彼は顔をもたげて、言った。

「どうして？」

鋭い目が光った。

「その方が……あのう、やり易いので——」

いつの間にか、口ぶりが卑屈になるのを、かろうじて、平静を装いながら答える。

「じゃあ！ いいわ」

深雪は、さりとて言った。彼は左手を、そろそろ伸ばすと、足首の所を掴んだ。そうして、靴を床へ固定して、右手の布でごしごしと汚れを拭いていった。見た目には細く、引締まって見えるが、意外と骨太い。ミニ・ワンプースの裾は短く、目を上げたい誘惑は覚えるが、その度胸はなかった。というより、深雪の履いた靴を磨く、という行為だけで、彼の胸は張り裂けんばかりであったのかも知れない。

深雪は足を動かさない。踵の方を磨くにはどうしても身を乗り出すので、時折、頬が膝小僧に触れる。ナイロン・ストッキングが電流ほどの威力を生んだ。

彼は、いつか本職の靴磨きより熱心に打ち

込んでいた。他に誰もいないことが、一層、その事に熱中させた。

突然、とりついていていたハイヒールが、すつと引かれた。のめりそうになった彼に、深雪の声が降ってきた。

「そんなに面白い？」

切れ長の目が薄く光っている。彼は返事に困った。だが、思い切って

「ええ」

と頷き返した。

「変わってるのね、あんたって——」

唇の端に奇妙な笑いが浮かんでいた。

彼はいつか、床に膝をついて坐っていたがなにかしら、そのまま動けなかった。深雪は、ゆっくりとたばこを取り出し、ライターを鳴らし、一息大きく吸ってから、煙を彼の顔に吐きかけた。

すでに深雪は、彼の態度から感じ取って、たに違いなかった。この男には、どんなことをしてやってもいいんだ。むしろ、威張り散らして見下げてやればやるほど、こいつは喜んで従順になるだろう……と。

深雪の体内の血が——普通の女と違う、動物的に激しい血が、格好の獲物を見付けた喜びに、ざわめいた。

深雪は二十七、八になるだろう。だが、どう見ても二十三、四には見える。色の白のとスラリと伸びた、しなやかな身体つきが若く見せているのだろう。だが十年近く、こういう水商売の世界で生きてきた年輪は、若々しい見掛けの内部で確実に身についている。ありきたりの羞恥心や、慎しみ深さなどはきれいに消滅しているのだ。だからこそ、女ながらも弱肉強食のこの世界で、常にトップの座を守ってこれたのかも知れない。

美しい人形のような外見の内では、常に打算と欲望が渦を巻いている深雪にとって、弱い男、自分の自由に操れる者は、絶好の獲物だった。

さっと、軽やかに深雪は立ち上った。美しい瞳が虫ケラみたいに彼を見降ろしている。

「明日から、毎日、磨かせてやるよ——」

朱唇から、冷たく突き刺さるような声が出た。彼は魂を揺さぶられるような戦慄を覚えていた。

その日が、彼にとっては忘れられぬ日となり、この瞬間を境として、彼の運命に変化の兆しが現われ始めたのだ。その変化が、彼にとって喜ばしいものか悲しいものか、彼自身でさえ、よく判らないのだ。ただ、それから

の彼の生涯を狂わせたのは事実だった。

三

翌日、翌々日と続けて、深雪は早く店へ出て来た。もちろん彼に靴を磨かせる目的だけで早く来たのではなかった。丁度、月末に近いので、集金の都合もあったのだろう。

しかし、当然のように彼は靴を拭い、深雪もまた、「もし、あたしが大金持なら、あなたを専門の靴磨きに、雇ってやるんだけどなあ——。でも、あなた、本当は靴より、あたしの体を磨きたいのじゃない？」などと言っては面白そうに笑ったりした。

彼はそのたびに、例の痺れたような気持ちになって、もはや、どう仕様もないほど、魅入られてしまった。

三日目——深雪は和服で、やって来た。

しつとりと渋いエンジ色の着物。それでいて襟足の白さや袖口からのぞくふっくらした手首などに、こぼれんばかりの色香が溢れ、洋装とはまた違う成熟した女の匂いがムンムンしてるようで、今はもう、特別な感情をもつて接する彼には、夢のようだった。

ボックスに腰掛けて、深雪は彼を呼んだ。

彼は待ちかねたように行って、膝許にうずくまった。

「今日は靴はないのよ。残念ながら——」
面白そうな揶揄の言葉。

「その代わり、足袋を洗わせてあげる」
持って来た包装紙から新品の白足袋を取り出して傍へ置き、

「これを脱がせて——」

そう言って、草履を履いたままの足を持ちあげた。彼の手が草履を外し、幾らか汚れた白足袋のこはぜを一つずつめくって、そろりと足袋を足から抜きとり自分の膝に置いた。

もう一方を同じように脱がせる間、素足の方が彼の膝を踏み台にしていた。薄いテトロンのズボン生地を通して、足裏のなまなましい体温が伝わり、彼の全身を総気立たせた。声にならない、心の呻きを挙げ、跪くような形で、彼が自らの妖しい激情を歯をくいしばって制しているのを嘲笑うように、二つの素足は彼の膝の上で微妙なクネリを見せていた。

「あなた、喫茶店をやるそうね」

深雪は唐突に訊いた。身の置きどころのない思いの彼は、ホッと救われたような、それでいてその状態を惜しむような複雑な気持ちだった。

った。

「え？……ええ」

「聞いたわよ。もう、ずいぶんお金も貯めたんだって？」

「うん！」

一瞬の途惑いから我れに還った彼は勢いこんで返事した。深雪に少しでも、自分の良い所を見せたい想いが急速に湧き上ってきた。その辺のチンピラバーテンとはワケが違う。ちゃんとした目的があって、こんなしがないバーテン見習に甘んじてるんだ……。

「見直したわ」

そう言いながらも、白い素足はじっとしていなかった。じわじわと桑の葉にとりついたカイコのように微妙なくねりを見せながら、彼の胸許まで這い昇ってきたので、彼は後手について、上体の傾くのを支えねばならない。薄いワイシャツを通して伝わる、ほのかな足裏の温かさが、まるでそこを焼き尽すみたいにあつく思え、彼は、目をつぶって身を委ねていた。

「幾ら貯めたの？」

優しい声が訊いた。

「三百万ぐらい——」

目を閉じたまま彼がそう答えると、それき

りで深雪の質問はとだえたが、胸許の足だけは絶え間なく動き廻って、ノーネクタイの広げた襟元を、いたぶり始めた。

やがて素足は、魔力を秘めた別個の生物のように、彼の首根っこを両側から挟んで、ぎゅうと締めつけてきた。彼の胸は痺れを通り越して、妖しい、ざわめきで一杯になってきた。血管が今にも破裂しそうに激しく脈打ち顔全体が焔に炙られたようにカッカと火照っているのが彼自身でもわかる。

粘りつくような足の裏がびったりと喉首を捕え、拇指の爪が喉仏に、じわっと突き刺さった時、彼は遂にたまらず声を出した。耐えに耐えた感情が爆発したようだった。

「ああ！ 深雪さん——」

奇妙な、かすれ声がとび出すのと同時に、その唇は咽喉を締めつけている素足に吸いつこうとしていた。

だが、その唇は空しく流れた。ほんの一瞬の間すら彼の希望は叶えられはしなかった。今までの執拗さは、まるで嘘のように、深雪はサッと両足を引いてしまったのだ。我を忘れて彼は足を追った。しかし、深雪は素早くボックスの奥へ身を退いて、意地の悪い目で彼の憑かれた形相を眺めているのだった。

「キスさせてくれ！」

彼は叫んでいた。

「いや！」

深雪はニべもなく、つつばねた。

「ほんのちょっとでいい」

彼は四つ這いになって迫った。今までのおとなしい彼に似合わず積極的な行為だ。それだけ、彼が素足にとり憑かれてしまったといえる。やすやすと深雪の虜になったようだ。

「だめよッ！」

深雪の切れ長の目がギラギラと輝いて、床にはいつくばる彼をまともに見据えながら、残酷に朱唇が動いた。

「た、たのむ。足の指先、いや足の裏に、ほんのちょっとだけでいいんだ」

もはや二人の立場は、はっきりしていた。

哀願者と支配者。彼は、もう完全に支配されたと同じだ。彼が、どれほど切なく哀れに訴えても、深雪はそれによって、心を動かすことはないだろう。深雪の美しい顔が、それを物語っている。瞳が細長く切れ、軽蔑と値踏み視線だ。口許に浮かぶ、かすかな笑いは傲慢な征服者を想わせる。

ウフフフ……。深雪は声に出して笑った。

自分の投げた罠にがんにがらめになって、ど

うあがいても抜け出せない彼の様子に、思わず会心の笑いを見せたのだ。

「高くつくわよ」

深雪は、冷たく冴えた顔に戻ると言った。

悪辣な計算を含む言葉だった。だが、無我夢中の彼に、それが判る訳がない。

「いくら高くてもいい——。お、俺は、その足が欲しいんだ」

彼は、せきこむように言った。本当に金なら幾ら出してもいいと思ったのだ。

「でも、今はだめよ」

「ど、どうして……？」

「馬鹿ね。誰か来たらどうするの？」

彼は絶句する。確かに、もうすぐ、マネージャー達の来る頃だ。とたんに絶望的な気持ちが襲いかかってきた。やるせない切なさ胸が張り裂けんばかりになった。

「明日の夜、店が終わってからなら……」

深雪は最後の止めを刺すように、剣みたくに瞳を細く光らせて言うのだった。

「ぜ……ぜひ……」

後は言葉が続かない。だが、言葉はなくても、目の色が嘆願を告げていた。

「あさっては、お店が休みだから、丁度都合がいいわ。あたしの家で一晩中、相手してあ

「げてもいいのよ」

「ほんとう……？」

強い歓喜に心臓が高鳴った。

「その代わり、十万円、持ってくるのよ」

おっかぶせるような強い響きの声だった。

金額の大きさに一瞬、彼はためらった。

「いやなら、よすわ」

そっけない口振りで、そう言われると、もう後へは引けなかった。

「か、かねは用意する。……だから」

「フッフ。楽しみにしておいで」

ニンマリほくそ笑む顔が、彼の魂を宙に飛ばした。

物欲しげな彼に見せつけるようにして、深雪はゆっくりと、新しい白足袋を自分で履いて出て行った。

深雪がいなくなってしまうと、彼は急に身体中の力が抜けてしまい、虚脱したようにボックスに崩れ込んだ。すると、ほとんど深雪と入れ違いに、女が一人、入って来た。

マヤという名の、やはり、売れっ妓の一人であるが、深雪の取り巻きには加わっていない若い女だ。二十一、二か。よく発達した肉体美が自慢で、いつも、体にピッタリと合ったドレスで店に出ている。

ただ、表面上は深雪のグループと仲良くしているが、内心は競争心に燃えているらしく以前、マネージャーが、深雪がもしいなくなれば、マヤが代わってボスになるだろう、と言っていたことがある。

ことさら体の線を見せるような薄いセーターに短いスカートのマヤが、彼の隣りのボックスに腰を降ろして声をかけてきた。

「マッチ、貸してよ」

彼はマッチを箱ごと投げてやった。今の彼は、どんな美人を前にしても気が動くまい。

深雪から受けた痺れが、まだ磁石みたいに、こびりついているのだ。

「ねえ」

マヤが話しかけてきた。

彼はチラッと目を上げ彼女を見た。混血みたいに髪を赤茶に染め、大きな目と隆起した鼻は余り彼の趣味ではなかった。それに、若いくせに唇が妙に赤く濡れて、ネオンの下ならともかく、昼間、明るい所で見る顔ではない。彼は無視したい気持だった。だが、そのあとのマヤの言葉は彼を動転させたのだ。

「深雪さんの足って、そんなにいい？」

彼は飛び上がる位に驚いた。恥ずかしさがカッとこみ上げて、血の気が失せるのが判っ

た。

「ずっと見てたのよ。驚いた？ あんたのボケットに足袋が入ってるでしょ？ 深雪さんの履いてたの。全部、見ちゃったんだから」

マヤは大きな目を見開いて彼を凝視した。

「それで——？」

しばらくして彼は居直った。やぶれかぶれの気持になっていた。ただ咄嗟に、みっともないところを見られた以上、もうこの店にはいられないと腹を決めていた。だがマヤは、

「あたしも足には自信があるの。どお？」

そう言って、ミニスカートからはみだした長い足を、ゆったりと組み変えたのだ。

彼は思わず、それを、目で追っていた。

太腿の豊かな肉付きから流れる脚線の美しさは、確かに彼女が自慢するだけのことはあった。マヤは彼の視線を引きつけるように、二、三度、足を組み直してから

「あんたさえ良かったら、この足にキスさせてあげてもいいのよ」

長い足をぶらぶら泳がせて、男みたいに太くて低い声がもう一度、彼を驚かせた。

からかっているのか——そう思ったが、そうではない証拠に、マヤは笑いもせず、彼の顔に大きな目をヒタと据えていたのだ。

「その代わり、あたしも高いわよ」

とマヤは深雪と同じことを付け加えた。

深雪とのやりとりを残らず、知っているに違いない。

「あたしね、あんたみたいな人と、前に付合ったことあるの。あたしの足って、すごく魅力があるらしいわ」

マヤの話は、嘘か本当か判らない。

店でのマヤは、余り評判が良くない。平気で嘘をつく、という噂を聞いたこともある。

だが、半信半疑の彼に構わず、マヤが話したのによると、前に付合ってた人というのは老人で、彼女の足の魅力にとり憑かれていて肉体は求めずにただ踏んだり蹴ったりされて涙を流して嬉しがっていたというのである。

「今はもう、そのジイチャンとは別れたからどうなったのか知らないけど、多分、死んだんじゃないの」

そう言ってマヤは笑った。

深雪から受けた強い痺れが残っているところへ、マヤが露骨に喋るものだから、彼はまた、おかしい気分になって来た。それに、マヤが言った最後の言葉が胸にへばり付いて離れないのだ。

マヤは手ぶりを付けて説明したのだった。

「その人ったらねえ。年寄りだからでもあるだろうけど、顔なんかとっても小さいのよ。これぐらいしかないの。あたしの足はこんなに大きいじゃない。だからさ、こう踏んづけてやると、顔が全部、隠れてしまうのよ。片方だけでよ。面白かったわ。何しろ、そうしてくれていうんだから、好きなこととしてやったの。あたしの方が力が強いし、絶対に負けっこないでしょ。おまけに酔っ払ってるとね。初めは、あの人の注文通りしてるけどさ途中から、あたしの勝手にしてやるもんだから、途中で怒り出すこともあったけどさ。でも、構わないでやつつけちゃったわ。それでも、また通って来るのよ。余程、変態だったのねえ」

彼の頭の中に、マヤの豊満な足に踏みつぶされた老人の姿が浮かんできて、生々しい憧憬が、むらむらと湧き上ってくるのだった。

だが、彼は深雪の場合と同じように、マヤの前にうずくまる事は出来なかった。そうしてみたい——という強い願望はあったが、かろうじてその衝動を制していた。そういうふうなことをすれば、どういう結果になるか、漠然とながら暗い予感を覚えたのだ。

「深雪さんに払うのと同じだけ用意したら、

いつだっていいわよ。ああ、それから、このことは深雪さんに内緒よ。もし、喋ったら、こっちも皆んなに言うわよ」

マヤは喋るだけ喋るとすっと立った。そして、彼の目の前で、わざとらしくストッキングを直し始めた。彼の視線を意識して余計に大胆にしているように見え、彼はこのマヤという女にも、とうてい、敵わないものを感じた。

やはり集金に行くのか、マヤもやがて出掛けて行った。その夜、彼は例の白足袋を一晚中、抱き締めて寝た。

四

翌日、彼は仕事が終わるのが待ち遠しく、時間ばかり気にしていた。

深雪もマヤも彼と顔が合っても何も言わなかった。深雪の切れ長の瞳もマヤの大きな目も、同じように彼の肚の中を読みとっていると思われ、目が合うたびに気恥ずかしく思えてならなかった。背広の内ポケットは十萬円の札束でふくらんでいる。苦勞して貯めた金であるだけに、出すのは惜しかったが、それ以上にあの魅惑への誘いは強烈だった。

もし彼に、妻か、もしくはいつでも自由にできる女性がいれば、深雪の誘惑を逃れ得たかも知れないが、彼は情ない程、もてない男だったのである。

十二時前に彼は店を出た。帰りがけにウィスキーをあおっておくのを忘れなかった。

指定されたスナックに、約束を三十分ほど遅れて深雪は来た。例の白いコートに、しなやかな体を包んでいた。そこから、まっすぐ深雪のアパートへ直行した。高級マンションとまではいかないが、それでも彼のアパートに比べると、ぐっと贅沢な部屋である。六畳と四畳半に、キッチンと、トイレが付いている。両方とも和室だが、六畳の方は赤い絨毯を敷いて小さな応接セットを置いてあった。その椅子に向き合うなり、深雪はすぐに約束の金を取り上げてしまった。

それから、ブランデーを燗ごと持って、彼にすすめた。彼は想う深雪と二人きりでいる緊迫感に息づまるようで、ぐいっとグラスを傾けた。初秋の夜気は涼し過ぎる位だが、体が火照り熱い位だ。二人とも下地は出来ているので、酔いの廻りは速い。

「それ以上、飲んじゃだめー」

二杯目を飲もうと燗に手を伸ばした時、深

雪が制した。目のふちが少し朱に染まって、例えようもなく色っぽい。そんな目で見ながら、ワンピースをスルスルと脱ぎ捨てる。

白いビロードのような艶を湛えた肌が、露わになった。深雪はブラジャーと、フレアの付いたパンティだけの姿になった。そのヒラヒラする布切れは体の美しさを強烈に主張してるみたいで彼の表情に歓喜の色が走った。

深雪はもう一度、坐り直して片足をテーブルに投げ出した。

そして、黙ったまま、足首をゆっくり廻転させた。爪が銀色に鈍く光っている。それが彼の目の前で、ゆっくり、ゆっくりと誘うように動き続けた。その動きを喰い入るように見詰める彼の目に、憑かれたような光が急激に増し始めた。深雪は何も言わず、ソファに凭れ、気分よさそうに目を細めてブランディグラスを嘗めている。彼はもう、我慢できなかった。

震える手を伸ばし、足を両手で抱き取るように掴んだ。適当に熱く、粘りつく柔らかさを備えた足は、彼の手の中で、まだ微妙にくねり続け、彼の神経を、ひとときも休ませない。

彼の体が床へすべり落ちた。そのままテー

ブルの上の白い素足へ鼻を押しつけ、足裏の匂いを胸一杯吸い込む。脂と革のかすかな匂いが、彼の脳髓を痺れさせる。土踏まずの凹んだ所を舌先が這い吸盤のように吸いつく。やがて、指先の一本一本に夢中で舌を這わせる。それでも、物足りなげに口に含んで、喉の奥深くまで、しゃにむに押し込もうとし始めるのだった。

深雪は傲然と、そんな彼を見降ろしていたが、もう片方の足を上げて平然と彼の頭の上に置いた。足裏が頭をじわじわと踏みしだいて行く。彼はその屈辱のポーズにいい知れぬ陶酔を覚えていた。

と、いきなり深雪は両足を引っこめて立ち上り、少し歩いて、ソファから離れて立った。そのまま、腰に両手を当てて底光りした目で彼の方を見た。そして顎で自分の足許を示した。彼はそこまで這って行った。スナリと立つ二本の足先に唇をつけて、徐々に甲から足首へ移動させようとしたとき、突然その足が顎をすくい上げるようにはね上り、彼の体は仰向けに一転していた。もぞもぞと立ち直ろうとする間も与えず、はね上った足が降ろされたが、彼の酔いに染まった顔はその足の下に敷かれていた。

目も鼻も口も、一挙にふくよかな足裏に踏みだかれて無惨に潰れた。更に片足の指が喉を圧して、そのまま、両足が残忍に一帶を踏みにじった。

彼は息苦しさ、後頭部のギリギリする痛さに動物的な悲鳴を上げ、両手がその残忍な足を夢中で握んだ。すると、深雪は踏んでる足を外して、

「踏んで欲しくないの？」

と言って彼をのぞき込んだ。

苦痛がとれ、ひと息入れると、たちまち、被虐の欲望が湧き起こってくる。おまけに、頭上で傲然と構えた京人形のように整った白々しい美貌が、彼の魂まで凍らせるぐらい、冷たく美しく輝いて見え、途端に哀願の言葉が口について出た。

「ふんで……踏んで下さい——」

「ふふふ」

深雪は勝誇ったように足裏で圧した。

「もっと——もっと強く——」

彼の呻き声に、深雪は妖しく笑った。

もう、彼は俎上の鯉も同然だ。罠に陥ちた獲物は狩人の冷酷な料理が待つだけだ。

深雪は渾身の力を振り絞って、彼の想像した以上の猛烈な苦しさを与えてやる事に熱中

し始めたのだった。

その夜、彼は明け方まで深雪の玩弄物となつて、甘美な苦痛に酔い知れた。彼にとっては何から何まで始めての経験だったが、深雪の方は、その鮮かな手並みから見て、こういう事に馴れ切った風だった。

その疑問を口にした時、深雪は、さも残忍な口振りで、こう言った。

「当り前よ。今でも、一声掛けてやれば、男の四人や五人は喜んで飛んで来るわ。そして苛めて下さいって泣いて頼むのよ。お前だって、きっとそうなるわ。必ず、そうさせてやる——」

その夜、彼は深雪を抱くことは出来なかった。また、その事を望んでいた訳でもない。しかし、それより、もっと奥深いものを教えられた。深雪は「奉仕」という言葉を使ったが、それは、彼にとっても、この上ない嬉しい行為だった。

彼は、この美しい深雪が、これほどまでに妖しく動物的で貪婪に変化するとは思わなかった。深雪が美しい裸身を翻えし、彼を餌食にして自身だけの快楽を貪欲にむさぼる姿の凄まじさに、言いようのない官能美を感じ、その美しさに奉仕している自分が、こ

の世で一番の幸福な男だと思った。

明け方。辺りが明るくなり始めた頃になつて、深雪は彼を追い出した。

「今日は、これで終わりよ。土曜の夜は、お前のために空けて置くから、お金を持って毎週おいで。さあ、もうお帰り。あたしは一眠りするから」

彼は、肉体的には満足しなかったが、それ以上に甘い官能が体の隅々まで行き渡って、今までの人生では及びもせぬ、深い喜びに包まれて、深雪のあられもない裸身の寝姿に深々と頭を下げたのだった。

五

日曜日は店が休む。そして、月曜日、店で深雪と顔が合った時、彼の方はじいんと胸が熱く痺れたのだが、深雪は、けろりとしていた。白々しく冴えた横顔を見せ、あの狂態ぶりの素振りさえ覗かせていない。そんな深雪の取り澄ました白い顔が、ことさらに彼の気持をかき乱した。

もう一人の気になるマヤの方は、彼と視線が合うたびに意味ありげに、大きな瞳をじいっと据えて、深雪に気づかれはしないかと、

彼の方がヒヤヒヤしたぐらいだったが、終業間際に何気ない素振りでもカウンターの所へ来て囁いたのだ。

「明日の夜、どお？」

「さあ……」

彼はあいまいに答えると、マヤはもっと小さな声で

「あたし、ここんとこ忙しくて、ずっと、お風呂に入っていないのよ」

と、これも何気ない風に言うのだった。

こんな思わせぶりなことを言っただけで自分の気を引いてるのだ。そう思うと彼は少し腹が立ったが、弱点を突かれて思わず顔が火照ってきた。マヤはドレスの胸元からマッチを取り出して、彼の前に置いた。

「場所と時間が書いてあるわ」

それだけ言ってマヤは離れた。彼は大急ぎでマッチをポケットに収めた。

その夜、彼は夢にうなされた。深雪が、白い蛇になって絡んでくる。その蛇の顔が途中からマヤと入れ替ったかと思うと、マヤの体が、とてつもなく巨大な足に変わり、それが彼を追い廻し一蹴りされるたびに、彼の肉が千切れ、骨がへし折れていくのだ。逃げようとしても動けず、遂に彼の五体は八ツ裂きにな

されて、無傷で残ったのは顔だけとなった。だが、その顔面にも、千畳敷もありそうな足裏が、じわじわとおおいかぶさってきて、必死の嘆願にもかかわらず、ぐいっと一踏み。一挙に粉々になってしまい、プツと吹き散らされてしまう彼の顔。

「むう、むう……」

うなされて妖夢から醒め、気がつくとも汗びっしょりだった。夢の名残りは、しばらく彼を陶然とさせた。その時点で、彼はマヤと会う決心をしていたのだ。

女の持つ悪魔的な魅力は彼の理性を麻痺させたようであった。

長年の夢である喫茶開店のための、貴重な汗と苦勞の結晶が、また十万円、減ることになる。だが、それが破産を意味すると判りつつも彼には妖美な魔性の世界への誘惑には、とても抗し切れなかった。

マヤは、彼をホテルの林立する一劃へ誘った。冷暖房完備、防音装置付き、各室カラーテレビ有り、一泊五千円とある部屋は、さすがに見た目に華やかだ。

ビールを取り寄せたマヤは、驚く程の飲みっぷりだった。四本のビールを殆ど一人で流し込んでいた。

そのあと、多少、後悔ぎみだった彼は、マヤの足の素晴らしさに、やはり来て良かったと思った。

マヤの背丈は百六十八センチもあり、体重も五十八キロだという通り、確かに圧倒的な肉体をしていた。肌は小麦色に近く、凝脂につやつやしていた。彼は、その大柄な肉体の乱舞につれ、蹴られ踏みにじられ、ごろごろころげながら、深雪とはまた異質の女の暴力に苛まれる喜びを、ひしひしと感じ、何もかも忘れて酔い痴れたのだった。

マヤは深雪ほどの冷たい残忍さは見せなかったが、凶暴さにおいて上まわっていた。彼が怪我をしようが、苦痛にわめこうが、全く気にも止めずに激しく身を躍らせた。

その夜、彼は始めて鞭というのを知った。マヤはバッグから、一メートル近い赤い鞭を取り出して、それを彼に見せて言った。

「深雪さんは鞭を持ってた？」

「さあ。判らない——」

「多分、持っていない筈よ。あたしも、これを手に入れるのに苦勞したんだもの。フランス製なのよ、これ……。あんな、知らないでしょ？ 鞭って、すごく気持がいいのよ。これで、殴られると体中が疼いて——」

マヤは、深雪が持っていない物を自分が持っていることに満足しているようだった。誇らしげに喋るたびに、欲望をむき出したみたいだ、ヌメヌメと光る赤い大きな唇が奇妙なうごめき方をした。そうすると、マヤの顔が日本人離れして、どぎつい程の猛々しい印象を与えた。今の彼は、そんなマヤの表情を素晴らしく美しいものと思えて胸が高鳴った。

マヤは鞭を右手に持ち、壁の所を斜めに叩いてみせた。「バシッ」という音がした。思わず首をすくめて「凄い」と言う、とマヤはニヤッと笑っただけで何も言わなかった。

そのあと、マヤはストッキングで彼の両手を後手に縛った。彼は裸にされているが、マヤはブラジャーとパンティだけは身に着けていた。その方が、ずっと自分の裸身を引きたてて見せるのを承知しているようだ。マヤはベッドに腰掛け、その前に彼は後手の身をさらして立っていた。

「縛られて鞭で叩かれるのが、どんなに素敵なものか教えてあげるわ」

マヤはそう言って、ゆっくり腕を振りかぶった。次の瞬間、鞭が飛んで来た。壁に叩きつけた程の強さではなかった。それでも、ピシりと小気味良く彼の脇腹の辺りが鳴った。

瞬間、ヒリヒリと痛みが走った。その痛みが消えるのを待って、また鞭が飛んできた。「痛いかな？」

マヤは訊いた。目が彼の動きを、ずっと観察している。それは、自分の楽しみではなく彼を喜ばすために、こんなことをしている、という風な仕草だった。

彼が黙っていると、マヤは短い間隔で連続的に叩き始めた。当たった痛みが消え去る間のない連打である。彼は苦悶の呻きを洩らして腰をよじって逃げようとした。

「動いちゃ、だめ！」

マヤは強く叱咤する。

「ちよつとの間、辛抱するのよ。そうしたら段々にわかってくるから——」

マヤの言い方は自信に溢れていた。今までの経験から推し計っているに違いない。

彼は年若い女の堂々とした態度に、到底、太刀打できないものを感じて、マヤの鞭と彼女自体に屈伏せざるを得ないことを悟った。

鞭そのものは少しも気持の良いものではなく痛くてたまらなかった。ただ、目の前のマヤが異様なほど、大きな存在で彼を引きつけていた。腕が動くたびにブラジャーの隆起が悩ましく揺れ、強い腋臭が彼を虜にした。

マヤは足を伸ばして彼の胴を挟みつけ、彼の全身をぐるりと後向けにした。凄い足の強さだ。そうして今度はその背中にゆっくりと間を置いた鞭が飛び始めた。

我慢できないような痛さはなく、彼は、ずい分と間を置いた鞭を神経を研ぎ澄まして待っていた。鞭の痛さは別にしても、両手を縛られ、年若いマヤに打たれている、という思いが、切なく胸を痺れさせて、一種の恍惚としたものが全身を満たしていた。

マヤは再び足で、彼を自分の方に向け直した。そして手を休めて、しばらくの間、彼の全身を眺めていた。冷静に観察する表情だ。彼はマヤの冷たい視線を浴びて、胸が張り裂ける程、苦しくなった。ありとあらゆる経験を積んだ年増女みたいな傲慢な顔付きのマヤに、好きなように料理されたいという真の被虐的な気持が昂進してきて、どう仕様もなくなった。

彼はズルズルと崩れるように跪いて、マヤの足に夢中で唇を寄せた。心得たマヤは、足で彼を力一杯、締め上げ、彼の恍惚の表情を貪るように眺めた。彼は、マヤの強力な脚力に締めつけられながら、苦悶とも歓喜ともつかぬ呻きを洩らして、征服される喜びに浸り

切ったのだ。

六

深雪とマヤを知って以来、彼は今までにな
い充実した日々を送ることが出来た。

週に二回、彼は二人の女の許へ通って、魂
の燃焼する時間を持った。勿論、その代償に
貴重な貯金は目に見えて減り始めたが、彼に
とって、もはやそんなことは問題ではなくな
っていた。死を間近に悟った老人が最後の快
楽に突進するように何物をも投げ打って一途
に魅惑の世界に溺れ込んでしまったのだ。

それはもう、首を突っ込んだが最後、二度
と引き返し得ない魔力を持つ世界だ。

深雪とマヤは悪魔の使いのように残酷に彼
の未来をぶち壊し、彼を人生の敗残者に仕立
ててしまった。だが、彼は破滅への片道切符
を買ったも同然だった。

深雪の白蛇のような裸身の足下で呻き、マ
ヤの巨大な足裏で悶える日々が続いた。だが
二人の女は金を絞る点では似たり寄ったりの
強欲な面を見せたが、快楽的な面では性格的
に違うところを表わしていた。

深雪の場合は、彼を完璧な奴隷にしてしま

った。彼の願望を無視して、自分の好きなよ
うに取り扱うようになった。週に一度、土曜
の夜は深雪のための快楽の一夜になり、彼は
心身をすり減らして尽さねばならなくなった
が、彼はそれに翻弄され耽溺することに無上
の歓喜を知ったのだ。

反面、マヤとの間では、あくまでも彼が主
役だ。同じような加虐でも、マヤは彼を喜ば
すために色々な技巧を凝らし、自分自身は本
心で熱中するのではなく、彼の欲望を充たす
事を第一に考えているようで、日によって彼
にはそれが物足りなく思えることもあった。

こうして、二人の美しき強奪者は三カ月余
りの間に、彼の預金をあらかた吸い取ってし
まったのだ。

マヤは彼の金が切れたと知ると、もう、ハ
ナも引っかけない態度に変わった。まことに
さばさばしたもので「これで、おしまいね」
と言うなり、二度と彼の言葉に耳をかそうと
しなくなったのであった。

彼はマヤの冷たい仕打ちからして、深雪は
より以上に水臭く出るものと観念した。

「もう、お金がなくなったので、逢いに来ら
れません。一文なしになってはバーテンして
も意味ないので、店も辞めようと思います」

最後の奉仕のあと、思いきってそう言う
と深雪は、しばらく彼の悲痛な顔を眺めていた
が、やがて思いがけない事を告げたのだ。

「あたし近い内に喫茶店を出すの、新宿で。
もう、お店は決まって今、改装してるの。そ
れで、お前を使ってやってもいいのよ」

彼は信じられない思いであった。勿論、と
びつくようにその話を彼は受けた。深雪の下
で働くのなら、どんなに安月給でも構わない
と真剣に思った。

深雪が彼を哀れんで言ったのか、それとも
打算的に、誰よりも忠実な部下となるバーテ
ンと見込みをつけたのか、彼には良く判らな
かった。だが翌日には早速クラブを辞めた。
そして、改装中の深雪の店へ出向き、開店の
準備に明け暮れるようになった。

幾日か経ち、立派な店が誕生した。

深雪は予想以上に彼を重く用いて呉れた。

だが、それは昼間の仕事の上でのことだけ
だった。夜になると深雪は豹変するのであっ
た。以前に金を絞り取ったように、今度は快
楽を奪い始めた。

美しい強奪者として、彼からすべてを吸い
上げ、絞り取ろうとする彼女に、彼は固く忠
誠を誓ったのだ。

(終)



第二十四回

十五号の正体

ジャンヌは強情におし黙っていた。キャンパスを支配している反抗精神からいえば、あらゆる拷問に耐えてグループの秘密を守る事が大変に英雄的な行為であるとされていた。

これは学生運動ではなかったけれども、ジャンヌにはこうした強情さが、天性のようになってしまっている。まっ裸に引き剥がれたって、別にどうということはない。貞操だってそんなものは遠い昔の思い出にしか過ぎぬ。叩かれれば痛い。切られれば血が出る。だか

ら何さ、あたしは負けはしない。彼女は、こう心の中で独語していた。

やや持て余し気味になった有明は、ふとハンドバッグを調べる気になった。定期入れの裏側に一枚の写真がハサンであったのに気がついた。それを見た瞬間、さすがの有明が顔色を変えてしまった。

「これは誰だ」

思わず鋭くなった声音を押えようともせず、その写真をジャンヌの鼻先に、突きつける。相変わらず彼女は返事をしない。

レズ仲間になってから、ジャンヌは二人並んだ写真を欲しがった。十五号は不用意に、

その願いを聞き入れてしまったのだ。裸の上半身を肩を組んで笑っているポーズだった。

ボーイッシュな十五号は乳房が小さく少年のように見えた。いやジャンヌの胸があまりに豊かだったので見劣りしてしまったのかも知れない。それより何より、有明を驚倒させたのはジャンヌと並んだ女が、薄倖の美少女、林美玉にまぎれもなかったからである。

十五号の謎はアッケなく解けてしまった。彼女こそ麻薬シンジケートが厳密のうちに潜入させたスパイであり、今回のオペレーションに全権を与えられたボスだったのである。一味の呂親分だって知らされていなかった。

それだからこそ、例の島では呂親分の手で激しく責め虐げられたわけである。又、そんな目に遭わされたからこそ、用心深い蔡樹理を信用させることが出来たのだといえよう。誠に苦肉の策であった。

有明が驚愕したのも無理からぬ事である。僅か十六才と称する少女、林美玉が、とんだ喰わせものだったとは、今の今まで知らなかった。そうなって見ると、次々と疑いが出てくる。馬鹿でも麻薬の一味とグルになっていることが察せられるであろう。可哀そうに野沢洋子は彼等の手に落ちたと見なければならぬまい。それならば、此方もこの女を囚えてい

前号までⅡガボン人有明の秘密組織には二つの性格がある。一つは手段をつくして美女を誘拐すること。もう一つは、国際的麻薬シンジケートと対決することである。いまや後者の対決はその場を東京に移した。有明とそれを助ける青幫の領袖蔡樹理、そしてエミー司令と交替して有明の秘書となった小林敦子、実は野沢洋子たちは、麻薬組織の少女ボス十五号とゲバ学生ヒロイン、通称ジャンヌなどの麻薬一味と、決戦に入ろうとしている。

る。引きわけの可能性もあるかも知れぬ。しかし、この女が若しそれ程重要な人物でなければ相手は平気で見殺しにしかねない。それでは人質としての価値がないわけだ。せめてもう一人、林美玉を捕えなければ……。

そう決心すると有明の行動が急に活発になった。ジャンヌの口に浴場のスポンジを押し込むと唇を荷造り用のテープで封じてしまう。タテ、ヨコから幾重にも貼りつけて顎も動かないように固定してしまう。次に大の字なりにベッドに縛りつけてあった両足を一旦ほどくと、同じようにテープでグルグルに巻いて一つに縛る。両手を解くや否や、それをねじって体をうつ伏せにすると、後手縛りにテープを巻く。それでも余ったテープは、上体を引き起こした上で腕ごと胸に巻きつけて行った。ジャンヌの豊満な胸が変な恰好につぶれた。ガムテープのベタベタが敏感な乳首にはりついて、たまらなく不快である。こうなっではじめて、ジャンヌの瞳が恐怖の色をあらわしてきた。有明の意図が全くわからないからでもあったろう。

部屋の奥に中味が空っぽのサウンド・ボックスがあった。下に車がついている。それをベッドのそばに持って来て、ジャンヌの裸身

を巧みに曲げながら、その中にはめ込んでしまう。無理矢理に詰め込んで蓋をしてしまうと、見た目はそれ程大きい箱ではないから、とても一人が入っているとは思像もできない程だった。それだけに、極限まで屈曲を強いられたジャンヌの苦痛は大変なものだったろう。丁度、母親の胎内にいる赤ん坊のような姿勢だったから。

有明がサウンド・ボックスを押して廊下へ出ても、誰一人怪しむ者もいなかった。部屋付きのボーイがとんで来て手伝おうとすると有明は愛想よく、いいよ、いいよという風に手を振ったものである。

エレベーターで地階のガレージへ降りる。ベンツのレンタカーを有明は使っていた。そのトランクへサウンド・ボックスを投げ込んでユックリ車を転がし始めたとき、有明のポケットでブザーが急に鳴り出したのである。車を停めて車外に出る。とり出したのはキーホルダーのような形をしたタイマーである。一見、どこにでも売っているものだが、内容は全くちがっていた。極く微弱な電波の発振でも発見することの出来る超短波検出器だったのである。

柱の隅に、小さな女物のボタンが落ちてい

た。野沢洋子が薄れ行く意識の中で最後の努力を試みた結果である。有明の検波器は、このボタンが発振する電波を見事にとらえたのである。

有明は小さなボタンを拾い上げた。事態の切迫は明瞭だった。洋子はどんな苦しみを受けているだろうか。有明の両眼にはウッスラと涙が、にじんでいた。

蔡樹理の寓居は世田ヶ谷にあった。日本に



小綺麗な家を借りることにしたからである。戦後、畑がつぶれて住宅地になった地帯で南側の塀一つを境にして径堂になっていた。その向こうの土地を百坪ほど日本人名義で買って四階建のアパートを建てているのは誰も知らない秘密だった。一階がガレージになっていて、入居者の用にあてていたが、その片隅が独立して仕切ってあった。実は、そこから隠し扉で蔡の家に通じていた。町名も番地もちがっているし、とんでもなく大廻りしなければならぬから、誰も蔡の家とアパートと

を結びつけて考える筈がなかった。つまりアパートが蔡にとっては抜け道の一つだったのである。

さて、有明がベントを押し込んだのはその、ガレージだった。シャッターをおろすと密室になってしまう。裸のジャンヌが丸くなって呻吟しているサウンド・ボックスをトランク

からおろすと、隠し扉をくぐって蔡の家に運び込んだ。土地の高低を利用したため、扉の向こうは蔡の家の地下室に連絡するトンネルだったから、人目につかずに行き来できたわけである。蔡が雇っている留守番の婆さんは地下室のあることさえも知らない。

林美玉は東京に来てから、ずっと蔡の家に住んでいた。蔡は何か知らぬが、よく旅行したので不在のことが多かった。そのため、彼女は随分と気尽に暮すことができた。蔡が小さいのをフンダンに与えたことも、それに拍車をかけることになったのかも知れない。とはいっても、こうした解釈は蔡の側から見た場合の事で、実は麻薬シンジケートの女ボスである彼女にしてみれば、自分の立場を怪しまれないようにするための、ホンの隠れ蓑として利用していたに過ぎぬ。

下目黒のアジトから大いそぎで帰ってきた第十五号、すなわち林美玉が待つ程もなく、ホンコンから着いたばかりという蔡樹理がハイヤを乗りつけて来た。

うやうやしく出迎える林美玉の様子には、あの威高気な十五号の気配は全くなかった。「変わったことはなかったらうね」蔡が、やさしく、たずねた。

「はい。でもわたくし怖ろしくて。いつも誰かに尾行されている様な気がいたします」

と、いかにも気弱そうな答えがかえってくる。こうした場合、二人の会話はいつもキレイな北京語であった。二人共、福建語を話すことが出来たのだが、特に蔡は北京語で話すことを好む風があった。

「心配しないでいい。僕がいるかぎり、キツと君を守ってあげるから安心しなさい」

「ありがとうございます。それでは、わたくし、日本語学校へまいります」

と、そそくさと出掛けようとする。

「あ、ちょっとお待ち。君に有難い関帝廟のお守りをあげよう。信ずる信じないは別にして、結構マスコットになるだろう」

蔡が渡したのは美しい布袋に納めた金属製の小さな護符だった。林美玉は丁寧な礼をいって、それをハンドバッグに納めた。

「経堂から小田急に乗るのかね」

「はい、そうです。お茶の水ですから」

「気をつけて行っておいで」

「いってまいります」

きわめて平凡な言葉を交しながら林美玉が出て行くと、打って変わったように気むづかしい顔になった蔡は、いそいで電話のダイヤ

ルを廻しはじめた。

蔡がやとった数名の私立探偵たちは協同して林美玉を尾行した。彼女は新宿へ出ると、中央総武線に乗らずに、山手で渋谷へ廻ったことが報告された。トランシーバーを携えた勢子たちは、獲物を追い詰める猟犬のように林美玉をとり巻いている。その上、彼女がハンドバッグに入れた関帝廟のお守りも、実は彼女の所在を示す超小型発振器だった。これでは見表わさない方が、どうかしている。結局例の下目黒にある怪屋敷へ林美玉が入って行ったことが確かめられた。

あとから考えると、そのとき直ちに踏み込んで行ったら、敵にそれ程の備えもなかったであろうし、ひょっとして無事、小林敦子になりすました野沢陽子を救い出すことが出来たのかも知れない。とりかえしのつかない時間が刻々と過ぎ去って行きつつあった。

そのような焦慮とは反対に、怪屋敷周辺の聞き込み情報は、そこに相当数のヤクザめいた男が常住していることを教えていた。それだけに、ウツカリ乗り込んで行ったら、それこそミイラとりがミイラになりかねないおそれがあった。慎重にならざるを得ないのであ

る。

摘 出 手 術

林美玉が帰宅したとき、蔡は不在だった。いつものことなので別に不思議にもせず、彼女は風呂を浴びて床に入った。

つい先程、味わったばかりの残酷な昂奮が彼女の血を騒がせていて、さすがに寝つかれなかった。

腰椎麻酔だけしかされなかった小林敦子、すなわち野沢洋子は意識がハッキリしていただけに、いっそう悲惨だった。

上半身を手術台に縛りつけられただけで、下半身は痺れきっていて、何をされても、まるでいうことを利かないのである。

麻薬をタププリ味わって見違える程シャツキリした老ドクターは巧みな手さばきで、この奇妙な手術を進めて行った。腰間に喰い込んでいた細い金鎖がブツブツと断ち切られると、もう隠しようもない問題の金環が頭を覗かせていた。

プスツとメスが突きささった。冷酷なメスの刃が脂肪層をひきさいて、一気に腹膜に達する。赤黒い血が噴き出して来るのを、その

都度、止血しながら、メスは休む間もなく進んで行く。

もはや、エミー司令に幸いしたテル・アビブの奇蹟は起こりうべくもなかった。

全身を膏汗で濡らした野沢洋子は、それでも気を喪うことが出来なかった。

小まめに血管を結索しながら、プラスチックの把手の周囲を次第に切り離して行き、まるとクリ抜いてしまう。さぞえの中味を抜きとるように、パットの上に置かれたプラスチックの把手は、収縮した肉塊にギッチリと締めつけられていた。矢張り爆発は起こらなかった。事實は爆薬でなくて、バイオテレメーターだけが装置されてあったのだけれども一味の者は、十五号をはじめとして、本当にプラスチック爆弾が仕込んであると信じ切っていた。それが、洋子の悲劇を生んだのである。

ドクターは夢中になって縫合をはじめていった。思ったより出血を少なくとどめ得たことを誇らしくさえ感じていた。

自分の肉体の一部を、パットの中に見出したとき、絶望した洋子は遂に気を喪ってしまった。括約筋が弛緩したため汚物がとめどもなく流れる。

さすがの十五号も、こうした光景を目のあたりにしては、すっかり気分がわるくなってしまったので、そこまで見届けると、あとの始末を充分にするように言いおいて逃げ出してしまった。

ベッドの中で、そんな経過を反芻しながらいや、忘れようとしても忘れ得ない印象のために、林美玉は転々と寝がえりをうつばかりだった。あの女はもう、子をはらむことが出来なくなってしまった。そればかりか、男の愛情を受け入れることさえ出来なくなってしまうたのである。正に美しい廃人である。復讐の快感が、彼女を余計、たかぶらせた。

フト、階下で幽かな物音が聞こえた。お手伝いの婆やは、通いなので、今は、いない。

——泥棒かしら——

そう思っても、並大抵の女でないだけに、ビクともしない。

かえって、素早く身仕舞いをすませると、足音を忍ばせて寢室を出た。階下には食堂、台所などの他に、祭の使っている書斎と寢室があった。

懐中電灯の光が書斎から洩れている。ドア

が細めに開けてあったからである。

こちらに脊を向けた黒い人影があった。

どういう仕掛けか、正面の書棚がドアのようについて、人影はそこに吸い込まれて行った。あとには真黒い戸口がポツカリと口をあいていたのである。

こんなカラクリは全然、知らなかった。好奇心に駆られた林美玉は、ソツと後を追った。

闇の中に、手さぐりで一步を踏み出した瞬間、足下の床がガタンと外れた。あわてて書斎の方へ飛ぼうとすると、戸はハネ返るようになって閉ってしまった。手掛かりのないままに落ちて落下すると、地下室らしい床に叩きつけられた。身体を丸め、足を下にしていたから、ショックがひどかったわりに負傷もしなかったらしい。

まっくらなので何もわからず、ヨロヨロと立ち上がろうとすると手が鉄格子に触れた。アツと思つてさわって行くと、一坪ばかりの空間が、檻のような鉄格子で三方を囲まれていることがわかった。もう一方は、コンクリート壁になっている。手をのばせば届くぐらゐの天井も、今は、ピッタリと閉ざされている。つまり、林美玉は鼠とりにかかったよう

なものであった。

カラカラと笑い声がしてパッと、あかりがついた。

「どうかね。やっと大鼠がひっかかったな」

黒いトックリセーター

に黒ズボンという、いでたちの有明が立っていたではないか。

新津謙介に依頼して林美玉を東京へ送った

のは有明だった。頭の回転の早い十五号は、忽ち楚々とした少女林美玉に戻って、檻の中でヨヨとばかりに、すすり泣いた。何を間違えて、わたしをこんなヒドイ目にあわせるのです——といった風に身を揉んでうったえる姿は、余程の者でも同情せずにはいられないであろう。外面女菩薩、内心女夜叉というのか、全くこの小娘に振廻されてしまったのをニガニガしく思う有明は、ただ一言、

「見ろ！」

と、部屋の隅から例のサウンド・ボックスを引き出して来たのであった。錠前が外されると、ハネ返るように側板が倒れて、畳み込まれていたジャンヌの裸身が転り出て



来た。

これには、さすがの十五号も「アッ」と声を吞んで痴呆のような顔になってしまった。ジャンヌが捕えられては、もう秘密がバレたのも同然だった。

長い時間、窮屈な姿勢でいたため、ジャンヌは息も絶え絶えになっていた。身体中、ベタベタとテープを巻かれていては、たとえ元気であったとしても芋虫同然だったろう。

「ホホホホホ」

突然、シャッキリと立ち上った林美玉が、仮面をカナグリ捨てた。もはや、これまでと観念したのであろうか。

「これで相打ちというところね。お察しの通り、小林敦子はアタシのところ、あずかっ

ているわ」

「ちがう。私は二人共、つかまえているのだから」

「この女のこと？ この女はただの運び屋に過ぎないのよ。ちょっと利用ただけだから生かそうが殺そうが、組織にとって痛くもかゆくもないわ」

ジャンヌが、うらめしそうに顔をあげて林美玉を見詰めた。

「それより、……」

口ごもりながら有明がいった。

「小林敦子を帰してほしい。この際、取引をしたいんだ」

「いいわ」

キッパリと答える。これでは、どっちが捕えられているのかわからない。有明にしてみれば、どんな犠牲をはらっても野沢洋子を取り戻したかったから、勢い守勢に立たざるを得ないのである。

「君等のアジトはわかっている。これから私も一緒に行こう。野沢、いや小林敦子は無事なんだろうね」

「そうね。マ、命だけは無事だろうよ。彼女は一度逃亡を企てたから、それ相当の刑罰を受けたけど、今頃はきつと元気になっている

よ」

嘲笑しながら言う林美玉を、有明は齒噛みしてにらんでいた。

何はともあれ、野沢洋子を救うまでは耐えに耐えなければならぬ。

林美玉はシャアシャアとして、言葉をつづけた。有明の申し出から、弱点を見透したからであろう。

「それも、アタシが無事に戻らなくっちゃあ手下は、あの女をいつまでも生かしておかないよ」

「いいとも。但し、その前に……」

有明はポケットから、万年筆様の麻醉ピストルをとり出すと、いきなり林美玉に向かって発射した。圧縮空気の力で飛び出した鋭い針が、防ぐ間もなく、彼女の胸に突き刺さった。蜂にさされたような程度の痛みにすぎなかったが忽ち気が遠くなって倒れてしまう。

しばらくして、林美玉がわれに返ると、彼女は有明のベンツの助手席にいた。車は七環を西に走っていた。

別に縛られてもいない。と、身を動かした途端、忽ち肉体の異常に気付いた。小林敦子が着けていたのと同じものを、下半身に装着

されていたからである。しかも、素肌にまといつく鎖はヤスリでなければ切れない程、頑丈なものだった。

「別に命を奪おうというのではない。ただ取引が終わるまで、保証として着けていて貰おう。約束を守らなかつたり逃げ出したりすると、いつでも無線で信管を押す。鎖を切つて引き抜こうとしても同じだ。いずれにせよ、君は、内臓から木ッ葉微塵となつてしまう筈だ」

ハンドルをさばきながら、おだやかに有明がいった。

ポケットのブザーが鳴り出したのは下目黒に来てからだだった。不思議なことに目標が向こうから近づいてくる。有明はベンツを道端に停車させた。暫くして行き違った一台のブレジデントから信号が発振されていることがわかった。信号音が急に大きくなって、方角が一八〇度変わったからである。忽ちＵターンして追う。

ブザーがコンスタントに鳴るので尾行が間違っていないことがわかった。

早朝だというのに、高速道路には相当の車が走っていた。尾行に気付かれる心配はなか

った。この電波こそ、野沢洋子の身体から発振されているのだと信じて、有明は一心にブレジデントを追った。

空港道路から蒲田の埋立てへ出ると、東京電力の埠頭の近所にまで来ていた。やっと停まった。

運転手風の男が出て来たところを、ものもいわずに麻醉ピストルが発射された。倒れる男の手から、茶筒のようなものが落ちて、地上に転がった。

有明の驚きは筆舌につくされなかった。何と、その茶筒から野沢洋子の電波が発振していたからである。思わず駆けよって拾いあげようとする。

「あぶないッ」

横つとびに林美玉が逃げ出した。それを、激しい視線で追いながら、封じ目のテープをはがして蓋をあける。

中味はいうまでもなく、可哀そうな野沢洋子の、切りとられた肉塊だった。鉛を底に流し込んでいるのは、大方、海中へ捨てようとしたものらしい。

余計な道草のため、再び下目黒の怪邸に着いたのは九時近くなっていた。

脊むし男をはじめ、手下たちが敵意をもって取囲む中を、麻醉銃を構えた有明は、林美玉を突きとばすようにして野沢洋子のところに案内させた。

奥まった一室に蛾のように血の気を喪った顔を覗かせて彼女は寝かされていた。もう手足を縛る必要がなかった。手術による洞穴は彼女の心にも大きな空洞を作ってしまったのであろうか。

「しっかりしろ、助けに来たぞ」
かけ寄ろうとする有明を釘付けにしたのはそれより早く洋子に身体ごと、かぶさった十号の動作だった。

彼女は叫ぶ。

「サア、ボタンを押してみな。私のからだと一緒に、この女も道づれにしてしまおうよ。それでもよかったらね……」

捨身の行動が部下たちを力づけた。ジリッ

と間合いをつめてくる彼等。絶対数では、はるかに優勢なのだ。
「武器をお捨て、有明。さもないとお前の女の命はないよ」

いつの間にか鋭いナイフが十五号の手に握られていた。そのナイフは、野沢洋子の細い喉元に触れている。

不敗の王者、有明もガククリと肩を落とした。構えていた麻醉銃の銃口が下る。

そのとき、かすかに洋子がいった。

「マスターいけません。私のために負けないで下さい。私はもう死んだも同様です。どうなってもいいのです。足手まといになるくらいなら……」

「いけないッ」

「しまった」

有明と十五号が同時に叫んだ。しかし、もうおそかった。

野沢洋子の可愛らしい唇からドツと鮮血が噴き出してきた。噛み切られた舌が吐き出される。

おとろえ果てた顔面に、みるみる死相がひろがって行った。

(未完)

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

告白小説

被虐の旅

由利美千子



「後悔してない？」

葉山が言った。

フロントガラスに粉雪が舞っていた。

運転しているままの姿勢で、葉山が私にたずねたので、私も彼の顔を片頬に感じるだけで、粉雪を見ながら答えた。

「いいえ」

それから又、しばらく沈黙が続いた。

車は北陸の海岸線にそって、北へ向かっていった。

「このまま大阪へ引き返えそうか？」

葉山の言葉は私の胸の奥にドキンと音をたてさせた。

恋がかなう……。その喜びにふくらんでいく胸だった。

「先生、御迷惑なんですか？」

私は自分の声がふるえているのをかくそうとして、ハンドバッグからハンカチをとり出すと、窓硝子を内側からふいた。しかし横の窓は外側の粉雪のために曇っていた。私は窓硝子を下へおろした。一瞬、さすような冷たい雪風が頬にあたった。

「先生が討厭なら、このまま帰ります」

窓硝子を上へあげながら、私はわざと彼の方を見なかった。

「僕は君を不幸にする。それが怖いんだ」

「不幸か幸福かは、自分自身がきめることです。私は先生と一緒にいるだけで幸福なんです」

「君は僕を知らないからだ」

「知りません。何も……。知りたくないんです。先生のお年なら奥さんもあるでしょう。お子さんもあるでしょう。でも、そんなことどうでもいいんです。私のそばに先生がいるだけでいいんです」

どうしてこんなにひかれるのか、私にはわからない。人は葉山を、三橋達也に似ているという。そんな容貌が私をとらえたのだろうか――。

伯母の経営するスナックバーには毎日、大勢の客がくる。葉山も、そうした客の一人だった。先生とよんでいるが、職業ははっきりしない。十以上も年上の葉山にひかれているのは、私が早くに父を亡くしたからだろうか。いつの頃からか、葉山の来店を待つようになった。そして、気まぐれがいつまで続くかといわれながら、毎日、伯母の店を手伝ってきたのも、ただ、葉山に会いたいからだった。

会っても何もいえない。

彼も何も云わない。

葉山は、いつもひとりだった。ひとりでスタンドの片隅で、私の店では一番高いヘネシーのブランデーを静かにのんでいく。その孤独な影が私の心の琴線にふれたのだろうか。けれど、私は私の心の奥深く芽生えた恋を彼には、かくしていた。彼が私に関心をしめしてくれないのに、どうしてもそれをあらわすことが出来るだろう。

ただ一度、葉山が私をじっとみつめてくれたことがある。

恰度、去年のクリスマスだった。私は、自分でデザインしたニットのワンピースを着ていた。ハイネックの胸の真中に深い切りこみ

があつて、縄のように編んだ布が首を一巻きして、その切こみを下り、左右の乳の下を、まるで縄をかけられたような形に脇へつづいていた。肩から二の腕にかけても同じように布の分れ目を縄のような布が、幾筋か渡っていた。

彼はその服を見ると、ふと目をそらした。そして、まぶしいような目で、再び見てくれた。私は縄のような布にいろどられた私の肌が、いつもより白く見えるのを知っていた。白桃のような淡いピンクに輝いているのを、我ながら美しいと思っていた。

だから、彼が私の美しさをみとめてくれたのかと内心、誇らしくもあり、嬉しくもあった。

他の客と話している時、いつになく彼の目が私に注がれているのを意識した。そのくせ私が彼の方を向くと、すぐ視線をそらすのだった。

(まるで、少年みたいに初心^{うぶ}なんだわ)

私は思った。年上の小父様という印象は変わらなかったが、ますます好きになってしまった。純真さを、私はその瞳に感じた。

その日からだった。

彼が、私に好意をしめしてくれるのが解っ

た。好意というより興味といった方がいいかもしれない。しかし、客と経営者の姪の間ではない、もっと親しい目ざしをとりかわすようになったのだ。

「能登へ行ってみない？」

と、彼に誘われた時、私は夢かしらと思うほど嬉しかった。

伯母の手前、学校時代の友達が金沢へお嫁に行ったので遊びに行くということにして、彼のベンツに同乗したのだった。

○

粉雪は氷雨に変わっていた。

「本当にいいんだね」

葉山は言った。

「いいって……何が？」

「片山津で泊っても……」

「ええ」

「僕みたいな男と二人で泊るの恐くない？」

「先生を信じてます」

「僕が君を誘う時、友達で行こうと言ったから？ 年が離れているから？ 君はお嫁にくまで純潔にいななければいけない、僕はその点、大丈夫だと言ったから？」

私は答えられなかった。

私は葉山が私を愛してくれるなら、私のす

べてをあげてもいいと思っていた。葉山ほど私の心をとらえた男はいないのだから、私の愛のしるしを体で表現してもいいと思った。それに私は純潔ではなかった。

しかし、葉山が純潔と信じているのに、過去の男性の話は、しにくかった。

「とにかく君は、僕を何も知らない」

「先生だって、私を御存知ないわ」

「今夜、僕は僕がどういう人間か君にみせてあげる。その方が、君の不幸をくいとめられる。僕みたいな男に、君のような人が惚れてはいけない。傷の浅いうちに僕から離れたらいい」

そんな謎めいた言葉に、女心は納得出来ると思っっているのだろうか。むしろ、それは、油をかけて燃えさせる言葉に似ていた。

そして車は、うっすらと雪をかぶった片山津の宿へついたのであった。

風呂は部屋についていた。

「さきへ入りたいまえ」

葉山が言った。

「先生、おさきへ。さら湯は女の肌によくないんですって……」

「おや、随分、大人みじなこと知っているんだね」

「子供だと思っていりましたんですか？」

ハイミスの私を子供扱いする彼は、いったい、いくつなんだろう。

「じゃあ、さきへ入るよ」

葉山が風呂をあびている間に、夕食の膳が用意された。私は葉山の好きなヘネシーを小さな瓶に分けてもってきていたので、夕食にはビールを頼んだ。

夕食の膳は賑やかだった。北陸名物の蟹もあったし、フナの甘露煮は柴山潟の名物だと女中さんが言った。鯉のあらいや、うなぎも湖でとれる名産らしい。

葉山とかわって、私も風呂へ入った。

子供のように扱われた腹いせもあって、長い髪を洗い、伯母がよくやっている櫛巻きのように頭の上で束ねて宿の浴衣を着るといつもの自分が消えて、妙になまめかしい女盛りのような姿になった。

早春とはいえ空気は冷え冷えしていたが、風呂上りの肌には、むしろ快かった。

「ほう」

と、葉山は私の姿に目を輝かした。

「ああ、おなかすいた」

私は膳に向かったが、
「一寸、待ちなさい」

と、葉山は制した。

「今、女中さんが鴨鍋をもって来る。それでおしまいだから、鍵をかけて、ゆっくり食べよう」

「ええ、じゃあ、ビールのみましよう」

私は言ったが、

「それも、おあずけ……」

と、葉山は言った。

「意地悪！」

と言ったものの、私はまだ、本当に彼が意地悪をするとは思っていなかった。

湯上りで、のどはかわいていたが、ほんの一分か二分の辛抱だと思っていた。

しかし、女中さんが、小さな七輪の上にのせた大きな貝に入った鴨鍋を、めいめいのわきへおいてさがっても、彼は私にビールをのませてくれなかった。

「今日は君に、僕がどんな男かみてもらおう」
いうなり彼は私のうしろへ立った。

「さあ、手をうしろへまわしてごらん」

私は彼が何をしようとしているか、まだわからなかった。

言われた通りに

「はい」

と、片手をうしろへまわすと、

「そっちの手も……」

と、彼はいう。

「こう……?」

と、私は体操でもするように両手をうしろへまわした。私は遊んでいるような暢気な気持だった。

しかし、彼は私の両手を一つに握ると、いきなり、自分の丹前の上にしめていた腰紐を、私の手をうしろ手にぐるぐると縛った。

「あっ！」

と、私は、あまり意外なことに、驚いて、反射的に身をもだえた。

すると彼は私の浴衣の上にしめていた紐を、胸がはだけて、乳房がのぞきそうになった。私はそれをかくしたいと思ったが、すでに両手の自由はうばわれている。身をよじれば、衿もとは、かえってはだけた。

彼は半分、乳房がのぞいている私の胸に紐をまわし、うしろ手にくくった所と一つにすると、あまった紐を私の首にかけて強くひいた。私はのどをしめられるのかと、思わず仰向くと、彼は手の結び目を首のうしろへもち上げて首にかけた紐と一つにしてくくった。私はもう、ものもいえなかった。二の腕から

手首にかけて、神経痛というのはこういうのかしらと思うような痛みがおそった。

「僕はね、美しい人を見ると縛りたくなるんだ。こうして、縛ると、よけい美しくなる。けれど、これで君は僕にあいそがつきるだろう。だから、もうこれきりで僕から離れていくだろう。その方がいいんだよ、その方が君が不幸にならないですむんだよ」

私は何も答えられなかった。

ただ葉山の前に、自分の縛られた姿をさらしているのが恥しかった。

「鍵はまだかけていない。君が人を呼びたかったら、その室内電話でよぶといい。さあ、三分、待ってあげる。人をよばなければ、君は今日、ボクの思うようにさせてくれるという承諾になるんだよ。ただし、はじめの約束通り、君の純潔は守るよ」

葉山の言葉に私は室内電話の方をチラッとみた。しかし、両手を縛られているのに、それをどうやってかけられるだろう。

もし、かけられたとしても、胸もはだけた浴衣姿で、胸も首も紐でくくられた姿を女中さんに見られるなんて、そんな恥かしいことがどうして出来よう。

（けれど、これからどうしようとするのかし

ら?）

私は思った。

（何されてもいい。どうせ好きで好きで、これまで来たんだから、たとえ殺されたって本望なはずじゃない?）

私は私に言った。

（でも、彼は何故こんなことを……?）

私は、もしかしたら、彼が自分をあきらめさせるために、わざとこんな乱暴な真似をしたのかとも思った。まだ遊びの続きのような気分が残っていた。

けれど又、

「さあ、三分たった」

と、彼が立っていった部屋、鍵をおろした時、その鍵の音が妙に不安にひびいた。

首も腕も痛みが増していた。私は大変なことをしたように、室内電話を見た。かければよかったのだろうか――。

その気持が彼に解ったのか、彼も電話の方を見た。

「君が助けをよぼうと思えば、あの電話の通話器は足でだってはずせるんだよ。それをしなかったのは、ボクに何でもさせてくれるということなんだよ」

彼はいうと、スーツケースから細引をとり

出した。いつの間に用意してきたのだろう。

「さあ、ここへ坐るんだ」

彼は私の縄尻をとると、卓の前の座椅子に坐らせて、用意した細引でグルグルに座椅子へ縛りつけた。

「さあ、食事をしようね。君はビールがのみたいと言ってたね。ついであげよう」

彼はビールの栓をぬくと、私の前のコップへ注いでくれて、自分のコップへもついた。

「さあ、のみなさい」

のみなさいといわれても、座椅子にくくられていて、どうやってのめるだろう。

彼は、おいしそうにビールをのんだ。

「のみなさい」

もう一度、いわれて

「だって、どうやってのむの？」

私は、きいた。

「どうやってでも、のんでみるんだよ」

いわれて私は胸を前へかがめた。

座椅子の背は私の後手の結び目と一緒にくっついて前へたおれたが、私の唇はコップにとどかなかった。何故なら、首にかけた紐が後手の紐の結び目へギュウッとひかれているから、まるで亀の子が首をもちあげた形に、私の胸が卓にさわっても、唇はコップに近付

けようもなかった。

「いい恰好だね。もう一寸、いい恰好にしてあげよう」

彼は卓ごしに手をのばすと、私の着物の胸をひろげた。両方の乳房が丸出しになった。

「あっ！」

私はかくしたかったが、どうしようもなかった。

「ビールがのめなければ、何かお食べ。おながすいているんだろう」

いわれても、どう食べようもない。

「ボクのいうことをきかないと、罰をあげるよ。いいね」

彼は、おさしみの一きれに、ありったけのワサビをつけると、

「さあ、これをお食べ」

と、箸でつまんだ。

私は口をギュウとじていたが彼は片手で私の鼻を摘んだ。だんだんに息が苦しくなってきた。それでも私は口をとじていたが、とうとうたまらなくなつてあけた口へ、ワサビをまぶしたおさしみをいれられてしまった。

その辛さ……！

私は思わず、はき出した。

「何をする。そんなお行儀の悪いことをする

と、ただではすまないんだよ」

いうなり彼は箸のさきで私の乳首をはさむと、ギュウッとひねった。

「アッ、痛い！」

思わず悲鳴をあげると、彼はそれにかまわず、右左、右左と、交互にはさんでは、ひねるのだった。私は身もだえてその箸のさきのがれようとしたが、座椅子の背ごと、うしろペタンとのけぞっただけで、坐っている膝がくずれても、坐り直すことも出来ず、かえって胸を前へつき出した形で、彼の攻撃をさけるすべもなかった。

「かんにんして」

私というと、

「じゃあ、何でも食べるね」

と、彼はいう。

「ええ」

うなずくことも出来ない首の紐で、私は仰向いたまま言った。

「じゃあ、仲よく食事をしよう。食べられるようにしてあげるからね」

彼は座椅子の細引をといてくれた。そして首にまわした紐もゆるめてくれたので、ほっとすると、後手にくくった紐はそのまま、ほどいてはくれなかった。

「さあ、今度はビールものめるし、お料理も食べられるだろう。おとなしく一緒に食事をしたら、今日はこれだけで許してあげる」

「でも、どうやってのめばいいの？」

「それが工夫出来なければ、又、お仕置するよ」

「お仕置って、どんなこと？」

「そりゃあ、いろいろあるさ。ま、のんでごらん。のんだ方が苦しまないですむんだよ」

私の乳首は、まだ痛んでいた。これ以上、痛いことをされるのは恐かった。

私はビールのコップへ唇を近付けると、コップのふちを歯でくわえた。そして静かに仰向いてビールを口の中へ入れようとした。

冷たいビールは口のわきから、たらたらとあらわな胸にかかった。それでも、いくらかのむことが出来た。

「おかずもおたべ」

いわれて私は犬のように、皿の中へ首をつっこむようにして煮物を食べた。

そんな私の様子をみながら、彼はおいしそうにビールをのみ、お料理を食べていた。

「ボクって人間がわかったかい？」

彼は言った。

私は答えられなかった。

やがて、室内電話のベルが鳴って、彼がとると、食事がすんだら、寝床を敷きにくるということだった。

私はやっと、両手の紐をとりてもらえるかと思った。すでに指先まで、しびれていた。

「女中がくると、君はいじめられているというかもしれないね」

彼は言った。

「まさか……こんな姿みられるの、いや！」
私は言った。いつの間にか、髪もとけていた。

浴衣は肩にかけているというだけで、上半身は裸も同じ姿なのだ。その上、罪人のように後手に縛られて、犬のように、お皿のものを食べさせられた私の顔は汁で汚れている。そんな姿を、どうして女中さんの目にさらせるだろう。

「ま、一寸の間の辛抱だよ」

彼は立ってくると、卓の上にあったふきんを私の口につっこんで、宿のタオルで猿ぐつわをはめた。

「縛られているだけだったら、女中が来た時夫婦喧嘩をしてしまったということも出来るからね。一度、女中にマークされると、何度も室内電話をかけてきたりするんだよ」

私は（そうだ、そういえばいいのか）と思う気持と同時に、痛いような嫉妬を感じた。

（先生は私以外の女の人にも何度もこんなことをしたんだろうか。誰かその中の一人が夫婦喧嘩だといって助けをよんだのだろうか）

私は彼にひどいめにあいながら、やっぱり彼に対する思慕がそう簡単に消えるものではないことを知った。

（でも、ひどい……本当にひどい……）

そう思った。

彼は私の後手に縛った紐のさきを持って、私を風呂場へおしこめると、紐のさきを水道の蛇口へくくった。蛇口は低い位置にあったから、私は浴衣のまま濡れているタイルの上へ体を横倒しにしなければならなかった。もう湯上りの温みは消えていた。春が近いとはいっても氷雨の降る寒さである。くくられた痛さより、寒さの方が私を責めた。

「奥さまは、お風呂ですか？」

寝床をしきにきた女中さんが言っている声がきこえた。

私は足で洗い桶をかけた。カタンと音がしたが、それは入浴していてもたつ音である。「ごゆっくり、おやすみやす」

関西なまりの女中さんが襖をしめて出てい

く気配がした。

私は、とうとう助けを求められなかったと思うより、悪いことを見つからないで済んだような安堵を感じた。

彼が再び廊下に向いた扉に錠をおろす音がきこえた。

やっと温かい寝床に入れる。お風呂へもう一度、入れば温まれる。

そう思っている私を彼は冷たく見降した。

「君は、やっぱり助けをよぼうとしたね」

私は首を振った。猿ぐつわをはめられているから声は出なかった。

「桶をわざと鳴らしたじゃないか。さっきはもう寝かしてあげよう、と思ったけど、もう一度お仕置をしなきゃいけないね。君が悪いんだよ」

彼はいうと、水道の蛇口から私の結び目をと、別の細引でシャワーの管へつないだ。

私は後手に縛られたまま、その結び目を引かれるのにつれて、中腰になり、立上り、はては爪先立ちになった。

彼は、私がもうこれ以上は宙に浮くと思う程、足の指でやっとタイルにふれている程引きずり上げてから、シャワーにかけた細引のさきを、もう一度、下の水道の蛇口にゆわえ

つけて固定させた。

そして、いきなり、シャワーの栓をひねった。

「わあっー！」

私は思わず叫んだが、それも声にならなかった。

頭から冷たい水が全身を濡らした。

彼はシャワーの水が少し落ちるように栓をひねった。それは全身に滝のようにシャワーをあびるより冷たく、切なかった。

彼は私が荒い息をする度に胸が大きく波打つを見ながら、悠々と風呂につかった。

「いい湯だよ」

彼は私を見ながら言った。

「そうだ、猿ぐつわはもういらないね。とってあげよう」

彼がそれをはずしてくれた時、私は思わず言った。

「ひどいわ、あんまりだわ」

すると彼は微笑んで、

「とうとう言ったね。ボクの大好きな言葉を……。そんなにひどいかい？　じゃあ、こうしたら……？」

彼はバスルームにそなえつけてあったヘヤーブラシをとると、浴衣がぬげてあらわにな

っている背から胸、二の腕と、ブラシでこすった。

「ああ……あ、あ」

私は身もだえた。

「寒いだろう？　けれど、こうやると温かくなるんだよ」

私は、そのくすぐったさに息も出来ないほどだった。

「やめて……やめて……」

私は訴えた。

「大きな声を出すと、隣にきこえるじゃないか。又、猿ぐつわをはめようか」

「いや、かんにんして」

「どこが一番感じる？　ここかい？　こっかい？」

ブラシは皮膚を逆なでしていくが、私はもう声も出なかった。ただ、のどの奥を鳴らしてうめいた。

やっと彼が私を許してくれて、深々と風呂へ温まることが出来た時、私の体は快くなるよりさきに、その温かさを痛く感じたほどだった。

○

「昨夜は、ごめんね」

朝になると彼はやさしく言った。

純潔は守ると言った約束にこだわっていたのか、彼は二つ並べた寝床に入ると、すぐに静かな寝息をたてて寝込んでしまった。

私自身、もう何がおこってもいいと、投げ出すような気持で心配しなかったせいかな、すぐ眠りに入ったとみえる。朝、目覚めると、もう彼は一風呂あびたのか、さっぱりした顔をしていた。

「君にプレゼントするよ」

彼は私に紙袋を渡した。高級な店として知られている洋装店の名が入っていた。

私は中をあけると、

「まあ！」

と思わず感歎の声をあげた。

それはウールのケープだった。

「これ、私に……？」

「着てごらん」

私はスリップの上へ、はおつてみた。

昨夜、浴衣をぬらしてしまった私はスリップで寝たのだ。

「よく似合うよ」

彼は、いった。

（彼はやっぱりやさしい人なのだ。昨夜の行為は、私にあいそをつかさせようと思ってしたことなのだろうか）

私は思った。

（でもこんな高価なものを、わざわざ私にあわせて買って来てくれるなんて……。もし、これは離れるための記念だといわれたら、どうしよう。彼は私を傷つけまいとして、別れるつもりなのではないかしら）

私が、だまってしまったので、

「どうしたの？ 気に入らない？」

と、彼はきいた。

「いいえ、でも……こんなの頂いていいのかしら……？」

「いいんだよ。そのかわり、ボクと一緒に能登まで行くね」

「ええ、勿論ですわ」

「じゃ、顔を洗って、食事をすませよう。ぬれた浴衣は、お風呂場へおいておけばいい。ボクたちが立ってからでなければ、部屋はかたづけないから……」

そして、私たちは、服に着かえて朝食をとった。私は黒いウールレースのワンピースを着ていた。私の白い肌に黒がよく似合うことを知っていたからだ。今日は、その上に彼のプレゼントのケープを着られるのだ。長身の自分にそれはよく似合うだろうと思うと嬉しかった。

しかし、女中さんが朝御飯を片付け、勘定もすませて出ていくと、彼は私のワンピースの胸へいきなり縄をまわした。

「君はボクのとりこなんだ。いつでも、君は囚人のように縛られていなければいけないのだ」

彼は言った。

いつ、その縄を用意したのか気がつかないような素早さで、驚いている私はすぐに上半身を棒のように、ぐるぐる巻きにされてしまった。

彼は、その上からケープを着せてくれた。「ケープの下で、まさかぐるぐる巻きにされているとは、わからないだろう」

彼は面白そうに笑った。

私はハンドバッグをもつことも出来なかった。彼はスーツケースの中へ私のハンドバッグをいれてもってくれた。

私は廊下を歩きながら、もしケープの下に縄目に気がつかれたら、どんなに恥かしいかと、気もそぞろだった。

玄関には丁寧に係の女中さんの他に男の人も見送ってくれている。ハイヒールをはこうとしても、靴べらも使えない。足さぐりではこうとしたが、足がうまく靴にはまらない。

もしここでよろけたら、衆人の目の前に縄付の姿をさらすようになる。私はもう息苦しいような気持で、よけいに靴がはけなかった。

彼はそれに気付いたのか、私をささえるように身をかめると、靴べらをあてがって、私の靴をはかせてくれた。

女中さん同志が「まあ」という顔で目で合図しあっている。

(若い奥さん持つとサービスがいいわね)

(でもあの奥さん、なあに？ 随分、偉張っているじゃない？)

(まるで女王きどりだわ)

そんな視線に射られて私は悲しかった。

彼こそ王様なのだ。私は、いましめられたドレイではないか。これから何をされるのかわからない。美しいケープは私の縄目をかくすためのものだったのだ。そして、その縄が身をしめる痛さよりも、宿を出るまでの私の心の苦痛はいいようないものだった。

宿の前の広場においてある車に乗るのさえ私は私の手でそのドアをあけることも出来ないのだ。女王のように傲慢に突っ立って、彼がドアをあけるのを待っている。いましめられた女王……。誰がそれを知っていたらう。私は、それが悲しく、つらかった。

「金沢を見物していこうか？」
車を走らせながら彼が言った。

「この姿で……？」

「そうさ」

「いや！ お願い。縄をといて」

「夜、寝る時だけといてあげるよ」

「こんな恰好で金沢でおりのいや」

「どこでも同じじゃないか。君はケープの下でボクのドレイなんだから……。なんなら裸にして縛ってもいいんだよ。それでもケープを着ていればわからない」

「いやよ、裸だなんて……」

「そうだ、裸にしてやろう」

「いや！ かんにんして」

「じゃあ、兼六園をそのまま見物しよう」

私は裸にされるくらいなら、このままの方がましだと思った。

けれど、兼六園の中は旅館の玄関よりも人目が多かった。

私は池を渡りながら、石をつなげた橋の上で転ぶことを恐れた。両手を縛られているということが、足元のバランスをこんなに危くかしくするものだとは知らなかった。

彼はうしろから、それを面白そうにみている。

縄付の縄尻をとりながら、囚人を歩かしているのと同じだった。彼だけがケープの下私の姿を知っているのだ。子供の遊ぶ毬が私の足もとへ転ってきて、私は拾うことも出来ない。

私はラセン状に上り坂になっている道を歩きながら、ついにつまずいてしまった。幸いそのあたりに人影はなかったが、私はもう、自分のみじめさがたえられなくなった。

「ねえ、車へ戻りましょう。能登へ行くのがおそくなるわ」

私は言った。

「今日中にどこまで行かなければいけないというものではないし、急ぐこともない。ついでに成巽閣もみていこう」

彼はいう。私はもう靴をぬいであがる所へは行きたくなかった。それをいうと、

「ボクのいうことをきかないと、あとでお仕置が待っているんだよ。いいね」

と、いう。

何でもいい、私は車へ戻りたかった。

名所も旧蹟も、囚人のように縛られて歩かされていては、ただ、人目をおどおどと、本当の囚人のように恐れるだけなのだ。

「残念だな。ま、帰えりによるか……」

彼は車へ戻ることを同意してくれた。

金沢を出ると能登半島はすぐだった。今でこそ半島を横断して外浦へ出られるが、昔は船で海から入ったのか、俊寛が流された鬼界が島というのは能登のことだという伝説もあるという。

車は単調な山道を走っていった。

彼は無言で右左を見ながら車を走らせていたが、県道からそれて車の入れるぐらいの道が繁みの中にあるのを見ると、その道へ折れて車をとめた。

「一寸、外へ出よう」

私を引張り出すように車をおりると、私のいましめをといてくれた。

私はほっとして、大きな溜息をついた。風が小枝を鳴らして、荒涼とした感じの藪だった。春は、まだ遠く思われた。

「さあ、服をぬいで」

彼は言った。

「お仕置が残っているんだよ」

「でも……」

「ぐずぐずすると、お仕置はふえるんだよ」

私は仕方なく服をぬいだ。鳥肌立つような風が吹いていた。

彼は自分の手で私のスリッパのたすきを下

へずらすと、私の手を後手にくくった。そうしておいてスリッパを下へおとし、パンティもはずしてしまおうと、私の腰のまわりを赤い腰巻でおおった。

そして、今度は本格的に縄をかけるのだった。

私は絵で見たことがある昔の囚人のように首縄をかけられ亀甲型に縛られてしまった。その肩に長い髪が海草のようにかかった。それは浮世絵で見た海女が、縛られているのと同じような姿だった。

「いいね、ここで一寸可愛がってやりたいがさがおたのしみだ。車へ戻ろう」

彼は言った。

「君は素直だね、可愛がってあげるよ」

彼は私の髪をくるくると手へまいて引張った。

「あっ！」

私は横向きに体をエビのように折った。

そのままの姿勢で、ヨロヨロ、ヨロヨロと車まで引きずられていったのだ。

車へ坐らせると、彼はケーブをかけてくれた。そしてボタンをはめてくれて

「よく似合うよ」

と、微笑むのだ。

縄はドレスの上と違って肌に痛かった。しかし私は又、仲よいアベックのドライバーのように彼の車に身をまかせるとより仕方ない。羽咋を通りすぎると、能登の海がどんよりと鉛色の空の下でうねっているのが見えてきた。松本清張のスリラー小説の舞台になった能登金剛も近い。

彼はいったい何をするつもりなのだろう。

車の中は温かったが、海は荒れて重く厚ぼったい波が人でものみこんでいるような、無気味な色で岩へぶつかっていた。

（あのゴリゴリした岩が私の責道具になるのだろうか）

私はただ、葉山を愛してこの旅をたのしみに来たのに……。

誰が腰まき一つの裸身で、囚人のように縛られていると想像出来るだろう。

でも仕方ない。私は恋のとりこなのだ。そして、それは、彼のとりこでもあるということなのだ。

それにしても、手が痛い。

何がはじまろうとしているのか。

私はただ、荒れ狂う海をみつめていた。

怪奇の文学

沼 正三「家畜人ヤプー」

単行本公刊さる！

とやま
かずひこ

昭和三十三年十二月号から、同三十四年六月号に及ぶ十九カ月間、KK誌に連載されて當時たいへんな評判を呼んだ、鬼才・沼正三の名作「家畜人ヤプー」が、こんど一冊の本になった。

すなわち、二月十日初版。版元は、東京の都市出版社という、耳新しい発行所である。

十年をすぎる歳月は、本誌の読者構成をも一変させたであろうが、その前、デラックスな特大号が連発されるうちに突如休刊。そして、そののち何カ月かを経て復刊された本誌は、タイトルも発行元も編集者も、まったく変わらないが、最盛期のおよそ三分の一のボリューム。白表紙に、黒一色のイラストという可哀想なものであった。

しかし、復刊早々に連載されはじめたこの作品の熱っぽさは、その外見の貧弱さを補って余りあるものがあった。

イース帝国という空想世界を描き、その国では、白人の主権者の足下に、あきらかに、日本人を想像させる、「ドレイ「ヤプー」」が、

酷使されるストーリーだ。ざんねんながら、私の貧しい筆力では、この現在の一流のSF作家に勝るとも劣らない鬼才の、一片だに紹介できないが、実は、この小説は当時、作家三島由紀夫が注目し推奨したと伝えられる。

(ついでながら、こんどの書物では、評論家の奥野健男が解説しているが、文中「三島由起夫」と誤まって書き、それがミスプリントでなく筆者の誤記であると思えないのはあまりにおそまつである。さらに言うなれば「家畜人ヤプー」とKK誌は切っても切れない間柄にあることは識者のすべてが認めるところ。もちろん解説者も、この小説の母胎をハッキリ「奇譚クラブ」と紹介しながら「出版元は関西の方にあり、終わりの頃は……」と、その存在を過去のものとするような点はいへんな手落ちである。解説者も、自から言うとおりの、KK誌の熱心な購読者であったそうだから、せっかくの解説にウソを書かれては困るので、いづれ再版の機会には、訂正することを忠告したい)

解説者のミスはミスとして、三島由紀夫氏・沢村竜彦氏など高名な作家がみな、この作品に注目していたとは感慨無量である。七、八年前に、中央公論社から出版が企画され、ゲラまで出来ながら、なぜか公刊が中止されたなど、とにかく話題を招く作品である。

さて、沼正三とは何者か。

実は、私事にわたるが、私自身も、十年前沼正三の書いた随筆について、ささやかな情報を送り、折返し返書を受けたことがある。

五ミリ角の、まったくコクメイに書きこんだ、行き届いた文面だったが、彼はそのなかで、自分の身分は追究しないほしい。あくまで沼正三のマスクで、交際したいという意味の内容であった。ただ言えることは、その筆跡は、きわめて実直な、教育者という印象を与えるものであり、高級公務員か、エンジニアのにおいをさせるものであった。

特筆すべきことは、その後、作者の海外移住説や「彼は完全にペンを折った。作者としての沼正三は、自から蒸発した」という説もあったが、今回の著書では「さて、ここに発表された『家畜人ヤプー』は『奇譚クラブ』に二十回連載され、未完のまま中絶した作品に『全面的に手が加えられ、かなり変っている』とあり、また奥付には「著者との諒解により検印廃止」とうたってある一事である。

著者との諒解云々は、代理人でも可能だか

らよいとして、「全面的に手を加え」るのは絶対に沼正三以外にはできず、また許されない行為である。

とするならば、やはり沼正三は、健在なのだろうか。そして、先には「血と薔薇」誌で一部が世に出され、いままた一本にまとめられて公刊され、またまた物議をかもすかもしれない情勢を目前にして、一人、いたずらっぽく笑っているかもしれないのだ。

沼正三とは、そも何者か。

名のある小説家ではないか。批評家かもしれない。高名な進歩的の大学教授だ。いや会社の重役か地位のある官吏で、例の編集者さ。いや、そうではなく検事か、判事が秘密に反逆的に書いているのだろう。作者は案外、澁澤龍彦か三島由紀夫かも知れない。ひょっとすると、奥野健男ではないか、ともいわれたことまである。その上に埴谷雄高の推理も加わり、外人説から未来人説、宇宙人説にまで発展、しかも作者沼正三は、この世に不在の、幻の作家にされてしまった。……作者は、老人か女性か、子供か、大学者か、裁判官か、医者か、盗賊か、乞食か、外国人か、有名な文学者か、無名の作家か……解説者の奥野健男は述べているが、とにかく、この作者のナゾは、まったく伝説となった観がある。

その筆力からみれば、芥川賞ものだと言われ、いや直木賞だよ、という評価があるが、

むしろやはり、ここは、しばらく、沼正三には天界に住んでいてもらったほうが、この作品のイメージには、ぴったりくるのかもしれない。

さて、この大作を数字的にみてみよう。

一ページの字数はギッシリ一〇〇〇字。

正味四一〇ページ（二十八葉のイラストをのぞいて）字数は、じつに四十一万。四〇〇字原稿用紙にして一〇二五枚。しかもなお、完了に至らず、作者のいうとおり宇宙空間の果てを求めるがごとく、ザ・エンドは、永遠に來ないことを暗示する大力作なのだ。

このぼう大な作品、しかも発表当時は、營業的にさしてペイしなかったろうし、反対に反日本人的な誤解を招きやすいおそれのあったものを、危険をおかして一カ月の休載もなく、のせ通した、KKの編集部の度量と、勇氣と執念は、ほめても、ほめつくせるものではないだろう。

そして、今回の出版では、前述の奥野健男金井美恵子両氏の解説「『家畜人ヤプー』——伝説——奥野健男」「悪夢と汚穢の反吐的世界——『家畜人ヤプー』について——金井美恵子」の二解説が、この怪作出現の裏話を語って興味がふかい。

さらに付記すれば、奥野健男は「今日（奇譚クラブ）は古書市場で揃いなどもし出れば天文学的相場を示している」と、本誌の文献

価値を高く評価しているのである。

おわりに、「家畜人ヤプー」とは、いかなる文学か、若い読者に説明するには、三島由紀夫氏が奥野氏に語った評言を引用させてもらえば、

男たちが、自分の体を変えられて女の靴の下敷人間や、便器人間や、イスや寝台人間になって女性によるこんで奉仕している。これはマゾヒズムの快樂の極致。全くおそろしい——。

さすが当代の高名な文学者。ズバリそう言っているという。言い得て妙。これいじょう私などが、くどくどしく、つけ加える必要はないだろう。

忘れてならないのは、名もなき投稿家としてスタートを切った作者、沼正三が、「ネクトール」という甘美な語を、われわれに贈りそして、地獄の文学ともいふべき『家畜人ヤプー』の一篇をのこして、スイ星のごとく宇宙の彼方へ飛びさったのだが、もしも、KK誌がなかったら、あるいは、この力作も世に出なかったかも、と思われるのだ。

おそろしい被虐と汚穢を、これほど美しく表現した文学は、いままでになかった。

怪奇な文学作品として、本篇を生んだKK誌の存在価値は、まったく偉大である。一読をすすめたい。

切腹百年史

女性篇

(その五)

通弘康中



一三 ひょうたんから駒

むかしから、狂言自殺というのは少なくない。しかし同じ狂言自殺でも、女が腹を切ろうとまでしての狂言は珍しい。それが本当に腹を切ってしまうところまで行くのは、更に珍しいであろう。

筆者が少年のころ、上級生の中に、腹ぐらい切れんようでは男でない。と切出し小刀で腹を切る真似をしてみせた。夜になって湯屋でシャツを脱いだとたん、彼は気絶した話がある。腹をうすく切ったとみえて、シャツが血まみれになっていたのである。

少年にはありそうな話だが、少女にも、そ

の例があつて、壬生三郎氏によると、大正元年三月二十二日、大分県の小学生、吉〇トラ(十三才)がナイフで左の腹を切つて未遂事件を起こしたのが、この一例である。本当に腹を切つて死のうなんて気は毛頭なくて、思はず力がこもりすぎたのだろう。

これが大人となると事情も複雑で、昭和四年十月二十二日の夜半、大阪市内で二十三才の商家の妻が夫婦喧嘩の最中に、彼女の兄が仲裁に入つてかえつて夫との喧嘩に発展、今度は彼女が止め役に廻つた。

男二人は勢いがついてとまらない。とうとう彼女は短刀を持ち出して、腹を切る真似をしてみせても、男たちは見向きもせず渡り

合っている。つい彼女も本気になったかして本当に腹を切つてしまい、生命危篤とあるのは哀れである。

真似が昂じてまことの女腹切りなんて云うのは、まずこれくらいのものである。

一四 結核を苦にして

今でこそ、ストマイやパス、ヒドラジッドナイアジッドと、結核の化学療法剤が沢山出て、不治の病いではなくなったが、遠く江戸のころは労咳、明治に入つては(不如婦)の浪子ではないが泣いて血を咯くブラブラ病いと云われ、肺結核は死神さながらの猛威を振るつたものである。

経過が長いだけに、家人も本人もやりきれず、本人は厭世心が強くなる。家庭不和をも招く。せめて死にぎわぐらい花やかに、と思うのかして、結核を苦にしての女の腹切り沙汰は人妻には少なくなかった。

たとえば大正十二年三月十六日午後、家人の不在を見すまして商家の妻が切腹した例もある。二十一才の桑○道子がそれである。

寝衣のまま双肌ぬいで、恐らく嫁入道具であったのだろう短刀で、三度び左脇腹を突き損じ、四度めに臍窩の真上に一寸近く突込んで、三寸足らず一氣に右へ、丁度右の乳下までかき切ったのちに、みずから咽喉に止どめを刺して果てたものである。

明治四十二年八月十四日午後二時ごろ、神奈川県下では人妻の井○栄（二十八才）が剃刃で胸から腹へかけ十文字にかき切ったのも春ごろから肺病にかかり、癒らぬのを苦しめていたのが原因で、切腹後、手当を受けたが翌十五日には危篤となって、警察へ届け出が出ている。

幸い戦後は、新薬の発達で肺結核を苦の切腹はほとんど例がなく、病気が原因なら、ノイローゼによるものが圧倒的になった。

もっとも、自殺という現象自体がノイロー

ぜ的だから、当りまえのことかも知れない。

一五 精神異常者と切腹

前述の如く、自殺は精神異常の所産と見る向きも多いが、自殺寸前までは正常に近く、発作的自殺企図において異常とみられるものはともかくとして、完全に異常を来たしていて、自殺、特に切腹したという例もなくはない。

たとえば昭和八年九月二十日、静岡県下で自殺した農家の娘、岩○とよ（二十六才）は燥う、つ、症の気配があり、家人も監視を怠らなかったが、とうとうこの日納屋で縊死しているのを発見した。腹部が血に染まっているので検ためてみると、下着をぬぎすて肉切包丁で臍窩の約一寸下を浅く一寸五分ほど、ついで更に一寸足らず下で腹を深さ一寸、長さ三寸かき切り、左乳下を寝衣の上から二度まで刺した。しかしなお死ねずに縊首したものと判明した。

精神異常者ではないが、腹を切ったのち縊首して死んだ例では、明治四十三年八月四日長野県下で、宮○みどり（二十三才）は年子を恥じて桑切包丁で腹を切り、乳を刺しても死ねず、縊首して目的を達している。

切腹だけで死に切れず、更に他の手段で死ぬという完遂者の例には、昭和十二年十二月十五日、東京の板橋区で切腹した、三十二才の人妻の例がある。

彼女は精神異常から自殺を企図し、西洋剃刃で上腹部を、やはり二文字にかき切ったが治療を受けたのち、轢死をとげた。強度の自殺欲求からと云える。

精神異常者で大きく腹を切った例では、明治四十四年七月十八日、久留米市で女中の大○ふゆ（二十才）が、薄刃包丁で八寸も腹をかき切っている。

また深く切った例では、大正八年一月二十六日、山梨県で早○八○野（二十七才）がやはり出刃包丁で、大腸があらわれるほど腹を切り、背へ突き貫いて死んでいる。

戦後は、精神異常というよりもノイローゼなる言葉で片づけられるのが多いなかに、はっきり精神分裂症が原因のものもある。

たとえば昭和三十六年五月、広島県下で二十才の娘さんが刺身包丁で腹を切って果てているのがそれである。

ノイローゼというのは便利？ な病名で、自殺者の相当数がノイローゼで片づけられて

いるが、本当はその自殺企図者をノイローゼに追い込んだ原因の追求がキャンペーンされるべきだと思うのは間違いだらうか？

昭和三十九年一月三十一日、名古屋で母親の不在中に、刃わたり十五糎の出刃包丁で切腹して死んでしまった、二十三才の娘さん。

一片の遺書もなくて、ノイローゼのためとなっているが、生前、母子家庭、それも母ひとり子ひとりで、どんなことがあっても生き抜こうよ、自殺は負けよ、と母親に云い云いしていたという。そんな娘さんを、切腹という悲痛な運命に追い込んだものは果たして何だったろうか。

一六 まぼろし？ の事件例

先ごろ鳴海大介さんから頂いたお便りに、こんな三つの例が記してあった。

A 昭和五年前後のことだったと思う。

西宮か尼崎かで、三十四、五才の女が路上で五、六才くらいの女児二人を残したまま腹一文字にかき切り絶命しているのを通りがかった人が発見した。

原因は、病弱と男運の悪さに世をはかなんだものという。当時、大阪毎日新聞に四段ぬきの大見出しで報道されていたと

記憶している。

B 同じころ、神戸市灘区福住通の自宅で

人妻が腹一文字にかき切って生命危篤。病院で加療したが翌朝死亡。

大阪朝日新聞か神戸新聞に報道されていたと思う。

C やはり昭和十年までの事件。

大阪の料亭か待合の女将が、仏壇の前で切腹自殺をとげた。原因はヒステリーが昂じたものと記憶している。紙名不詳。是らはいずれも正確な年月日が不明なので検索するに至っていないものばかりである。

この昭和も戦前期には筆者は神戸に居て、大阪朝日、大阪毎日、神戸、神戸又新の各紙を交互に、又は何れか併読をしていたから、こうした事件も続んだはずである。しかしどうしても思い出せないのが残念である。もっともそのころは学校第一で、こうした研究に携わるとは夢にも思っていなかったから、当然読み捨てていたのだったろう。

かえってラジオで聞いた浪曲やラジオドラマ、小説の朗読などでの切腹の表現の方が、うろ覚えになっているくらいのものである。ところで他にもこうした年月日の不詳な、記憶に頼った事件例は幾つか報告されていて

序に次に引いておこう。

たとえば池田敏夫氏「自殺の手段としての女性の切腹」(本誌28年6月号)から――

氏は「資料は戦災で焼いてしまいましたので、今は唯記憶に残っている数例だけ」として十余例を報告しておられるが、

A 尾久・商家の娘(二三才) 剃刃で腹一

文字、頸動脈切断

この例、池田氏は昭和九年ごろとしておられるが、原因が「丙午を苦にしての自殺」とあり、さすれば丙午の女性が二十三才になるのは昭和のごく初期のことと、きっと昭和三年ごろではないかと想像される。

B 伏姫をそのまま妊娠五カ月の腹を剃刃

で真一文字に切った娘(十七才)が私の知っている処では一番年若だと思えます

C 請地(向島) だったと思いますが妹娘

(二二才)がその情夫の結婚を悲観して式の当日短刀で腹を切って苦しんでいるのを発見した姉娘が傷口を晒でしっかりとくくり、車へのせて男の家まで伴ったのがあります

D 結婚と云えば、すっかり花嫁衣裳をつ

けて式場から脱けだして、人気のない場所へ逃れて衣裳の裾をまくり上げて、腹

を切った娘があります

以上が池田氏の報告のうち、全くその検索のすべを見出し得ぬ事例である。

一方、故須藤律夫氏の「新聞に現われた切腹の種々相」（本誌29年11月号）によると、次のようにいずれも戦前の実例を記憶により二例あげておられる。

A “豆腐屋の女房が腹一文字——”なる表題の下に、都内四谷区居住、豆腐屋某の妻（四〇才位）が、夫の外出中切出しを以って腹部を真一文字にかっ切り、大腸を露出して苦悶中を、外出先から帰宅した夫が発見、抱き起こして手当したが間もなく絶命。原因は確か病苦を嘆いての結果だったと記憶している。

B 痛ましい新妻の切腹事件で、見出しは忘却してしまったが、矢張り都内某所に於て、新婚後間もない肉屋の若妻（二〇才位）が、或る朝店先に於て、肉切包丁を以って男も及ばぬ美事な割腹。

原因は、夫と舅との仲に入りうまく行かず、所謂、愛情の葛藤からだったように記憶している。

Aは用器が偶然鉛筆等けずるささやかな

小刀であった点、Bはヒロインが幾多春秋に富むうら若き女性であった点など、そんな事から強く私の印象に残っているのかも知れない。

以上、故須藤氏のレポートである。この両氏の文章に出てくる例は大体関東中心で、片岡政則氏が学生時代、上野の図書館でずいぶん検索されたのだが、是らは逸漏のままであるのは残念だ。

誰方がご在知の方があればレポートをお寄せ願いたいものである。

ともかく、しかし、こうして新聞に出たものは一応誰かの眼に触れて、不正確でも伝わるし、信憑性がある。更に遺憾なのは、記事にされる段階で伏せてしまわれるものが少なくないことである。

たとえば昭和二十三年ごろ和歌山県下で未亡人（三〇才くらい）が、生活の悩みと他に事情があつて、亡夫を追うに切腹を以てした。幸か不幸か手当が届き彼女は助かったが、退院後、更に彼女は、生きていられないと決心堅く、今度は着衣もほとんど脱するほど肌おしぬいで存分に腹かき切り、とうとう絶命してから発見された。

また、愛知県下では若妻（二〇才くらい）が、家庭の悩みから婚家で切腹、入院加療しほぼ全治に近かったのに、思いつめるあまり傷口をかき裂いて、とうとう悲痛な死をとげた。

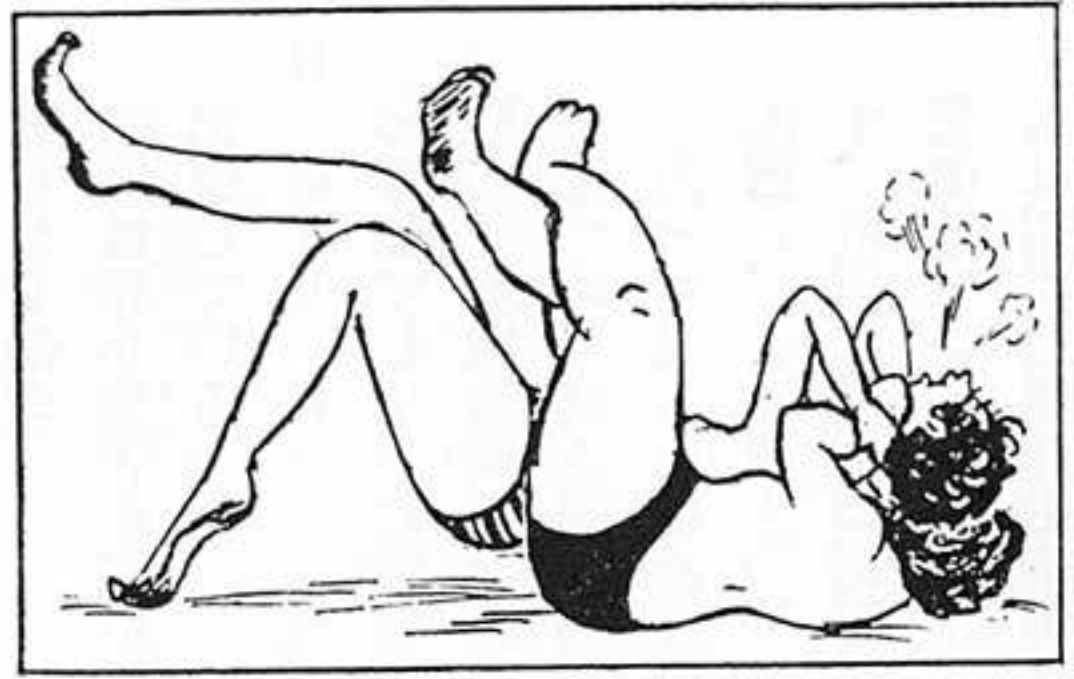
是らは、いずれも新聞に報道されなかったもので、前者は新聞の紙面が狭い時代だったから仕方ないとして、後者は富家であった婚家の申出で、新聞報道が閉塞されたとも云うことである。

戦時中も両方の事情、つまり紙面がない、戦時意識の低下を招いてはならぬ、などの理由からであろう、伏せられた事件は少なくあるまい。是らの悲愴な最期をとげた女人の魂は果して今日、済われているのであろうか。

血の墓碑銘とも点鬼簿とも云うべき拙文は彼女らの魂を少しでも慰め得たら、との意図をも併せ持っているのであるが、そうした努力は全く無益なのであろうか。——ふと冬空の風花を見て窓近くそんなことを思うのである。

なお次回は百年史を休ませて頂き、外人の“ハラキリ観”について書いてみたい、と思っている。

懸賞入選・女斗美小説



(二十)

弓枝夫人と毬子夫人の決斗は、なかなか勝負がつかず、また振り出しに戻った形だが、二人共さすがに疲労困憊して起き上れない。だが考えてみれば無理もない。いくら彼女たちが、毎日のような相撲に慣れているとは言え、今までこんな長時間のレスリングをさせられたことは、一度だってなかった。それも彼女たちが未だかつて経験したこともないハレンチな死斗の連続なのである。しかも、それこそ蒸風呂のような部屋の中で斗わされているのだ。これは明らかに、女性の体力の

ふた　　り　　妻

(最終回)

芦浦素舞夫 (カットも)

限界を遥かに超えたものだった。

『おいっ！ お前たちは俺の妻にはなりたくないのかっ！ まだ勝負は、ついてないんだぞ。早く立てっ！』

疲れ果て畳の上にぐったりしている夫人たちの頭上に、無情にも好造の雷が落下した。

夫人たちは、ハッとして我に返った。

△そうだわ。とにかく相手を完全に屈伏させない限り、幸せにはなれないんだわ▽

お互いの胸の内に、相手に対する嫉妬と憎悪の焰が激しく燃え上った。ムックリと身を起こした夫人たちは、坐ったままの姿勢でムンズとばかりに組み合った。まったく恐るべ

き女の執念ではある。

弓枝夫人と毬子夫人は、畳に両膝をついたまま、お互いに相手を搦じ伏せようと懸命だった。毬子夫人が右手で弓枝夫人の首を巻こうとすれば、弓枝夫人はこれを嫌って左手で防ぎ、上背にモノ言わせて逆に毬子夫人を搦じ伏せようとする。これは坐り、相撲と同じく上半身だけの争いなので、腕力があるか、上背のある方が有利である。

彼女たちは、お互いに相手の肩口を掴んだり、髪を引っ張ったりして、悲鳴を上げながら必死に争った。もうこうなると、レスリングと言うより寧ろ、喧嘩に近かった。

弓枝夫人と毬子夫人は激しく揉み合いながら、いつの間にか畳の上に立ち上っていた。斗志に勝る毬子夫人は、右手を伸ばしてシャ

ニムニ弓枝夫人の首を巻こうとする。だが弓枝夫人は「そうはさせじ」と左手でこれを防ぎ、二人は手四ツの体勢に渡り合った。お互いの両掌をガツチリと組み合わせ、凄まじい形相で相手の顔を睨みつけながら、ハアハアと吐く息を荒く、満面朱を注いで、力の限りを尽して凄まじく争う……。毬子夫人のムツチリした短い腕と弓枝夫人のスラリとした長い腕の、四本の腕がブルブルと震えている。

まさに力と力の対決だった。しかし背の高い弓枝夫人も、確かにリーチにおいては遙かに優っていたが、力競べでは、太った毬子夫人には到底、敵わなかった。力に勝る毬子夫人は、長身の弓枝夫人が、左手で必死に防ぐのも構わず、その長い腕を、はね除けるや、伸び上るようにして遂に右手を彼女の首に巻きつけて抱え込んでしまったのである。これぞ毬子夫人得意のヘッド・ロックだった。

弓枝夫人は、何とかして首を抜こうと焦ったが、毬子夫人は、ガツチリと抱え込んでこれを許さない。こうなると弓枝夫人は、止むなく腰を落として相手に喰い下るよりほかな

かった。だが毬子夫人の方も、直ぐには攻勢に出なかった。彼女は、フウフウ肩で大きく息をしながら、様子を窺っている。

そうだ、毬子夫人もすっかり疲れ切っているのだ。しかし、疲労の度合いは、弓枝夫人の方が遥かに大きかった。何しろ、自分より十一センチも背の低い相手から首を抱え込まれ、その長身を、ほとんど直角に近いくらいに折り曲げて、苦しい喰い下りを余儀なくされているのだ。弓枝夫人は、自分の首に巻きついている相手の太い腕を懸命に外そうとするが、顎にガツチリと喰い込んでいたので、ちよつとやそつとでは外れそうにもない。それどころか、逃れようとすればする程、逆にグイグイ締め上げてくる。それは、まるで万力のように強力なヘッド・ロックだった。

毬子夫人と弓枝夫人は、組み合ったままジツとして動かない。真夏の昼下り、庭では油蟬が騒々しく鳴き立てていたが、この部屋の中はシーンと静まり返っていて、彼女たちが決斗しているのが嘘のようだった。だが静かな裡にも、彼女たちの激しい息使いが却って殺気を感じさせる。

毬子夫人も弓枝夫人も、全身それこそ汗みどろだった。肥満体の毬子夫人はもとより、

痩せている弓枝夫人の方もヒドイ汗だった。もともと彼女は、痩せているくせに、多汗症ではあったが、いまはヘッド・ロックで苦戦しているので、余計にひどかった。長身の弓枝夫人の背中から、太腿から、大粒の汗が、畳に滴り落ちる。相手の右腕の中に抱え込まれているその首筋も、汗でヌルヌルして滑りそうだった。相手の太い右腕の間から覗いているその顔にも汗が噴き出し、眼の中に容赦なく流れ込んでいる。兎に角、ひどい汗だ。

だが、それにも増してひどいのは、彼女の足の裏だった。その十文半の大きな足の裏は彼女が足を動かす度に畳にペタペタと音を立て、畳が引っ張り上げられる程である。思わず好造は、彼女たちの足元に目をやった。そこには、彼女たちの大小、四つの足が同じ方向を向いて縦に並んでいた。

畳にドッシリと踏んまえた毬子夫人の九文半の幅広い足は、その太く短い拇指が畳にグツ！と、めり込みそうで力強い感じを受ける。これは彼女が拇指に相当、力を入れている証拠だ。これに比べて弓枝夫人の十文半の幅の狭い足は、その細長い拇指が逆に上に反り返っている。なかなかスマートなポーズだが、あまり力の入っていない感じだった。相

撲などの格闘技では、足の裏の接地面積の広さと、拇指の力の入れ具合が、その優劣を大きく左右するのだ。

ハハハア成る程、毬子の奴、足は九文半だが横幅が広いので、相撲は強いわけだ。それにしても弓枝の奴、十文半の大足のくせに弱いなんてダラシないな！

好造は、彼女たちの足を見比べながら、そう思った。だが当の弓枝夫人は、今はそれどころではなかった。何しろ、相手の太い腕でヘッド・ロックをかけられて身動きも出来ないのだ。首を締めつけられている苦しさもさることながら、彼女がたまらないのは、毬子夫人の腋臭の臭いだった。相手の右腋深く首を抱え込まれているので嫌が応でもそのくさい臭いを嗅がされるのだ。まして毬子夫人も先程からの激しいレスリングで、ひどく汗をかいているので、その臭いが、いつもよりさらに強烈だった。ただでさえ、吐き気を催すほどの嫌な臭いなのに、ヘッド・ロックで首を締めつけられた上に、強制的に嗅がされるのだから、全くたまったものではない。

二重の苦しさに耐え切れなくなった弓枝夫人は、遂に反撃に転じた。彼女は、長い腕を伸ばして毬子夫人の太腿を掬い、足取りで相

手をヒックリ返そうとした。だが、毬子夫人は構わず、逆に右から強引な首投げを打って攻めて出た。

彼女たちの動きは、忽ち静から動へと一変した。太った毬子夫人は、長身の弓枝夫人を一気に首投げで倒そうと強引に攻めたてる。弓枝夫人は、もはや足取りどころではなく、倒されまいと相手の太い腰に抱きついて耐えるのが精一杯だった。だが毬子夫人は、攻撃の手を緩めず、弓枝夫人を引きずるようにして二度、三度と立て続けに首投げを打った。弓枝夫人は、呻き声を上げながら、倒されまいと必死について廻る。

忽ち、狭い部屋の中に、彼女たちの足音がドタバタと入り乱れた。中でも、畳にペタペタと音を立てるのは、弓枝夫人の足の裏だ。彼女たちがグルグルと廻るたびに汗がパツ！と飛び散って好造の顔にかかる。まさに凄絶極まる攻防戦だった。興奮した好造は、『毬子。首投げだ首投げ！ 弓枝、危い！』と大声でわめきながら、自分も夫人たちの動きについて廻る。

毬子夫人は、執拗に首投げを連発したが、弓枝夫人が必死に腰にしがみついているのでなかなか決まらない。遂に毬子夫人は、え

いつ、面倒！ とばかり、右足を大きく踏み出して弓枝夫人の右足に掛けるや、思いつき腰を捻って右から強引な首投げを放った。

弓枝夫人は、腰を落として必死に耐えようとしたが、駄目だった。アッ！ と言う間もなく、彼女の両足は畳を離れ、その長身が宙に大きく弧を描いた。そして次の瞬間、劈くような悲鳴と共に、彼女の身体は畳の上にドッ！ とばかりに叩きつけられていた。

まことに強烈無比な首投げだった。勢い余って毬子夫人も、右腋深く弓枝夫人の首を巻いたまま、彼女の上にドッと折り重なって倒れる。何しろ六三キロの重量でのし掛かられたからたまらない。乳房をシタタカ打った弓枝夫人は、「ウーン！」と一瞬、気を失いかけた。

(二十一)

長身の弓枝夫人を首投げで投げ倒した毬子夫人は、圧倒的な体重を利して、すかさず首固めで抑え込む。弓枝夫人は、長い両足で頻りに畳を蹴って、懸命に跳ね起きようとするが、相手が重いので、どうにもならない。

争うこと、しばし。遂に弓枝夫人は、太った毬子夫人から完全に抑え込まれてしまった

のである。毬子夫人の太い右腕の中から、弓枝夫人の苦しそうな真赤な顔が覗いている。それは、ちょうど柔道のケサ固めが決まったような形だった。毬子夫人が、弓枝夫人の顔を上から覗き込みながら話し掛ける。

『どお？ 弓枝さん、この勝負はどうやら私の勝ちらしいわネ。早く降参なさいよ』

今まで散々痛めつけられてきた毬子夫人としては、それは寧ろ控え目な言葉だった。事実、彼女は完全に相手を組み伏せており、勝負は既に決まったようなものだった。だが、人一倍、負け惜しみの強い弓枝夫人は、苦しうに喘ぎながらも、負けずに言い返した。

『ナ、ナ、何言ってるのよ。コ、コ、降参なんかしないわよ。タ、例え、私が負けたとしても、貴女は絶対に好造さんの奥さんにはなれないわよ。彼は、私を、妻にする積りなのよ。好造さんは、最初から貴女のことなんか全然、愛していなかったのよ。ただ貴女がおデブさんだから、私とお相撲するため利用されていただけなんだわ。今まで、それに気が付かないなんて、毬子さん、貴女ってホントにお馬鹿さんネ』

そう言う弓枝夫人は、同意を求めるように好造の顔を見上げた。いかにも自信ありげ

な様子である。

毬子夫人は、愕然として好造の方を振り向いた。△ホントですか？△彼女は必死に好造の目に問い掛けた。だが好造は、否定もしなければ肯定もしない。複雑な表情をして、ただ押し黙っているだけだった。△やっぱりそうだったのか！△ここで毬子夫人は、全てを悟ったのである。

毬子夫人は、頭を何かでガン！と殴られたような気がして、一瞬、眼の前が真っ暗になった。そして彼女の胸の内に、好造に裏切られた口惜しさと同時に、弓枝夫人に対する激しい嫉妬の念がこみ上げてきた！

「畜生っ！ 口惜しいっ！」嫉妬に狂った毬子夫人は、力まかせに弓枝夫人の首を締め上げた！ 凄まじい力だった。

『く、く、苦しいっ！』

忽ち、弓枝夫人は、その長身をのた打たせてモガき苦しんだ！……。苦しまぎれに弓枝夫人は、左手を伸ばして毬子夫人の髪を掴んで懸命に引っ張り、右手で彼女の乳房を鷲掴みにして必死に爪を立てた！

『ヒューッ！』今度は毬子夫人が、凄まじい悲鳴を上げて肥満体をのけ反らせる！

もうそれから先は、文字通り、組んずほぐ

れつの格闘だった。彼女たちは、凄まじい呻き声を立てながら、上になり下になりして凄まじく争った！……。

弓枝夫人の色白の長身と、毬子夫人の小麦色の肥満体の二つの裸体が、絡み合いながらのた打ち廻る姿は、さながら女豹同士の闘いにも似て、まさに凄絶きわまるものだった。だが、女性の斗争本能をムキ出しにして、凄まじい組み討ちをしている夫人たちの姿に、遂に好造は、長年求めて止まなかった女、美の極致を見出したのである……。好造の胸は歓びに震えた！

と……その時である。首を締め上げられた苦しみのあまり、弓枝夫人が脚をバタつかせてモガいたハズミに、その長い足で「バリッ！」と襖を蹴破った。好造は、急いで隣の部屋に廻って襖を見た。おお！ そこには大きな足の裏がニョッキリと顔を出しているではないか！ 弓枝夫人の十文半の細長い足の裏は、滲み出た汗と脂に畳の埃がくっ付いて、ベツトリと赤黒く汚れている。彫りの深い真白な土踏まずの部分と、素晴らしいコントラストを描き出していた。

好造は、無我夢中で彼女の足の裏に抱きついた！ そして、自分の顔よりも長いような

二十五センチもあるその足の裏に、憑かれたように頬ずりし始めた。ムツ、とするような脂足特有の蒸れた匂いが鼻をつく。普通の人間なら反吐の出そうなまったくくさい臭いだった。だが足フェチの好造には、高級なチョコレートや、コーヒ―、ココアにも似て、それこそ何物にも代え難い素晴らしい匂いだったのである。好造は、鼻孔を脹らませて、その芳香を思いつきり嗅ぎまくった。陶醉し思わず気が遠くなる程だった。

たまらなくなった好造は、遂に弓枝夫人の細長い足指にしゃぶりつき、汗と脂でドロドロした足指をペロペロ舐めはじめた。塩辛い足指も、好造にとっては、如何なる山海の珍味も及ばぬ素晴らしい味だったのだ……と、突然、『ワァーッ!』と悲鳴を上げて好造がヒックリ返った。毬子夫人から首を強く締め上げられた弓枝夫人が、苦しまぎれに足をバタつかせたハズミに好造の顔を蹴飛ばしたのである。これぞ真正正銘の「十文半キック」だった。

ようやく気が付いた好造が慌てて元の部屋に戻った時、夫人たちの死斗は、まさにクライマックスに達しようとしていた! 相変わらず毬子夫人は、その太い右腕で弓枝夫人の

首を締め続け弓枝夫人は、その長身をのた打たせて必死にモガきながらも、右手は死物狂いで毬子夫人の乳房を掴んで離さない……。毬子夫人の豊満な乳房が弓枝夫人の爪で挟まれて、真っ赤な血が流れている!

『ギャァーッ!』『グエーッ!』と凄まじい呻き声をたてながら毬子夫人と弓枝夫人は、組み合ったまま畳の上をゴロゴロと転がった! ……そして、またもや太った毬子夫人が上になり、長身の弓枝夫人を組み敷いた! 毬子夫人は、六三キロの全体重を弓枝夫人の胸にのしかけるや、太い両腕で彼女の細長い首を力まかせに締め上げた!

『グエーッ!』凄まじい呻き声と共に、弓枝夫人の長身が激しく波打った! 今度こそ、勝負アッタ!』と思われた……が、次の瞬間、毬子夫人は、『ギャァーッ!』と叫び声を上げて肥満体をのけ反らせるや、相手の身体を乗り越えて、反対側に転り落ちてしまった!

死に物狂いの弓枝夫人が、毬子夫人の乳房に噛み付くと同時に、右手の爪で手当り次第に鋭く抉ったからである! ……。

辛うじて相手の抑え込みから逃れた弓枝夫人は、畳の上を這いながら、逃げ出そうとし

たが、毬子夫人は許さなかった。ムックリと身を起こした彼女は、急所の深傷を歯を喰いしばって耐え、自分も畳の上を這いながら弓枝夫人を懸命に追いかけた。……まさに恐るべき執念である。

毬子夫人は、懸命に右手を伸ばして弓枝夫人の足を掴み、彼女を引き戻そうとした! だが弓枝夫人は、これを必死に振り切って隣の部屋に逃げ込もうとする! ……。

すでに彼女は、斗う気力を完全に喪失していたのだ。だが毬子夫人は「そうはさせじ」と弓枝夫人に懸命に追い縋った! 毬子夫人は、弓枝夫人が襖につかまって必死に立ち上ろうとするのを、彼女の肩に手を掛けてしゃにむに引き戻そうとした。

『お願い、止めてッ! 降参ッ!』

弓枝夫人は、襖にシガみつきなから必死に叫んだ! 彼女は、遂にネを上げたのだ。だが毬子夫人は、「いまさら何を!」とばかり左手で弓枝夫人の髪を掴み、右手を彼女の顎にかけて仰向けに引き倒そうとする!

『ま、ま、参ッタ! ゆ、ゆ、許してッ!』

もはや恥も外聞もなく弓枝夫人は、ワツとばかりに泣き出した……。日頃、人一倍気位の高かった彼女だけに、泣き叫ぶその姿が

ひとしお、哀れだった。

『おい、毬子！ 弓枝も“参ッタ！”って言うてるんだ。もうやめろ』

さすがの好造も見ろに見かねて忠告した。

だが、これが却っていけなかった。毬子夫人の嫉妬心をさらに煽り立てる結果になったのだ。嫉妬に狂った毬子夫人は、もう前後の見境もなく弓枝夫人を引き倒した！ 毬子夫人は、弓枝夫人を後ろから抱きかかえるようにして、自ら畳の上にドッと仰向けに倒れるや、太い両腕で彼女の首を力まかせに締め上げ、さらに大根脚までも彼女の細い胸に挟みつけて強烈に締め上げたのである！

首締めと胴締めの同時攻撃に遭ったからたまらない。『ウウーッ！』忽ち弓枝夫人は、その長身を激しくのた打たせてモガク！ 眼をつり上げ、口を歪めて、まさに苦悶の表情である。もともと、ツンと取り澄ました、冷たい感じの彼女だっただけに、その苦痛に歪んだ美しい顔が、なおさら印象的だった。

さらに毬子夫人は、弓枝夫人への恨みを両手両足にこめて、『今こそ思い知れ！』とばかり彼女の首と胴を力まかせに締め上げた。

『ウウ、ウーッ！』凄まじい呻き声を上げて長身の弓枝夫人は、その長い両脚で、激しく

畳を蹴ってモガき苦しんだ！

彼女の、汗と脂でベツトリと赤黒く汚れた十文半の細長い足の裏が、その苦しさを如実に物語っている！……。それは、彼女の胴を締めつけている太った毬子夫人の、勝ち誇ったような九文半の幅広い足の裏と比べて、あまりにも対照的な足の裏の表情だった。

毬子夫人は、なおも攻撃の手を緩めず、太い両足に渾身の力をこめて、弓枝夫人の細い首と胴を強烈に締め上げた。『グエーッ！』弓枝夫人は、凄まじい呻き声を上げて、激しく、のた打ち廻る！

見れば彼女の顔は、すでに紫色に変わり、臉をピクピク痙攣させているではないか！ ハイケナイ！ 好造は、慌てて弓枝夫人の傍へ駆け寄った！ と、その時である。弓枝夫人の大きなお尻から、スウーッと音もなく、くさいガスが出た！

首を強く締められて、呼吸が出来なくなった時に起こる生理的現象である。それは、イタチの最後っ屁にも似て、何とも言えない臭い“スカシ屁”だった！

『やめろッ！』

好造は、急いで毬子夫人を止めようとしたが遅かった。

『グエーッ！』

凄まじい断絶魔の呻き声と共に、弓枝夫人の一六六センチの長身が、激しい痙攣を起こした！……。そして、遂に弓枝夫人は、悶絶してしまつたのである……。

毬子夫人は、相手が気絶したのにまだ気付かず締め続けている！……。

好造は、やっこのことで彼女に首締めを止めさせたが、弓枝夫人の首に巻きついてゐる毬子夫人の太い腕をハズすのに、かなりの時間が掛かった。

毬子夫人は、畳の上にグッタリと伸びている長身の弓枝夫人をしばし放心したように見詰めていたが、突然、

『勝ったんだワ！ 私はどうとう、弓枝さんに勝ったんだワ！……』

大声で叫ぶと、肥躯を震わせてワッと泣き出した。すでに半狂乱の態だった。

好造は、呆然としてこれを見ていた……。しかしその眼も、網膜に像を結んでいる眼の色ではなかった。

——(完)——

× × ×

× × ×

女責め図絵の系譜

高橋とみ子の場合

絵と文 南彦造



大正十四年三月十九日。言論や思想の自由を統制する「治安維持法」なるものが、議会を通過成立した。

軍隊、財閥、警察、右翼など、戦争を準備する兇暴な連中のために、平和を願う人々が次々と捕えられ、殺された。

「治安維持法」は、即ち「人間狩り」の悪法だった。

伊東千代子(25)東京女子大生は拷問の上で虐殺された。那須テツ(27)主婦も拷問の末で虐殺された。そして高橋とみ子(24)画学生の場合を拾ってみれば……

× × ×

とみ子は昭和九年、宮

城県仙台市で画学生だった。

た。彼女はスラム街の子供達や、暗い路地裏の母親、傾いた家並み、不潔で、いやらしい風物などを好んで描いた。

そこには貧者への憐れみと倅^{ねが}せを希う清純な乙女の祈りが込められていたのだ。

× × ×

昭和三年。彼女は土地の女学校を卒業すると「プロレタリア美術家同盟」の仙台支部に加わった。

その年は、佐多稲子が『キヤラメル工場から』を書き、林芙美子は、不朽^{ふきゆう}の名作『放浪記』を発表していた。

また、中国大陸では日本軍の侵略が始まっていた。

とみ子は東京本部から派遣されて来た深谷敏美(27)と云う東大生に会った。昭和七年の暮も近い、雪のシンシンと降る寒い夜だった。

二人の、蜜のように甘い同棲生活が始まった。借家住いの共同生活だったが二人にとっては倅^{ねが}せな愛の巣だった。

× × ×

それから数日後——敏美の去った留守の間に、とみ子は、仙台の「特高」部屋に留置され、厳しい拷問を受けた。

泣く子も黙る当時の警察署のうちでも、特別高等警察——つまり「特高」の仕打ちに酷

かった。

割れ竹がピュッピュッと鳴り、悪鬼のような警官の眼が憎悪に燃えていた。

「おまえはヤツの情婦だろう。知らぬとは言わせないぞ！」

△特高刑事▽それは恐怖の代名詞だった。昭和九年だけでも、既に七人の女性が彼等の手で虐殺された。

後で分ったのだが——とみ子の死体も、全身が紫色に腫れ上り、四肢は硬変し、右の乳首は無惨にもげてなくなり、裂けた背中にはタタミ針の跡が無数に見えた——と云う。

当時やはり捕えられ拷問された作家の平林たい子氏は「ナマ爪をはがされ、爪と爪との間に針を突き刺され、左右にこねられた。また、女の場合——たいてい裸体にされ、見物を集めてから両足を広げさせ、竹刀や竹べらで突いたり、叩かれたりもした。羞恥と激痛で精神錯乱を起させるのが目的で、そうして置いてから自由に調書をとった。だから女は殆どが刑事の思う通りになって終まった——と伝えられている。

× × ×
共産党の志賀義雄氏などは「逆さ吊りにし

て、顔の先をドシンドシンと床に叩きつけるのです。全身の血が頭の方に逆流して、眼の玉が飛び出しそうになる。30分も続けられると、唇から血の泡を吹いて、死んで終まう。女の場合はやっぱり裸に剥いて、腿と腿との間に新聞紙を挟ませ、動けぬように縛ってから火をつける。到底、人間業とは思えない悪鬼の仕業だった」と述懐している。

× × ×
煙草責めなどは、手っとり早い小道具だった。火をつけて耳たぶとか咽喉笛、毛のはえ際などに押しつける。それではいかに気丈な女傑でも、ほとんどが悲鳴をあげ、泣きさけんで哀れみを乞うたと云う。

拷問死した森田京子(23) 会社員などは、愛人の三田村四郎に妻子のあることが分るとそれまで如何なる拷問にも耐え抜いて来たのに、いっぺんに魂を失い腑抜けて終まった。男も男だが、欺された女が気の毒で堪えられない気がする。

前述の伊東千代子(25) 東京女子大生の場合など、夫の浅野晃に裏切られ、チイチイパッパと雀の学校の童謡を歌い乍ら、死んでいったと云う。これは「伝説の時代」の著者、寺尾トシ氏の談話だが、竹刀で叩かれるなど

は序の口で、ホースで水道の水を鼻と口から注ぎこまれたり、ガスバーナーで髪の毛や顔を焼かれたり、恥毛を剃られたりなど、拷問は女性には特に酷かったと伝えられている。

× × ×
とみ子は三日三晩もの間△深谷敏美の逃亡先を白状せよ▽と痛めつけられたが、鋼のような強靱さで苦痛に耐えた。

靴で蹴られた下腹部は妊婦のように脹れあがり、尿から血液が滲み出た。

そして、意識朦朧のうちに、夫の敏美が東京の小松川署にパクられ死んだ——と聞かされるや舌を噛み切った貞節な妻の哀れな死であった。

とみ子と敏美の霊は東京青山の△解放運動無名戦士の墓▽で永遠の眠りを続けている。

× × ×
△拘禁したる者には、反省せしむるため必要なる処置を要す▽ (第53条) ——この美名のもとに特高刑事たちは昭和二十年の敗戦の日まで平和論者や戦争否定者を拷問し続けた。その犠牲者数は無慮千人を越え、かよい女性といえども、決して例外ではなかったのであった。

秘聞・象牙の塔 (後篇)

助教授夫人凌辱譜



カット・柏木真佐男

風流極道軒

前篇梗概——H大学文学部助教授白木学は、博士論文の審査と教授への昇格を前に、奸計を弄する主任教授の熊倉邦雄の要求を断りきれず、熊倉が目下執筆中の拷問刑罰に関する著書のモデルとして妻和子を提供する。熊倉と猿田教授、それに白木のライバル府屋助教授、助手の浅羽、丹沢は、何も夫から知らされていない和子が熊倉家を訪れると、午後二時から深夜にわたり、責めつづけ、写真に撮りつづける。最愛の妻を提供してまで主任教授におもねり、文学博士、教授の地位を手に入れようとした白木は、その日になるとさすがに自責の念に駆られて深酒をすると、その勢いで、我知らず熊倉家につけ、熊倉の妻で芸者あがりの君江の案内で、責め場において行く。そこには、五人の男たちに囲まれた全裸の和子の惨めな姿があった。

瞳に、涙をいっぱいたたえた夫人は、人目もはばからず、夫の胸にすがりつく。

「よい図だねえ、画になるよ」

猿田が例によってカメラで追う。二枚、三枚……。

「白木君、邪魔をしにきたのかね」

「邪魔もくそもありませんや……こ、こいつ

にちかよると、

「和子、す、すまん、すまん！」

と、大声でわめきながら、手足の縄をい
ていった。

「あ……あなた。……や、やはり来てくださ
ったのね」

「和子！ 和子！」

よろめく足で、横たえられた梯子の上に半
円を描いて、仰向けに縛りつけられている妻

は、私の女房ですぜ。女房が、多くの男の賜りものにされているのを、亭主がほうっておくって手はありませんや。ねえ……」

酒のためか、呂律はあやしかった。が、気は確かであった。

「先生、これじゃ今夜は駄目。日をあらためましょう」

府屋がいう。熊倉もどうやらその気になったらしく、

「白木君。じゃあ、今夜はここでゆっくりとお休み。明日の朝、ゆっくりと話し合おうよいいね、よく考えておきたまえよ。博士論文のこと、教授昇格のこと……」

と云うと、何か心残り気な妻の君江を促して扉に向かい、あとを追うように他の男たちも出て行った。

ギリッ、ギリッと、重く扉の閉される軋音がして、白木学と和子は二人だけになった。形容する言葉のない、二人だけの世界であった。

——夜が、あけて、

二人は、ともかくも、家に帰った。

学が無言でたてた風呂に、和子が入った。

一時間、二時間……でてきた和子は、

「あなた！」

と、突然、狂ったように学にすがりつき抱擁を求めた。

学は、二日、大学を休んだ。

熊倉に指定された日は、六月十五日であった。朝、熊倉は云った。

「白木君、僕に協力したまえ。悪いようには決してしないから……。君にも判ってもらえると思う。これはあくまでも秘密なのだ。極秘の、象牙の塔のなかでのでき事なのだから。いいね、十五日午後六時、待ってるよ。多分……」

熊倉はニヤツと笑うと、

「奥さんもむげに拒否はなさらぬと思う」

白木は、それを、和子に云うのをためらっていた。酔いがさめての後、後悔と、未来の地位のためという自己弁護とが、錯綜していた。迷いに迷った末、学は、和子に、

「どうする……」

と、思いきって訊ねた。拒否を期待していたのか、諾応を望む気持がつよいのか、自分にも判然とはしなかった。

「あなた……あなたのためなら、もう一夜くらい……」

和子の返事をきいた時、学は、つうんここみあげるものを感じた。

「すまん！ 和子！ 俺のために！」

学は、酒を、また、したたか飲みながら、和子を抱きしめ、我を忘れたたわ言を一晩中くり返した。

大学教授になるということは、全く大変なことであるとは承知のことだが、それは、個人の實力とか学問的成果とかとは、別の世界の、千にひとつ万にひとつの好運によるものか、金の力、または女色の力に多少ともよるほかはないのであろうか……という疑惑が学の頭を混乱させた。

ともかく、白木学助教授は、もう一度、最愛の妻を、主任教授熊倉邦雄の犠牲に供することを承知し、その場に、夫である自分も列席すること、そして、当面のライバルである府屋助教授の参加を拒否したのであった。熊倉も、それを認めた。六月十五日、学と和子は、車を拾い、あの、おぞましい熊倉の邸に向かった。

「あなた……」

と、よりすぎる和子に、答える言葉は、学にはなかった。どうしても、この一夜を無事に過ぎ、秋に迫った大学教授会での博士論文の通過合格と、明年四月からの教授昇格を實現してみたかった。

「和子……」

白木学は、今宵もまた、酒を十分に喰らっていた。

二

熊倉の方が、場数を踏んでいた。

夫婦で行く——と、白木から知らされた直後、いかにして別々にし、いかにして、最も劇的に、夫である学のまえに和子をひき出しかを、その道の玄人である画家の只見や、S出版社の担当記者椋本と計画を練っていた。

「そりゃあ、女を責めるのは亭主の前に限りますなあ。第一、反応がちがう。女って奴はどういつもこいつも見知らぬ男たちの前じゃあまるで娼婦と同じですなあ、それが、愛人とか亭主とかの見てる前となると、少しでも貞淑におしとやかに見せようとする……そこが、つけめでしてね」

只見は、こんなことを呟く男であった。

椋本も相槌をうつ。

「女は、全身これセックス。……これを知っているのは、やはり人妻、それも四十前後。それ云うじゃありませんか、三十後家はつとまるが、四十後家はつとまらねえ。和子と

か云う奥さまは、三十三とか云うが、府屋先生の責めに反応を示したと仰言るところをみると、この私が腕を振うに足る女のようにで」

この二人を筆頭に、十人をこえる男たちが待っている責め場へ、和子夫人は、夫に伴われて、犠牲となるべく赴いたのである。

玄関のベルを鳴らすと、女中の真理が、男のような声で、

「みんな、待ってるだよ」

と、今夜の会合など何の関係もないと云いたげに、さっさと、長い廊下を二人を案内して、奥座敷までくると、

「あんたはここで待ってるのだ」

と、白木学を押し入れ、和子ひとりを、例のどんでん返しの扉のなかへと、連れ込んで行った。

「あなた！」

別れぎわに、和子がつくった必死の微笑を思いながら、つくねんと坐っている学の前に姿を現わしたのは、猿田と熊倉であった。

「白木君、よく来てくれた、感謝する」

「白木君、熊倉先生がね、論文は、文句なく通過させよう。また、葉山教授の後任も君に決定したも同然と仰言っているよ。まあ、飲みたまえ」

さし出された盃を、ぐいっとひと思いにほす。

「なあに、今夜一晚のこと。明日になれば、何もかも忘れて、すっきりとするさ」

「それにしても、奥さんには頭がさがる。夫のためとあれば、まさに、火の中、水の中という所だね、うらやましいよ、全く」

二人にすすめられるままに、飲みつづける白木であった。

今頃、すぐ、その地下の部屋で、妻がどんな姿になっているのか……考えはそれに集中し、飲めども酔えぬ酒であった。

浅羽が入ってきた。

「先生。今、やっと、裸になると誓わされました」

大きくうなづく熊倉。

入れちがいに、丹沢が入ってきて、

「いま、鳩羽紫の長着を、自分で、脱ぎましたよ」

ニヤツとうなづく猿田。二、三分のち、

「長襦袢を、只見さんの手で、ぬがされて居ります。また、今夜の体臭の何とも云えないよい匂い……」

次々と二人が交替で入ってきて、経過を告げてゆく。あきらかに、夫の学の反応を楽し

むためのものであった。

「熊、熊倉先生。わ、わたしにも立ち合わせてくださいませんか」

深い酔いのなかで、理性はもう麻痺しかけていた。

（あなたは決してご覧にならないこと。ね、これが条件よ、守って頂戴……ね）

和子の願いを忘れたのではなかった。しかし、どうしても見たい……見ずにはおかれなと云う強い欲望を制することができず、白木は、もう一度、

「見せて下さいよ、熊倉先生。いいじゃありませんか。……夫の私も、和子が、どんな風に扱われるのか、後学のためには是非見ておきたいのですよ、ねえ……」

呂律は、さきほどからあやしかった。

猿田が、熊倉と顔を合せてニヤツと笑う。

最早、大学教授としての名誉も面目も何もない淫乱と金も、うけの権化のような顔である。

「見るかね。来なさい」

熊倉は、まるで中学生でも扱うように白木を動かすことに、優越感をおぼえながら、先に立った。

どんでん返しの扉のよこの狭い二畳ばかりの密室であった。

「今日のためにつくらしたのだがね。なに、安いものだよ、七万円、改造費にしちゃ安いよ、ねえ、猿田君」

と、熊倉は、半畳のたたみをあげ、さらに板をあげた。

眼下に、あの部屋があり、和子が、そこで男たちに囲まれていた。

「向こうからは見えない。いつか、東京のホテルで経験したのを思い出してね。ほれ、声もきこえるよ」

熊倉は、こともなげに、イヤホンをさし出した。

かあーっと、頭に血の上った白木は、震える手でイヤホンをとり、耳にあてる。

和子の声が、聞こえてきた。

「わ、わたくし白木和子は、今夜一晚、皆さま方のまえで、ま、まる裸となり、罵られ……なぶられます……」

三

和子を囲んで次のような男たちがいた。

H大学生物学教室の尾谷教授、助手の岡田と竹内、同じく心理学の名張教授と市振助教授、それに、全国に名の売れている画家の只

見、S出版社の記者椋本昭男。

女中の真理に案内されて、胸ふるわせて入ってきた和子の、鶯萌黄いろの献上博多の名古屋帯を、ものをも云わず、むしりとったのは、五十歳で額のはげ上った只見であった。つづいて小菊を散らした鳩羽紫の月華お召をするりとなれた手付きで剃ぎとった六尺ゆたかな大男の椋本は、

「白木和子、今夜は覚悟してる筈だぜ」

と、威圧するように云い、うずくまった和子のまわりをぐるぐると獲物を見つけた禿鷹のように歩き廻った。

そして和子に、先ず約束させたのである。

「妾は、決して今夜のことを他人に口外しませぬ。又、決して、皆さま方をお恨みにも存じませぬ。どうかご安心なさいまして、妾を存分に、責め、拷問なすってくださいませ……妾は、囚人。皆さま方に、決して、お手向かいはいたしませぬ……どうか、ご存分になさってくださいまし」

多くの男たちの前に、曝されることを覚悟で、責め折檻されることを承知で、なお、かつ、昨夜は、念入りに入浴し、丹念に身体をみがいた和子であった。

今、目の前に、その男たちがいる。六日前

の夜に較べて、今夜は、夫のために、夫が許してくれているという、一沫の安堵にも似た思いがあった。だからこそ、棕本の強いままに、次のように云うこともできた。

「どなたか、おはやく、妾を、は、裸にしてくださいまし……」

「僕がやろうよ、奥さん」

きちんと坐り直した和子のそばに、両膝をすすめたのは、名張であった。

「人妻が、多くの男たちの前で、裸になるときの心のあや、は、結構、学問研究の対象になりますからね。市振君、君もどうかね」

「はい、先生」

市振が、和子の背後に廻る。名張の指が、今夜に備えた関東仕立て桜色の紋紗の長襦袢の媚茶の腰紐の結び目にかかった。

「……ウ……ッ……」

わずかに和子が、腰をひねった。

熱い吐息が、名張の首筋にかかり、すうりと抜きとったのは市振であった。

「奥さん、さあ」

十糎もはなれていない距離で、和子の顔をじいっと見つめた名張は、軽く両肩に掌をあてると、するするっと襟元にすべらせ、ぐいっと剥ぎとる、市振がそれをうける。

「……イ……イヤ……」

思わず裾を合わせる和子の手首をしっかりと握る。市振が、右袖をぬがせる、名張が、和子の右腕を操る。左袖をぬがせる、左腕があやつられる……こうして、和子のまわりに、長襦袢の花弁が咲いた。そのまん中、稀頭のさらし木綿の肌襦袢の襟に、乱れた黒髪の一房をたらせて、和子の匂うような肉体が息づいている。

「次は、儂じゃ……名張君」

ごくんと睡をのみ込んだ尾谷は、半分白くなった髪をかきなでてにじり寄ると、岡田、竹内に目配せをして和子の左右に立たせ、「一糸もまとわぬ素裸にするのは儂達の役目……どうですか。おいやかな……」

瞳を閉じたまま、軽くうなずく和子。

「ホホオ、おいや。すると、誰に……誰かお名ざしの方でもおありかな」

「いいえ……誰も……」

和子は聞いていなかったのである。だから肯定の意味でうなずいた。これが否定形の問いと知って、あわてた。瞳をひらいた。

「いいえ、先生……どなたにでも」

「すると、儂でも、儂でなくてもよいわけですか、奥さん」

「そ、そんな意味では……」

「では、はっきりと、儂たちに素っ裸にされたいと断言なさい」

こうして和子は、またもや、多くの男たちのまえで、

「妾、妾は、は、はだかになり、み、みなさまがたの、思う存分に、尾谷教授や、助手の岡田さん、竹内さんのなさるとおりに、従います」

と、朱く濡れた唇を開かされたのである。

「素っ裸にね、助教授夫人」

尾谷がしげしげと、和子の思わずあかく染まった顔を見つめながら肌襦袢の紐に手を伸ばし、岡田と竹内に目くばせをする。同時に二人は和子の両側に片膝をついて身構えた。

朱色の紐は、なかなか、尾谷の思うようにはならない。尾谷の頭の匂いが、ムツと和子の鼻をつく。置場所のない両手が、胸の上でびくっびくつとふるえた。

「さあ、岡田！」

歓声をあげた尾谷は、右手を大きく動かして、和子の片肌をぬがせると、ぷりーんとあらわになった左乳房に唇をつけるばかりにしながら左肩から、短い袖を、竹内といっしょにぬがせていく。

覚悟してきたこととは云え、和子は、思わず両手を大きく前に振って抵抗した。

「おっ……とっと、とと……」

竹内と岡田が、若者らしい強い力で、しなやかな双腕をつかみ、サァーッと、純白の布のかたまりを、背後の牢格子に投げつける。

「先生！」

竹内の眼が大きく開いた。まだ、独身である二人の助手にとって、これは、あまりにも刺戟的な光景であった。成熟しきった女体が目の前で息づいているのである。売春防止法が施行されている現在、いや、そうでなくても学究だけに生きてきた二十五歳の二人にとって、これは、始めてみる生身なまみの女体であった。ぶるぶる震えんばかりの岡田と竹内に、「ハッハッハ……。尾谷さんの教育が悪いからこのお二人、ざまあないようですな」

只見の嘲笑にも似た声がとんだ。その声にはお構いなしで、尾谷は白無垢本紋綸子の湯文字の紫色の紐に、蛇のような手を伸ばしていた。しっかりと胸乳を抱いて顔をあげたりさげたりしながら、男達の視線を受けている和子の腰から下をおっている本紋綸子の湯文字は、実は、今日のために、ひそかにあつらえたものであった。

（他人の前で裸身をさらす。せめて、下着だけでも……）

という、女としての最後の羞恥が、いま、和子夫人の肉体を、清楚にそして艶麗に飾っていた。紫……この色を紐にえらんだのも、女の、肉体の一番、奥深いところを象徴するのが、紫色であるということをも本能で知ったからであろう。

その紐を、尾谷教授は、今度は、無造作に解いた。そして、湯文字の合わせ目を、するする……と、左右に拡げる。和子の両手が胸元で、ためらう。

乳房をあらわにするか、下半身を衆目にさらすか……。と、椋本が、

「奥さん、どっちなんでえ！ おっぱいかいそれとも？……」

あからさまな言葉であった。和子の睫毛がピリリッとするやうに、怒ったとも、また、えん然とした瞳とも云える流し目が、椋本におくられる。応えて、彼が、

「た、たまらねえ！」

と思わずたち上り、和子に近づくと、

「さあ、奥さん。尾谷教授にゃあもつて、えねえ身体よ。俺がひとつその湯文字は、ひんむいてやろうじゃあねえか。どうする？ 今の

坐ったままにするか、それとも、お立ち遊ばすか」

返事はなかった。

「するてえと、このままか。ヘッヘッ」

下卑な笑いを眼鏡のおくで光らせながら椋本は、尾谷を押しつけるようにして、和子のまん前にかがみこまうとした。

「イヤッ！」

一声叫んだ和子が、胸乳をおおっていた双手を、必死で太腿にあてて湯文字の乱れをなおそうとしたが、時すでにおそく、尾谷は立ちあがりざま、白無垢本紋綸子をななめ上にほおりあげた。

「あア、アッ！」

和子は、上体を海老のように折りまげて、俯伏せる。

「チェッ！ この大学の教授ともなると、手のほうも早いのかねえ。尾谷さん」

舌打ちしながらも椋本は、まじまじと、まるで白い大きな宝石のように輝く和子の、まわなくなった女体を、皆と一緒に、眺めていたが、

「まあ、いいや。これからが、本番。さあ、始めようぜ。この色気たっぷりの三十女を責めて責めて、脂のしたたりを絞り出してやる

んだ。そいつを、この奥さんも、心の底では待ってらっしゃる」

事実――

和子の秘められた心の底に、被虐の本能が湧きおこりつつあった。夫のために、この会合に出席しようと思ったとき、さらには、ここへくる途中、そして夫と別々にされ、ここへ連れ込まれた時、その本能は頭をもたげ、強制的にふだん使ったこともないあられもない言葉を口から出させられるに及んで、益々それは押え難いものになっていった。

（妾、悪い、淫らな女なのかしら……）

羞恥を忘れたわけではない。しかし、それを越えて、甘くやるせない身悶えが、男達の好奇の目を集めている豊満な尻から、背骨をとおって、咽喉もとに熱くこみあげてくるのを和子は感じる。

（さあ、もう、どうにでもして頂戴！　いつまで眺めているというの！）

縄一筋かかっていない肉体……このままじっとしているよりも、早く、何かを始めてもらいたい、行動をおこして貰いたいと云う気がする。

一秒が何時間にも思われる時間が過ぎる。何か、ゴトゴトという物音や、シュッシュ

ツと縄をしごく音、ガラガラと滑車の軋る不気味な響を、和子夫人は、きくともなくその桃色の貝がらのような耳で聞いていた。

四

「奥さん。お縄を神妙に受けなさい」

只見の声が、頭上でする。

「神妙に。さあ。抵抗すればするほど、私達を喜ばすことになりますぞ」

別の声がした。

「奥さま、早くなさいませよ。ほれ、この間のように」

思わず顔を和子はあげた。いつの間に入ってきたのか、熊倉教授の助手丹沢であった。そばには、浅羽もいる。

「あ、あなた方は！」

「奥さまはもう僕達のオンナ。そのお方が男たちに賜られるとあっては、見逃すわけには参りませんでな」

浅羽はニヤツと笑いながら云う。

「なあに、もしも、奥さまが新しい只見さんや名張先生たちに抵抗でもなさるといけないと思つて、目付役として……ハッハッハ」

和子は、上体を起こした。左手で双つの乳

房をおおってはいたが、到底、手などでかくしおおせるような乳房ではなかった。

「さあ、両手を後に回して！」

只見が強ク云うと、何事か棕本に耳打ちをする。棕本が、何事か和子の耳に囁く。

イヤ、イヤと頭を左右に振つてのち、首筋から肩のあたりまで、あかく染めた和子は、やっと、うなずく。只見がもう一度、

「早く回して、両手を！」

と云い、太くて赤い木綿縄を両手に背後に迫る。大きく瞳をひらいて棕本たちを見廻した和子は、次の瞬間、目を伏せ、同時に、左手を、ふくよかな腰のあたりから背へとまわし、ピクピクツと二、三度けいれんさせた右手の指が、フワァツと浮くと、ふとももの上を滑って背後に消えた。

「フーッ……」

ため息を洩らしたのは、岡田と竹内であった。二人の視線は、和子が、いままで右手で守っていた辺りに吸いつくように注がれている。しみひとつない柔らかい太腿が慄える。「妾は、女囚……有難く、お縄をお受けします」

棕本に命じられたとおり、和子は、わなわなと唇を震わせて云った。

「もう少し、手首を交叉させて！」

和子の背後で、手首が絡まる。

「まだまだ。そして、上、上にあげて！」

和子が手首をあげるにつれて、両肘が左右にはりだし、左膝が伸びた。それは、右側にいる岡田と名張教授の視線をますます引きつけることになった。しかし、和子夫人には、それを意識する余裕は、なかった。白く輝く肉体は、まるで灼熱したように燃えていた。

只見は、ゴクンと唾をのみ込むと、先ず、高々と、そして深々と交叉されている夫人の両手首に、縄を三度廻し、きっちり結び止めをすると、その縄を、左の二の腕に、肉に喰い込むほど二巻きして、棕本に渡した。

「おっと、合点、承知のすけ！」

ぐいっ！と両乳房の下を走らせ、右の二の腕に同じく二巻き、只見にわたす。ぐらりと和子夫人の上体が、棕本の胸のなかに、前かがみとなる。成熟した女体の香りか、ランパンのスキヤンダルの匂いか、棕本は鼻を、ピクピクとうごめかせた。

背後では只見が手首で縄をとめ、もう一度前に廻して、乳房の下、さらに三回。和子の人並み外れて豊かな乳房の下を二本、上を三本、只見の親指ほどもある太い木綿縄が、し

めつける。

高手小手に縛り終わると只見たちは、数歩退いた。牢格子を背に、片膝をたてて必死で男たちの視線から身を守ろうとする健気な和子の羞恥のポーズが、天井裏の密室から仕掛けガラス越しに見つめている熊倉や、猿田の咽喉を鳴らせ、白木——和子の夫である学の目を血走らせる。

「白木君、君の細君は全く惚れ惚れするほどよい肉体をしてるじゃあないかい。ええ君。あの美女を自分一人で独占していたなんて、果報につきるといふものだけ」

熊倉の言葉に、猿田が、

「熊倉主任、僕たちも、どうです、降りて行きましょうよ。僕は、どうも、うずうずし始めましたぜ」

「まあ、まあ。愛妻を、多くの男たちの慰みものとして提供している白木君のこととも考えて……、もう少し、もう少しあとで」

白木の手が、ぐいっ！と、ジョニ黒の瓶に伸びた。酒、ビール、洋酒……手あたり次第に、呑みつづけている学であった。

夫が、みていること、イヤホーンで聞いていることを知らない眼下の和子夫人は、棕本に強いられ、愁いを含んだ顔をあげると、

「ど、どなたか、わたくしの、妾の、あ、あ足をひっぱって……くださいませ」

これだけの言葉に五分、いや、それ以上、長い時間がかかった。とび出したのは、尾谷と名張、よい歳をしてと笑う奴には笑わせておけという勢いで、和子を立たせると、

「股裂きといくか、奥さん」

と、浅羽と丹沢が持ち出した大きな卓の上に、和子を乱暴に押し倒すと、

「竹内！ 岡田！ 上半身を押えるんだ」

といい捨ててそれぞれ左右の足首を捉え、麻縄をきりきりと巻きつけ、

「そうれ！ よいか、名張君」

「OK！」

必死で抵抗する和子の均整のとれた脚の力も、上半身を若い助手たちに押えられていてはどうにもならず、

「アッアッ！」

火を吐くような羞恥の喘ぎのなかで、先ず膝から下が割れ、ズル、ズルッと両膝頭が離れていく。

「もっと！ もう一息！」

もうこれ以上は——という所まで、無情に麻縄を引き絞った二人は、縄の端を、牢格子に、固定すると、ホォッと、額の汗をふきな

が息を吐く。

「この匂いは？」

和子の肉体からは、すでにあの白蘭の香いが、ただよい始めていた。

「この奥さまのこの匂いは、私も、先日始めて嗅がせて頂いたの。どう、素敵な香りでしょう」

丹沢が、助手の身でありながら、先輩顔をして両教授に云う。女ではベテランだと自称する只見や椋本までが、痴呆のような面持ちで、鼻をうごめかす。

（無駄だわ、反抗しても……こうなってしまうのだもの……）

ぶるぶると震えながら和子は、慄える睫を固く閉じるのだった。

五

「起きなよ」

椋本に抱きおこされたのは、随分と時間がたってからのように和子は思った。ため息がしばらくあたりを支配した。

「どうやら正気に返ったようだね、奥さん」
勝ち誇ったように椋本は云うと、和子夫人の両足の縄目を、ひとりで解いて行った。

じいっと、眼を閉じて、人形のようになすままになっていた夫人であった。

夫人が夫人らしさを見せたのは、次の一瞬であった。椋本が、解き終わった途端、す早く両股をぴたりと合せ、片膝を立ててしまったのである。

「こいつは、面白えや。さすが大学助教授夫人、どんな時でも身だしなみが肝心かあ、なみの女じゃあこうはいかないねえ」

今まで縛りつけていた卓を片寄せ、真新しい畳の上に、夫人を坐らせ、

「見てなさいよ、先生方。こんな場面は、めったなことじゃあ見る事ならねえ」

和子の右肩を蹴った。ドウツと転がったものの和子は、両足を必死に動かして、すぐに不自由な体を縮めた。

「それ、もう一度！」

四回、五回と、椋本が転がすたびに、夫人は、悲鳴をあげながらも、女らしいポーズを守り続けた。

「おみごと！ こちとらの女房じゃあこうはいかねえ。ここまでにされりゃあ、もう、羞恥もなにもあったものじゃあござんせん。さすが、ご立派。この女の亭主の顔をとっくり拝んで見たいものですなあ……」

そういいながら、和子夫人を坐らせ、事もなげに、かもしかのような脚をあぐらに組ませると、かがみ込むようにして両足首に、ガチャリと手錠（足錠？）をかけた。

「さあ、今度はどうするね？ 奥さん」

天井裏の密室にいる白木の眼に、九人の男たちが、わらわらと群がって行くのが、ありありと見えた。

「和……子！」

白木は呻いた。大きく顔をのけぞらせて何かに訴えるように、上を向いた和子夫人は、殉教する美女の、諦観にも似た風情を漂わせている。

「ぼつぼつ……」

と、猿田。

「そうですな、では、いよいよ、夫婦御対面といきますか。その上で本格的な拷問開始。

白木君、いいかね」

熊倉の言葉に、白木は何度も深く頷いた。もう、白木学助教授は、理性も善悪も、名誉さえも忘れるくらい酒に酔い、妻の痴態に酔っていたのであった。

三人は密室を出て、秘密の階段をおりた。扉一枚向こうに、拷問部屋がある。

熊倉の合図に、中から返事があった。

「もう少し、十分ほど待ってくださいよ、主任教授。奥さまにお化粧させなくっちゃあ」

三人を外で待たせて、部屋のなかでは、只見が、和子夫人を新しく縛りなおした。と云っても天井の四周から延びている細い鎖に仰向にした夫人の手足を縛りつけた。丁度、ハンモックを吊るように、腰を抱いて、一米五十糎も吊りあげ、背中の下に三十糎と五十糎幅の脚立をあてがって、手足の痛みを緩和させる。およそ不安定な、そして、無情なポーズである。

その上で、顔をすっぽりと、和子の湯文字でおおってから、押しこもした声で、

「奥さん。僕たちのほかに、これから客がある。大人しくするんだよ」

といい、熊倉たちに入ってくるよう合図した。扉があいて三人が入ってきた。皆、申し合わせたように無言である。

「奥さん。さあ、いま入ってきたのが誰かあててごらんなさい」

「……わかりませんわ、そんなこと」

「フッフッフ……じゃあ、訊ねよう。あなたは、今、入ってきた男たちの前で、拷問される……かまわないね」

夫人は、答えなかった。

「答えなさい。さあ……云うのです」

只見は、夫人の耳に口をあてて囁き、

「今、云ったとおり、さあ、ハッキリと云うのです」

和子夫人は、仕方なく、なかば、捨鉢のよう云った、

「どなたかは存じませんが、妾は、今宵一夜は、女囚でございます。このように、あさましい姿をさらしております。どうか、妾を責めて……拷問にかけてくださいませ。どうかお気に召すように願ってくださいませ。申しおくれましたが、わ、わたしは、H大学助教授の妻、人妻でございます」

途中で、異様な呻きを和子は耳にしたが、ともかくも自分の体臭の匂う湯文字のなかで云ってのけた。

「どうです、まだお判りになりませんか？奥さん」

只見が云ったが、和子に見当のつく筈はなかった。

「じゃあ、おとりしましょう。いや、この人にとって貰いましょう」

よろめく足取りが、近寄った時、和子は、（ま、まさか夫が！）と思った。（入口で別れた夫。……先に帰るからと云った夫。決し

て姿を現わさないからと、何度も云った夫。

まさか）……しかし、（この足取りは、空気の動きは……）思わず、

「キャアッ！……いや！ いやよお！」

和子は、絶叫した。同時に、本紋綸子が、宙に舞った。大きく見開かれた和子の瞳に入ったのは、まぎれもなく夫の学であった。

「だ、だめですわ、あなたあ！ お願いしといたのに、なぜ！ なぜ！ こ、こんなところに、いらっしやったのよお！」

甲高い声をあげて、手足を力の限り振る和子をよそに、

「白木君、どうする。そのまま眺めるかね、それとも、縛っておこうか」

「どちらでも……」

白木が赤く濁った目で答えた。

「じゃあ、縛ろう。君も、拘束されている方がよからう。我々もやり易い」

熊倉の合図で、浅羽と丹沢が白木を縛り、牢格子に立ち縛りにするのに数分とはかからなかった。

眼前、一米の所で、妻が、みじめにも手足を吊られて、宙になかば浮いている。

「教授！」

只見が熊倉に何かささやく。ニヤツと笑

った熊倉が、浅羽に耳打ちをした。

「ちよつと失礼を、白木先生。生物学的実験だそうです」

浅羽は、立ち縛りされている白木のズボンに手をかける。

「ほほう。なるほど、やはり我々同様」

浅羽は、ニヤリと笑う。

「自分の女房が慰みものにされてるというのに、この先生、よほどご理解が深いお方とみえる」

こう云い捨てると只見は、皆に向かって、「諸君、こうなれば、亭主の許しが出たも同然、そうれ！」

十一人の男たちの手が、同時に舞った。それは、嵐のような攻撃であつた。夫人が何度絶叫し許しを請うたかわからない。

そのものずばりの攻撃では勿論なかつた。

しかし、これだけ多数では、たまらなかつた。なにさま、和子一人に二十二本の手が乱舞しつづけたのだから……。

ものの一時間、異常な風がなまぐさく巻きおこつた地下のこの拷問部屋も、和子が、ぐったりとなり、反応を示さなくなったとき、やっと平静を取り戻した。

「少し休ませなくっちゃあ。いくらお強い奥

さまでも、こうまで責められては、身が持つまいよ」

只見の声で、てんでに坐つた男たちは、女中の真理の運んできたビールを、それぞれに飲み始める。

「白木君、どうだい、愛妻が目の前で責められるという旦那の気持は」

「飲んでくださいよ、助教授」

浅羽が、猿ぐつわをとり、白木の口からビールをながし込み、チーズを食べさせ乍ら、「まだまだ夜はながいから、しっかり精をつけなくちゃあ」

その間に、岡田と竹内が、和子の縄をとき白木の足もとにほうり出す。

「あ……あなた……」

絶え入るように一声、洩らした和子は、痛む身体のあちこちを撫でようともせず、白木の膝にとりすがる。

「酒だ。浅羽君、たのむ、洋酒をくれよ。それに女房にも、……和子にもすこし飲ませてやってくれ」

自棄的な叫びをあげながら、白木は、ごぼごぼと、洋酒をのんだ。

「奥さん、旦那の命令だよ」

浅羽は、岡田と竹内に和子を押えさせてお

いて、ビールをはればったくさえ見える、形のよい唇へ流し込み、自分も、ぐいぐいと飲んで行く。

酒は、気付け薬の役割を果し、和子が生氣をとり戻す。

「どうです、こちらでひと風呂浴びて貰いましょうか」

尾谷がいうのを、椋本が

「そんな暇はないよ。どうしてもと云うのなら……」

と、見廻した部屋の隅のたらいに目をつけて、持ち出してくると、ビールを次々と三十本も注いで、

「ほれ、ここで、このビール風呂でも浴びて貰おう」

と、和子を抱えあげて、たらいのなか。必死で抵抗するのを、只見や名張たちと、行水をさせて行く。

「さあ、これでよし。タオルの代りに」

椋本は、和子に、さらし木綿の肌襦袢を投げあたえる。飛びつくように、それを受けた和子は、身体を拭くよりも、胸から腰のあたりを、さあっと、覆う。

「さすがよ、なあ……。感服のほかなしだ、奥さん」

熊倉の言葉をよそに、棕本が、

「熊倉先生、今度の著述に、股裂きの刑つてのがありましたでしょう。牛二匹に女囚の股がばりばりと裂かれるという……そいつをこれから実験して見ましょうよ」

「無茶だよ、君」

「なあに、牛の代わりは岡田さんと竹内君にやらせりゃいい……。話はきまった、さあ奥さん。こいつもひとつ、身にまとって下さいよ。素っ裸よりも色気がありますからな。さあ、只見君、写生の用意！」

勝手に決めた棕本は、白無垢の湯文字を和子に投げつける。

「つけるのがおいやならお手伝いしますぜ。それに……と、市振先生。先生は、カメラの方をよろしく願いますぜ。なあに、顔さえ少し修正すりゃあ、どこのだれともわからない。本に載せることもできます……奥さん、いいでしょう」

「いけません！ そんなこと！」

裂帛の声であった。

「おお、こわ！ いけませんなんて殺生な。俺も男です、約束しましょう。顔だけは、すげ代えるから載せて貰うよ」

命令するように云った棕本は、さっさと和

子に近づき、湯文字をつけさせて行く。その六尺豊かな大男の分厚い胸にかかえ込まれて女の羞恥を護るはずの湯文字を、まとわされる和子夫人であった、

「縄……浅羽さん。麻縄がいいでしょう。本格的に縛つとかねえと、ムードが出ねえから……」

くるくると、まるで大猿につかまった白兎のようにあやつられながら、菱縄縛りにされて行く。

「只見さん、いい画を頼みますぜ。写真よりも、あんたの画の方が、より真に迫ってるって評判だね。カットする所は、こちらでやるから遠慮なく、奥の奥まで描き出して下さいよ……」

口八丁、手八丁の棕本は、和子を縛り終えたと、押し倒し、両足首に、手早く、太縄をまきつけて、

「岡田さん、竹内さん……じゃ、その縄の端を持って、よしと云うまでゆっくりとひっぱってください。ああ、ちょっと待った。やはり、御主人の方に向けなくちゃあ」

くるりと、向きをかえて、足の方を白木に見せると、

「よし、始めますよ、熊倉先生。市振先生も

いいですね」

棕本のかける合図とともに、岡田と竹内が牛の力よろしく、縄をひき始める。ピクピクツと湯文字の下で膝頭が揺れて、足首が左右にひっぱられ。

「アッ……アッ」

かなわぬと知っていても、和子夫人の唇から、悩ましげな羞恥の声があがる。

「何が、アッ、アッですか、奥さま」

丹沢が、和子の顔をしげしげと眺めながらからかう。

「せっかくの実験を……邪魔だぜ、丹沢君。どいて、どいて」

市振が、和子の全身を狙い、アップで、悶える顔をカメラにキャッチする。

右の膝が、湯文学からとび出す。

「アッ！」

両膝を合わせようとする努力も、どうにもならなかった。ぐうっ、ぐぐっ——と、二人の助手が縄をひくと、途端、

「ア、アア！」

はらりと湯文字がふたつに割れて、力一杯合わせようとする太腿が、足首の痛さに腰をひねった瞬間、わなわなと震える。

「それ、もうひといき！」

和子夫人の腰が浮いた。たたみすれすれに両側から縄をひいていた岡田と竹内が、突然起ち上って、その縄を肩にかつぎそれぞれ数歩、前進した。

「キャアッ！」

背中までも一緒に、斜め上方に引き上げられ、両足を大きくひき裂かれた夫人は思わず悲鳴をあげる。

「もう、もうすこし……」

棕本が慎重に様子を見ながら云う。竹内と岡田は、じりじりと、一纏二纏と、縄をひきしぼって行く。

「ウ——…ウウ……」

齒を喰いしぼり、額から玉のような汗をながして苦悶に耐える和子夫人。只見は、さかんに画帖に鉛筆を走らせ、市振のシャッターが、続いてきられる。

ひき裂こうとする二人の男と、そうはさせまいと必死で抵抗する女の、凄惨な闘いが、見守る男たちの目を血走らせる。

二本の太縄がピーンとはりつめている。

白木学が、猿ぐつわの下で何事か、わめいている。

「岡田さん……」

棕本は、岡田に力をぬかせる。ドサリッと

鈍い音がして、夫人の右脚が、畳に伸びた。

「次は片足吊り。竹内君、その縄の端を」

と、竹内の持つ縄尻を、牢格子の上部にかけ、ずるずるとひきあげてゆく。もう、両脚を揃えて伸ばす力は夫人には残っていないかった。ダラリと右足を格子にかけて、左足は高々と、肩が辛うじてたたみについているところまで逆さに吊られた和子夫人は、もう荒い呼吸をするのが精一杯であった。

六

「磔刑が見たいな、どうです皆さん」

只見の画帖に、ひと通り、片足吊りの写生が済んだ頃に棕本が云ったが、もう和子夫人は、反抗の気配ひとつしめさなかった。四人の助手たちが、彼女を、男用の磔刑柱に縛りつけて竹槍を向ける。その尖端には、赤い絵具まで用意されており、双つの乳房の下が、血の色で染まった。

「駿河問い……」

熊倉の言葉で、夫人は、逆海老に緊縛される。ただし、両手と足首には、幾重にも、夫人の長襦袢が、巻きつけられた。駿河問いは下手をすると気絶はおろか、女体を傷つける

おそれがあるからの配慮であった。が……徳川時代と云えども、一糸まとわぬ全裸でこの拷問をうけた女の記録はない。和子夫人は、この記録を更新させられたのである。

「大丈夫かな？」

尾谷が、心配顔で云った。

「多分……この顔なら」

棕本が、乱れに乱れた黒髪を、むんずとつかみ、和子夫人の顔をのけぞらせて、のぞきこんでから云った。

「じゃあ、次は、水責め。恰好だけでいい。

ともかく、見たい、この目で」

熊倉の要望で、一旦おろされた夫人に、新しく縄掛けがされ、両足を、くるくると幾重にもまいて逆さに吊り上げてゆく。

一方、頭の下に、水をたたえたたらいが置かれた。

さすがに緊張する棕本たち。

「おろせ……」

滑車が軋り、黒髪から額、鼻……

「これでもか、これでもか！」

浅羽が獄吏となって、夫人の顔を二度、三度、たらいの水につけて行く。

声にならない絶叫が、部屋中に、重く悲痛にひびく。

S.C.R.(性問題相談室)案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関する解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

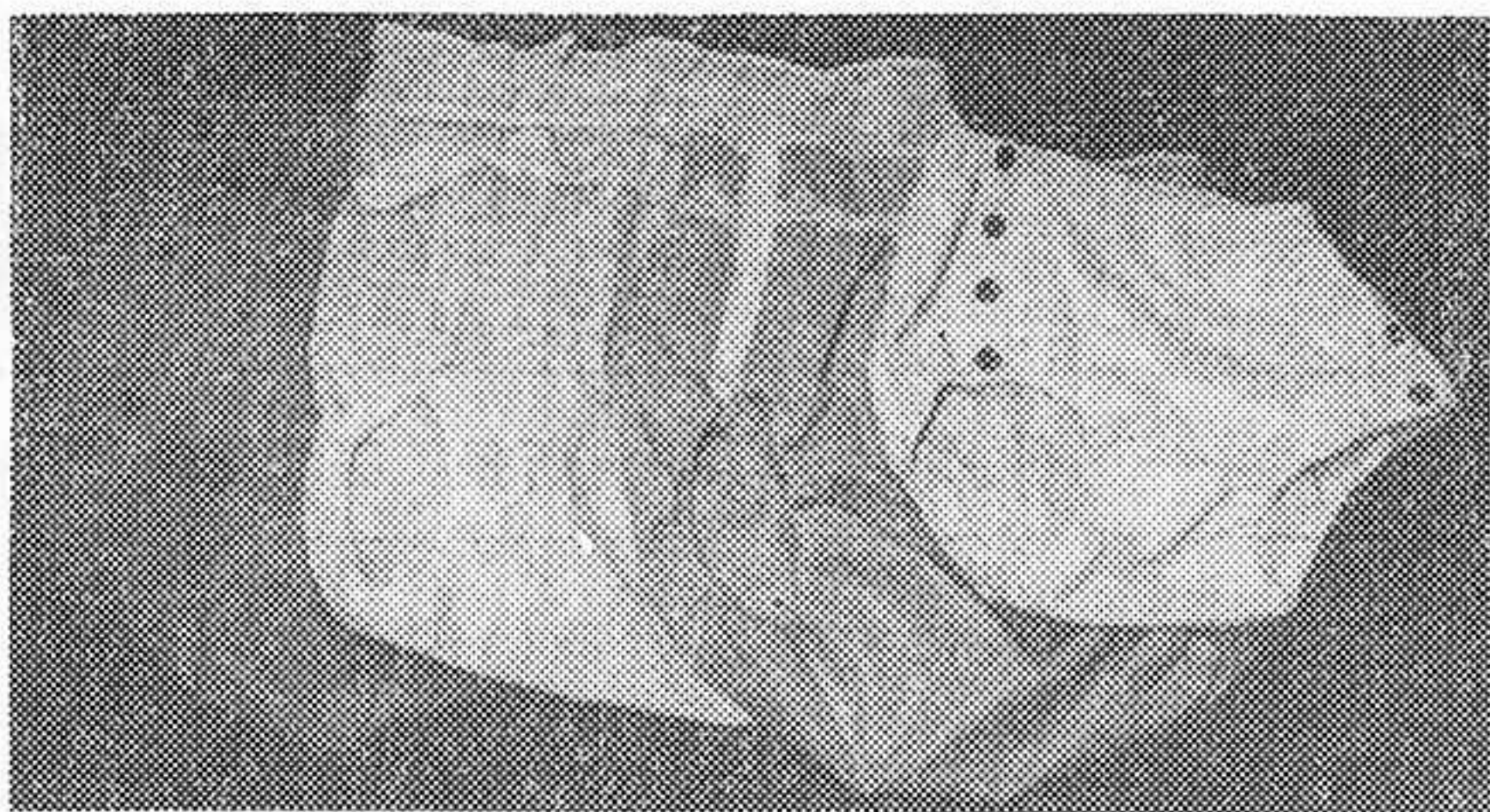
もう、そこには、スキヤンダルの芳香も、白蘭の匂いもなかった。和子の汗、なまぐさい匂い、男たちのムンムンする体臭、それに酒くさい息が、入りまじって、この熊倉教授邸の地下室は、拷問部屋に匹敵するムードに満ちあふれていた。

「白木君。いいね、秘密だよ。君達、夫婦が黙っておりさえすれば、何もおこらない。僕たちは、暴力団じゃあないんだから。写真も必要な枚数を焼付けたら、君にお返しする。分かったね……」

熊倉邸を辞する白木夫妻に熊倉邦雄主任教授は、おだやかな声で云った。

白木学助教授が教授となり、その論文「考古学上、土偶の占める位置について」が、博士論文の審査にパスしたことは云うまでもない。

白木学教授と云えば、斯界で知らぬ人はなく、その夫人、内助の功あった和子夫人が、いよいよ妖艶な美しさを発揮していることも、ごく、一部の人々に知られている事であった。



おしめ性夜尿症者の

生活と意見

私 の 執 着

岩 手 信 夫

少し古い記事であるが、本誌昭和三十九年四月号の四十七頁サロン欄に、松本淑子と称する女性が「オムツマニアの女性から」と題して一文を寄せている。

要旨は、夜尿症の妹が毎晩、母にオムツをしてもらうのが羨ましくて仕方なかったこと

東北の郷里から東京に出て早速オムツを当て始めたこと、そして五年を経た今、ふたたび帰郷することになり、身辺整理をしていることなどを述べ、その一節に次のように述べている。

……私は専らオムツ専門ですが、最近は本当

にオネシヨするようになって困りました。今年になって三回ですが「オムツを当てた花嫁さん」にならないように注意します……。

結論は、こんないいものが世の中にあるのに、使わないのは残念なことだから、もっとオムツを使おう、いうことである。

次に、同じく三十九年の十二月号には、竹野ひろ子なる女性が「おしめカバーと私」と題する一文を三十四頁サロン欄に寄せ、その文中で次のように記している。

……夜明け方、御不浄に立ちたくなって、私はカバーの存在に気付き、幼ない頃の安堵感を覚えて、半醒半睡で洩らすのです……。

少しおくれて昭和四十年三月号二十四頁にはF氏の「素晴らしき哉、竹野ひろ子」なる一文が見え、次のような一節がある。

……それは彼女の希望も半ばあるのですが、絶えずオシメカバーを着用している事で、小生がそれを交換して差上げる事です……。

それから四年以上を経て、昭和四十四年十二月号二二頁の、辻村氏の文中に概要が引用されているF氏の手紙によると、夜尿症になってしまった竹野ひろ子に、F氏が閉口している事情が残酷な表現で記されている。

その少し前、十月号の冒頭の「異常者のカ

ルテ」と題する暗闇太郎氏の告白は、夜尿症である氏自身がおしめを試用した感想を述べている。但し、氏の夜尿は子どものそれではなくて男性のそれであり、性的に甘美な陶酔を伴う夢のクライマックスを彩るものである。

氏の不満は、洩れ始めると醒めて不快のどん底に突きおとされ、陶酔が中絶されることである。ある夜、試みにおしめを着けて寝た氏は、洩れ出しの際に、例によって一瞬、醒めて抑制するが、おしめに気付いて抑制を解き甘美な夢の余情を心ゆくまで味わったのである。何回か使用するうちに、氏は放尿の抑制を失いかけているのに気付き、このまま進むと廃人になると慄然とする。そして断腸の思いでおしめを遠ざけようと努力する。

ところで、私は昭和四十三年の十二月号に「夜尿願望者の現状」という拙文を載せていただいたことがあり、暗闇太郎氏も、それを自稿中に引用しておられた。だが、その言いまわしのせいか、私が今頃は廃人になっていることを予想しておられるように私には感じられ、「あの夜尿願望者のように廃人になるのは御免だ」と言いたげに見えたので、私が何とか一筆、起こさねばと思っている矢先に十二月号が届き、さきの竹野ひろ子の近況を

読んだのである。

まるで暗闇太郎氏は予言者のようである。予言通りに廃人化したら大変だと、私は足がすくむ思いがした。

少し長くなったが右を前おきとして以下に「おしめ性夜尿症」という標題に沿って私の意見と生活体験を語ることにする。

第一章 夜尿をどう見るか

夜尿症者は廃人かどうか。社会生活の成否を尺度とすれば、不利な点は確かに認められるが、その点以外の九分九厘までは常人と変わらない。最も妥当な表現は「病弱ではないが無理がきかない人」であろう。要するに廃人ではない。

夜尿が与える直接の被害は、夜具の汚損である。夜具の特性は、洗濯ができないこと。

持ち歩きができないため外泊の際には先方の備え付けを用いなければならぬこと、である。人体の現象としては「いびき」などと同程度の些細な事件であるが、夜具の汚損という結果を伴うので騒がれるのである。

夜尿症の解釈で特徴的なのは、これを病氣と見ないで奇癖と見ることである。夜尿病は本人に直接、身体的苦痛を与えないから、た

とえ医者の本には病氣の部に入れてあっても素人的感覚では病氣とは感じられない。他の病氣なら病氣と他人に告げることが気楽にできるし、他人はそれに同情する。しかし夜尿症は、他人の立場からすれば、ユーモラスな奇癖である。冷やかし、からかうのに絶好のタネである。夜尿症者におしめを当ててみたのは、大の男や女が、赤ん坊のものをを使うという面白さ故である。からかうに手ごたえが増すからである。夜尿症者が、おしめの利用など思いつかない振りをするのは、そのためである。

第二章 おしめ嗜癖の解釈

夜尿症は本人の肉体にとっては何の苦痛もない。それどころか、健康的快感を持つ。尿意に追いたてられない朝、尿意も放尿も気づかない寝入りバナの熟睡。夜具の汚損を叱られる苦痛、人から笑われる苦痛、つまり精神的苦痛の大きさに気を取られて見落としがちなのが、この種の肉体的安易感である。

さらに、性的な快感も無視できない。性的発達段階のある時期には、夜尿は特異な感覚の原因となるが、特に成人男子については顕著な性的感覚類似の感覚がある。夜尿症では

ないが夜尿の体験を鮮明に持つ人は、夜尿願望を持っている。おしめ嗜癖は、その願望の屈折した表現である。

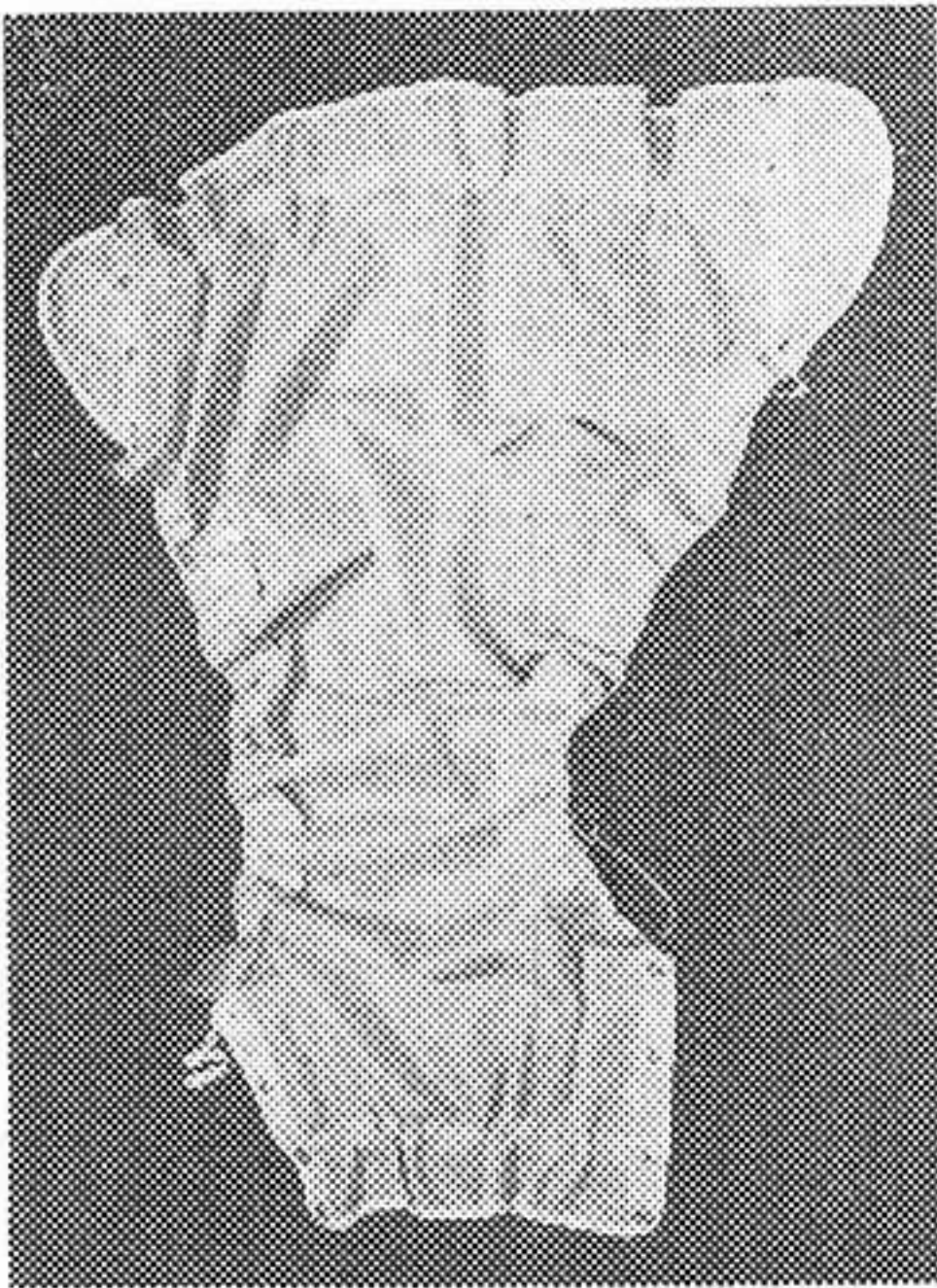
おしめの美人画に興味を持ったり、浣腸用におしめを使ったりする人が、夜尿願望を持っているとは限らない。夜尿願望の裏付けのない、おしめ好きは本物ではない。

夜尿願望のある人が、おしめを使い出すと願望を叶えようとする。そして夜尿の真似をする。これを繰り返すと夜尿症になる可能性がある。おしめ愛好者は、この点を恐れる。だから不徹底なことをする。いつも欲求不満である。おしめ嗜好の原因の夜尿願望は夜尿症を期待している。夜尿を恐れる度が強くなるにつれて、おしめのよるこびは色あせる。

第三章 おしめ中での放尿

おしめを着けて寝た夜の放尿の過程は次のように細分できる。

- (一)尿が貯まる
- (二)充満感を生ずる
- (三)尿意を確認する(抑制がかかる)
- (四)おしめの存在を知る(安堵感を生ず)
- (五)抑制が解ける



(六)膀胱が収縮する(放尿開始)

(七)尿の流れを覚える(驚く)

(八)括約筋がしまる(抑制がかかる)

(九)前記(三)からやり直し

(十)放尿完了(満足・充足・解放)

(十一)局部の湿りを意識する

なお補足すると、尿意とは抑制感覚であって、尿意のない時期は抑制もない。抑制がなくとも括約筋は自然にしまっているから尿の流出は起きない。いわゆる「膀胱が空」というのは、空のタンクのような状態ではない。小さく縮んだ状態である。(二)の充満感を生ずるのである。そして間もなく、最初の尿意を生ずるに必要な尿量は、正常な排尿の一回分

(たとえば三〇〇グラム)の数分の一であり神経の緊張度によって左右される。

さて、夜尿願望が存在する者が、おしめへの放尿をするときは、できるだけスムーズに夢うつつの境地であることを図る。そこで馴れるに従って放尿が容易になる。最初に省略されるのは、段階(八)で、省略されるばかりでなく、肌を伝わる尿流で放尿が加速されるようになる。普通人では、このとき放尿が急に中断されて跳び起きるのであるから、大きい違いであると言える。

おしめが完全で、夜具の汚損がないことを経験すると、(四)から(五)への進行がスムーズになり、おしめが不完全で粗相すると、それ以後、かなり長期にわたって心理的障壁を生じ(四)から(五)への進行が阻止されて、尿が洩れなくて苦しい思いをする。完全なおしめを常用していると(四)を省略して、(三)から(五)への直行が不安なしにできるようになる。(三)で尿意を感じ、即ち、抑制が掛かってから(四)で抑制が解けるまでの時間は馴れとともに急に短くなり、それが睡眠から覚醒への移行に必要な時間と同程度になると、睡眠の深さによっては覚醒に達しないうちに放尿が起こって、覚醒への刺激であった尿意が消失することにな

る。これが夜尿症でなくて何であろう。

この状態は、正常人でも覚醒に手間取るほど深く眠ることがあると起こり得る。ところで、結局めざめないとすれば、尿意を生じようと、生じまいと、洩らすことに変わりはない。抑制が掛かることなしに(二)から(六)への直行でも同じである。これは、おしめ時代の赤ん坊の型であるが、おしめ嗜好者が、ここまです落ちこむかどうかは疑問がある。その理由は、夜尿の練習そのものが意識的なものであって、全面無意識での放尿を体得する手掛かりがないからである。

だから、達し得る限界は、普通の深さの睡眠において、洩れ直前、または洩れ始め直後に覚醒する程度であろう。睡眠が浅い場合は放尿のたびに、翌朝思い出せる程度の尿意を覚え、中ぐらいの場合は、放尿時は気付いて翌朝は思い出せない程度の尿意を覚え、深い場合は放尿時さえも気付かないことになり日によって、体調によって変化に富んだ様相を呈する。夜尿練習の初期や中期は意志力の浪費を要するため、睡眠はおしめによって妨げられるが、完成期に入ると意志の介入が殆ど不要になって、おしめによる安眠が得られる。ただし、性的な色あいを持つ夜明け前の

放尿快感は、夜尿習慣が未完成のうちの方が求めやすく、完成期に入ると、放尿そのものが無意識化して感動を失い、意欲的な放尿快感は、前の夜、眠る前に意識的にする放尿に求めることになる。

第四章 条件反射の条件

動物の訓練も人間の訓練も、条件反射を利用する。困った習慣も条件反射で説明のつくものが多い。私が夜尿願望を満たすのに成功しながら廃人にならないで済んだのは、条件反射理論を応用したからである。廃人にならない保証があるからこそ、夜尿練習が可能なのである。

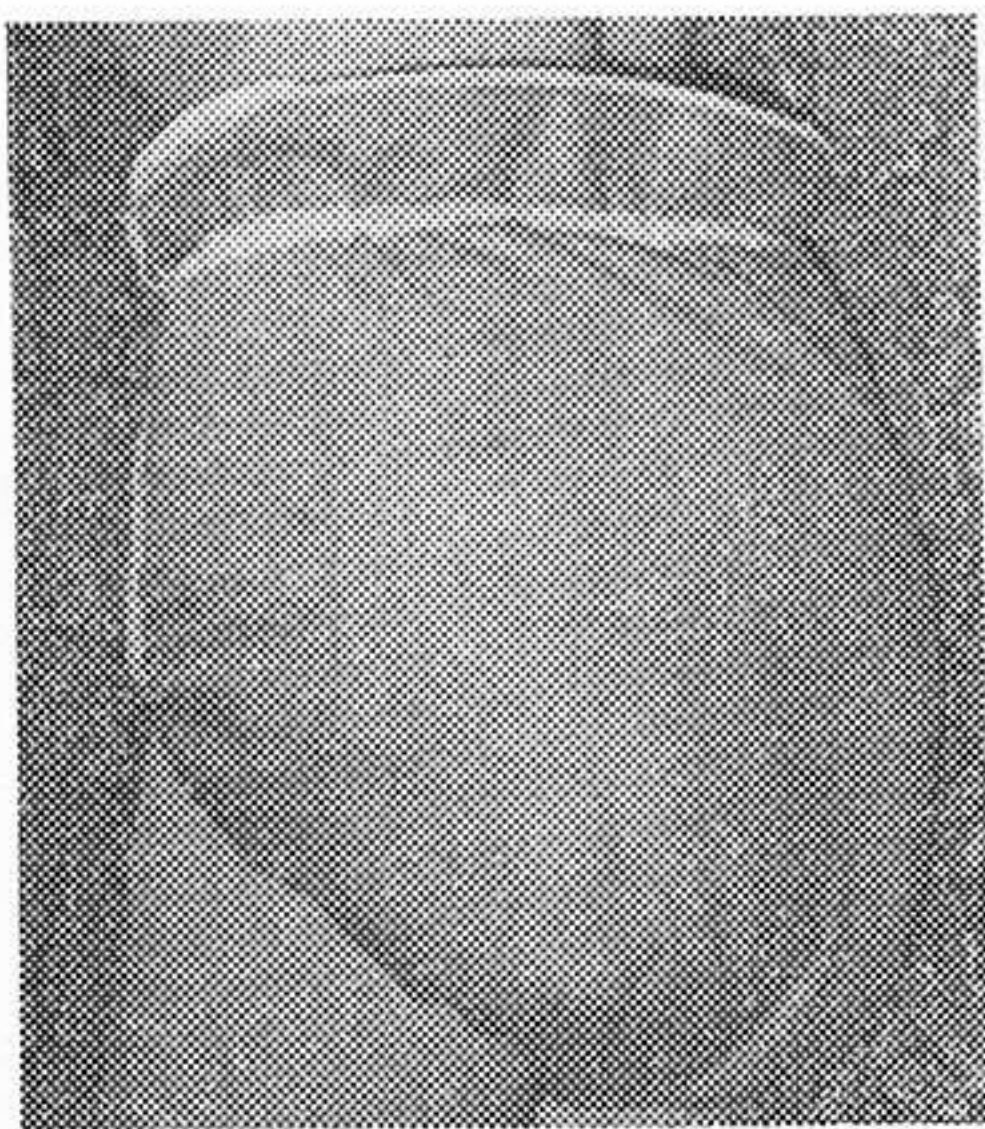
では、如何なる条件を設けたらよいか。仮りに「夜、ふとんのなかで」という条件のもとで夜尿練習をやって成功したらどうか。願望は叶えられよう。しかし、自宅以外で夜を過ごす必要、即ち旅行などの際は困る。夜尿願望が叶えられたという満足は現実の生活の支障で吹きとんでしまう。十二月号に辻村氏の言うごとく「過ぎたるは及ばざるが如し」である。

では、条件をさらに加えて「ふとんの中でおしめを着けた状態で」習慣づけしたらどう

か。つまり、おしめを着けていないと夜尿ができないわけである。旅行のときは、おしめを用いなければ良いのである。たしかに、単純に考えると原理的に正しいと言える。しかし物には必ず「不現実性」があり、その逃げ道を作り忘れると結果的に失敗する。国産の人工衛星をこきおろすのは心苦しいが、失敗の原因が判明することよりも、打上げに成功する方が、学問的にはどうか知らないが我々としては好ましいのである。

夜尿願望を叶えるという試みは本来、危険なもので、失敗して横道にそれると一大事である。計算通りに行かない点があることを計算に入れて、設計すべきである。おしめ着用で夜尿を繰り返して成立した習慣は、練習時の「おしめを意識でキャッチしてから意識で放尿する」という行動が、次第に無意識化して行なった到達点である。

我々が普通の生活で「外界の条件をキャッチ」するのは眼か耳か、せいぜい鼻までである。ところが夜尿については触感・圧感が主体となる。問題は、この部位の識別能力が低いことである。おしめか否かは眼で見れば判断を誤ることはないが「お尻」は容易に勘違いする。おしめが、昼間のプレイ用ならば



使用感の強烈な、しめつけ型が適しているが夜尿では毎夜（のように）八時間、連続着用するため、肌、特に腿回りの肌をいたわる必要があつて、締めつけは許されない。また、眠りを妨げないために、おしめの巻き方を工夫して圧迫が生じないようにする。要するにおしめと普通の肌着との区別が曖昧なままで夜尿練習をするというわけで、意識の介入を要しなくなる程度に達すると、無差別夜尿が生ずると予想される。冒頭に引用した松本淑子の言う本当のオネショは、このようにして成立したのではなからうか。

条件としてこの上、何を加えたらよいか。局所の皮膚感覚のみによって、誤りなく識別

できるような特異な条件は何か。それは、下腹部から腿のつけ根にかけての一带に、ぬれた布をあてがうことである。これの最大の利点は、練習以前から放尿を誘発する感じがすること、意志力の浪費が避けられる点である。育児書に言う通り、ぬれたおしめを着けさせておくと「平気」になるのである。下腹部というのは背側にくらべて感覚が鋭敏だから、ぬれたおしめに反応するように自分を習慣づけることは容易である。

この方式は、生活の安全確保に極めて有効である。というのは、ぬれたおしめ類似の感覚を与える肌着の例は見当たらないにしても夢を見て勘ちがいする可能性がないとは言えない。つまり、条件が整ってないのに整ったような感動を生ずるのである。普通の人は、それでも放尿を喰いとめるので全く洩らさないか、洩しても僅かであるが、夜尿の練習をつむと放尿開始後の抑制が消失するので、大事に至ってしまう。朝になって確実に粗相なく生還するには、万が一のための装備をしなければならぬ。要するに習慣的な条件反射行動の不確実さへの配慮として、粗相が許されない成人の夜尿願望者は、原則として年間を通じて毎夜おしめを用いるのでなければ、

願望が叶えられないのである。

旅行の際などのように、おしめの洗濯乾燥に難儀する場合は、夜尿は出現しないことが望ましい。しかも、万が一のために、おしめは着用していなければならない。おしめ着用で夜尿習慣を作ることとは、この意味からも好ましくない。

一旦、形成した習慣を消すことが事実上、困難であるという点も忘れてはならない。もし固定化したら困ると思う行為は、かりそめにもすべきでない。たとえば、おしめを着用しないで夜具の上に放尿するという行為がそれである。

スポーツの技能の練習中に悪ふざけをすることが、正しい進歩を脱線させてしまう危険を包蔵しているのは知られた事実である。夜尿という危険なスポーツには、何よりも真面目に取り組むことが、後悔しないための安全保証条件である。

第五章 実技体験記

以上の理論に基づいて私が本気で夜尿を始めたのは昭和四十三年の春であった。夜尿願望の実現の欲求を感じて最初のゴムカバーを求めたのがその二年前であるから、理論的検

討には充分な時間があつた。

今の私の習慣は正確に言うところ「おしめ性遺尿症」であり、ぬれたおしめを着用していると、昼夜を問わず自動的に放尿が起こるのである。これは、休日に起床後もおしめを脱がず、夜の続きの気分夕方まで放尿するという行動を繰り返した結果である。

昨夜来の放尿行動に油が乗った感じで、膀胱は小さくなったまま、括約筋は締まることを忘れたままなので、尿意というほどの尿意なしに微量ずつの超頻尿が起こる。洩れる際、それに気付くが、何かに熱中しているとそれに気付かないこともある。昼間でもこのような「遺尿」をするわけだから夜間睡眠中は言うまでもない。

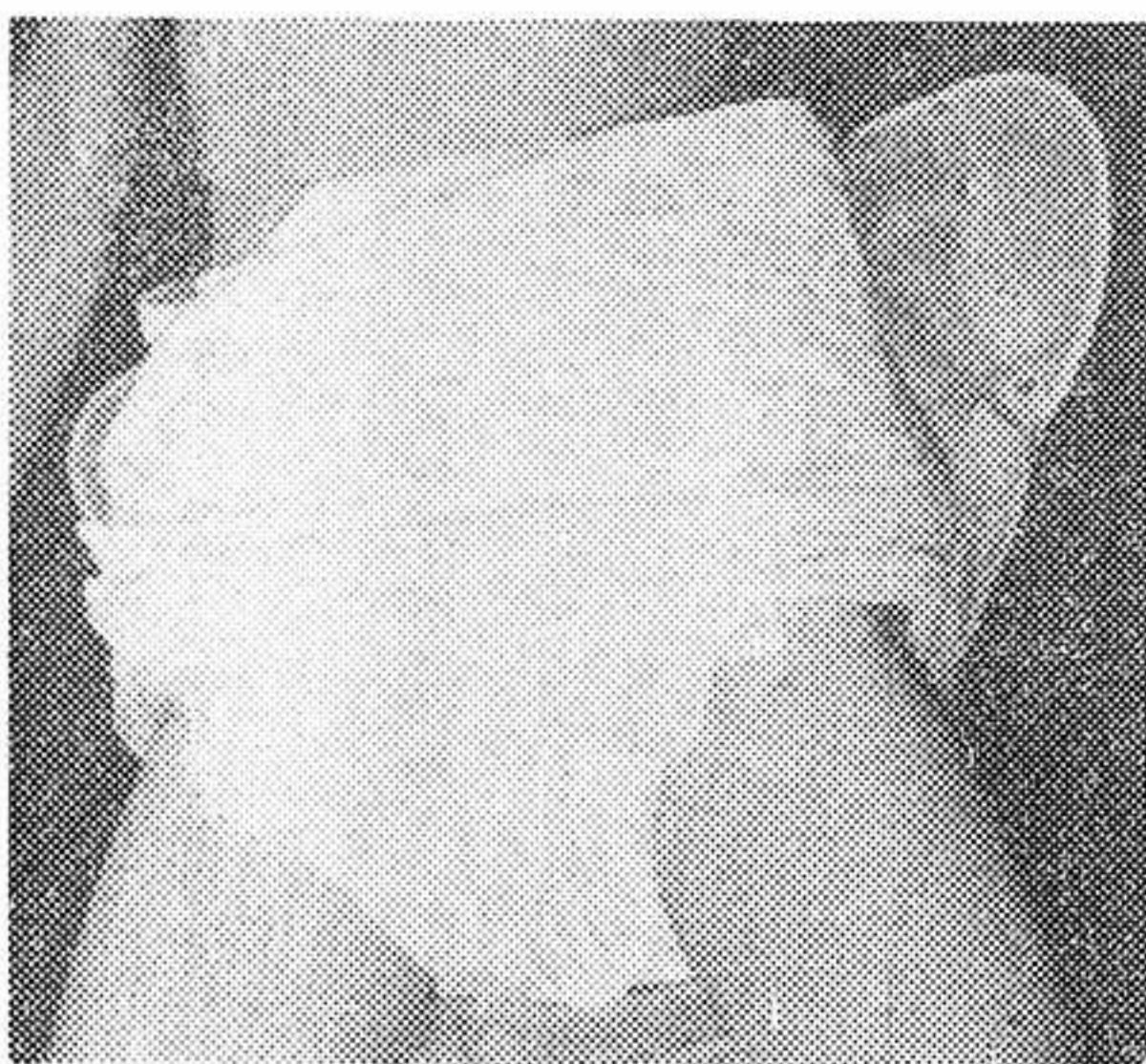
遺尿をたのしむ時以外は尿をこらえ、大量の尿をまとめて排出する。便所に行くのが生まれつき嫌いだというせいであるが、このおかげで膀胱の機能と括約筋の機能は、一人前以上に保たれている。ぬれたおしめの中で、私が本当に抑制を失ってしまうことができる根拠は、このような安全確認のシステムを持っているからである。

寝るときは毎晩、完全装備をする。平日は乾布量六〇〇グラム、休日前夜は八〇〇グラ

ムという大量を用いる。粗相がもたらす衝撃にくらべれば洗濯の手間など知れたもので、少々節約して粗相などしたら引合わない。

カバーは十一月号二六〇頁のダンロップ印の改造品、多尿が予想されるときはカバーの上に木綿のブルマーを穿き、さらに自作のゴムブルマーを穿いて粗相を予防する。

旅行の際は、おしめ着用で夜尿しないことが必要であるから、平常その可能性を確認しておく。そこで夜尿しない日とする日が適宜、混在するようにしておく。但し、安らか



な夜と安らかな起床を望み起床前の便所行きはお断わりとする。

従って冬期三カ月は、昨年四月号に発表したように、保健的な観点から夜尿を励行し、十二月下旬から三月上旬までは毎晩である。

思うに、体の弱い子が冬に夜尿を頻発するのも自然に備わった保健のメカニズムであろう。確かに心身好調で、カゼのために休む日数が冬期にはゼロに近くなった。

夏は、夜尿をしたいと思う日は水分を多めに取る。夜食に西瓜などがこの目的に合う。寝る前には必ず便所で排尿をすませる。これは規律正しい生活の必要条件である。それに毎夜の出発条件を一定にするという目的もある。これを前提として、おしめの枚数をきめているのである。

寝つくまでに尿意が出現するような夜は夜尿することが望ましい。もし、そのまま寝てしまうと、明け方、尿意でたたき起こされてしまう。ここで便所に行けば、おしめは乾いたままにしておけるわけで、これが旅行先での私の姿であり、在宅時でも同様な方法で安全を随時、点検するのである。

そのような夜は別として、夜尿を出現させたい夜は、寝つく前に貯まる尿が、例の「呼

び水”の役をする。うつぶせになり、ゴムブルマーを穿いている時（冬期）はそのままでおしめカバーが露出している時（夏期）は、シーツの上に、その時だけゴムシーツを敷いて、腹部から股の前方がぬれるように放尿する。丁度ぐっしよりぬれば理想的であるが丁度になることは、まずない。前を厚くしておくと粗相はしないが、ぬれ不足となり、うすくしておけば、必ずと言ってよい程カバーの脇や胴まわりから粗相する。ぬれ不足は困るので前は厚くせず、放尿時に下腹部が水没するようにしている。

しばらく待って水が引いたころ、仰向けになって眠りつくのであるが、尻の下が乾いているので苦にならず眠りつける。こうして朝醒めたとき、尻の下までぐっしよりになっていて、尿意がさほど強くなければ、本物のオネショをしたことになるのである。

この前の冬は、明け方、尿意に気付いてから、おしめに放尿していた。それでも寢床を立たないで済むので、安眠効果があった。今回の冬は、連日のように本物のオネショである。前の冬は毎週一回くらい粗相して夜具や衣類をぬらしたが、今回はまだ一度も粗相しない。同じゴム製のものなのに、こうも違う

のは、おしめ布量の増加と、当て方の工夫の成果である。粗相への不安がこうして解消されたことが原因となって、今冬は本物が登場して来たのであろう。

第六章 プレイ的要素

本物のオネショが連続するようになってからは、明け方、意識的に放尿を楽しむチャンスが減ってしまった。本物は確かに健康的には違いないが、異常性欲的な快感とは無縁であって、何か物足りない。わざと洩らす快感は、おしめプレイの中心であるから、どこまでも、大事にしなければならぬと思っている。睡眠を妨害することも時々なら許されることに注目して、私が行なうのは頻尿プレイである。これは緑茶の出しがらでないやつを多めに飲んだうえで、多少の性的興奮を起こさせると容易に訪れる。出せども出せども尿意が去らないという急迫感が少なくとも三時間続く。そして明け方近くに疲れ切って深く快い眠りに落ち込み、日が高くなって醒めるのである。もちろん休日に限っている。

もう一つは、先にも述べたように、昼間の遺尿プレイである。私にとって、これは前夜からのおしめに、引続き洩らすことに意味がある。尿が新鮮なときに持つ生臭いような臭気とは全くちがった、円熟した塩っぱいような蒸れた臭いがして来るのである。どっちみち尿臭のことだから微弱なものであるが、この微かな臭気が、私には大切なのである。それ故に、微かなアンモニア臭が発生するまで着用しているのである。ゴムカバーがゴムであることの良さは、この頃になって実感される。

ゴムカバーは洗濯しないで、尿にぬれたまま乾かすのが最もよい。尿臭のあるゴムカバーは、それ自体が夜尿を誘発する気がする。それを知っているので私は、旅行用には石けんの香が残る、洗いさらしたビニール製カバーを持参するにしている。

どうかすると遺尿プレイを、次の夜まで続けてしまうことがある。この時は機能を正常にもどす暇がないので、次の夜も夜尿せざるを得ない。この場合は、寝るときに当てるのではなくて交換するわけだが、交換している間にも洩れそうで不安である。わざとじらせながらこの不安をたのしんだ末に交換が完了しゴムカバーの最後のホックの音を合図に洩らし、その後も頻発させつつ眠りに入る。そして次の日はしばらくぶりに括約筋を利用し、

膀胱を限度まで利用する生活に戻るのだ。

私は便をおしめの中にする気がないので、途中で便意を生ずるとそのまま便所に行き便だけを出した後、再びおしめの中への放尿を続ける。私に言わせれば、便のように雑菌雑物の多いものをおしめ中に滞留させるのは衛生上の危険があり、強い臭気で不快感を覚えるだけであり、プレイには向かない。

第七章 私のなやみ

すべてがうまく行っているように書いた私にも、困った問題がある。少なくとも夜尿に関する限り、事は順調に行っている。その点に後悔はない。告白のチャンスが他にあるとも思えないので、ここで述べておくと、それは性的欲求と、おしめの結びつきである。

子ども時代からおしめが好きだった私は、

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

年ごろに達した時、禪に特別な感覚を発見したのが契機となって、おしめに心をひかれるようになった。夜、赤ん坊のおしめを当てて放尿しようと力むうちに精通を見た。その後頻々と下着が少しだがぬれるのを、夜尿症と思いついで（思いこんだのか、思いこみたかったのか）その後、おしめを時々用いるようになった。気がたかぶって来ると、その夜はおしめを当てた。当てると反射的に放出が起こり緊張が去った。そのあと急に尿意を覚えてやりきれない気持だった。

始めのうちは一旦起きて便所に行き、そのあと、おしめを外して再度就床していたが、いつのまにか放尿まで寝たまますようになった。それでも、気持が悪いので、おしめは外してから眠った。いつの頃からか、夢におしめが登場するようになり、下着がぬれた。

その頃には、おしめがないとエネルギーの処理ができなくなっていた。女性の裸体も、おしめと重ねて頭の中で映像を合成した後でなければ、私をかりたてなかった。おしめの夢は、また夜尿も誘った。それは素晴らしい快感があった。おしめを当てて寝ると、そのような現象は何日何週間待っても現われなかった。おしめを中止すると皮肉にも同じような

夜尿をした。

おしめの助けがないと女性に欲求を覚えなことが、私を結婚から遠ざけた。おしめは私が男性であるための必要な道具であり背景であることがわかった。「オムツを当てた花嫁さん」という表現は私にとって何よりも煽情的であった。現実には私にとって何よりも得られないことが、私をして自分が「オムツを当てた花嫁さん」になろうとさせたのである。

このような経緯のため、私の場合は、夜尿願望成就の手段としてのおしめに執着するほかに、別の面からのおしめ渴望があつて、それが相補しあつて私を駆りたてたのである。

性的な面で、おしめなしに欲求処理ができなくなってしまうことは悲しいことであるが、その体験は夜尿症習慣をつけるのに大いに役立った。おしめの中での私は重症の夜尿症ぶりを発揮するというのは、実を言えば、おしめなしには夜尿ができないことである。もし先に夜尿症になっていたら、おしめの有無は問題にならないであろう。私は無知のために異性に欲情を覚えないうちに、性とおしめを結びつけてしまった。私が悔ありと感じるのは、まさにその点である。夜尿症は、うまく成功したというのに。

（終）

青春の陥穽 (6)

女 郎

(じょうぐも)

蜘蛛

A

大崎夫人の貞操帯、いや、アヌス拡張器の話は、淫乱な葉子を少々刺激しすぎたようであつた。

SEXのことなど何も知らない、結婚もないネンネの新妻に、こともあろうに、そんな無理を強いるなど、一般の夫婦生活では考えられぬことを、平気で新妻に要求する若い大崎に、葉子は非常に興味をいだいたらしかった。

大崎はサラリーマンだから、時間がくれば

芳 野

眉 美



会社に出勤するのだろうが、大崎夫人はその前に排泄をすませてしまうのか、そのところは、よくわからないが、貞操帯のように必要な穴があげられてあるのに違いない。

会社からもどると、大崎は妻を犬のように四つ這いにさせて、まるで宝石でも鑑賞するように、眼を細めながら拡張器の効果を調べるのだろう。

幼児時代、排尿排便による尿道性感、肛門性感を感じるのが性慾のはじめというから夫の意のままに従っている大崎夫人は、まだ幼年期の性感がそのまま残っていて夫の異常な

趣味を少しも疑っていないのかもしれない。結婚前の大崎は、きっとホモセクシュアルの経験者だったのだと思う。そうでなければそんな考案などはしないはずである。

ホモは全世界的に広がり、SEX革命の波に乗って、すでに隠花植物から脱している。女を知る前に、簡単にホモを体験してしまう環境が、売春防止法以来、出来てしまったといってもいい。

ゲイバーや女装クラブが数多くネオン街に咲き、変性男子がテレビで人気を得、男性ヌードが女カメラマンの手で週刊誌に発表され

ていく。

男対男が、まるでスポーツのようにぶつかりあい、ひとつのベッドに寝るなどというところが、なんのためらいもなく、ごく自然におこなわれる。

デザイナー、美容師、学生が多いというのは、きつと社会的な枠から、はみでた自由人が多いからだろう。

大崎もきつと、魔力的な異質の境地を知っているのに違いない。

常識的な結婚をした大崎は、結婚祝にプレゼントされた、だれに気兼ねもない二人だけの城の中で、加虐的な自分の性癖と、ホモのテクニクを結びつけ、まだ幼さのぬけきらない新妻の飼育にとりかかったのではないかと考えられる。

大崎の家を覗いた報告を終わった勇は、もうこれでゆっくり寝られるだろうと思ったが葉子の眼が話の進行につれて異様に、ぎらぎらと輝きだし、ぼってりした唇が濡れ濡れとし始め、同じことを繰り返し、しっつくく聞かれて、ぞっとした。

片膝ついた葉子の手が、いつの間にか長襦袢の裾を割っていた。

葉子が男好きなのは、体質のせい、性的

感受性が普通の女より鋭敏すぎて、自分でもどうしようもなくなってしまうのかもしれないかった。

幼児のするように指をふと口にもっていつて、まるであめでもしゃぶるようにその指を舐め、

「おいしいわ」

と、つぶやきながら勇を見て、妖艶な微笑を浮かべた。

悪い予感がした。

「おいで」

と葉子が勇にいった。

唐紙を開けると、台所に葉子の夫の三田が転がっていた。

三田は頭から、すっぽりと葉子の穿き古しの腰巻で包まれ、その上から荒縄で、ぎりぎりに縛られて、台所の板の間にほっておかれていたのである。

妻の葉子にいじめられて、もっぱら奉仕的な日常を喜んでいるのが三田の奇妙な性癖とはいえ、葉子の夫のあつかいは少々乱暴すぎるようであった。

しかし、その乱暴さが、三田にとって過度ともいえないらしいことは、親展と書いてある封筒をかぶせられているのが、すっぽぬけ

もせずにいることで知れた。

葉子の汚れた腰巻で顔を包まれていることが、三田の喜悦を長く持続させている原因のようであった。

葉子は親展の封筒をとり、腰巻をまいた夫の顔を見るようにまたいで、腰を落ち着かせた。

「胸を、またいでごらん」

と葉子は小さな声で、しかし三田に聞かれるの用心しているようには思えないいい方で、勇にいった。

勇は、あわてて指を唇にあてた。葉子の耳に口を寄せ、

「聞こえますよ」

と、ささやいた。

「聞こえるものか。早く」

と勇を、せきたてた。

勇は長襦袢を頭からかぶされて、柱に荒縄でくくりつけられた前に葉子が弘という若い男を招き入れた日のことを思い出していた。

いくら長襦袢で顔を包まれ、口の中まで襦袢を押し込まれ、荒縄で耳を封じられていても、葉子と弘の会話はよく聞こえたし、葉子の妙に上ずった声や、とりすました弘の聲がやけに、がんがん耳に響いたことを、おぼえ

ていた。

腰巻は、まだ長襦袢より小さく薄いのである。葉子と勇の会話が三田に聞こえないはずはなかった。

勇が弘に対して妬いたように、また、見知らぬ男に対して、屈辱感と憤怒を感じたように、いま妻の腰巻でテルテル坊主にされている三田は、被虐的な甘い恍惚を通り越して、きつと夫の目の前で妻と姦通している男に殺意をいだいたのに違いないと、勇はそう思ったのであった。

それに三田は、勇の声をよく知っているのである。

妻と話をしている男が、隣で留守番のアルバイトをしていた勇であることに気づいていないはずである。

「御主人、ねむってはいませんよ」

おそろおそろ口を寄せた勇は、葉子の耳元でささやいた。

「それがどうかしたの」

「わかってしまいますよ」

「わからないわよ」

勇を情事の肴にした弘のときは、立場が違うのである。

葉子に、庭に首だけをだした生き埋めにさ

れ、人間植物にされて頭から葉子の肥料を浴びせられたとき、不意に三田の車が帰ってきて、穴の手前で止まった恐怖が、再び勇の胸を横切った。

三田にみつかつては、二度と葉子に会えなくなるという不安もあった。

「勇」

と葉子が、はっきりした声で勇の名前を呼んだ。

「あっ」

と勇は思わず声をたてるところであった。

もう絶望であった。

腰巻のテルテル坊主の頭が、一瞬、動いたようであった。

三田は完全に妻の姦通の相手を知ってしまったことだろう。

「こいつの胸をまたいで」

夫が聞いていようがいまいが、聞こえないつもりなのか、それとも完全に三田を無視しているのか、葉子の声は、勇がもじもじしていればいるほど、次第に大きくなるばかりであった。

眼をつぶって勇は、思いきって三田の胸をまたいだ。

「立ったままでいいよ」

葉子のしなやかな指が、勇のズボンのボタンをはずそうとした。

「フフ、どうしたの、いったい」

精神的な疲労と恐怖は、勇の生気を奪ってしまったらしい。

「しょうがないわねえ」

チェツと舌打ちして、葉子は勇の腰に手をまわしてきた。

ぎゅっと尻を葉子に抱きすくめられて、勇はあわてて葉子の肩につかまり、かろうじて上体を支えた。

週刊誌の記事に、fellatio という言葉がよくでてくるのも、SEX革命のおかげかもしれない。

fellatio は、まだキスの段階であり、このヘビーキスを知っていても、処女は多いという奇妙な現象が、現在の性知識を物語っているのである。

キスだけなら妊娠のおそれもなく、公園でも車の中でも映画館の中でも、喫茶店ですらたやすく出来るから、週刊誌の記事をうのみにしてしまう若い女性が多いのだろう。

「あいつ、好きだろう。だからよ、口がこんなにものはれあがってしまいやがった。馬鹿だよ、あの女」

喫茶店で、若い男のグループのこんな会話を聞いたことがある。

葉子は勇をとらえ、夫をコキユにしながら同時に二人の男を征服しようとするつもりらしい。

「いけない」

勇は呻いた。首を夢中でふった。疲れているので、とにかく眠りたかった。

「はなして下さい」

葉子の、のどが鳴った。

B

わずかな時間だったが、勇は寝た。

葉子との真昼の密会から、大崎夫妻の秘密を盗見し、更に緊縛された三田の上での異常なトリプルプレーという連続労働では、いくら若い勇とはいえ、完全にグロッキーになるのは当然である。

葉子は夫の顔から腰巻をとってやるわけではなく、そのまま台所に、転がしたままである。ただ勇に命じて、毛布を三田にかけさせただけであった。

唐紙一枚へだてて主人がいるのに、その妻の寝床で眠るという冒険をあえて冒したのは三田が縛られているという理由だけではなく

とにかく勇は眠りたかったのである。

勇は布団に倒れたまま、夢うつつの中で葉子のなすがままにされていた。

早朝、勇は葉子に起こされた。

「スケベジジイを起こす時間だから、しばらくかくれておいで」

「また、押入ですか」

半分、眠りながら勇は、きいた。

「馬鹿だね。オヤジは毛布一枚でも押入にしまっていくほど、家の中をかたづけするのが好きなんだよ」

「こんなせまい家で、かくれるところがあるのですか」

「ごみを焼く穴が庭にあるわ」

「生き埋めなんて、もうたくさん」

「じゃ、便所にかくれておいで」

「それこそ御主人に、みつかってしまう」

「大丈夫。うちのは汲取りでしょう。オツリがくるのをいやがって、でかけてから、どこかのビルの洋式で、ゆっくり新聞でも読みながらっていうのが楽しみなんだから」

「でも、今朝もそうだという保証は、どこにもありませんよ」

「めんどくさいわね。いっそのこと、糞壺の中にでもはいつて、頭からすっぽりと埋ま

っていたらどう？ 中味はみんな葉子のもんだから」

便所の汲み取り口から葉子を覗いていた現行犯の勇のことだから、葉子から悪態をつかれても、だまっているより仕方がない。

「どこでもいいですよ。とにかく眠らせて下さい」

勇は布団に横になったまま、背中を丸めていた。

「まさか、便所の下にかくすわけにもいかなし……便所の下ね。……そうだ、いいところがある」

隣室の、台所と玄関の間にある四畳半の部屋に勇を招き、畳を一枚、静かにはぐようといった。

「そつとよ。オヤジに気がつかれないようにね」

新しい畳だが、掃除ぎらいで汚すことだけしか考えていない葉子が相手では、いくら綺麗好きの三田でも手がとどかないらしく、かなり古畳のようにくろずんでいた。

葉子にいわれた通り、畳をあげ、床板をはずすと、ぽっかり穴があいていて勇を驚かせた。

「なんです。この穴は」

「防空壕のあとだって。オヤジが、そういつていたわ」

「防空壕って、なんだろう」

戦後っ子もいいところの勇に、ぴんとこないのも無理はない。

戦争中は、今は廃墟のようになっている隣の工場も、きっと軍需工場だったのかもしれないし、裏手の雑草が茂っている空地は、食糧増産のため、一面の畠だったのかもしれないかった。

その筋の強制的な命令で、都会のどの家庭でもがやったように、縁の下に穴を掘り、それこそ役に立たない防空壕をつくったものなのだろう。

郊外のへんぴな土地がら、別に空襲も受けず、土を掘ったまま、この壕は一度も使われぬまま、忘れさられてしまったのかもしれないかった。

「よくわからないけど、ここなら見つからないわよ」

葉子は裸の勇に、中に入るように促した。

「何か下に敷く物を下さい」

勇は、すっかり観念して葉子にいった。

葉子は庭に出て、むしろを持ち込み、穴の中にほうり込むと、

「早くして」

縁の下のしめった土の匂いのまじった冷たい風に、急におじけづいた勇に、怒ったような顔を見せた。

「ぼやぼやしていないで、さっさとお入りしたら」

背中をけとばされて、勇は思わず落ち込みそうになり、あわてて防空壕にすべり下り、むしろにへたへたと坐ってしまった。

勇の服や下着が上から投げられた。

「何か、くるまるものを下さい」

「うるさいわねえ、これでも着ておいで」

葉子は着ていた長襦袢を脱ぐと、勇の顔にふわりと落とした。

「葉子の匂いでも嗅いで、しばらく、がまんしているのね」

葉子は床板を元通りにしようとして、

「そうそう、忘れていた」

何を思いついたのか、八畳の押入れの中から犬の首輪を持ち出してきた。

「オヤジったら、犬屋からこんなものを買ってきたんだ。葉子の犬になってくらしたいんだってさ」

勇の首をのばさせ、がっちりと犬の首輪をはめると、首輪の鎖を土台につないで、錠ま

でかけてしまった。

「これなら逃げられない」

畳がおろされて、急に暗くなった。

坐っていると、床が頭につきそうで、そう深くはなかった。長い年月、埋められることもなくほっておかれて、少しは浅くなったものだろうが、始めから役立たずの防空壕を、前住者は本気で掘ったわけでもなさそうであった。

完全にまっ暗でないのは、古い家にありがちな土台が高く、囲いがしてないので、外の明るさが、そのまま縁の下にも忍び込んで来るからであった。

畳をおろされて密閉されると、急に縁の下独特の湿気に勇は悩まされた。まるで生きたまま墓に埋葬されたような錯覚にとらわれ、眠気がいっぺんにふっ飛んでしまった。

首を動かすと、あまり動かず、葉子は首輪の鎖をかなり短くして、土台に勇をつないだようであった。

無理して首をまわすと、蜘蛛の巣がべったりと顔にへばりついた。まるで葉子という女郎蜘蛛が、はった網にかかって、じたばたしている勇に、ぴったりした光景であった。

この役立たずの防空壕のように、このまま

忘れられてしまったら、勇の墓はこの穴になるわけであった。

この恐怖と不安を、かろうじて振り捨てたのは、手足が自由だったからであった。立てば、床板と畳を持ち上げるだけの気力はあった。助けを呼ぶことが出来るわけである。

むしろに坐ったものの、下着だけでは少々寒すぎた。畳の上と下では、あまりにも待遇が違いすぎる。

勇は葉子が脱いだばかりの長襦袢で身体を包み、顔を埋めて、脂粉のまじった葉子の刺激的な体臭に、土の湿気と死人の臭いを消そうとした。暗闇の中で、勇は鼻をぴくつかせるのであった。

少し気が静まると、朝の光が穴の中からでも見え、もし首輪で土台につながれていなかったら、縁の下を這って穴から脱けだし、駅前前のサウナにでも入って、ゆっくり身体を休めただろうと勇は思った。

葉子もそれに気がついて、急に勇の首に犬の首輪をはめ、鎖で土台につないでしまったもののなのだろう。葉子は、次から次へと勇の心理や行動を読む力があるようであった。

やがて、三田が車に乗り込み、仕事に出掛けていくのが防空壕に閉じ込められた勇にも

わかったが、待てども待てども頭上は開かなかった。

勇を穴の中にほうり込んだまま、葉子は深い眠りにについているようであった。

勇は葉子の長襦袢を頭からひっかぶると、絶望したまま、つとめて寝ようとした。が、眠るどころではなかった。

勇が床板をたたいて葉子と呼ばなかったのは、葉子の眠りをさまたげて、葉子の憤怒を買うのをおそれたからであろう。

淫乱な女郎蜘蛛にも休息は必要であった。

C

縁の下から眺める外界の世界は、横に細長い矩形に限られていて、見知らぬ国にきたような錯覚をあたえるから不思議であった。

玄関と便所は、コンクリートの壁で囲まれているから、そこだけは外界との視野をさえぎっているが、葉子が寝ている八畳の床下からは、隣の大崎の家の石塀の下が見えるし、反対側を振り向くと、郊外とはいえ空地にしておくのはもったいない広い土地の、ぼうぼうと伸びた雑草の根本が見えた。

地主が土地をほっておくのも、土地を売ったところで、馬鹿馬鹿しくなるほどの税金を

もっていられるから、それなら、かえってほっておいたほうがいいという気になっているからなのだろう。

葉子の脱いだばかりの長襦袢のぬくみをたよりに、うつらうつらはするものの、すぐ眼がさめてしまい、勇は早く葉子が、このいまわしい戦争の亡霊から解放してくれるのを待つばかりであった。

二軒の古ぼけた家の留守番のアルバイトをしたのが、この事件の発端なら、その一軒に葉子のような、あまりにも蠱惑的な女が引越してきたのも勇の運命を少々狂わせたのだろうし、覗きというのは男の本能で、これは仕方のないことだとしても、便所の汲み取り口に首を突っ込むという勇の心理は、本人にもよくわからない性的衝動というほかはない。

葉子の夫の三田が、常識外の性癖の持主であり、妻の葉子に責められ、いじめられて喜んでいいることは、たやすく勇を葉子に接近させた一つの理由になっているのかもしれない。

SEXというものが、相手のリードのままに鵜呑みにされ、興味本位の週刊誌的知識しか持っていない勇は、また容易に葉子の犬のように飼育されてしまったと考えられないこ

ともない。

これは大崎夫人にもいえることだろう。

葉子が好きだから、精神的というより、むしろ肉体的に、葉子からはなれることができないから、葉子の意のままに勇は振り廻されているのである。

庭先に葉子の小さな素足が見え勇は胸をどきりとさせて、その足の行方を追った。風呂と美容院に行くときしか外に出たことのない葉子のことだから、まさか勇を縁の下に閉じ込めたまま遠出はしないだろうが、あの弘という、氣にくわない奴から電話でもかかってきて、どこかのホテルにでも呼び出しを受けたのではないかと、勇はとんでもないことまで氣に病むのである。

弘にだけは、葉子は言葉使いも、がらりと違って丁寧だし、むしろ弘を怒らせるのをこわがっているような甘えた態度をとるし、三田にも勇にも見せたことのない葉子の上ずった声も、しゃくの種に思えてくる。

勇を暗い、じめじめした穴の中に鎖でつないで置いて、明るいホテルの一室で弘と……想像するだけで、勇は胸をしめつけられるような高ぶった嫉妬に、頭ががんするのであった。

しかし、すぐ庭先に美しい葉子の素足が見え、勇をほっとさせたが、すぐあとに、もう一人、女性の足があるのに気がついて、勇は胸さわぎがして、なかなか止まらなかった。いつでもだらしなく長襦袢一枚の葉子が、がらになく着物を着ているのも珍しいことだが、葉子のことだから、土中の勇を酒の肴にして、女同志で何か始めるのかもしれない。

床の下の矩形の外界では、葉子の着物の裾と足だけしか見えないが、葉子は着物を短く着る癖があるようで、小股の切れ上がった女という形容が、ぴったりするようであった。

小股が切れ上がる、というのは、広辞林でも、婦人のすらっとして粹なからだつきをいう、としか書いてないが、小股は、股が切れているわけではなく、すらりとした細身の女性の、くるぶしのあたりが、きゅうと細くなって美しいさまをいうそうで、湯上りのゆかたがけの夏姿に特に、よく見られるそうである。

女性の客はミニスカートで、勇がそう思ったのは、女ものの可愛いサンダルと足しか見えなかったからである。

やけに勇の頭上がさわがしくなり、勇が埋

められている四畳半に葉子は女客を通したらしく、葉子の歩く音や、卓袱台を置く音が、勇の耳にがん響いた。

さお茶の仕度ができたらしく、女らしい世間話が続いたが、いったい誰を連れて来たのだろうと真下で耳をすましている勇の耳に、

「大崎さんとは恋愛結婚なの」

と、きいている葉子の言葉がとびこんで、勇は、あっと思った。まさか隣の大崎夫人をお茶に呼ぶとは思わなかった。

勇から拡張器の報告を聞いて、じかに眼で見たいと葉子は、大崎夫人を自宅に誘ったのに違いなかった。

「ええ」

と、はにかむような子供っぽい大崎夫人の声が聞こえ、声だけ聞いていると、夫の眼の前で、あんな露骨な羞恥きわまりない態度を見せた本人とは、どうしても思えなかった。

社内結婚らしく、大崎は会社でも腕ききの営業マンで、いわばエリートコースであり、少し痩身なのは氣になったが、女子社員の間でも、うわさになったほどでもあり、大崎にプロポーズされると、ボーッとになって結婚を承諾してしまったらしかった。

「そうなの。絵里子さんって、幸福ね」

葉子の言葉は、皮肉なのかどうなのか勇にもわからなかった。

大崎が絵里子のM性を見抜いたのか、単純で素直な性格に飼育しがいがあると思ったのか、こればかりは本人に聞いてみないとわからないが、大崎の人間を見る眼は確実のようであった。

葉子の話が露骨な夫婦生活に急降下して、大崎夫人の返答が、まあ、とか、そんなこととか、しだいに口数が少なくなり、葉子の独演会になっていった。

「ねえ、絵里子さん、私、犬を飼っているのよ」

と突然、葉子が話題を変えた。

「あら、奥さまが犬を。でも、お庭にいませんわね」

「庭になんて、はなし飼いにしてなんかおりませんもの」

「おうちの中で飼っていらっしゃるの」

「そうね、うちの中といえば、うちの中ね」

「どこかしら。どこにも犬なんか、いないけど」

「お見せしましょうか」

「ええ、可愛い犬なんでしょう」

「どうかしら」

「そんなにもったいぶられると、よけいに見なくなってしまうわ」

「この下よ」

勇は、あっと思った。勇も本気で、葉子が本物の犬を買ってもらったのだとばかり思っていたのである。

「この下ですって」

という大崎夫人の不審そうな声がした。犬というのは、勇のことなのである。

「ええ、この下に大きな雄犬がいるの」

「大きな雄犬」

卓袱台がかたづけられ始める音がしたと思うと、畳がはずされ、床板が一気にとられて穴の中が急に明るくなった。

「――」

下を覗き込んで絵里子が、思わず口に手をあてた。あまりのことに声がでないようであった。

「いかが、私の雄犬」

「奥様」

「びっくりしたの？」

「驚きましたわ」

「そんなに驚くこともないと思うけど」

葉子は絵里子を振り返ってにやりとした。

「よく見てごらんないな、絵里子さん。こ

の雄犬ったら、私の長襦袢を頭からかぶって顔をあげようとしないうわ」

勇の全身に屈辱感と羞恥心がかけめぐっていたが、弘に見られたときは違った、甘い陶酔を感じたのは妙であった。

大崎絵里子が美しい人妻だったからに違いなかった。

「顔をお見せしたら」

葉子は手をのばして、穴の中にうずくまっていた顔をかくしている勇から、残酷にも長襦袢をはぎとってしまった。

「なによ、その恰好。そうか、首輪がじゃまで、下着が着れないから、下から反対に穿いて巻きつけたのか」

葉子につられて絵里子も笑い、勇は穴の中に入りたい、おっと、もうとくに穴の中に入っている自分が、またまた、なさけなく、泣けてくるような心境であった。

「誰が下着を着てもいいといいました」

急ぎに葉子は、おそろしい顔で勇をにらみつけ、やにわに鏡台からハサミを取り出すと、手をのばして、あっという間に、勇のシャツとパンツをズタズタにしまった。

「犬が下着を着ていますか」

「そんな」

あわてたが、短い鎖で土台に縛られていては、逃げるわけにもいかず、犬の首輪をされた勇は、新婚はやほやの大崎夫人の目の前に全身をさらさなければならなかった。

「絵里子さん、ちょっと手をのばしてちょうだい」

と葉子が大崎夫人にいった。

「こうですの」

絵里子は、おそろおそろ下に手を差し出した。ちょっと気味が悪かったらしかった。

「ほら、お隣の奥様が『お手』ですって」

「――」

「いうことがきけないの？」

勇は、うつむいていた。とても大崎夫人の顔を見られるものではない。

「いうことをきかないと、そのまま、ずっとこの穴の中に監禁してしまうよ。それでもいいのかい」

葉子が床板をはめようとするので、勇は、あわてて片手をのばした。葉子のことだから本気で勇を土中に監禁してしまうかもしれない。かった。

「両足を開いてしゃがまなければ、犬らしくないじゃないか」

勇は半ベソをかきながら少し立ち上った。

「馬鹿、犬がそんな顔をするかよ」

大崎夫人の差し出した手に、勇から触れたわけではなかったが、絵里子のほうから勇の手をにぎってしまったのは、勇が葉子の無理強いによるってしまったからであった。

死にたくなるほど、やわらかな大崎夫人の指の感触であった。

「次は『チンチン』だよ」

「かわいそうよ奥様、そんなにいじめては」
みかねて絵里子が葉子にいった。

「いいのよ、こんな野良犬。半殺しにしたって、うれしそうな顔をしているんだから」

「でも、泣いているわよ」

「うそなのよ。内心はいじめられるのが、うれしくてしょうがないのよ」

「そうかしら」

「ほら『チンチン、チンチン』」

くしゃくしゃにゆがんだ顔で、勇はチンチンの真似をした。

「よし、今度は『おあずけ』」

葉子は足の指にチョコレートをはさみ、勇の顔を踏んづけて、指をちらちらさせた。

「鳥肌が立っているわよ、奥様」

「あら、生意気ね、犬のくせに」

「寒いよ、きつと」

「たべていいよ」

葉子は足をのばして勇の口にチョコレートを押し込んだ。わずかなチョコレートは、それまで忘れていた空腹を、よみがえらせた。

「もっと、ほしいかい」

勇は、うなずいた。空腹には勝てない。

葉子はケーキを足の裏でつぶし、ぐいと勇の顔の前に突きだした。

「ほしかったら、おたべ」

勇は大崎夫人が、びっくりしたような顔で見ているのもかわわず、葉子の足の裏にしゃぶりついた。

「フフ、くすぐったい」

葉子はケーキの皿を絵里子の前におし、
「絵里子さんもやってみないこと。とても気持ちがいいわよ」
と勧めた。

「本当にかわいそうだね、奥様。もう許してあげて。その鎖をとってあげて下さない」

「そんなに同情することはないのよ」

と葉子は絵里子にいった。

「あら、どうして」

「どうしてって、この犬ったら、絵里子さんの秘密を知っているからよ」

大崎夫人の顔が一瞬、緊張した。

「わたくしの秘密って、なんでしょう」

その声が、心持ち、ふるえていた。

「いっても、いいのかしら」

勇に足の裏のケーキを舐めさせながら、葉

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのは大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為最、切手代用(一割増)、振替

子は、じわじわ核心に触れてきた。

「その前にね、お願いがあるんだけど」

葉子はまるで大崎夫人を半殺しにしているようであった。不安そうな顔がいじらしい。

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、景通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に△本号にて前金切の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

「お願いって」

「絵里子さんが今、穿いているパンティ、脱いで下さらないこと」

「――」

「この雄犬がね、絵里子さんのパンティがほしいのですって」

「まあ」

「かわいそうだと思いいなったら、野良犬の願いをかなえてあげて」

「脱いでどうするのでしょうか」

「顔に、かぶりたいのでしょうか、きっと」

「そんなこと」

「でも、絵里子さんは、パンティなんて必要ないでしょう」

大崎夫人の顔から血の気がなくなったようであった。葉子が絵里子を招待した目的が、ようやくわかりかけてきたようであった。

「だって、すばらしい貞操帯を、御主人にかけてもらっているそうじゃありませんか」

「あっ」

「拡張器っていうのかしら？」

「どうしてそれを」

「この雄犬が見てしまったのよ、昨夜」
不意に葉子は大崎夫人を押し倒した。

――(未完)――

S M フォート 思いつくまま

わが『カメ・ハン』

三

条

剛

最近号における辻村氏のハントを見るたびに、いよいよグラフ誌発行の気運が盛り上がってくれたかという気がして、心なしかペンをとる手も軽いというもの。

過日、私如き者の拙劣なフォートの掲載を

して頂き、まことに冷汗ものと恥じていたのもつかの間、またまたアルバムの一頁を抜き取って送付するとは、よほどの物好きと自分ながらあきれる始末。

これまでに撮影した、私の室内外での S M



フォートの成果は膨大な量となっていて、今、アルバムの中に納まり返っています。フォートを撮り始めた当初は、ただ、めくらめっぽうに

写すのみであって、パートナーに対するポーズや、ライティングなどは殆ど気に掛けず、又、赤裸々な露出を包み隠そうともしなかったものが、回を重ねてゆく内に誌上掲載フォートの白線カットの意味が持つ、重大な点に気付き始めたものです。

もっとも、剃毛さえ完全であるならば、清潔感がフォートに抽出され、アングルの無理がなくて済み、大変撮影に好都合である事も分かりました。又、フォート撮影のための必要事として「剃毛」を呼びかけること自体がすでに S M プレイの前ぶれになり、パートナーに新たな被虐心を加える結果となり、慢性的な S M プレイに活を入れてくれたことも事実です。

ただ、むやみやたらと露出的なポーズに縄掛けをしてみたところで、後でその醜悪さのため、耽美的であるべきフォートが艶消しになってしまった場合に度々ぶつかり、後味の悪い思いを何度となくしている内に、カットの持つ意味が分かりかけて来たのです。

それでも始めての剃毛の時は、彼女も相当に嫌がり、随分と抵抗を受けたものですが、一度無理を聞かせてからは、積極的に受け入れ始め、フォートの仕上がりの楽なことと加

え、大変ファンタジックなポーズの要求が容易となり、それを知る以前のフォートと比較にならない位、動的なものが出来上がるようになってきたのです。

おおよそ、ヌードフォートにしても、SMフォートにしても、演出のないフォートなんてありはしないだろうと思います。たとえば、パートナーにその気がなくても、カメラマンの意志や、シャッター決定が、作品の調子に随分と影響を与えるものです。

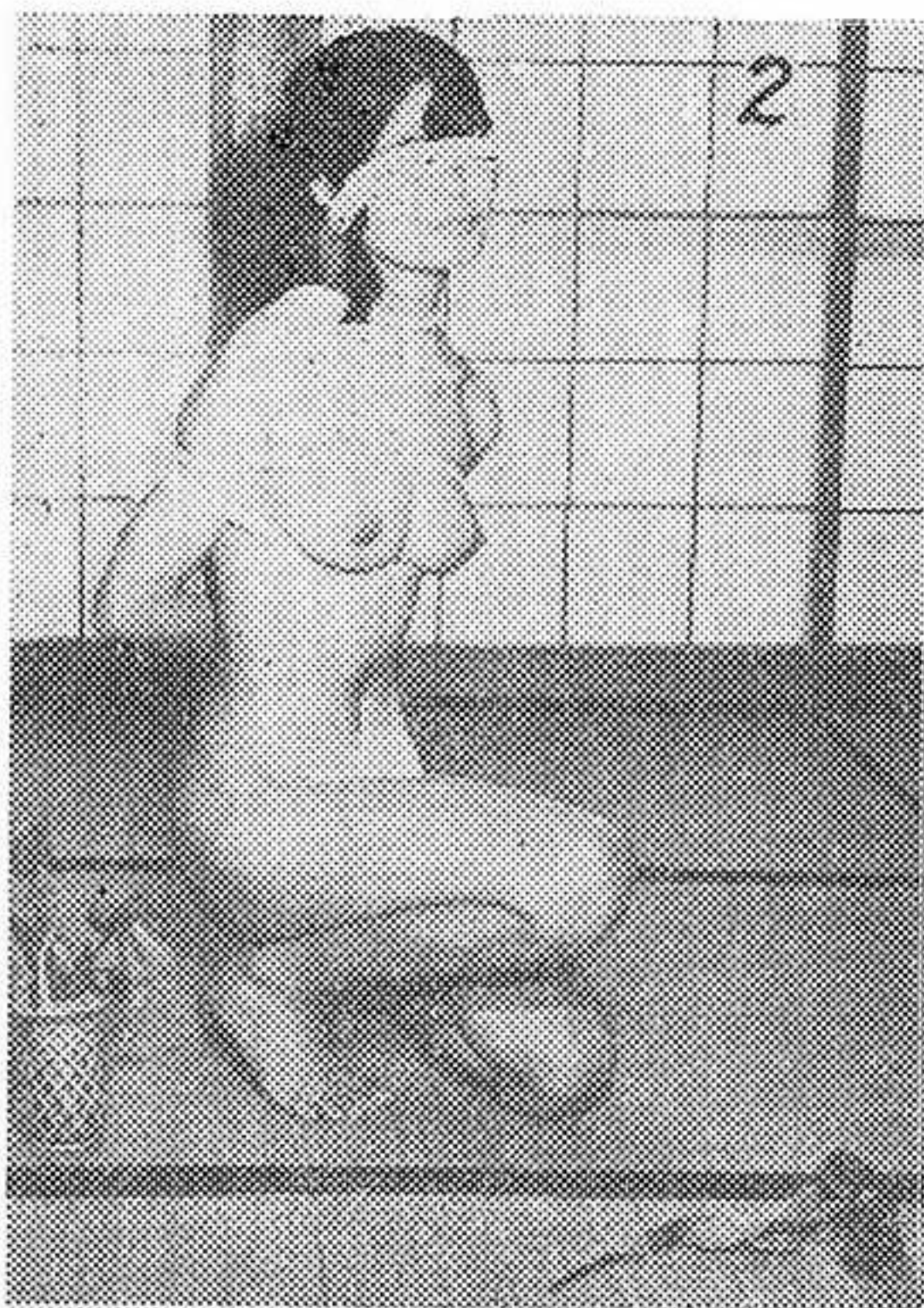
その意味からすると、スナップ的な辻村氏の二月号のカメラハントは興味があります。

しかし、あれは辻村氏が、SMプレイ当事者というより、傍観者の立場にあり得たからこそ出来たことでしょう。普通では絶対に無理なハナシといえると思います。

本題から少し脱線しますが、二月号は辻村氏としては最近にないカメハンというべきでしょう。辻村氏は元々フェミニストで神経質なくらいのデリカシーをお持ちの方（と思っていたの

です）であるはず。だから、あのような一日を、喜々として過ごし、受け入れられる人ではないので、きっと、反発的な衝動から、あのアングルが取られたものと私は解していますが、如何なものでしょう。

辻村氏のカメハンからは、いつも何かヒントを得ているのですが、今度ばかりはドギモを抜かれました。カメラのシャープなアイは非情にも辻村氏のその場での気持を文章以上に表現しているようで、妖気さえ感じられる思いでした。辻村氏の益々の御健闘を祈り、御自愛を願う気持の切なるものを覚えます。話題を戻して、密室でのSMプレイの後、



ゆき着くところ、セックスに結びつかなければその意味がないとする人が、最近増えて来ているように思われます。これを称して「SMS」とかいうようですが、でも私は、このコースがすべてではないと思うのです。

私みたいに、デッサンやフォートに夢中になって時を過ごすタイプも少なくないのではないかと、という気がしてなりません。

それは別の問題としても、過去数度あったと聞くSMプレイ撮影会の再現を、待ち望む気持が強く、たとえば、その会場に行けなくとも、その日のルポ記事でも取扱ってもらえたと嬉しいのだが、まだ時節到来というわけにゆかないのでしょうか。

野外フォート撮影も楽しくスリルのあるものです。私が昨年の秋に野外で撮影をしている時、全くハプニングにも、予期していない場所からヒョッコリと一人の老人が現われ、呆然とした風情で立ちすくんでいたのを、生々しく覚えております。

全裸のパートナーには、すでに数条の縄が掛けてあり、とっさには身を隠しようもないことから、私たちも一時はどうなることやらと思って、内心は大いにあわてました。幸い老人は何もいわずに通り過ぎて行ったもので

すから、その場はホツとしたものですが、突然、目に映った異常な光景に、どんな思いをして通り過ぎたことかと、後々まで気にかかって、その後のフォートに力が入らなくなりそうそうに引き揚げてしまったものです。

野外フォートの魅力は、自然を活かした面白い面が多大にあり捨てきれないのですが、それにも増して、事が事だけに誤解される危険が伴うもので、よく注意しないと、とんでもないことに巻き込まれる要素が多分にあることから、それ以来、自戒自重しています。

私の今一番の夢は、同好の士達との胸衿を開いての会合を持ちたいということです。社

会的地位や身分の変動を恐れる気持はよく分かりますが、カメラフォート同好会が、年一回の会合でも持って、各自の持ちよりフォートの観賞会等が開けたら、どんなに楽しいことか。

夢の内が花とは言うものの……。

ここに同封致しましたフォート(1)はホテルの和室で撮影したものです。私が撮る場合、その縄がけは、ほとんど簡潔なものばかりで、もっぱらムーディなもののみを追求しているつもりですので、作品がどれも類似的になっている点は、自分ながらよくわかります。

下着を付けさせているのは、アングルが真正面であるからとこれが序の口だという意味も含めてい入るのです。

又、私の最大の特徴は、苦痛を伴った責め的なフォートが絶無だということです。

プレイ中にそうした表情があっても、一人で二役は勤められないからですし、同時に、精神的なサディズムの方が、パート



ナーのプレイ持続力が強いからですが、まず何よりも、私は血を見るようなサディズムには全く興味が湧かないから、というのがその理由の第一です。

フォート(2)は造花を散らして、少し演出してみました。作品が軟派であり過ぎるきらいがある……とは思いますが。

縛り方に、もう一つ、工夫をするべきだとも思いますが好みが出てしまうのでしょう。つい、ちっとも変わりばえのしない縛り方になってしまします。

フォート(3)は前記の野外撮影の折のも



読者論稿

対談

最近の

KK誌について

新宿町人

のです。カメラバッグに一杯、SM用具一式とカメラ二台をつめ、彼女に弁当を持たせてのカメラハイキング（称してカメ・ハイ）に出かけた時の、ものなのです。行く途は楽しかったですね。秋空には雲一つなく、快い微風が鮮かに感ずる一日。前日から子供じみた楽しさが胸一杯にこみ上げて来て、足取り

も軽く野山を駆けずり廻って、目的地へ着いてすぐのフォートです。人気のない所を選んではいくものの、まだ警戒心が抜けてない頃だったので、幾分、身体が萎縮しているようですが……。

フォート（4）は、やはりカメ・ハイの時のもですが、この時はすでに老人とぶつか

った後のことなので、危険防止のため、いざとなったら身を隠すようにと、木々の間に入らせポーズしたものです。

この他、立木に両腕を吊るしたポーズや、フォート等を撮りましたが、それは又、後日の機会に譲ります。

ただ、KKはあまりにも、早い時期に生まれたということが、一種のハンディになったのじゃないかな

△「そう。おれは、そのころの新聞記事をスクラップしているが『グロ雑誌』と評した記事もあったもんな」

○「エロ雑誌、グロ雑誌、ヘンタイ雑誌、風俗カイヤン誌と、いやはや、にぎやかなことだった」

△「それが、いまや、どうだ。婦人雑誌まで『夫はヘンタイでしょうか』お小水を呑みながら夫——なんて記事が堂々とあられるんだからなあ」

○「ウン、SS誌の去年の六月号だろ。おれも読んだよ。勿体つけて、とじ込みにしてハサミをいれなきゃ読めないようにしてあったが、相当なもんだった」

△「おれはある目的で、お小水云々のあれがある団地夫人に読ませたんだ。そしたら、

○「このごろ、おれたちのKK誌は、つまらなくなった、という一部の人の声があるよ。うだが、きみはオールドファンとして、どう思う？」

△「そうだね、たんに、つまらなくなったといつても具体的に理由をあげてくれないのでは、なんとも返事しかねるが、多少マンネリというか、なまぬるくなった、ということはあるね」

○「具体的に、というとこれは比較論になるが、一般公刊誌が、だんだんとエスカレーターとしてきて、ときには、KK誌も顔負けのがあるから、ある面でものたりないとは言えるんじゃないかな」

△「このあいだも、本ダナを整理して、二十八年ごろのKK誌を開いたが、いまから十七年前のはコクがあったなあ」

○「コクという点については相変わらずさ。」

彼女いわく「ステキじゃない。そんな人と結婚したいわ」だってさ」

○「そうだ。そんな記事が、五年前に家庭の茶の間へ入ったとしたら、どうだろう。きつとケンケンゴウゴウたいへんなさわぎをおこしたろうな」

▽「風俗は刻々変わるといいうが、小水を云々することが、もう常識になったんだね」

○「ところが、だな。そんな、きたない風俗を流行させたのが、グロ雑誌だ、なんて、また、KK誌を攻撃する声があがりかねないんだから、先入観念は怖いよ」

△「しかし人間の正しいすがた、どう生きべきかを教えたのだから、なんと言われたっていいじゃないかね」

○「そりゃそうさ。きみ、古書展をのぞいてみたまえ。五年前のKK誌が、もう、コッ トウ扱いだぜ。値段が十倍とくるから、やはり文献としての価値は高いのだな」

△「KK誌の表紙にある『新しい風俗文献誌』のタイトルは、真理だね」

○「こどもが大きくなったから、そろそろかくさなくちゃ、と、おれの友人だが、KKをそっくり物置に入れたヤツがある。もう一人の友人だが、これも、こどもがこんど高校へ入るので、ヤバいから、おれと共同でアパートを一軒借りて、そこへそっくり移そうと相談してきたものである」

△「おれは反対だね。なにも、こどもにみることをすすめるつもりはないが、おれは特別扱いしないんだ。でもタブーというか、おれんところじゃむすこもむすめも、手にとろうとせんよ」

○「そんなものより、ゴーゴーや、ドライブのほうが、というわけなんだな」

△「そうだ。キケン視し、くさいものにフタをしようとするから、かえってのぞきたがるんだよ」

○「すべての人間が、風俗誌に妙な好奇心をもち、おぼれこんで、悪の道へ走るといことはありえないもんな」

△「そうさ。おれたちも、社会人として、この種の本や雑誌には、取扱注意の姿勢をくずすべきじゃないが、かといって、世の中のそうしたものをぜんぶ、抹殺しちゃったら、世の中にうるおいがなくなるぜ」

○「まあ、つくる出版社も、読む読者もきみの言うとおり取扱注意でなくちゃならんわけだな」

△「KKの目次の『本誌自粛の徹底』というコメントは、りっぱなものだよ。ところが一般の公刊誌では、自粛など、どこ吹く風で、脱線のしっぱなし。これじゃ、まるでザル法だな」

○「だから、皮肉を言うわけじゃないが、本誌のえんりよが徹底しちまって、他の公刊

誌より一と足おくれでいるということになるのだし、『つまらない』という世評になるのだろうか」

△「そうだよ。一ぱい五円だったソバが、いつのまにやら百円になっているのに、KKだけは、五円当時の世相をまだ気兼ねしてオクターブ落としてるってえ感じなんだ」

○「同感だな。むし返しになるが、お小水云々が、茶の間の話題になる時代に、KKはまだ表現にえんりよして、遠まわしにやってるもんな。ネクターなんてのは、つくづく考えた表現だと思うなあ」

△「ネクターといやあ、沼正三という鬼才は、どうなったろうなあ。このあいだ、千円雑誌で、れいの『家畜人やプー』のアンコールを読んだが、それにしても、KKは十年早すぎたという感じだな」

○「芳野眉美だけが健在じゃないか」

△「それだよ。あのおとこの初投稿は、高校生時代だった、と、本人から聞いたことがあるが、あいかわらず、うまいね。沼正三沈んで芳野眉美、浮かぶってえとこだ」

○「その芳野眉美さえ、近頃は、老成した感じだよ」

△「そこへゆくと、辻村さんは、すごいね」

○「糖尿だときくが、精力的な活躍で、なおテレビにまで出るんだもの」

△「そこだよ、おれの言いたいのは。辻村隆

だって、KKが生んだと言えるんだぜ」

○「どこかの雑誌が、「縛豪」という敬称をたてまつってたが、巨匠、縛豪というのにピッタリだね」

△「シバリのシャシンがいけねえだのなんのとゴタク並べてるうちに、辻村さんは、名士になっちゃった」

○「シバリとは、人間解放のことなりーてえと、こうだな。一九七〇年代はサド・マゾ時代だ、なんて、総合雑誌に載ってたが、おれは、サド・マゾだって人間解放の道程だと思うんだ」

△「まったくKK誌ときたら「サド・マゾ」という学術用語でさえ、えんりよしてるみたいでならないよ。まったく気の毒だなあもつと割り切るべきだよ」

○「それを編集者に言うのは酷だよ。なにしろ生まれかたが早すぎて、世論が集中しちまったのだ」

△「話題を変えようか、きょうのテーマは、最近のKK誌について」だったっけ」

○「そう。特につまらないか、おもしろいか有害か有益か、存在が必要か不要かだよ」

△「並べたね。おれはいつも思うが、KK誌は強いクスリさ。用い方で、効きもすればときには毒になると思われる」

○「有益か否かは読みかたによるな。六十す

ぎた事業家で、毎号読んで、ファイトをもやしてる知識人を知ってるが」

△「要するに成人向ということかな」

○「だろうな。すくなくとも、犯罪の温床でない点では、ギャングブルなんかよりは、はるかにりっぱだよ」

△「そのうえ、えんりよして、マスコミのすみっこに小さいさくなつて」

○「皮肉だなあ。でもズバリだよ」

△「おれの行きつけの古本屋に、正義人間がいてねえ。KK誌のジャンルにはいる本を買いにいくと、一席ぶつんだ。「あなたが単純に興味だけで、これを買うのなら、売ります」なんてね」

○「いいねえ、そのおやじは」

△「だから、買うほうがビクビクしてやがんの。事実、生意気そうな大学生なんか、立ち読みしようとする、おやじさん、血相変えていうのだよ。「きみたちは、早いぞ、まだ」なんてね」

○「ますます痛快だ。でも、このごろの本屋は、わりと良心的だね」

△「読書のリーダーだからなあ、あのくらいやってくれたほうがいいよ」

○「また脱線したな。では、KK誌の存在価値は、どこにあるんだろう」

△「他人のことは知らねえが、おれは、やは

り、さっき、きみの言った六十すぎの事業家と同じだなあ。ファイトを燃やす点では断然だよ。きみは、どうだ」

○「読みつづけて十八年。おれの青春は常にKK誌とともにありさ。論理は飛躍するがおれみたいな助平人間が、活字に満足させてもらって、じっさいに、異性にチョッカイだす必要をみとめずに来れたのだから、KKてのは、その意味でありがたいよ」

△「雑念をおさえ、助平心を昇華させたわけだね。同感できるなあ」

○「それだけに、最近のはタイクツだ」なんてカンタンに片づけられるとハラが立つ。まあ、評されるKK編集部にもよく考えてほしい点はあるがね」

△「どうだい。ひとつKK誌へ提案しようじゃないか」

○「なにを提案するんだ」

△「アンケートさ。テーマは「ちかごろのKK誌を、あなたはどう思うか」○×式でもいいし、心ある読者なら、きつと、こと細かに意見を送ってくるぜ」

○「サンセイだ。この対談記といっしょにその提案を激励の意味をこめて、編集部へ送ろうじゃないか」



三回分載（中）

女

狐

光谷東穂

悪魔の薬液

浜田正子にプロポーズした三田村誠一は家柄もよく、社内きってのエリートであった。

貧しく育った女にとって、将来、重役夫人を約束されたも同様なこの縁談は、ひとつの夢が現実化するのにひとしい。だが正子は、誠一のこと好きになれないで困っていた。

一方、ふとしたことから誠一の異母弟、康二を知った正子は、康二が万引き常習の不良

学生であることを百も承知しながら、康二のもつ野生的な、たくましさに着かれた。

康二の非行性に気をつけなければならぬのは当然だし、軽はずみな行動は厳に慎むべきであった。

しかし、康二から手紙で招かれたこの日、玄関先で足もとに脆ずいて慕わしげに自分を見つめた康二のポーズに正子ははしくも心を乱した。この青年に対していだいていた正子の愛憎は、この瞬間、憎しみを忘れて好意ばかりが先走り、感情の甘さが油断となり、とり返しをつかない道を選んだ。

残忍さをむき出しにした言葉を投げつけ、いやらしい目つきですぐむ康二の前で、「あ、あんたなんか、負けるもんか！」

と、気強く反撥しながら、小雀のようにおのきつづける。隙を見てのがれようとするが、室内には抵抗する小物ひとつなかった。

「おれに勝てるかな。こっちの準備は万事OKだ。おい、もういいぞ！ 出てこい！」

その声が合図だった。現われた男ふたりは物も言わずに、正子の両側にヌッと立った。

「なによ、あんたたち！ 大の男が三人がかりで、女ひとりはどうしようというのッ」

口でなら絶対に負けない。だが、血走った目を光らせて三方から迫る野獣どもが相手では、勝気な彼女も肌が粟だつばかりだ。

「ふたりとも手ぎわよくやれよ。イキのいい

「ネエちゃんだからな、気をつけろッ」

康二は仲間を指図して悠然と、うそぶく。

「康二さん！ あんたってひとは——」

正子の声は、痛嘆をこめて悲しくひびく。

「おやめなさい、康二さん！ これ以上、私を失望させないでよ。ねえ、お願い……」

「サブ！ やるんだ。ケン坊も油断するな」

顔じゅう花やかにニキビを咲かせた不良仲間、康二の声に煽^{あお}られて機敏に動いた。

「何すんのよッ。バカ！ キチガイ！」

威勢のよい声も語尾がふるえる。つかまれた手をふりほどこうと正子はあばれた。小柄な男にからだじゅうでぶつかっていった。

康二は、それを待っていた。いきなり肩口を突きとばす。悲鳴をあげてよろめく正子を反対側の大男が手をひろげて抱きついた。

「アッ！ な、なにをこのバカッ」

荒れ馬さながら男の向こう脛^{すね}を蹴りあげたが、スリッパが脱げた素足では何の効果もなく、かえって足の痛みで力がぬけた。恥も外聞もなくキイロイ声をはりあげる。

「サブ、口だッ。声を出されてはまずいぞ」

分厚い手の平が口もとを襲った。息づまる苦しさ、嘔吐をもよおす、いやらしさに耐えかね、正子は夢中でかぶりついた。

「アッ。ツ、痛ッ！」

正子の意外な反撃にあい、血迷った大男はかまれた手の平をベロリとなめ、つかんでいゝもう片方の手首を力まかせにねじあげた。

腕のつけ根がもげそうな鋭い痛みに、正子はたまらず、前かがみになってうめく。

一度、顔をしかめてかまれた手をなめた男は、いきなりその手で正子の胸もとを狙い始めた。大きな手は不遠慮につかみかかる。おぞましい痛苦に正子はのけぞってうなった。

「バカだな。気をつけろと言っただろ」

サブの不手ぎわを嘲笑し、康二は、ホラ！と、ケン坊に向かってタオルを投げた。

血気盛んな若者が相手ではまったく歯がたらず、両手をつかまれた正子は、床に跪ずき鼻までおおわれていたいまましい猿ぐつの下で無念そうにうめきつづける。

「用心しろ。ツーピースは破っちゃダメだ。」

下着はかまわないから引き裂いちまえッ」

服が肩をすべり、なめらかな胸もとがむき出しになった。

「どうだい、お嬢さん！ ハダカにむかれていく感じて、ちょっとしたスリルだろ」

真正面に立った康二は、しだいに衰れっぽく変貌していく正子の姿を不敵な笑みをたた

えて見つくそうとするのだった。

くぐもった正子のうめきと、野獣じみた男の呼吸が熱気をさそう。死にたいほど、耐えがたい屈辱感に悩乱する女の衰れと、男たちのいやらしい情念が錯綜した。その、異様な闘争も、ほんのしばらくの間だけだった。

「ああ、世話をやかせる、強情なスケだな。」

見ろよホラ、このとおり汗びっしょりだ！」
と言って、康二がセーターの袖で脂ぎった顔を無造作に拭ったとき、衰れにも正子は、一糸まとわぬからだを後ろ手に縛られ、部屋の片隅でうずくまっていた。

仁王立ちの康二は傲岸な征服者だった。正子の髪の毛をつかんで、ぐらぐらとゆする。

「正子さんよ。くやしそうだな」

まっばだかの正子を囲んだ男どもは、思い思いにニヤつき、柔肌の手を伸ばしてくる。無防備な正子は、いやらしい男の手をさけようもなく、身もだえはげしくすすりなく。

「ちよっと待て！ 先にあれを使おう。サブは女があばれないように、押えるんだぞ」

何を思ったのか、いったん仲間を制した康二は、三人がかりで正子をまん中へ引きずり出し、うつ伏せに押えつけた。大男のサブを正子の背中へまたがらせ、自分はケン坊とい

つしよに正子の足首をべつべつに縛った。縛った紐の端を持って力まかせに引っ張る。

ま新しい屈辱を意識し、にこったうめきをもらす正子をしり目に、康二は、ニヤニヤしながら、うん！と、ひとりでうなずく。

「ケン坊。アレを持ってこい！いくらがまん強い女でも、きつとネをあげるぜ」

とたんに三人の口からいやらしい笑い声のはじき出た。ケン坊が小躍りして走った。

康二は、悠々とふたりに指図し、ケン坊が持ってきたものを受け取ると、哀れなイケニエのそば近くへ、どっかりと腰をおろした。

正子のからだを持ちあげたサブは、自分の脚でしっかりと胴じめにした。ケン坊が足首を縛った紐をうまくさばいた。

康二は怪しげなチューブをしぼり、たっぷりと指さきにつけはじめた。

「こんどはこれだ。二つで十分だろうな」

イチジクの浣腸薬——。康二はそれを巧みに操作し、三コまでからにしてしまった。

「これでよし！おい、お前たち、大急ぎで舞台装置を頼む。このままだと、すぐにおれの部屋だと感づかれてしまうからな。その間にこのご令嬢は大いにハッスルして下さい。自分からすすんで、おれたちの目を愉しませ

て下さるだろうて——」

異なった三つの笑いが勝ちどきをあげ、サブとケン坊は敏捷な動作を隣室へ移した。

ひとり残った康二は、皮膚をふるわせて悩乱をくり返す白い姿態を、冷やかな目で、あきもせず見つめるのであった。

そのときまで、正子は、まっ暗な絶望感に打ちひしがれながらも、すべては自分の軽卒さの報いだと思い、愚かしさを恥じて、この災難に耐えぬこうと心を奮いたたせていた。

だが、心はハガネのように引きしめることもできようが、軟弱な皮膚から浸透し、全身に波及するおぞましい感覚は、到底、意志の力だけでは抑制することができない。

首をねじり、まなじりが裂けるほど見ひらいた目で、正子は康二をねめつけた。が、それも一瞬、がくがくと力が萎えてしまう。

「お嬢さんよう、元気がねえなあ。これから何が始まるのか、さっき予告したとおりだから改めて教えるまでもないだろうて。ま、せいぜい美しく、ありのままの姿を写してやるから安心しろ。おれには、おふくろや兄貴に内緒のこんな隠し芸があったんだ。女を自由に操るには、羞恥のかたまりをレンズにとおすに限る。ネガがあるうちは、のがれること

ができんからな。おれは、ほしいものは何と少しでも手に入れてみせる。それがおれの誇りだ。浜田正子も永久に独占してやるさ」

言うだけ言うとして立つて、康二も仲間といっしよに忙しく動きはじめた。

転々と床をころげ、齒をかみしめて涙をこらえながら、正子はこの瞬間を、そしてやがて始まる自分の破滅を予測し、息の根が止まってくれることをこいねがうのだった。

だが、正子のもの悲しい懊悩をよそに、感覚は、じりじりと息づきはじめている。

繊細な神経を責めつづける魔性のものは、おんなの羞ずかしさを思い知らせるかのよう

に、陰々と燃え広がっていく。

注入された悪魔の薬液は、陽気にはしゃいで内管の動揺をうながし、不自然な欲求にさからうと、からだのどこかを疼痛が走る。痛みはしだいにはげしさを増し、切迫する内部の感覚に自由を奪われた正子は、身動きもならず、息をひそめて地虫のようにうごめきつづける。からだじゅうに慄えがきた。

羞恥責め

遅々としてすすまない恐ろしい時間は、戸

をあけ音と同時に、いっきよに縮んだ。

筋肉を硬直させ目をあげた正子は、めくるめく光芒こうぼうを浴びて、一瞬、ぼう然とした。するどいけいれんが全身をつらぬき、おののきのあとから、じつとりと脂汗がぬめる。

そこは、康二のベッド・ルームであった。

画紙がひを使って色とりどりのカーテンを天井に押し止め、垂れ幕で三方を囲まれたベッドは撮影室にふさわしい華麗なムードが充満している。にわか作りのショー・スタジオにしては、まさに見事な出来映えのルーム・セットであった。

三脚の上に据えつけられたカメラは、冷酷な表情でまっ白なシートにピタッとレンズの焦点を射当て、麗しいモデルが登場するのを今やおそしと持ち構えているのだ。

ハーフサイズのカメラを片手に、康二は意地悪くライトをまわし、床でうごめく白い裸身をとらえた。強度の熱気にあぶられ、汗にまみれた柔肌が一段とあざやかに映えた。

喉の奥から乱れたうめきをもらし、耐えかねる羞ずかしさに、正子の感覚が哀泣する。

「ケン坊！ 背中の手を解いてやれよ」

「大丈夫かい？ このおネエちゃん、あばれだすところだよ。すごい力だもんな」

「チエツ。意気地のない奴だ！ 心配ないから、ついでに猿ぐつわもほどこいてやんな」

首をふりふりもどかしそうに空気をむさばり、しびれた腕を撫でさする間も惜しんで、わが身をおおい隠す正子を見つめ、康二はニヤリとした。

「見ろよ。冷や汗タラタラで歯をくいしばっているだろ。ご令嬢はな、もうがまんの限界にきているはずだ。いまなら人形みたいにおとなしいぞ。どんな命令だって、ハイハイとすなおにきくだろう。さ、はじめよう！」

おい！ と、康二はサブに目くばせする。

心得た！ とばかり、大男はうなずいた。

ピタッと腿をつけ、背を丸めている正子の後ろへまわったサブは、すばしっこい動作で正子の両手首をとらえた。半分背中へ乗っかかり、自分の体重を利用した大男は、つかんだ正子の両手をひろげると、そのまま力まかせに上へ持ちあげるのだった。

アッ、ア、アー。正子は悲歎にくれる。

前に縮んでいた正子のからだは、後ろから当てがわれたサブの膝にそうて、あお向きになった。やさしい起伏をあらわにして、ぬめ肌につつまれた桃色の乳房が美しく輝く。

「ウワッ、すごい！ すごくきれいだなあ」

思わずもらした、ケン坊の嘆声だった。

「もうちょっとだ。がまんをしろよ」

康二はカメラを構えて正子の正面へ迫るとす早くシャッターを押す。膝立ちポーズでパンザイを強いられ、アッ、アッ、と、からだをくねらすおんなの哀感をとらえ、息づく間もない早撮りがつづく。

そのあいだ、ケン坊は正子の優美なウェストへサラシを巻いて、端を左右へさばいた。

正子は叫びたかった。大声で泣き叫び、恥をしのんで排泄の欲求を訴えたい。だが、どうしてもその言葉を出すことができず、彼女は、カチカチと歯をかみならして涙ぐむ。

「いかん！ やっぱり猿ぐつわが必要だ。アクセサリーがないものたりないな」

康二は、さきほど正子のからだからむしり取った下着を拾って、ひらひらさせた。

「サブ！ しっかりとつかまえているよ」

アア、イヤーッ！ のがれる正子の顔を追い、康二の指が鼻をつまんだ。ケン坊の手が顎をつかみ、頬に指がくいこんできた。

正子は首をよじってうめく。ひらいた唇のすき間へパンティがねじこまれた。舌で押し出そうとするよりも早く、ストッキングが唇を割る。やわらかい靴下がたちまち残忍な凶

器となり、頬をくびってするどく締まった。

「サブよ。もういいから放してやんな」

と、康二が落ちつきはらって言った。

正子はぶるぶるからだをふるわせてうずくまる。猿ぐつわを解く気力も失せて、痛々しく脚のすじがひきつった。

「お嬢さん！ ほら、あそこにあるよ」

すがりつく思いで、康二が指さすベッド・ルームを見るなり、正子は目の前がまっ暗になった。絨たんの床にビニールを敷き、その上に洗面器がひとつ置いてあるのだ。

「用たしがしたいんだろ。おれたちに遠慮することはないぜ。早く行ってすませろよ」

うつろな瞳を遠く投げ、正子はいま、自分の敗北を痛感する。さっき康二は、正子をさして人形だと言ったが、本当に彼女は意思のない人形も同様だった。何をされても、どう言われようとかまわない。彼女の思いはただひとつ、排泄したいという欲求だけだ。

「よくもがまんをしたもんだ。負けすぎらしい根性には、このおれも、カブトを脱ぐぜ」

ゲラゲラ笑い、洗面器のそばへ腰を据えた康二は、低い姿勢でカメラを構えた。それを見て、正子はアッと色を失う。ひしひしと迫る没落感に青ざめた表情をこわばらせた。

「どうした、早くこいよ。ああ、その前に言っとくが、ここまで這ってくるんだぞ」

正子はいいややをしてつつ伏してしまう。

「いやならそこでたれ流すんだな」

あざ笑った康二は、仲間に何やら合図を送り、正子の姿態にカメラを向けた。なんと少しでも決定的な瞬間を写そうというのだ。

サブとケン坊は、正子のウェストへ巻きつけたサラシの端をつかみ、両方から、やんわりと力をこめた。——サラシが締まる。

幅の広いやわ布だが、これも一種の「瓢箪責め」だろう。もっともやわらかいところを

くびるこの責めは、緊迫した腹部に痛烈にこたえる。正子の抵抗を予測した康二が、屈伏させるために計画したしわざで、到底耐えることのできない恐ろしい拷問であった。

はたして眉根をしわめた正子の顔が、いかにもつらそうにぐらぐらゆれ、身ぶるいはげしく、からだじゅうに筋金がいっぱい。

「どうやら降参したらしいな、お嬢さん！」

悪魔的な哄笑を浴びせた康二は、そらッ、這え、メス犬！ と大声でわめく。

ついに正子はいまわしい排泄欲に屈した。

ポロポロと涙を流し、からだをふるわせながら両手を前についた。おそろおそろ腰を浮

かすと、膝と手を使って這いはじめた。

腹をふた巻きしたサラシの両端を男ふたりにとられ、屠所へ引かれる動物のように、正子は、四つ這う白いけだものになった。

恐怖の膨満感から一気に解放され、痛みも

苦しみも嘘のように消えた。と同時に、それが正子の、女としての敗退^{はいたい}を意味していた。

おんなにとって最高に羞ずかしいポーズをとらされ、すべてをあきらめた正子は、屈辱の涙をこらえて、まぶたを閉じた。

ベッドへあがれ！ と、康二が言った。

もう、どうしようもない！ 投げやりな没落感が正子の心身をからめてしまう。うなだれた正子は、すなおにベッドへ横たわった。

男三人は、よってたかつて美しい敗北者へ手を伸ばした。瓢箪責めのサラシを解き、新たに手首と足首をそれぞれべつな紐でいましていく。彼らがホッとひと息したとき、正子は、華やかな色どりで囲まれたベッドの中央で四肢を「火の字」に固定され、ライトを浴びて美しい白裸を燃えたたせていた。

拘束は四肢の末端だけであった。さすがに男どものみだらな凝視に耐えかね、全身を硬直させた。けいれんをとまって筋肉が縮ん

だ。おおうもののない姿では、微々たるその動きすら、色づいた肌身のいろどりになる。

男どもは、ぼう然として美身に見とれた。

ベッドへ張り付けにしたイケニエは、肌が匂っていた。しらじらと、あますところもなく外気のなかに孤立し、羞恥もあらわに、甘ずっぱい香気にまみれてうごめいている。

そのうごめきには、実は恐ろしいあえぎがあった。全身に波及する妖しい感覚を意識して、正子は心の底からおびえ、うろたえた。

さきほどまで、切迫した排泄の欲求が先だち、ほかのことを考える余裕がなかった。だが出すものを出してスツとしたいま、炎にくるまれたようからだじゅうが燃えているのに気づいた。忘れていたのだ。さっき康二の手にあった怪しげなチューブのことを――。

あくどい策謀のクリームは、確実に根をおろしていたのである。

「サブ。さっき手をかまれたお返しだ。その手で可愛がってやんな。もう十分にくすりをつづけたはずだし、すぐく燃えるだろうよ」
ファインダーをのぞき、康二はシャッターチャンスを狙って大男をけしかけた。

「よっしゃあ、いっちゃよう、やったるか！」

康二の激励に意気こんだサブは、いやらし

い手を正子の上へ伸ばしてきた。

必死に耐え、隠しとおそうと努めながら、

内側から身を焼きつくそうとするはげしいうずきに抗しきれず、正子がうめいた。のけぞった頭がシーツのなかにめりこんでいく。

康二の声でサブがはなれたとき、正子は、肌色を輝かす生きものに成り果てていた。

「こんどは、おれの番だな」

舌をなめずり、ケン坊が自分を主張した。

「お前はなめるのが専門だったな。おかしな奴だ。いいだろ、美しくさらってやれ」

もだえ、ぬめりゆく正子の姿を、たんのうするまでカメラに納めた康二は、仲間を押しつけて自分の位置を確保した。

「女をじゅうりんするのは、こうするのだ。」

お前ら、ガタガタせずによく見ているッ」

女を征服した王者の貫禄を誇示しながら、

康二は悠然とうそぶく。

それから二時間にもおよぶあいだ、正子は汚辱にまみれてすごした。

とめどもなく涙があふれた。羞恥や屈辱感とは異なる、深い悔恨と無念の涙であった。くやしい！ 憎い！ いつか！ きっと！

この！ 恨みを！ 必ず！ ああ――。

怨嗟えんさの文字を一句ずつ、克明に自分のたま

しいへ刻みつけていた。

落転の道すじ

五日間、正子は無断で会社を休んだ。

翌日、出社した彼女は、予期したとおり、

午前中に三田村誠一に呼びつけられた。

人気のない寒々とした応接間であった。

男にしては色が白い端正な顔を、さらに青白く沈めて、誠一は怒りとさげすみを満面に浮かべテーブルの上へ角封筒を投げだした。

見なくても、封筒の中身がなんであるかはわかっていて。覚悟はしていたことだが、現実に直面して、正子は康二の佞奸ねいかんさを心の底から憎んだ。なまじ好意をいだいていただけに、憎悪は反動的にはげしい噴流となった。

まるで露出を好む性的な異常者のように、正子は印画紙の映像を丹念にながめ、一枚ずつテーブルの上へ並べていった。全部で二十枚ある写真をひろげおわると、

「これで全部でしょうか？」

と、他人事のように顔色ひとつ変えず、正子は三田村誠一を仰ぎ見て言った。

「きみは、きみという女は、こんな、こんな恥知らずな、あさましい女だったのかッ」

激昂した誠一の発音は、正確さに欠けた。

おそらく、理性さえ失っているであろう。

「いまさら言い訳はいたしません。言ったところムダでしょうから……」

「もう、何もききたくないッ」

吐きすてるような誠一の声に、さすがに正

子は、こみあげるくやしさに涙を流した。

「これはみんな、康二さんのしわざだと言っ
ても、信じては下らないでしょうね」

「馬鹿なッ。康二にそんな大それたことがで
きるもんか。ごまかそうたってダメだ。変な

言いがかりをつけるのはやめてもらいたい」

多分、三田村の家族は、あのすさまじい康
二の悪徳を知らないだろう。康二の非行をあ
ばいたところで、さんざんよごされたおんな
のからだは、元へもどるものではなかった。

「この写真は私にとって大切な記念品です。

貴重な贈り物としていただいております」

二十枚の写真は、どれも目をおおいたくな
る惨としたポーズばかりなのに、正子は、も
う一度、一枚ずつ、しっかり見つめ、ていね
いにそろえて封筒の中にしまいこんだ。

そして、けがれた生きものを見るような、

誠一の軽蔑したまなざしを受け止めた。

「三田村さんは、世間の片すみというものを

ご存じないだろうと思います。広い世の中に

は最低な、と言われる人よりも下劣な、それ

こそ人間の仮面をかぶった恐ろしいケダモノ
がいるなんて、ご想像なさったこともないで

しょう。いつとは断言できません。ですが鬼

畜に似た人物が実際にいることを、必ず教え
てさしあげます。これは、浜田正子が神様に

誓ったあなたへの約束です。ずいぶんお世話
になりました。ありがとうございます」

正子は用意した封書を誠一の前へ差しだし
た。辞表……退職届であった。

ひとしきり嘲罵を浴びせ、憤然として誠一
が立ち去ったあと、正子は涙の涸れるまで声
をしのばせて哀哭した。やがて涙の跡をテー
ブルに残して、静かな足どりで自分の席へも
どると、すぐ、帰り仕度をした。

門を出て一度ふり向き、△KB織物△と記
した社名を、しばし見つめた。自分でも意外
なほど、穏やかな心境であった。

その月のうちに、正子の消息が絶えた。

※

それから三年、長い歳月が流れた――。

失踪も同様に寄寓先の叔父の家から姿を消

した浜田正子が、△メイト・M△のマダム、
みな子のパトロンに会うまでの日々、その明

け暮れは、悲惨という以外の形容はない。

むかしなつかしい哀愁的なメロディーの歌

詞をそのまま、流れ流れて墮ちて行く先は、
転落の道すじに直結していた。苦い女がひと

りでたどる世渡りは、それが当然の成り行き

かも知れないが、世の中の裏をさすらい、男
の汗と脂にまみれてすごしている。

虫けらのような毎日、羞恥と屈辱とがつい
てまわった。苦痛も多く悩乱もつづいた。

（死んでたまるか！ 負けるもんか！ もう
一度、あの憎い男に会うまでは――）

と、持って生まれた強い気性が、三田村兄
弟を呪う復仇心の芽ばえをうながし、すさま
じい妄執と変じた。思いが心身のささえとな
り、生への執着心につながったようだ。と同
時に、皮肉なことだが、正子に幸いしたのは
彼女自身の「おんなの性」かも知れない。

かつての日、康二の卑劣な術策に陥り、お
んなの羞恥を根こそぎあばかれ、凄惨なはず
かしめを受けたが、壊滅的な絶望感にたまし
いを失いながら、その過程で官能的な肉体の
うずきにあやつられ、あさましくも女体の涙
をしたたらせてあえいだ。それが女の業とい
うものかと、みずから恥じて嫌悪したが、三
年後には、彼女は大きく変貌していた。

いいように男どものオモチャになったが、それでいて彼女の五体は、めざましく息づいていた。全身汚辱にまみれても、皮膚は絶え間なくなめらかな脂を内側からにじませ、美肌は一段と映えて香気を放ちはじめたのだ。

執拗な男どもを相手に齒をくいしばって耐えたものだが、ふしぎにも彼女の本当の美しさは、その屈辱の中からにじみ出てきた。男を養分とし、自然に磨かれ、実りの季節を目前にした果実さながら、新鮮な美身に作り変えられていったのである。

正子に二度目の不運が訪れてきたのは、そのころであった。もっとも、あとから回想すれば、みな子に会うキッカケになったのだから開運の兆しだと言えぬこともないが――。

春、港町神戸へ流れてきた正子は、地廻りのチンピラやくざにつかまってしまった。正確に言えば、紀南の温泉街に巣くう、やくざな男に、売りとばされてしまったのである。彼女の身柄は、すぐに高級レストラン兼社交遊戯場「天津」の地階へ移された。

地下三階の殺風景な一室にほうりこまれ、正子はそこで、自分のからだが品物として、海外へ輸出されるのだということを知った。

行く先は香港か東南アジア各地だという。

その日まで、つらい悲しみにもめげず生きぬいてきた彼女も、このときばかりは絶望感に打ちのめされ、終日、痛哭をくり返した。

「うるさい！」と見張りの男がどなった。

「お前ひとりじゃない。仲間がいるんだ！」

その男の言葉に嘘はなかった。隣の部屋にも数人の女が監禁されているもようだ。

「あと三日だ。優しい思いができるぜ」

ヒヒヒと、男はいやしい目で正子を見た。

（あと三日？ 早く逃げださなければ――）

泣きさけんでいたのをピタリとやめた正子は、じっと男のスキをうかがいはじめた。

建物の構造からして自信があるのか、見張りはそのほど厳重ではなかった。食事のときなど、ドアの鍵はずしたままにしてある。

正子は望みも新たに機会を狙った。

つぎの日、まだあたりが静まっている朝食どき、正子は、男が去るのを待ちかね、足音をしのばせて廊下へ出た。だれもない。

これなら容易に脱走できそうな気がした。

しかし無事だったのは二階をウロウロした数分間だけで、正子は脱出が不可能なことを身にしみて思い知らされたのである。

「バカなことを考えたもんだ。おれたちから

逃げられると思ったのか。あきれた女だ」

声といっしょにはげしくぶたれ、すごい腕力に、彼女のからだはすっとなでしまった。

「お前はズバぬけた上玉だから、ひとりだけそっとしておいてやったのに、このバカッ」

二度と不心得をおこさないように！ と、やくざな男どもは正子の服をはぎはじめた。

その場でまっぴだかにむかれたあげく、後ろ手に縛られた正子は、男たちが入ほどこの部屋と称する地下三階の端へ引っ立てられていった。コンクリートの地肌をむき出しにした壁に囲まれ、そこは見るからに陰々とした残酷ムードが充満していた。

「鉄あにい、どうしやす、こいつ！」

若い男が、正子の裸身を見てニヤつきながら、腕を組み目を光らせている男に問うた。

長身のその男が、ここでは兄貴分らしい。

「タツプリとほどこしてやりたいが、あいにくと、このあまア、社長や支配人のお声がかりだ。めったなことではきん！」

正子はそのとき男ふたりに腕をとられ、いや応なしに立たされていた。十いくつかの男の目玉を一身に浴びて、のしかかる恐怖にまぶたを閉じ、戦慄をくり返していた。そんな正子の足もとへかがみこんでいた男が、鉄五

郎を仰いで口をはさんだ。

「わいにまかせてくれまへんか、兄貴！」

「どうするんだ？」

「落としたらどうやる。ほんわかと、生え加減がきれいやから、惜しいけれども」

「それで——？」

「棒に乗せますんや。ええもんだっせ」

「棒って？ 例の角材はアカンぞッ」

「竹か物干竿、^{ざお}鉄棒でもええな。キズがつく心配はおまへんし、女には、こたえまっせ」

「よし。支配人がくるまでに、早くやれッ」

美しい女をいたぶるという話になると、簡単に衆議一決するのが常識だ。役割をきめてとびだした男たちは、すぐにもどってきた。

悲鳴をあげる正子を押えつけ、ひとりが荷造り用の大きなテープを口へ貼りつけた。

男どもの思いのままだった。剃刀の襲撃に晒されたのはこれが二度目だ。初めは三年前に康二の手で——。その時の情景が脳裏によみがえり、正子は急に気強くなった。やくざのリンチは恐ろしいが、必ず耐えぬき、康二に仕返しをしてやりたいと痛切に思う。

棒に乗せる——。つまり棒にまたがらせてその棒を持ちあげるのだ。よくしなう竹を使うと、女体は宙間ではずむという。

青竹が三本用意された。一本に女を乗せ、

あとの二本は後ろ手に縛った背中へこじ入れからだが倒れないようにささえにする。

後手の縄目に竹を差しこまれたとき、正子はすべてをあきらめ、まぶたを閉じた。

「本当はかつぎあげて、ワッショイワッショイとやるんだが、それだけは赦してやる」

その代わり！ と、正子は後ろ手に縛られたまま、素足で元の部屋へ連れもどされた。

「その格好で逃げる勇氣があるかい？」

その姿で町を歩くのなら解放してやる！

男たちはそんな嘲笑を浴びせ、わざとドアを明け放って、廊下を通る仲間たちに、哀れ

な正子の姿態を鑑賞させるのであった。

（ちくしょう。意地でも逃げてやるから！）

片隅にうずくまって、正子は一日中、くやしさに歯をかみならした。

（どうせ外国へ運ばれ、二度と日本の土を踏

めないのなら、もう自分は死んだも同じだ。どうなろうと五十歩百歩、負けるもんか！）

相変わらず三田村兄弟への復讐に執念を燃やす正子は、夜半すぎ、部屋をしのび出た。

奇妙な救出

自分の行動が無謀だと、正子にはよくわき

っていたが、じっとしてはいられなかった。

失敗をくり返すまいと朝とは反対の方向へ

走り、奥の階段をかけあがった。はだしだから足音が消え、忍び歩くのに好都合だった。

しかし、発見を遅らそうと、出しなにドア

をしめてきたのがかえってまずく、見張りの男はすぐに気がついたらしい。廊下を走る足音が乱れ二、三人の声が出た。

もうひとつ上、地下一階への階段へ足をかけ、正子は瞬間、あせってまどう。

（やっぱりあかんわ——）

最近覚えた関西弁でつぶやく。口をテープでフタされているので、声は出ない。ひとま

ず階段の裏へまわってからだを縮めた。その前を見張りの男が通りすぎていく。

いまのうちや！ とっさにひらめく思いにかられ、首を起こしてドキンとする。すぐ近

くに鉄五郎の背中が見えた。

見つかったらコトや！ 確かに大変だ。まさか殺しはしないだろうがリンチがこわい。

正子はそっとあとずさる。と、細い廊下の途中に入りこんだところがあり、そのドア

が、わずかにひらいているのに気づいた。

ためらわず、正子はその中へはいった。う

す暗い室内の向こうに一筋の光があった。

助かるかも知れない！ と、かすかな望みがわいてくる。正子はそこへ近づいた。

「おい！ 出てこい、隠れてもムダだ」

ふり向くと廊下灯を背にして、鉄五郎らしい人影が、うっそりと立っていた。

「暗くても、白いからだはよく見えるぞ」

自信たっぷり、鉄五郎の声が笑っている。

せっぱつまった正子は、縛られた後ろ手を使って、光のさす奥の把手をにぎった。

「バカもん！ そこへはいって——」

うめくようにすぐくもった男の声が、正子の心にまっ黒な恐怖感をたたきこむ。本能的な防衛心が、正子の行動をうながした。

鉄五郎は低い声で何事かを叫んだようだ。

後ろ向きにすべりこんだ正子は、とたんにがくつと息をとめた。ゆっくりとふり向き、もう一度がく然として全身がすくみ立った。

脱出口だと思ったそこは、意外にも、だれかのプライベート・ルームだったのである。

正面のデスクに部屋の主がすわっていた。

さして特徴のない中年の紳士が、ふいに闖入した裸の女を、ふしぎそうにまっすぐに見つめている。まなざしは、かなりするどい。

男の凝視にうろたえて力尽きた正子は、がくがくとその場にくずれてしまった。

「バカ。甘く見りゃ調子に乗りやがって！」

声より早く痛烈な往復ビンタをくらい、正子は、ぶざまに転倒した。

「鉄五郎！ なんの騒ぎだ」

すこし妙なアクセントがあるが、渋い声には何ものにも動じない落ちつきがあった。

「すみません。こいつ、例の口です。ハダカにひんむいておけば逃げ出すまいと思ったのに、とんでもない気違いメスでした」

「ほほう。なかなか頼もしい女じゃないか」

「へい。近ごろでは珍しい上玉ですが……」

鉄五郎が引きずり起こした正子のからだを紳士は、射るような目でなめまわした。

「すみませんでした。すこしこいつにヤキを入れてやります。おさわがせしました」

ていねいにわび、鉄は正子の腰を蹴った。

「待て！ 女をここへ連れてこい」

大型の回転椅子をぐるっとまわし、紳士はそのあいだも正子から目を放さなかった。

正子は紳士のすぐ前へ立たたされた。

「すっぱりしてるが、生まれつきかい？」

「いえ。朝早く逃げ出そうとしましたので、脱走防止のオマジナイに。図太い女です」

「もうすこし、よく見たいもんだな」

「へい。どうぞ、ご存分に——」

目が細まり、はじめて笑った紳士の顔を正子は見た。が、すぐ赤くなって目を伏せた。

かつては康二に、またほかの男にも、同じはずかしめを受けたことがある正子だが、この人の前では妙に心がふるえた。

「もういいよ。放しておやり！」

その声でようやく屈辱のポーズから解放された正子は、ころがってさめざめと泣いた。

「鉄！ 口のテープをはがしてやりなさい。」

ついでに縄も解いてやるんだな」

「しかし……。この女は、あしたの晩……」

「早くしないか！」

「へい！ でも……」

「このコの服を持ってきてやれ。靴もいっしょにだよ。下着は新しいものがないな」

信じかねて、あんぐりと口をひらいている鉄五郎にとりあわず、紳士は何事もなかったように、平然と机に向かった。

鉄五郎が去ったあと、十数時間ぶりにいましめのなくなった二の腕を撫で、正子もあつ

けにとられて男の横顔を見つめていた。

もどってきた鉄は、いまいまいしように正子の前へ、ひとかかえのものを放り出した。

「鉄五郎。このコは帰してやることにする。社長や支配人に報告を頼むよ」

「このまま帰して、大丈夫ですかい？」

「心配するな。このコの目は正直だよ。あ、

ついでに言っておくが、ミナトはもちろん京

阪一帯、このコがどこにしようとして二度と手

つけるんじゃないと、社長の口からスジを通

しておいてほしい。間違ひなく……だよ」

「わかりました。さっそく申し伝えます」

わかったと言いながら、首をひねって鉄五

郎が去ったあと、紳士は低い声で笑った。

「服を着るがよい。すんだら帰っていいよ。

こんどのは災難だと思って忘れなさい」

正子は言われたとおり服を着た。靴をはく

前、ふと気がついて床の上へすわった。

「ありがとうございます。でも……」

「でも——？　なんだね？」

「どうして私を助けて下さったのでしょうか」

「理由はないな。強いて言えば、美しい女性

に敬意を表した！　そう思ってもらおう」

紳士は正子のほうを見向きもしない。その

くせ、床にすわった正子がわかるのか、

「そんなところへすわるんじゃない。早く行

きなさい。あ、そうだ。これはすこしだが」

抽出しから金を出して机の端へ置いた。

「持っていきなさい。からだを大切にね」

正子は口がきけなかった。理由はともかく

忘れていた人の情けを思い出させてくれたこ

のひとには、いちずに頭が下ってしまふ。

一向に立たない正子に気づいた紳士は、

「人間の一生には、いろんなことがあるらし

いよ。くじけてはいけない。負けないように

ね。あ、これは余計なことを言ったかな」

「いいえ。身にしてみても、うれしく……」

あとは絶句し、涙ぐむ正子であった。

「いま、くじけてはいけないとおっしゃいま

したが、私のこと、ご存じでしょうか？」

「おや、当たったのかな。しかし、あんなの

ことは知らない。顔を見たとき、ふと、そん

な気がただけだよ。私は物好きな性分だか

ら……」

「実は私、行くところがありません。ここを

出てもどうすればよいか。こわいのです」

「やっぱりそうか！　それは困ったね」

急に紳士は正子のほうへ膝をまわした。

「それじゃ、どうだ！　私を相手にひとつ賭

をやらんかい。その代わり命がけだよ」

相手の意図が解せず正子は黙っていた。

「五十万円進呈しよう。仕事の世話もいっし

よにだ。ただし、ひとつだけ条件がある」

なんのつもりか、紳士はいきなりガウンの裾をはねた。上着はなかった。そのままぐつと迫ってきた。

正子は目をそらさず、じっと見つめた。男

と女の闘争に似た緊迫の時がすぎた。

「齒を当てて、もしも私が痛い！　とネをあ

げたら負けだ。これなら簡単だろ」

相手は真剣な表情でニコリともしない。

「あんたが力を入れなかったら私の勝ちだ。

そしたらあんたを頂戴する。私は変人だから

あんたが負けたら大変だよ。生きたオモチャ

にしてしまふ。つまり一対一の真剣勝負だ。

しかし、いやならいいんだ。そこに二十万円

あるから、それを持ってすぐお帰りなさい」

さすがに、すぐには返答できず、正子は、

しーんとした目で男の口許を見つめていた。

「風変わりな趣向でびっくりしたかい。実は

私も、自分の思いつきにおどろいている！」

相手はそう言って正子の顔をじっと見た。

（この人はいったい何者だろう？　この八天

津Vの社長はもとより、暴力団まがいの連中

を顎で指図する力を持っているのだわ——）

自分がいま、ひとつの運命的な岐路に立た

されているような気がして、正子は、ナイト

・ガウンを着た紳士を、ふしぎそうに見た。

メス犬ふたり

「おたずねしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、いいよ。なんだい？」

「お名前を、おきかせ下さいませんか？」

「私は日本人ではない。名なしの権兵衛だ」

「運が強く私の勝ちになりましたら……」

「その時はあなたの望み通りにしてあげる」

「もしも私が、ある会社の社長夫人になりたいと、そう希望したら、いかがでしょう」

「これはおどろきだ！ あなたは想像以上のしっかり者だな。うまいこと言って私を困らせる。これは、ちと参ったぞ。私は、自分の不遜な言葉を訂正してわびねばならん！」

紳士はさも愉しそうに声をだして笑った。

「勝手な話だが、結婚問題は又キにしよう。

あなたの安全、つまりこんどのようなことがないように保障し、人並な暮しができるように仕事と住居の世話をします。と、この程度で譲歩してくれないか！ もっとも、私が推せんする男でもいいのなら、社長夫人にしてあげることが出来るが。どうだい」

「すみません。わがままを申しまして」

「じゃ、男のエゴをねり固めたような私の条

件をいやがらないで、勝負をするかね？」

（やってみよう。何事も経験だわ！）

と正子は思った。外見的にはとんでもないことだと非難されそうだが、奇妙にも、いやらしさをいだかせない相手だった。

ふと、ひらめくものが正子にあった。これから先、康二と再会したとき、こんな情況が再現する可能性は十分にある。その瞬間、男の死命を制することが出来るものかどうか、ひとつの試みになるだろう。

ちらっと相手の表情をうかがい、かすかにうなずくと同時に頬にパツと紅を散らせた正子は、まぶたを閉じて挑戦の構えをみせ、相手に意志を伝えた。

負けるもんか！ と、自分を励ます。

目を閉じたまぶたの裏へ、憎らしい康二の顔と、誠一の軽蔑のまなざしが入り乱れた。

実際に正子は齒に揮身の力を集中した。ところが男の賭けの対象はビクともしないのである。神秘的な精妙の現象に遭遇したように正子の心身におののきが走った。

まつ毛をふるわせ、相手のようすをおぼろにうかがい、正子は胸がきゅうと痛んだ。

ふしぎな紳士は、まったくそしらぬふりをして、紙ヤスリで爪を磨いていたのである。

アァーと一声、正子は全身の力がぬけた。

「途中でやめたら勝負にならないよ」

その声には幽玄の気がこもっていて、正子の心を、がく然とさせる。

「できません！ 私、負けました」

わるびれず、正子は床に両手をついた。

「ばかにあっけないんだね。どうしたんだ」

正子は涙をいっぱい浮かべた顔をあげた。

「私、きょうまであなたのようなおかたにめぐり会えなかった自分を恨みます！」

「私は広玄羊こうげんようという中国人だが、変な趣味ばかり多くて困っている。いまもあなたを飼育したいと、そんな横暴なことを考えていた」

「私、あなたに勝てそうもありませんわ」

さびしくほほ笑み、正子は耳たぶまで赤く染めた。おののきにつれてからだが燃える。

「試合放棄かい。それとも私の勝ちかな」

「私の負けです。どうぞ、ご存分に——」

真底、完敗だわ！ と、意外にさばさばした気持で、正子は、ていねいに頭を下げた。

「わざと私に負けたのなら、それはとんでもない心得違いだ。あとできっと後悔するぞ」

「はい。多分後悔することでしょう。でも、いまの私に、いつわりはごさいません」

正直にいつて正子はこのとき、相手の不可

解さに眩惑し、いくらか酔気味だった。さんざん流浪をかさねた末、いままさに海外へ売り飛ばされる寸前だったから、このような正子の心理的な推移も決して無理ではない。

「よろしい。結果が出たようだ。では、もう一度さっきと同じに、全部脱いでもらおう」
アツと正子はうろたえる。相手の温情に気をゆるし、ウカツにも忘れかけていたのだ。
「気の毒だが、あきらめることだな。女性を頂戴するときは、一切の潤飾をはがして産声を聞く！ というのが私の思想だから——」

（いまから私は、このひとのオモチャ！）
空恐ろしい自覚が胸芯をえぐり、不吉な予感が重厚な圧力となつてのしかかってくる。
「私は、思ったことは必ず実行する主義だ」
広玄羊の声は、終始一貫もの静かに流れてくるが、底流には無気味な威圧感があり、正子の胸に一つのさだめを、ささやきかける。
巧妙な術者の暗示にかかったように、正子は男の前で一枚ずつ、衣類を脱いでいった。

※

広玄羊の車で、正子の身柄が人知れず大阪市内のマンションへ運びこまれたのは、そろそろ、夜も明けようとする時刻であった。

正子は初めてハメイト・Mのマダムに会

った。しかし、みな子との対面のもようは、多趣味で変人だと自称する広玄羊の言葉にいつわりはなく、まことに異様な光景だといえた。

それより前、地下二階のプライベートルームで広玄羊との約策を守って服を脱いだ正子は、不吉な暗影におびえながら、男の身辺にただよう靈妙な魅力にたましいを奪われ、
「生きたオモチャになるんだぞ。いいな！」
と念をおされると、コックリうなずき、あやつり人形さながら、彼の好みに応じてヌード・ショーを被露し、十分に鑑賞させた。
妙に抵抗感がうすれ、かなりあくどいポーズをとらされても苦にならないばかりか、かえって高ぶる自分の感情をいぶかり、自然に理性も麻痺して、本当に男の玩具に変身したようにふるまい、彼をよろこばせたものだ。
そして、ふたたび、はだかのまま後ろ手に縛られ、彼が予告したとおり、おんなの産声をあげていた。

思惑どおりの一連の行事が終ると、広玄羊は素肌にコートを羽織らせた正子連れて、自分で車のハンドルをにぎった。

コート一枚、その下は何もなかった。しかも裸身を緊縛され、そんな姿で助手席へ坐っ

た正子は、人目をおそれ、ただもう羞恥の一念で、おののきつづけた。ひそと、うなだれた正子に、広玄羊は、胸がつぶれるような奇怪なことを、つぎつぎとささやくのだった。

やがて、マンションの駐車場に着くと、
「コートを脱ぐかい！ 堂々と胸をはって歩いてみないか。すぐくチャージングだぞ」
「いやです。そんなにいじめないで……」
「いやに羞かしがりやになったな。ハダカで逃げ出そうとした勇氣はどこへいったんだらう。あの大胆さに、私は惚れたのだが」
「外ではいやです。これでも女ですもの」
「そうだね。可憐な美女に、これは失礼だった。その代わり室内だったら……いいね」
正子は、消え入りたい風情でかすかにうなずく。満足した広玄羊は急に足を早めた。

高級マンションの一室、広玄羊がキーを差しこんで中へ、はいったとたん、
「だれ？ どなた」と奥から声がした。
「私だ！」広玄羊は即座に答える。

「いやあねえ。こんなに待たせて——」
もの憂く、甘い、女の声が流れてくる。
教えたとおりするんだよ。いいね！ と、

正子のコートを脱がせ、男は奥へ急いだ。
ここへくる途中、耳をおおいたい思いで聞

いた妖しいささやきが心をいたぶり、うらぶれたもの悲しさに正子の胸は重くふさがる。(どうなっても仕方がないわ。自分で選んだ道だもの！)

と唇をかむ正子の耳へ、声が聞こえた。

「……早くネックレスを出せよ！」

「いまさら、そんな。突然、変なことを言っ
て、あたしをためすのね。いやなひと！」

「その姿は、なつかしい。うん、いいぞ！」
広玄羊が言う「いいぞ！」は、それがその
まま、正子への合図になっていた。

気味悪そうに近づき、奥をのぞくなり正子はビクンとした。叫びたくなるのをかろうじてこらえたが、身ぶるいは止まらない。

「いったいなんと言ったらよいのか！ ベッド・ルームの中、かなり余地のある絨毯の床を、美しい女性が、両手と両膝を器用に動かして這いまわっているのだ。その姿をよく見て、正子のおどろきは、いっそう深まる。

腰もあらわなチャイナドールは、襟もとや裾まわりの特殊デザインのほか、ほとんど透明に近い、しかも首には奇怪なリングがはまり、一点から細い鎖が伸びている。

ナイト・ガウンに着替えた広玄羊に鎖の端をとられ、女は魅惑的な肢体をくねくねとう

ねらせ、美しくも哀れに四つ足動物の真似をしているのだ。

思い出すさえ口おしい過去。正子も、康二から同じことを強いられたものだが、いま盗み見る女の動作には、ハレンチななかにも妖しい色香がただよい、華麗なムードにふさわしく絵画的な美しさがあった。

桃色に輝く女の美肌に、正子は思わず吐息をもらした。

「すこし汗が出たな。女の美容にはこの運動がもっとも効果的だ。しっかりやれ。さ、膝を伸ばして」

正子の窃視に気がついた男は、ベッドへ浅く腰を乗つけた。裾が開いた。すると女は、頬をすりよせていった。

広玄羊の目が正子をうながす。ひそかに忍びよった正子は、いきなり後ろから、おんなの足裏に唇をつけ、はげしく吸った。

「ヒャーッ！ びっくり仰天、女はとびあがって男にしがみつき、ぼう然と後ろを見た。

正しくすわり、正子はひそとうなだれる。

「このひと、だれ？ ああおどろいた！」

女は容易に動悸が静まらないらしい。

「お前の浮気封じだが、高くつきそうだよ」「どこから連れてきたの？ 大丈夫かしら」

「心配しないで好きなように飼えよ。気の強いしっかり者だが、あどけなくてかわいいから、面食いなお前でも文句はあるまい」

あいさつを！ と言われ、正子の表情が悲しそうにくもる。が、すぐ思い直し、肉みちた女の足に唇をつけ、なめまわした。

「馴れるまでつないでおく。さ、おいで！」

正子は首を伸ばした。男は女の首からリングをはずし正子の首へはめた。

「そんなに行儀よくすわっちゃダメだ——」あぐらを組め！ と広玄羊が言った。

正子は熱心に、彼にいわれていたことをはじめた。

「見ろ、みな子。だれに仕込まれたのか知らんが、すばらしいテクニックじゃないか！」

「ホント」

女は顔を近づけて眺めた。

いや応なしのタライ回しで何人かの男の相手はさせられてきたが、女性相手は初めてだった。

同性の前でくりひろげる痴態は羞恥もひとしお、正子はわが身の哀れさに涙するのであったが、やがて、同性を愛する女に変わっていった。



1

私は喫茶店を経営しています。経営しているなどというと、たいそうにきこえますが、場末のほんの小さな喫茶店。出来るものといったらコーヒー、紅茶に、多少のケーキ類、ジュース、コーラ、それに果物で簡単に出来るアップルポンチとかフルーツパフェといった程度で、店のウェイトレスは新聞広告で来てくれた峯子という、二十三才だそうです。ハタチぐらいにしかみえない小柄で愛嬌のいい女の子。そして奥では私が調理人という、

M の 傾 斜

壺^こ 中^{ちゅう} の 園^{その}

1

真 砂 十 四 郎

ほんの名ばかりの喫茶店なのです。

私は大学を出てから、一時ある商事会社に勤めていましたが、一人息子で甘やかされて育ったせいか、サラリーマンには不向きで、

あんまり満足して勤めてはいませんでしたし両親の死亡後、多少の遺産を残してくれていましたので、思いきって会社をやめ、住んでいた家の玄関と次の間を改造して喫茶店に仕立てあげました。あたりは殆ど住宅街で、商売に向く場所ではありませんが、どうせ内職程度の商売でいいのだし、それでも散髪屋、八百屋などが間をおいてポツン、ポツンと営

業しています。まあ、やってやれないことはないだろうと開店したのがこの喫茶店「コルティナ」というわけです。

ですから営業時間などもルーズなもので、だいたいにおいて正午から九時までというときにはなっていますが、全然お客のいないときもありますので、一時まで、二時まで開店休業などということも珍しくありません。のんきな商売ですが、高円寺の方から通いで来てくれる峯子が、これが実直で、よく気のつく女の子で、一片の新聞広告で、よくもまあ、こんないい娘が来てくれたものと内心、感謝

しているのですが、勤務以外の奥の部屋の掃除、私のためのご飯炊きなど、すすんでやってくれまして、時折、私は（彼女に結婚を申込んだら彼女は承知するだろうか）などと思うこともあるのです。峯子の家の家庭状況はよく知りませんが、両親と共に住んでいて、まだ独身という程度は、彼女からきいています。私は三十六才で峯子が二十三才。十三も年が違いますが、そのくらいの年令差は近ごろ珍しくありませんし、私が言いだせば彼女は、多少は考えるかもしれませんが、たぶん承諾してくれるだろう……という程度の予想は、できるのです。

私が三十六才の今日まで、結婚しないでいることは、普通一般の「結婚生活」ということに、何かしら疑問があるというか、私の気持ちにピッタリこないものがあるからなのです。私の性格は、これから続く話のうちに、いずれかわってまいりましょうが、一口に言ったら（私を好いてくれる女性を私は好まない）という奇妙な性格によるのです。普通の人から見たら、まったく矛盾したおかしな話ですが、私の理性が構成する「妻」は、すなおで、真面目で、貞淑な、つまり峯子のような女性であって欲しいのですが、私にはその

理性の上に蔽いかぶさるもう一つの欲求があるのです。これが邪魔をして結局（なにも急ぐ必要はない。理想の人が見つかって、本当に結婚してもいいと思ったとき結婚したらいいじゃないか）というような気になって、ぐずぐずと今日にいたったのが現在の私だといえましょう。

さて、以上は私の店と、私の生活についての説明でしたが、話は変わりますが、私の数少ない友人のうち、五反田で小さなショッピング・センターに靴下、シャツなどの洋品店を出している沢田という男がおります。既婚者で、家には妻子がおりますが、センター内の店へ通勤で営業。小店ですから主人の沢田と、もう一人、若い女店員をおいて、二人だけで仕事は結構、間に合っているようです。

この女店員が、これがまた無愛想な女店員で、時折、店へたちよる私の顔は、もちろん知っている筈ですが「いらっしゃい」とも、「こんにちわ」とも言わず、いつも知らぬ顔です。私はまだいいとして、商売なのですから店へ入ってくるお客に対してもう少し「これは、いかがですか」とか「この方が、お徳用です」とか、お愛想も必要でしょうに、ツンとツツ立ったままで、お客から何か声をか

けられるまで見向きもしません。客を客とも思わない態度は、これは、むしろ度胸がいることで、「女は愛嬌、男は度胸」を反対にしたような彼女なのです。

「困ったよ、あいつには」

夜、その辺の喫茶店で沢田と交す話題の中にも、きまって彼女の問題が登場します。

「他の娘とかえようと思うんだがクビにするのも可哀そうなので、つい躊躇してるんだ。母親と姉妹の三人暮らしで、家もあんまりよくないんだな。姉の方は、アルサロのホステスをやってるようで、あいつは妹の方なんだ。それも給料の半分以上、家にいれている様子なので、つい気の毒だと思っちゃってね」

誰が見ても彼女は困りものです。しかし、愛嬌はないが、顔はさして悪いことはありません。無愛想な仏調面は仏調面ですが、二度三度と顔を合わせているうちに、なんとなく惹きつけるものがある……ような気がする私なのです。

稲岡郁子といって、当年二十一才だそうです。白いブラウスに赤いミニスカート、服装も典型的なミーちゃん、ハーちゃんスタイルで、その上に紺色のワーキング・ガウンをはおった彼女の姿は、野暮ったさそのものです。

が、彼女の立居ふるまいから、ふと覗かれる事務服の下胸の突起、腰のふくらみ、すんなりと伸びた脚の線は、これは見かけによらぬ何かを私に感じさせてくれるのです。

喫茶店だったら、バーやキャバレーとは違って、注文されたものを運ぶだけでいいのだし、お世辞やお愛想は必須条件ではない。峯子はよくやってくれているが、一人で何から何までで大へんだろう。峯子が少しでも手はぶけるようなら、少しでも身体が楽になるようなら……と考えたのが最初でした。

「その稲岡君が来るというんだったら、うちで引取ってみようか。そうしたら君も楽な気持で、他の娘を探すことが出来るだろう」

と、つい私は口を滑らせてしまいました。

「えッ？」と沢田はびっくりした様子でしたが、すぐ大喜びで私の話に乗ってきました。

「いいのか、あんな娘を……。君がそう言ってくれるのは有難いが、どうにもまともに推せんできるしろものじゃないからな」

「俺のとも二人では多いと思うんだが、今の峯子が少々労働過多で気の毒なんですね。ために使ってみるか」

つい私の悪いくせで、経営採算など二次で調子を合わせてしまいました。

「もっとも使ってみて、駄目だったらクビにするからな。それはかまわんだろう」

「ああ、いいとも。俺は、あいつを雇うとき口をきいてくれた人にも、まずい顔をしないですむし、君だったら全然、無関係だから、君の方へ行ってからクビになるんだったら、一向かまわんというわけだ。じゃあ早速、代わりの娘を探すから……」

沢田も大喜びでしたし、私も友人のため、峯子のために多少、役立つことをしたというような気持で大様にうなずいたのでした。

それから一カ月後、稲岡郁子は私の店に通うようになりました。

2

別に正式の履歴書をとったわけではありませんが、話の合間にきいた彼女の履歴は、中学校卒業後、どここの高校が知りませんが一年通学して中退。その後デパートの食堂ガールを一年、沢田の洋品店へ勤めるまでに中小企業の女事務員で、二か所ほど転々としています。一か所に半年、長くて一年。つまり何処の店でも会社でも、すぐやめてしまっって長続きしていません。

これは彼女の落着きのないムラ気がそうさ

せたのか、或は不適當とみなされて先方から断わられたのか、どっちともわかりませんがどこの会社でしたか「友だちと喧嘩してやめちゃったの」と笑いながら彼女が言っていたように、彼女には、同僚との協調性などほとんど持ち合わせていないことは、馴染みの浅い私でもすぐわかります。

若い女性ですから、お化粧なり服装なり、一応のおしゃれはしているのですが、服装の品質などの安っぽさは、これはまあ、経済的に仕方がないでしょう。沢田の店に勤めていたとき着ていた白いブラウスに赤いミニスカート、それに金属のチェーンベルトでウエストにアクセントをつけ、下は網目のストッキングにグレイのパンプスという姿で私の店にもやってきました。いかにも安手ですが、しかし私はこのコスチュームは嫌いではありません。

それは昔からある神社の巫女の姿を連想させるからです。私は神社へ参拝すると、参詣の方はいい加減なのですが、神殿でおごそかにふるまう巫女の姿には、内心（かけまくもかしこみ、かしこみ奉る）気持にかられるのです。なんだか、この女性が神様のような気がして、私は神社ムードにカモフラージュさせ

で、神前をしずしずと歩む若いお巫女さまに向かつて、二拝二拍手するのです。

その白い、したたれに赤い袴が、白いブラウスと赤いスカートとなって私の前に現われた感じ。これは内心そういう意識があるというだけの話ですが、郁子に対して、特にそんな感じがするのは、もう一つ、彼女のヘヤースタイルにもよるのかもしれませんが。前髪を市松人形のように額にそろえて、横とうしろの髪をノーウェーブで長く肩下まで伸ばしている「流し髪スタイル」というか「おすべらかしスタイル」というか、活動的には、うっとうしいスタイルですが、このセミロングの髪型は、内心、私は嫌いではないのです。

何もかも内心、内心ですが、とりえのない困った娘と沢田も私も認めている彼女を私がひきとるようになったのも、便宜的な退職中間工作、峯子の労働量軽減のためというのが理由ですが、しかしそれは表向きで、内心はこの礼儀もエチケットも知らない、ツンとして無愛想な娘のどこかに私が潜在的に惹かれていたのかもしれない。

二週間と彼女に接しているうちに、ふと泥中から蓮を見出すように彼女に心を惹かれてくる私に気がついてハッとしたのです。とにかく主人の私に対しても、峯子にくらべて比較にならない、まったく、礼儀というものをわきまえていません。店へ出勤したら「お早うございます」くらい挨拶したらよさそうなのを、知らん顔です。近ごろの若い娘の通性でもありません。コーヒーカープの置き場所など知りません。コーヒーカープの置き場所などを私にきくときでも「これ、ここへ置いていいの?」といった調子です。店の隅に桃色のソックスが放りだしてあるので「こんなもの、店に置いといたらいけないよ。誰んだい?」と私がきくと「あたしのよ」と恥じらいもなく答える郁子。私が苦笑して奥へ持って入ると、普通の娘だったら「あらすみません、私が」と奪いとるように自分が持つて奥へ入るところですが、ソックスを持って奥へ入る私を見ても、そのまま知らぬ顔です。

そんな彼女ですが、客のないとき、コーヒースタンドのとまり木椅子に腰かけて週刊誌を読んでいる郁子の横顔など、ふと眺めると、何処かで見たとような気がするが、ええと知り合いのBGでもなし、バーやキャバレーのホステスでもなし、映画の女優でもなし、テレビの……、ああそうか、アングラ娘かフーテン娘か知らないが、近ごろ歌手でときどき出ているカルメン・マキという女、あの娘の顔にそっくりじゃないか……などと私は気にかかりはじめたのです。

小さな、とまり木椅子ですから、腰かけの両端から、九〇センチは越していると思われる彼女のヒップが、圧倒的に、はみ出ています。そのたくましいふくらみを、彼女のソックスを持って奥へ入りながら、そっとドアの隙間から、しばし覗き見る私になっていたのです。

店は峯子と郁子と交替制にして、一人は正午から七時まで、一人は二時から九時まで隔日の早出、遅出と決めましたが、峯子の方は正午前十一時ごろから来てくれて、自分ですんで店の前の掃除などしてくれますが、郁子の方は正午が一時ごろになったりします。これは困りますが、どうせ一、二カ月したらクビにするつもりでいたのですから、私はあまり強く言いませんでした。

しかし案じていた郁子の協調性のなさ、日ならずして峯子との間にあらわれてきました。峯子はおとなしい娘ですから、露骨に強

くは態度に出しません、とかくやりっ放しの郁子に対して、峯子がいつもその後始末をひっかぶる結果になるのです。先輩の峯子の注意も郁子が素直にききませんので、時折なにやら口喧嘩をしているようでした。

それなのに当初一か月でクビと決めていた私は、ぐずぐずとそのまま三か月経過。三か月目には郁子に対する考え方が、潜在どころか、レキ然と変化して、私は（これは困ったな、どうしよう）と大いに迷うような始末になったのです。

峯子と郁子に、店用のユニフォームとしてお揃いのジャンパースカートとサンダルシューズを買ってやりましたので、出勤すると二人とも奥の部屋で自分のスカートと靴をぬいで、店用のものに着がえます。脱いだスカートも靴も、峯子のは、きちんと始末してありますが、郁子の方は部屋の隅に放りっぱなしでした。一方はきちんとしてあるのだから別に始末する必要もないが、一方は放りだしてあるから……などとは、こじつけで、私は峯子の方の方は手をつける気にならないのに拘らず、郁子の方の方は、だらしなく脱ぎすてたまのパンプスを、そっとかたづけしてやるようになりしました。

はじめは、そのときついでに靴拭き布で簡単に拭いておいてやる程度でしたが、そのうちに、わざわざシューシャン・クリームを買ってきて、郁子が店に出ている間に奥で磨き掃除をしてやるようになったのです。

靴拭きで拭いてやる程度のときには、知ってか知らずか、郁子はなんとも言いませんでしたが、クリームで磨いたとき、郁子は「あら、磨いといってくれたの」と言ってくれました。「うん、暇^{ひま}だからな」とテレくさく言いわけする私に、郁子は、あざ笑うような瞳を投げかけて、その靴を履いて帰りました。

こういう行為は、一度やりかけると段々進行するものです。まず郁子のパンプスの底の泥を落として雑巾できれいに拭く。表は、靴ブラシでホコリをはらってからクリームをぬって、ネルの布で磨きあげる。

その作業中、その靴の爪先と、内底に一回ずつ、私は計四回のキッスをするようになっていました。

そのうちに最後の磨き仕上げを後に残すようにしました。奥の調理場でクリームまでの作業をしておいて、そのままにしておく。帰るとき、郁子はその靴を履いたあとで「あ、まだクリームのままなんだ。ちょっと

此処へ腰かけ給え、磨くから」

などと言いながら、郁子を閉店後の店のとまり木椅子に腰かけさせます。郁子は黙って椅子の上に乗る。私は彼女のたくましい足に履かれたパンプスを左手で支えて、右手でポケットに用意しておいたネルの布で、すみずみまで磨きあげます。

「履いてからの方が磨きやすいんだ」などと誤魔化しながら、一生懸命シュツ、シュツと磨きこする私に、彼女は黙って足先をまかせています。

「これでよし」と私が仕事をすませると、ゆっくり椅子から下りて「さよなら」と帰ってゆきます。

靴を磨きながら私は

「この布より本当は女の靴下、ほら、ナイロンのストッキングがあるだろ。あの方がうまく磨けるんだ。君の履きふるして捨てる靴下があったら一つ持ってきてくれないかな」と頼んでから二、三日して郁子は

「はい、ストッキング」

と、伝線で履けなくなったグレイとオークルの靴下二足分を私にくれました。以後、私は彼女の靴を磨くのに、そのオークルの方の靴下を使用し、ややうす汚れたブルーグレイ

の方のストッキングは、二階の部屋の私の手文庫の中に大切に納めてしまいました。

彼女への私の奉仕は靴が最初でしたが、椅子に腰かけて突きだしている彼女の足の下にかがみこんでシューズを履かせている私のふるまいにも、彼女はさほど嫌がる様子もなく黙ってさせてくれますので、図に乗った私は今度は彼女のスカートの方にも仕事をのばしました。それも峯子の早帰りしたあとに限るのですが、郁子の動作に注意深く目をそそぎながら、郁子が部屋で店用のジャンパースカートを脱ぎ、自分のスカートの履きかえようとするタイミングをねらって、まず彼女のスカートを手にとってしまいます。それを左腕にかかえこんだまま「さ、うしろを向いて」というと、彼女は最初ほんのわずか躊躇する様子も見えましたが、それも初めの一、二回で、その後は私の言うとおりに身体を動かしてくれるようになりました。

彼女はただ立ったままいいのです。私はまず彼女の背中のホックをはずし、それから前へ回って彼女の前に膝をつき、スカートを脱がせます。スリりと下へずり落ちるスカート。次いで彼女は右の足をあげ、左の足をあげ、私はスカートを手に受けて彼女の腰

からはずします。ブラウスの下の裾から、やわらかいピンクのスリップが温かみをとまなつて私の手に触れます。私は手にかかえていた彼女のスカートを両手で捧げて「ハイ」と前に出しますと、彼女は無表情のまま、また右足から左足と、スカートの中へ足を入れま

す。次いでウエストのホックをかけて、腰の横のチャックを引上げ、これも次第々々に作業をふやしていったのですが、最後に服ブラシでスカートの前、横、うしろとよく払ってから「ハイ、よろしい」というわけです。

ジャンパースカートは、もちろん脱ぎ捨てたまま。彼女が帰ったあとで、私が丁寧に始末して洋服ダンスの中に掛けておくことになっていきます。

私のこういう常軌をはずれた行動に対して郁子がどう思っているのか、彼女はいいとも悪いとも言いませんし、無表情なので、はっきりわかりませんが、馴れない最初のうち、一度、スカートを脱ぎかえる前に靴を履かせようとしたことがありました。そのとき郁子から

「靴はあとからよ。スカートの汚れるじゃないの」
と言われたときには、ジーンとこたえる何

ともいえない嬉しさが胸一ぱいに滲みわたりましたが、そういうところをみると、郁子の方も（そうしたかったら、したらいいじゃないの）程度の気持でいてくれる様子ではあるらしいのです。

3

これでは彼女をクビにするどころではありません。私は次第々々に郁子を対象とした秘密の楽しみにふけるようになりました。

それは、郁子を神様と考えることです。そして自分を、その神様につかえる下僕だと考えることです。

小説など読みますと、対象の女性がいかにノーブルで、いかにも美しいから女神のよう

にならない女性に対して、つまり、どうにも始末におえないような女性。無教養で、下品で、だらしない女性に対して心を惹かれるのです。いつか、終電間近い時間に、浅草のすし屋で、派手な服装をした二人連れの若い女性、工場に勤めている女工員か、或いは、場末のトルコ嬢か知りませんが、そんなふうな感じの、教養の上では、まったくただけな娘でしたが、なんの原因か、サツと立ちあがって、板前の調理人と口喧嘩をはじめました。

「なにさ、ただきいてるだけじゃないの。出来なけりゃ出来ないうて言ったらいいじゃないか」

何のことか内容はわかりませんでした。他の客もいる中で、平気で調理人にくっつかっているのです。調理人の方は、やはり商売ですから言葉少なでしたが、野卑な娘をあざ笑うような、舌打ちするような様子で一口二口、応酬していましたが、二人の娘は大きな声で悪態をついてから席をけて店を出てゆきました。

その店にいた私は、すぐにとび出して彼女たちの跡を追う衝動にかられました。それはレジスターで勘定を払ったり、つり銭を受け

とったりする時間的余裕からみて間に合わないかもしれない躊躇があつて、チャンス逃がしてしまいました。私の胸中では、すぐ彼女たちを追いかけて街頭で呼びとめます。

「私はすし屋の者でございますが、ただ今はまことに失礼いたしました。これにお怒りにならず、今後ともごひいきにお願い申し上げます。つきましては、まことに失礼ですが、マネージャーとして店のいろいろを知っておきたいと思ひますので、店の者がどういう無調法を致しましたか、一つ、おきかせ願えないでしょうか。もし時間がございましたら、そのへんの喫茶店で……。もちろんお召しあがりものは当方で負担させていただきます」

と辞を低くすると、彼女たちは黙って顔を見合わせます。また、こういう娘は（費用はこっちが出すから）と言うと、すぐに乗ってくるのです。喫茶店の隅に腰かけて、私は彼女たちから出来ごとの内容をきく。それはこうとうと説明する内容など私には、どうでもいいのです。

「ばかにしてるじゃないの。あたし、頭にきたわ」

などと調子に乗ってしゃべる姐ちゃんに、私は平身低頭して、紅茶とフルーツでも召上

っていた。もしその上、出来たら彼女たちの住所をきく。場末の安アパートの一部屋に女二人で同居しているのかもしれない。時を見はからって、私はケーキの箱でも持参してそのアパートを訪問、ドライ娘たちのありのままの姿に接して辞去する。それから、それから……と、私の妄想はつづいてゆくのです。

こういう欲求を抱いている男は、あまりいないかもしれません。しかし私は何かにつけて、そういう異常な欲求にかられるのです。少年のころ、鬼神のお松や姐己のお百に心をうばわれたのも同じケースです。

落語で「かじか沢」という話を、昔きいたことがあります。身延参りの男が甲州の山中で道にふみ迷う。夜になって暗闇の山中に一軒の灯火をみとめ、戸をたたいて、一泊の宿を懇願する。出てきたのは、村の女とは思えぬ垢ぬけた若い女で、こころよく泊めてくれるが、旅人が寝たあと、次の部屋で何やら内緒話をしている男と女の声が、ふと耳に入る。男はどうやら女の亭主らしく、夜中に旅人を殺して、路銀を奪おうという話らしい。驚いた旅人は南無妙法蓮華経、あわててその家から逃出すが、気がついた夫婦は鉄砲

を持って旅人のあとを追う。せっぱつまった男は、死ぬ覚悟で前を流れる富士川にとびこんだところ、それが川を流れる材木筏の上。ああ、お材木で助かった、というのが落ちですが、こういう話をきいても、私の妄想は途中から話の筋を変えてしまうのです。

夫婦に部屋の中へ踏みこまれた旅人は、平身低頭して「路銀は全部さしあげますから、命ばかりはお助け」と手を合わせます。旅人が一生懸命にペコペコお辞儀をするので、夫婦の考えも変わり、それから以後、旅人は、つまり私は、です。私はその夫婦の下男になって、その山中の一軒家で暮すことになる。相手は山賊ですから、私は女を「姐御」と呼

び、男を「お頭」と呼んで、薪割り、掃除、洗濯などに精を出す。「ほら、洗っときヨ」と女が投出す亭主のふんどしと姐御のお腰巻を「へい、かしこまりやした」と私は一生懸命、きれいに洗濯する……。そんなふうに私の妄想が飛ぶのです。

始末におえない郁子に対して、そういうふうに私の妄想が飛躍しはじめたのを私は消すことが出来ませんでした。誰に気兼ねもない山中の一軒家ではないので、近所の人や峯子の手前、はっきりと態度には出せませんが、私は内緒で郁子を「女神様」と考えるようになってしまいました。

それは白い小袖に緋の袴の巫女の連想から

〔伝言板〕

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、切手代用、(一割増)振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留(封筒は郵便局で売っています)にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分(前篇写真と絵画特集)第二回分(続篇小説絵画特集)第三回分(前篇続篇収録小説特集)のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号曙出版株式会社へ願います。

そのきざしはあったのでしょうか、誰にも知れず内緒で郁子様を拝むとき、ぎゅっと胸をしめつけられるような快さにしびれてしまうのです。

私は一人になって、夜、寝床に入る前に、洋服ダンスから彼女のジャンパースカートを取出して、正面の壁に吊り下げます。その下の畳の上にイタリヤ風の小さなマットをおいて、その上に彼女が脱ぎ捨てていったサンダルシューズを揃えて安置します。その前にきちんと正坐して、私は土下座するように頭を三度さげてお辞儀、というより礼拝をするようになります。

この礼拝も、初めは簡単なものでしたが、次第に物足らなくなって、次々考えだしては少しずつ行事をふやしていったのです。

神社の儀式というものが、いつの頃から行われるようになったのかは知りませんが征服者の使用していた鏡とか首飾りなどを御神体として奉り、その前でとり行われる礼拝行事が「降神の儀」「玉串奉奠」「御神体拝礼」「のりと奏上」などとあるように、私も郁子に捧げる礼拝神事を、私なりに考えては次々加えていったのです。

まず「降神の儀」私は郁子のスカートとサ

ンダルシューズの前で、うやうやしく拝礼してから、両手を上にあげて天井を見上げ、小さな声で「ハ、ハーツ」と息をはきだして平伏します。それは、アラーの神を呼ぶような声でもあり、昔の大名行列で土下座した下民が「ハ、ハーツ」と、平伏するような声でもあり、これで郁子が私の前に降臨したことになるのです。

それから私は、おそれかしこみながら、にじり膝で前へ進み、郁子のサンダルシューズの前バンドを口にくわえて、一つずつ、うやうやしく置き並べます。そして、再びにじり膝で一メートルほど後ろへ下り、二拍手して「へへーッ」と深く礼拝をするのです。

その次が「のりと奏上」

「のりと」というのが、またうまく出来ているもので、神官が威儀をただして「ここに神鎮まります大御神の御前に、かしこみかしこみ奉りて……」といった最上級の讃辞をならべたてますが、私も自分流に郁子への「のりと」をつくりました。

「白御ブラウス、赤御スカート、御セミロング媛の命さまの御尊きお姿を拝し奉り、まことにこそ多くもかしこき極みでございました。私めなどに御目もふれ給わず、ツンとお

すましあそばし、ふくよかにも御たくましくおおみ玉の御腰を椅子にかけさせたまい、豊かにもすこやかに御のび給えるおおみ足をお開きたまいて、アイシャドー、口紅などおつけ給います御姿を拝し奉れば、かけまくもかしこき極みに目がつぶれる思いでございます」

文句はその日その日によって多少違いますが、とにかく私は注意深く最上級の言葉を並べて、小さな声でスカートとシューズの前に奏上するのです。

それから「昇神の儀」があつて、この神事は終り、私は彼女のスカートとシューズを元の場所へかたづけしてから床の中に入ります。

「白御ブラウス、赤御スカート、御セミロング媛の命」とは、私が捧げた郁子の御神名ですが、神代時代にはその人の姿態なり能力なりを、そのまま神の名として名づけ「木花佐久夜媛命」とか「天手力男命」などと呼んだように、私も郁子に対して、彼女の最初のときの服装を、そのまま神の名として奉上したのです。

自分の家へ帰って寝ている郁子は、もちろん私がこんなことをして拝んでいるなど露知らず、だらしなく足を投げだして眠っている

ことでしょう。しかし、私のこんな馬鹿げた行為は知らぬまでも、靴を磨いたり、スカートの始末をしたりする私の態度に対して（この男は、あたしに参っているんだ）ということとは、どうやら分かっている模様です。その証拠に、郁子の私に対する態度が、次第々々に輪をかけて無遠慮になり、横柄になってきたことでも分かります。

交替にきめた閉店後の掃除なども、峯子のおかげで、きちんと峯子がするのでありますが、郁子の方は全然してくれません。といっても実は私から、そういうふうにしていったから、そうだったまでの話で、私は「ハイ、今週の週刊誌」などと郁子に雑誌をわたして、スタンドの椅子に掛けさせておき、フロアーのゴミ掃き、カウンターの雑巾がけなど、全部、私がしてやるのです。

次第に馴れてきた郁子は、彼女の掛けている椅子の下を私がかがみこんで掃いていても平気で目もくれず、熱心に週刊誌にのっている若い男の写真に見入っているようになりました。

——(未完)——

× × × × × × × ×



—— 告 —— 白 ——

衣束拘具雨ゴム

—— 文 と 絵 ——

梅 川 幸 子

相も変わらずゴムに執着する私のプレイは
 (1) 直接的に自分の欲望を慰めるもの。
 (2) ゴム装束の拘束感を楽しむもの。
 の二通りにわかれます。

(1) の場合は、素肌に婦人用のゴムレイン
 コートを着て、その上に男物総ゴム合羽を重
 ね着し、更にゴム手袋、ゴム長、男物ゴムマ
 ントなどを着込みます。そして、婦人用ゴム

レインコートを収めておく同生地のを裏返
 しにして(ゴムを張った面を表にして)顔に
 あてがい、鼻と口を覆った上からゴムマスク
 をかけるのが普通の身仕度です。

この姿ですと、体の自由も十分に利きます
 ので、お部屋でも、トイレでも、お風呂や池
 の中でも、好きなところでのプレイが出来
 るから、ほとんどの場合、この身仕度に自然と

なってしまう。

(2) の場合も、私なりにいろいろと考えて
 一定の「拘束ゴム装束」の形が出来ています
 が、その大体を書いてみますと、

まず、素肌にフード付の男物の総ゴム合羽
 (表が黒、裏が茶色の総ゴム製)の短いもの
 —つまり上衣—を着て、ゴムズボンをは
 きます。上衣の裾はキチンとズボンの中に入
 れて、腰ベルトをきりっと締めます。

両手には、お台所で使う普通のゴム手袋を
 はき、顔には猿ぐつわをします。これは、総
 ゴム合羽と同じゴム生地で作ったもので、内
 側に、両手にはくゴム手袋がのり付けしてあ
 るのです。従ってこれかけると、手袋の指
 が口の中に入ってしまうことになります。猿
 ぐつわは、鼻からあごまでを覆いかくすぐら
 いの大きなもので、鼻孔を二つあけてありま
 す。これを首筋の後ろできつく結び、ゴム製
 の海水帽をかぶり、その上からゴム合羽のフ
 ードをかぶってボタンをかけます。

その上から特大のゴム合羽(着丈一メート
 ル二十五センチ)を着て腰ベルトを締めま
 す。この合羽は、袖口がきついゴム締めにな
 っています。そして更に、胸当て付のゴムズ
 ボンをはいて、肩からゴムのズボン吊りで吊

り上げます。

それから水中胴長（いわゆるオバケゴム長靴）をはき、これもゴム紐で肩に吊り、腰ベルトで締めるのですが、この水中胴長は、私の足にぴったり合う小さなもので、かかとは平らに加工したものです。そしてその上から文数二十八センチの特大サイズのガバガバした水中胴長をはくのです。

そして、胸当て付ゴムズボンの特大のものをはき、ゴム前掛けを四枚、前後に二枚ずつ重ねて腰に巻きつけ、更に肩まで届く五本指のゴム手袋をはいて首からブラ下げるかっこうにします。その上で、今度は総ゴム合羽の特品を、前後逆に着て腰ベルトを締め、更にその上から同じものをキチンと着て、フードをかぶり、フードマスクをして、やっと出来るわけです。

この異様な装束をつけた私の姿を、ご想像願えるでしょうか。でも、これだけでは私はまだもの足りません。この姿をおおいかくすマントが必要なのです。マントこそ、私のシンボルだと思っていますから……。

私は、ゴムマントに次のような加工をしております。

男物ゴムマントには、普通の黒いゴム引き

（裏は茶色の木綿地）の他に、表が紺色で、裏に同色のゴムが張ってある「裏ゴム防水」のものがありますが、私は、いままで使っていた黒いゴム引きのものの中で、一番使い古したものに、この裏ゴム防水のものを重ねて縫い合わせ、フードも同じように合わせてマスクの部分の大きさをこしらえ直し、三つボタンにしたのです。

これを前記の装束の上から着るのですが、これだけ着込みますと、もう立っているのも辛いくらいに、全身が締めつけられ、肩のしかかる特製ゴムマントの重さ、まぶかにかぶさるフード、舌にからみつく手袋の指の異様さ、などが一度に襲ってくる感じで、身動きも出来ない拘束感が私を夢の世界へつれていってくれるのです。

冬でも、全身からポタポタと汗が流れだしてきますし、このままではばらくじっとしていただけでも、蒸し責めにされているような被虐感が私を夢中にさせてしまいます。

ゴム装束の着ぶくれ人形が、長い黒ゴムのマントをひきずり、大きなフードからわずかに眼だけがのぞき、キュッキュッとゴムのすれ合う音を立てながら、鏡の前で不自由な動きをノロノロとくり返す様子を、もし他人が

見たら、きっとびっくり仰天することでしょう。でも、動くたびに、ゴムマントの艶がいりるに形を変えて光るのが、私にはとても面白く、あやしい神秘の起伏として映り、肌に感じるむれたゴムの拘束感とともに、とても魅力的なのです。時計が午前二時を打ちました。

『さあ、でかけましょう』

私は、いえ、コロコロにふくれ上ったゴム人形は、ゴムの猿ぐつわの奥でひとりつぶやき、長くゴムマントの裾を引いてノロノロと裏木戸を開けます。そして一步外へ出れば、暖く明るいお部屋とは正反対の、真夜中の暗く冷たい風が吹きつけます。冬の夜の大粒の氷雨とともに……。

音を立てて降り当るゴムマントの表面の雨粒が、幾枚も重ね着したゴム装束を通して肌に感じとれるほどの強い雨足。フードの縁から滝のようにしたたるしずくは、たちまち、わずかにのぞく顔とサルぐつわをぐっしりと濡らし、重く肩にのしかかるゴムマントの裾に足をからまれ、ずるずる滑る田圃道をよろけながら歩いて行く目的地は私のプレイの場、草の生え茂っている泥沼なのです。

この泥沼は、約五メートル四方ぐらいのご

く小さなものですが、スリバチ状になっていて、真中の一番深いところで私の胸ぐらいの深さです。濁った泥水がよどみ、水草といっしょに、附近の人々が捨てるゴミやがらくたが一ぱいに浮き、なんともいえぬ異臭がプンプンたちこめています。

この汚い泥沼が、私の無上の天国となるなぞといっても、どなたも信用されるとは思えません。でも私には、魅力溢れるプレイの場となるのですから仕方ありません。

私は、沼の片側から身をのり出して行きます。足許の土が、粘土のように私のゴム長を滑らせてくれ、ゴボゴボと泥水にのめり込ませてくれます。ズルズルと足首から膝、そして腰と沈み始めるときの気持、これが私にとって、なんともコタエラナイという気持になれる第一歩なのです。

水面上のゴミやガラクタをかきわけて、深みへ深みへと進む時の気持。ゴムマントは水にはいると、落下傘のようにふくらんで水面に浮きますが、それを内側からひっぱって体にしっかり巻きつける時の気持。水中胴衣の胸元まで浸り、すぐ眼の下に臭い沼水とゴミが迫って来る時の気持。思いきって首まで浸すように膝をかかめ、全身が眼に見えない口

ープでガンジガラメにされたような泥水の水圧を感じた時の気持……。

これらがすべて、私を快美な想念のなかに引き込んでくれるのです。

激しい雨に叩かれ、水圧に締めつけられ、全身をゴム装束でくるまれたまま身動き一つ出来ぬ想念の中で、四十女のとめどもない快美感のむさぼりがあるなんて、だれが理解してくれるでしょう。

私は孤独なこのプレイを、今迄に何十回繰り返したことでしょう。そして、いつも満ち足りた想いと、尚、もう一つ何か不足しているような物足りなさを残して、ぐったりと引き揚げていたのです。

しかし、今は違います。私は孤独ではないのです。このゴム雨具と泥沼のプレイを理解してくれるだけではなく、自分からとび込んでくれる、れい子という存在があるのです。

「ママ、やっぱり、ここだったのね」

沼の端に現われた黒い影がパッと懐中電灯で私を照らして、内心、期待していた私をとび上げるほど悦ばせてくれました。私は、大急ぎで、でもノロノロした動作で泥沼を這い上りました。れい子が足をすべらせながら手伝ってくれましたが、それでも、二度ばかり上

りかけては滑り落ちるのを繰り返し、ようやく上りきった時は、私のゴムマントは泥まみれでした。でも激しい雨足は、すぐにこの泥を洗い流してくれます。

「あなた、どんなかっこうしてきたの？」

と私が訊くと、れい子はゴムマントの裾をまくって、電灯の光を向けて見せるのです。

随分、簡単なゴム装束です。ピンクのゴムレインコートにゴム合羽、ゴム手袋は肩まで届く長いものですが、ゴム長は、腰までしかない茶色のものだけです。

「アラ、これだけ？ これじゃ寒いでしょ。」

こんな夜は、私みたいにオバケゴム長を何着もはかなきゃ風邪ひくわよ」

「だってえ」

れい子の、迎えに来た気持はこのゴム装束からも、よくわかっています。私は黙って、れい子の持っていた縄をとって、後手に縛ってやりました。

雨の中を、ゴム雨具にくるまった女二人が家に向かって引き返したのです。ゴム衣のまま縛られた、れい子と、引き立てる私。

その後、家についた二人が、どんなにプレイに溺れ切ったかは、ご想像していただけないでしょうか。

はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

連載小説

はな

と

へび

団 鬼 六

続篇（第六十二回）

蛇

と

△木馬夫人▽

上下に数本の麻縄をからませたふっくらとした乳房から、スベスベした白磁の腹部までねっとり脂汗を浮かべて、珠江夫人は、限界に到達した生理の苦痛と必死に戦っているのだ。

木馬の上で、左右に割り開いた、すらりと伸びた足の線は、華奢で繊細で、心を溶ろかせるような優雅な美しさを含んでいる。

川田と吉沢はダブルベッドの上にあぐらを組み合って、花札を引きながら、時々、楽しそうに木馬の上で、苦悶する珠江夫人の方を

見るのだった。

「随分と辛抱が続くじゃないか、ええ、折原夫人」

「何時までも瘦我慢をはずさず、さっさとすましちまいなよ。そのあと、このベッドに縛りつけて、とても楽しい思いに浸らせてやるからな」

川田と吉沢は、顔を見合せて笑った。

雪白の脂肪で靄がかかったような美肌の珠江夫人は時々、震えが来たように木馬に乗った腰部と左右へ割った優美で悩ましい太腿あたりを揺さぶり始め、切なげな吐息を吐きつづけているのだ。

「そんなにモジモジすりゃ、的から外れてし

まうじゃないか」

川田と吉沢は、ベッドから降りると、木馬に近づき、むっちり引きしまっている珠江夫人の腰部に左右から手をかけ、木馬の背にくり抜かれた穴の上へ押しすすめるのだ。

割られた太腿の柔らかな翳りを眼にした川田と吉沢は、身内の中に甘ずっぱい官能がこみ上ってくるのを感じながら、同時に敵愾心のようなものをも感じ出す。

今に見ろ、うんと吠面をかかせてやるから——川田は、狂暴な血をわき立たせて、そっと手をのびしかけたが、途端に珠江夫人は電気にでも触れたように滑らかな腰部をぶるっと揺さぶった。

「な、なにをなさるんですっ」

きつと、美しい柳眉を上げて珠江夫人は、川田に憎悪のこもった視線を向ける。

「淫らな真似をなさると、舌を噛みます」

「ああ、噛みたけりゃ、噛みな。鉄格子の中にいる千原美沙江がお前さんの代役をつとめるだけさ」

川田は、せせら笑うのだ。

珠江夫人は今にも泣き出しそうな顔をしてさつと眼を横へ伏せる。

吉沢は、腕時計を見て、

「ぐずぐずすると、夜が明けちまうぜ」

と舌打ちして、珠江夫人の木馬に乗った双臀を平手打ちした。

「おい、やらかさねえのか、やるのか、はつきりしろい。まだか、まだかとベッドの方が愚痴をこぼしているぜ」

光沢を持った繊細な珠江夫人の白い頬に大粒の涙が糸をひくように流れていく。

「——お願い、ね、お願いですっ」

何分かたって、珠江夫人は、上気した顔を上にあげた。

「どうしたい。とうとう辛抱し切れなくなっ

たというのかい、折原夫人」

吉沢が珠江の腰に手をかけて、意地悪く揺

さぶった。

「しばらくの間、お願い、外へ出て、ね、お願いです」

珠江夫人は、美しい額を八の字に寄せて、川田と吉沢に哀願するのだ。

「俺達の見ている前じゃ、教養が邪魔をしてやらかす事が出来ねえというのだな」

よし、と川田は、うなずいて、

「十分以内にすまされえと、折檻がきびしくなるぜ。わかったな」

川田と吉沢は、淫靡な笑いを残して部屋を出て行った。

二人の姿が視界から消えると、珠江夫人は木馬の上で、一きわ激しい涕泣を洩らした。

そして、心の中で、心死に夫の元康に救いを求めるのである。

——あなた、珠江はいったいどうしたらいいの。ね、助けて、早く助けに来て頂戴——

「うっ」

と、珠江夫人は、再び、急激にこみ上って来た生理の苦痛に顔を歪め、歯ぎしりをして力一杯、太腿で木馬を締め上げた。

「もう、もう駄目だわ」

珠江夫人は、べっとり脂汗を浮かべた額を上げ、白い歯を噛みしめた。わなわなと唇が

痙攣する。

遂に堰は切れた。

「ああー」と珠江夫人は狼狽して、火がついたように真っ赤になった顔を、狂おしく左右へ揺さぶった。

木馬の下のブリキのバケツを激しく水のたたく音。

「へへへ、奥さん、入ってもいいかね」

一旦、外へ出ていた川田と吉沢が、ドアを開けて入って来る。

「——いけないっ。入っちゃ駄目っ。後生ですっ。入って来ないでっ」

木馬の上の珠江夫人は、激しく動揺して、火柱のようになった身体を木馬の上で揺り動かし、悲鳴に似た声を張り上げた。

一旦、切れた堰は、止めようにも止められるものではなく、珠江夫人は、ニヤニヤして闖入して来た二人の男にヒステリックな声を投げつけたのである。

「そう水くさい事いうなよ。俺達と奥さんとは、もう間もなく、他人じゃない間柄になるんだぜ」

川田と吉沢は、断続的に木馬の上で慟哭する珠江夫人を楽しそうに眺めて、近寄ってくるのだ。

恐怖と羞恥の戦慄に木馬の上で二肢を震わせる珠江夫人は、身も世もあらず、麻縄を巻きつかせた優美な胸を揺さぶり、必死に顔をそむけて、妖しいばかりの号泣をその口から洩らすのだった。

やがて、放水は次第に弱まり、水滴となつて、バケツの中へ落下するようになったが、その頃には、珠江夫人は、完全に打ちひしがれたように木馬の上で身動きもせず、がっくりうなだれていた。

「へへへ、やっとおすましになりましたね」
吉沢が、珠江夫人の妖しいばかりに白い、滑らかな太腿を手で撫でさする。

「およしになって——」

珠江夫人は、先程までとは違って、力のない、か細い声を出すと、上気した顔をねじるようにそらせて、シクシク肩を慄わせて鳴咽するのだ。

木馬にまたがったまま、そういう醜態を演じたという、血が逆流するばかりの羞恥と、それを野卑な男二人の眼にさらしてしまったという、息の根も止まるような屈辱とにさいなまれて、まともに顔を上げられぬ珠江夫人であった。

「ほう、こりゃ随分とたまっていたものだ。」

可哀そうに」

吉沢は、木馬の下の方のバケツの中をのぞきこみ、クスクス笑って、

「どうだい、奥さん。大きい方もついでにすましちまいなよ。その方が面倒がはぶけていいや」

と、珠江夫人の美しい横顔を見つめて云つた。

珠江夫人は、頬やうなじのあたりをまた朱に染めて、処女が羞じらうように、なよなよ首を横に振る。

「そうかい。無理にとはいわねえよ。どうせそのうちには、痛めつけられたお礼に、俺がこつてり浣腸をしてやるつもりだからな」

川田は、そう云って、ゆっくり服を脱ぎ始める。

「吉沢の兄貴、あんたも裸になっちゃあどうだい」

「そうだな。何だか、蒸し暑くなつてきやがったもんな」

吉沢も川田にならって、服を脱ぎ、パンツ一つになる。

「折原夫人も、生まれたまんまの素っ裸だ。俺達も、不公平だと云われねえよう、さっぱりしようぜ」

パンツまでも脱いでしまった男二人は、

「へへへ、木馬の上の美しい奥様、すっとした所で、早速、このベッドの上へ乗って頂きましようか」

と、左右から珠江夫人の腰に手をかける。

木馬からおろされた珠江夫人は、まともに立つ気力はなく、そのまま床の上へ身を小さく折ってしまった。

冷たい端正さを持つ珠江夫人の白い頬に屈辱の口惜し涙がとめどなく流れるのを、川田と吉沢は、心地良さそうに眺めている。

その時、ドアが開いて、そつと入って来たのは、鬼源と大塚順子であった。

「もう少し早く来りゃ、面白いものが見られたのによ」

吉沢は、木馬の下の方の洗面器を指さして笑いふと気づいて、あわててパンツをはいた。

「そいつは残念だったな」

鬼源は薄笑いを浮かべて順子の顔を見る。
「貞淑な人妻も、やっぱりそれだけは、どうしようもないものね」

大塚順子は声を立てて笑った。

珠江夫人は、その濡れた美しい瞳にキラリと憎悪の色を走らせて、順子を見上げた。

「大塚さん。こ、このような羞しめを私に加

えて、ただですむと思つてらっしゃるの」

はっきりと敵意を示し、珠江夫人は、美しい柳眉を上げ、ヒステリックな声をはり上げるのだ。

「男達の見ている前で、こんなものを流し出しておきながら、随分と大きな口がきけますわね。折原の奥様」

順子は、木馬の下の洗面器を指さしながら再び笑うのだ。

「呪います。私、貴女を心から呪いますわ」

珠江夫人は、怒りにブルブルと全身を慄わせて順子に云い、次に、がっくり首を落とすとキリキリ歯の音をたてながら、口惜し泣きを始めるのだ。

川田や鬼源達は、そんな珠江夫人の透き通るような白い華奢で優美な肉体を貪るように見つめている。

どちらかといえば、このように細い華奢な線を持つ女は、性感はかなり敏感な筈だと、そんな事を考えているのだ。

「さ、奥さん。ベッドの上へ乗るんだ。テストしてやるからな」

川田と吉沢が、背後から珠江夫人の大理石のように滑らかな肩に手をかけ、引き起こしにかかる。

「テ、テストですって——」

珠江夫人は、きびしく縛しめられた白磁の裸身を激しく悶えさせ、

「な、なんのテストをなさろうというの。はつきり、おっしゃって下さい」

と、はげしい口調で川田に云うのだ。

「気の強い女だなあ。そう一々、手を焼かさねえでくれよ」

と吉沢が苦笑する。

「敏感か、鈍感か、テストしてやろうと云つてるんだよ」

川田は、珠江夫人の縄尻を力一杯ひいて、やっと立ち上らせると、その絹餅のようにふっくらした双臀をピシヤリと平手打ちして笑った。

「さ、来るんだ」

鬼源も手伝って、珠江夫人をベッドの前へ引きずるように連れて行く。

四隅に皮ベルトが仕掛けられてある無気味なベッドを眼にした珠江夫人は、青ざめて全身を石のように硬化させた。

「ここへ大の字になって、おねんねして頂きたいんだよ、奥さん。そうすりゃ俺達が、感受性が強いかわいいか、くわしく調べてあげようというんだ」

川田が、せせら笑って、珠江夫人の硬直した頬をついた。

憤怒と屈辱に体内の血が逆流する思いの珠江夫人であったが、それを必死にこらえて、「最後のお願いです。この羞しめを受けるのをもう一日、待って下さい」

「ええ？ もう一日、待てだ——」

吉沢は、鼻に小皺を寄せて、凍りついたような珠江夫人の横顔を見た。

「お手伝いの友子さんと直江さんは、きっとここへ戻って来ます。明日一日待って、もし二人が戻って来なければ、その時は——」

珠江夫人は、段々と涙声になりながら、左右に立つ川田と吉沢に哀願し始めるのだ。

「医学博士夫人ともなれば、もう少し頭がいいと思つたけど、これじゃ、どうしようもないわね」

と、大塚順子は声をあげて笑い出す。

「まだわかんないの、折原夫人。貴女と千原家のお嬢さんは、あの二人の女中にまで裏切られてしまったのよ」

そう云った順子は、振り返ってドアの方へ声をかけた。

「もういいわ。二人とも入ってらっしゃい」
先程からドアの外で待機していたらしい銀

子と朱美が、千原美沙江の付き添い女中である友子と直江を連れて入って来る。

その瞬間、珠江夫人の顔はひきつったようになった。

「あつ、貴女は——」

すぐには声も出ず、珠江夫人は驚愕のあまり、気が遠くなりかけた。

「悪う思わんといてや、奥さん」

と、直江と友子は顔を見合わせて舌を出し肩をすくめて珠江夫人に云うのである。

「人にこき使われて暮すより、贅沢三昧して暮す方が得やさかいな。うちら、これから、葉桜団のお姉さん達の世話になって暮す事にしたんや」

友子の言葉を聞く珠江夫人の顔からは血の気が引いた。

「じゃ、貴女達は、お嬢さんと私を地獄の底へ突き落としたのね」

珠江夫人は戦慄して、声を震わせた。

「何という恐ろしい人なの。そ、それでも貴女達は——」

何か云おうとしても、火の塊のようなものが胸元にこみ上り、珠江夫人は絶句して、さっと顔をねじると、激しく嗚咽するのだ。

「まあ、奥様、可哀そうに素っ裸にされはっ

たのね」

直江は、白磁の麗身を慄かせて泣きじゃくる珠江夫人を凝視して、含み笑いする。

「きれいな体してはるわ。まぶしい位に色が白い。ね、友子、あんたもそう思うやろ」

友子も、うっとりした眼つきで、胸の隆起の上下に巻きつかせた麻縄以外、何も身につけるもののないみじめな珠江夫人を、しげしげと見つめるのだった。

大塚順子が、口元を歪めて、そんな珠江夫人に近づく。

「ホホホ、これで納得がいったでしょう、折原夫人。人間というものを信用すると、ろくな事はない。これで一つ、賢くなられたと思うわ」

さ、わかったら、おとなしくベッドの上へ乗るんだ、と川田と吉沢が再び左右より珠江夫人の冷たい硬質陶器のような肩先に手をかけた。

「一つだけ聞かせて下さい。大塚さん」

珠江夫人は、ふるえる頬に大粒の涙を流しながら、順子の方へ視線を向けた。

「何なの、奥様」

順子は、ゆっくりと煙草に火をつけ、面白そうに珠江夫人の泣き濡れた顔を見る。

「貴女達は、お嬢さんと私をここへ監禁し、これから先、どうなさるおつもりなの」

「フフフ、それは幾度も申上げてある筈じゃありませんか」

順子は、うまそうに煙草の煙を吐きながら「私が主宰している湖月流生花は、貴女達のために、これまで随分と煮湯を吞まされてきましたわ。私は、その復讐をするため、千原流家元のお嬢さんとその後援者である折原夫人をこうして誘拐したのですからね」

順子は、珠江夫人が世にも哀しげな顔になったのを楽しげに見つめて、更につづける。「お二人の命までもとうとうとはいわないわ。そのかわり、野蛮な人間達のお座敷ショーに出演するような、最低の女にまで落としてやるうと思うのよ。くわしい事は、ここにいる鬼源という人間調教師からお聞きになるといいわ」

ベッドに乗ってから説明してやるぜ、と、鬼源は、珠江夫人を横抱きにしようとした。「な、なにをするのっ、やめてっ」

端正な象牙色の頬にパツと朱を散らして、珠江夫人は身を振り、昂ぶった声をはり上げたが、

「今更、悪あがきはみっともねえぜ」

と、川田も吉沢も、そして、先程からニヤニヤして眺めていた銀子や朱美も手を貸して珠江夫人をベッドの上へ押し上げる。

川田と吉沢は、後手に縛った麻縄を解くと素早く珠江夫人の両手を割り開かせ、左右の皮紐に縛りつけた。

「嫌です。ああ、お願い——」

気丈な珠江夫人も、遂に悲鳴を上げた。

「生娘きむすめでもあるめえし、大袈裟な声を上げるねえ」

鬼源は、のたうち廻る珠江夫人を見て、笑いながら云った。

銀子と朱美が、楽しそうに、暴れまくる珠江夫人の両肢をからめ取ろうとする。

珠江夫人は両手首に喰いこんだ皮紐を引きながら、両肢を縮めたり、のたうたせたり、狂気したように暴れるのだ。

「貴方、ああ、貴方、助けてっ」

と、夫の名を無我夢中で口走り、一方に腰をねじったり、また反対側に腰を歪めたりして、悶え、狂乱するのだ。

「いい加減にしねえか」

吉沢は、そんな珠江夫人の頬をいきなり激しく平手打ちした。

「まだ、観念する事が出来ねえのかい。おめ

えはもう今日から森田組の商品なんだぜ」

珠江夫人の美しい瞳から、どっと熱い涙が溢れ出る。

「人間、諦めが肝心だ。おめえは、やがて、第二の静子夫人になるべく俺達の調教を受ける事になってるんだからな」

川田は、そう云って、珠江夫人の抵抗の意志がくじけ出した事に気づくと、銀子達に早く仕上げる、と眼くばせを送った。

優美で繊細で、高貴な美術品のような白い下肢に銀子と朱美の手がかかる。

「さ、奥様、思い切って、うんと大きく開いて頂戴」

一瞬、嫌悪の戦慄がブルッと珠江夫人の身内に走ったが、もうそれ以上、頑かたくなに抵抗する気力はなかった。

ぴったりと閉じ合わされていた妖しいばかりの白さを持つ美麗な珠江夫人の太腿が銀子と朱美の手で左右に割り開かれていく。

「ああ、そ、そんな——」

珠江夫人は、全身の血が逆流するばかりの羞恥と恐怖に再び絹を裂くような悲鳴を上げたが、すでにおそく川田や吉沢も手伝って、左右へ引き絞った珠江夫人の細工物のような華奢な足首へ皮紐をきびしく巻きつかせてし

まった。

「やれやれ随分と手古ずらせてくれたけど、こんな風にされっちまえば、すっかり諦めがついたでしょ」

銀子と朱美は、ベッドの上に堂々とばかりに大の字に固定されてしまった珠江夫人を見て哄笑する。

雪白の美麗な珠江夫人の肉体は、俎の上に乗せられた美しい人魚のように、しかも、身動きも封じられて、ベッドの上に仰向けに縛りつけられてしまったのだ。

しかし、何という優雅で艶めかしい珠江夫人の裸身だろう。

三十才になったとは思えない艶々しい輝くばかりの乳色の肌、ふっくらと柔らかに盛り上った胸の隆起、腰のあたりの官能味のある艶めかしい曲線、そして、無残にも、左右へ大きく裂かれて縛りつけられた二肢の線の美しさ。かすかに内腿に青い綺麗な血管を浮かび上らせて、ぐっと削いだように割り開いた太腿は、象牙色に冷たく輝いて、何ともいえない悩ましい高貴な官能美に包まれている。

男達の射るような視線を辛く感じてか、珠江夫人の開いた麗わしい両腿の筋肉は硬直しているようだった。

「こ、このような羞しめを私に加えて、更に何をなさろうというのです」

珠江夫人は、羞恥のため、真っ赤になった美しい顔をねじるように横へ伏せながら、しかし、反撥をこめた口調で、ニヤニヤして凝視する卑劣な男女達に云ったのである。

この無気味で、淫靡な空気がまん出来ず最後の敵意を示すかのように、わななわ唇を慄わせる珠江夫人であったが、銀子と朱美は友子と直江を隅へ呼び寄せて、何か、ひそひそ打合せをして、鬼源の方を向くと、

「ね、鬼源さん。最初は、この二人に、珠江夫人の感度のテストをさせりゃどう。その方が面白いと思うんだけど——」

そう云った銀子は楽しそうにペロリと赤い舌を出した。

△新たな崩潰▽

千原美沙江のお付き女中である友子と直江の二人に珠江夫人をなぶらせるという着想を一番喜んだのは大塚順子であった。

「じゃ、ここは二人に任せて、私達は、こっちでしばらく一服しましょうよ」

順子は隅の卓へ歩き、棚から洋酒瓶を取り

出す。

「じゃ、一息入れるとするか」

川田と吉沢達も、椅子に坐りこんで、順子に注がれたコップのウイスキーをうまそうに飲むのだった。

「しっかりやんなよ、友子。あんた達も今日から、あたい達の身内なんだからね。女一匹仕込みあげる事ぐらい覚えなきゃ駄目だよ」
銀子と朱美も、友子達に声をかけ、卓の傍に坐って、ウイスキーを飲むのだ。

友子と直江は何となく照れ臭そうな顔をしてベッドに縛りつけられている珠江夫人の傍へ近寄る。

「奥さん、悪う思わんといてや」

珠江夫人は、二人の女中が近づくと、大の字に固定された麗身を狂おしげに反り返らせたりして悶えながら、血を吐くような思いで叫ぶのだった。

「——貴女達までが、私を笑いものにしようというのっ。きつと、きつと、貴女達、後悔する日が来るわ」

女中二人の眼に、このような浅ましい姿を晒すだけでも、気が狂うばかりの屈辱であるのに、更に、彼女達は自分の身にどのようないたぶりを加えようというのか。珠江夫人は

あまりの口惜しさに胸が張り裂けそうになるのだ。

「ね、何を、何をしようというのっ」

友子と直江は、狼狽してわめき続ける珠江夫人を無視し、ニヤニヤしながら、ベッドの上へ膝を乗せてくる。

「奥さんの感度を、調べろという命令ですね。おとなしくしてんか」

直江は、そっと珠江夫人の柔らかい胸の隆起を両手で包むように支えと、その頂点の可愛い薄紅色の乳頭に唇を軽く押しつけるのだった。

「あつ。やめてっ、何をするのっ」

女中の手でなぶられるという憤辱、その虫ずの走るような感触を乳房に受けた珠江夫人は、悲鳴に似た声を張り上げたが、一方、友子は、身動き出来ぬ二肢の方へ回り、直江なんかには負けるものかと象牙色に輝くばかりの内腿にいたぶりをしかけたものだから、珠江夫人は、逆上したように両手首、両足首にかかった縄目を引いて悶えまくるのだった。

「馬鹿な真似はよしてっ、よして頂戴！」

身動きもならぬ五体を揺さぶり、のたうたせ、舌足らずの悲鳴を上げつつけるベッドの上の珠江夫人を、遠くから見つめながら、銀

子と朱美達は肩を動かして笑い合い、ウイスキーを飲み合っている。

「あれ位の事で、ギャーギャー騒ぎ立てるよーじゃ、今後の調教はかなり骨が折れるだろうな」

と、吉沢が云うと、鬼源は、手を振って、「そうじゃねえ。博士夫人という気位の高さがあんな風に手古ずらせる原因となってるんですよ。あの女は、体つきから見て、人一倍敏感だと思えますね。だからこそ、一寸、肌に触れられるだけで、よけいにうろたえちゃうんですよ」

鬼源は、そんな風に講釈しながら、順子に注がれたウイスキーを眼を細めて飲むのだ。「ところで鬼源さん。これから、あの折原夫人を、どんな風にして仕込んでいくつもりなのよ」

順子は、愉快そうにベッドの方を見ながら鬼源に聞く。

「こういう高慢ちきな女は、徹底的に緊め上げなきゃ駄目ですからね。今夜は、明け方までこいつなんかを使って絞り上げるんです」鬼源は、静子夫人を苦しめたアメリカ製の責具を懐から取り出して卓の上へ置いた。

効果は絶大で、あの静子夫人が大声で泣き

わめいたそうだと、鬼源は千代に聞いた話を順子に話して、

「そして明日は、俺達三人の烙印を押し、田代社長の前で、森田組の商品になりきる事の宣誓をさせる。それから、大塚女史に詫びを入れさせて剃毛してやる。そして、すぐに調教開始だ」

順子は楽しそうに相槌を打ちながら、鬼源の話聞いていたが、その時、ベッドの珠江夫人は、けたたましい悲鳴を上げた。

友子の攻撃が、珠江夫人の最も恐れていたことに切替えられたようだ。

「——やめてっ、やめて頂戴！」

皮紐につながれた両手首を狂ったように振り、双臀を揺さぶり、両足首をつないだ皮紐を引いて必死に悶えまくる珠江夫人である。

右や左に身を伏せようと狂気したように暴れ、腰を揺さぶり、友子のいたぶりを避けるための悲痛な努力をくり返すのだったが、

「いくら悶えても、もうどうにもならんわ。

いい加減に諦めたらどうやの。奥さん」

友子は、少々もて余し気味らしい。

「——後、後生ですっ、やめて。ね、友子さんっ」

珠江夫人は、もうどうにも身を防ぐ術がな

いと覚ると、切れ切れにあえぐような熱っぽい声で友子と直江に哀願し出すのだ。

「顎で使っていた女中の私等に、こんな事されるのが口惜しいのやろ。どや、奥さん、何とか云うてみな」

友子は、直江と顔を見合わせて、ニヤリと笑い合い、更に攻撃を続行するのだった。

「あ、ああ、友子さん、許して。か、勘忍して——」

珠江夫人は、ポロポロ涙を流しながら、若奥様風に美しくセットされた艶々しい黒髪を左右へ揺さぶるのだった。

「今更、何を云うてんの、奥さん。それよりそろそろおとなしゅうなってくれたらどうなのよ」

珠江夫人の哀願などには頓着せず、笠にかかって責め上げる友子だったが、恐怖と屈辱の極に筋肉を硬化させ、屈服を示さぬ珠江夫人を感じると、友子は、いらいらして云うのだった。

「いくらがんばっても、降参するまで責めてやるのや。ええか、奥さん」

しかし、珠江夫人は歯を喰いしばった表情で、負けるまいと必死にがんばっている。

「のいてみな。あたい達がやってやるよ」

銀子と朱美が、もてあまし気味の友子達を退ける。

「全く意地っ張りね、この奥さん」

しかし、銀子の自信も崩れかけた。珠江夫人は、依然として美しい眉毛を苦しげに曇らせるだけなのだった。全身で息をつめ、打碎かれまいと悲痛な表情を見せている。

「どうしたんだよ、銀子」

川田が酔いの廻った混った眼で、珠江夫人をいたぶる銀子を見た。

「不感症なのかしら、この奥さん」

銀子は、口をとがらせて川田の方を見、珠江夫人が屈服しない事を告げた。

「まさか。そんな馬鹿な筈はねえ」

おめえ達の責め方がまずいんだ、と男達は笑うのだ。

「このウイスキーの瓶を空にしたら、俺達が交代してやるぜ。しばらくそのまま待たせておきな」

銀子と朱美は、くやしそうな表情で珠江夫人を見詰めていたが、

「今度は、ベテラン中のベテランが勝負を挑むってさ。どっちが勝つか、あたい達は見物へ廻るよ」

と、舌打ちしながら云うのだった。

珠江夫人は、硬質陶器のような白い頬を横に伏せ、さも哀しげに固く眼を閉じている。

今まで、友子や銀子達に受けた屈辱の洗礼に夫人の乳房は怒りを含んで波打ち、割られた太腿も口惜しさに、ブルブル痙攣を見せていた。

そして、今度は、野卑な男達に……。そう思うと、珠江夫人は、もうこれ以上、耐え得る自信はなく、大粒の涙を流し始めて

「お願いです。大塚さん——」

と、ウイスキーを飲む順子に声をかけるのだ。

「何なの、奥様」

順子は、グラスを片手に含み笑いしながらベッドの珠江夫人に近づく。

珠江夫人は、哀しげな色を湛えた視線を氣弱に順子に向けて、

「私が悪うございました。どのような償いも致しますわ。千原流生花を崩壊させよとおっしゃるなら、その通りに致します」

「ホホホ、随分と氣弱になったのね、奥様」
「ですから、お願いです。もうこれ以上、このようなむごい責めはお止めになって。ね、大塚さん」

珠江夫人は、喉元にこみ上って来たものを

ぐっとこらえて、憎い大塚順子にすすり上げながら哀願し続けるのだ。

「何をボソボソ云ってるんだよ」

川田が卓の傍から声をかける。

順子は笑いながら川田の方を振り返って、
「何時までもじらさずに、責めるなら早く責めてと御催促なさっているのよ」

順子が半分は珠江夫人に聞かせるつもりで、
そう川田に云うと、

「大塚さんっ、貴女は悪魔の化身だわっ」

と珠江夫人は昂ぶった声で一声叫び、あとは大きく割り裂かれた両手両肢を慄わせ、号泣するのだ。

「それじゃ、今度は俺達がお相手するぜ。いいな、奥さん」

川田と吉沢が舌なめずりでもするような顔つきでベッドに近よる。

「そんな情ねえ顔すんなよ。俺達はな、あなたの不感症を、治療してやろうと云ってるんだぜ」

嫌悪の戦慄に大の字に固定された全身を硬化させ、美しく冴えた象牙色の頬を熱っぽく充血させている珠江夫人のさも口惜しげな表情を見ると、川田は薄笑いを口元に浮かべてそう云った。

この高慢ちきな夫人をこれからズタズタに引き裂き、心の底から屈服させてやる、と川田も吉沢も闘魂をわき立たせているのだ。

唇を奪おうとして、川田は珠江夫人の頬に手をかけたが、狂気したように夫人は、激しく首を揺さぶって、川田の唇をさけた。

「くそ、甘くみるねえ」

吉沢が珠江夫人の頑強さに腹を立てて、激しく夫人の横面を平手打ちした。

「おっと、そんなのはいけねえよ。俺達は、もっとお上品に降参させなきゃいけねえ」

川田は、吉沢を制して、ニヤニヤしながら珠江夫人の艶々しい象牙色の首筋に熱い接吻を注ぎかけた。

吉沢も川田のする事に習って、柔らかい耳たぶ、線の美しい優美な肩先などに、酒臭い息を吐きかけ始める。

冷やかな内に優雅と気品とを兼ね備えた美しい珠江夫人の顔が、次第に上気し始めたのは、それからしばらく経ってからだ。

「旦那には、こんな強情を張らなかつたんだろうな、え、奥さん」

川田は、夫人のふっくらした顎に手をかけて、顔をのけぞらせながら、そんな事を耳に口を当て、尋ねるのだった。

珠江夫人は、固く眼を閉じ、唇を噛みしめていたが、苦しげに眉を寄せるあたりにべっとりと汗が滲んでくる。

「ね、後は私に料理させてね」

大塚順子は、二人のいたぶりに挾撃されている形の珠江夫人を、眼をギラギラさせて見ていたが、ふと、嗜虐の衝動にかられて、ベツドへ近づいた。

「レスビアの大家、大塚女史にかかっちゃ不感症も一気に吹っ飛んじまうぜ」

鬼源がゲラゲラ笑った。

順子は、服を脱いで、玄人っぽい黒いスリッパ姿になると、珠江夫人をのぞき込む。

「フフフ、いいわね、奥様、今度は私の受持ちよ」

順子は、子供が好きな玩具を愛撫するような仕草で、夫人のイヤイヤをする顔を両手で挟みこみ、頬ずりし、次にそっと唇を押し当てるのだ。

その瞬間、珠江夫人は、火傷でもしたような激しい声を張り上げた。

「な、なにをなさるのっ、大塚さんっ」

ひどく狼狽し、顔面一杯に羞恥の紅を散らせて、大の字に縛られた美肌を大きくのたうたせる珠江夫人であった。

「いいのよ。そんなに羞しがらなくなつて」

順子は、悶え泣く珠江夫人を楽しそうに眺め、夫人の顔を押えていた手を、のけぞった喉から胸へと這わせ始める。

処女であれ、人妻であれ、相手が美人であるなれば、こうしたレスボスの悪戯に引きこみたいという衝動に順子はかられるらしい。

まるで、桃源境に浸るかのようにつとりのとした表情に変わってゆく順子を川田と吉沢は、自分達のすべき仕事も忘れて呆然と見つめるのだ。

ふと、顔を上げた順子は、こっちを見つめる川田達を睨んで云った。

「ぼんやりしてちゃ、駄目じゃない。いいわね、この奥様の体を私達は今、治療しようとしているのよ」

川田と吉沢は、順子に叱られ、首をすくめて顔を見合わせるのだった。

「フフフ、奥様、敵方の私に、こんな事されて口惜しい？ ね、ねえったら、何とかおっしゃってよ」

順子は珠江夫人の抵抗が次第に弱まって自分の運命を覚ったように、責め手に翻弄されるまま、シクシクとすすり泣くだけとなるとようやく唇を離した。

「まあ、奥様ったら、フッフ、不感症が聞いてあきれるわ」

順子は、わざとらしく頓狂な声を張り上げる。

珠江夫人は、美しい端正な顔に一層の紅を散らして、繊細なすすり泣きの声を洩らすのだ。

口惜しくも意志とは逆に、屈伏の兆しを責め手に感知させてしまったのである。

順子もまた嗜虐美の酒に酔い痴れたように陶然となった表情で、椅子に坐っている鬼源の方を見る。

「鬼源さん。心配なさなくてもいいわ」

「それで安心しましたよ。商品として通用しねえと俺の責任になりますからね」

鬼源は、黄色い歯をむき出して笑った。

先程から、順子の責め方を貪るように見入っていた友子と直江は溜息をつくように、

「そやけど、うまいもんやなあ。こんなヒトにかかったら、いくら強情な奥さんでも意地を張り通せる筈はないわ」

「こっちも、なんやおかしな気分になってきたわ」

と云って、肩をすくめるのだった。

珠江夫人は、ますます熱い息を吐きながら

時折、上の空のような無気力な、ねっとりした瞳を開いたり閉じたりする。麗わしい太腿が、もどかしげに揺れるのは責めを拒否するためだけの悶えではなさそうに察せられた。

同時に、ふきこぼれるばかりの甘美な脂汗。

珠江夫人は、今や、理性の一切も奪い取られて、得体の知れない苦悩の波に揉み抜かれ妖しいばかりの涕泣を洩らし始めた。

「鬼源さん、そろそろ仕度にかかって頂戴」

順子は、鬼源に声をかけたが、すでに鬼源は奥のガストロブで温めたミルクをゆっくりと、責具に注ぎこんでいる。

「フッフ、手廻しがいいわね」

順子は鬼源からそれを受取ると、懊悩の極にある珠江夫人の鼻先へ近づけた。

ふと、眼を開いた夫人は、はっとし、思わず眼をそらせる。

「そう驚く事はねえよ。そいつは静子夫人で実験済みだ」

鬼源がせせら笑った。

「これで、いくら頑張っても駄目だってこと思い知らせてあげるわ。いいわね」

順子は、面白そうに珠江夫人の頬を突いて

云うのである。

「やがて奥様は、静子夫人達と一緒にニグロ

と見世物に出なきゃならないのよ。少し、きついううだけど、これも修業のためね」

珠江夫人のひきつったような顔を見て、順子は笑いこけた。

無情な順子の手にある責具に、あっと、珠江夫人は声をあげたが、

「フッフ、暴れようたって駄目。さ、いい子だから」

順子の巧妙な手さばきにつれ、

「貴方、ああ、貴方、許してっ」

珠江夫人は、熱病におかされたように夫を連呼し、このような責めに敗け、なぶりものにされる自分を詫びるのだった。

思ったよりもスムーズに珠江夫人が屈伏しかけたことに、順子は川田や吉沢達と勝鬨でもあげるようにはしゃぎ出す。

「もうこれで奥様は私達のものよ。これから腕によりをかけ、見世物に出られるような体に仕上げてあげるわ」

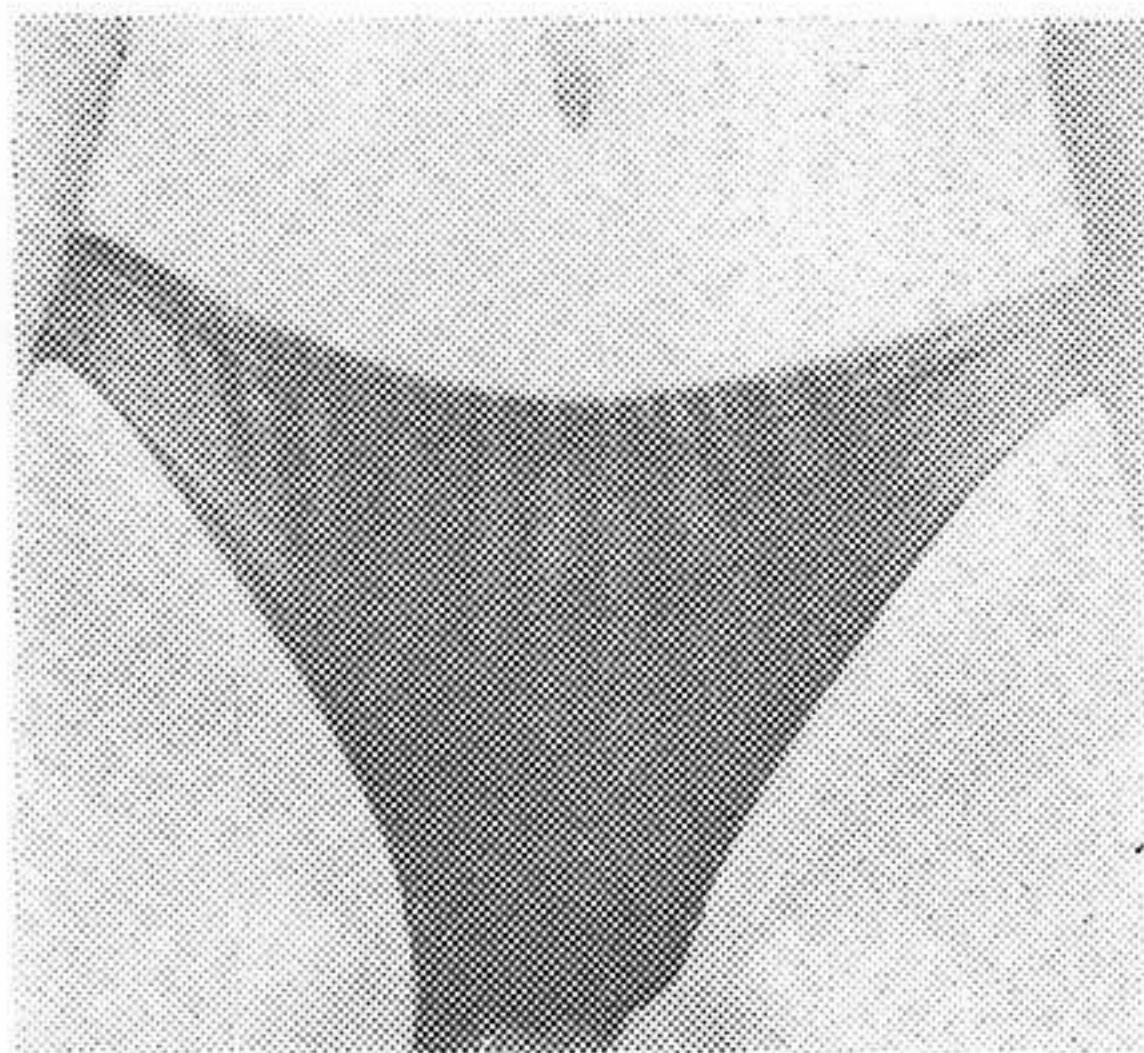
順子は、もうこうなればしめたものだばかり、倒錯の荒々しい欲望も加わって、いよいよ攻撃を開始したのである。

(未完)

心理的羞恥責めを好む

告白——屋外プレイ——

東京 Y・Y



だいたいSMプレイと言うものは、室内で行なうというのが普通一般の考えでしょう。それは裸になったり縛ったり、あるいはもっと進んで羞恥責めプレイなんて事になれば、なおのこと室内で行なうのが当然であると思います。又、室内でなければ出来ない場合もあるものでしょう。

ですが、考えてみますと、屋外でもいろいろ変わったプレイが出来るようなのです。そこで誌上をお借りしまして屋外プレイの事をまた屋外プレイを好んで行なっている小生の近況などお話しして、諸先輩方のご意見などおきかせ願えれば幸いと考え、ペンを取ってみ

ました。

一言にSMプレイと申ししましても、その内容はいろいろあると思いますが、心理的羞恥責めをもってSMプレイの真随と考えています小生にとっては、屋外が適しているのではないかと思います。

もちろん室内でも羞恥責めは出来ますし、羞恥責めそのものを考えてみたところで、人それぞれの考え方があろうし、うまく書けません。結局、羞恥責めの中での好みの問題と言うことになるのでしょうか。

そこで、私の羞恥責めに対する考えと言うのか好みと言うのかを書いてみますと、プレイは、大衆の面前で、しかも責められている人だけしかわからないと言うプレイ。当人にあたえられる心理的恥辱を、ある時は離れた場所から、またある時は映画館の中で、電車の中で、タクシーで、それぞれ眺める楽しみを味わうのが一番私の好むプレイです。

もっとも、これとて初めからすぐ出来るものではありませんので、飼育は当然必要ですが、私の場合は、妻に対してですがゆっくりと、しかも絶対に無理をせず、お互いに楽しく「をつねにモットーにして、一步一步やって来ました。

縛り、ムチ打ち、ローソクプレイ、剃毛、浣腸等、まず一通りのことはやって、共に楽しむことが、出来る様になりました。その結果、妻は、浣腸、ムチ打ち等はあまり好きではないと言う事がわかりました。

プレイは相手が有ってこそ出来るもの。まして自分の妻が相手では、ただ苦痛だけと言うのでは、お互いに楽しくのモットーに反します。そこで室内プレイの時でも妻のいやがるプレイは出来るだけ控えるようにしているわけです。

それがわかったのは、プレイを始めてから二年位い過ぎた頃でしょうか。その頃から私は少しずつ、私好みの羞恥責めを始めたのです。

自分にされる浣腸液を自分で買いに行かせる。また近所のスーパーに行く時は、ミニスカートの下になにもつけさせない。夜は夜で自宅の庭の木に縛っておいて、私は室内でテレビを見ている。また人通りのない小路で立ったままの排泄。あるいは他人の家のかきねの傍でのセックス要求なのです。

書いてしましますと誠に簡単ですが、何も知らぬごく普通の会社のBGだった妻を、これまでに成長させるのはほんとうに大変でし

た。男と言うものは勝手なもの、自分でもつくづく感じたものですが。

初めて私のネクタイで後手に縛ったあの日から三年目。現在私が三十二才妻二十四才ですが、最近、ようやく私の考えている羞恥責めのプレイが出来る様になって来ました。そこでここにその二、三を紹介してみたいと思います。

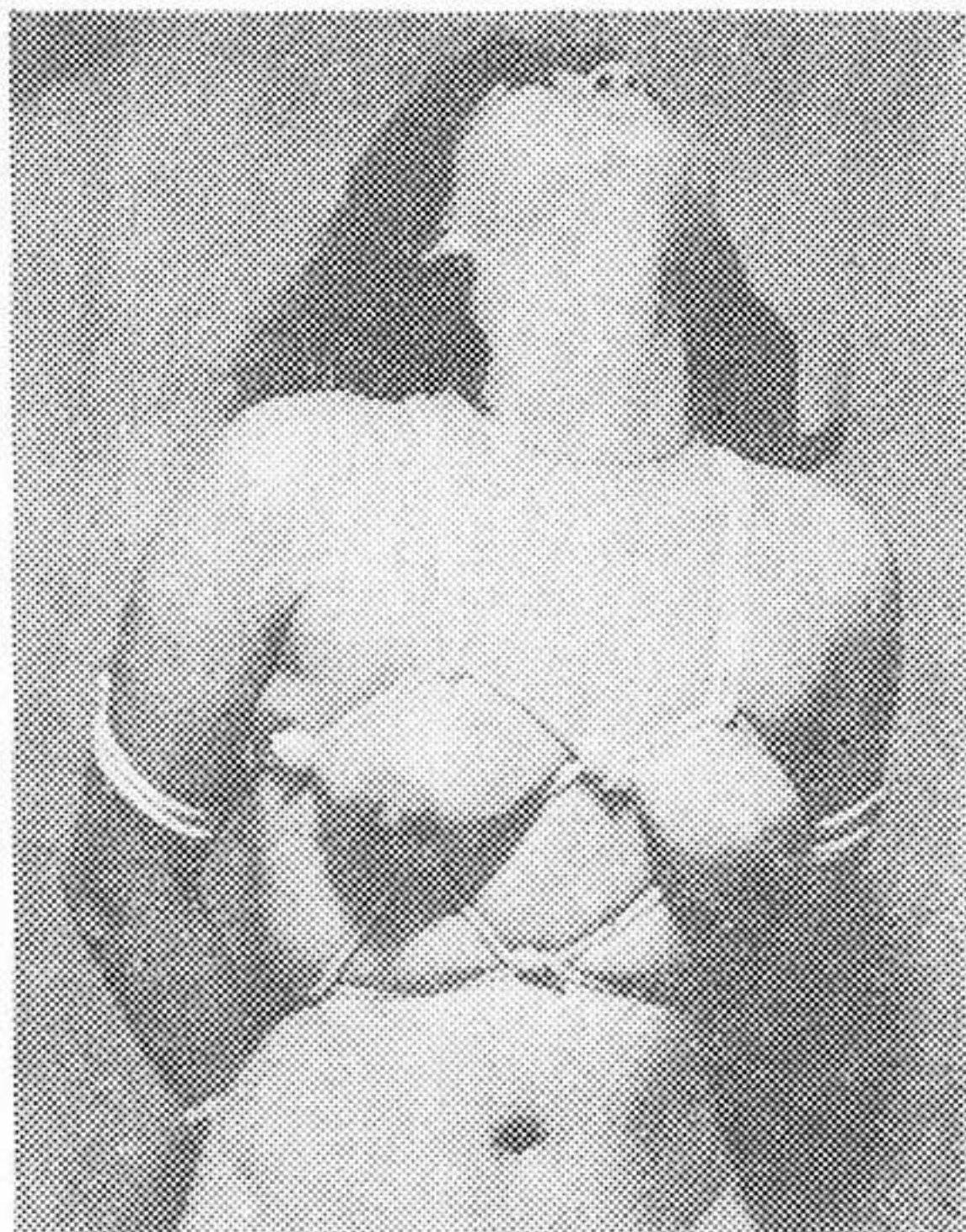
そもそも私は、女性の全裸にはあまり興味がありません。下着を少しつけていた方が、魅力と言うか、セックスアピールをより強く感じます。

そこで、皮あるいはエナメル
の超ミニスカート、黒のエナメルハイヒール、皮のロングブーツ、黒のナイロンストッキング
アミタイツ、銀色ラメ入りストッキング、バタフライ等を用意
させています。もちろんパンティは、全部ビキニ（スキヤンテ）です。それらをその場、そのプレイの内容に応じて着させることにしているわけです。

また最近、光る素材を使用した製品（銀色か金色ですが）

が市場に出廻っていますので、時により使用させるようにしています。

今は季節的に寒くて仲々プレイも出来ませんが、先日、この冬では比較的暖かな日がありましたので、下着としては金色の小さなバタフライをつけさせただけで、両手は後手に手錠をかけ、そのうえからエナメルコートを着せてブーツをはかせ、タクシーに乗り、あまり人通りのない道路を十分位散歩してまたタクシーで帰って来ました。車の中で胸を少しひろげてやったら、真赤になってうつぶいていました。





また先頃は、自宅の近所ですと知人もおりまして都合が悪い事がおきますから、新宿まで行ってプレイをして来ました。妻に、自分で作らせた超ミニスカートをはかせて、駅前を歩かせたのです。

新宿あたりですと、そうとうのミニがおりますが、妻のは、それこそパンティが見える位いで、もちろんガーターなどしていると出でしまいますので、パンティストッキングでした……。

もう一つは化粧です。普段は近所の付合いもある事ですし、そうはでな化粧は出来ませんし、また妻はおとなしい方ですが、私は室

内でも外でもプレイの時は、わざとどぎつい化粧をさせます。それが妻にしてみると、また、すぐくはずかしいらしいのです。

新宿の駅その他、大きな駅には、かならず有料の化粧室が有りますので、屋外プレイの時には、家を出る時は普通の顔で、向うへ、ついてから化粧をさせることにしています。

つけまつ毛、こいアイシャドー、アイライン、真赤なくち紅、つけほくろ等で、化粧室から出て来た妻は他人のようです。もっとも最近では女性の化粧が総体に派手ですから、あまり目立ちませんが、いつもの妻とくらべると格段の差で、羞かしそうにするのがおもしろいのです。これも私達の羞恥責めプレイの一つなのです。

さて、おしりのまわりにホンの少し布がついているだけと言うような超ミニで、かがとの高いハイヒールだと、どうしてもおしりの振れ具合がまる見えになってしまいます。私は少し離れてついていったのですが、さすがの新宿でも、路行く人がふりかえって見ているのです。

十分位い歩かせたのち喫茶店に入りましたが、ボックスに坐るとまたスカ

ートが引っぱられて、何もはいていない様になります。オーダーに来たウェイトレスも、一瞬びっくりした様な顔で見っていました。

行きと帰りの道ではコートを着せてしまいますし、化粧も落としてしまいますのでわかりませんが、後で妻に聞いてみますと、人々の眼が皆、自分に集中しているようで、とても興奮したと言っていました。だいがプレイ慣れしてきている妻が、そんな羞かしさを、まんざらでもなく受け入れられるようになった証拠だと思っています。

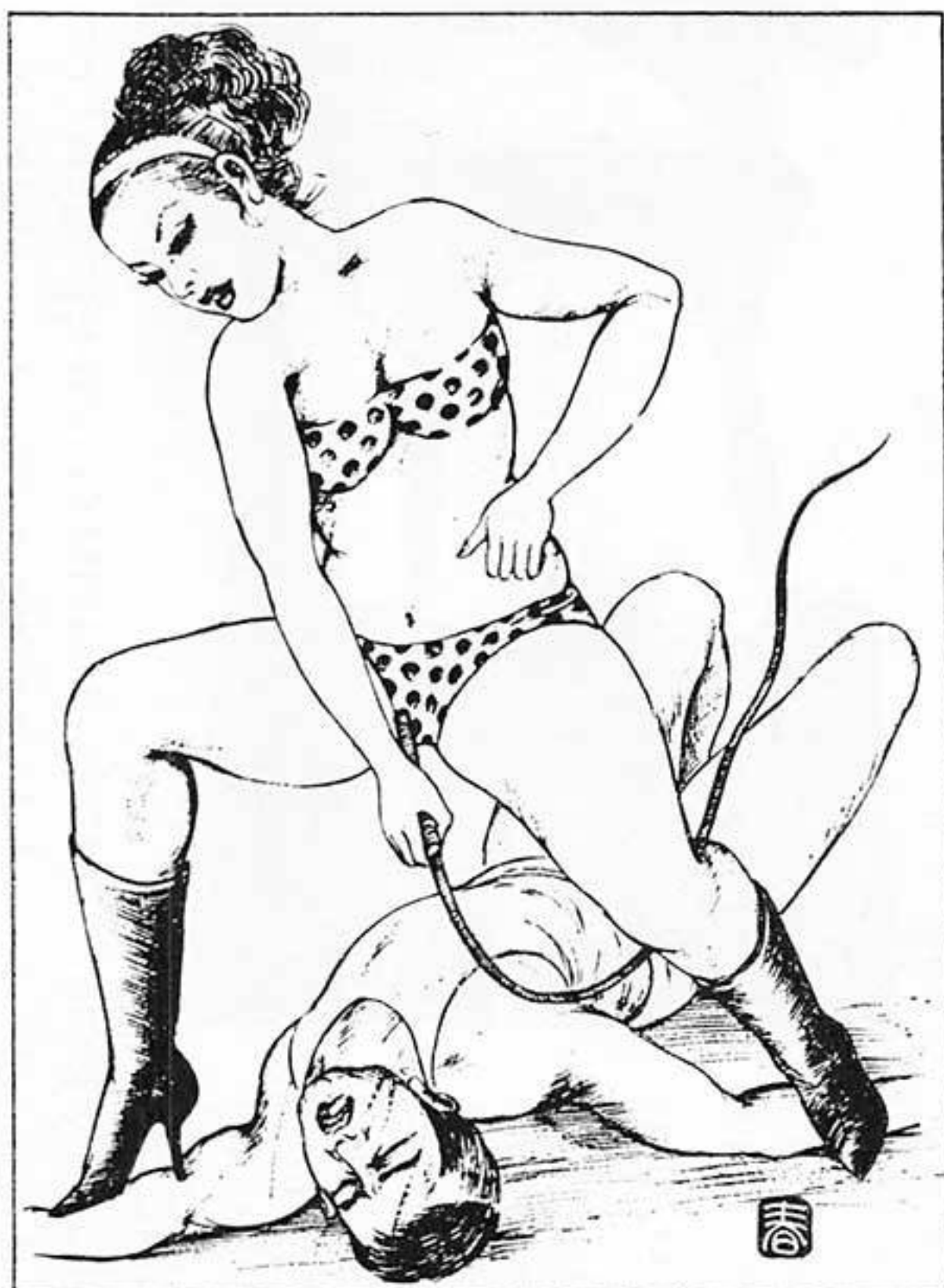
今度は、コンパのような人が集まる処に行つて、バイブレーターを使用してのプレイなど考えていますし、スリリングな屋外プレイをどしどしやりたいと話合っています。

発表させていただける機会が有りましたら結果など報告したいと思っています。

三月号に「素肌にコート」と言う手記を出しておられました東京K生氏、もしこの文がお目にとまりましたら、ご感想なり、プレイのお話なりを、お寄せ下さいませんか。なお同封のフォトは、妻を写した、最近のもので

× × ×

× × ×



絵絹の浮世絵

こんな美しい女性の姿はない。……
由紀さんの隠れた美しさを、描き出した私は感激した。

いまとっている男女のポーズと、ほぼ同じようなスタイルの浮世絵を私は持っている。

「岩清水」という題のついた絵で、それは四十八手の一種である。

20センチぐらいの絵絹に極彩色で描かれた

連載 アブ紳士行状記

M 派交友録

(5)

(花村崇の巻Ⅱ三)

鬼 山 絢 策

もので、女性は町家の内儀、男性はその亭主とおぼしき町人であるが、浮世絵独特の誇張されたクローズアップで鮮明に現わしているが、ただひとつ、大きな欠点があった。

それは上なる女が上を向き、目をつぶって快喜の表情をしていることであつた。しかも下の男性は目をあけて至極冷静な表情でいるのである。

戦前のことで、私も若かったから、はじめてこうしたポーズの絵を見た時は矢も楯もたまらず欲しくなり、当時五円という、かなり

高い金を、金は惜しくなかったが、数ある絵の中から特にこれだけ欲しいと言うには、かなり勇気を要したものである。自分の好みを相手にさとらせまいとして、もう一枚、普通の絵も買おうかと思ったが、少年の身にとつて五円は大金である。他の絵は五十銭でも欲しくないのだ。で、それ一枚だけ買い、宝物のようにしていたが、だんだん見ているうちに、この表情が気にいらなくなってきた。いまこそ私の理想とする「絵」が得られたのだ。

ふしぎなことに、カメラを構えている時は情慾は全然、おこらないのである。

ただ、少しでもよい作品を、とそればかりに意を注いだ。恐らく絵描きや、映画の監督なども同じ心裡ではないかと思う。

あまりの美しさに、私はしばし、次のポーズに移る注文をつけずに見とれていた。

由紀さんの表情は、いろいろに変わった。はじめて唇の触れた瞬間は、奴隷の顔を上から見つめ、奴隷の表情を読みとるような顔だった。

奴隷が奉仕を懸命に続けている時は、驕慢な微笑を浮かべて、その動きをたのしんでいた。

奴隷の必死の努力が認められた時、由紀さんは、はじめて奴隷の顔から視線をはなして空間をみつめ、目を細めた。

奴隷の奉仕によって、由紀さんの体内にあるサディズムが刺戟されたようである。

突然、きびしい表情になり、肉のマフラーに力が加わった。

そのように、僅か五、六分の間に、由紀さんの顔は虹のように変化した。そのどれもが美しく、巧まざる演技はすばしかった。

私は由紀さんの表情を主にして、そのヴァ

ラエティーをレンズに捉えて行った。

「片膝を立てて見て下さい。イヤ左足でなく右足の方！」

私は少し宛、動きを求めた。

平べったくおおいかがぶさっていた太腿が、膝を立てると丸く形のよい脚線にもどった。

私は、いろいろの写角から捉えた。

だが狭い部屋の中では、その写角もかなり制限を受ける。現在の位置は左斜前方と左の真横、左斜後方の三つの角度しか入らない。正面は不可能なのである。

潮時をみて、私はモデルの組合せを解体した。

ベッドの頭の方も足の方も狭くて私の構える余地がない。

そこで花村をベッドと十文字に、横に寝かせてみた。

花村は終始、無言だった。

あれほど饒舌だった男が、まるで啞のようにウンともスンとも言わず、非常に緩慢な動作で、注文通りのポジションに移った。

ダブルベッドだから、かなり横巾は広がったのだが、それでも横に寝ると、足がつかえた。膝を折り曲げて、かろうじて納まった。

「きゅうくつそうね」

タオルで足を拭きながら由紀さんは苦心さんたんしている男二人をおかしそうに眺めていた。花村は由紀さんがタオルを使うのを、残念そうな目で上眼づかいにチラと見たが、それでも自分の意志を明らかにするのは遠慮している風だった。

体臭がない

実際に正面に向かってみると、またそこにいろいろ意に満たぬものがでてきた。

第一にモデルの位置が高すぎるのである。椅子の上ののって腑かんの位置を決めると、由紀さんの顔がうつらなくなる。

私は、まだこの時、広角レンズを持っていなかったから、どんなに退っても全体を捉えきれないのが残念だった。

由紀さんの足を花村の顔へピッタリあてがってもらった。

立っている時は小さく見えた足も、こうして顔の上に乗せられると異常に大きく見えるものである。

踏みつけられた足の下で花村は口を大きくあいて足のうらを舐めているのだが、その舌の動きは見えない。

由紀さんは、時々足に力を入れて、踏みつける。

だが花村は別に苦しくもないようだ。いや苦しいのを我慢して、顔に見せないのかもしれない。

そして、男性圧服のシーンに入った。

前は由紀さんの表情を中心に撮ったが、今度は上下二人が入らないので奴隷を中心に撮った。

「もっと圧力を加えて下さい。大丈夫ですよもっと強く！」

「いいの？ これ以上やると失神させちゃうわよ」

「構いません。奴隷の本望です」

花村に代って奴隷の意志を私が代弁した。

「御亭主を失神させる要領で、やってみて下さい」

「フフ……」

不敵な笑いを浮かべて花村を見下ろした由紀さんは花村がどのくらいタフかをテストしはじめた。

由紀さんは五十六キロあると言った。このグラマーな肉体でモロにのしかかられては、かなり苦しい筈である。

二人は最早カメラを意識していなかった。

それだけに本当の責めの写真がとれた。

それでも花村は、よく堪えた。目をつぶったまま、額に汗をにじませて、うめき声も発せず、ひたすら奴隷の勤めを忠実に励んでいるのが微妙な動きで分かった。

だが、かなり参っているようだ。

失神寸前まで行ったと見た。私もくたびれたし、フィルムも尽きた。

三時間ほど夢中で撮ってその日は、ひとまず終わった。

由紀さんは上気して、酔ったように顔をバラ色にポツと染めていた。

花村は汗をビッシヨリかいて、さも疲れたように眠っていた。

「わたし帰るわ」

「送りましたようか」

「いいわよ」

由紀さんは先に帰って行った。

花村は、だるそうに起き上った。

「どう？ よかった？」

「ウン、申し分ないひとだけど、ただ一つ欠点があったな」

「なに？」

「あのひと、体臭がないんだ。ぼくは体臭の強いひとが好きなんだけど……」

「お風呂へ入ったから体臭が消えちゃったんだよ」

「こんどは事前に風呂へ入るのはやめてもらいたいですね」

「OK、女王様に言上しておきましょう」

× × ×

私は家に帰ると早速、現像した。

ネガを見ただけで、いい調子に仕上がっていることは、ひと目で分かった。

現像はいいが、引伸ばしにかかる時は、厄介だった。家人に気づかれぬようにするために、他のフィルムと一緒に、深夜作業をしなければならぬからである。

引伸ばしという仕事は、こんなに楽しいものとは、いままで知らなかった。

四つ切り一枚、仕上げるのにも、試しやきを慎重にやったりしたから30分もかかった。

気がついた時は、夜はしらじらと明けていた。

だが仕上げてみると、あとであの時はこういうポーズもあったのだけど、まだまだ撮りたいポーズが次々と浮かんできた。

靴 責 め

二回目は巣鴨のピースホテルという旅館を選んだ。

今度は花村にも、いろいろ注文をつけた。花村の家には「責めの部屋」というのが設けられていて、鞭だのマスクだの、いろいろな責め道具が揃っているという話だから、それが、もし本当なら、そのうちのいくつかを持って来いと言ってやった。

花村は犬の首輪と鞭を二本、持ってきた。

由紀さんは今度は真紅のガウンを持ってきた。それに髪の毛の形も変えて、アップにして前とはヴァリエティーをつけることを忘れなかった。

私は旅館の傍の果物屋でバナナを一房買って行った。

二回目となると、両者とも堅さがとれて、ポーズや表情も一段と豊かに、カメラを意識せずにナチュラルなムードで行けた。

花村は自分が全裸になることを希望した。

由紀さんから「全裸になれ！」と命令してくれるように私を通して頼んできた。

異性に自分の恥部を見られることを好むのはM派の通型である。

電車の中などで、わざと前ボタンをはずしておいて、女性に見せたりするのは、露出症

ではあるが、本質的にいってMである。

「裸におなり！」

由紀さんが言葉少なに命令すると、花村はちゅうちよなく全裸になった。決して筋骨隆々たる身体ではない。ズングリしたドングリみたいな身体である。もっとも、自慢の肉体美を見せるのではMではない。だが彼が由紀さんに見てもらいたいのは、この見栄のしない身体ではなく、ほんの一部だけなのだ。

自分の一番恥かしい姿を女性の前に、さすがのM派の真意なのである。

花村は靴フェチズムである。由紀さんも最初にそれを聞かされているので、靴には気を配っていて、今日はまた、前と違ったヒールの高い先の尖った靴をはいてきた。で、どうしても靴踏みから入ってしまう。

花村を床に寝かせて、由紀さんに上に乗って踏んでもらった。ガウンを着ていたのではだらしなな格好でサマにならないので由紀さんもヌードになった。

花村の喉首を尖ったヒールがギューツと踏みつける。

「ウーッ！」

小さく声を洩らした花村は、眉をしかめて痛みに耐えながら、その肉体は、みるみる変

化していった。

由紀さんは汚ないものでも見るように、チラと一瞥つしたが、そんなものより苦痛に歪む花村の顔の方に興味があるようだった。

私は靴で踏む位置を、いろいろ変えた。

仰向けにした花村の顔の真上から踏みつけたところのクローズアップをとった。

由紀さんが足に力を入れて踏むと、額に爪先が、あごにヒールが食いこんだ。

そのヒールを少し上にずらせて、ヒールを口の中におしこんだ。

花村は目をつぶって、痛さをこらえる。

「目を開いて、上の方を見て。もっと痛そうに！」

花村は、いまままで苦痛をこらえて、顔に出さずにきた。むしろ苦痛や屈辱を受けて、それを楽しんでいような表情が多かった。だから、苦しみをそのまま現わす表情を要求した。

首輪とバナナ

靴が済むと、犬の首輪をつけさせた。

首輪には太い綱がついていた。由紀さんが綱を引っ張ると、裸の花村は、ぶざまにひっ

くり返った。

パンティを顔にかぶせて足蹴にするところを、何カットも撮った。

犬のお仕置きとして、首根っ子をおさえて鼻面を床へこすりつけるところや、立った由紀さんの足もとに四つん這いになって、足の指を舐めるところを撮った。アイデアの浮かぶままに、いくつか撮ったが、いまでは本誌で分譲しているM写真の中に、そういうのがいくらかもあるだろう。だが、この撮影は本誌で撮る数年前に撮ったのである。

バナナというやつは存外、自由にならないものである。

由紀さんも扱いに困ったらしく、もてあまし気味であった。途中で折れたりして、最初の一本はグチャグチャにしてしまった。

花村はニヤニヤして、そのバナナを食べている。

二本目で、どうやら成功した。

由紀さんは綱を引張って、自分の方へ引き寄せた。そこは人間犬だから、女主人の意向をのみこむのは早い。四つん這いになって、由紀さんの前に、かしまった。

一回きりでは惜しいので何回か往復した。犬の御褒美はバナナよりも、もっとおいし

いものだった。

由紀さんは、ここへくる時、車の中で話しかけた。

「彼はね、あなたのことを、すばらしいひとだと感激していましたよ。ただね、ひとつだけ欠点があると言っていましたよ」

「なに？ 妾のオッパイ？」

彼女は乳房の形を気にしていたが、決しておかしくはない。若い頃はピンと上を向いていたのだろうが、現在はそのはりがなくなっている。とはいっても、豊かに成熟した乳房は、おとめから女になりきった貫禄をしめすもので彼女にピッタリしているのだ。一度流産したことがあると言っていたが、子供を産んだ乳房では全然ない。そんなに、ひきめを感じることはないのである。

「いや、そうじゃないんです。あなたには匂いがないと言っんです」

「あら、ウフフ。妾ひと一倍、匂いは強い方なのよ」

「こないだ、お風呂へ入ったんでしょう。あれが、よくないと言っんですよ」

「だって、はじめてでしょ。あまり匂いが強くちゃ悪いと思っったのよ。それがエチケツトじゃない？」

「エチケツトであり常識と思うでしょう。ところが、そうじゃないんです。それはM派の心理を理解していない。M派にとっては事前に匂いを消すということは、むしろ非常識なんですよ」

「そんなものなのかな。だって、あたし、二三日、お風呂に入らなかったから、とてもくさいわよ。着物の上からだってとても匂うくらいなんだから」

「それがいいですよ。それに陶醉するんです」

「よし！ じゃあ今度は、うんと匂いをつけて行ってやるわ。こないだは、何て言っただけで最初でしょ。だから、すべてに遠慮してやったのよ」

「あれで遠慮していたんですか。そんな風には見えなかったが、例えば、どんなところが遠慮していたんですか？」

「蹴とばすんだって、ソーツと加減していたしさ。顔を踏むんだって、そんなに足に力を入れなかったわ。失神の場面だって加減してたから、こっちが、くたびれちゃった」

「どこを加減してたんです？」

「ほんとにお尻をおとしたら、潰れちゃうと思うから、膝で加減してたのよ。そしたら、

しまいに膝がくたびれちゃった」

「そんな遠慮は要らないんですよ。あの時、そう言ったでしょう」

「じゃ、今度は遠慮なしに、ほんとに失神させてやるわ」

失神の権利

男を征服するポーズとして、一番わかりやすいのが、この失神の場面である。

それが由紀さんの理想でもあるのだ。男が女を征服する、その瞬間のポーズは女を失神させるポーズである。女が失神したとき、男は真に女を犯し、征服感の充実を身心ともに味わえるだろう。とすれば、これを裏返して女が男を犯し、男を征服し、失神させるにはこのポーズしかない。その点では私のイメージも由紀さんとピッタリ同じなのである。

そしていま、それが実現したのである。

由紀さんは、ほんとうにピッタリと腰を落としている。

「どうだ！」

という風に責めている。だが、花村は、その割には平気な顔をして、むしろ陶然とした気持よさそうな顔をしている。

このベッドはスプリングがよくきいているので、上からいくら強く圧しつけても、ヘコンでしまつて、存外、重量を感じさせないのである。

奴隷が平気な顔をしていると、女王は却ってファイトをもちあがらせるものである。

ふてぶてしい奴隷を、ほんとうに参らせる手は知っているらしいのだが、いまそれを行うより、由紀さんとしては少し楽しみたいのであろう。脚で締めあげたり弛めたりして、あそんでいた。

およそ20分ほど弄んでいたであろうか。

私はその間、いろいろな角度から撮ったがあまりポーズの変化は要求しなかった。手の位置を、ちょっと変える程度だった。

やがて奴隷を参らせる時期が到来した。

下を見下ろす由紀さんの目に、怒りに似たサジスチックな光がキラリと浮いた。

それは、ちょっと位置を前にずらすだけの簡単な動作だった。

それだけで奴隷は、いままで唯一の逃げみちであった鼻腔を封鎖されて、俄かに苦境に入った。

いままでウットリとしてサービスこれつとめていた花村の顔が、にわかに、苦悶の表情

にかわった。

わけないことなのだ。

いままで有頂天になっていた奴隷があわてふためくさまが女王にとっては、わかりきったこととは言え、たのしいのであろう。

捻じ向けようとする首をピッタリとおさえこんで締めつける。

だが奴隷のものがきが弱くなると、由紀さんは、すぐ許してしまった。

解放された奴隷は、失神直前で救われたのである。

やはり、そこには由紀さんに女らしい、やさしさが出たのであろう。

例によって由紀さんは、先に一人で帰っていった。

花村は

「ほんとうに由紀さんはすばらしい。この前より一層よくなった。ツボをよく心得た、ひとですね。あの人は、いままでにも何人も奴隷を征服した経験があるんですね」

「イヤそんなことはない。せいぜい旦那さん一人ぐらいのものじゃないかな」

「イヤそうじゃない。何人もやっていますよ」

「今日は危うく気絶するところだったんじゃない？」

「ええ、もう少しで参っちまうとこでした。ほんとに氣絶するまで、やってくれてもいいんですよ」

「じゃ今度は、そこまで行くかな。そう言っときましよう。あれでも遠慮してるらしいんだな」

「遠慮なんか無用ですよ。で今度は、いつ、やりますか？」

「日曜日がいいかな。今日は緊縛をやらなかったから、今度は縛りをやりましょう」

来る前までは、私は緊縛を予定していたのだが、それができなかった。

「あのね、最近とてもいい友達がきたんですよ」

「やっぱりMの人？」

「ええ、今度はその男も仲間に加えてくれませんか」

「どんな人なの？」

「まだ若いんですが、それでも会社の専務なんです」

「ホウ……」

「兄さんが器械の会社をやってましてね。兄さんが社長で、その弟だから専務というわけです。一度会って見ませんか」

当時、私のところへは会いたいという手紙

は、かなり来ていた。

だが同じMと言っても、人それぞれ異質なので、必ずしも同好の士とは言えないものがある、例えば浣腸に興味をもったり肛門を責められることにのみ執着しているような人はどうも私の好みに合わない。

また苦痛に強い興奮を覚えるタイプの人は何か危険を感じて警戒してしまうのである。

苦痛と言っても出血をとまなう程度の強烈なものである。少年の頃に「小口末吉の妻」という、これは女性マゾヒストの元祖みたいなものであるが、苦痛をとまなうマゾヒズムの快楽を追求して遂に死に至り、夫が殺人罪に問われたなどという文献を読んでから、マゾヒズムもここまで行けば、極致なのかもしれないが、これでは破滅してしまうし、法にも触れることになるから、苦痛をとまなうこと傷などつくって跡に残るようなことは避けるべきであるという観念が、出血をとまなう苦痛を避けるようになったのかもしれない。

また地方の遠い所の人では、会うといっても大変だし、それやこれやで、なかなか会うところまで行った人は少なかった。

だが花村がすすめる男なら、会って見てもいいと思った。

「それにね、彼も写真に興味をもっているんですよ。自分の部屋に、ちゃんと暗室を作つて一切、自分でやってるんです。その点は信用がおけますよ」

写真に興味があると聞いて、ますます私はその男に会う気になった。

皮ジャンパーの重役

それから二、三日して花村から電話がかかり「今夜、先日の私の友人を紹介したいから会わないか」と言ってきた。

飯田橋の喫茶店で六時におち会う約束をしたので六時前に行ってみると花村は来ていたが、その友人なる男はまだ来ていなかった。

花村は、その男を口をきわめてほめそやし若いのに、なかなかやり手だと言う。

二十分待っても三十分待っても、男は現われない。

私は時間を守らない人は信用しないことにしている。

社会的に重要な地位にある人ほど約束の間は、きちんと守る。私の第一印象は、会わない前から悪かった。

四十分も遅れて私の前に現われた男は、二

間もなく岩本が帰ってくると、

「やあどうもお待たせしました」

と愛想よく言って、階下へ下りて行くと、

お盆に茶器をのせて自分で運んできて、お茶を出した。

「写真に興味をおもちだそうですね」

「ええ、近く撮影会をやるうと思ってるんですよ」

「いままでにも撮ったことがありますか」

「ええ、いろいろ撮りました」

「見せて頂けますか」

「ええ、是非、見て頂きたいんです」

廊下の隅のカーテンを開けると、二段の棚になっていて、上に引伸し機が据えられてあり、引伸し用の薬だの、パットだのが、案外整頓よく置かれてあった。棚の上からアルバムをひき出してきた。

見ると、何のヘンテツもない女性一人のヌード写真が貼りつけてある。中には洋服を着た普通のスナップも貼ってあって、これではMの匂いは、どこにも感じられない。

「この子がねえ、とても可愛い子で、すなおな人ですよ。看護婦をしているんですがねえ割合いい子でしょう」

ちっともよくはない、何の特徴もない女だ

った。

ずいぶん、人をばかにした話だと、私は花村の方を見たが、花村はケロッとしている。

「あなたが撮りになったのも見せてもらえますか」

「いや、私のは人に見せられないんです。モデルの人達に、他人に見せない約束をしてあるんでね」

「イヤ、ぼくは構いませんよ、友達なんだから」

と花村は、この時はじめて口を開いた。

「こないだ引伸しするのに、お宅では面倒だとか言っていましたね。何ならここを使って引伸しをやったらどうですか」

と花村が言い出した。既に花村と岩本は相当、親しい仲のように見られる。

私は、やはり花村は警戒しなければいけない人物だと思った。こう軽卒で、開放的では秘密の保てない男ではないかと思ったからだ。

私の不満そうな顔色を見た岩本は

「イヤ実はねえ、もっと凄いのがあるんですよ。とっときのがね」

と言って、また棚の下をゴソゴソやっていたが、とり出してきた二、三枚の写真を見る

とこれはまた何のことはない。女性のあのクローズアップの写真だった。こんなものヌードスタジオへ行けばいくらでも撮れる。

「この女がさっきの看護婦なんですよ。どうです、スゴイでしょう」

と一人でスゴがっているのは、まるで春画売りみたいの下品である。

「実はね——」

岩本という男の口癖らしく「実は」という言葉が、さかんに使われる。

「今度この女と花村君を組合わせてM写真を撮ろうと思ってるんです。いいだろう」

と花村を見る、花村はニヤニヤして

「何しろ若くてピチピチしているからねえ、こういう女の子に徹底的に虐められて見たいなあ。よかったら撮影の時に来ませんか」

「この女性の他にモデルはいないんですか」

私は、この女性を「女王」として撮影するには、ちょっと、ものたりなかった。

「いや、まだもっと綺麗なのが、いるんですよ。ただプレイだけするんならいいけど、写真撮られるのは、イヤだといっているんです」と岩本は、いやしい笑いを浮かべた。

カット・春川ナミオ

(続く)

<体験告白>

私の少年期

東 敏 男



女ぐせの悪かった父に苦勞し続けた母は病死し、やがて継母がきたので、私の少年時代は一変しました。当時小学校の五年だった私は、とても素直な気持になれず、口もきかなかった程で、継母も快く思うはずありません。

それが一カ月もする頃にはだんだん私を憎む様になり、継子いじめとなつてあらわれたのです。その後も父の生活は相変わらずで、よく継母と口争いをしておりましたが、父はそんな時、自分に分がわるくなると決まっパイと外に出て行ってしまうのです。

残った私は継母にヤツ当たりされ、それがだんだんひどくなつて、半年を過ぎた頃にはすっかりやせ、氣もいじめてしまいました。

私も、その頃は他人の物を盗んだりして悪い事をしたのですが、その折檻は近所の評判になり、私は継母の顔を見ただけで、びくびくでした。あまりの酷い継子いじめで、私の間もなく遠い親戚にあたる家に引き取られたわけですが、しばらくは元氣のない毎日で、ぼーっとして居りましたが、主人を亡くしてから女手一つで問屋をしている奥さんは性格もきつく、いつまでも甘えさせてはくれませんでした。

学校から帰るやいなや用事をいいつけられ店の雑用や後かたづけなどに追い使われ、とても遊ばせてはくれません。

口やかましい奥さんで、特に仕事の事はきびしく、なまけたりすれば、だれかれとなく叱りつけて居りましたが、ある時、こう言う事がありました。

私はいつもの様にそうじをしていたのですが、ふと見ると荷物の上に、お金があったのです。出来心と言うか、さもしさと言うか、とにかく私は思わず手にとってかくしてしまつたのですが、それが間違ひのもで、奥さんが私を試すためのお金だったのです。

その晩、店の使用人達が帰つた後で、奥さんは私を奥の部屋に呼び込み、そのお金のことを訊きました。私は始めは知らないの一点ばりで、強情をはっていたのですが、大柄な奥さんにかかつては、ひとたまりもありません。たちまちパンツ一つにされてしまつて、かくしていたお金を見つけられ、ひどい折檻をされました。

「おまえはもう、ここには置いとく訳にはいかない。家に帰れッ」などと言われた時にはわんわん泣きながら、一生懸命あやまつたものです。この店に引き取られて来てからは、

こき使われても喰べるものは充分喰べられたし、それだけでも幸せだったのです。

それから言うものは、奥さんは私を身内と言う気やすさもあってか、悪い事などすればむろんの事、何か気にさわった事でもあれば、やたらと折檻する様になりました。

でも継母と違って、素直にさえしていれば優しくしてくれるし、叱る時もすじ道を通しての折檻です。その頃には奥さんに、お仕置きされても仕方がないし、又そんなに、つらいとは思いませんでした。

それまで継母に、いやと言う程、いじめられ通しだった私は、女の人にはすっかりコンプレックスを感じ、まして奥さんに反抗するなどは全く思いもしませんでした。

そうしたことで私も、引きとられた頃にくらべるとずっと良い子になったようですが、手くせの方はどうしてもなおらず、つい悪い事をしてしまうのですが、そう言う時のお仕置きは決まっています、井戸ばたにパンツ一つで坐らされて水をかけられるのです。雨のどしゃ降りの中で、一時間も庭に立たされてのお仕置きなど、まだ忘れられません。

千枝さんと言う、三十くらいになる女中が居りましたが、いつも私が折檻されているの

を見ても知らん顔をしていました。その千枝さんが、私が行ってから一年ぐらひは、奥さんに内緒にしてくれていたのですが、私はその頃でも、寝小便をよくしたのです。

それが、いつまでも治らないからか、千枝さんが奥さんに言いつける様になって、又、新たな、お仕置きされる材料が出来、自分はどうしてこんなに、だらしが無いのかと情けなく思ったのですが、何回か続くと、奥さんは少しぐらひの折檻では許してくれず、千枝さんにも手伝わせて、私をすっ裸にしました。そして千枝さんにも、長い間内緒にしていたことをすごく怒りながら、私を柱に縛りつけて「言ってわからなければ、わかる様にしてやるからねッ」などと、はずかしい所にお灸をすえられたものです。

女中の千枝さんも、自分が叱られるものだからか、意地が悪くなって、その後私がそうした粗相をすれば、必ず奥さんにつげ口をするようになり、その度にひどい折檻です。

その時の熱かったお灸の事は今でもおぼえて居りますが、そうした辛さが身にしみてかお灸の効きめかはしりませんが、その後あまり寝小便はしなくなりました。

しかし、どうした事か、あんなに恐かった

折檻も、それが済めば、ほっとした事もあった。何か体がすうーとした感じで、今思えばマゾの感覚がその頃から芽生えたのではないかと思います。

一方奥さんも、そんな私の気持がわかっていたかのように、何か理由をつけては虐めるのです。仕事が終わると毎晩、男のように晩酌をする奥さんですが、私は必ずその前に坐らされてお説教を聞かせられました。しかも、身がひきしまるからと、冬でもパンツ一つのままです。

お説教でない時には、家に居た頃、継母にどんな風に虐められたかといちいち訊かれ、何かとてもはづかしい思いをした事をおぼえています。そんな私を、奥さんは意地わるくお酒を飲みながらネチネチと言葉で責めては気晴しにしていた様でした。

でも朝になれば、奥さんは何事もなかった様な顔をして、テキパキと仕事を片付けてゆき、私の事など眼中にないふうでした。

私はちよつと寂しい様な、またホツとする様な変な気持でしたが、その頃の私は、奥さんには一言も言い返す事も出来ず、思いのままに、こき使われていました。

やがて私も中学生になり、やっと雑用など

にもなれましたが、奥さんは相変わらずきびしく、冬でも雑布がけをするのには足袋などはく事は許さず、もちろん水でするのですが動けば暖かくなると、何事もやかましく、気を抜く事ができませんでした。

ある日、留守番をする事になって、留守中の仕事を、あれこれと山ほど言い付けられていたのですが、奥さんは晩に帰ると言うのでそれまでにすればいいだろうと、オニの居ぬ間のなんとやらとばかりに、自分の好きな事をして遊んでしまったのです。

又、喰べ盛りの私は、スルメなどを焼いて盗み喰いをしたのですが、注意してわからないう様にしたつもりが、すぐにバレてしまったのです。

その上に、いつつけられていた仕事もろくにしていなかったために、大変なことになってしまいました。その晩は食事もらえず、物置きに丸裸で吊るし上げられて折檻されたのですが、オシッコをしたくなっても許してくれないのです。奥さんも意地になったらしくて、「そんな事ぐらいで許してもらえらると思っっているのかいッ。我慢おしッ」などと言うだけで、千枝さんと二人で笑いながら卑猥な事を並べ始めるのですが、オシッコが洩れそ

うで、はずかしいどころではありませんでした。

おまけに千枝さんが、私が日頃もちよいちよいお菜のつまみ喰いなどをしていと言いつけてしまったからたまりません。

いくらきびしいことをしても、喰べるものだけは充分に喰べさせてくれている奥さんとしては余程、腹が立ったのでしょう。

「このいやしい泥棒ネコが……」というなり千枝さんに「縫い糸を持っておいで」といいつけたのでした。

私はその時、もうとても我慢きれないほどに切羽詰っていて、どうにも謝まる声も出せないほどでしたが、奥さんは、千枝さんの持ってきた縫い糸で、私が粗相も出来ないように、先端を固く結えつけてしまったのでした。その上で、火のついた線香で、唇の両端から始って全身、至るところにお灸責めではなく、線香責めにされたのですが、その苦しかったこと。

やっと許された時には、ほんとうに骨身にしみて、もう絶対に叱られるようなことはするまいと思っただけでした。

それでも、私が十五、六になるまでは、奥さんの徹底的なシゴキは続き、何かといって

はすぐ体罰を受けたのですが、必ず、店の人が帰った後ですし、酷いといっても、縄のあとはすぐ消えるし、お灸だけは別でしたが、体に傷が残るような折檻はめったにされなかったのも、千枝さん以外、店の人で私の体罰を知っている人は居なかったようです。

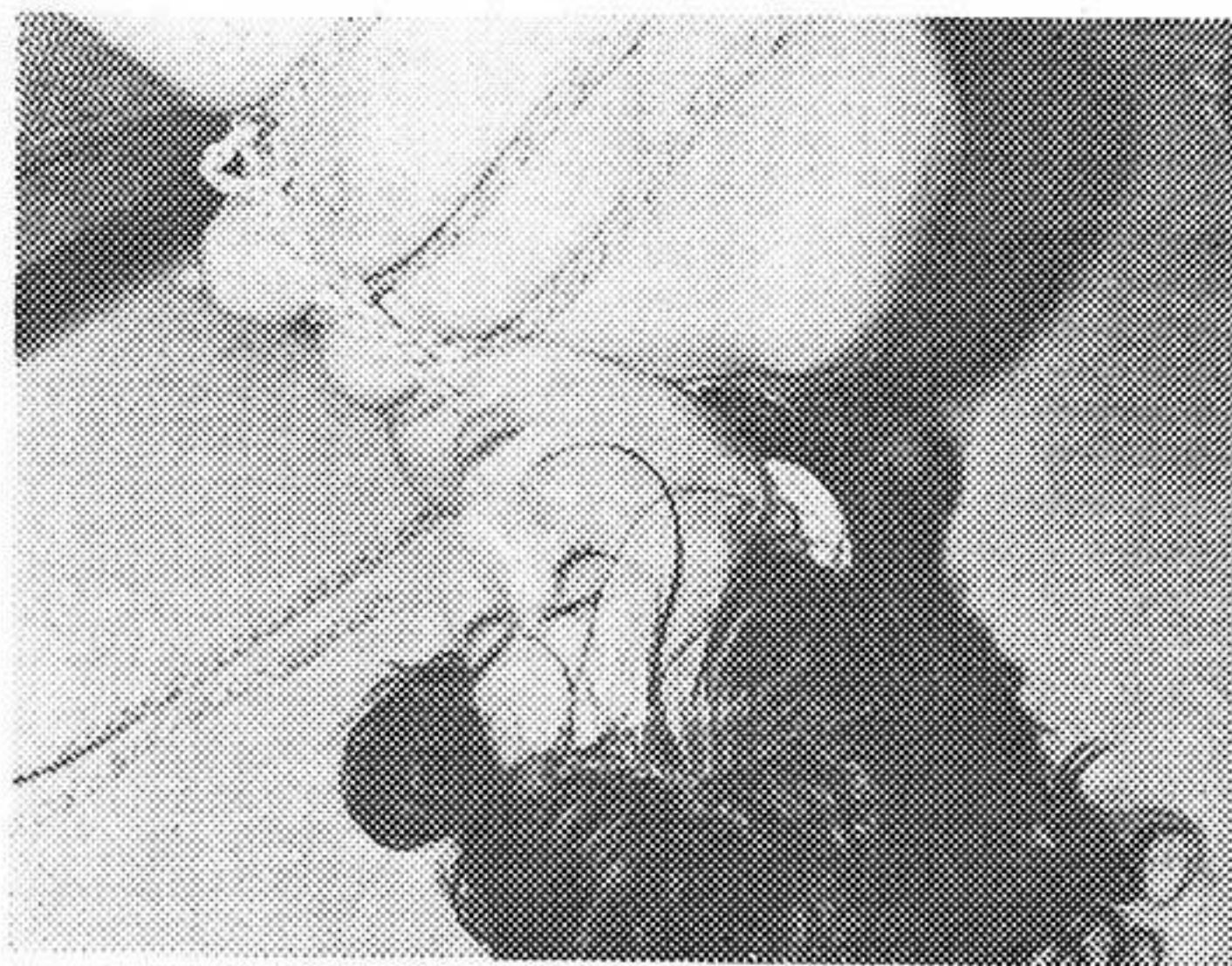
とにかく、そうした少年時代を過ごしてきた私ですが、幼い時から苛められ、ずいぶんヒネクレていたにもかかわらず、悪い道にもおち込まず、今日、こうしてどうにかまともに自活出来るようになったのも、このきびしい奥さんのおかげだと思っています。

しかし、一面、あれほどまでにひどい折檻をされても、逃げ出そうとは思わなかったのは、行く所がないからでもあったのでしょうか、自分の、苛められることを喜ぶマゾ性のおかげもあったと思います。

近頃になってやっと、それに気づいたことですが、辛く、暗いこの少年時代の想い出が懐かしく、美しいものにすり替わっているのです。あの、縛られ、吊られ、しごかれたことが。そして、お灸の熱さと苦しさが……。

(おわり)

× × × × ×



△川路叢子さんの素顔▽

片えくぼの

マリア

塚 本 鉄 三

△辻村先生に随行し助手を勤めた上、川路叢子さんの緊縛写真を撮影すべし▽

という編集長命令が私に発せられた。

日時は二月十四日、十二時四十五分。新大阪駅着の新幹線で川路叢子さんが到着する筈だから、詳細は辻村先生と打ち合わせするようにとのことであった。

立春も過ぎて陽ざしもようやく春めいてきたので、一週間ばかりの予定で旅行でもしよ

うかと考えていた矢先だった。

私は一年中で『早春』が一番好きである。

二月——この短い月をはずしてしまおうとすぐあの埃っぽい春がやってくる。

霜柱をさくさくと踏みしめながら、しっかりと冷気を含んだ朝の空気を胸いっぱい吸い込んで人なき山辺を、あてもなく歩きまわるのが大好きである。

一人で旅するのは二月に限る。そう思っ

ている私だから、この機会をはずすということは、私にとっては辛いのである。しかし編集長命令とあれば仕方がない。十四日といえは一週間ほどの余裕があるだけである。私は早速、辻村先生に電話をした。

きさくな辻村先生のことである、快く私の同行を承諾してくれたばかりか、途中で私を車で拾った上で新大阪駅まで連れていってやろうとまで言ってくれた。彼は川路さんの顔

を知っているのだから大安心である。

落ち合う場所や時間は、まだ日があるから最も便利なところを検討しておいて、いずれ連絡しようということ電話が切れた。

どうせ彼のことだから、緊縛用具や照明器具は持ってゆくだろうし、いざとなれば頭をふり立てて、構成とやらをやってくれるだろう。私は大先生のうしろで、パチリパチリとシャッターを切っていればよいのだ、とそんな虫のいいことを考えていた。

全くいい気なものである。九日から十日間と予定していた旅行を、十六日から十日間と変更して早春の野山を思いきり歩いてみたいと、胸をわくわくさせていた。

知人の画家が言っていたが、一月ばかり、旅行して風景画を一枚描くと、五十万円ぐらいに売れるとのこと。私なんか、いくら風景の写真をうつしたって、絵葉書にも売れないが、やはり自分で撮ってみたいという意欲が湧いてきたとき、カメラの操作一つにしても充実したものを感じるのだ。

地図をひらいて旅行のプランを樹てているときは本当に楽しい。実際に旅行しているとさよりも楽しいかもしれない。重いカメラを提げて歩く苦勞は、プランを樹てているとき

には感じないからか、それはどうかかわらないが、家でぶらぶらしていると、むしように旅に出たくなり、地図を見て空想を走らせていると張り合いが出来てくる。

愈々明日は川路さんの写真を撮りにゆくという日、私はギャジット・バッグにペンタックス一台を入れた。レンズは55ミリの標準をカメラに装置し、もしもヒケがないときの用心に35ミリの交換レンズ一本をつけ加えた。ストロボは二本、これで一応、中型のバッグは、いっぱいになった。

しかし、私の甘い考えは予想外なところで破綻をきたした。その日の夜、辻村氏から電話があつて、明日は行けないから君一人で行ってくれというのである。なんでも新婚旅行に九州方面へ行っている二番目のお嬢さんの新婚夫婦が伊丹の飛行場へ着くのを迎えに行かなければならないのだそうだ。今更、川路さんに連絡する方法もないので、私一人で行くことになってしまった。

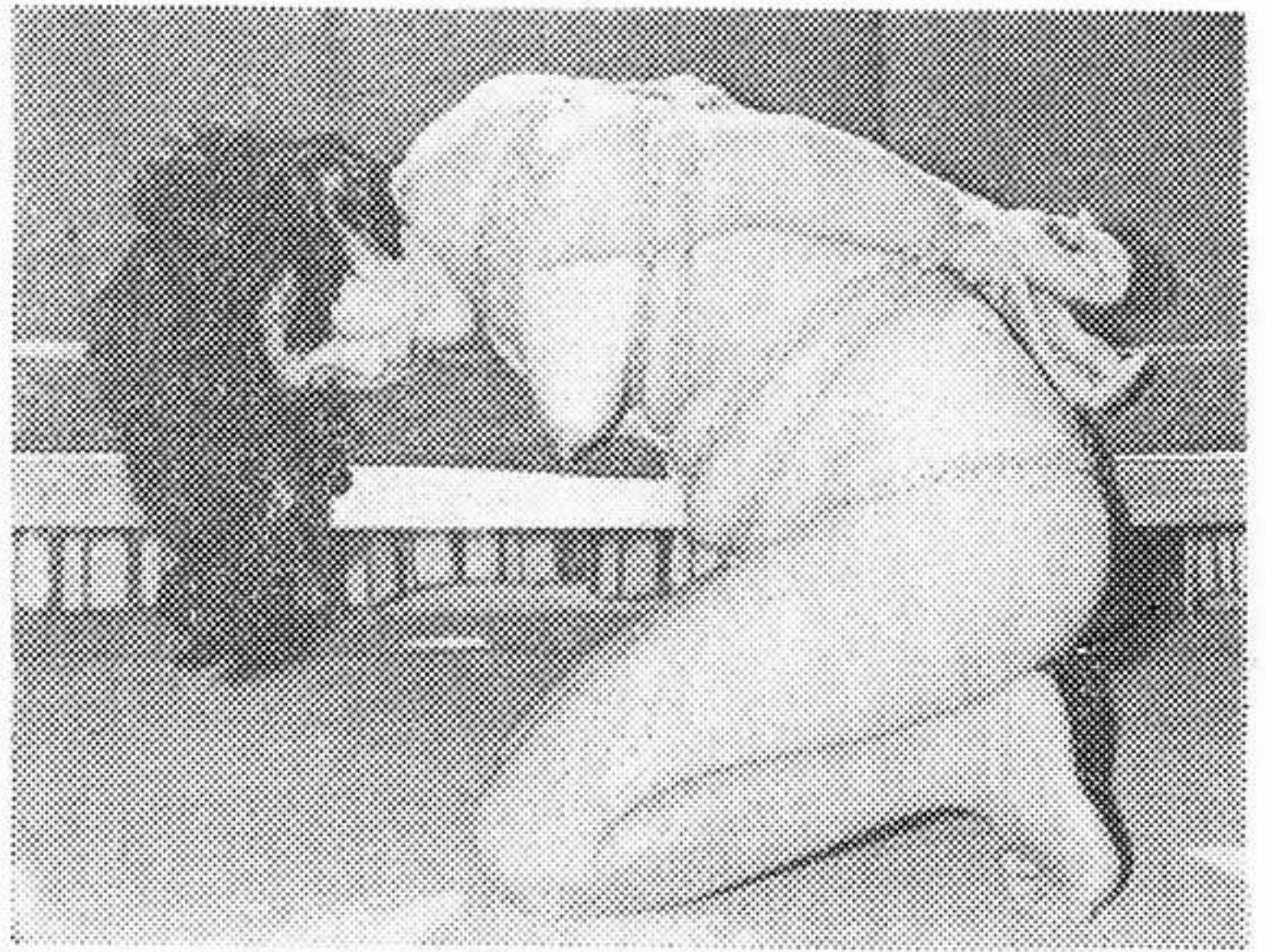
二月十四日、この日は四月上旬か中旬の気候とか、ラジオでは言っていたが、ぽかぽかとして陽ざしは、もうすっかり春のもので、オーバーを着ていると汗ばむ位である。十二時四十五分、新大阪駅着なのだから四十分位

に正面出札口に行けばよいのだが、第一、私は彼女の顔を知らないのだから果してうまく見つかるかどうか不安だった。あわてて二月号のカメラハントを読んできたので大体のイメージはつかめたつもりだが、なにしろ多勢の乗降客の中から一人を見つけだすのだから見逃してしまつたら大変である。

辻村氏の車で拾ってもらつてもりがオジャンになつてしまつたので、地下鉄の西中島南方駅で乗り換えて新大阪駅へ向かった。週末ではあるが行楽のシーズンオフなので人影はまばらである。定刻四十五分きっかり轟音と共に列車が入ってきたかと思うと、エスカレーターを降りた乗客がどこかと出札口へ向かつて殺到してきた。

連れない若い一人の女性ということに狙いをつけて私は目を皿のようにして探していたが、足早やに去ってゆく人浪の中から見つけだすことは困難であつた。

やがて、その大きな浪が過ぎてしまうと、あとは一人、二人と遅れた客が間遠うに降りてくるだけである。波の引いたあとに残った貝殻のように、三、四人の人待ち顔の人たちが佇んでいるが、どうも辻村さんから聞いたイメージの女性は見つからない。



「あの、川路さんでは——」

「はい、川路です」

少し汗ばんで紅潮した顔が、元気よく打てば響くように答えてくれた。ああ安心だ。

「僕、塚本と云うんですが、辻村さんが急用で来られなくなったので代りにきました」

「あら、そうです。この前は妾、はじめてでしたので堅くなってしまっ、辻村さんには申し訳けないと思っております。でも今日は妾、リラックスしておりますから、面白いプレイが出来ると思えますわ。それにね、妾、本当のことを申し上げますと……」

そこまで彼女が喋ったとき、次の列車が着いたのだろう、どやどやと出札口に人の波が見えた。

「持ちましょう」

私は足もとに置かれた彼女の真赤なバッグを持つとタクシー乗場の方へ誘った。

「車の中は暖房がきき過ぎていて、とっても暑くて、汗をかいてしまいましたわ。もう春になったんでしょうかねえ」

多弁である。アクセントが関西弁でなくて齒切れがよい。微笑したときに右側の頬にくぼが出るのが可愛い。それに小柄なせいもあるが、大変若く見える。たしか、辻村さん

のカメラハントの記事では八人妻Vとか書いていたが、私の目の前にいる川路叢子さんはそうは見えないのである。

原色をとり合わせた派手なセーターを着た胸もとあたりを、ふっくらと盛り上がらせて艶々とした黒髪を右の眼の上にたらしめている扮装は人妻というより、流行を追ういたずら娘といった風である。辻村さんのいう先生タイプとは、どうも見えないのである。

ひょっとしたら、私が辻村さんの代理であるように、彼女も川路さんの代理ではないだろうか。そんな錯覚が、ふっと私の頭の片隅をよぎっていった。

気持よく晴れている。

春の気配である。

四月上旬か中旬の気温であるという。

彼女は盛んに話しかけてくる。今はじめて逢った二人だというのに、もう何回もデートを繰り返した恋人同士のように打ちとけた態度である。流石にタクシーの中では、プレイについての話はしなかったが、なまめいたまなざしで私に寄り添ってくる彼女に何となく心のなごむものが感じられた。

お目当てのホテルへ着いて部屋へ入ったとたん、あわてて来たので食事をするのを忘れ

いや、一人だけ、きよろきよろと周囲を見まわしている若い女性がいたが、どうも予想した川路さんよりは十分、若いらしい。

赤い裏をチラリと見せたオーバーを小脇にかかえたセーター姿の女性は、どう見ても二十才か少し過ぎぐらいにしか見えない。暫く様子を見ていたが、他にそれらしい人影もないので、思いきって声をかけてみた。

たのに気がついた。無難なところで寿司の注文をして撮影の準備にかかる。

準備といってもストロボ二灯だけだから、至って簡単である。

「今日は妾、のびのびしてるのよ。ゆったりした気分。ハッスルできると思うわ」

バスタオルで胸から下をまいた彼女は一人ではしゃいでいる。これからの緊縛プレイが余程楽しいらしい。新幹線でくれば一息とはいえ、わざわざ浜松から大阪まで出てくるのだから、並々ならぬ執着といえよう。

私が撮影の準備をしている間、入浴してくれるように言ったのだが、湯を出したまま、私の傍を離れようとしなくて盛んに話しかけてくる。馴々しくさえあるのだ。

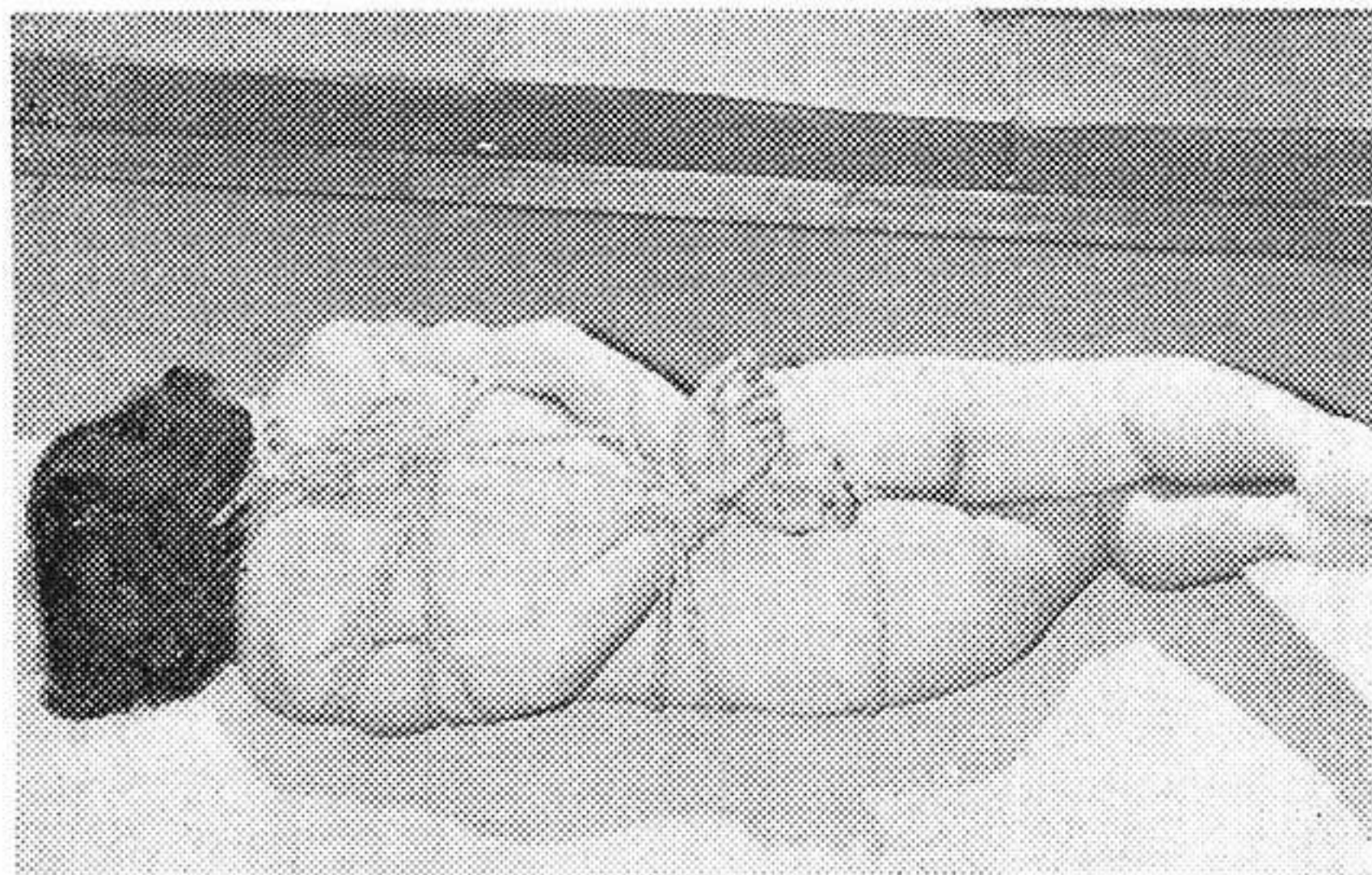
「縛られているときは、余りよくないんだけど、帰ってから思い出すと楽しくなってくるの。だから、あのとき良かったのかなあと思ったりするんだけど、今日は妾、リラックスしてるので縛られてるときも良いかもしれないわ。この間、辻村さんのときは堅くなっていたもの、妾すまないと思っています」

彼女の話しかけは途絶えないが、浴室でザーツという激しい水音。湯がいっぱいになって溢れているのだ。バスタオルのまま彼女は

浴室へ飛び込んでいった。

暫くしてノックの音。注文しておいた寿司を持ってきたのだろう。ドアを半開きにして確かめてから部屋に運んでもらう。

入れ違いに川路さんが湯のしずくをたらしながらバスタオルを胸に巻いて上ってくる。



おとなしい先生タイプという辻村さんのイメージとは、どうも違うようだ。第一、人妻とはどうしても見えない奔放さである。今晩は京都で泊るのだといっているところを見ると、人妻というのは真赤なウソではないかと思えるのだ。ひょっとしたら、私達をかついでいるのかもしれない。

瑞々しい湯上がりりの肢体を、私の目の前にさらして近づいてきた。

「さあ、縛って頂戴！」

両手を背後へまわしたので、胸を掩っていたタオルがパリリと前に落ちて桜色の肌ほんのりと湯気を漂わせている。

着やせするタチなのだろうか、全裸になると目を瞞るくらい肉づきがいのである。特に臀部と太腿のポリウムは、ふるいつきたいくらいの色気に溢れている。

辻村さんのときは初めてなので堅くなっていたが、今日は二度目なのでリラックスしているというのだが、それにしても大胆というか奔放というか、前をかくすようにお尻をくねらせて煽情的な仕草で両手を背後にまわして立っているポーズは、触れなば落ちんといった挑発的な風情である。

私は編集部から借用してきたロープを手

して川路さんの後ろに立った。淑女を余り待たせては失礼に当たると思ったからである。

汗ばんでいるのか、湯で濡れたままなのか川路さんの手はしっとりとしている。両手首を揃えて縄をぐるぐると巻きつけ、ぐっと逆手に引き上げてみる。

「痛い」と言って拒否するか、或は「痛い」という態度は見せても、じっと齒を喰いしばって辛抱するか、或は、うっとりとして軽い呻きを見せるかで、その女性の被虐度がわかるのだが、川路さんはそのいずれでもなかった。もぞもぞと身体を左右にゆさぶると、自分からもっと手首が上がるようにした。

「どう、妾の腕やわらかい？」

自分の肩越しに顧みて問いかける。

たしかに彼女の腕は柔軟だった。風呂上がりというせいもあるが、二の腕の筋肉をぷくくと膨らませながら、逆手はX型に肩口近くまで交叉しているのだ。

洋服を着ていたときには考えられなかったポリウムが全身の要所要所に若い女性らしい肌の張りを見せている。

私は、す早く縄を捌いて二の腕から胸へまわして二巻き三巻き、縄尻を肩から前へ通して股間縛りに仕上げて余った縄をそのままに

先ず第一回目のシャッターを切った。

前から後から、側面からと三枚ばかり撮ったところで、第一ストロボから第二ストロボに連結したシンクロコードがはずれていることに気がついた。しっかり嵌めてあったのに何故はずれたのだろう。それにしても早く気がついてよかった。念のためゴムバンドを巻いて抜けないように固定する。

ここで縛りのウォーミングアップは一応終わったので、縄を解いて食事をする。

約三十分の食事の時間、私は川路さんのような若い女性が、どうして△縛り▽に興味を持つようになったのか訊ねてみた。彼女に関する限り私には辻村さんの『ハント』（二月号掲載）を読んだ以外に予備知識はない。彼女が編集部宛にどのようなモデル志望の手紙を出したのかも知らない。

普通そういったことを若い女性に訊ねても中々答えてくれないものだ。只ニヤニヤと笑っているか、悪くすると「失礼な」とか「まあエッチね」とか言って軽くいなされてしまうのがオチである。しかし、彼女は「妾は今日はリラックスしている」と言った通りベラベラと気安く喋ってくれた。

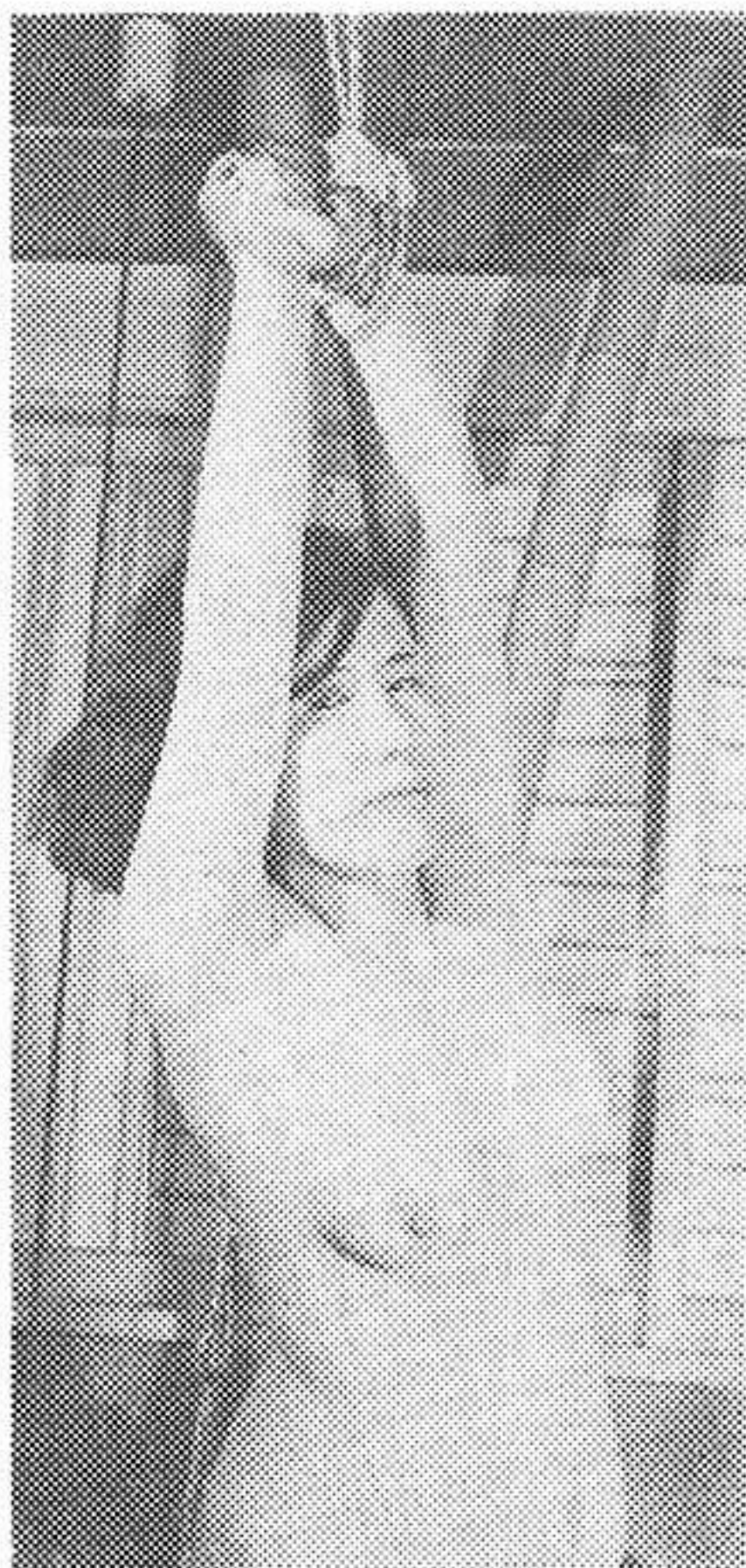
二年程前から彼女には恋人がいた。その彼

氏が奇クの愛読者だったので、いつとはなしに彼女も時折りは読むようになっていた。そして、或る日、彼氏から縛られることになったのである。（だから辻村さんから初めて縛られたというのはウソで、辻村さんに縛られたのは第二回目ということになる）

生まれて初めて裸にされて縄で縛られたときは、嫌で嫌で仕方がなかったそうである。それが一旦別れて家へ帰って考えてみると、縛られているときに楽しくて仕方がないように思えたというのだ。それで自分は縛られるのが好きなんだなあ、と思えてきた、というのが彼女の偽らざる心境だそう。

辻村さんに縛られたときもコチコチに堅くなっていたので、そのときは少しも楽しいとも良いとも思わなかったのに、帰ってから回想してみると、とつても、そのときが懐しく楽しい思い出だけが残っているというのである。今日は、だから最初から楽しいだろうという気持で緊縛プレイを期待して、胸をはずませて来たのだろう。

食事のすんだところで、さあゆこうと掛声をかけてバスタオルを彼女の裸身からはぎとり、忽ちにして高手小手に縛りあげてしまった。女体を縛りあげると、何故このように魅



力的になるのだろうか。肩口が盛り上がり、ウエストが引きしまり気味となり、反対に心持ちくねらせたお尻が、瑞々しい水蜜桃のように、むっくり息づいているのだ。

縄尻を引っぱって全裸の女体を思いのままに引き回して、遅ましい臀部が歩きたびに悩ましく揺れ動くのを目で楽しんだ。

彼女がどういう縛りを好むのか、どういう責めを好むのか、全く私には未知数である。

川路叢子というM女性、今まさに処女地へ第一步を印したといってよい。彼氏という愛読者氏と辻村さんの二人が開拓してくれた耕地に、私は先ず種子を蒔かねばならない。それが芽を出し生長して花を咲かせ、結実するのは、まだまだ先のことである。それだけ

に、まことに楽しみの多い将来性のある貴重な被虐女性といえよう。

私は彼女を追いたてて、その背後からストロボを光らせ側面へ回って横顔のアップを狙った。短くカット

した黒髪が顔の半面を掩ったプロフィールは大層美しかった。坐らせ、転がし、立たせ、中腰にさせ、私のカメラは執拗に彼女の緊縛姿を追っていった。

川路さんは全く素直で従順だった。

こういうことをするのが楽しくて仕方がないといった積極的な態度で、私の命令に易々諾々として従ってくれる。横に倒したとき、後手首が下になり二の腕の縄が極端に締まって苦痛を訴えたが、それでも必死になって、その痛さをこらえるといった風であった。

「嬉しいわ、妾、縛ってもらえて——」

そう言われてみると、もっともっと真剣に責めなければ済まないような気になってくるのだが、ベテランの辻村氏などと違って、駈

けだしの私のことだから、彼女の期待に応えることが出来るかどうか不安である。

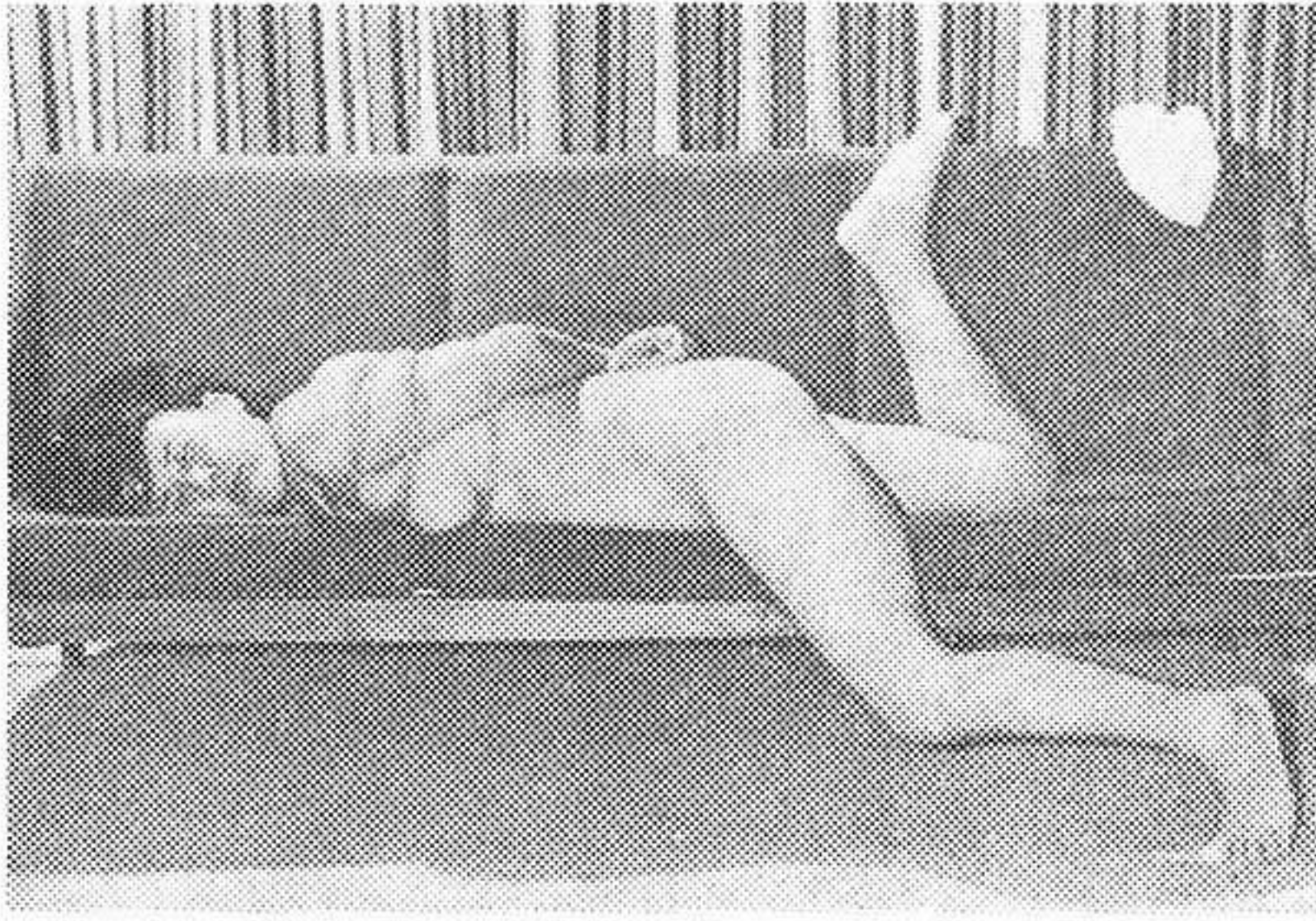
海老縛りに締めつけて、右に左に仰向けに転がしてみた。両手首を縛った縄目が皮肉に喰い込み、二の腕の肉が紫色に変色するほど縄が締ったが、彼女は痛さに呻くだけで一度も悲鳴を上げなかった。足首を交叉して縛られた足の指が、ぴくぴくと蠢動しているのが苦痛の度合いを示しているようで、私は見ていて哀れになった。

露出している部分を出来るだけカメラのレンズの狙いからかくそうと努力している羞らゐが全身に漲っているのだが、既にその部分は隠すに隠せない状態になっているのが、私の目にもはっきりと見ることが出来た。

それを自覚しているからこそ、尚一層彼女は羞らゐを全身に見せているのであろうか。

輝くライトの中に、このまま放置しておいてよいものか、早く縄から解放してやった方がよいものか、私は暫く迷っていた。

弯曲した太股の太さ、緊張の極に達したかと思われる太股の筋肉。海老縛りにしなかったら、こんな女体の状態にはならなかったかもしれない。エロチックを通り越してセクシーな感じさえする肢態であった。



フィルムの入れ替えをするのを機会に休憩に入る。彼女は一向に疲れた風はない。

「フィルムの交換をする間も縛っておいても妾はかまわないのよ」

と川路さんは言ってくれる。だがストロボの位置も変えなければならぬし、私も一服つけたい。一人で縛ったり写真をうつしたり

これで結構、疲れるのである。

時計を見る。この部屋へ来てから、すでに二時間が経っている。次第に暖房がきいてきたのか、一灯つけっぱなしにした三〇〇Wのフラッドランプの熱気か、それとも大体今日の気温が高いのか、上衣を脱いだままでは暑くて仕方がない。真夏並みの室温である。

浴衣一枚に着換えて、次の撮影に移る。

両手吊りである。爪先立つところまで引きあげて縄止めをする。

両手を揃えて挙げた無防備なポーズで腋の下をさらしているの、思わず伸びきった柔毛の生えた腋の下を擦っていた。

「いや、いや、くすぐったい」

笑窪がその度に現われて可愛い。一瞬にして、消えてしまう笑窪を見たいために、何度も擦りを繰り返かえしてみるが、カメラでそれを捉えることは難しい。それではと、美しいプロフィールに狙いをつけて何枚も何枚もシャッターを切る。中には笑っている顔も入っているかもしれない。責めているのに笑顔を見せているとは何事だと叱られるかもしれないが、実際は痛さをこらえている表情をしているときよりも、笑っているときの方が多かった。勿論カメラには笑顔はとらないようにし

たのだが。

このときだけ、カメラを三脚に据えてシャッターはエヤーレリーズを使った。

「妾、肥り過ぎじゃないかしら」

彼女は盛んに自分が肥っているのを気にしていた。今、痩せた女性が受けているのは事実のようだが、裸にして縛るのには蚊トンボのようなヤセギスでは困るのだ。

着物や洋服を着ているときは痩せ気味だが一度裸になったら、わあ凄いボリュームだと思わくような女体が緊縛女性としては理想的だと思わくが、これはあくまでも私の好みであつて、枯木のように細い女性がお好きな方も多いと思わくので、あくまでも愚見としておく。

ストロボ一灯を天井へ固定し、一灯をカメラの脇に据えて被写体である川路さんを縛ったまま、ソファに放り上げた。

彼女の全身のさまざまな動きを刻明にフィルムに記録してみようと私はカメラをかまえた。私の指示する命令に従って、女体はどのような変化を見せるだろうか。豊満な肉づきの身体各部が縄に拘束されて、どのように不自然に動きまわるだろうか。

私は、それに対して興味を持った。

人身御供の祭壇に上がった川路さんの心中

もさぞ、おだやかではなかったろう。被縛女体としての自分が、これから、どのように変化してゆくのか、カメラの前で戦慄にも似たおののきを感じたのではないだろうか。

すべてをさらけだして、祭壇の上で生きたいけにえとして、呻き、喘ぎ、喚いた末、恍惚境をさまよった挙句、天国へ昇天することになるかもしれないのだ。

撮影の準備が万端整ったところで、私はカメラの位置から、彼女に命令を発してポーズを変えさせ、次々とシャッターを切っていた。最初のうちは極めて平凡な、それで彼女にとっては容易なポーズであったが、やがて私の命令でソファから落ちそうになり、

「もう、そんなことは出来ないわ」

と弱音を吐くようになった。そんなときは命令に従わなかった罰として、両足を八の字に開いた仰向けのポーズをとらせたりした。

真白い肌を採光用のランプの光に照らし出されて、妖しく動く肢体はまことに魅力的であった。罰として、もっともっと極端なポーズを自分の命令によってとらせたいという嗜虐的な意欲にかられた。羞かしがれば羞かしがる程、私の嗜虐心は昂揚した。

そのうち、彼女は私の言葉に依ってどのよ

うにでも動くロボットのようになり、足を挙げ、足を開き、仰向きになり、うつ伏せになり、懸命になってポーズを変えた。

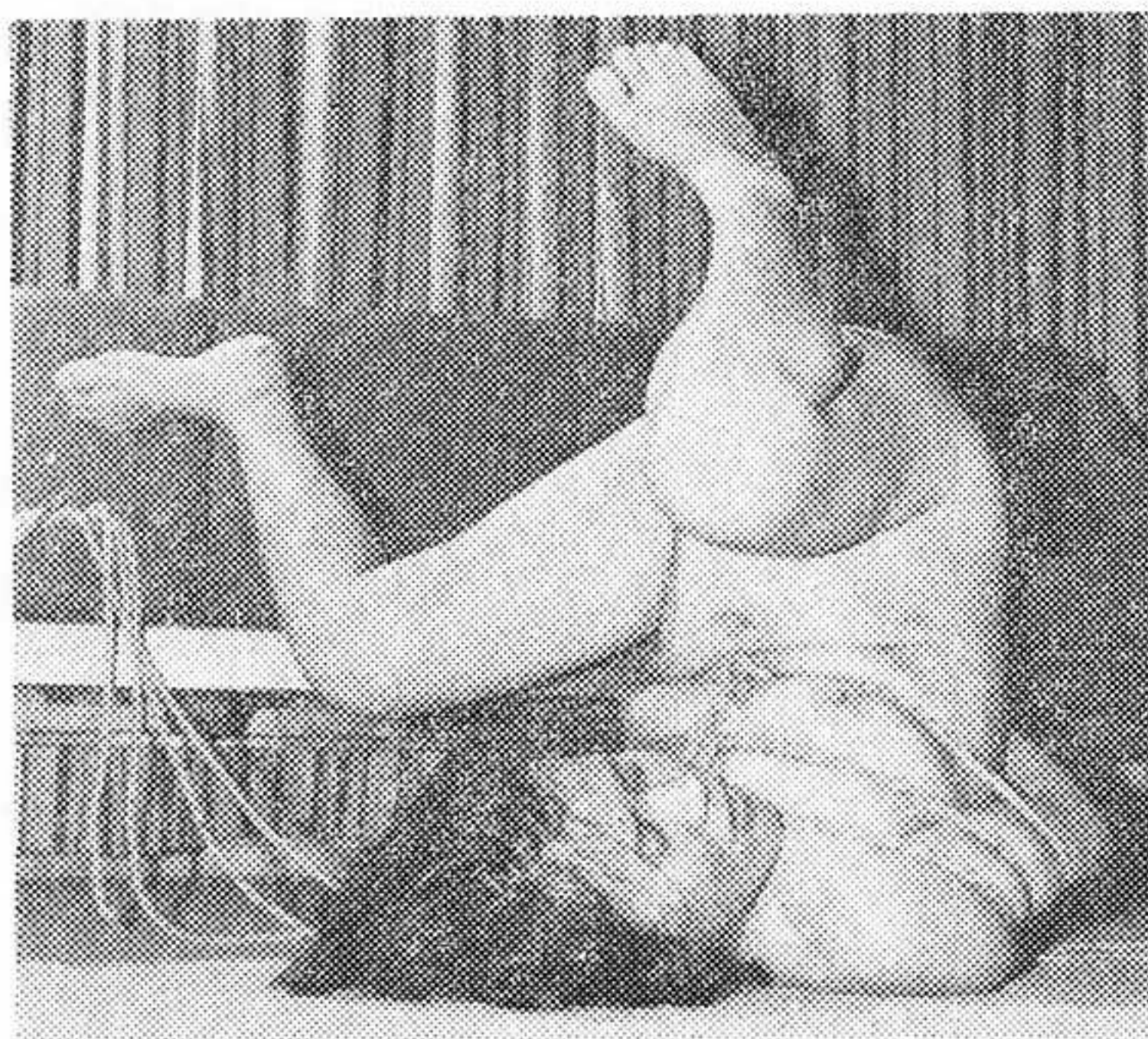
極端なポーズをとらされたとき、一瞬彼女はためらいを見せ、羞恥に頬を染めたが、私の激しい叱咤と鋭い視線を浴びると、仕方なしに従った。そしてカメラのレンズが狙いをつけると途端に喜悦を顔に漲らせた。私は意地悪く、そんなポーズをとらせたまま、次の命令を発しないで、カメラアングルを変えて幾度となくシャッターを切った。

彼女の豊満な臀部や腰部、それに太股などの肌が桜色に染まり、次の私の命令を待っている風であった。

いささかも事務的な態度が見えない。

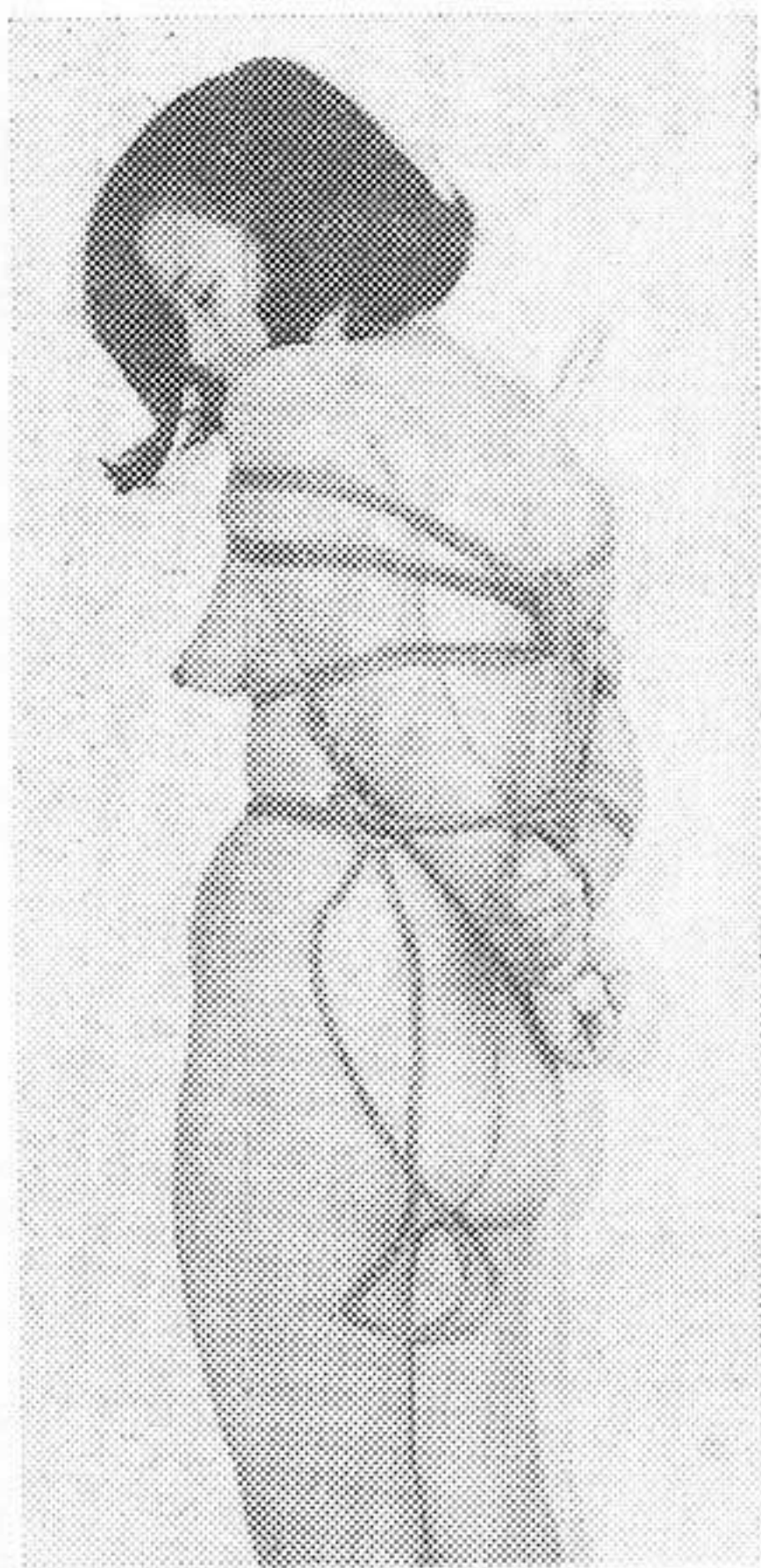
金のために、只いやいや従っているのは興ざめであるが、彼女にはそんな態度は少しも見えない。

今日初めて逢った私なので羞恥心は極めて旺盛なのだが、肉体の内側から湧き上がってくる被虐心に打ち克てずに、全身が燃え上っていると聞いた風に見えた。



ソファからずり落ちた彼女は、頭をカーペットの床につけたまま、逆立ちのポーズで脚を八の字に開かされていた。

かくさなければいけない個所が、あからさまに正面向いて露出した恰好を、いつまでもとらされているのは彼女にとっても苦しいだろうが、私はそのポーズをとらすについて、彼女に指一本触れていないのだ。すべて言葉



の命令だけで、ここまで仕込んできたといっ
てよい。

今では、彼女はまるで夢遊病者のように、
私の言葉の命令だけで、どんなポーズでもと
るように馴らされてしまったのである。

室温は益々上がってきた。二十七度から二
十八度を示した寒暖計は、まだまだ上昇しそ
うである。妖しい熱気がむんむんと充満して
彼女の腋の間からにじみ出た汗が滴となって
頸筋の方へ流れてゆく。

鯁舌だった彼女が急に無口になったのは、
激しい羞恥と必死に斗っているのだろうか。

私は、もっともつと虐めぬいて、彼女の身
も心も、ずたずたにしてやりたいと思った。
不思議と同情心は湧いてこない。もしもムチ

があつたら、盛り上
がった臀部や腰部を
思いきり、打ちのめ
したい気持ちにかられ
た。

「ムチ打たれたこと
はないので恐いみた
い。でも一度、打た
れてみたい気もする
わ」

と言っていた彼女である。しかし、今の私
にムチの持ち合わせはない。

彼女はムチ打ちのように苦痛を伴う責めよ
りも、むしろ身の置きどころのないような羞
恥責めにあいたいと思っているらしい。

私は手荒に彼女をソファの上に押し上げた
上、一脚の椅子を持ちだして彼女を腰掛けさ
せた。その上で私の言葉の命令は彼女に開股
を命じたのである。最初はおずおずと、そし
て、私の叱責によって、じりじりと両足を椅
子の上で開げだしたのである。

川路叢子は、もうどんなことがあっても、
そうしなければならぬと観念したように、
私の命ずる通り、脚を高々と挙げて股を思い
きり開げだしたのである。

私の鋭い視線を感じることに愉悦を覚えた
表情がありありと読みとれて、そんな無謀な
命令を発する私の心のしこりを柔らげてくれ
た。それからの私は、もう嗜虐心の虜になっ
ていた。今まではいささか残っていた自制心
によって手加減していたのが、もどけるゼン
マイのようになって暴走してしまった。

編集部に提出するネガは、この辺で終わり
を告げたといつてよい。これからあとは、よ
くS好みの読者が空想で投稿されるサド小説
のようなことになってしまつて、まことに申
し訳けないと思つていと共、ここに文章
に書きとどめておく勇氣はない。

六時まで京都駅へ行かねばならないという
川路さんを送つて再び新大阪駅へ向かった。
昼とは違つて正面改札口は流石に乗降客が
増えている。逢つたときは至つて多弁だった
彼女も今は控え目で無口だった。

「今日は大変楽しかったですわ」
面はゆげにそう言つて、「さよなら」とい
う私の一言を背に小柄な後姿を雑踏の中に消
していった。

—(おわり)—

×

×

×

×

×

×

告白

沈 静 発 泡 酒

乃 美 対 造

昔の紅灯は消えたとはいえ、まだ、そこはかとなく妖しい雰囲気を漂わす福原を横眼にして、スバルR2のハンドルを右に切ると、路からも油の浮いた神戸港の海面が見える。

いまだにこんな日本女性がいるのか？と疑いたくなるような風景に出喰すのも神戸ならではあるが、青い眼の腕にブラ下るようにして歩いてゆく超ミニ。そのむちむちした太腿がイヤに眩しく映るのは、私のヒガ眼らしいが、車を路上にはうり出し、あとをつけるでもなく歩き始める私の眼の前で、ミニのお尻が左右に振れるのは事実だ。

南京街を中心に、網の目のごとき路地には数百軒の外人バーがひしめいている。

島国根性というのか、私の血の中にも、白人に対するコンプレックスがひそんでいるとみえ、大柄な外人と日本娘が歩いているのを見るだけで、ゾクゾクするような被虐感と嫉妬を覚えてしまう。終戦直後の外地で、数人の外人に襲われている日本娘を目撃した経験が、そうさせるのかも知れない。

眼の前を行くお尻と太腿が、同じ日本人の

自分のものではなく、この毛唐の……と想うと無性に腹が立ってきた。今にも私の気持が爆発しそうになったとき、二人の姿はタクシーにのまれた。見送る夜空に26階を誇る貿易センタービルの屋上の、赤い航空標識灯がまたたいていた。

一刻の後、私は繁華街が眺められるホテルの一室に居た。気の利いた浴室は、タイル張りの洗い場が6平方メートルもあり、私を満足させてくれた。

純子は20才だといっていたが、案外と素直に、この広いタイル上でのプレイに応じてくれた。さすがに洗面器を前にしてはためらったが、文字通りの金縛り不動明王観音像？では拒みきれるものではなく、若い娘独特の甘酸っぱい香りを浴室一杯に漂わせるまでには、そう時間はかからなかった。

少し危懼を感じながらも、その洗面器のものを「塩からいナ」と実感したのは、先刻のミニ娘の後姿から受けた被虐感の影響が多大にあったと思う。

毒喰わば皿まで……の心境で、自ら犬にな

り下つての跡始末、さらには、もう一つのほうの要求まで発展したが、これはどうしても駄目であった。

私の得意とする金縛りの術に加えての暗示と強制にこれつとめてみたのだが、ついに彼女の羞恥の壁は破れなかったのだ。

ベビー浣腸薬でも備えてないかと、備品棚を物色してみたが、これも空振りに終ってついにあきらめざるを得なかった。タイルにのたうつ美女の鑑賞は、別の方法でしか実現出来なかったのは残念であった。

ちょっと訳ありで、セックスは慎まなければならぬ私だが、洗い清めた上でのディープキスぐらいでの燃焼は差しつかえなからうと独り決めた。でなければ、超ミニの日本娘に刺激されたからといって、急にSM自由恋愛の幕を開けることはしない。

彼女は不審そうではあったが、明らかに異質の歓喜を表現してくれた。私もほぼ満足に近い気持で、この衝動的SMプレイの幕を閉じることが出来た。

昭和元禄謳歌の是非は別として、Hから始まるネオンをくぐるカッパルを横眼に、放置した愛車へ戻る私の気持は、青い眼に対して爆発しかけた時とはずいぶんな差を認めざるを得なかった。僅か数時間しか経っていないのに……。

(終)

シヨントメの哀歓

畏

(わな)

香川 泳三



カット・春川ナミオ

(1)

ノックもなしに、いきなりドアが開き、中年男が顔をのぞかせた。

「だれ。ゆるしもなしに入って」

時田昌江は、まだベッドの中であつた。

「なんだ。社長か」

警戒の必要な相手ではない。あーあと大口あけて、ついでに思いきり伸びをする。

カーテンを閉ざしたままの部屋には、すえたおんなのにおいがムンムンたちこめていて

息苦しい。

「お金はないわよ」

ふてくされた調子で、ベッドにころがったまま起きようとしめない。

バー「リオ」の売れっ子。二十三歳。浅丘ルリ子をおもわせる美女であつた。

寝乱れたはずなのに、ほほはバラ色に輝き黒いヒトミが印象的だ。

「約束だ。払ってもらいましょう」

はじめのころは、おそろしい社長だと思つていた。

だが、用事をこしらえて、何回もアパートへやってくるのに慣れてしまい、風采のあがらない社長が、甘くみえて仕方のない、このごろだった。

「社長さん」から「おじさん」と呼ぶようになったのも、そのためである。

「払ってもらいましょう」

と、本人はすぐむつもりなのだろうが、このチビがと、ついバカにしてしまう。

客は、アタッシェケースを開いて、書類を引っぱりだした。

「春のキモノ買ったなら、すってんてんになっちゃった」

「そんなこと、わしのしらぬことだ。なんなら、そのキモノ預りましょうか」

「ひどいこと言うわ。でもカンベンして、キモノはおんなのイノチよ」

「イノチでも、なんでもかまわない。こちらも、命がけの商売なんだ」

「おじさん。どうして意地わるばかりいうのよ。しらない」

「ないわよ、そうですか、ノコノコ帰ったんじゃ、あごが干あがるよ。……それとも、いつかたのんだこと聞いてくれるというのなら、はなしは別だがね」

「いやよ、エッチなおじさん。そんな恥ずかしいことするくらいなら、着物でもなんでも持っていてちょうだい」

「いいじゃないか。恥ずかしいことなんか、ありません。どうだ、ウンといたら、支払いは「あるとき払い」にしてやるし、そうだお礼とこっちやなんだが、これをあげようじゃないか」

手の切れそうな一万円札であった。

「……」

昌江は、だまっただまま天井をみあげている

が、なにか懸命に考えごとをしているらしいのである。

「さ、相談はきまった、と。なにか、いれ物はないかな」

鏡台のわきのプラスチックの洗い桶を手にとり、中のものを出した。

「わしは廊下で待っていよう。わかったな。そら、カネをしまわないとなくなるぞ」

一人でペラペラやると、もう立ちあがっていった。

「待って。困るわ」

追いかけるみたいに言う昌江の声など、耳に入らないという様子だった。

そんなこと、絶対にいやだ、と思いながらも、しかし、今、目のまえにある一万円はちょっとした魅力だった。

ちょっと、目をつぶれば、借金のほうも、待ってもらえる――。

その思いが、けっきょく決心をつけさせたのだろう。

「いやだなあ」

そう胸のなかでくり返しながら、しかし、ベッドのむこうに身を沈めたのは、そのときどうにもがまんがならないほど、トイレへ行きたくなっていたからでもあった。

こんなことになってしまったのには、昌江にも責任はなにもない。

アパートの権利金が足りなくて、どうしようかと思っていたやさき

『あなたの信用でお金を貸します』

しゃれたカードのダイレクトメールを受取り、その貸すという、アサヒ商会へ電話をかけたなら、さっそく社長という中年おとこがやってきて、無条件に、十萬円の現金を用立ててくれた。

月に一万三千円ずつ十回で返済というのは、楽な条件に思えたのだった。

しかし、いざ払いはじめると、それは、けっして思ったほど楽なものでもなくなってきたのである。おまけに昌江のケタ外れの浪費癖のため、ここ三カ月ばかり滞納してしまっていたのだ。

「いいですよ。あなたのことだ、特別、待ってあげます」

居もしない弟を病気といつわって、返済を待ってもらうよう電話したら、社長は、かんとんにOKしてくれた。

「だがねえ。あなたのたのみを聞いてあげるのやから、あんたにも、たのみを聞いてほし

いことがあるのや」

そのたのみというのが、昌江にとっては破天荒に恥ずかしい、いやらしいことなのだったが、よくたしかめもせず、

「ええ、いいです」

と答えたのは、苦しまぎれのためとは言えいささか軽はずみだった。

「べつに難しいことはない。トイレへ行ったとき、水に流してしまわず、コーラのびんにでも集めてくれればよい」

使いみちや理由は、いっさい聞かないで、と前おきしながら電話口のむこうで、一と息に言う社長の声は、まるで、悪魔のそれのようだった。

いくらなんでも、そんなこと、できるものか。絶対にいやだ。

何回も、頑としてことわりつづけてきたがとうとう今日その悪魔に、コーラのびんにとりわけたそれをわたすときがきた。身ぶるいが出た。

「こんなにたくさん。ありがとさん」

廊下に出て待っていた社長に、わたしたびんの中で、コーラに似た、しかし、ほんもののコーラとはまったく異質のそれが、ゆらゆら揺れているのを一と目みたとき、昌江はい

つもの強気にも似ず、全身をまっ赤にしたのだった。

社長は、コーラのびんを拝むみたいにする、と、あともみずに帰っていった。

(2)

サラリーマン金融業アサヒ商會社長という、かっぶくのよい堂々たる壮漢を連想させるが、四十一歳の、その社長、村田留八郎は実は、身のたけ一五〇センチそこそこの、貧弱な小男。でも三千万円の金をためこみ、社員は一人も使わない。独身生活であった。

サラリーマン金融といっても、絶対に男性はおことわり。

もっぱら、バーのホステスや、小料理屋の仲居、喫茶店の女の子といった、いわゆる水商売の女性だけにかぎられていた。

というのは、そうした連中は、ルーズなようでいて案外固く、なによりも、利息を高くとっても細かなことはいわず、回収には、彼にとってまたべつの楽しみがあるからでもあった。

その楽しみとは――

村田留八郎――時代劇の、ご家人か、目明かしの親分のような、りっぱな名前が彼にはあ

る。しかし、フルネームで呼んでくれる客はまずいない。

「ケチトメさん――」

「ガッチリトメさん――」

ならまだしも、人によっては

「シヨントメさん――」

「ウントメさん――」

なんて、わけのわからない呼び方をする女性もある。

「ケチ」や「ガッチリ」は、高利貸しという商売があたりまえとしても、あとの、「シヨン」とか「ウン」とかいうのは、いったいなぜか。

これは、その交渉をうけた客にしか説明のできないことであった。

つまり、時田昌江のように、よく稼ぐせに、すごい浪費家で、年中ピイピイしているような女性で、びっくりするくらい美しく若いひとは、支払いがとどこおると、村田留八郎を、どうしても「シヨントメ」と呼ばざるをえない目に合わされる。

借金を返せない相手のところへ乗りこみ、「トラックで来た。家財道具を預かろう」

村田留八郎は威丈高に開きなめる。

しかし、そのあとが、シヨントメさんの名

をたてまつられるわけになるのだ。

「どうだね。モノは相談だが」

若返りのクスリにするとかで、

「このびんに、ちよっぴりいれてくれたら、

きょうのところはカンベンしよう」

モノは相談というのは、双方にべんりなことはだった。

少々恥ずかしい思いをすれば、表で待機中のトラックは返す。支払いは、都合がつくまで待ってやる。

つまり、時田昌江のように、ベッドのむこうにしゃがんで、コーラのびんに、清らかな音をたて、コーラでないコーラをみたしたようにすれば、本人は満足して、おとなしく帰ってゆく。だからシヨントメさん。

提供者たちは、じぶんのつくった、そのコーラでないコーラが、どう使われるかは知らない。知る必要もないだろう。

だが、まったく価値のないこれが、何枚かの千円札になるのは、それを要求される状態のときの彼女たちにとっては、わるくないことであった。恥ずかしいから、まず口外はしない。

たいがいの女性は、お金とひきかえにピンを引きわたすと、そんなことはそのまま忘れ

てしまう。いや、忘れてしまいたいのだ。

ひとつには、シヨントメが、ぶおとこで、チビで、軽べつすべき相手であったからかもしれない。つき合っただけが軽いのだ。

ことに、ウントメさん、と平気で呼ぶ女性には、この男に、自分は借金をしているなどという重い感情は、みじんも抱かなくなる。相手をブタだと思えば、すむことであった。

(3)

昌江からうけとったコーラのびんを、大切にカバンにおさめて彼女のアパートを出たシヨントメは、それから夕方まで、団地をかけずり廻った。

団地のマダム連中も、アサヒ商会のよいおとくいさまだった。

水商売の連中とちがって、五万だ、八万だと、大きな申込みはしない。せいぜい二万円が限度なのは、サラリーマンの収入からおせば当然だろう。

マダムたちは、電話一本で、かんたんに金を用立ててくれる村田を、調法がった。

ここでも、村田を社長さん、なんて呼ぶマダムはいない。では、なんと呼ぶか、おじさん——。おとうちゃん——。

いささかの軽べつをこめた、愛称だったが団地での村田は一種の便利屋であった。

A棟、二〇三号室の川崎夫人は、まだ新婚三カ月め。主人は自動車のセールスマンということである。

川崎夫人には、特別三万円用立てである。団地夫人には、最高二万円まで、と自からきめたのに、それをまた自分から破ったのはなぜだろうか。

それは川崎ひろ子が、すぐくグラマラスで村田より背丈が二〇センチも高く、力もちで性格があけっぱなしで、新婚早々の、若妻らしい印象が、たっぷりだからである。

月に一回、三千二百円の返済の約束で、きめられた日に出向くと、ひろ子は、「フン！」

と、ハナであしらいながら、素足のおやゆびと人さしゆびに、千円札を三枚はさんでつきつける。村田は玄関に坐らせられていた。

ひろ子に言わせると、高利貸は、人の弱味につけてみ、もうけたいだけもうけて、憎らしいというのだった。

「へえ、二百円たりません」
そういったら、百円玉二個に、きれいなく

ちびるを開き、プツとつばを吐きかけて、だまって村田のさしだした手にのせた。

そのとき、村田は、まるで、じぶんの顔面につばを吐きかけられたかのような、ショックを受けたものだった。

でも、今日のひろ子は珍しくきげんがよくて、物たりないぐらいだった。

「あら、よくきたわ」

キッチンと封筒にいれた五回めの返済金三千二百円をわたされて、村田はめんくらった。

「ねえ。ちょっと、たのまれてくれないかしら」

ひろ子は、首をかしげて、村田の顔をのぞきこむ。

甘ったるい口臭が、かなり強く、そのうえ外人みたいな体臭まで、村田のからだを包み気が遠くなりそうだった。

「捨てるのに困るのよ。どこかへそつと処分してきて」

わたされた、茶いろの書類封筒は、みかけより重く、いやにブヨブヨしている。

「なんですか、いったい、なかみは」

「バカネエ。そんなこと聞くもんじゃないわよ」

ひろ子は、ほほえんだ。

わらうと、よけい美しくなる。村田はゴクリと、つばをのんだ。

「そうだわ。お礼をあげようか」

ひろ子はイタズラっぽくわらい、

「目をつぶって、おくちあけるのよ」

生まあたたかい、ドロリとしたものをおとされて面くらう。

「あたし、カゼひいたのよ。カゼは、他人にうつすと、治りが早いんだってね。あんたにうつしてあげる」

あっと、村田は目をみはった。

大胆にも、ひろ子は、彼の口中に、つばを吐きこんだのだ。

「あたし、知ってるわ。あんたみたいなタイプの男は、こんなことされると、うれしいものなのよ」

ひろ子は、カラカラと笑いとばし、

「さつさと帰ってよ」

ケロリと言うと、

「忘れてたわ。トイレ、トイレ」

村田は、よほど、ねばってやろうかと思っただ。

だが、ひろ子のことだから、おそらく暴力をふるってでも、たのみを聞いてくれようとはしないだろう。でも、その一言は効いた。

よし。

と、村田は思った。きょうは、おとなしく帰る。しかし、なんとか方法を考えて、ひろ子に、うんと言わせてやらなければ気がすまない。玄関の板じきにしばらくつけられたみたいな格好で、ショントメラしく、うめく。
(ちく生。つばきを吞まされたくらいで、満足するオレではないぞ)

新婚早々の若妻が、他人の前で「トイレ、トイレ」と大声あげ、ドアのむこうに飛びこむのは、なにか企みのためだろうか。

ドアの中で、いまひろ子が、どんな姿勢をとっているかは想像できる。

そのとき、たしかに、かすかではあるが、特有の香気が、村田のハナをくすぐった。

なんだか自分が、花園を飛び廻るアブになったみたいで、思わずクンクンと、深呼吸してしまふ。耳をすませば、ひろ子の、あらあらしい息づかいさえするのだった。

なんという女だろう。ダンナの顔がみてみたいな、なんて、脱線してしまふとき、彼は完全に商売を忘れていた。

できれば、スグにでも、ドアの中へ飛び込みたいきもちだった。

ザーッと、はげしい水の音が立ち、スリガ

ラスのドアに、ひろ子の立ったシルエットがうつる。

ガタッと、ドアが開いて、ひろ子が出てきた。

案外、きげんがよかった。

「なんだ。まだ、ぐずぐずしてたの。おバカさんねえ」

近よったひろ子の周辺から、動物じみた、特有の香気がただよう。

ふつうの神経の持主なら、それこそハナをつまんで逃げだすであろう、あの香りが、しかし、「ウントメ」さんと一部の女性から呼ばれる村田のような人間には、ふるいつきたくなるような、芳香とでもいいたいひろ子の生々しい香りであった。

(4)

夕方までに、予定の集金はぜんぶ終わり、その日の入金は一円ものこさず銀行へ預金に回すことにしている村田が、用事を完全に終わってマンションへもどったのは、夜七時すぎのことだった。

「やれやれ、帰ったよ、昌江ちゃんや」
アタッシェケースには、きょう、むりにとりあげた時田昌江のそれが、コーラのびんに

おさめられて、まるで生物のように、ゆらゆら、ゆれている。

独身生活の身軽さに、夕食は外ですませてきたので、あとはなんにもすることがない。

「じゃ、ま、お目にかかるかな」

楽しそうに、かねて用意してある赤児用のほ乳びんに、コーラのなかみを移し、ぬるま湯のオケに漬ける。

人肌に温めるためであった。

こうして、十分間ほどおくと、それは、快い舌ざわりの酒になる。

ベッドに寝そべり、時田昌江の、あのおこったような表情を思いうかべるのは、すばらしいことだった。

「さて、そろそろオツケーだろう」

びんの温かみは、ちょうど、よさそうだ。

「おっ、そうだ。忘れてた」

ひろま、ひろ子から、

「捨てるのに困るのよ。そっと処分してちょうだい」

そっと手渡されたものがあった。急に、それを調べてみたくなったのである。

ケースの底に、それはあった。手にとるとフワリと軽く、ふしぎな、なかみである。

いったい何だろうか。

あの、物事にこだわらない、そのくせ気性のはげしい、ひろ子が、「捨てるのに困るもの」とは、いったいなんだろうか。

嚴重に、十本ものホッチキの針で口を封じた大型の書類封筒は、手ざわりがやわらかでとても軽く、好奇心の人一倍つよい村田のきもちをそそののに、じゅうぶんだった。

だが、いまずぐなかをみてしまうのは惜しまれる。あとのおたのしみにして、まず時田昌江に会うほうが、よさそうだった。

だいいち、せっかくの、人肌のカンがさめてしまうだろう。二度もおカンするのでは、ガス代がもったいないし、だいいち、そのせっかくの味がガタ落ちしてしまう。

思い返して、封筒はテーブルにもどし、もういちどベッドに引っくり返り、赤児のように口をとがらせて、乳首を含む。

それからの三十分間は、彼にとってほんとうに天国であった。

なにをどうしようと、誰からも、軽べつされたり、わらわれたり、文句をつけられるおそれはない。

なにをしようとも、ほ乳びんは、無言であり、従順であった。

村田は、酒は一滴も吞まず、タバコもやら

ない。食べるものにも、別段の好みはない。ただ、それだけが生甲斐。

それでいいじゃないか。ああ、おれはいま時田昌江を自由自在にむさぼっているのだ。

しかも、他人の考えもつかない方法で——という思いが、胸中を熱くさせるのだった。

気がついたら、ほ乳びんはカラになっていた。舌うちして、びんをさかさにする。

名残りおいしいが仕方がない。

いままでの経験でいうと、一回でも村田のたのみを聞きいれた女性なら、それから以後は、もう同じことを求めるのは、赤児の手をひねるより、さらにたやすいことだった。

金をみせ、返済をのばしてやることで、大ていの女性は、けっきょくコーラのびんを満たしてくれる。

もちろん誰だって、そんなことを喜んでやりはしない。

でも、物なれた村田のリードで、いつのまにやら彼のペースにのせられるのだ。

「おれは、金に困る他人を救ってやってるんだ。本来なら価値のないこんなものを、金の代わりにとってやるのは、相手にとってもプラスで、文句を言う筋合いはないだろう」

彼は、自己弁護に、いつもこんなことを、

あたまに描いている。

まあ、いいわ。そのうち、もういちど、昌江のところのりこんで、求めるだけだ。そのときはこのオレは、シヨントメでなくウントメになるのだと、わが心にいいきかせる。

時田昌江なら、相手にとって不足はない。

コーラのほうならともかく、それ以上のものは、よくよく相手が好みに合わないかぎり味わうなどとは、とてもでないが、できることではなかった。

村田は、たったさっき、たっぷり嗅がされたひろ子の芳香を、思いだした。

(そうだなあ、時田昌江や、ひろ子のなら、

無条件で、飛びつくがなあ)

熱っぽく、そんな思いにひたるのは、楽しいことであつた。そこでまた、ひろ子から渡されたものを思いだす。

それでは、封筒のなかみを、拝見するのでしょうか？

テールに、手をのばす。

思いきって、封筒をバリバリと破き、顔のぞかせたビニールの袋をとりだして、開いてみる。

中をひと目のぞいて、あっと、村田は顔色を変え、顔面をこわばらせた。

(5)

押川美代子は、アサヒ商会という、その会社で電話をかけようかどうかとしようかと、二日間も、ためらった。

故郷の母から、家の改築に十万円たりないからと、手紙で泣きつかれていたのである。

出版会社へ入って、まだ二カ月にしかなかった美代子は、前借を申出る自信さえなかったのだ。駅でわたされたチラシの文面の、

「あなたの信用でスグ貸します」

いかにも、話のわかりそうな会社のようにあつた。

高利貸しというイメージが、なにかおそろしくて、かけたくなかった電話だけれど、ほかに、たのむ先もなくて、会社のひる休みに思いきってダイヤルを回した。

十万円の現金が、こんなにもたやすく借りられるとは思いがけないことであつた。

アサヒ商会を呼ぶと、先方は

「ちょっと、資格が問題ですが、ともかく来てください」

指定された時間に出むくと、貧弱な男が出てきた。

社長の肩書のついた名刺をみせられたときは、思わず相手の顔をみつめてしまった。

だが、貧弱な中年おとこだろうがなんだろうが、いまの彼女には、関係のないことだった。

社長は、美代子の勤め先や、金の使いみち住所などを聞くと、

「わかりました。たぶん、お貸しできると思います。あした夕方、印鑑をもってきてください」

と言った。

「よろしく、お願いしますわ」

一礼してもどろろとすると、社長という男は、

「あ、ちょっと」

と、呼びとめた。

「あなた、顔色がさえないね。具合でも悪いのちがうかな」

思い当たることはない。でも、このところ金策にかけずり廻ったので、すこしは疲労しているかもしれない。

「ごらんの通り、ウチは、担保なし。あなたというヒトにお金を貸すのやから、病気ではうまくないのや」

社長は、言う。

「いいえ、健康ですわ。このあいだの入社のとき受けた健康診断もパスしたんです」

「信用できんなあ。会社は、一人でもよけい人がほしいさかい、医師も大目にみるのや。会社の診断だけでは貸せまへんな」

その言いぶんも、もっともだと思った。

「じゃ、だめなんですか」

「いや、そうと決まったわけではおまへん。

ウチでなっとくできればそれでよろし」

やわらかな関西弁で言われると、抵抗なしに、相手の言いぶんが呑みこめた。

「あなたのようなお人なら、できるだけ貸してあげたい。ついては」

嘱託医のもとへ、検尿を依頼するから、これへちょっと採りなさい、とトイレを示されたとき、美代子はためらったが、しかし、なんとか借り出したいという思いが先に立ち、社長のすすめに従ったのだった。

示されたトイレの正面には、なんのためか大型のカガミがはめこまれていた。

その上方に、

「検尿の方は、容器は右すみに置いて出てください」

と貼り札がある。

美代子は、やれやれと思った。事務的に、

そこへ置いてゆけばよいとは、なんと行き届いた配慮だろう。

指図された通りにし、身づくろいして立ち去ろうとしたが、なぜかカウンターに社長のすがたも、事務員のすがたもない。

すがたがないはずだった。

カガミ、つまりマジックミラーのむこうで

村田は、眼を光らせ、美代子の行動を一々のぞいていたのである。

翌日、訪れた美代子は、約束通りの金を手渡されて、ホッとした。

「医師の連絡は、わしの思った通りだった。タンパクが少々出たそうやが、まあ、いいでしょう。よかったね」

社長のことはやさしく、父親のようであった。からだのことまで親身になって気をくばってくれるのなもの。

「こまったことがあったら相談にのろう、いつでもおいで」

と言われて、目がしらを熱くする純情な美代子だった。

村田八郎の、ひろ子に寄せる想いは、つの

る一方であった。

目のまえでトイレへ入り、荒々しい息づかいをきかせたり、芳香をまきちらされたりしたあの日を思うと、もうすこしねばったらあるいは、と思わずにはいられない。それだけではない。人にはみせたくない書類袋を、

「どこかへ捨てて」

とわたされ、その夜、おそろおそろ開いてなかみをのぞいたとき、村田は、ひろ子というおんなの裏側をのぞいた気がした。

「ウチが、使えって命令するのよ」

彼女は、いたずらっぽく言った。

イチジク——ピンクの緩下剤のカラーの容器が一ダースあまり。

「みんな、私が使ったのよ。村田さん、あんな、こういうものの好きでしょ。これから、とっとくわ」

と手わたされたそのときから、村田は、ひろ子の忠実な下僕となった。

（おれは、ひろ子という女王さまから信頼された。だから、あんなものまで預けられたのだ——）

という思いは、村田を熱くさせるのにじゅうぶんであった。

あれいらい、貸した元金はもとより、利息

だって、ビタ一文、請求していない。

熱心に訪問だけは、つづけているが、それはただ、ひろ子の顔を、おがむためだった。

顔をみれば、ひろ子は、

「アラ、いいところ来たわ」

歓迎するが、山とたまった用事を押しつけるのだ。

ケイ光灯を直してとか、たまったせんたくをたのむわとか、押し入れの清掃、夫婦のクツの手入れとか、およそ下僕以下の仕事ばかり。トイレの掃除も彼の仕事にきめられた。

「あたしが、たったいま、使ったトイレなのよ。念入りにやってよね」

白い陶器のふちに、あずき粒くらいの大きさのものがこびりついていたのを示されたとき、村田は、ひろ子が、なにを企んでいるのか、わかったような気がした。

「あたし、イチジク使いすぎちゃって、そこ汚しちゃった。主人に叱られるわ、念入りに清めてちょうだいね」

いたずらっぽく命ぜられ、ひろ子が、居間でテレビを楽しんでいるとき、そっとそのこびりつけられたあずき粒にくちびるを寄せたときは、戦慄が身内を走る思いであった。

だが、そのとき居間でテレビをみるフリを

しながら、ひろ子がテーブルの上に置いた村田のアタッシュケースから、ひろ子名義の借用証書と、ついでに貸出先の住所、氏名、ある種の記号までギッシリ記入した一冊のノートを、抜いたことは判らなかった。

「また、おなかが痛むの」

ほろにがいあずき粒に呆然としている村田の肩をまたぐように、せまい空間へ割りこんできたひろ子は、まるで彼を無視するかのように、せっかく磨きあげた陶器を、無残に汚し、水も流さない。

そうして、あざわらうように、

「あんな。こんなに汚れたのを掃除するの、趣味なんだろう。そうだわ、雑布なんか使うのもったいないわ。アタマを使うのよ」

それだけを早口に言うとき、水も流さずに、足音を高くして出ていった。

村田はただ無表情に、そうしたひろ子を見送り、忠実に命令を守るかのように、もういちど深々と、陶器に顔を近づけるのだった。

(7)

時田昌江と、押川美代子が、面識もない川崎ひろ子の家に顔をそろえたのは、それから一週間ほどのちの、川崎ひろ子の主人が、長

期出張で九州へ発った、土曜日の午後のことであった。

昌江も美代子も、とつぜんの電話に面くらったが、ひろ子の

「アサヒ商会のことで」

という前おきに、ひろ子の家へ訪れること承諾したのは、

「あなたの借用証書を返したいから」

という殺し文句が利いたためであった。

あの日、村田のアタッシュケースから、なにげなく抜いたノートに、昌江と美代子の借用証書が、はさまれていたのである。

そして、ノートのメモ欄に、この二人だけに三重丸がつけられてあるのが気になった。

というのは、調べてみたら「川崎ひろ子」の頭のところにも、赤く三重丸がつけられていたから、よけい興味を抱いたのである。

およそ一二〇人を越す女性の名と、住所、電話番号の表のなかに、自分たち三人だけが三重の丸。

よく調べたら、ほかに、二重丸をつけられた女性が八人と、一重丸が十二人。

けっきょく、自分を含めて二十三名の女性に、赤い丸がついているのが、気になって仕方がない。

とりあえず、三重丸の二人に会って、何かナゾを解いてみたい。

好奇心のはげしいひろ子は、主人の出張したあとの、ひまつぶしをかねて、未知の二人に動員をかけたのだった。

「あんな、妙なことをせがむおやじ、みたことないわ」

昌江は、得意そうに言った。

うれしそうに、半分ほどいれてやったコーラのびんを、ケースにおさめて帰っていった村田の顔が目に見えかぶ。

それも、いちど、たのみをきいてやったらあと五回も来ている。やはり、あたしに魅力があるからだろう、と、昌江は、口にこそださないが、そう思いこんでいる。

「あのひとつたら、こんなことたのむのは、この世でお前一人なんだ。なんてナミダを流さんばかりなのよ」

「あら、そのことば、あたしにも言いましたわ」

押川美代子が、昌江のしゃべるのを、さえずるように口をだした。

「おたくでは、それだけなんですの。あのひと、あたしには、食べさせて、なんてまで言

いましたのよ」

おんな心ほど、デリケートなものはない。

ふだんなら、口がくさっても、吞ませたとか、食べさせたなんて話はできるものではないだろうに、いざこうやって、話し合ってみると、われこそは、村田を夢中にさせたと、自慢話はエスカレートして、止まるところがない。

「わかりましたわ。聞けば聞くほど、村田というのは、手のつけられない人のようね」

川崎ひろ子は、二人の激論を押しとどめるように言った。

じつは、二人にきてもらったのは、そんな手柄ばなしを、披露してもらうためではなかったのだ。

「あのね、折り入った相談があるのよ」

ひろ子は、声を低めた。

ついこのあいだ、いつものようにやってきた村田を、例のように徹底的にはずかしめてやろうと思い、わざと、トイレへのお供を命じた。

そのせまい空間の密室では、二人は完全に女王さまと、ドレイであった――。

「あいにく、ペーパーがきれていたんです。そうしたら村田のやつ、どうしたとお思いに

なってる？」

村田もひろ子も、ポケットには、一枚のはなみすら持ってなかった。

でもドレイは、女王さまのためには、身を投げださなければならぬ義務がある。どんなにきついことにも、喜々として従わねばならない。ついに、絶対の境地に追いこまれた村田は、身をふるわせ、ひろ子の無言の命令に屈伏したというのである。

「でもそのあと、あのひとは言ったわ。おくさん、こんなことはしてあげたけど、これは私の趣味なんだ。こうみえても、私には三千万円の財産がある。失敬だがご主人より金もちだと思う。その私が、こうやっておくさんのために奉仕するのは、私の趣味のためなんだ。私は、おくさんに魅せられた。おくさんのためなら、どんなことでもする、って」

ひろ子は、自分こそ、二人より上なのよと言いたげに言った。

「誤解しないでちょうだい。昌江さんと、美代子さんに来てもらったのは、自慢ばなしを聞いてもらうためではなかったのよ」

ひろ子は、反感をおもてにあらわしはじめた二人に、あわてて介解するように言い足した。

「三千万円の財産と聞いたとき、私の心はきまったわ。なんとか村田の好みを利用して、それを巻き上げようと思ったの。だけど、仲々難かしいと、さとったのよ」

かりにも結婚している身である。主人とは絶対に別れる気はない。いくら村田にそうした好みがあったにせよ、三千万円の金を巻き上げるのには、自分一人の魅力だけにたよるのは、いささか無理がある――。

「それで、あなたたちとタイアップすることを考えたのよ。どうかしら。三人よれば絶対だと思うわ。あのじいさん、強欲だから、マルマル三千万は無理だろうけど、一千万円くらい、とりあげて、一人三百万円ずつ山わけるのは可能性があると思うのだけど」

(8)

昌江も美代子も、異存があるわけがない。

昌江はともかく、世間しらずの美代子が、その後も何回かコーラを求められ、社長の、いや、ショントメの、しつこさにあきれるとともに、世間を知り、そんなことに興味をもつおんなの一人に、変わってしまったのだった。

「賛成だわ。一対一じゃこわいけど、三対一

なら、絶対よ。あのじい、思いきりこらしめてやらなくちゃ」

美代子のことには、はじめておずおずとアサヒ商会へやってきたときの、花も恥じらうという形容のぴったりくるおもかげは、みじんもなくなっていた。

「で、どうやって巻きあげるのよ」

昌江も、村田の被害者の一人といえるだろう。

「まかしといて。おぜん立ては、もうできているのよ。もうじき、おやじがここへ来るのよ。あ、いっときますが、目的成功まで、いっさい、私の指揮に従っていただくわ」

「いいわよ。あなたが、リーダーなんだもの異存ないわ」

美代子が言った。

「あたしが、オーケーするまで、みんなトイレへは行かないこと」

「ははん、わかった。その作戦でゆくからね」昌江が、カンのよいところをみせ、三人は思わず笑声をたてたところへ、来客を知らせるブザーが、三回、とぎれては鳴った。

「ショントメだわ」

そのブザーの鳴り方で、ひろ子には、ききわけられるのであろう。

(9)

「パーティをやるから、おなかを空かせてきてもらおうわ」

ひろ子のさそいの電話に、村田はワクワクしながら、指定された時刻に、やってきた。

だが、パーティはパーティでも、ニヤニヤしながら待つ客が、思いがけない二人の女性であったことを知って、棒立ちになった。

「さわぐことはないわ。シヨントメさん」

それは、およそ珍妙なパーティであった。

三人の女性は、ゆっくりチェアに腰をおろ

し、一人だけ加わった男性の客は、そのうつくしい足のまん中に土下座させられている。のみのものも、食べものも、男性だけは、卓上のデラックスなオードブルや、ワインや、サンドイッチにくらべたら、およそ人間の口には入れかねるしろものが、つぎつぎに、食器に投げこまれる仕掛けになっていた。

「ほんじゃま、ここらで、ウントメさんになってもらおうかしら」

ひろ子は、浮々とテーブルの下に声をかけた。トイレへお供させようと、村田のせなか

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム(筆名)を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能の絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に対しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

をスリッパをはいた足でける。それには、魔力があると、ひろ子はかたく信じている。

たっぷり与えて、催眠術にかけたみたいを意識をモウロウとさせ、金額を記入しない小切手用紙に、村田にサインさせ、実印を捺させた。勝負は勝ちだ。

その金額欄に、勝手に¥10,000、000と記入して、銀行へ持ってゆき、現金化したら村田はどんな顔をするだろう。

でも、かまやしない。どうせ、弱いびんぼう人に、高利で金を貸して、あくどいもうけをした金だもの。全額をいただくわけじゃない三分の一なら命取りにやなるまい。

三人の美女にとり囲まれ、存分になぶられて、半死半生の、ウントメの顔をおろしながら、ひろ子は、そう思うのだった。

「シヨントメさん。こんどは、あたしの番」ブランドーに酔った昌江は、足もともあぶなく、村田のあたまを力いっぱい、けた。

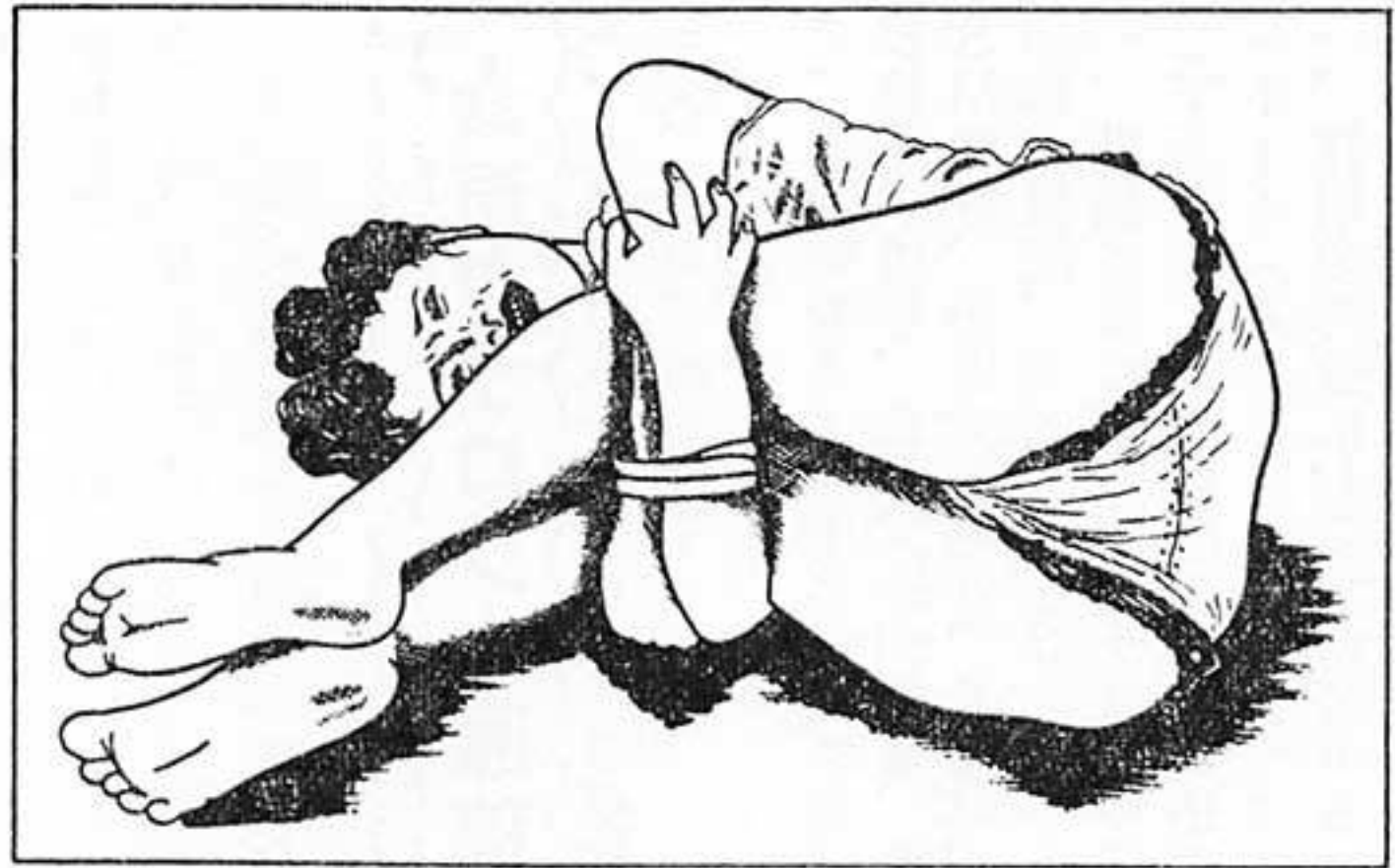
「あら、ずるいわ。あたしよ、つぎは」

美代子も、たまらなく愉快なのだ。

村田は、あっちでけられ、こっちでふまれサッカーボールのようにころがりながら、とろけそうな表情で、荒波にあえぐのだった。

(おわり)

カッ ト・柏木真佐男



第一景 血 判

思い直してみるに、私は仕事に勤勉、かつ誠実で、あまりに日々忙しく、その多忙さの中に己れを愚かしい程まで見失い続けてきたようである。繰り返されることのない私の人生の炎は徒らに浪費されたといっても決して

創 作

の び 歎

館 育 の

仙 光 宇

過言ではないであろう。

しかも耐えがたいことには、少し目をこらしてみただけで、いかに一流会社の課長の椅子といえども結局はすべてがすべて個性を消滅して、数学的に人類を構成する以外の何物でもなく、いわば空しい泡沫にすぎないということに気づくことである。自分がいやになり、と同時に美德に徹し、清らかな心で慎ま

しく息づくことが、いかに嘆かわしく無為であるかを知ったといったら、些か大袈裟というものであろうか。

ここで私の脳裏をかすめるものがある。それは数分と経ぬ間に形を整え、その全貌を明らかにする。黒死病が蔓延した一三四八年から四九年のヨーロッパが開ける。そのことを手掛かりに人口の三分の一が消滅したことをまず思い出さずにはいられなくなる。さらには幾枚かの絵を描かずにいられなくなる。その時代に生きた人々は死神にまといつかれる己れを日々恐れ、殷々と響きわたる弔鐘には耳を塞ぎ込む。肩を丸め死神に認められまいとする。しかし、願いは、かなえられはしない。死神の目は実に鋭く確かである。突如、歴史家が登場する。そして彼らが背筋に死を意識することによって、真の人間の生き方を真剣に考え抜きながらも解答を得ることができないうちに、ついには生きている瞬間に楽しく酔いしれたということを淡々と語り終える。次いで画家ジャン・フーケが登場する。彼は一枚の絵をかかげる。その絵から私は、『処女マリア』の、かつては扁平な乳房が今や豊かに隆起し、その容姿は艶かしく官能的でさえあることを発見する。

しかし、その時に至って私は、

「いかがなさいますか」

という不意の声に、現実の世界まで浮上せざるをえない窮地に追い込まれる。

「時の流れは早く、もうかれこれ、一時間となりました」私は「きつ」と目を見開いてテーブルの向こうの青年を見つめる。青年は相

変わらず笑み一つ見せない冷やかな表情である。彼はタバコの煙を口から勢いよく吹き出させた。煙は私の鼻をくすぐる。

私は迷う。私は迷っている。でも、その迷いに早く結着をつけることを青年から求められ、催促されている。落ち着きが消えうせ、あせりが顔を出す。

私は気を鎮めるために、ふたたびテーブルの上のアルバムを手にした。ページを重い手つきでめくる。ためらいが走る。

——やはり、断わろう。

という考えが大勢を占める。アルバムに見る大型カラー写真は、主として全裸の女性が緊縛されているものであった。

青年の言葉によるなら、私の見るそれらの写真は、青年自身が主であるところの『飲びの育つ館』の紹介カタログに匹敵する性格を帯びたものである。ところが私の最良のない

目で見る限り、『飲びの育つ館』は女性の肉体、とりわけ『神秘の虹』を、くどい位に責めたてる調教師のたむろする所にすぎない。

青年が今、私に求めている答とは、その館に外ならぬ私の妻を『留学』させるかどうかについての返事である。

といっても、これは私が考え出し、言い出したことである。私は、この青年と非常にまどろっこしい手続きの後に会ったのであるが私が期待した館と現実の館との間には、大きな差違のあることを指摘せざるをえない。第一に、一体どこに自分の妻を他の男に弄ばせることに眉をひそめぬ男がどうか。私の希望は単に、寝室においてまで上品をつくりたい夫なる私が少しでも動物的な行為でもしようものなら、

「あなたって、見そこなったわ」

と吐き捨てる、その口を封じることにあるにすぎない。

私は先に申し上げた通り、自分自身を取り戻したいと、切々と、願っている三十男である。少なくとも寝室においては自分自身、自由にくまいたいと願うのが『貪欲な奴』と憐れむべきことであろうか。

私は最初の内、妻が本心から、そのような

ことをいつているのではなからうと思っていた。じきに私を受け入れてくれるものと信じていた。ところが拒絶は日増しにつり、その理由から私の内に積るストレスは、すでに堪忍の域を越えていた。あまりに執拗な拒絶ゆえに、

——これは本心からの拒絶である。

と、さめざめとした気分で滅入らずにはいられなかった。

私が以前、関係を持っていた女友だちをくどき落とし、ふたたびホテル通いを始めたのは、そんな理由からである。といっても、そのようなことは何かしら後ろ髪を引かれる思いがしないでもなかった。

——どうなってもいいや。

と捨て鉢な感情をなだめる、もう一人の私が内に共存していたのである。

今日、このように青年に会ったのは、そのような事情あってである。私に青年を紹介したのは女友だちであって、青年の肩書は著述業と結婚カウンセラーとなっていた。でもアルバムを一ページめくっただけで、大変なシロモノだと溜め息をついてしまった。しかしそのように美徳家めいたことを呟いてみながら、その唇のまだ乾かぬ内に、本来偽ること

の得意でない私は今、自身の中に、いくつかの感情の変化が生じ出していることを、知らずに済ますわけにはいかない。

——いっそ、妻をこの青年の手ぐめに合わせ汚されるだけ汚がしてしまおうか。

という考えが顔を覗かせ出している。夫と妻の関わり合いとは何であろうか。夫がそうあるように、妻とでも、夫という一個の男性との性的な関わり合いに、

「わたしのあなた」

「わたしのわたし」

と真に充足するものであろうか。女とて、機会さえあるなら他の男とベッドを共にしたいという芽を、心の内に潜在させているのではないだろうか。それではお互いが道徳とか道義とかのハメをはずして、考えられる最大限自由にふるまい、その後にお互いが出会い見つめ合ったら、どうであらうか。

むしろ、そのようにして再会した時に、初めて『愛』と呼ばれる深い絆が生まれるものでないだろうか。

「失礼ながら、あなたは決断力に乏しいお方のようですね」

と青年は目を据えたまま、口だけを動かしていった。

——その通りである。

と、私は青年の言葉に痛みを感じた。私はどうしたとか、仕事においては水を得た魚のように頭が冴えるのであるが、こと人間と人間との関わり合いのこととなると、信じられない位に迷いためらい、相手を恐らく傷つけてしまう。

私は妻と結婚する時、過去においてそのような失敗を積み重ねていたので最初から『気に入った』『好きだ』『愛している』『結婚して下さい』『幸せにしてみせます』という単語以外は一切、使用しないことにしたのである。その結果が、このザマである。

「アルバムを、お返しいただきましょう」

と青年は、

——もう、待てません。

といわんばかりに右手を差しのべてきた。

私は、

——ああ、そうだ。返さなくては。

と、うつろに眩きながらその厚いアルバムを閉じた。しかし、その閉じた時の「パシィーン」という紙の音の響きに、私の考えは急に高まり、思わずアルバムを両手で強くかえてしまった。私は、

——どうしたのだろう。

という不思議そうな顔の青年に向かって、

「その前に、一つお聞きいただきたい」

といって、その右手を引っ込めさせざま、

「是非とも、妻を『留学』させたい」

といってしまったのであった。

青年は相変わらず私を見入ったまま、口を開こうとしなかった。そのことによって私はバツの悪さを覚えた。だから私はアルバムを青年の方に押しやった。どうしたとか恥ずかしかった。青年は私のそのような動揺を、しばらくの間、具に観察し終えてから、

「もう一度、お話していただけませんか。奥様を『留学』なさると、ぼくには聞かえましたが、聞き間違いではないという確認をとりたいのです」

といった。

私は実際のことをいって言葉につまった。

「そうですか」と切り出そうか。それでは、あまりに、大人気ないではないか。じゃ「ええ何度でも」と切り出そうか。これも、まずい。そんな風に、くだらないことにまごまごして返答につまっていると、

「確かにアルバムをお返しいただきました。」

これで失礼させていただきま

と、青年は椅子を立った。私は頭に血がの

ぼるのを押さえることができずに、馬鹿でかい声で、

「是非とも、妻を『留学』させたい」

と青年にいった。すると青年は意外そうな顔で私を見入り、

「そうですか」

と、そっけなく答えたきりであった。私は青年が話に乗り気でないことを見抜いた。だから青年が断わってくることを恐れた。ところが、そのことは取越し苦勞に終わった。

「それでは今夜十二時に、お宅までお迎えにまいります。奥様に、この薬を内服させておいて下さい。深い眠りの中にいることを信じています」

と、青年は私に、市販されている睡眠薬を手渡した。

「はい」

と私は、学校長を前にした小使いのようにかしこまった。しかし、そのことにも青年は微笑一つしなかった。

「血判でもって、以上のことに署名していただきたい」

と青年は皮の鞆の中から一枚の羊皮紙を取り出し、テーブルの上に置いた。そこに印刷されてある文章は、英語でも仏語でも、また

露語でもなく、ラテン語のようなものであった。

青年は、さらにナイフを取り出して、私の手のひらに乗せた。私は青年の望み通りの個所に血判を押した。すると青年は、その個所を目を皿のようにして確かめてから、深々と私に一礼をして、

「毎度ありがとうございます」といった。

第二景 毒 味

約束通りのすべての手筈を済ませて、時計が十二時をさすのを待った。

青年は時刻かっきりに玄関のチャイムを鳴らし、助手と称する一人の少女と、さらに驚いたことに、私の女友だちを従えて乗り込んできた。

「奥様をお引き取りにまいりました」

と青年は事務的にいった。

青年の服装は、全身を黒い衣装で包むものであった。少女の方は袖なしのセーターにミニ・スカートであった。私の女友だちは、いつもの古風で厚ぼったい服装であった。その女友だちの服装は、青年と彼の助手とは異質

であることを告げ、私に一種の安息をもたらしてくれた。

なぜなら女友だちが、まさか青年と一緒に乗り込んでくるとは夢にも思わなかったことである。そのことから一瞬ではあるが、私の女であるはずの彼女は、実のところ青年とグルの仲間、あるいは思い者であるのではないかという心配をしたというのが本当のところである。しかしながら、この私の心配は、すぐに単なる心配には止まらなかったのであるが……。

「お待ち申しておりました」

と私は一行を寢室に招き入れた。

妻はベッドの中である。妻は今、自分の身の上で何事が忍び寄りつつあり、何事が起りつつあるか、少しとして知るよしかなかった。妻は下着をつけ、緋色のネグリジェをはおり、羽根布団に埋もれている。妻の上には薄手の掛け布団がある。

青年が妻を、いわゆる『欲びの育つ館』に運んで行くことから、あるいは、そのようなことは青年に手間どらせることかとも考えられたが、だからといって、妻を生まれたままの姿にして待つことは、なぜかしら心が許さなかった。

なるほど私は、妻との間にかれこれ四カ月程も語らいの機会を持っていなかった。そのことから妻に対する性的独占欲を欠いていたのは確かであって、第三者の眼前に全裸で晒し物にすることなどは、どうということもないはずであった。しかしながら現実には、私の手は心と同様に迷いあげき、結果的には、妻を着衣のままに放置してしまったのであった。

「この方が奥様でございますか」

と青年は例によって無表情な口調で尋ねてきた。私は、すかさず、

「はい。私の家内です」

と答えた。

「ところで」

と青年は、念を押すように私を見入りながら、さらに尋ねてきた。

「今でも血判を押した決意は、ゆるぎはしていませんでしょうね」

「勿論です」

と私は多少の見栄もあったかと思うが、自分でも驚く程、明快に答えた。

「血判は羊皮紙に浸み込み、今が一番鮮かさを増しているはずです」

「心強い。黄金にもまさる嬉しさです」

と青年は初めて少しだけ口元に笑みを浮かべた。その時に助手の少女が青年をうながすように、

「お時間がございません」

といった。すると青年は少女に軽くうなずいて、

「それでは手続きを始めよう」

と独り言を呟きながら、私の方に向き返った。私はその時に、背筋に冷たいものが走るのを感じた。

——いや。そんなことは、まずありえない。

と心の中で否定してみても動揺は少しとして鎮まらなかった。

「どうかなさいましたか」

と私は、おどおどした自分をひた隠しにしながら青年に尋ねた。

「当館にお受けいたしますには、衣装は一切着けないお姿でなくてはなりません。さらに規約によれば、そのようにするためにぼくたちは、どんな小さなこと一つに対しても手を貸してはならないことになっているのです」

と青年は一本調子でいった。私は、——やはり、きたな。

と思わずにいらなかった。それでも、そんな心の内を見られまいと平静を装い、胸を

張った。

「私が家内から、衣装を剥ぎ取ればよろしいのですね」

と尋ねた。すると青年は、

「左様でございます。他に申し添えることはございません」

と、必要以上に丁重に頭を下げた。

私は布団を剥ぎ取ることからパンティを引きおろすまで、黙々と人形を裸にでもするような手つきでなしとげた。私はそのような作業を続けながら、同じく第三者の目に妻の裸身を晒すにしても、すんなりと晒す以上に、そのことが快感をくすぐることに気づいた。そして、さらには青年がそのことを見抜いての上であることにも気づいた。

「お手数をわずらわせまして、大変に恐縮でございます」

と青年は、私に早くベッドの上から降りることを催促でもするかのようにいつてきた。

「これで手続きは、はかどることになった」

私がベッドから降りるなり、青年の口調は一人よがりの私に対する気使いを欠いた荒々しいものとなった。青年はベッドの上に足を踏み込み、妻の足元に膝立ちになった。するとベッドの横の助手の少女は妻の左足首を持

って横にずらしておいて、今度は反対側に回って右足首を持ちあげ、妻の脇腹の側で立ち止まった。

私は戸惑った。さらにここで戸惑わずにいられないことは、女友だちも少女も、そして青年もそのような通常の者にとってはこの上なく煽情性の強い光景に、全く冷やかであるということである。青年は、冬の日に蒸気で曇ったガラスをぬぐうかのようにふるまい始めた。

私は快楽を覚えた。これまで妻をかくも明らかにしたことはなかった。見慣れたはずの妻を、初めて見る女性のように、目を見張った。

妻の肌は、ねっとりとした粘性をみなぎらせながら、身体の隅から隅まで雪よりも白いスベスベと光輝く艶やかさを放っていた。肩先や両腕のあたりのしなやかさに比較し、不均衡な程に豊かに盛り上がった胸のふくらみは完全な半球型に盛り上がり、その形よさはまさに画家ジャン・フーケの描く「処女マリア」にふさわしいものであった。生睡を飲み込まれる妖艶さをつめ込み、ムツと張りつめた肉の緊まり。見るからに慕情をそそり立てる。私は宝を人手に渡すかのような、いら

立ちを覚えた。

「助手よ、『査察』だ」と青年が叫んだ。

すると、煙でも見ているように、じっと眺めていた私の女友だちが、さっと青年に近づいた。そして彼女は青年のタイトの、それは中世の騎士たちのような作りを応用したものであったが、布切れに手をかけた。布切れはホック止めになっていて、難なく取りはずされた。

「査察」は十分間は続き、その間、私を含めた他の三人は石像のように身動き一つしなかった。しかし、ここで私は、女友だちが青年とすでに通じていたことを否定することはできない事柄を見たのである。

悪徳にふさわしい世界が寝室に展けた。仰天すべきことに、私は、自分自身にも青年の立場にありつきたいと願う心のあること、を否定することができなかった。

「査察」を無事、切り抜けた妻は右手首と右足首、左手首と左足首とを各々鎖でくくりつけられていた。そして、そのまま青年と少女によって運搬されて行ったのである。

私は放心状態でベッドに横たわった。女友だちが、そんな私を見つめていた。だが彼女

は何を思ったのか、さっさと衣服を脱ぎ捨て先程まで妻が眠っていたと同じ個所に横たわった。

「あなたも『査察』をなさったら」

と女友だちは誘った。私は憤然とした気分です、そのことを無視した。しかし彼女は、さらに、

「あなたは新しいあなたであるし、わたしも新しいわたしであるわ。あなたは『査察』をなさることによって、新しいわたしとあなたを発見することになるわ」

と言葉を続けた。

私は怒りにも似た激情を得て起き上がりざまに、女友だちの左足を横に開き、右足首を左手で持ちあげた。そのことが青年が、ついさっき妻に対していたのと殆ど同様であったことに気づいたのは、『査察』が終わった時であった。

第三景 招 聘

妻を館へ送り出してからの私は妙に落ち着きを欠いていた。

ところが第三日目の朝、その日は祝日であったのであるが、私は朝の早くに、このとこ

る泊り込んでいる女友だちによってゆすり起こされた。電話の相手は館の主なる青年であった。いや、もはや青年などという言葉は、事情を正確に伝えることはできない。この際調教師と呼ぼう。電話の向こうの調教師は、今日の午後に、これまでの成果の報告もかねて招聘したいという内容のことを述べた。私は、すぐさま同意の返事をした。

女友だちは九時頃に、そそくさと出発して行った。私が、調教師の命を受けてやってきたズベ公的女たち三人の迎えを受けたのは、十一時頃であった。

私は玄関から目隠しを受け、女二人に腕をとられるように車に乗り、そして館へと向かったのであった。ところが車が疾走し始めて間もなく、私は不思議なカー・テープを聞かされた。それは車の道順をカモフラージュする意味も含まれていたが、じきに、単にそのことのみでないことが理解できた。というのは、私はそこから妻の声を聞きわけたのである。

テープは最初、

「何よ、お上品ぶって」

という女性の声から何気なく始まった。誰かに平手打を浴びせているらしく、頬を打つ

「パシーンパシーン」という響きが続いた。しかし、その後に座は少し混乱したものの、その中から私は妻の声を聞き取った。いや、聞き取らされたのであった。

「よして下さい」「わたしをどうなさろうとするのですか」「それでもあなた方は人間ですか」

などと妻は叫んでいた。妻は、いわば一方的に攻撃の標的となっていたらしかった。その内に一人の女性が、この女性は調教師の助手の少女の声に似ているのであるが、妻に自分たちの側に腰をおろすことをうながしたらしい。その女性はさらに、

「これから、あなたが昨日わたしのために色々と作業して骨折って下さった場面が、テレビの絵になるのよ。この方たち、そのことを教えて欲しいんですって。ですから微に入り細に亘り説明してあげて下さいな」といった。

すると座にどっという笑いが起こった。私はくらくらするような官能を覚えずにはいられなかった。

座の者は矢継ぎ早に妻に質問を浴びせ出した。私はその質問の内容から、妻が助手の少女からレスビアンの手ほどきを受けているら

しいことと、さらにはテレビの絵が、妻をクローズ・アップしていることを、容易に知ることができた。

実質はどうあったにせよ、私の妻が晒し物になっている。そのことは、露出症的要因などは私の内に全くなかったと思っていた信念を、もろくも覆すのに充分すぎる力を持っていた。

私は調教師に、館への「留学」に同意した時を始めとして、愛する者を本来なら手とり足とりいたわるべきところを、もっともすげなく突っぱね、第三者の手にゆだね、汚されることを期待していたのではあるまいか。そのことによって、自分が妻を愛していることの自覚を高め、妻への愛を大らかに育てあげることが目論んでいたのではあるまいか。

車は依然として疾走している。テープは、「あれー」とか、「まあー」とか、あるいは「よっ、よっよ」という、からかいの女たちの言葉を私に伝えてくる。

私は間もなく、その妻を見ることになるのだ。わずか三日間、会っていないきりであるが、一年も会わずにいるような気がしてならない。

テープは一時間も続いたろうか。話題はテ

レビから妻の身体に移っていた。そして、さらには妻は組み伏せられたようであった。そのような争いが十分程続いてから、助手の少女の、

「奴隷めの両肢を左右に引いて」

と命令するような声が響いた。すると座はどよめき立ち、すぐに、

「待ってました」

「いい調子」

「そら、虹がかかった」

という黄色い声が続いた。女たちのクスクス笑いが続いて、私は臓物を晒しているがごくくであらう妻を想像した。

「さあ、わたしの奴隷。わたしを迎えることに感謝をこめて下さるのよ」

という助手のささやくような声がした。妻の激しい息使いが聞こえた。

「わたしは、マニキュアされた細い爪先を束ねた。これは、あなたを切り裂くヒ口となるのです。さあ、あなた自身の手でこのヒ口を掲げるのです」

という助手の声がさらに続き、やがて、

「奴隷よ。わたしは今、一步を踏み出した」

と結んだ。妻の息使いは一層荒くなり、それは悶えとも呻きとも区別のつかないもので

あった。そこでテープは切れた。

車は、なおも疾走している。一体どこであろうか。でも車の揺れから考えるなら、山道であることは予想できた。私を左右からかかえるように坐った女たちは、何一つ口をきかない。私は、ぐったりとシートに身体をもたせる。私は疲れていた……。

ブレーキが踏まれ、車はあわただしく停車した。私は二人の女たちに腕をとられて車を降りた。石畳の上を踏んだ。そして玄関に入った。さらには廊下を通った。私は一つの部屋の中に招かれたのであった。私は、そこで目隠しを取り除かれた。

私を案内してきた女たち三人は丁重に辞して去った。

しかし、その内の一人が間もなくコーヒーを入れてやってきた。部屋の四方はクリーム色の壁で、明りはシャンデリアにたより、小テーブルといい、長椅子といい、非常に金銭を注ぎ込んだということを見せて、一種の夢心地にいざなうものであった。しかしながらここで私が目のやり場に困ったことには、コーヒーを入れてきてくれた接待嬢は、まだ二十歳に満たない少女であったが、その衣装と

が、衣装とは名ばかりで、ないに等しいものであった。私は生唾を飲み込むのにも気使いつとめて平静を装い、彼女にお礼をいってからカップを手にした。

私はカップを空にした時には落ち着いていた。そしてそのような通常の世界では考えられないことがらになじみ出し、ついには、どんなことにもビクともしないという自信を深めるに至った。

私は、やがて例の助手に招かれて調教室へと導かれた。助手は高いハイヒールをはき、クリーム色の袖なしのセーターを身につけているだけであったが、私はモディリアーニの裸婦を見ているような気分であることによつて、簡単に切り抜けることができた。

助手は窓の全くない廊下を導き、一つの部屋の前で立ち止まった。助手はドアをノックした。そして少し間を置いてドアを開いた。

「神崎さまが、ご到着でございます」

と助手は部屋の中に告げた。

この部屋の中に妻がいるのである。妻は調教師によって、爪先のヒ口で痛めつけられているかも知れない。しかし私はそのことにビクともしないはずであった。貞操とか純潔とかいう表面的な人間の関わり合いなどにも、

もはや私の関心はなかった。私はそのことによつて、むしろ益々妻を愛するであろう。二度と長く夫婦生活を閉ざさざるをえない窮地に追い込まれることはないであろう。私の脳裏にこの二日間、寝食を共にした女友だちが借してくれたアルバムの一ページ、一ページが走馬灯のように見え隠れする。そのアルバムは主として彼女自身が緊縛されている写真によつて構成されていたが、彼女は、

「これが開脚、股間縛り」

「これが逆エビ責め」

「これが滑車逆吊り」

と順次、説明してくれたものであった。写真はさらに続き、他のモデルが登場した。まだ十七、八と思えるモデルがまたがっているオートバイのサドルが男性の胸の形であったり、寝そべっている寝椅子が男性の背中のようにであったりした。さらには乗っているブラソコが男性の首であったり、女友だちにいわせれば、

『非常に清らかで美しいヴィナスの姿を描写した傑作』

ばかりであった。女友だちは、さらに新しいアルバムを見せてくれた。それは腰かけているバーのストールが、男性の口を模したも

のであった。またこれは私自身思わず鼻を押さえずにいられなかったほどの生々しいものであったが、ハイヒールにミニ・スカートの女性が中腰になっていて、カーペットの上に寝そべった男性の胸をまたいでいる写真もあった。他の写真群は、きらびやかな夜会服に身を包んだ女性が、すそをたくしあげて、洋風フロアーに寝そべった男性の上にしゃがんでいるものであった。

妻が、そのようなあくことのない快楽の世界で苦悶していることに間違いはなかった。それゆえに、妻へのいとおしさがつのる。でももうすぐに、その妻を、眼前にするのである。身震いするような快感に私の五体には、かつてなかった位に若々しい血潮がみなぎり満ちる。妻がこの壁の向こうにいる。新しい私は、同様に新しい妻を目にすることになるのである。

ところが唐突に部屋の中から、大きな声で調教師の叫び声が聞こえてきた。そのことによつて、私は大いに落胆しなくてはならなかった。

「待て」

と調教師は叫んだのであった。「時が悪い。いま時計は調教師たちの昼寝時

を示してしまった」

助手はくるりと向きを変えて私を見つめ、丁重に今の調教師の言葉を私に伝えた。私は妻と壁一つ隔てて、再会の機会を今少し後にすることを強いられたのであった。助手は私を先程の部屋に案内し、そのことによつて私を、ていよく、ふったのであった。

第四景 面 会

私は一人椅子に凭れ、目を閉じ、心を鎮めて、調教師たちの昼寝時という長くのろまな時間の過ぎ去るのを待ち続ける決意をした。ところが、どんな計画の変更があったのか、じきに例のセパレートの水着にも似た衣装を着けた若い接待嬢が部屋にやってきて、私にすべての衣服を脱ぎ捨てることを求めたのであった。私は戸惑いながらも、ここに至って見苦しい様をしてはという気がねから、彼女の求めるままに従った。「そちらの椅子につかれて、向こうの壁にご注目下さい」

と彼女はいうなり、私の衣服を持って部屋を出て行った。

部屋の中は完全空調を受けているらしく寒

くはなかったが、裸でいることに不慣れな私には、ひどく難儀なことであった。いく度か足を組んではぼぐして、膝をピッタリとつけるなどの、第三者から見たらどうということもないことを繰り返してしまった。しかし五分程した頃であろうか、シャンデリアの明りが消えた。そして突如、私の背後から闇を貫く光明が眼前に像を結んだ。私はそのことを接待嬢が「向こうの壁にご注目下さい」といった時から予想していたことであったが、決して快く見つめることはできなかった。

像は妻が調教師の前に膝立ちになり、手首の後ろに組んでいるポーズから始まった。

「朝の『挨拶』から始めていただこうか。奴隷よ、心をこめて欲しいものだ」

と、調教師は命令しておいて、言葉でその「挨拶」の仕方を説明し出した。妻は、ぶるぶる震えていた。その震えは、大人の秘事を一挙に強いられた少女にも似ていた。それだけに妻は、ことさらに同情を集めるが、そのことが逆に、調教師を調子づけ出したようであった。

「奴隷よ。おれを怒らすとどうなるか、予想位、つこうものなのに。聞きわけがない」

と調教師は冷やかに、言葉が続けた。そし

て、その言葉が終わるか終わらないかの内に天井からジャラジャラと鎖の綱が幾条か降ってきた。調教師は一瞬ひるんだ妻を逃がすことなく、

「今あなたは、おれに同意した」

と叫んだのであった。するとどうしたことか妻は暗示にでもかけられたように、首の後ろに組んだ手を解いて、調教師のタイツの例の布切れに手をかけたのであった。布切れは床に舞い落ちた。

「目を閉じるな。手首の後ろに組め」

と調教師は妻に唾を浴びせた。妻はすっかり観念したらしく、その言葉通りに従った。すると、いよいよ調子づき、

「奴隷よ。朝の『挨拶』だ。いまだ主人がくどくどと説明するまでもないことだろう」と高らかに宣言した。

妻の唇はおそろおそろ「挨拶」のために調教師に近づいた。調教師のそのことに対する注文は真に細やかで、この上なく醜悪に満ちたものであった。しかしながら醜悪さゆえに私は、妻が調教師に虐められているというよりは、ニュース映画でも見ているような気分で済ますことができた。私がそんな事を考えてから、ふと画面に注目した時、「挨拶」は

いよいよ丁重さを増していた。像は妻の顔をクローズ・アップし、そこで像は消え、部屋に明りがついた。

とすぐにドアがノックされた。接待嬢が入ってきた。

「ご面会のお時間です」

と彼女はいった。

私は立ち上がることができずに、もそもそしてしまった。でも彼女は、そのことだけを告げると、すぐに部屋を辞して行った。そのことによってホッとしたわけであるが、今度は例の助手が例の装いでやってきて、

「手前が、ご案内申し上げます」

といった。

私は度胸を決めて立ち上がった。身体の変化を覆い隠すことは露わにする以上に異様であろうかと思ひ、両手は両脇にたらしただままにした。助手はそのことを認めたが、少しとして軽蔑ないしは好奇心を覚えた風を見せず、

「奥様がお喜びになります」

といったのであった。

その意味するところは、さっすすることができたものの、私は単に照れ隠しみたいにならずに以外に手がなかった。そのことによって

困ったことには、益々変化の足場を確かなものとしてしまった。私とその側まで歩み寄ると、彼女は妻との面会において私が守るべきいくつかの条件を並べた。それによると、妻は目隠しをされ、二人の両性によって精神的苦痛を浴びせられる手筈になっているので、私はその間隙を縫って面会する必要があるということであった。

彼女はさらに言葉が続け、その面会の方法とか方式とか、いとも変わった行動を私に強いて、それ以外の一切の行動をとってはならないと念を押した。私は同意した。私たちが部屋の前まで近づいた時、部屋の壁が音もなく左右に開いた。私は助手に続いて忍び込んだ。

助手の言葉通り、妻が台の上で物と化して横たわっていた。いや、ころがっているといった方が正確かも知れない。妻は目隠しをされ、右手首と右足首、左手首と左足首をくくりつけられていた。私たちが忍び込んで間もなく、そこに控えていた接待嬢とおぼしき二人の女性が演技を始めた。演技といってもそれは声によるものであって、つまるところ誰もいないはずの部屋に誰かがいるらしいということによって、妻をまず苦痛に追いやるこ

とを目論んでいるらしかった。私は女二人の演技が一段落ついた後の長い沈黙の後に助手にうながされた。

私は妻に近づいたが、助手の求めによって私は頬や手などを絶対に妻に触れてはならないことになっていた。妻は私に気づいていないようであった。それは私が妻に対して動物的行為をなした最初の機会となった。私は肩を助手によってつつつかれ、身体を起こし、台の上の妻の頭の両側を足場に立ちふさがった。私は今しがた見せつけられた調教師の朝の「挨拶」に似たことを妻にすることを求められていた。助手の説明によるなら、それは馬鹿でいいいな、念を入れたものである必要があった。妻は私を調教師と間違っているかも知れなかった。妻はためらいもなく私の「挨拶」を受け入れた。それはまた、私が妻に愛を伝え込む最初の機会ともなった。

私は部屋の隅に引き下った。代わった二人の接待嬢が側ににじり寄って、ふたたび声の演技を続けた。その演技は脱線したのではないかと思うのであるが、発展に発展し、ついに妻から目隠しを奪い取ったのであった。

私は全身を熱い血潮が駆けめぐろうとするのを押さえることができなかった。妻は堅く

目を閉じていた。私は、いつ妻が夫なる私を認めるかという期待のせい、一秒一秒の時の刻みが異常な程重々しく感じられた。妻は目をこじあげようとした二人の接待嬢から逃れるように顔をふり、ことさら目を堅く閉じた。でも接待嬢はハイヒールで妻の肌をくじき、何が何であろうとも目を開くことを強いた。数分のもみ合いの後に、妻の蚊の鳴くような同意の声が聞こえた。妻は、まず私を認めることであろう。いや、認めさせられるのだ。妻は私の姿に仰天する。しかし新しい私は、やさしい笑みを送ることになろう。妻のまぶたが震えた。

その時、助手は私の片手を引いた。私を部屋の外に連れ出した。壁は音もなく閉ざされた。私と妻との面会は終わったのであった。

第五景 沈黙

通された部屋は奇怪な作りであったが、私が調教師や女友だちから見せつけられていたアルバムの中のいくつかの情景の背景でもあった。鎖が天井から幾条も垂れ、壁には鉄の輪がはめ込まれ、さらに鞭とか縄とかの小道具が乱雑に散らばっていた。ところが、私は

助手によっておっつけられるように部屋の中へ入ったのであるが、中に一步を踏み入れたとたん部屋の鍵が外からかけられ、私は一人閉じ込められることになった。

私は何をもくろんでのことかわからないままに、部屋の中をぐるりと見渡し、古びた椅子を見い出して、それに腰をおろした。うすら寒いとか薄気味悪いことはなかったが、決して快適な部屋とはいえなかった。

私は床に落ちている鞭を拾いあげ、手でしばらくの間もてあそんでから、何気なく空を打ちつけてみた。「ピュッ」という小気味よい響きが、私に鞭に対する好奇心を芽ばえさせた。私は、あてどなく溜め息をついた。と突如、天井から吊るされていた袋がガラガラと鎖のもつれる音を響かせ、アッという間に落下し、床に、手ごたえのある鈍い音を生んだ。そのドサリという音に思わず浮き足立ったことは確かである。しかも驚かずにいられたことは、その袋の中で何かが、もそもそと動き、その袋の中に何かうごめく動物が閉じ込められていることが明らかになったことである。

私は、ためらってはみたものの、そのことに無関心ではいられなかった。第一に、しき

りに私は、助けを求められているように感じた。私は用心深く近づき、そっと袋に触れてみた。さらに私は袋を閉じる縄の結び目を解いて、袋の中を一切、明らかにした。

袋の中に閉じ込められていたのは女友だちであって、彼女は猿轡をかまされ、手足をいっしょくたに結ばれていた。彼女は半ば気を失っていた。口元のしまりを忘れ痴呆を思わせた。私は堅い結び目をようようのことで解き放ち、猿轡もはずし、彼女を隅においてあった寝椅子に横たえた。身体中のあちこちにあざがついていた。こんなにしたのは、あの調教師に違いなかった。しかしこのことは全く己れの責任によって生じ、己れの醜態のようには思われてならない。とはいえ、私は彼女の傷の手当てをしてあげるために、どうしたらよいというのであろうか。

私の自由になるものは鞭とか縄とか、全くの目的違いのものばかりであった。私は、いたたまれなくなつてドアをノックし揺すり、助けを求めた。ところが考えられない程奇怪なのであるが、ドアはドアではなくなつていて、そこは切れ目のない壁となつていて、叩けど揺すれど、びくともしなかったし、また私の声は部屋の中に空しく響き返るばかり

であつた。

私は肩を落として友のところに戻った。友は意識を回復し始めたらしく、顔色は少しよくなつていた。

「大丈夫かい」

と私は尋ねた。すると友は少しだけ目を開き、少しだけ唇を動かして、

「慣れていることよ」

と私を驚かすことをいって大きく息を吐いた。あざは、いよいよ、青さを増している。身体中、いたるところにである。

「この部屋は密室になつていて、君によい手当てをしてさしあげることができない」

と私はいった。友はしばらく黙り込んでいたが、一人で手をバタバタ動かし、さらには身体をよじつてみた。しかし痛みには耐えられなかったらしくジツとかしこまった。

「ほら。だから静かにしていた方がいい」

と私はいった。重傷とまではいかないまでも、友が痛めつけられていることは確かであつた。

「じつとしていると、かえって悪いわ」

と友は、私のすすめに反撥するかのようには手を動かした。足を動かし身体をよじつた。

「だめだよ。そんなことをしては」

と私は友の動きを押えた。

その時、友は私が全裸であることに気づき突然けたたましい笑い声を響かせた。私は思わず友から手を離し、一步さらに一步と後退ってしまった。

私の足に鞭が触れた。私は友を見つめたまま、それを拾い上げた。友は、

「やれるもんなら、やってみて」

といわんばかりに、私を見つめていた。

「どうせ、おできになれないんでしょ」

とも、いつていた。さらには、

「大変なカラ元気ね。長生きなさるわ」

とも、いつていた。

私は鞭を右手に握り、床を打ちつけた。彼女は、益々鼻であしらうように私をにらみ返す。私は怒りがこみ上げてきた。と同時に、鞭を打ちつけるということに対して大いに乗り気にもなっていた。

私は寝椅子の上の友を真下に見た。それから友に対して鞭を打ちおろした。友は一瞬、顔をふせたが、すぐさま、

「何よ、これっばちで」

といわんばかりに、私を見つめ返した。私は逆上し始めていたし、それは堰を切って鞭の雨を友の上に降らす結果を生んだ。友は、

今や四つん這いになって部屋の隅を逃げ廻り出した。私は手を休めることなく友を追い、鞭を打ち続けた。ついに友は前のめりに倒れ込み、石ころのように仰向けになった。気を失っていた。

私の目は、さぞかしギラギラと光っていることであろう。私は気を失った友の足をひきずって、片足を天井からの鎖に結び、他の足を壁からの鎖に結びつけた。そして滑車をつたわる鎖を引き、友の身体を宙に浮かし固定した。

極端なまでに無惨なポーズになった友に、私は我れを忘れて鞭を打ちつけた。もはや理由はなかった。血がしたり落ち出し、床を染めた。そのことによって私は自分のなしていることに気づき、また、生と死の境をも見た。これ以上、打ち続けることが友にどんな結果をもたらすか、容易に予想できた。私はためらった後に、友の身体を床に降ろした。

私自身も、そうとうに疲れていた。それでも手の内で鞭をもてあそぶ内に、不敵な微笑が生まれてくる。私は、友の身体を仰向けにして、足で踏みつけてみた。そのことは、私を非常に上気嫌にさせた。そして私はアツという間に猛々しくなった。

私は無意識の友に、どす黒く濁った欲情を喚起させられ、理性を失い感情に流され始めた。大海で舵を失った船のように、さまよいの時を過ごした。岸は遠く、人間とのいざこざなどとは無縁であった。気づかうことは、何一つなかった。友は依然として気を失っている。私は友の意識を取り戻すための努力を何一つとして行なわなかった。その時の私は、そのことは、おっくうなことであった。友が目覚めることによって、私に不都合なこととは何ら生じなかった。しかし、友が無意識であることも、何ら不都合ではなかった。

目に浸み入るばかりの淡紅色の世界を、煙の塊に似た雲が形を整え出す。それは私の希望し、期待し、あこがれていたものへとなっていく。官能的なドビッシーの曲の一部を想い出したように、ぎこちなく口づさむ。羽毛を撫でたような柔らかなハープの波紋が湧き上る。私は、耳をすます。平和な時の流れのせせらぎを聞く。

そんな夢心地の時に、唐突に、ギギギーという、さびついたような響きと共にドアが開かれ、そこに一人の女性がそっと現われた。その女性は私の妻であった。妻は私を見、それから足元の友を見、さらに私を見た。

第六景 別離

私が妻に近づいた時、そのことを見越し待ちかねていたように、ドアはギギギと閉まり出した。そして妻を扉の向こうに覆い隠してしまったのであった。

後ろを振り返って見た。そこに倒れていた筈の友の姿はなかった。ことごとく何者かの企みによって操作されているらしかった。その企みは、いうまでもなく調教師の手によるものであることはわかりきったことである。

しかし、ここで気を鎮め注目しなければいけないことがある。それは、企み全体が私のためになされていて、私を利用して彼自身が高みに駆け上がるためではないということである。調教師は私の心のかすかに潜在する芽を見い出すことに努めている。さらにはその芽を育て上げることに努めている。だからといって、私がそのことに積極的な受身の姿勢を持つことを希望していないらしいのである。この次の手は何か。そのこと一つ考えあげくにも、気が、そぞろにさせられてしまう。

私は壁に爪を立てて、引っ搔いてみた。爪

が剥がれそうな痛みを感じる。十個の傷跡が壁に刻み込まれ、したたり落ちる水滴のように下へ下へと流れる。もやもやとした不快感というよりは、ムカムカとした身体の不ざきに似た、押えようもないものが、私をいらだたせる。私は獣のように吠える。

「ウォー」

と吠え、

「アアー」

とも吠え、さらには、

「イイー」

と吠える。腹の底から全力をふりしぼって目にとらえることのできない敵と対決する。

呪わしさに己れを嫌悪しながらも、そんな己れを受け入れ救おうと躍起になる。私は壁の向こうを見つめる。壁が私を手招きしている。私は短距離走者のように強く床をける。

壁をめがけ走った。砕け散ろう。私の命は、切れぎれの骨肉は、ダニの餌食になるのが精一杯であろう。壁は二メートル、一メートル五十センチ、十センチと私に近づいた。もはや時間の問題であった。私は、その場におよんで恐怖を覚えた。死の匂いが、ちらつく。しかし、時はすでに遅かった。私は左肩から壁にブチ当たった。

とその時、壁は目にも止まらぬ早さで、左右に開いた。そのため、私は壁を通り越して駆け抜けた。その先は闇であった。私は足をすくめたが、立ち止まる前に何かにつまずいて倒れた。私は強く頭を打った。意識が薄れかかり、嘔吐を催した。

非常に静かな時の流れであった。少なくとも、人間の生涯の一時を占めるにふさわしい緻密さであった。私は這いずりながら、つまづいた物体の側に近づいた。

私は一メートル位にまで近づいた時に、その物体が人間であることを闇を通して見抜いた。その物体は全身を、ぶ厚いビニールの袋で包まれ、空気の供給口と排気口と思われる二つのホースによって保護されていた。私はホースを手で、たぐり寄せてみた。かなり長く、たぐり寄せても、ホースの先がつかえることがなかった。私は包みを引きずって明るい先程の部屋を目ざした。

そこで私は、包みの中に妻を見た。愛する妻の姿を見た。何ということであろうか。私は前後の見境いを失って、ビニールの袋を引き裂こうとしたが、何か特別な加工をほどこしてあるらしく、手は勿論のこと歯でも引き裂くことができなかった。

他の人なら、このような状態において、どれ程、理性的にふるまうか、私には知ることができない。私は、ただおろおろするばかりである。他の人は、そんな私を笑うことだろう。すべては私の愚かさにあると嘲笑することだろう。傷つき痛みついた妻を見ることによって、初めて妻への愛に目覚めた私をあきれ、中にはのしることも辞さない人もいるだろう。

それもよいであろう。私には、そのようなことは大きな問題ではない。所詮、どんなにあがこうとも人生は空しいのだ。その空しさを肩に重みとして感じない人は、他人におせっかいをやき、人生をバラ色とたええ、花よ蝶よ、星よ鳥よ、愛よ生命よと歌っていたらよいのだ。

包みの中の妻の頬に涙が走っている。もはや二人の間に、いかなる神秘もなかった。二人は全くの生まれて間もない赤児にすぎなかった。それゆえに、これから多くの苦難もあるうが、うまくやってゆく可能性を心底から否定する材料は、どこにも見当たらない。

私は妻を抱き起こし、ビニールの包み越しの接吻をする。私には妻の肌を直接に触れることができない。だからといって、私の妻へ

の想いを凍らすことなどはできない。そうすればする程、想いは太陽の火よりもより熱くなるのみだ。

背後に人の気配を感じる。私は顔を妻から離れた。調教師が仁王立ちになっていた。その背後には助手や接待嬢たちが揃っていた。

「そろそろ、お帰りのお仕度を」

と調教師はいった。

私は、妻を見た。妻は両手を差し伸べている。しかし私は、ここでためらわずにいらなくなる。ここで女学生のようにねちねちすることによって、これからの妻に対する調教師の手ほどきが一段と激しさを増さぬと限らないのである。

私は時間をかけて立ち上がった。すると助手はヒ口を閃かせて妻を包み込んでいたビニールを引き裂いた。妻は、すぐさま私のふところに飛び込んできた。だが調教師は妻の肩を引いた。そして私から妻を完全に引き離し、夫なる私を前にして、いきなり二発の平手打を浴びせた。

「大変、失礼いたしました。手前どもの調教不足で、お客様に対しての礼儀も、まだ弁えておりません奴隷奴でして。お許しただければ幸いです」

と調教師は妻を接待嬢に手渡し、その手足と口を封じさせてから、おもむろにいった。

私は全く自分とは関わりの持たない者のことと、妻に加えられつつある縛しめを見逃さなければならなかった。

「いいえ。こちらこそ失礼いたしましたように」

と私は頬をひきつらせながらいった。

「これはご寛容なお方。かたじけのう、ごさいます」

と調教師は私に一礼してから、妻をじろりと見返った。

妻は何かをいつている。しかし口をふさぎ込まれているので私には聞きとることができない。その内に妻は上から押さえ込まれながら床に崩れ落ちた。

「さあ、お客様にご無礼をお詫びしなさい」

と調教師は静かな口調で命令した。妻の口をふさぎ込んでいた縛しめが、接待嬢の手で除かれた。ところが調教師の期待に反して、

「あなた、助けて」

と妻は、まず言ってしまったのである。

私は胸をつまらせずにいらなかった。私ができることなら駆け寄って、哀れな妻を抱きしめてやりたかった。いや、実際にそうし

ようと思った。しかし私が駆け寄る一瞬前に調教師の鞭は妻の頬を打ちつけ、妻は仰向けにひっくり返った。

「奴隷よ。詫びるのだ」

と調教師は強く命令した。妻は、もともと身体を起こした。床に額をつけんばかりに深々と身体を倒した。

「聞こえぬ。大きな声で歯切れよく、事を運べ」

と調教師はヒステリックに叫び、床をピシッと打ちつけた。

「後生です。なにとぞお許し下さいませ」

と妻は切れぎれにいった。私の胸は、いやが上にも熱くなった。どうしてこんな調教師もどきに妻を預けたのだろう。大変な間違いだった。

「よせッ！」

私の胸は、にえ返るように波打って叫んでいた。しかし、声には出なかった。

「それは、俺の妻だ。おまえなんぞに自由にさせるために預けたんじゃない！」

私はたしかにそう叫んでいた。だが、私の声帯はブルブル震えるだけで、その機能を果たすことを忘れてしまっていた。

私は、自分の意志が通じないのにヤキモキしながら、調教師を睨みつけた。しかし、それはなんの効果もなかった。

「お客様の、お帰りだ」

と調教師は高らかに一同に告げた。私は二人の接待嬢に両脇をかためられた。そして廊下を行進した。

「あなた。行かないで」

という妻の泣き声が聞こえた。

「わたしを一人にしないで」

という妻の泣き声が響いた。そのすぐ後に調教師の、

「奴隷よ。鞭が欲しくば、くれてやる」

という叫び声が続いた。

「ヒューイ」「ヒューイ」

という妻の呻き声が私の耳を痛めた。私は浴室で身体を洗われ、衣服を着けられ、そして目隠しをされた。

私が『歓びの育つ館』を後にしたのは、それから五分とたたなかった。車は疾走を開始し、妻との距離を大きくしていった。もう日が暮れている時刻かも知れなかった。車の中はチャールストンの、陽気で罪がなく憎む余地を持たない音楽で充満した。

ところが、そのように私の心を音楽に浮き立たせておいて、実のところ、車は私の家へではなく、ふたたび『歓びの育つ館』に引き返すための、大きな回り道をしていたのである。

別離は別離という言葉にふさわしく、再会という言葉と紙一枚を隔てて続いていた。

(完)

天星社刊

△限定版グラビア写真集▽ 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円(送共)略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円(送共)略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

体

験

記



街で拾った『よしなしごと』

石川 公一

つれづれなるままに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

何号か前、辻村氏がサロン楽我記でいっておられたように、奇クにはデコレーションケ―キの豪華さはなくても、長く庶民に親しまれる駄菓子味があります。

そこで、奇クにとってなにより大事な味とは、ゴテゴテと悪趣味に飾りたてた文章よりも、事実は小説より奇なりといったノンフィ

クションであることは、愛読者なら誰でも判っていることでしょう。

この複雑多岐な現代の社会に生きていれば多少なりとも珍奇な経験はするものです。僕が、街で拾った『よしなしごと』を書いてみようと思ったのも前記の理由からなのです。

『お洩らしした娘』

これはもう去年の正月の話になりますが、新年早々、僕は何軒かのディスコテックをはしごして、新宿のある絨毯式の深夜スナックに落ちついた時のことです。

時計はすでに午前四時をまわっており、店内には客も少なく、耳をつんざくようなＲＡンドＢのリズムは流れていましたが踊る者は居ず、みんな思い思いの姿勢で寝ころがったり、女性とふざけあったりしていました。

『僕は一人だけただボーッとすわってタバコをふかし、コーラを飲んでるばかりでひとつもおもしろくないのですが、とにかく朝になるまでは電車がなかったので、ここに居るよりほかにありません。

そのうち尿意を催してトイレに入ると、先客が鏡の前で一生懸命化粧をしていました。たいていの喫茶店がそうであるように、ここもトイレは男女共用です。

僕は用を足しながら、横目で彼女を見ました。二十一、二才位でしょうか、引きずる程長い黒いビロードのスカートをはいて、長い柔らかそうな髪も茶色く染めて流行を追っているみたいでも、昼間はどこのＯＬといった感じです。

しかし、どうも様子がおかしい。さっきから目に付け睫毛をつけようとしているのですが、さっぱりつかないのです。指先がブルブルふるえて、上につけるものを下につけてしまったりしている。

どのくらい薬を飲んだのかはわかりませんが、彼女はもう完全にラリパッパの状態なのです。僕が用を足し終わって行こうとすると片目だけをちゃんと化粧したおかしい顔をした彼女が、もたれかかってきました。

「これ……つけて……」

ふるえる声で彼女は、僕に大粒の真珠（イミテーションだろうと思う）のイヤリングを差し出したのです。

その時どういう訳か、僕は背すじが寒くなる様な感じを受けるとともに、なにかサディスティックな気が高まってきました。それはきつと、僕の心の中で彼女を嘲笑する悪魔の声に似たものだと思います。

イヤリングをつけてやると、「うん、もういいわ、オシッコ」と言って、彼女は個室の中へ入っていきました。

そして僕がトイレから出ると入れかわりに彼女の友人らしい、女性が入っていったのです。

「ジュンコ、だいじょうぶ？」

中からその友人の声が聞こえてきます。

「あら、あ……あれあれ、洩らしちゃったのね」

その声を聞いて、僕の心臓は急に激しく鳴

り始めたのです。席に戻ってからソワソワと落ちつくことができず、のどがカラカラになって、グラスに三分の一程残ったコーラを一気に飲みほしました。

しばらくしてから、ビロードのスカートをはいた彼女が友人に抱かれて、客席に戻ってきました。

僕は、彼女達が席につくの確かめからまわりの他の客の様子をうかがい、わざと落ちつきはらって、またトイレへ入っていきました。そして個室に入り、内側から鍵をしっかりとかけて、偶にあるホーロー引きの白い容器に手をのばしたのです。

興奮にふるえる手でそのふたを取ると『あった』グッショリと黄金の水を吸いにとって、小さくまるめられた花模様のパンティ……

僕の頭の中は、もうからっぽになっていました。まだあたたかいそれをひろげて、鼻先へともっていきます。しかし、すばらしいその香りに酔っていたのもつかの間、だれかがドアをノックしたのです。

僕は、それこそビックリ仰天して、うろたえてしまいました。

「なんだ。また、だれか入っているのか」
表で男の声がします。

一瞬どうしようかと思いましたが、水洗のコックを引いて、流れる水の音にまぎれて、そのパンティは元に戻してしまいました。その時どうしてそのパンティを持っていたのかと、思い出しても悔まれます。

Ⅱ 渋谷のバーにてⅡ

僕のとなりに坐っているのは、まだ十九才だと言うパンティ丸出しの真赤なミニスカートをはいた、カワイコちゃん。

僕はアルコールが入っても、入らなくても女の子に接する態度は余り変わりません。

それでも、さつきから、年に似合わぬエッチな話ばかり……。

「お客さんの中には変わった人もいるだろう」

「どんなふうに」

「どんなって、要するにアブノーマルなセックスを好む人さ」

「そういう人いたわよ。この前きた、オジサン」

彼女は目を丸くして話し始めました。

「もうかなり酔ってたのよね、それで今夜デートしないかって言うのよ。そこまでは普通なんだけどさ、もし寝る時にはわたしのオシリ貸してくれて、言うのよ」

「女のオシリ借りてどうするんだろうね」

僕も彼女と一緒にになって笑いましたが、ほんとうは興味シンシンといったところです。

「うん、ほんとよ。それからね、つねられたり、ふんずけられたりすると、すごく興奮しちゃうんだって」

「そういった人は案外多いんだよ。現に僕のまわりにもいるからね」

「そう」

「それでデートはしたの？」

「ううん。気持ち、悪いわよ、そんな人。なんとなく」

「でも、そういうセックスっていうのも、興味あるだろう？」

「たしかに興味はあるわ。でもイザとなったら、やっぱり出来ないと思うの」

「それはリードする男しだいさ。寝室にタブーはないんだからね」

「そうかしらね」

かなり知った様な口を利きましたが、彼女多に脈があると思いました。

いかななものでしょう。

Ⅱ 北欧のポルノグラフィーⅡ

先日海外旅行から帰った友人が、かの有名なスエーデン製のカラー・スライドを観せてくれました。

女優としてでも充分通用しそうなブロンドの美人が、かねてより見たい見たいと思っていたポーズで、これでもかと言わんばかりに露骨にさらけ出している写真ばかりです。それに、明るいカラー・スライドなので、鮮明さは抜群でした。

友人の話では、サド、マドはもちろん、犬を相手にしている写真まであるそうですが、あいにく彼には、そっちの方の趣味はまるでなく、ガッカリしてしまいます。

それでも、僕の見たうちには、何枚かのレスピアンものがありました。

白い器具で、相手の女性を責めているところや、二人がおたがいに責め合っているところ。

それに、ヨーロッパには臀部フェティッシュが多いらしく、スカートをまくって四つん這いになった女性に、もう一人の女性がまたがって下の女性の大きなヒップを叩いているところで、むろん下着はつけていません。下になった女性の表情がとても印象的でした。

日本のこうした写真より数段良いのは、モデルがドライに割りきってセックスを楽しんでいるせいだと思います。

Ⅱ その他Ⅱ

一度、やはり新宿で外人のホモにハントされかかった事がありますが、僕は男色は気持ち悪いばかりで、全然興味がありませんのでしつこく迫まるのを、必死にふりきって逃げてきました。

恋の奴隷以来、奥村チヨのファンになった男性も多いと思いますが、彼女は、ほんとうは細かいところによく気のつく、やさしい女性であることもつけ加えておきます。(現在はどうか知りませんよ)

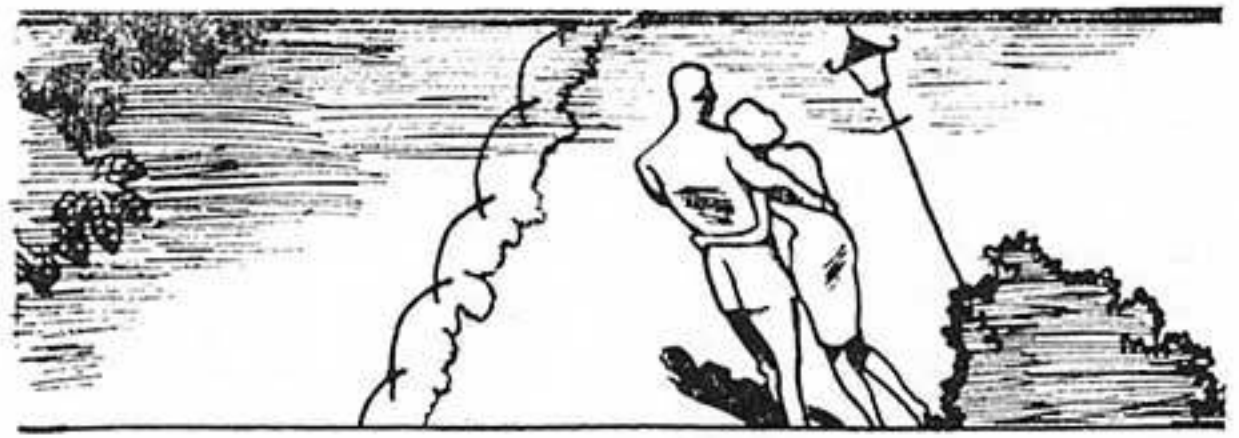
Ⅱ 最後Ⅱ

何の因果か、現在僕の住んでいる家となり、が、ナントカパルプ会社の女子寮です。

さらに、二階の僕の部屋と、となりの建物との間は五メートルもはなれておらず、日曜日など窓をあければ、カラフルなパンティやブラジャーのオンパレードで、この上なく僕の目を楽しませてくれます。

その上、それらの下着の持主が、どんな女性かも知っているの、楽しさも倍増するという訳です。

これからだんだんあたたかくなる季節に向かい、いつの日か窓をあけ放って若いピチピチとした肌を見せてくれるだろうと、今から楽しみにしている次第です。



フィアンセ

スワッピングなど

(記事紹介を中心として)

松山 壮吉

本年一月号に「複数プレイへの志向」と題する拙文を取上げていただいた。

文の趣旨は、SM夫婦プレイのマンネリを打破する方法は複数プレイへの発展以外にはなく、その為には女性が、遊びは遊びとして割り切り、生活の基本にひびを入れず、むしろ夫婦生活の良き刺激として利用する技術を身につけることが必要だが、アメリカで流行のワイフ・スワッピング(夫婦交換)が、日本でも次第に広がりつつある情勢から見て、近い将来にSM複数プレイが一般化する可能性

が、十分に存在する旨を述べる処にあった。

週刊サンケイ三月二日号「ショック調査。

いま学生に大流行の恋人交換プレイ」と題する記事は、拙文で述べた「情勢」をよく示したものと面白と思うので、少し紹介させてもらいたいと思う。

○

「偶然のきっかけで大学生のフィアンセ・スワッピングのお相手をつとめた東京の一流商事会社のサラリーマンN氏(三二)は、目をまるくしてタメ息をつく。『いや驚いたのな

んのって、ただのラバー・スワッピング(恋人交換)だと思っていたら、相手は婚約者同士で、しかも楽しんだ後で、二人ともなんのこだわりもなしに、ケロッと結婚後の生活設計など話合ってるんですからねえ』……N氏は東京六本木の深夜スナックで、某私立大学の大学院生E君(二四)と知合って意気投合ラバー・スワッピングをしようという事になり、翌日、それぞれの恋人を伴って待合わせた。E君が連れてきた彼女は、同じ大学、同じ学科三年のY江さん(二一)で、しかも婚約者、一見良家の子女風で化粧つけもない控えめなカワイコちゃん」

二人の話によると、学内の友人とスワップするのが普通だが、ときどき他の大学にも足を伸ばすこともあり、月に平均二回は楽しんでいるというのである。

相手は恋人同士とフィアンセとが半々で、最近ではフィアンセの方が目立ってふえてきたという。

『典型的なマジメタイプの大学生達』が『ごく自然にフィアンセ・スワッピングを楽しんでいる』事について、作家松本孝氏は『若い年代では、性的にもある程度自由を認めあうのが、将来的な結婚の形態と考えているんです』と云う。

それにしても『愛する女が他の男の愛撫に

身悶える』ことをどう思うのか、フィアンセ・スワッピングのどんな点が楽しいのかについて、

「男なら誰だって、いろんなセックス、いろんな女性を楽しみたいでしょ。女だって同じだと思ってますよ（E君）」

「なかには上手な人がいてすごく感じちゃうことがあるんですけど、そのテクニックをE君に教えてあげてやって貰うの、するとやはりすごく感じちゃいますね、スワッピングしたあと、E君の相手の女性がどんな感じ方したか、どんなこと口走ったか、根掘り葉掘り聞きだすの……」（Y江さん）

「もっと強烈な快楽にぶつかるかもしれないという期待があるのね、事実そういうことがあるし、だんだん酔い方が深くなっていくみたい……」（名門女子大二年町子さん）

そしてT子さんの婚約者Z君は言う。

「愛する女性を、他の男性に抱かせることによって、自分の何かを賭けるという感じがありますね……今頃、愛する彼女も、僕が抱いている女みたいに悶えてんのかなあと考えると、カアッとアツくなって楽しいなあ」

E君の相手をしたN氏もいう。

「僕が恋人交換するのは、自分の恋人が他の男によって悶えるのを見せつけられるマゾ的心理と、他の男で悶えるのは僕の手前恥かしいと必死に官能と戦う彼女を意地悪くみつめ

るサド的心理、この二つがゴツチャになったスリルのせいですね。途中で彼女とパッと視線が合った時は何とも云えませんが、あの学生達の場合、婚約者同士なんだから、サド・マゾ的心理はもっと激しいと思いますね」

彼女がもっと割切って、興奮する事は『僕の手前恥かしい』と思わなくなったら、この『サド的心理』は成立しない。やはり根本は『マゾ的心理』であり、妻を他の男に抱かせることに、Mの一つの極致を求める私の発想と、基本的に共通な心理だと思う。

さらに、スワッピングの倫理について、若き世代はこう主張する。

「愛とセックスは一致すべきものという大人のモラルはペテンですよ。スワッピングをやったって、りっぱに快楽がありますよ。場合によっては愛する相手以上にね」（Z君のスワッピング仲間M君——二二）

より深い快楽を与えてくれる相手に心を奪われないか、という点についてM君はいう。

「愛と性を一致させようとする大人こそ、快楽に愛がひきずられるんじゃないですか。セックスとは快楽そのもので、愛とは別ものと考えてる僕等には関係ないですよ」

M君のフィアンセS子さん（二二）は性のモラルについてこう考える。

「今の大人達は、男は仕事でキリキリ舞いし

て疲れ果てているというのに、奥さん達は暇をいい事にヨロメキほうだい。不公平だわ。私達は、フィアンセが病気で寝ているとすれば、その間はもう一方もやはり何もしない、両方が公平に楽しむってのがオキテね」

さらに、此の様な傾向が高校から中学に迄蔓延しつつあること、今はまだ「親に隠してといった陰湿な感じ」が残っているが、近い将来に、公然たる時代の風習になることを予測してこの報告は終わっている。

○

前世紀には、人間が孤独から脱出し、愛による一体化を実現する道はセックスにのみ存在する、というD・H・ロレンスの浪漫主義が成立し得た。性の解放が進んだ結果、現代ではそんなことは誰も信じなくなった。その結果、現代の学生の中に、性とは関係のない愛という、その意味では甚だカトリック的な又、グレアム・グリーンの愛の観念が、甚だ感覚的に生まれてきたことは面白い。勿論観念としての愛を純粹に成立させる為には多分カトリックの神父のような純潔が必要なので、通常の間人間関係は観念では割切れない。だがM君の場合、観念というよりむしろ感覚として成立してきたものだけに、今後の人生航路もなんとか大過なく舵を取っていくだろう、という安定感があるようだ。

第一次大戦後フランス社交界に存在した、

夫婦それぞれ浮気をして、それを話合って夫婦生活の刺激にするという傾向が、第二次大戦後は中流市民階級に迄広まっていることや日本においてもその『社交界』において、同様な傾向が見られることは、よく知られているが、私などは、そういう種類の人物と云うと、親譲りの資産もあり、高い教養もあり、物分りも良く、いつもニコニコしていて、それでいて人間的にもう一つ信頼出来ない感じの、いわばミノベさんみたいなタイプ（大変にお叱りをうけると思うが、人には誰しも好き嫌いがあるものだ）を想像する偏見を持っている。勿論これは庶民である私の『上流』に対するひがみに基づくものと、判断すべきであり、その風習が比較的上流に局限されていたことを示すに過ぎないだろう。

それに対して、現代のワイフ・スワッピングは、ごく普通な市民の間に出現している点に注意されるし、この報告の学生達の場合だと、より普通な、日常的な感覚のものとして定着する傾向が感じられる。よかれ、あしかれ、こういう風潮が一般化する事は、近い将来において避け得ない昨今の流れであると思われるだろう。

これは性の好みとしては、単純な関係に飽き足らず、マゾヒスチックな味付けを楽しむということに、特に男の場合、なるようであ

り、永井荷風のいわゆる「味覚の洗練は、鯛やビフテキを通り越して苦味のある露の臺やこのわた等に至らねばやまない」のと一般で性の味覚の洗練、高級化と見て良いだろう、といった。

ただし、それは愛には独占欲があることを前提とした上で、そこを刺激して楽しむ微妙な味なので、その味に最高の豊醇さがあるのはまず一世代。スエーデンのように二世代も三世代もフリーセックスでやっていると、独占欲自体が希薄になって、性はかえって面白味のないものになりはしないか。強健で鈍重な北欧人だからあれでもっているものの、感覚の鋭い国民なら、三世代目位にはピュリタニズムを復活させて、恐しく厳格な一夫一婦制でも作り上げて、性を神秘化し、浪漫化すること、性の快楽を豊かにすることを考えるのじゃないかと思うが、さいわい、我々の時代はまだそこ迄行っていない。栄養価だけの食物には既に飽き足らず、これから苦味のある露の臺やこのわたを食べこなそうという処だが、肝心の品物がまだ入手し難く、十分に味わう特権は、次の世代に廻りそうだろう、微妙な処に来ていると思う。そして言う迄もなく、私は、次の世代に廻す迄もなく、自分自身で味わいたいと思っているのだ。

私の場合、単に精神的なSMではなく、肉

体的なSMという重要な要素と組合せていくことで微妙な苦い味をフルに味わいたいと望んでいるわけだが、同好の諸氏が、理性的、合理的に、ワイフ・スワッピング、フィアンセ・スワッピングを楽しむという、現代的感覚を身につけていけば、SM夫婦プレイの壁を破った、複数プレイの実現と一般化は目前に成立することである。

夫S妻Mは同趣の士が多く、私の好みである妻S夫Mには同好者が得難いが、普通、人間にはS・M両性があり、しかも私の信ずる処によれば、男女とも実はM感覚の方が、刺激の度合、快楽の度合ともに大きいので、役柄を固定せず、相互にSとMを交替していく「SM」相互プレイが現実には拡大しつつあると思う。

SM相互プレイのメンバー迄含めて考えれば、男Mのプレイも案外実現し易いのであるまいか。

切実な欲求を持ちながら、孤独と猜疑の城に籠り、その中で特殊な癖だけを大事に育てて益々交流が成立し難くなる愚をおかさず、SMFそれぞれに或程度普遍的な好みを育てる場として、SM複数プレイを含む、SMF社交界を成立させたいものだと思願する次第である。



カッ・沖田 寿

武田氏三代の黒い血

朱に染む柔肌

高野原美

(一)

天正十年三月、桃の節句の日。甲斐の名門武田家の命運もつき、武田勝頼の一行は、入城以来わずか二カ月の新府城にみずから火を放って、岩殿城をさして落ちていった。

声望を失した勝頼は、多くの親族、家臣に見離され、わずかな侍臣とともに道を急ぐの

であった。奥方北条氏も、輿を担う者すら無く、農耕の駄馬に草鞍を置いて乗ると云う有様であった。その他の女たちは徒歩で従い、慣れぬ山道に忽ち柔肌を血に染め、落人の悲哀を痛切に感じながら、心急くままたに痛む足を進めているのであった。

しばらく行ってふり返って見ると、木の香も新しい武田家最後の砦であった新府城は、火を吹いて猛烈に燃え上がっていた。

勝頼は馬上からその火を見ながら、今朝からのあわただしかった一日を想い出しつつ、武田家滅亡の悲哀をしみじみと胸に噛みしめるように感じていた。

(二)

武田信玄は、甲府盆地の天嶮、つつじが崎の館と要害山により、常に領国外に出陣し敵国領で戦い、自領には一度も敵の足跡を踏ませなかった。しかし、信玄の子四郎勝頼は勇武の将であったが、長篠合戦で織田信長の鉄砲作戦の前に完敗を喫し、信玄以来譜代の重臣を数多く失った。それ以来、よき家臣も次々と去って行き、そのうえ織田信長が甲斐・信濃への侵略の動きをみせると、武田一門穴山梅雪の進言をいれて、新しく韮崎の釜無川に臨む断崖上に、新府城を築き、そこに移つ

た。

父信玄は「人は城、人は石垣、人は堀、なさは味方、仇は敵なり」と云って城も持たず、領民に恵みを与え、金山を開発し富国強兵に努めた。その父の教えを捨てて城を築いた時、武田家滅亡の暗雲は甲斐の空を厚くおおい始めたのである。

打ち続く出兵により民は疲れ果てていた。それに追い打ちをかけるようなこの築城は、領民たちに多大の負担を掛けることになり、勝頼の領主としての信望を、失わせる結果を招いたのである。

二月には、木曾義仲の後裔と称し、木曾の豪族であり信玄の娘を奥方に迎えていた木曾義昌が、弟上松藏人を人質として信長に差しだして武田を寝返った。

武田一門で、その母は信玄の姉、その奥方は信玄の娘であった穴山梅雪ですらも、徳川家康の招きに応じて、ひそかに人質として入っていた妻子を新府城から盗み出して、武田に反旗をひるがえした。

三月三日朝、最後の砦ともいうべき城、仁科五郎盛信が天然の要害を頼りに守っていた高遠城が、保科弾正正直の織田方への内応と大軍の猛攻の前に、わずか半日で落城したと

いう報せを受けた新府城内は、今すぐにも織田の大軍が攻め寄せてくるであろうと云うので、蜂の巣をつついたように混乱し大騒ぎとなった。

その中で、本丸に居た勝頼は、親族や重臣たちに裏切られた今、どうすべきかに迷っていた。傍らには、勝頼が重用していた長坂釣閑、跡部勝資が不安気な顔で焦っていた。

このような雰囲気の中で、朝から軍議が開かれ、勝頼の子信勝は、城を枕にして討死にしようと主張し、真田安房守信昌は己が居城上州岩櫃城へお迎えしたいと云い、小山田兵衛尉信茂は、居城郡内岩殿城へと進言した。

勝頼は、岩殿が甲斐の一部であり、北条領にも近いことを理由に岩殿城に落ちて行くことに決した。

火は天守閣に燃え移り、武田三代の栄華を誇った代々の宝物も財産もすべてが灰燼に帰そうとしている。遠く望まれる城の空は、黒炎と紅蓮に染まり、その赤い火は武田信虎、晴信、勝頼のすべてのいまわしい過去を地上から抹殺し、忘却のかなたに追いやるべく、次々と火勢を強めているように思われた。

勝頼は残念であった。

父信玄が果たし得なかった京に武田の旌旗をとの夢は無惨にも破れ、それどころか、武田家の滅亡が目前に迫っている。

長篠の戦で宿老の意見を退けて、織田、徳川連合軍と無暴な戦を行なったことが致命傷になった。その後、次々と重臣達は裏切って行った。今日の運命は、決して武將勝頼の資質のなさによるものではない。時の勢いと云うものであろう。父信玄が生きていたとしても、この退潮を喰い止めることはできなかったであろう。毛利、石山本願寺をはじめとする、反織田連合の頼りなさが、今日の運命を招来したのだ。

勝頼は、自分の智勇には自惚れをもっていった。それだけに敗戦の分析も、他の客観的條件に求めたのであった。完全に負けたと思いつながらも、毛利等の徹底抗戦で織田勢の眼を西に向けさせてくれさえすれば、再び立ち上がれるかも知れない。敗將勝頼は、なお自信と自惚れを捨て切れなかった。

ああ、城が燃えている。

勝頼は、新府城の炎上を再確認しながら、人質達も燃えているだろうと思った。その時その顔には満足気な明るさが一瞬走った。これぞ武田の血脉の中で育てられた、残虐な笑

みであつた。その脳裏に、磔柱に架つた女体がありありと浮かび上がっていた。

勝頼は、近臣に命じて、千人をこす人質の父兄の忠不忠について調べさせた。その調べによると忠義の将の人質は百人余に過ぎず、残りの九百余人については武田を裏切つた者の家族であつた。

この報告によつて、勝頼は人質を忠不忠によつて分けさせ、不忠の人質たちを全て血祭りに上げることが命じた。

戦国時代の人質の運命ほど不安定なものではなかつた。武将たちは領国安堵、家名保持のために、女や子供を簡単に人質として差しだしたが、しかし、その目的がなくなると、家の犠牲としてかえりみになつた。女子供は、一時的和平のための道具であり、人質となつた者も、戦国の世のさだめと諦めて犠牲となつた。

今日から考えると、これほど非人間性の習慣は理解できないだろうが、当時とすれば当たり前のことであつた。

先ず木曾義昌の母と妹を、新府城の大手勝山口に引出して磔。その他の者は人質曲輪に追い込んで閉じ籠め、枯れ草を周りに積んで

城とともに焼くことを命じた。

先にも奥平貞昌が叛いた時、貞昌の若い妻と子が無惨にも磔にされ、敵味方の軍勢の見守るなかで、戦場の土を朱に染めて露と散っている。

また大量焼殺についても、織田信長が荒木村重の籠る有岡城を攻略した時、一族や家臣を見捨て逃げた村重に対する見せしめと云うことで、信長は城内の召使の女三百八十八人、重臣の妻についていた若党百二十四人を四つ民家に押し籠め、周囲に柴や枯草を積んで焼き殺している。当時の武将は敵側の人間については、徹底的な復讐心を燃やしたようである。残虐な行為が日常に行なわれた。

城内に人質として取られていた女子供たちも、武田方の城や砦が織田方の軍勢に次々と攻めおとされ、また、家名の安泰のために、武田を裏切つて織田や徳川に寝返つた父、夫また兄弟の報せを耳にしていた。

戦国の習いで、裏切り者の人質の哀れな運命は痛いほど知らされていたので、今に勝頼殿の残酷な復讐が、自分らの身の上に加えられるであろうと覚悟をしていた。

信玄の娘を奥方に迎えていた木曾義昌の母

と妹は、早くから覚悟を決め、死の心準備もできていたから、昼前、荒々しく土足のままの髷むじやの侍が二人の前に姿を見せた時もうろたえはしなかつた。

「叛逆者の憎き義昌の女たち、覚悟」

忽ちにして、そのたおやかな身体に荒縄が巻きつく。

「可弱き女の身、縛るほどのこともないでしように……」

と母は、その仕打ちに憤激して云つた。

何を云つてるのかとばかりに、手荒い態度の侍は、後手に手首を縛り二筋乳房の上下に厳しくかけ回した縄じりを引き、他の女たちの見ている前を通り、勝頼のもとに引立てていった。

厳しく縛められた縄は柔肌を締め付け息苦しいばかりで、女は肩で喘いでいた。庭を横切つた客殿の前の廊下に、勝頼は長坂、跡部の兩名を従えて立っていた。

「殿、義昌母娘を召し連れしました」

と侍は、勝頼の前に二人を突き出す。母娘は、よろよろと白砂に倒れた。

勝頼は、憎々し気に義昌母娘の痛ましい姿を見降ろしていたが、

「そなたらは、義昌が余を裏切つて、信長の

陣に走ったのを知っているか」

と尋ねた。

「はい、人伝てに聞き知り、武田家の御為には残念なことと心を痛めました。しかし、木曾の家のためには止むを得ないことと思っております」

「何！ 止むを得ないとな。……父信玄以来の恩義を忘れ、敵信長のもとに走るとは犬畜生にも劣ることじゃろうが」

「戦国乱世の世に生き残る武家の処世。恩義にも限度がありましょう。領主が領主としての治世をし、家臣に愛情があれば、皆領主を慕い、生命も投げ打つことでござりましょうが、智慮、愛情のない猪武者のような領主のために生命を捧げるのは愚かの至り、犬死にと申す他はありません」

義昌の母は、勝頼の胸に鋭く突き刺す言葉を堂々と云ってのけた。

「何！ 余のもとで死ぬのが犬死にと申すのか！ たかがしれた領地に恋々とする腰抜けめが！」

と吐いて捨てるように云う。

「いかようになと処刑下さい。潔く死んで行く覚悟はできています」

義昌の母が、きっぱりと云い切ると、続い

て娘も、色白の美貌をキッと引き締め勝頼を見ながら、ゆっくりと明確な語調で

「私も、すでに今日のことは覚悟のうえのこと。武家の娘として、よろこんで処刑を受けます」

と云い切った。

「腰抜けめの女としては立派なものじゃ。そちらの最期の姿、しかとこの勝頼が見届けようぞ。……引っ立てい」

と命じた。

城内の侍たちは、世が世ならば権勢並びなき木曾義昌の母娘が哀れにもむごく縄目を受け、衆人環視の中を歩を運ぶ姿に武田家の落日をありありと意識していた。

大手門の城壁の前には、すでに磔の準備が整えられ、太い荒削りの磔柱とそれを立てる深い穴が掘られていた。二本の白木の磔柱は戦乱の犠牲となって散って行く哀れな女を静かに待って、黒い土の上に長々と横たえられ雑兵たちが、この生贄の処刑を見んものと集まっていた。

「来たぞっ」

と云う声がして雑兵達の群衆は、大手門から処刑の場に通じる人垣をつくった。

義昌母娘は、憎しみと、ねばりつくような

好色な視線を、痛く全身に感じながら歩を運んだ。野獣が餌物を前にして舌なめずりするような雑兵たちの眼が、二人の女の上を走っていた。彼らにとっては、普通のときなら雲の上の、顔さえ拝めぬ高貴な女性であった。

雑兵たちは、義昌母娘が磔になる柱が女性用でなく、大の字になる男性用のものであるの意識して美しい餌物の処刑を待っていたのである。

侍に縄尻をとられて、死への歩を運んできに母娘も、人垣の奥に用意された自分らの磔られる柱に気がついた。荒削りの粗末なものであった。それ以上に……。

（あっ、あの柱は……。ひどい、何と云う屈辱を……）

そう感じた時に、全身の血が頭に逆上し、身体が小刻みに震えて倒れそうになる。戦国部将の母として、娘として潔く磔柱にかかって死のうと思っていた自信が、誇りが、足もとからガラガラと崩れてゆくを感じた。そのあとは、どうして柱の処まで歩んで来たのか判らなかつた。

間もなく、勝頼が近臣を従えて刑場に到着した。

それを合図に刑の執行奉行を命ぜられてい

た高木弾正は

「縛り付けい」

と冷然と命じた。

磔柱の傍で命を待っていた足輕たちは、母娘の、それぞれ厳しく縛られた縄目を解いて柱の上に寝かせようとした。

その時、

「さて。女たちの着物を剥ぐのだ。裸にして張り付けい」

と思ひもよらぬ命令が、勝頼の口から発せられた。

奉行役の高木弾正も、母娘の両腕をとって、足輕も、刑を見守っていた雑兵たちもすべてが耳を疑った。誰もが一瞬、われを忘れたように勝頼の顔をみた。

高木弾正は、勝頼が促すのを見て

「早くせい。剥ぐのだ。その着物を」

と意外な事態に驚きながらも強く云った。

雑兵たちは、母娘の帯に手をかけた。母娘

は顔色を変え、身悶えしながら

「どうぞ、そればかりはお許しを……」

と懇願したが、足輕の無情な手は忽ち帯を

地面に放り出し、細紐も解きにかかった。

「それだけは……、許して……」

と顔をゆがめ、無駄なこととは知りながら

も懸命にからだをねじり、はかない抵抗を続ける母娘。

着物の襟が乱れて、丸い白い肩がのぞき、美しい丸味をもった乳房の膨らみがのぞきだした。裾がわれて紅色の腰布とムッチリした太腿までが露出した。

雑兵たちは、この美しい餌物が、必死に抵抗することにより、ことさらに着衣を乱暴に無理矢理に剥がれてゆく光景を、生つばを飲んで楽しんでいた。

細紐は次々と解かれて黒い土の上に輪を描いて放りだされ、胸や脚の肌を見せながら肢態をかたくして必死に抵抗していた女体も、遂に最後の布片一枚も残さず剥ぎとられてしまった。

この光景を好色な眼で見守っていた男たちは、義昌母娘の滑らかな柔肌が、白日のもとに晒された瞬間、その神々しいほどの美しさに我れを忘れて感嘆した。

「ははは……。どうじゃ。余を裏切った報いとしては軽いものぞ。そのまま柱にかかるがよからうぞ」

と、勝頼は、身体を前屈みにして膝を固くつぼめ、両手で乳房を覆って、屈辱と羞恥に震える女体の妖しい美しさを、まざまざと感

じながら云った。

もう母娘は、云うべき声もでなかった。

前屈みになっていゝるため、突きだされた腰から臀部にかけての厚い脂肪ののった曲線が美しかった。ムッチリした厚味のあるポリウムは、艶やかな光をはなつてその全容を晒していた。

高木弾正の声がひびいた。

「張り付けい」

足輕は、両方から女の腕をとると、引きずるようにして柱の上に寝かせ、素早く両手を厳しく横木に縛りつけてしまった。

こうなると、義昌の母は俎上の鯉のように観念して眼を閉じ、足輕のなすがままにゆだねた。

しかし、いまだ二十才前の、処女の匂うような裸身を地上に横たえられ、身を覆うこともできなくなった娘は、身体をねじり脚を重ねて身悶えしていた。腰から太腿にかけての透けるように白い、量感のあるふくよかな肌は、美しい曲線を描いて脚先の方に流れている。

躍動的な動きをみせて悶えていた脚も、無情に引離されて横木に固定されてしまった。娘は気が狂うほどの羞恥にさいなまれ、胸は

大きく波打ち、額には脂汗が流れ、ムッチリと引緊った太腿はピクピクと痙攣していた。

形のよい乳房をはさむように、肩から脇に斜めの縄が喰い込み、身体が固定された柱は数人の足輕の手で立てられた。

二人の女体は、死よりも数等上廻る屈辱と羞恥の姿を、多くの視線に晒して処刑を待っていた。

「義昌殿が裏切ったといつて、何の罰もないあんな美しい女を殺したとて今さらどうにもなるまいに……」

「男も知らずに死んで行くとは可愛そうな女じゃのう……」

「それにしても美しい。俺ははじめて裸の女ちゅうものを拝まして貰うたぞい。いや美しいもんじゃ、拝みたい程じゃ」

美しい女体が、鋭い槍の餌食となって死ぬ残虐な光景を前にして、異様な雰囲気が漂っていた。群衆の同情的な囁きも、その裸身の美しさにうたれ、無惨にも散って行くのを惜しむ気持が働くだけのことで、一様に、その美体が血を噴いて、冷たい亡骸となる姿を予想し、サジスチックな眼で見守っていたのである。

この犠牲者は余りにも完璧な美しい肉体を

していた。それだけに冷酷な光を放つ穂先が皮肉を破り、柔肌に突き刺さる光景は心を躍らせる演技と云えるだろう。

処刑執行の侍が、槍をかまえてサッと二人の顔の前で穂先を交叉させた。

娘は、わが身を包む殺気が走ったのを感じて思わず眼を開けた。陽の光にキラメク槍の穂先が網膜の奥に映った。

（この穂先が、私を……。この羞かしい屈辱の姿のままで……）

娘は、死の瞬間の激しい痙攣と、それに伴って起きると聞かされていた生理現象を思い出した。

（いやだ、そんな姿を人の眼に晒すなんて……。羞かしい……）

死の恐怖はいささかも感ぜず、ただ耐え難い屈辱と羞恥が、ジーンと頭を痺れさせるほど強烈に突き上げた。

その時、無情な槍は無気味にひらめき、サツとくり出された。

「ウーム」

と呻きが洩れ、全身を痺れさせるような激痛が襲って、身体中の筋肉が激しい緊張を起すのを感じた。

勝頼は、鋭い穂先が娘の輝くような裸身を

貫き、真赤に染まって、その肩先に抜けるのを見た。

（おお、何と美しい光景だろう。血が……）

勝頼は、憑かれたように凝視していた。もう裏切りに対する憎しみも忘れて、ただ白い裸身が、むごたらしくも朱に染まる妖艶な異常美に酔っていたのである。

ムッチリした太腿の筋肉が激しく痙攣するさまが、ありありと思ひ出され、脂肪がむくれ、大きく開いた傷口から、真赤な血が奔っているのが脳裏一杯に再現した。その鮮血がうつろな瞳の中で新府城の天空に吹き上げる真赤な焰とダブった。城の火は今が盛りのように激しく燃えていた。

(三)

天正十年、信虎が駿府へ赴いたその留守に晴信は迅速な行動を開始して、父を追放し自ら父の跡を奪って甲斐の領主に坐ってしまった。

時に信虎は四十八才の壮年であり、信玄は二十一才の若さであった。

この原因については諸説があるが、信虎は戦国武将としては一流の戦術家で、勇猛な合

戦では頭角を抜いていたものの、内政には才がなく失政の連続であり、そのうえ淫虐な悪行が重なったと云われている。

甲府盆地をその勢力下におさめ、古府中つじが崎に館を築いた信虎は、領内をはじめ攻めおとした敵国の姫達を側室として住ませるための館を山麓につくらせ、多くの女を自分の楽しみのために囲った。

英雄色を好むの諺どおり、信虎も相当の漁色家であったが、度重なる血なまぐさい合戦は、この武将を次第にサジスチックな性格に変えていった。

当時の武田家は、勢力はまだ甲斐盆地一円にしかなく、常に小豪族の攻撃をうけ、枕を高くして休む暇もなかった。

小豪族は連合して攻撃をかけ、征伐に向かうと降伏するが一寸甘い顔をする、残党を糾合して攻めかかって来るのであった。誰が味方か敵かは、全くの力関係のみで決まり、誰も信用することが出来なかった。領土征服は、徹底的に虐殺し、完全に敵方の息の根をとめてしまう以外に方法がない有様であり、必然的に残酷な性格が備わってくるのも止むを得なかったろう。

そのため敵国に対する憎悪の念は強く、合戦は陰惨をきわめ、時には女子供までも皆殺しにした。

このような、サジスチックな野獣の斗いに似た明け暮れが、自然に信虎の心を粗暴にして行き、女達に対する態度も異常性を強くして行った。

信虎は合戦から帰ると直ちに女を求めた。それも次第に性急になり、また普通の営みでは満足せぬようになった。

合戦で受けた敵兵の返り血が赤黒く凝血して、ぶきみに光った鎧をつけたままで、女狩りの動物本能をむきだしにするのであった。

女達は戦陣の汚れを落としてからと望むのであったが信虎は許さなかった。女達が血生臭い鎧の下で顔をしかめて嫌がるのを楽しみ女を征服する想念に溺れきっているようであった。

そして次第に、血に飢えた狼の様相を呈しだし、命に反したといつては、女を庭前の松の大枝に裸に剥いで吊り下げ、羞恥と恐怖で悶え、許しを乞う姿を眺めて楽しんだ揚句に刀を血濡らしたり、弓矢の的に裸の女を立木に縛りつけて利用し、乳房や臍等を的と決めでは射たりして、苦痛に悲鳴を上げ血汐に染

まるのを楽しんだりもした。

信虎にとって女どもは単なる消耗品の一種にすぎなかったのだ。敵領をひとたび攻略しさえすれば、戦利品として望むがままに手に入れることができたからである。

悲しいことに、戦さに勝つことしか頭になかった勇猛の武将には、戦国の女の哀感などは理解できず、自分の欲望を満足させる生きた道具としか映らなかった。

勝利の美酒に酔った信虎は、戦利品の区分所へ足を運んだ。

捕えられてきた女たちは、美醜、家柄等によってランクづけをされて、奴隷として、また家臣たちの鬻りものとして分類されたのちそれぞれ与えられたり、人買いの手に売り渡されたりするのであった。

信虎は、女の香りのむんむんする中に足を踏み入れ全身を震わせて緊張しきっている女達を好色な眼で見廻った。

その時、ぷっくり膨らんだ腹を隠しようもなく、動物的な妊娠腹を突き出して、羞恥と屈辱に耐えている女の姿が眼に映ったのだ。

(孕み女か)

信虎は、その女の傍らに歩みよると、好奇

の眼差しを注ぎかけた。

妊婦は、大きな腹をただでさえも恥ずかしく、隠したいと思っているのに、穴があく程身近かに見詰められ、顔を伏せて全身を朱に染め、わなわなと震えていた。

信虎は、その時、女の円く充実した腹が、内部から、ググッと形を変えてゆがむのを見た。この変化が、神をも怖れぬ残酷な好奇心に連なった。

(腹の中を見てみたい、不思議な妊婦の腹の中を……)

信虎は、こう思いだすと、矢も楯もたまらなくなる血汐の昂まるのを覚えたのだ。この手で裂き妊婦の腹の中を見ろという、考えもしなかった着想は、全身を鋭く貫く興奮となつて、悪魔的魅力をかき立てた。

妊婦を自分の館に引連れてくるよう命じ、直ちに帰館した信虎は、近臣に解剖舞台の設営を命じた。

すぐさま大広間の前庭に、三方を幔幕で取り囲み、真中に、白木の厚い板が台上に備えられ、その上下に、手足を縛るための棒を二本ずつ打ちつけた大俎がしつらえられた。

妊婦が自分の哀れな運命を嘆き、呪いながら曳き出されてきた。既に、腹を断ち割って

の「処刑執行」の旨がいい渡されていた。

女は日々育ち行く胎児の成長をわが身で感じとり、分娩の日を心待ちにしていた甲斐もなく、ここで命を断たれることも、夫の討死にした今となつては仕方がないと覚悟を決めた。いい渡された時は驚き悲しんだ。しかし許されぬ身の不運を悟った時、武士の妻として、わが子と共に夫のもとに行くのだと自分に云い聞かせ、諦めたのだった。

腹を裂かれると云う残酷な刑を呪いもしたが、武士が自らの手で最も苦痛の激しい切腹をして死んで行ったのを考えると、自らの手で腹を切り裂くか、他者により腹を切られるかの違いだけのことだと、無理に、割りきつた。戦国の常として、人質となった女性達が磔柱の上で脇腹を槍で貫かれて死ぬのを、仕方のない宿命と諦め、覚悟するのに似た生贄としての心情があった。痛く苦しいことだろう。しかし、憎い敵将信虎を、妊娠の肉体をもって逆に征服してやろう。この、神をも怖れぬ非道な所業は、必ずや信虎の心を痛めつけるだろう、と考えた。こう考えた時、妊娠した腹を断ち割られる屈辱も恐怖も消えて、自虐と妊婦の誇り、それに復讐心が強く湧いた。

信虎は、縄目を受けた若い妊婦のかもしれない、妖しい異常な雰囲気を楽しみながら、その場に立ちすくんでいた。

妊婦は、胸元を厳しく荒縄で締めつけられずっしりとした乳房が着物の上からも十分にうかがえ、その下には縄目で強調された妊娠腹がこんもりとした膨みをみせていた。

信虎の心を知っているかのように、妊婦の縄尻を取っていた侍は、縄をといて女の身を自由にすると冷たく命じた。

「さ、脱ぐのだ」

妊婦は、覚悟はしていたものの、いざ裸にならねばならないとなると躊躇があった。

「何をぐずぐずしている」

と、侍が帯に手をかけようとした。

「そなたの手を借りる必要はありません。私の手で脱ぎます」

女はきっぱり云いきると、白魚のような美しい手を動かして帯をとき、着物を肩から滑らせた。

重たげに膨らせをみせた乳房は見事に張つて、薄い皮膚の下に縄目に走る青い血の筋をみせ、紅色の腰巻は、腹の膨らみの線をくっきりと現わしていた。

女は覚悟の上の落着きで、ゆっくりと着物

を畳み、帯や細紐を重ねると、もう二度と身に着けることのない衣装と名残りを惜しむように、感慨深げに見凝めて何か考えているようであった。

最後の身を覆う唯一の布である腰巻について迷ったのである。

白砂の上に腰巻一枚の姿で端座した妊婦の姿は、異常に艶めいたものがあつた。皮下脂肪が豊かにつき、腰から臀につけての豊かさが一層強調されて、嗜虐に狂う信虎の好色心を刺戟するように晒け出され、上下から圧迫された腹が、前方にせり出して、これ見よがしに膨れていた。

女として、自らの手で、腰のものを取ることは身を切られるような苦痛であつた。しかし、男の手で取られるのも耐え難く、思い悩んだ。気持は激しく動揺した。心を決めるまで長い、たたかいであつた。やがて、思い決して、さっと腰巻を取ると手早く折り畳み、着物の間に隠し、その勢いをかって、潔く姐の上に昇り、身を屈めて裸身を横たえたのであつた。

侍はその手を取って上に伸ばさせ、頭上の棒に手首を厳しく縛ると、続いて足首を取り無情にも簡単に固定してしまった。

今や手足を引伸ばされた豊満な裸身が九カ月という大きな腹を盛り上げて、誇らし気に晒していた。

乳房は、胸全体を圧する大きさにドッシリした膨らみを見せて喘ぎ、小刻みに揺れていた。その下に伸び切つて妊娠線を痛々しく描きだしている偉大な腹が、女の生理の神秘を見せていた。胸から厚い腰にかけて、キュツと引締つたウェストの曲線を示す女体の特徴はそこには無く、豊かな充実した膨らみが、妊娠した女の、別の美しさの極致を呈していた。

分娩後の授乳による肉体的消耗に耐えるために皮下脂肪は豊かさを増して全身の柔らかな肌の下に厚い層をなし、豊満美を強め、それが余計に女の裸身の動物的姿を演じさせ肉感を高めている。

これ程、女性の神秘的で動物的肉感をむきだしにした魅力美はないだろうと思われた。冷たい理性美でなく、暖かい包容力を感じさせる美であつた。生殖と云う尊厳よりも、余りにも生々しい動物的な肉体感が強かつた。

信虎は、何かにつかれたように見凝めていたが、やがて侍臣から脇差を受けとると姐の傍らに寄つた。

暖かい女の肌は、弾力と胎児を秘めた充実感で溢れていた。引き伸ばされた皮膚は、薄くなり血管を透かし、痛めた腹の異常な膨らみを物語り、信虎の心は、裂き究める喜びにかき立てられ、ぶるぶる慄える右手が脇差を抜いて逆手に取る。

乳房と腹で谷間になって影をつくっている鳩尾に、冷たい鋭利な白刃が突きたった。

「あつ、ううっ」

女は悲鳴を洩らし身悶えた。

信虎は、その手応えと悲鳴に、狂つたようにサジストの血が沸くのを覚えた。

刃の移動とともに、引伸ばされていた皮膚が大きく口を開けて、黄色い皮下脂肪をはじけ出し、曲線を描いて白い肌に赤い筋を描いてゆく。

女は呻きとともに全身を強直させ、大きな小山が揺れ動く。

もう女は、激痛と苦悶で失神寸前になり、額に脂汗を浮かべ眉根に深いシワを寄せて、蒼白な顔をゆがめて死とたたかっている。

罫りを固めて、この暴虐な主君の振舞いを見つめていた侍たちの、一刻前まで漂っていた好奇と好色の眼の色が、たちまちにして異常な動揺を表わし始めていた。

眼を閉じる者、顔を伏せる者、ギラギラ光る瞳をひたと信虎に据える者等、それぞれ、別個の動きが起こり始めた。その張りつめた雰囲気の中には、異様な恐怖と、余りにも残酷な信虎の所業に対する非難の息吹きが感じられたのであるが、淫虐に狂った信虎には、目前の白いけにえ以外は無に等しかった。

侍の一人が立ち上って何か喚いた。両隣にいた同僚が、あわててその侍を引き止めてなだめた。

敵の生命を断つために戦い、地獄のような修羅場を日常としている荒武者たちも、この状態でのこの残酷さには耐え難いものを感じるであろう。非難と憎悪、そして得体の知

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

れない畏怖に血走った視線が、悪鬼を見るが如くに主君信虎に集中していた。

その中で、憑かれた信虎の脇差が、非情無残に移動して行った。

女の身体は激しく震え、弱々しい苦悶の聲が鋭く洩れていたが、狂ったような信虎の手が胎児をつかみ出すと、烈しい痙攣を起こしガックリと力を失った。

妊婦は、夫をはじめ多くの侍が、無念の涙をのんで腹掻き切って自害して行った苦痛を自分のものとし、信虎の刀が激しい苦痛を与えて切り裂いて行くのに耐え続け、戦国の女として夫に殉じる幸福を味わって死んで行ったのであろう。

信虎は臍尾をつけたままの胎児を右手にして、人間の為し得ないことを仕遂げた想いに頬をゆがめ、戦国武将として思うがままに振舞えることにますます自信を強めていた。

一人の人間の生命を体内に宿して、出産の歓びを夢みて、腹の痛みを母になる試練として受けとめ、身重の身体をいたわり続けた妊婦も、信虎の淫虐な手によって亡骸となって横たわっていた。

一刻前までは、そのしなやかで暖かい弾力性に富んだ豊満な肉体が、男の心を妖しく捕

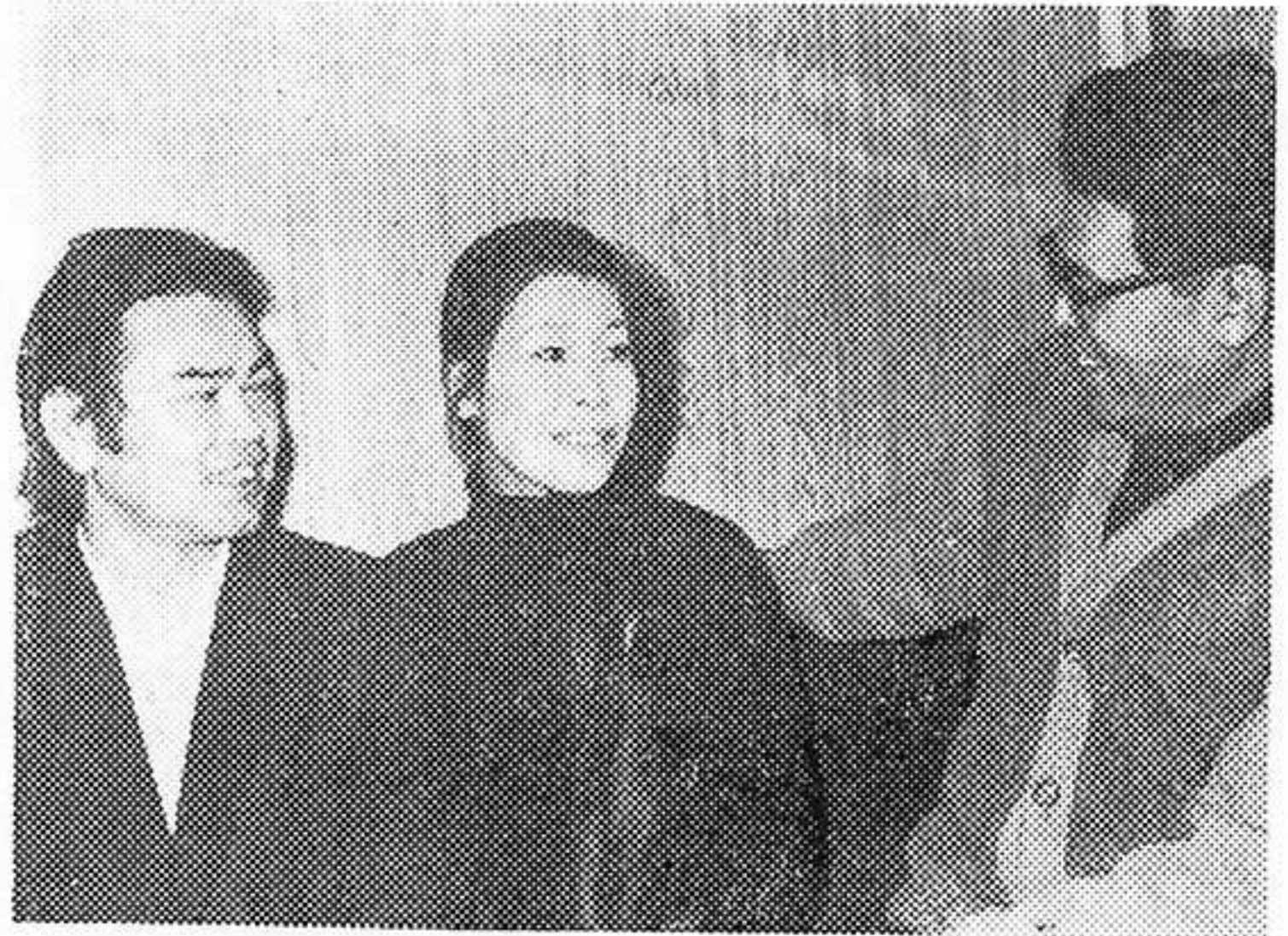
えていたのであるが、今はもう冷たい物云わぬ亡骸となり荒むしろの上に横たえられる物体にすぎなかった。生と死の境は、人間に大きな変化をもたらす。それだけに生命の価値は尊いものと云えよう。

一刻前までは、信虎にとって価値が大きかった妊婦も、腹を裂かれ神秘をあばかれた亡骸は無価値以下のものであった。哀れな妊婦は屈辱と羞恥に耐えて、自らは武士の切腹の心境に殉ずる満足感だけをたよりに、若い生命を散らしたのであった。

この犠牲者の亡骸は、裏山に投げ捨てられ野犬の餌となった。

この時の残忍な手応えが忘れられず、信虎は次々と若い妊婦を裸にして俎の上で腹を裂く悪業を続けた。

この淫虐な悪魔を神が放っておく筈がなかった。当然の報いが我が子晴信によって加えられ、一生涯放浪の身を送ることになったのだが、しかし、この信虎の黒い血は、晴信・勝頼と受けつがれて、若い女の血が流され、悲運に泣くことになるのであった。



S M カメラ・ハント

続・秋山夫妻の巻

深夜の舞踏会

辻 村 隆

「今晚は——」

という声に、玄関に出てみると、思いもかけず、秋山夫妻が並んで立っている。

「おや、突然……驚きましたよ」

「何だか急にお目にかかりたくなって、この時間ならいらっしやると思いました」

午後十一時、深夜の唐突の訪問に面喰らいながら、免も角、茶の間へ招じる。

「確か東大阪市でしたね、今の処」

「ええ、二月の二十一日から、足代新町二丁目の『晃生^{こうせい}ショウ』に出演中なんです。先日お邪魔しました時は、生憎とお嬢さんの御婚礼前で、本当に御迷惑でした」

「いやいやこちらこそ、何もお構いも出来なくて、恐縮していたのですよ」

「御無事にお済みなんです」

「ええ、まあ何とか……急に淋しくなって、ポツカリ抜けた娘二人の大きな穴に、未だにぼんやりしています」

「さぞ、大変だったでしょう」

四方山の話の間に、家内が離れ座敷を大急ぎで片付けて来た。私達は移動する。

二月の末まで東大阪市で打って、三月一日より高知市掛川町の「高南劇場」に出張し、そこで次の劇場がきまるとのことであった。

暫くは大阪を離れるので、何とはなく人恋しく、ひとつは、懸案の課題を抱いての、突然の訪問であったのだ。

秋山夫人は舞台化粧の俣で、つけ睫毛すら外していなかった。

義兄の交通事故で、急拠東京より上阪し、稼ぎ時の正月一杯を棒に振って、義兄の為に



種々奔走し、やっと二月よりダイコーム・ミュージクの舞台に立ったのは既に御存知の通りである。その間に一度、陳中見舞に出掛けようと思いつつ、ついつい日日の雑用に追われて、先日、彼等と約束していた、新しいプレイへの試みも、いつしか伸び伸びになっていたのであった。

プレイへの開拓を求めて秋山夫妻は、みずから出向いて来たのである。

夜は長い——。又しても真夜中の宴になることは必至であった。

ウイスキーとつまみものを持ってきた家内に、手早くプレイの旨を含めて先に寝るようにいって、私達は奥庭に面した離れ家の洋間

でグラスを交し始めた。

イレブンPMに出演して以来、私達の旧交は急速に回復していった。私の一寸した口添えが、二人にとっては非常に価値あるものとなって、秋山夫妻の残酷ショウのポスターにイレブンPM出演云々のことが、麗々しく書き立てられていることも聞いている。さして力にもなれなかったのに、彼等は私に対してかなり恩義を感じているような態度で、実に低姿勢で、礼儀を尽してこられるのである。

二女の結婚の時にも、わざわざ大きなフランス人形を祝に持参してこられて、家内や娘を感激させ、プレイの同好仲間にしては珍しく家族ぐるみのつきあいに変わりつつあった。

一家団欒の茶の間での二人は、SMめいたことは一切云わず、場所柄を考えて、娘達にも面白おかしい各地の話題を、豊富に提供しては、家族中を楽しませてくれたのである。

しかし、子供達は、私や秋山夫妻の出演したイレブンPMの番組をテレビでみているので、夫妻のことは薄々知っている様子であった。時代の推移と共に、私自身も

余り子供達に隠さなくなったので、SMの何たるかを知らぬ子供達も、大人の世界の人達として秋山夫妻を眺めているようであった。

数杯の、サントリーオールドのグラスを傾け、私は顔のほてるのを自分で感じる、快い酔いに、いつしか嗜虐を求める心が湧然ともり上ってくるのを覚えた。

「夜もすがらやりますか——」

「いいですね。辻村さん、明日はいいんですか？」

「ああ、構いませんとも。こんなハプニングな夜はそう度々あるものじゃありませんよ。思いつきプレイに耽溺して、昼までぐっすり眠ればいいじゃありませんか」

「私達は午後一時半の出番に間に合わないといけないんですがね」

私と秋山氏は顔を見合わせて、嬉しそうに哄笑した。むつかしい談義や、議論は必要でなかった。お互いの心が分かった今、いっときも早く実行に移ればいいのであった。

精悍そのものの、秋山美智夫氏の眼がキラキラ光り、私達を見守る秋山夫人は、これらのプレイをすべて許容した表情で、柔らかな笑みを泛かべて、ゆったりとソファに凭れかかっていた。素脚の脚線がスラリと伸びて

ヒッピーまがいの異様なスタイルが私の眼を彼女に釘付けにしていた。

「単なる裸身の緊縛でないにか……そう、縄は僅かでもいいんです。例えば、このヒッピースタイルかなんかで、変わった雰囲気、SM的な感覚を出してみたいと思うのです。SMの想念を芸術にまで昇めたもの……そんなものをやってみたいと思ひまして、今宵は妻に、こんな服装をさせてきたのです」

こんな服装というのは、秋山夫人の尖端的なスタイルを指していた。漆黒の丸首セーターに暗赤色の革のチョッキ、超ミニのスカートで、素脚に赤茶色の長いブーツを履いてきたのである。腰の辺りまで垂れた長き黒髪が赤い革のチョッキの背で藻のようにゆらめいて、そのスタイルに、一瞬私は魂を奪われたのであった。エキゾチックなヒッピースタイルは確かに秋山夫人をこわく的にしていた。やや、ものうげな夜のしじまの表情の奥に、これから始まるプレイへの期待がそこはかとなく流れ、ほんのひとくち、唇をしめしたウイスキーが、彼女の頬をぽっと染め上げて、妖艶な瞳が、めらめらと悦虐の炎を燦^くらせているようであった。

「さあ、みてやって下さい、家内の裸を……」

おい、脱ぐんだよ」

大きくうなずいて秋山夫人は革のチョッキを外しかけた。

あわてて、三脚にカメラを固定し、ストロボを装填してセルフタイマーにすると、チョッキを脱いだ秋山夫人の傍らに身をよせて、何か一言二言、喋りかけたら、眼眩む閃光が走り過ぎて、一瞬私の網膜を暗然とさせた。

ハイネックの丸首セーターをく

るりと脱ぎ捨てると、その下から裸身が、じかに私の眼に飛び込みドキリとする。ミニスカートを引き下げ、薄い紗のパンティをとると、黒革の太いウエスト帯がキリリとしまり尾錠でつながったV革が、深々と喰い入っているのが、否応なく、まざまざと眼を射た。

「既にこれを嵌めてきたのですか」

「ええ、それで幾分手間どったのです。大阪のファンの方からいただいたのですが、喰い込む個所が少しきついです」

白々とした牝豹のような裸身に、この拘束帯は、女体を素晴らしくひき立てていた。ミニスカートの下に、これを着けた俤、今迄の数十分、秋山夫人のそれとは感じさせぬ、さ



りげない振舞いに、私は改めて感嘆のうめきを放ったのであった。

「長いブーツをここへ上げて構いませんか。余り汚れてはいませんか……」

「勿論、いいですとも」

私は、とっときのコダカラーをキャノンに装填すると、カラーとモノクロの二本立てで撮影することに、咄嗟に腹をきめた。

しなしたと赤く光る革のチョッキを裸身にじかに羽織り、膝まであるブーツのチャックを、さっと引上げた、そのスタイルは、かつて私の撮った、どの女性にも適用しなかった嶄新な感覚に彩られていた。被虐タイプというよりも、むしろそれは嗜虐を好む、ヒッピ



一の女王にも似たスタイルのようである。

私の構えたカメラに、秋山夫人は場馴れた態度で、さっと右脚を椅子の肘掛けに挙げ、鮮かなポーズをつくるのであった。

V帯の谷間から、ナマの皮膚がカメラに飛び込んでくる。DPEに出さねばならぬカラーフィルムの条件を考慮に入れて、私はその谷間に、印画紙袋のツルツルした黒袋を型に折って挟み込む。所詮は大衆に見せるフォトになるかも知れないポーズに対し、又しても斜線の白々とした太さを云々されるのを避けようとした、私の配慮であった。

このポーズに向かうのが、私と秋山氏の二人では、何だか惜しいようにすら思われる美

しさであった。

秋山氏の試行錯誤は徐々に熟してゆく。打紐で彼女のひたいを巻き、一番太めの縄を束ねて肩にかけさせ、造花のバラ一輪を唇にくわえると、秋山夫人は更に一変して、さながらテキサスの荒野を縦横無尽に駆けめぐる、自由奔放の女王のような、妖しい気品すら泛かべて、艶然と微笑むのであった。一片の緊縛はなくても、その姿態には、むしろS的な匂いがホーフツとして流れ、仮に若し、秋山夫人が許容するならば、彼女の膝下に、随喜の涙を流して、ひざまずき、長靴の踵でふみにじられるのを、こいねがうM男性の多きことを想像させる美しさを、しみじみと感じたのである。

正直いって、私のイメージには、被虐にのたうつ秋山夫人しかなかった。今、秋山氏が試みたこのスタイルの中に、私はこの夫婦が単なる残酷シヨウのみにはとどまらず、秋山夫人が、SにもMにも変貌出来る性格を持っていることを、ゆくりなくも発見した思いであった。当の秋山氏自身、遠く離れて、この愛妻の、一変したS的スタイルを、感嘆の面

持でみつめていた。彼の脳裡に去来するものは、恐らく、私と同様の想念であったかも知れない。

「実に素晴らしいですね。どう見てもSの女王って感じですよ」

思わず口に出すと、それを待ち構えていたように、彼はニヤリと笑って、

「ええ、或る私のファンの方の見る眼も同じですね。私の妻に、一度思いつき虐めて欲しいっていうんですよ。舞台では被虐をやっている、じかの妻からは、何ということなく嗜虐的な性格を感じるといえるのですね」

「SMシヨウとして、時には主客転倒して、嗜虐に走っている貴方に、突如豹変した奥さんが襲いかかる、なんてのも面白いんじゃないでしょうか。だけど、貴方にM性を求めるのは一寸、無理でしょうね」

「そう見えるらしいですね。でも案外、持ち合わせているかも知れませんよ」

秋山氏はニヤツと意味ありげに笑った。

「奥さんは彼を虐めてみたいと思いますか」
「ええ、時にはネ。でも、やはり舞台でとなると無理でしょうね。私とても、うちの人のように鞭も使えませんし、あんなに早く縄もかけられません。やっぱり縛られて、虐めら



た掌の合間に強く挿込み、点火する。

「一寸、灯りを消して下さい」
声にうなずいて、螢光灯のスイッチを押すと、うばたまの闇の中に、神秘的な金色の臘火のみが静かな炎をあげていた。じっと、その光にみいる夫人の瞳は、まるでこの世のものとも思われず、あどけなく、そのくせ抜群の魅力のきらめきをまきちらして、たとえようもない妖艶な影を、おどろおどろめいてボーッと浮かび上らせていたのである。

めくるめく思いで、炎の尖端に連動距離計を合わせ、くらやみの中で、私は光に向かってシャッターをきった。一瞬、パッと白像が浮かんで、元のうば玉の闇に還元した時、夫人の姿は私の視野から忽然と消え果てて、仄赤い炎のみが、微かに私の網膜に映像を投げかけていたのであった。

「踊らせましょう。ハーレムノクターンのレコードでもあればいいのですが」
「ありますよ、恰度いい工合に……レコードを採す間、あかりつけていいでしょうか」

ええ、という声で、スイッチをひねる。

洋間の隅においてあるステレオの蓋をあけ「夜のムード集」の中から、スターダストやハーレムノクターンなど、数曲吹込んである大盤をとり出すと、その曲あたりに目星をつけて、レコードをかける。ポリュウムを落として、電気スイッチを切ると、崩々とむせび泣くように流れ始めた、ハーレムノクターンの曲に合わせて、仄赤い臘火に、微かに照らし出された女体が、妖しく腰をくねらせ、金色の臘燭が、左右に揺れるかと思うと、高々と頭上でまたたき、壁面に伸縮する影絵はくねりのたうち、猥らに双臀が揺れ、果ては激しく前後にくりくりと、ピストン運動を続ける腰が、やがてくだけて、しずかに打伏した時、曲は変わって、タブーのしらべが流れ出していた。

私という、たった一人の観客の前で、秋山夫人は、微かな呻きすら洩らしながら必死に艶美な倒錯の舞踏を演じてくれたのである。明るさが元に戻った時、彼女のひたいに、じつとりと汗の粒が泛かび上っていた。

私の感激。——それは、もう筆舌に尽しがたい。今をときめくローズ秋山夫人が、たった一人の私のために懸命に踊ってくれた。そ

れている方が無難かも知れませんわ」

そういういつも、秋山夫人も又微妙な笑みを泛かべていた。夫婦のみの秘奥に、介在する、妖しい心理の葛藤を、何となく感じさせる一瞬であった。

「さあ、そろそろプレイにかかろうかね」

気を変えるようにいって、秋山氏は夫人に近づく、いつ手にしていたのか、尾錠のついた革手錠で、両掌を合わせるようにして、しっかりと、とめた。

「ローソクありませんでしょうか」

「ああ、これでよかったです」

急いで黒革袋より、装飾用の金色のローソクをとり出すと、彼はそれを受取って、開い

れに対して、どう酬えばよいのであろうか。

× × ×

休憩のひとときすら、すべてはプレイに通じていた。深々と旨そうに煙草をくゆらす秋山夫人の両手に、冷たい手錠がはめられている。はめられた俤、夫人は、さしてそれを苦にもせず、憩いのひとときに浸っている。

激しくも妖しい、ハーレムの踊りが、夫人の肌を痛めつけたのか、彼女はしきりにV帯に指先を挿し入れては、股ずれした位置を変えようと、果敢ない努力を試みていた。見兼ねたのか、秋山氏は財布から小さい鍵をとり出すと、夫人の背後に回り、ウエスト帯とV帯を連結させている丸環にはめた小型の錠前を開き、ベルトを外してやった。

ホッとしたように、数度足踏みして、夫人は、やっと解放された自由の下半身を、のびのびと伸ばして椅子に腰を下ろす。

何とかこうした自然のポーズをカメラに入れようと、ファインダーをのぞく私の眼を意識したのか、煙草を燦らす夫人の両手は、ごく自然にさりげないポーズをとっていた。

緑なす黒髪は双臀まで垂れて、放心の面持で、ポカリポカリと、煙草の煙を吐く夫人に私は強烈な刺激を覚え始めていた。そこには

未だかつてみられない、又緊縛にのみ汲々と走った私

にとっては、思いもかけない芸術の匂いのかぐわしいSMのあでやかなポーズが存在していたのである。矢も楯も堪らず、秋山氏に私は請うてみた。

「少しポーズをとってもらってもいいでしょうか」
「ああ、構いませんとも。」

しかし、縛るのがお好きな辻村さんなのに、あの様な手錠だけでいいんですか」
「それがスゴく新鮮です。私のハントする女性群に、ああした手錠のみかけても、ケロッとしていることでしょう。だけど、奥さんには表情があります。ヒッピースタイルとは、うってかわった、あやしい被虐の物想いに耽る哀愁が、ただよっているのです」

そのさりげない表情の中に、私は秋山夫人の並々ならぬプロ性を感じた。同一のポーズをとらせたにしろ、このような被虐の切なげな表情は、ハントの女性からは、凡そ望むべくもなかったように思えたのであった。

あらかた灰になった煙草を、長い灰殻を落



とさぬよう、そっと彼女の指先から抜くと、ポイと捨て、椅子に深く腰を掛けて貰うと、思い切って、片脚を、肘掛けに挙げた。素直に抵抗もなく、夫人の片脚は易々と挙る。むしろ、開股を意識するかのように反対側の脚も、心持ち開いて、夫人は私の次の行動をじっと待ちうけていた。長い黒髪を開股部に垂らすと、禁写体はすっぽりと隠れて、髪のが腿に曲折していた。同じ人体の人毛でありながら、頭髮は陽の目をみ、今一つは陰湿に隠されている。奇妙な矛盾を感じながら、カメラは夫人をねらう。思いは同じなのか、傍らから秋山氏が呟くようにいった。

「ゲイジユツとワイセツは紙一重ですね。こ



のポーズなら、ゲイジユツで通るでしょう。でも一旦、白いベッドの上で脚を挙げるか腰をあげて、よく似たポーズをとって御覧なさい。忽ちワイセツときめつけられますよ。主観というか、観点の相違なんですね」

「確かに……ええ、一昨夜（二月二十四日）でしたか、例のイレブンPMで、藤本さんの大阪版なんですが、奇祭の紹介のフィルムが写されて、岡山西大寺の裸祭の方は、男性はすべて禪一本の裸体のぶつけ合いです。よく似た祭で、岩手県黒石寺とかの裸祭とくると、種々雑多なんですね。着ている男性もあれば素ッ裸の男性もいて、まぎれもなく素ッ裸の男性自身が判っきり画面にうつっている

んですよ。テレビで男性自身をこの眼でみたのは始めてですから正にオドロキですが、これも祭だからと許容されるのか、矢張り公然陳列のワイセツになるのか——なんて、考えさせられましたよ」

「雑誌だってそうですね。奇クの場合なんか風俗のSM誌と最初から色眼鏡で見られますから、反って近頃よく出廻っているドギツイ週刊誌より、遙かにおとなしいですよ。むしろ私にいわせれば物足りませんね」

「確かにそういう声はよくききます。SMの風潮を、最初に開拓した、パイオニアの道はいずれにしても厳しいものですよ」

秋山夫人は、脇道へ話のそれ出した私達を微笑ましげにみやり乍ら、レコード立ての中から、次々と手錠のかった両手で、巧みに盤をとり出しては、その曲目に眼を通していたが、つと秋山氏の方を振りかえり、

「ねえ、あなた。懐かしい曲がありますのよ。ちょっとかけてもいいかしら？」

「何て曲？」

視線をやって聞き返す彼に、

「ハーバー・ライト、ほら「港の灯」よ。博多のあのクラブで一晩に一度は必ず演奏してたじゃないですか。あれよ……」

眼を輝かすようにいつて、秋山夫人はレコード盤をとり換えると針を置いた。

スタンダード・ナンバーで、クラブやショウで、大抵一度は、きく曲である。

／＼かつては港の灯の中で知り合った二人も、今はその灯を見乍ら別れなければならぬ。悲しい情景が、トランペットの音色と共に、感傷的に胸に沁み入る名曲である。

習得した日本舞踊から百八十度転換して、激しい動きのアダジオを演じながらきいた、博多のクラブのフロアショウの頃を憶い出したのか、煙草をくゆらせて聴きいる秋山氏の横顔に、ふとよぎるエトランゼの佗しさがチラリとかすめ去った。夜のしじまを破って、哀愁の音色は、聞き入る人の心を甘くやるせなくとらえていった。

「あなた、辻村さんと踊って構いませんか？」

「いや、私は……」

絶句して、とてもとてもと応えようとしたが、秋山氏の大きくうなずいたのをシオに、手錠の俣の全裸がヒタと寄り添ってきて、円を描いて両手を高々とかけると、すっぱり

と私の体ごと抱き込むようにして、頭上から降ろした両手が、私の背で手錠をはめた俤、しめつけてきた。甘い女体の香をヒタと胸許に感じ、陶然として、私は秋山夫人のリードに任して、狭い洋間のフロアに、ただ踵をくっつけた俤、腰でリズムをとっていた。私の両手は垂れた俤で、裸身に触れるのを憚るかのように動かなかった。曲はいつしか「真夜中のブルース」に変わっていた。ベルト・ケンプフェル楽団の、甘い調べが、いつしか私の心を酔わせ、そこに夫の秋山氏が私達の妖しい舞踏に目を輝かせてみていることも忘れて、うっとり、雰囲気には酔い痴れていった。曲は「夜のストレンジャー」「星空のブルース」と続く筈である。出来得れば、こうして裸身に堅く抱かれた俤、いつ迄も甘い夜のしじまの中で、ムードをもった曲に流れて抱き合っていたかった。いつしか私の両手が秋山夫人の腰の辺りにかかっていることを、私自身ハッと気付いて、そっと手を垂れる、恍惚のひとつときであった。

「ああ、すごく愉しかった。辻村さんは？」私を見上げる黒い瞳に、大きくうなずき、急にノドの渴きを覚えて、ぐっとグラスの酒をのみほすと、カッカッと体中が熱く燃えて

それがあながち酒のせいではないとしり、年甲斐もなく心をほてらす私であった。

「どう、こんなポーズ？」

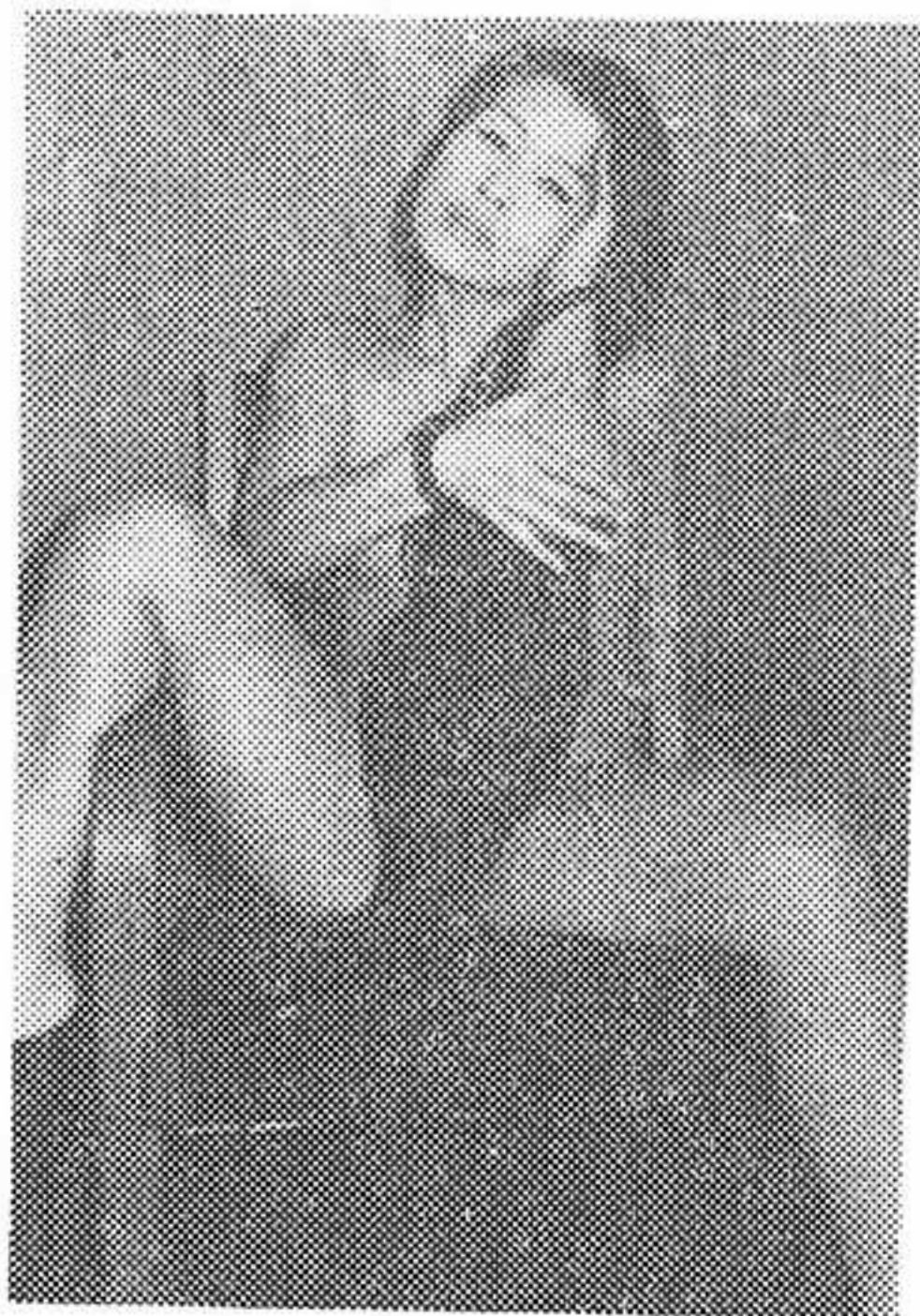
乱れた髪を掻き上げようともせず、秋山夫人は、一枚のドーナツ盤をヒタと当てて、大きく両腿を開いた。ドーナツ盤のくり抜かれた円型の中心がぽっかりと黒く、私の慾情を疼かせるようにかげらって覗ける。夫人の挑発に眼のやり場に困り乍ら、その新鮮な行動に拍手を送りたい気持で、ストロボが光る。

秋山氏が飾り吊棚の小型カレンダーを一枚引き抜くと、モデル嬢の顔を中心に丸く折りたたんで、レコードの裏面から挟み込んだ。

円型の窓から美女が笑いかける。夫人は妖しく乱れる心を亀裂させて、微かな喘ぎをみせていた。そのポーズは正に、被虐を求めて迫る、美しい執念のほむらをメラメラと燃やす女心を一幅の絵にしたようであった。

そのポーズは私にはなく、グラスを手にして、チビリチビリと酒を傾ける、泰然たる秋山氏に對しての挑発のようにも思えた。

激しい、強烈な悦虐を、秋山夫



人は、ひたすらに求めているのではなからうか。じっとその俤、手を束ねて佇立していると、意心伝心というのであろうか、やおら無言で立上った彼は、わざと粗々しく彼女の両手を握って引き寄せると、素早く、手錠の片手を外ずし、私には聞きとれぬ低音で、何かを命じた。うなずいて、夫人は狭い椅子に、体をかがめて逆転しようと懸命に身をいただき始めた。秋山氏が双臀を抱えて介添し、まるで奇型人間のような妖しいポーズが椅子の中心に出来上ったのであった。片手、片足に手錠をはめ、空いた片手首に縄をまいて犇と椅子に結えつけると、極端に屈曲した淫らなポーズが、私の眼前にありありと展開する。この



時も黒髪の長き末梢が、双臀に尾を曳いて流れ、あからさまな羞恥を巧みに隠蔽していた。

モリモリと盛上った、豊かな臀部が、これみよがしに私の眼前数十センチにあった。それは唯もう見事としか云いようのない、悦虐の赤裸々なポーズであった。

「辻村さん、何かレコードをかけて下さい。声が洩れるといけませんから……」

「えッ、声が……」

咄嗟に答打ちを想像して、私はもう一度先程の夜のムード曲を流し始めた。

矢張り私の予感通り、私山氏は縄を二、三度輪にして束ねると縄鞭にして、この見事に

むき出された豊かな臀部めがけて発止とばかり打ち降ろした。

激しい悶絶の絶叫が流れ、それは被虐を願う秋山夫人にしては、むしろオーバーな絶叫とも受けとれるぐらいに、狭い洋間をつらぬいた。忽ちにして、その個所が薄桃色に染まって、縄鞭の跡がありありと浮かび上ってくる、一曳、二曳、降りおろす度に、夫人の絶叫は愉しげに昂まり、髪の毛は乱れ飛んで、ビリビリと蠕動する臀部は、その打撃を歓ぶかのように激しく打震え始めていた。

「代わりましょうか」

息も弾ませず、秋山氏はニコツと笑って、私に鞭をよこす。激しく燃焼する心を鎮めて、それを受取ると、私はかなりの力をこめて、発止と撃った。あッ、うーっと呻いて、両脚の垣間より、怨ずるが如く、或いは求めるが如く、私を見つめる夫人の瞳は、しつとりと濡れそぼり、鼻翼をはためかせて、心の燃焼を隠しようもなく、恍惚の表情が、悦楽の境地を、まざまざと証明していた。

圧迫の度合いを増す窮極の肢態に、拇指は

のけぞり、喘ぎは急速に激しくなりつつあった。

秋山氏は金色の蠟燭に火を点じると、かなり高くから双丘の谷間に焦点を合わせて、涙を落下させてゆき、敏感な皮膚と蠟燭との距離は、じりじりと接近していった。熱蠟がポトポトを谷間を金色に埋め始めた頃、秋山夫人の魂消える絶叫は延々と尾を曳き、狭い腰掛けのシートの上で、真白になるまで唇を強くかみしめながら、もう私への思惑も配慮も吹っこんで、慟哭が、ワーンと洋室一杯にこだましたかと思うと、

「あーあ、あなたあ、抱いてえ、きつく……」と切なげに彼を求める、きれぎれの声が、アクメの響きをこめて、噛みしめる唇の隙を縫って洩れ始めたのであった。

× × ×

(緊縛の可能性を確かめてみたい——)

秋山美智夫氏は、話の端々によくそのことを口にしたが、三十分ばかり私室に戻って、秋山夫妻に自由の時間を耽溺してもらうべく気をきかせて席を外した私が、再び、洋間へ戻ってきた時、彼はせつせと、軽業のような奇妙な緊縛の真最中であった。秋山夫人の恐るべき忍耐力に、眼を瞠る思いで、私は黙っ

て、彼の作業を見守っていた。

両足を椅子の肘掛けにのせて、外れぬように、しっかりと縛り、椅子の背のうしろで両手を緊縛された秋山夫人の体は、宙に浮いているのである。両腿にかかった縄は、彼女の太腿を精一杯に拡大させて、しっかりと椅子の背面に固定されていた。

このポーズが彼のいう可能性の限界に一步步づくものであるとすれば、緊縛も飽和状態にいったなどと、うそぶいている私の手段はまだまだ底の浅いものであることを、この時思い知らされたのである。

椅子は坐るもの、腰を降ろすものとの観念から、その前提のもとに立って、椅子の緊縛を行なっていた私は、こうしたポーズは、凡そ思いもよらなかったものであった。しかし柔軟な彼女の肉体なればこそ、こうした強烈なポーズにも耐えられるのであって、ハントする女性には、恐らく無理ではなかったであろうか。しかも、こうしたポーズが、女体責めの種々相に、もっとも適応した羞恥の極の姿であったかも知れなかった。

カメラを構えた私に、秋山氏は例によって長き黒髪を利用して、巧みにカバーした。彼女の黒髪が白い斜線の役目を見事に果たして

くれたのである。

(よくこうしたポーズで、我慢出来るものだ)

私は内心、讃嘆の声を心に洩らしていた。

「バイブレーター貸していただけませんか」

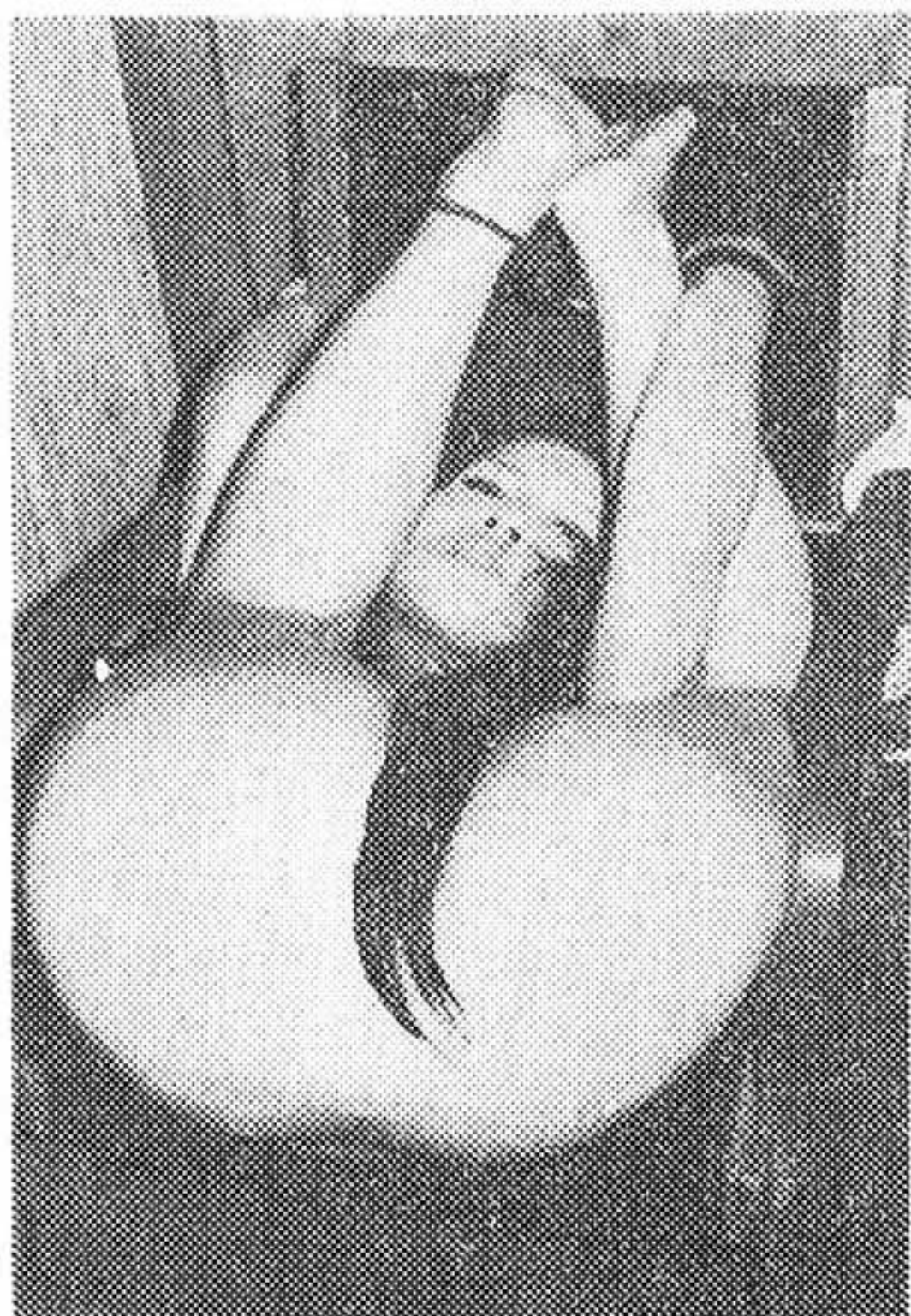
流石に昂奮した眼の色で、彼は私の日頃のプレイを適用すべく、そう、いったのである。

探すまでもなく、黒い革袋

に入っている大小二コをとり出すと、彼は黒髪を掻きわけて、小型のバイブを回転させ響かせ始めた。

絶え入るような悦楽の呻き、そしてA感覚を求めて彼の握るバイブは下降して目指す。喰い入るように私は直視する。快楽を伴ったSMのプレイは、次々と秋山夫人の泣き処を求めて彷徨した。歎歎が悶絶に代わり、再び襲いくる桃源の嵐に、彼女の表情は千変万化してゆく。

彼はバイブを止めると、素早く縄をときほぐし、未だ快楽の洩をさ迷う夫人の体を、うつむかせて、肘掛けに乗せたのである。両手



両足を椅子に縛りつけ、体のバランスをとつつ、彼女は秋山氏のいうが倅に易々として体位をとった。これも亦、私にとっては珍奇な、未だかつて行なったことのないポーズの一つであった。

アダジオで鍛えた秋山夫人なればこそ、易々としてとり得るポーズであったかもしれない。そしてこの体位に向かって、秋山氏の攻撃は、飽くことなく続いてゆく――。縛るポーズの一つ一つが、新鮮で、しかも女体責めには最もふさわしい恰好のポーズであること、彼はチャンと心得ているようであった。A感覚にはうってつけのポーズの、彼の狙い

は勿論そこにあった。うつろな眼を私にむけて、彼女は飼育されて知った歓びをまざまざと露呈していた。

残酷ショウでは到底みられぬ、強烈きわまりない羞恥縛りが展開されてゆく。それが、彼のいう可能性の限界という言葉に通じるのであるうか――。

更に極端な緊縛が始まった。私は唯、啞然として、あれよあれよと眺める傍観者に過ぎない。秋山氏が、私に見せる緊縛の実態か、それとも秋山氏自身、私というSMの理解者を得て、さながら水中に放たれた魚の如く、のびのびと自由自在に、緊縛のプレイを愉しんでいるのであろうか。

彼と私の緊縛の異なる点は、私は女体に多くの縄をかけ、犇々と女体すべてを縛りつくすことが多いが、彼の場合、殆ど体に縄を使うことはなく、手足の拘束をもって、緊縛していた。いままで撮りまくってきた、フォトの、一枚一枚を眺めても、秋山夫人の体には一筋の縄もかかっていないのである。そのくせ、手足の束縛で、ありとあらゆるハレンチのポーズを次々と作ってゆくのであった。残酷ショウでの緊縛は、体に縄をかけている彼が、今こうして気付いてみると、全然、夫人

の体に縄をかけないのは、

明け暮れ、ひねもす彼女を縛りつづけて来た行為への反動であったのかも知れない。常に私は、女体に縄を使いすぎ、時によって暴走しては、顔までも縄目で雁字搦目に縛りまくることすらある。人みな、それぞれの好みとはいえ、今こうして緊縛のプレイに溺れる彼は、只管に手足の束縛にのみ走って、女体責めによって現われる、彼女の全裸の肉体の、微妙な反応を探ろうとしているように私には思えた。

かなりの時間、A感覚を責めつづけ、それも亦、半ばにして縄をとくと、彼は長椅子を引っ張り出して、秋山夫人を長々と仰向けに寝かせ、一本足を肘掛けにしっかりと縛りつけ、一方の足をぐいとそらせて両手でかかえさせ、両手と一本足を一緒に縛り合わせて、股裂きの緊縛を、まるで自分の思い通りに成し遂げていったのである。

もう彼は、すっかりこのプレイに熱中し、私の意図など構っている風もなかった。凡ゆる



る角度から女体の反応を確かめ、どの様なポーズをとらせるのが、夫人を歓喜の奈落へ叩き込むかを研究しているようであった。どの角度からとっても、露出が飛び込んでくるこのポーズは、やむなく白斜線を入れずには仕方のないものであった。

頭がボーッと重くなってくる。腕時計をみると午前一時半。深夜の狂宴は、この俛、彼の自由にさせておけば、とどまるところを知らず、延々とつづくに違いなかった。

× × ×

舞台やショウで、はかし得ない、本格的な秘戯のプレイに熱中する彼を残して、私はそ

つと洋間の戸を閉めて隣室へ移る。余りにも熱っぽい夫婦プレイの雰囲気、フト頭を冷やしたくなつたのかも知れない。

座敷机の上に置いてある「エロスの狂宴」をとり上げて、パラパラとめくる。彼に見せるために持ち出してきたのだった。ここに記載している、彼等の記事が、真実かどうかを確かめるため――。

ぼーっとかすむ頭で、もう一度よみ返してみる。清風書房昭和四十四年十月発刊（千二百円）性心理資料研究学会編、泰西サド・マゾの世界と、表題だけはもっともらしいが、内容はまったくお粗末きわるもの、絵画も



フォトもひどいものだが、もっとひどいのは巻末の解説と読物が支離滅裂、無茶苦茶な活字の羅列で、まるで判じものみたいである。そんなゲテモノを買ったのは、文中に秋山夫妻の記事を認めたからで、参考までにと買つたに過ぎないのであった。

「戦後に現われた残酷変遷誌」と題して、筆者不明の一文に、秋山夫妻のことが次のように書かれてある。

『……こうした人間のもつ「弱さと心理」をうまく把握してショーに仕組み、人気を得ているのが「変態ショー」と銘うって、東京・大阪と、舞台にクラブに活躍している秋山夫婦であろう。

この秋山夫婦は、人間の中に秘むサディズム、マゾヒズムをみてとり、普通の艶技舞踊では、お客のエロスに麻痺した眼や心を惹きつけることは出来ないし、だいいち劇場やクラブに売り込むことが出来ない。

夫の吉治氏は、愛妻の香織さんと呼んで、相談をした。このまま今まで通りの艶技舞

踊をつづけていては、劇場から締め出されるばかりだ。思い切って「鞭打ちショウ」に切り替えて、変態美学をショウにとり入れてみては……と、愛妻の香織さんに打明けた。

実際にこの時（四十二年）は、各劇場やクラブから断われ続け、秋山夫婦はその日の食にも窮していた時だ。なにか艶技を巧案して仕組まなければ、餓死あるのみだ。生か死か！

夫の切羽詰った頼みに、香織さんは承知した。それも自分のカラダを鞭の下に曝すことをだ。妻の承諾を得た吉治氏は、早速ケイコ場と、吉祥寺の工場ガレージを借りた。鞭も買った。よく西部劇にみる、牛追い用の牛皮で縫合した鞭だ。愛妻を鞭打つ稽古は、深夜行なわれた。悲鳴が近所、通行人に聞こえては、芝居のためのケイコも警察行きになってしまう。

「ピシッ、ピシッ」と裸の香織さんの白い肉体に鞭がきまった。鞭うたれるたびに香織さんは悲鳴と失神に襲われた。

これでは舞台に立つ前に、妻は死んでしまう。吉治氏は鞭の下にのたうっては喘ぐ愛妻をみて、（これではいけない）と思った。

いかに烈しく鞭打っても、痛みで失神させ

てはならない——。吉治氏の急務は、裸の妻を打っても、致命的な苦痛を与えてはいけな。鞭打ちの研究が始まった。半年後にやっ
と、いくら烈しく鞭打っても、失神する苦痛
を与えない技術を学んだ。

奥さんはケイコ中の鞭打ちに対して次のように述べている。

「初めのうちは、鞭が体にあたるたびに、その痛さと苦しさで気が遠くなりましたが、そのうちに、私のカラダが鞭に慣れたのか、よく物の本に書かれているように、被虐的な面が私にあったのか、失神する寸前の苦痛が、いつの間にか快感となって、身に満ちあふれるんですね……」

残虐と逸楽とは同じ感覚である——というボードレールの言葉が思い出される香織さんの告白だが、こうした残虐なケイコの末に初めて舞台に立った。（四十三年）東京の「カジバシ座」である。

赤、青、黄の照明が、舞台の中央にうずくまる裸の女体を映す。いわずと知れた半年後の、香織さんの桜舞台だ。

「ピシリノ」

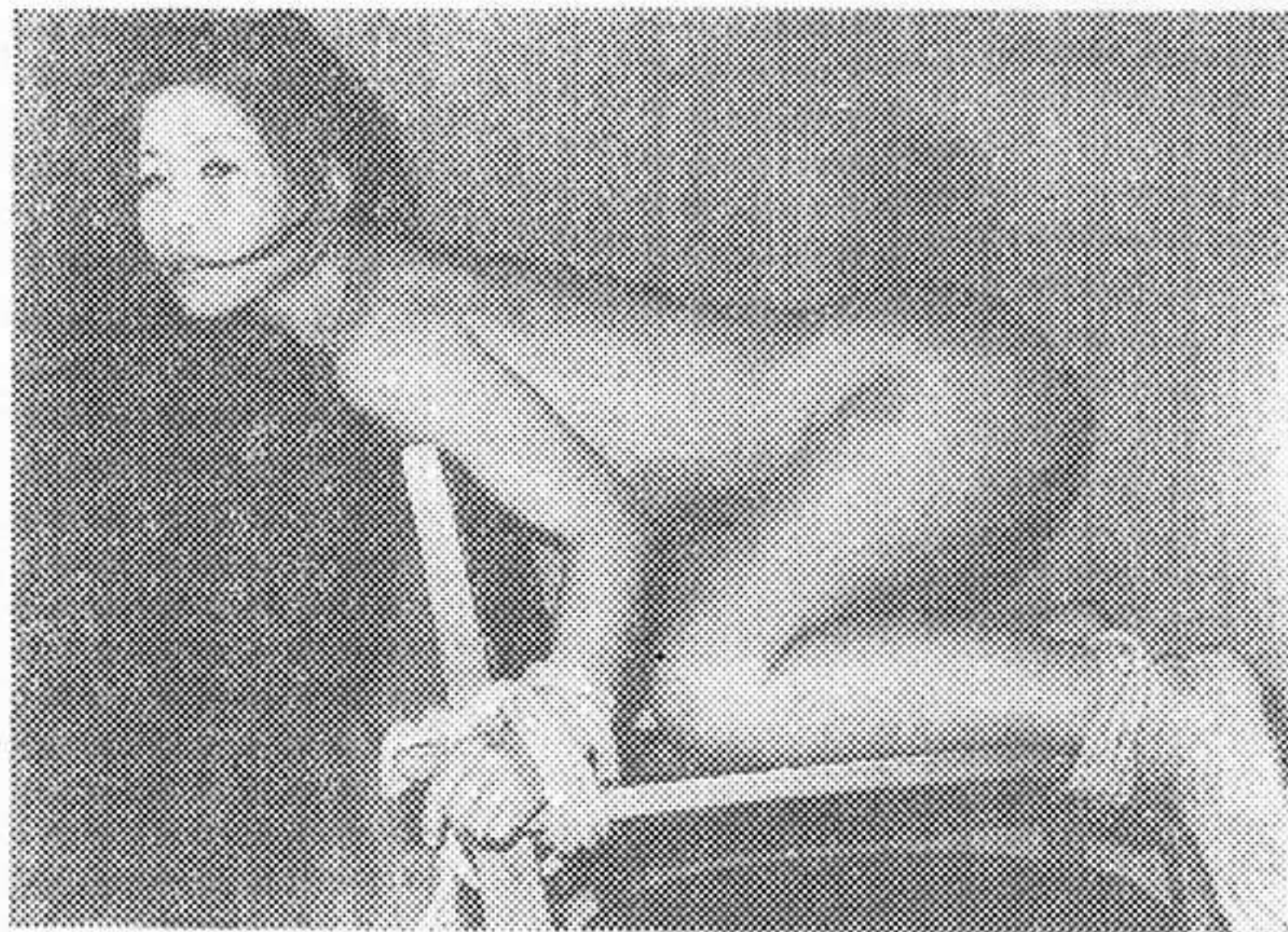
烈しく床を打った鞭が弾け散って、裸の香織さんの背に喰い込んだ。つづいてハダカの

ヒップ、脚に、骨にしみいる音を立てて、鞭が跳ねとんだ。

「ヒューッ！」

悲鳴が香織さんの口から突き上った。

この残酷シヨウにお客がまず驚天ノ妖しい興奮につつまれた。なかには舞台にかけ上って、吉治氏のふり下す鞭に縋る者まで現わ



れた。舞台は完全に成功をおさめた。それからの秋山夫婦は、各劇場、クラブから引っぱりだこになったことはいうまでもあるまい。こうした残酷SMシヨウに惹かれるのも、人間の心に秘む残酷性があるからで……』（誤字、迷言が相当混ってるいので、原文の俚だと読み辛いので訂正してあります）

以上のような、一篇の芸能苦心談である。別段彼等のことを悪くも書いていないから、この一文を云々するのも大人気ないが、凡そこれは噂だけを便りにしての、創作であることは間違いのない事実である。秋山夫婦にとっては、或いは有難迷惑かも知れないが、改めて真実を述べておきたいのである。

一、迷作では、四十二年は各劇場やクラブから断われ続け、その日の食にも窮していた」とあるが、私が始めて彼とインタビューしたのは昭和四十二年四月九日、京都大宮劇場で残酷シヨウ開演中のときである。中二日おいて、翌日編集長と共に、大阪ダイコーミュージックに二人を訪れ、その夜特別にプレイしていただいたのが、四十二年八月号で、カメラ・ハントに書いた『真夜中の宴』である。

既に四十二年はダイコーミュージックを皮

切りに、関西で大活躍中であつた。嘘ッ八もはなはだしい。況してやその頃、東京吉祥寺のガレージを借りて、鞭打ちシヨウのケイコをしたなんてことは、一片の根拠もない。その頃、二人は次々と各劇場を廻つて名声を博していたのだから――。

一、秋山氏は、シヨウの場合、必ず秋山美智夫で通された。吉治など名乗ったことはないし、勿論、秋山美智夫は芸名である。私は親しくなつて、彼の本名を知つたが、ここまでは発表する必要もないだろう。奥さんは芸名ローズ秋山で、私は寡聞か、度々のおつき合いで香織なんて名で呼ぶ秋山氏を一度もみたことがない。恐らくこれも、もっともらしく勝手につけた名前であらう。

一、何か艶技を考案して仕組まなければ餓死あるのみだ。生か死か！と、必死の意気込みのように書いてあるが、秋山氏は故郷の九州K県で、数戸のマンションを自力で建築し、万一この種のシヨウがダメになつた時でも生活の憂いなきよう手を打たれ、現在その管理を親戚の方に任しているが、月々家賃が確実に二人のものになっている。だから神戸で骨折の重傷を負つた時も、半年以上そのマンションの一室の自宅で、悠々自適出来た

のである。浮草稼業の、その日ぐらしのシヨウの芸人とは心構えが違うのである。

一、カジバシ座へは確かに出演されたが、初演はダイコーミュージックの筈である。それだけに、ダイコーミュージックのママさんと秋山夫妻は肝胆相照らす親しい仲で、時折ダイコーでみせる強烈なシヨウも、いわばママさんに対する、交わらぬ愛顧に応えてのものであつた筈である。

こうして書いてみると、「エロスの狂宴」の苦心談はまったくのデッチ上げのつくり話であることが分かるが、彼等を芸人の苦心談として描いている創作であると考えたら、別段とや角いうこともないので、それはそれとして或いは、いいのかも知れない。むしろ私の方が、忠実な余り、却つて正直に書き過ぎて、秋山氏からお叱りを頂戴するのも分からないが……。

迷作を読み返す合間にも、耐え入る悲鳴や恍惚の呻きは絶え間なく流れてきて、私の耳朶に灼きついてゆく。押し殺した彼の、微かな呻きが消えて、一瞬の静寂が、夜のしじまのなかに蘇える。私自身ホッとした思いで、そつと煙草の火をつけた。

蓬髪のひたいに、べつとりと汗を浮かべ、

するどい眼光に柔和なかげを宿して、秋山氏は戸を開いて、座敷に入ってきた。

「どうなさつたのです。私がいい気になつて勝手にプレイやつてるものだから、何か気を悪くなさつたのじゃ？」

「とんでもない。気をきかせたつもりです」

「そりやどうも……いえね、家内が気を使つたものですから、やめちゃつたんですよ」

「そりや悪かつたですね。貴方がすぐくハッスルし出したものですから、却つて目触りかと思つたんですよ」

「舞台がセックスだなんて割切つてるアレなんです。たつた一人の観客の辻村さんが消えちゃつたんじゃ、張り応えないんでしょう」

私達は暗黙の諒承点を認め合つて笑つた。

「それで奥さんは？」

「縄を解きましたら、流石に不自然なポーズを長く続けたせいにか、少々草疲れて、ソファにのびていますよ」

「眠いんじゃないでしょうか」

「幾分それもあるでしょう。一日三回のフロアシヨウをやつたあとですからね」

秋山氏は机上の「エロスの狂宴」のどぎつい彩色の表紙に目をとめる。

「何か面白いこと載つてるんですか、これ」

「ええ、あなた方がことが、のっているんでね。つまらない内容ですが」

「私達のこと？」

「よかったら読んでごらんさい」

巻末をパラパラとめくって、その個所を示して差出す。受取って、素早く、黙読していた彼の頬に、苦笑の翳が泛かび上る。

「ハハハ面白い。よく書けるものですねあ」

「戦後史の一頁として、こうした本にのるだけでも、一流ですよ」

「いや、とんだ一流……。でもいいじゃないですか。私達の鞭打ちを、こうした形で書いて下さる好意。私達の過去も、こうして伝説めいたものになってゆくのが、却っていいんじゃないですか」

秋山美智夫氏は誠に大らかであった。私のように一途に否定せず、それはそれとして認めるところに、芸能人の苦勞が、にじんできた。私なら嘘八百だと、コテンパンにやっつけるのに、誰からも可愛がってもらいたいという芸に徹したド根性が、書いた人の創作心を傷つけぬようにと配慮する、きめ細かい心くばりがあった。それが芸人というものであるのか——。中傷したり、批難する一文なら彼も抵抗を感じようが、苦心談の一席となる

と、彼も怒りようがなかったらしい。仮にこれを読んだSM趣味の人、何百人かがいたとしても、又それを真に受けて信じたとしても秋山夫婦は何ら傷つくこともなく、むしろ苦勞の成果の、残酷ショウとも受取られるだけに、プラスになる面があるようであった。

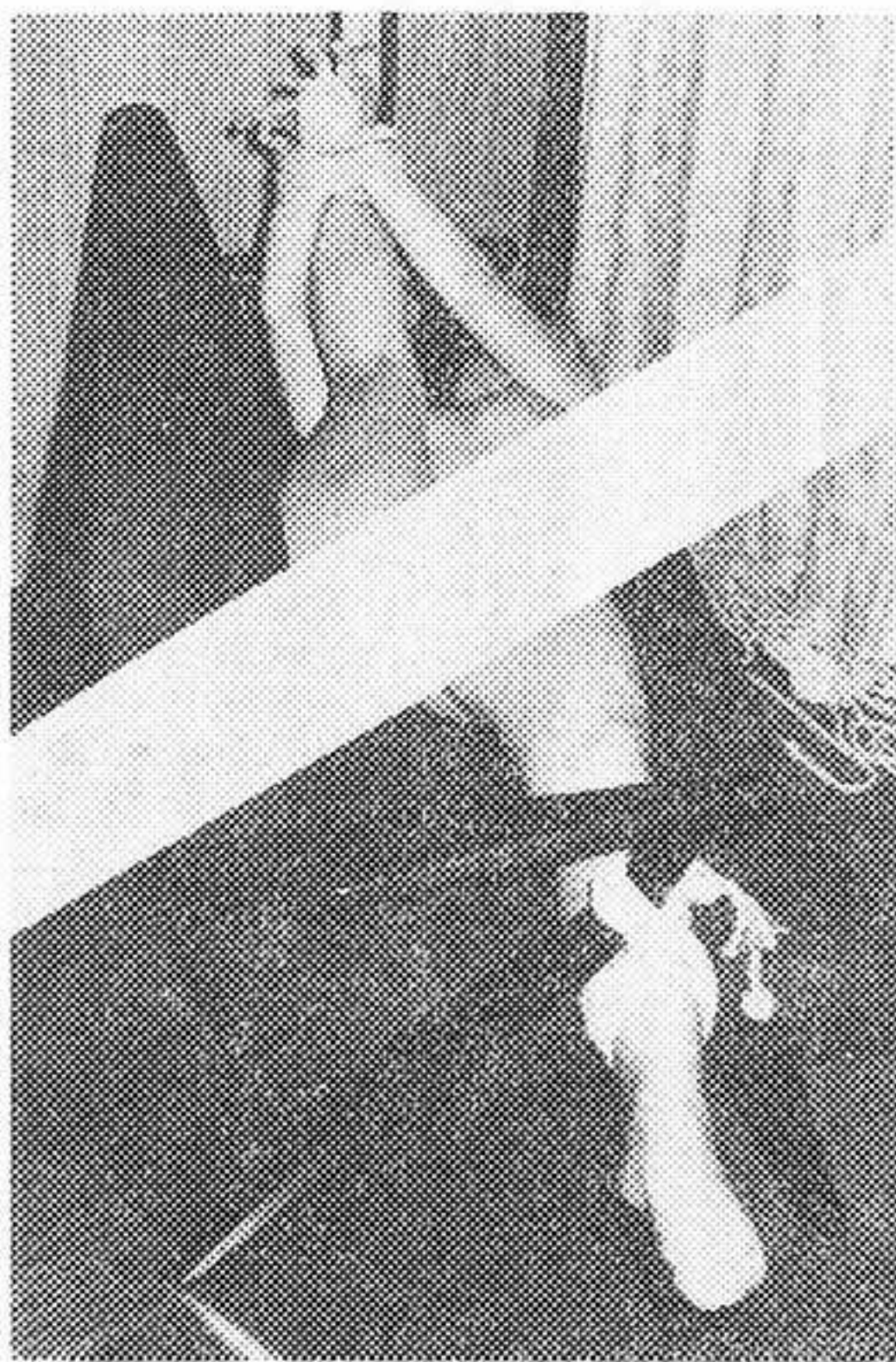
迷作だ、嘘ッ八だと内心きめつけているのは、案外融通のきかない私だけの独り相模のようであった。

「一度、家内にも読ませてやりますよ」
パラパラと絵画やフォトに、さっと目を通したあと、彼は元の洋間の方へと引返していった。あとに私も続く。

ものうげに、ソファに長々と裸身を横たえていた秋山夫人は、私達二人の出現で、あわてて身をおこすと、軽い羞恥の表情を泛かべてヒソと笑った。

「一寸、面白いよ。読んでごらん」

その個所を開いて手渡す。活字を追う彼女の頬に愉しげな笑みが、ただよい始める。



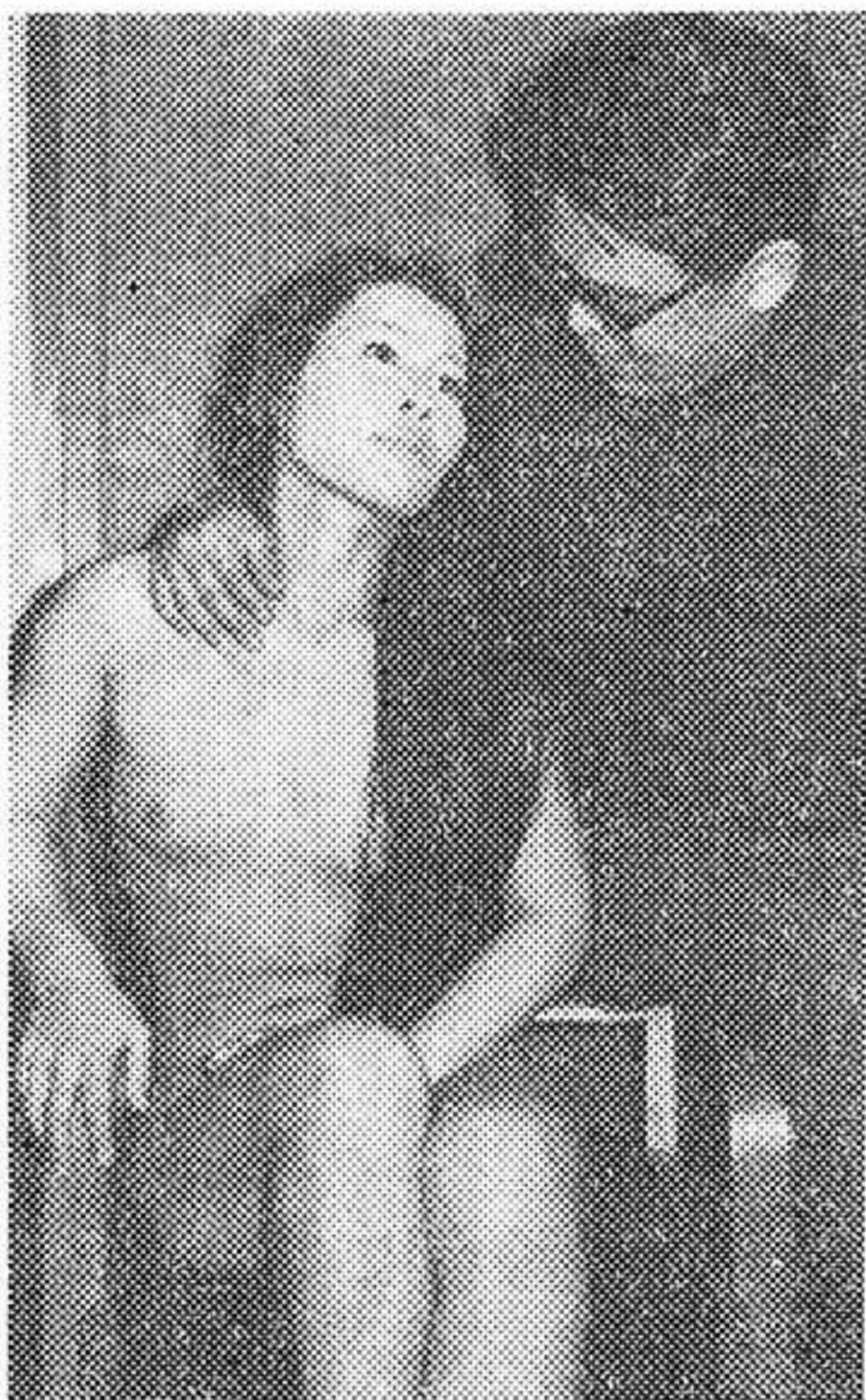
「まあ、こんなこと、書いて。光榮の至りだわ。どうして私達のこと知ったのかしら」

「それだけ有名になったのですよ」と私。
「でも事実は小説よりも奇なりですわ。本当のこと書いていただければ、もっと面白いですのに……」

本を措いて、彼女は芯から可笑しそうに笑った。

「始めてお目にかかった時、奥さんはMじゃないといっておられたけど、どうも私にはそうは思われない。そうでしょう」

「いえ本当なんです。あの頃は、そんな気持ちなかったのです。主人からいわれて、やむを



えず、やっていたのです。本心はイヤでイヤで仕方なかったんですよ。でも今は確かにMですわ。飼育されたのでしょうかね」

「これのいうことは本当ですよ」

と秋山氏が言葉を挟むと、つづけて

「随分、最初は心で抵抗していました。それは夫婦だから分かります。縛ったり、叩いたりするようなショウが、受けるはずがないというんですね。ところが、いつの間にか受け始めたでしょう。だもんだから、段々と気持ちに変化して来ました。より被虐性を強調しよう、コレはコレなりにすごく努力してくれました。私は嗜虐を強調し、コレが被虐を、より強めようとするものだから、自然、舞台

に迫力が出てきます。それと共に、各地でファンの方が次々と楽屋を訪問されるものですから、いよいよ自信をもってきたのです。舞台だけのつくりものの被虐じゃダメだ。心から被虐性になり切ろうと努めました。時偶、私達二人で行なう秘戯のプレイに、欲びと、愉しさを見出したのです。コレは私が飼育したとい

うが、本当は被虐の欲びを知ろうと、みずから身を投げ出してきたのです」

「だから当然、ショウにも迫力が出てくる」

「その挙句、全裸ってとこまで踏切っちゃったんです」

「濡れぬ先こそですね、私のよくいう」

「でも、お客さんにも、よりけりですよ。酔っ払いや、イヤな客には脱ぎません。それはプライドです私達の……。妙に絡んできたり真剣にやっている時に、聞くに耐えぬ弥次をとばされると、もうやる気がなくなるのです。本当はいけないと思うんです。おとなしくみていただいている大多数のお客さん方に……。でも、くそッと思うんですね。敏感です

よコレは。以心伝心というか、私がそんな気になると、もうコレも脱ぎません。所詮は相手次第ということですね」

「青木順子さんのショウに刺激されてやったあなたは、今もこうして、いよいよ円熟してきましたが、彼等の方はその後、一向に消息をききませんよ」

「辻村さんは、青木順子さんが病気でやめられ、向さんが名古屋で新しい組をつくってやるとかいつてましたが、二人は今もやっていますよ」

「えッ、本当ですか？」

「本当ですとも、例の先日のイレブンPMの出演の時ですが、読売テレビ局では、青木順子さんにも出演の交渉をしたのです。ところが私達が出ると知って、一緒ならイヤだと断わったそうです。私達はいいいのですが、どうして断わったのか——。私の想像では、やはり見くらべられるのがイヤだったのだと思うんですが」

私は初耳であった。向一也氏からは、その後、杳として連絡はない。気掛りの俤に、去る者は日々にうとしの例えでもう既に忘却の彼方の人であったのに、今彼等からフトきいた消息は、私には意外なことであった。



秋山夫婦は、実際の夫婦で、堂々と自分達を売出すバイタリテイに富んだ、積極的な人達であったが、青木順子、向一也のペアは、反対に有名になることを懼れる日蔭者めいた暗さがあった。二人は正式の夫婦ではない。そして向一也には、正面切って売出すことの出来ぬ秘密があった。男同志の約束で、それは触れないでおこう。

秋山夫婦は陽性であり、青木、向コンビは陰性である。演ずる残酷ショウとSM劇に、その相違が判っきり出ている筈である。

向一也は、何故もっとフランクに連絡してくれないのであろうか——。それが私にとって、いささかの不満であった。かつて、夜もすがら四帖半プレイに熱中し、全裸縛りの順

子さんを猪吊りにして深夜の戸外にかつぎ出し、果てはハルンの洗礼までした深い仲ではないか——。しかしあの時も、どこかに陰湿な暗さのあることは否めなかった。

今、ここに堂々とSMプレイに興ずる秋山

夫妻は、そうした暗いかげは、微塵もなかった。生活も亦、芸人に似合わぬ几帳面さと確実さを備えている。比較すればする程、相容れぬ性格の違いであったのだ。或いは秋山夫妻が出るのならテレビに出ないというのは口実で、若し秋山夫妻が出られなかったにしろ恐らく青木、向のペアは何かの口実を設けて衆人環視のテレビには出なかったのではなかったか。私にはそう思える、確固たる二人の秘密を知っていた。

私の思索を破るように秋山氏は、ツト私のカメラをとると、
「どうです、一枚コレと一緒にのところをパチリとやりましょうか」

と、好意的な口調で笑った。

「ああ、是非お願いしますよ」

私の言葉で、私山夫人は全裸の俤、椅子に坐る。その傍らへ、寄り添うようにして、肘掛けに腰を降ろした私。閃光が走る——。

そっと彼女の肩に手をやるとニッと微笑んで体を心なしか寄せてくる。又しても光る。夫の前でくちづけは、いくら図々しい私でも出来ないが、それとなく顔を近よせ、唇をねらうポーズに又一閃。秋山氏は快く数枚撮ってくれた。

「どうです、辻村さん。一度コレを縛ってやって下さい。辻村さんにいっぺん縛られてみたいなんていってましたから……」

「いいんですか——」

「いいですとも……ああ、そうだ。隣座敷の床の間に、おいてあった、幔幕の綱でどうです。一寸、変わっているかも知れませんよ」

彼の提案は面白かった。一度、誰かに試してみたかった太綱である。婚礼の家紋を染めぬいた五間の幔幕と共に、ビニールの袋に入れて、そのうち押入に格納しようと思いつつ、ついその俤になっておいてあったのに、彼は逸早く目をつけたのである。綿布をダンダラに繕り合わせたもので、肌当りも、さしてきつくはないに違いなかった。

五間の幔幕の綱だから、それ以上に長く、五間半近くもある。一間は六尺だからメートルに換算すると恰度十メートルぐらいある勘定になる。

立ち上った秋山夫人に正対して、長い綱を捌きかねながら上半身から後手縛り、ついでウエストをしめて、双臀で結び、下降して脚で結びとめる。柔軟な白い肌が、私の綱を吸いつけるように甘受している。ソファに坐った俣、私の緊縛の過程。そして縛られて佇立する彼女に、秋山氏はやや多すぎる程シャツターを次々きってゆく。平凡な縛り方も、彼以外の私という人間に、始めて妻を縛らすという行為自体が、秋山氏にとっては、非常に新鮮にうつたに違いなかった。或いは縛っている私より、他人に縛られている妻の、微妙に変化する容貌に焦点を当てているのかも知れなかった。

「じゃあ、ちよいと協同プレイをやりましょう。さあ、この椅子へ坐るんだ」

妻に坐るように命じて、私を手招くと、「三脚にカメラを据えて、三人でとりましょう。いいでしょう」

勿論、私の望む処である。すぐ準備して、長尺リリースをひく。

私と秋山氏は、彼女を左右から挟むようにして、女体なぶりを始めた。

「辻村さん、遠慮はいりませんよ。コレをうんと欲ばせてやって下さい」

彼は先ず手始めに、かなり長い接吻を、私の眼前すれすれで展開し、指が彼女の全身を這っていった。遠慮がちに私も、そっと乳房に、手をやる。子供を産まぬ堅い乳房は膨らみこそ乏しいが、私の撫でさする処為に心なし、かたさをまして、クリクリと私の指に当たった。溜息に似た吐息が、彼の唇で塞がれた口腔の奥から洩れ、いつしか秋山夫人の女体全身がわななき始め、悦楽を裸身にまざまざと現わし始めた。

唇を離れた彼は、夫人の顔を抱えこみ、「え、どうだ。辻村さんに虐めてもらいたいのか。早く返事せんか——」

と顔をゆすぶる。

「ハイ、虐めてもらいたいです」

「本心だな」

「ハイ、本心です」



「私の見ている前で虐められたいんだな」

「ハイ、あなたのみている前で……」

「よしッ、よくいった。では辻村さんのために、思いきり強烈に縛り直してやる。どうだ嬉しいだろう」

「ハイ、嬉しい……」

まぎれもない、言葉によるSMのプレイであった。夫は命ずることによって、自からの嗜虐の血を一入沸き立たせ、妻は、応えることによって、ひたすらに被虐の極致へ没入しようとしていた。夫の言葉によって、夫人の容相は、ある時は屈辱的に唇をかみ、ある時は眉をしかめ、眼を閉じ、そして悦虐の幻

想に洩面をつくって、被虐の願望を現わそうとしていた。

綱を握ると俄破と吊り上げるようにして立たせ、わざと荒々しく綱をといてゆく。私はことの成行きに、唯あれよ、あれよと傍観しているに過ぎなかった。私という人間とプレイする様、命じておきながら、やはり主役は秋山氏であった。しらずしらず私自身も、私山氏の言葉のプレイの渦の中に巻き込まれていたのである。そのすべては秋山氏の意志の中にあった。私も夫人も彼の意志の俤、動かされているに過ぎない。

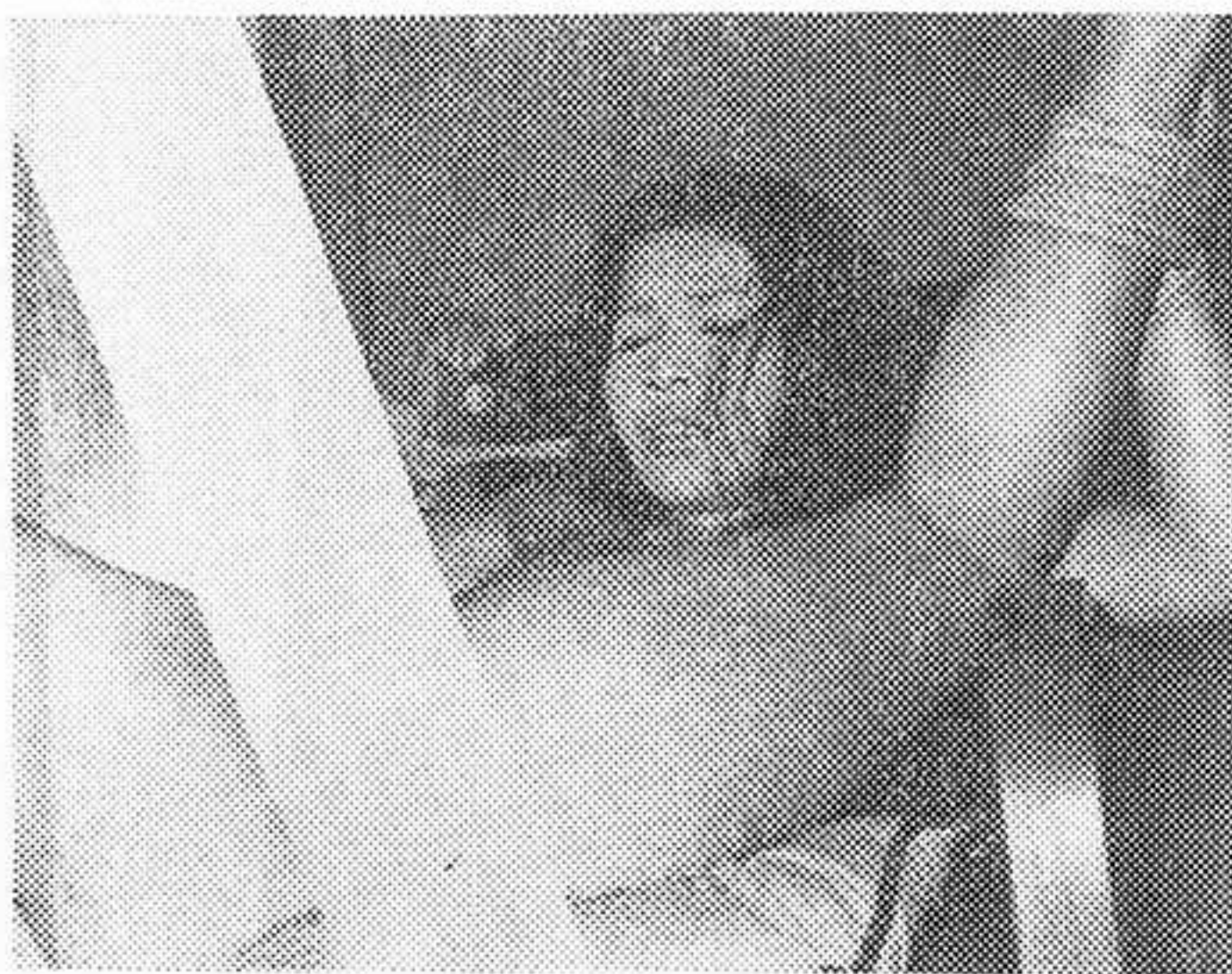
全裸の夫人を椅子に、半ば臥すように坐らせると、勢いよく片脚を高々と挙げて、手首と足首を素早くしっかりと縛り合わせ、椅子のもたれに引っ張って、残る片手首をも、しっかりと椅子の背に固定させる。ぐっと拡がった腿を、更に押し拡げて、自由の片脚を、椅子の脚部にしっかりと結びつけ、倒れ込んだような、身動きの出来ぬポーズにして、私の耳にヒタと唇をよせると、

「さあ、責めてやって下さい。バイブも、どしどし使って下さい」

「いいんですか。でも、やりにくいなあ、あなたの前じゃ」

「それじゃ、私のやる通りやって下さい。これから色々と羞恥責めを、アレの口からいわせますから……」

苦味走った彼の顔に、さっと一刷毛、鋭い快虐の色が流れ去ると、平手がパシーンと剥き出しの太腿部に炸裂して小気味よい音を立てた。「ヒューッ」と眉をつり上げて、夫人は被虐の相を満面にあらわす。次々と猥らな言葉の応答が、くりかえされていった。



金色のローソクが、女体の中心で、メラメラと赤い炎を、はためかせた。

やや斜めに突っ立ったローソクは傾斜の線に沿って溜り、鋭角をつくって臘滴の氷柱の端から、ボトボトと、したたり落ち始めた。

彼は黙って私に、弾丸型のバイブレーターを握らせた。それで如何ようにも自由に責めよというのであろうか。

脚部の細い辺りから太々しく拡大するあたりへかけて、響音をずらせて、徐々にバイブの尖端が這っていった。

悦虐の表情を、たわわに実らせて秋山夫人は、必死に呻きを殺し、唇を血のにじむほどに噛みしめて、ともすれば吐き出る、恍惚の疼きの声を、ぐっと忍ばせて耐えていた。

抜きとったローソクを片手にして、秋山氏は、夫人の女体の上で徐々に倒してゆく。

斑々と、裸身を黄金色の蠟滴が染めて、彼女の悦虐の呻きは一入、高まって行く。

熱蠟の責苦と、バイブの屹立で、表情は刻々と変化してゆく。

蠟滴によって染め上った女体にのしかかるようにした秋山氏は、今しも激しく鳴悦を始め、歎歎する彼女の唇へ、点火した俤のローソクを押し込んで、ガッシとくわえさせたの

であった。

あごを突き出して、蟬涙の流れを防ぐようにローソクを直立させ乍ら、彼女は声にならぬ呻きを鼻腔より洩らし、やがて忘我の境がおとずれるのを、私はこの眼で、ありありと見たのであった。

× × ×

もう午前三時を廻っている。丑満刻の外界は寂として音もない。深夜の狂宴を果てて、充実し切った飽和状態で、夫人はぐったりと依然としてあの強烈なポーズの俛、眼をつむって、肩で大きく息をしていた。

いつかな夫は縄をとこうとは思はない。そして妻も亦、解いてくれといわない。プレイの残香を味わうように、彼はソファに凭れこんで、臘涙にまみれた妻の無惨な姿に、じっと眼をやっていた。ノロノロと私は立上る。彼等の為におそくより沸かした風呂の湯は、数時間放置して、もう、さめているかも知れない。湯を温めるべく、冷え切った真夜中のボイラーに火種をつくって点火する。

仄暗い通路にうずくまり、やがて燃え上った火に石炭を投げ込みながら、幻想のように臉に浮かぶのは、今もあの俛であるかも知れぬ秋山夫人の乱れそめにし極限の痴態であっ

た。私の眼前で繰り上げられた夫婦の愛情の交歓の生々しさに、所詮私の存在が、二人の愛情を激しく燃焼させるピエロに過ぎないことを、まざまざと感じたのであった。

人間秋山夫妻——、そこには華やかなフロアショウで、万雷の音なき拍手をうけて、残酷SMショウに全精力をふりしぼる二人の姿はなく、一個人の単なる夫婦に還元した、同好者のみが味わい、知ることの出来る、ナマの夫婦プレイの人間像がありありと、いきづいていたのであった。

私は二人を「残酷ショウ」の秋山夫妻としては受取っていない。SMという絆で結ばれた、秋山氏個人の夫婦プレイの媒介者としてその場に居合わせたのである。

そうした心の結実が、秋山夫妻のこうしたプレイを私に描かせる動機でもあった。

先に発表した「真夜中の妻」はショウマンとしての秋山夫妻——。

そして今ここにハントして描くのは一個人秋山氏夫妻の夫婦プレイに過ぎない。

燃えさかり始めた石炭の火を確かめて部屋に戻ると、秋山夫人は、夫の胸に顔をうずめて、ありありと虚脱の疲労を泛かべていた。フロアにこぼれ散る、臘涙の残骸——。

戦いすんで日が暮れて……そんな懶い空気が部屋に充満していた。

「もう一度、お風呂どうですか？」

「どうも、おそくまで御厄介かけちゃって。

じゃあお言葉に甘えていただきますよ」

立上った秋山氏は夫人の腕をとった。全裸の俛、部屋を出た彼女を見送って、私はしみじみと、堅い絆で結ばれた秋山夫妻の倖せを祈らずにはおられなかった。

夜明けまでの短い数時間——あれを思い、これを臉に泛かべて、恐らく私は眠れないだろう。いっそ、ぐっすり眠りこけているであろう荆妻を起こして、無理矢理にでも、私も妻を相手に、激しいプレイのひとつときに、憂き身をやつして見たくなった。

それしか、鬱勃と燃え上るSの感情の吐け場所がない様な気持であった。

サラサラと微かに聞こえる湯を使う音。フト静寂について風に流れて聞こえる、秋山夫人の笑い声——。

いきり立つ神経を押えようもなく、妖しい幻想がいよいよ渦を巻いて、私は寝室へと引っかえしていった。ジーンと後頭部が疼く。体調に悪いとしり乍ら、そうせずにはいられぬ私であった。

(終)



変態処方箋 守屋文雄

『変態』という言葉は、私達が中学校で習ったように、昆虫がその生長の過程で、卵、幼虫、蛹、成虫というように、その形態がさまざまに変化するのを指している。

哺乳動物に於ける例のように生まれた時から死ぬ時まで同じ形態というのが多いが『オタマジャクシは蛙の子』という通り、子と親の形が違うのが生長の過程で起る生物の『変態』である。

従来、女の子たちが連発したエッチという言葉はヘンタイの頭文字のHが由来だと思いが、使われている意味は全然、違う。これはハレンチという言葉の元の意味は破廉恥であるが、実際に使われている意味が全然違うのによく似ている。ハレンチといえば外来語の

ように思っている人もあるというから面白い。

扱って私達が本誌などで使っている変態というのは、所謂変態性欲のことで、昆虫や蛙などの変態のことではない。セックスの面で正常でないもの、アブノーマルなもの、異常といえるのだが、正常といわずかしい。なにしろ千差万別の性格に対して一線を劃そうとしてもそう簡単に色別出来るものとも思えない。大まかにいって、強いて正常異常の区別をつけるとすればその行為が前戯とか後戯とかの範囲内で行われるのであれば、正常といってしまうのではなからうか。即ち性器の結合という最終目的を達するに至るまでの過程で種々

のテクニクを弄するのは、あながち行き過ぎと見るのは当たらないだろう。しかし中には最終目的の性器の結合というのは必要としないで他の行為で以て代替しようとする者がいるが、こういったのはいささか行き過ぎの感はあるが、これとても、程度の問題であって時には、そういうこともあるという人もあるに違いない。

旱天が続きすぎても異常であり雨も続きすぎれば異常である。しかし、どの程度が異常であり、どの程度が普通なのかわからない。

縄を持ちだしただけで変態よばわりされる時代から、「あら、あなな縄を持って来なかったの？」と縄を忘れてきたら、若い女の子から馬鹿扱いされる時代は、まさか来ないと思うが、世の流行、世の移り変わりというものは、それほど速いのであるから昨日不思議がられたことでも、明日は許容されることがあるから面白い。

クリニクスなんかは今まではHの最高のように排斥されていたのが、今では正常な行為の中の主要なテクニクの一種とさえ見られていたのだから、昨日の淵は今日の瀬となる世の中の移り変わりの激しさこそ、げにも恐ろしいものであると云わねばならない。

私達は従前、セックスの面については余りにも研究を怠り過ぎたきらいがある。セックスのことは一切タブーとして暗黒の中に葬り去っておいて、さて少し変わったことが起こると大騒ぎをするといった有様であった。それが現在では大いに啓発され公開のテレビで女体を緊縛するへ責めのショーが実演されても非難されない時代になってきている。

私はこれは大きな進歩だと思っている。セックスを徒らに神秘のベールの中に閉じ込めておかないで衆知を集めて大いに研究してはどうだろうか。殊にセックスの中でアブノーマルと一般に思われている部門については、より一層の研究が必要だと考える。

食欲については食料品から料理の方法、或は食事のマナーから栄養についてまで、まことに広範囲に亘って研究し尽されているにも拘らず、性欲については神秘のベールをかぶせたまま放置されているのが実情である。これは、何としても片手落ちであって、攻撃し排斥する前に一度ゆっくりと研究してみてもどうだろうか。

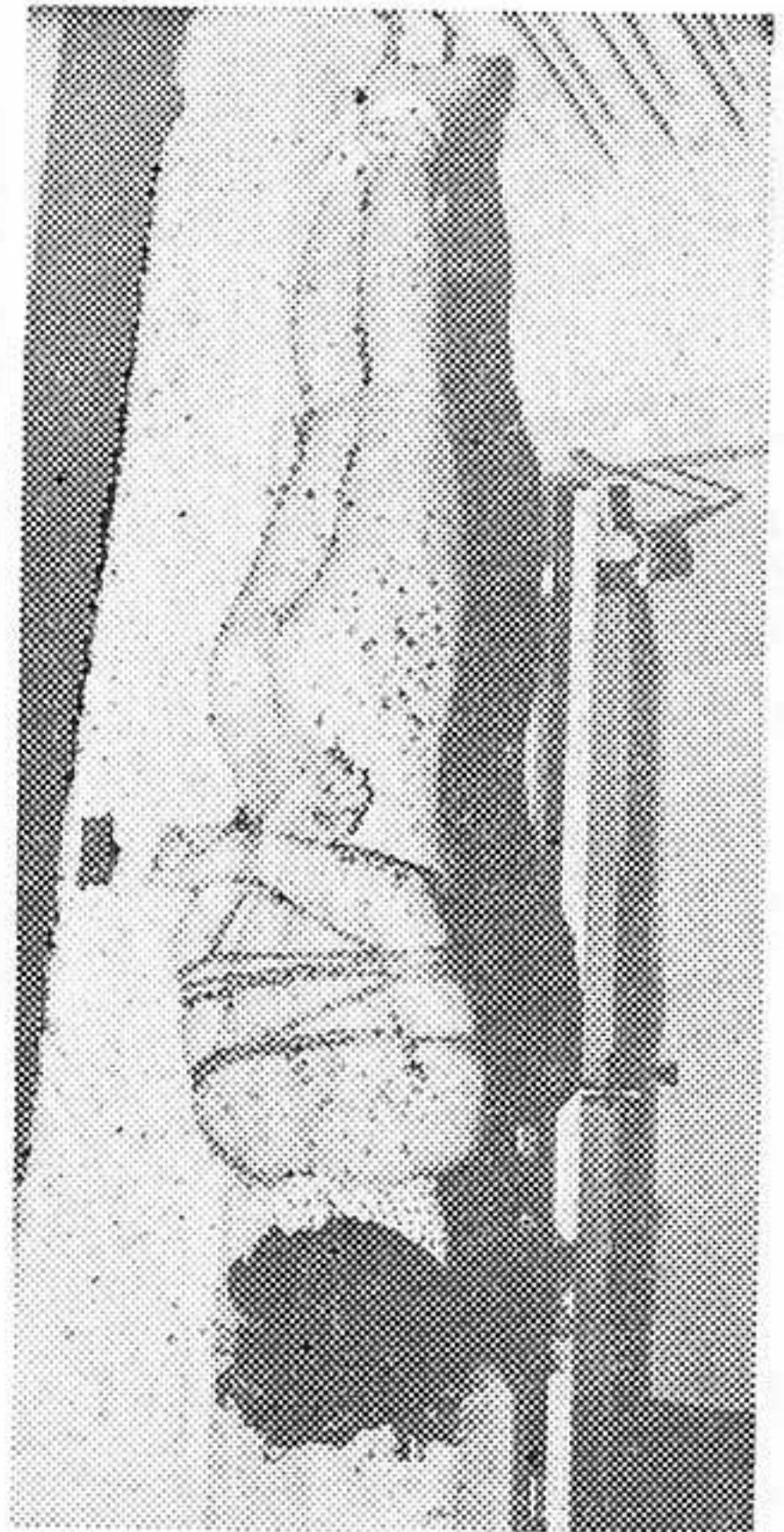
逆吊り記録

大橋美代子

同封しました写真は、夫から受けた「逆さ吊り責め」の時の記録です。

手足を縛られて、机の上に乗せられた私の足を、夫は天井に吊つてから机を外しますから、吊り上げるのではなく、吊り下げることになるわけですが、最初、この逆吊りにされて、抱えている手を離された時は、本当に怖くて大声を出してしまい、猿ぐつわをされてしまったのです。

その後、何度か吊られて、今では30分ぐらいなら耐えられるよう



になり、声も出すことはないのですが、夫は、いつも猿ぐつわを忘れません。

近頃は、このままで鼻責めを受けるようになりました。

直径一センチぐらいのビニール管が二本、逆吊りで上を向いている私の鼻孔にそれぞれ差し込まれます。

そして、鼻より五十センチほど高いところにイルリガートルが吊られ牛乳が満たされて、それに片方のビニール管が接続され、もう一本のほうも、顔の下に置かれた容器に連結されてから、イルリガートルの留挟を外されるのです。牛乳が管から鼻の奥を通って下の容器に落ちて行きますが、相当に苦しいプレイです。

縛り映画鑑賞

私の採点

岡田康彦

『狂った情痴』

企画・花巻京太郎、脚本・団鬼六、と団先生が二つ名前を使つての大サービス。胸トキメカシテ見せて戴いたのですが……。残念ながら見事な期待はずれ。

一人の魅力ある女のために、前途ある男が転落してゆく物語。

(この女優さんが鬼プロ製作、賀山茂氏フォートによる「緊縛写真集」でモデルになっていた紅真知子なので、余計に期待したのだったが……)

ただ、筋書とは関係なく、誘拐されて物置小屋に連れこまれた令嬢が、着衣を奪われて後手に縛られ、胸に回された縄尻を天井に吊り上げられて棒でしばかれるシーンが、カラーでもあり、女優の素人っぽさ(縛りシーンだけに出てきたような)と、バストの豊かさでなかなかのもの。が、少なくともあと二、三回の縛りシーンは欲しかった。

ヤクザ、令嬢誘拐……と、団先生お得意の題材が揃ったのに、なまじ二枚目の良心男? の出現分だけ面白味を削いだのではないかと思う作品。(七十点)

『女の七ツ道具』

仲間割れして大金を持ち逃げしたヤクザ男が、故郷の幼なじみの女のところへ立ち寄ったため、追ってきたヤクザの一味にその女が捕えられる。

親分と情婦の前で、着物の上半身を剥がれて後手縛りにされた女が罵りまわされ、それに刺激された親分と情婦がハッスルするというシーンだけのもので、映画自体は最低といえよう。(六十点)

『秘密クラブの女』

売春組織のスケコマシ係の男が人妻を誘惑するのだが、初恋の女に似ているために溺れてゆく話。

ふんだんに秘密シーン(セックス場面のみで、縛りシーンなし)場面はあるが、お目当の縛りは、ファストシーンだけで残念。

桂奈美が山中で襲われ、ネグリエを剥がれて松の木に後向きに立ち縛りの上鞭打たれるのだが、彼女の相も変わらぬ豊かなバストが魅力的なだけに一シーンだけでは物足りない。(六十点)



—第七十一回—

辻 村 隆

先月号の、金原奈加子のハント『童女流賜譜』のフォートをみて正直いってガッカリした。流賜シンのフォートは殆どカットされて掲載された三葉も、肝心のところはトリミングされている。これでは流賜譜と銘打って書いたのに羊頭狗肉どころか、屑肉みたいな恰好になってしまった。勿論、エネマシリンジやポンプをアークスに挿入している個所は、例によって白い斜線で逃げたのであるが、それでもやはり都合が悪いとみえる。どの程度まで掲載可能なのか私には分からないが、これでは流賜シンは殆どダメということになる。結局、カメラ・ハントで流賜は出来ないのだろうか——。数ある流賜フォートのうちから、比

較的おとなしそうな、安全なものを選んだつもりであるが、クリスタールに興味のある私だけに、このフォートのカットは一寸ショックであった。そうはいうものの、この危な絵式フォートによって、若し何かのことで引っ掛かったら迷惑するのは矢張り書いた当の本人の私である。読者へのサービスも過ぎたるは及ばざるが如しとなると、石橋を叩いて渡る式の、編集部の方針を、一概に、けなすわけにもゆかない。痛し搔ゆしというところか。

× × ×
毀譽褒貶は世の習いであるからカメラ・ハントについての、お褒めの言葉、お叱りの言葉など、いちいちごもっともと、有難く拝読

し、それに対しての反論や批判はしないことにきめているが、先日或る方が批判しておられた、斜線が余りにも多すぎる、もっと綺麗に撮れというお言葉には一寸、困った。

御存知の通り、私のカメラ・ハントのフォートは、次々と異なる女性をハントしては、私自身が愉しんでいるのである。偶々、それをペンにして誌上に発表し、いささかの原稿料をもって、次のハントの費用のたしにしている実状でハントしなければならぬ義務もなければ、又このハントしたテーマを誌上に発表する義務もない筈である。謂わば、もって生まれたSM探求根性と、駄文を弄するのが好きな助平精神のあらわれが、かくも飽きもせず、毎月発表するという結果になったのである。

自分の金を使って、好きなようにハントする場合、何の必要があって、わざわざ隠蔽したものを撮ることがあるのだろうか。

況してや、私の近頃の方針が、フォートに重点を置くというよりプレイ中心になっている今、所詮フォートはプレイ経過の副産物である。

白い斜線は醜い。もっと芸術的

に撮れと仰有る方——。貴方が私のスポンサーにでもなつて下さるのなら、喜んでその方針に従います。弥次馬的に、とやかくいう、遠吠式のものでしたら、飽くまで私はゴーイングマイウェイの、自分のハント式でゆくより仕方がありません。理窟ですが、そうじゃありませんか——。

× × ×
私だって喜怒哀楽の激しい、至って平凡な人間だから、けなされるより褒められたら嬉しいにきまっている。二月号の「一寸一言」の義憤生氏が山本八郎氏に対する私のファンの反論として書いて下さったのが、やはり嬉しくて、次号で呼び掛けた処、早速編集部宛で回送があり、住所もお名前も知ったので、ホンの感謝のしるしに梨花悠紀子のフォートなど数葉お送りしたら、折返し丁寧なお礼状いただき、三月に訪問される由を聞いてこられた。慾得ぬきで、こんな方には、私の累積した膨大な資料を、ひねもすお見せしたい気持ちになるのだから、甘いものである。

既に過去の人となった新宮明夫氏が所要で来阪し、私方で一泊したが、もうかなり長い間、奇クか

ら離れておられる様子であった。かつて奇くに流麗な艶筆を振った四馬孝氏より先日電話があったが生憎の留守中で再び連絡を待ったが、掛かってこない。あの人、この人と、細い一本の同好の糸で辛うじてつながっているものの、読者層も年々変わっていることは事実である。奇くという珍本を発見し、かつかと心を燃やして熱読し、やがてマンネリズムになって、いつとはなし遠ざかって行く人に代わって、又入れ換り、立ち換り、愛読者が現われてくる。相手代れど主代らぬは、二十数年来、飽きもせず、奇くに細々と愚作を発表する私独り。紅顔の美青年？ だった私も、この六月には早々と、おじいちゃんになる。思えば長いつきあいである。

なヴェールに包まれたもので、私には判っきり人妻だといった川路叢子さんが、塚本氏には人妻でないといったというが、そうなる私か塚本氏かの、どちらかが欺されていることになる。ハントする女性が、人妻であってもなくても何らかかわりのあることではないが、何でも当の川路さんが、私に会ってもう一度、話したいことがあるとか、いつてららしい。それによし、今一度あって、彼女の魔粧のヴェールを剥がし、その真相を発表すれば、又一篇のカメラ・ハントが出来上る。そうは思っても、の、会えば会ったで、又ぞ彼女、妖しい魅力に惹かれて、くたくたにされるのが、オチかも知れない。

続篇の人——安井喜久子、佐々木真弓、薊魔子、伊吹真砂子等の皆さんで、すぐく積極的である。それに引きかえ、小悪魔の群れの小原真澄、一宮ユリ子、桐山英子など、全然その後の消息も掴めない。浮草の如く、その場で流れてゆくカメラ・ハントを、再登場してもらって回顧しようなどという考えは、所詮、老いゆく私の、感傷的な懷古趣味に過ぎないことを、つくづく知らされたのである。

人モデル女性を、かため撮りして二泊でもすれば、十万円仕事であるが、時流に乗って儲かって仕方のない会社の専務氏、安いことですと大乗気である。

或いはこのはなし実現して、専務氏と共に、東京ハントに出掛けられるかも知れないが、好きな道とかなれば、奇特な方もおられるものである。乞御期待というところであらうか——。

M七〇生といっても、もうこの人も過去の方だが、今もコッコツと独りピアシングに耽っておられ先日その過程を記した長文をいただいた。両乳首を穿孔して、かなり太目のものも貫通出来る様になったという。自から称して乳首山と名づけ、一輪ざしの花を飾り、いよいよ拡大した鼻障子の穿孔とつないで自虐しきりである。いよいよ次は、男性自身の最後の穿孔にかかれるそうであるが、唯困るのは、会社での定期検診の場合医師に発見されるのを非常に懼れている様である。思いきってやめられないのは、美枷輪生、佐々木耳環生も同じこと。M男性対S女性のハントなども案外、面白いかも知れない。

牧高志先生へ捧ぐ
妖しい日本美の探究

山本五郎

牧高志先

生に一筆啓
上します。

久しぶりに
手にした本
誌十月号の
『帯揚げは
悲しからず
や』に満腔
の敬意を表
します。先

生の和服に
関しての御
造詣の深さ
には、かね
がね敬意を
抱いており
ました。

私は本誌の
華やかなり
し頃から



の愛読者にて、その頃本誌、風俗
草紙、裏窓が妍をきそっておりま
したが、その後、悪書追放運動に
つぎつぎと消えてゆき淋しい限り
でした。

人それぞれ好みはありましょ
うが、日本女性なれば、やはり振袖
姿の正装で華やかな色彩を紐縄で
乱してこそ

最近号によせて

花ざかり

菅原敏夫

内容充実、益々おもしろくなっ
てきた最近の奇クだが、なかでも
セト・ヨシヤ氏の「余計なコトか
も」「そぞろなる空言」の二篇が
印象に残った。

△まさに、一服の清涼剤▽

氏独自の論法には、いささか泣
かされた。それにしても、天下の
御意見番的存在は、我々名もなく
貧しい読者にとって「タイワン坊
主」並み、モタモタしてたら身ぐ
るみ引き剥がされそう。ボク自
身「これは、迂闊なことは言えな
いぞ」と、内心ビクビクものでフ
ンドシを締め直しているホド。

△まったくオソロシイ人▽

しかし、その反面、労り慰めの
言葉が文中随所に見いだせ、そこ
が氏の善いところであり、口ほど
悪い人ではないような気がする。
とは言っても、槍玉に挙げられた

御当人さん達にしてみれば、腹の
中が煮えくり返っていることだろ
う。

氏流儀に言わせてもらえば、我
々も何等かのかたちでフラストレ
ーションを解消しているに過ぎな
い。

所詮さびしい男の独り言。

セト氏には、名の木も鼻につか
ないことを祈りつつ、今後に期待
したいと願っている。

○ ○

我々、隠れたる辻村隆氏ファン
として、義憤生氏の「一寸一言」
には、大いに泣かされ溜飲を下げ
た逆転のホームランであった。

山本八郎氏の批評文に対するボ
クの読後感、それほど嫌味は感
じられず、氏には同情にたえない
が、人それぞれの見方、感じ方が
あるのでいたしかたないことと思
う。

本誌に捧げること二十数年。艱
難辛苦あらゆる弊害を乗り越え、
本誌を今日あらしめるために粉骨
砕身努力し、導き育てた辻村氏の
功績には唯々頭がさがる思いだ。

○ ○

“盗作”……なんと屈辱的な言葉
だろう。

十二月号（四十四年度版）奇ク

真の女性の美しさが発揮されることと思います。

伊藤晴雨画伯が妖しい歌舞伎の舞台上で責めに開眼されたとか云われますが、私も同感です。

同封しました写真は私の作品です。私好みの衣裳もいろいろ取り揃えました。いずれも三尺の大振袖、長襦袢から打掛まで三十点ほどあります。

モデルは妻です。正装から長襦袢姿までフルコースを楽しんでい



ます。カメラ歴は十年、今ではポラロイドでカラー写真を撮り、和装姿緊縛の妖しい魅力に酔っています。又最近8ミリでの撮影もはじめました。ここまでするのに、いろいろとありました。出来れば体験談を書いてみたいと、思います。同好の士との会話、文通が出来れば幸いと思いますが……。

牧高志先生の着物評に、ついペンを持ってしまいました。もし先生に興味がおありでしたら誌上でお返事賜れば幸いです。

◎八編集部より▽ライカ判密着の写真は素晴らしい作品です。お差支えなければご住所お知らせ下さい。

沼正三を捜せ

週刊誌記事

とやま・かずひこ

沼正三「家畜人ヤプー」公刊の短文を送稿後に発売された週刊誌「平凡パンチ」2月23日号(2月

12日発売)に、本文二頁を割いて「マゾヒスト、沼正三を捜せ」を特集しているのが眼についた。作者(沼氏)の想像似顔をカットにして、ショッキングな書きぶりである。

○マゾヒズムを描いた、ものすご

サロンにて、ジョゼフ・ケッセル原作『昼顔』の盗作? 問題を読者に提示していた人があった。

仮りに盗作であったとしても、果して我々に裁く権利があるか? 否。そんな義務すら断じてないと思う。読者を煽動し、衆を頼み、もっとも下劣な方法でリンチにかけ、制裁を加えるようなものだ。

原書を熟読した結果、海賊版であると確信し、そのうえ尚且つ、盗作と云う最も屈辱的な烙印を押したいのなら個人でその筋に御注進すればいいことであって、一切

い小説が出てきた、『家畜人ヤプー』。ところがこの小説、作者がダレなのか、さっぱりわからないのだ。

「『家畜人ヤプー』の作者はダレか」

「二転三転する沼正三の正体」

さて、このとんでもない小説『家畜人ヤプー』——昭和三十二年から、八奇譚クラブという、いわばサディズム、マゾヒズムの専門誌に、二十回にわたって連載され、一部読者に大反響をよんだものだ。三島由紀夫氏なども連載中からその価値を認め連載終了後、各出版社に出版を強くすすめたほ

我々読者の関知すべきことではないと思うのだが、如何なものだろう。

○ 火焰ビン。

○ 断絶。

○ 愛の不毛。

○ 東京サバク。

○ ミニ&マキシ。

○ ……

子供が大人をからかい、大人が子供をブットバス世の中。『いやな渡世だなア……』

○ どだった。……

○

高名な作家説、某国立大学教授M氏説など、沼正三の正体については、ここでも、決定的なナゾを解くまでには至っていないが、今回の単行本刊行を契機として「沼正三」という伝説めいた作家の名が、またもや脚光を浴びはじめたものである。

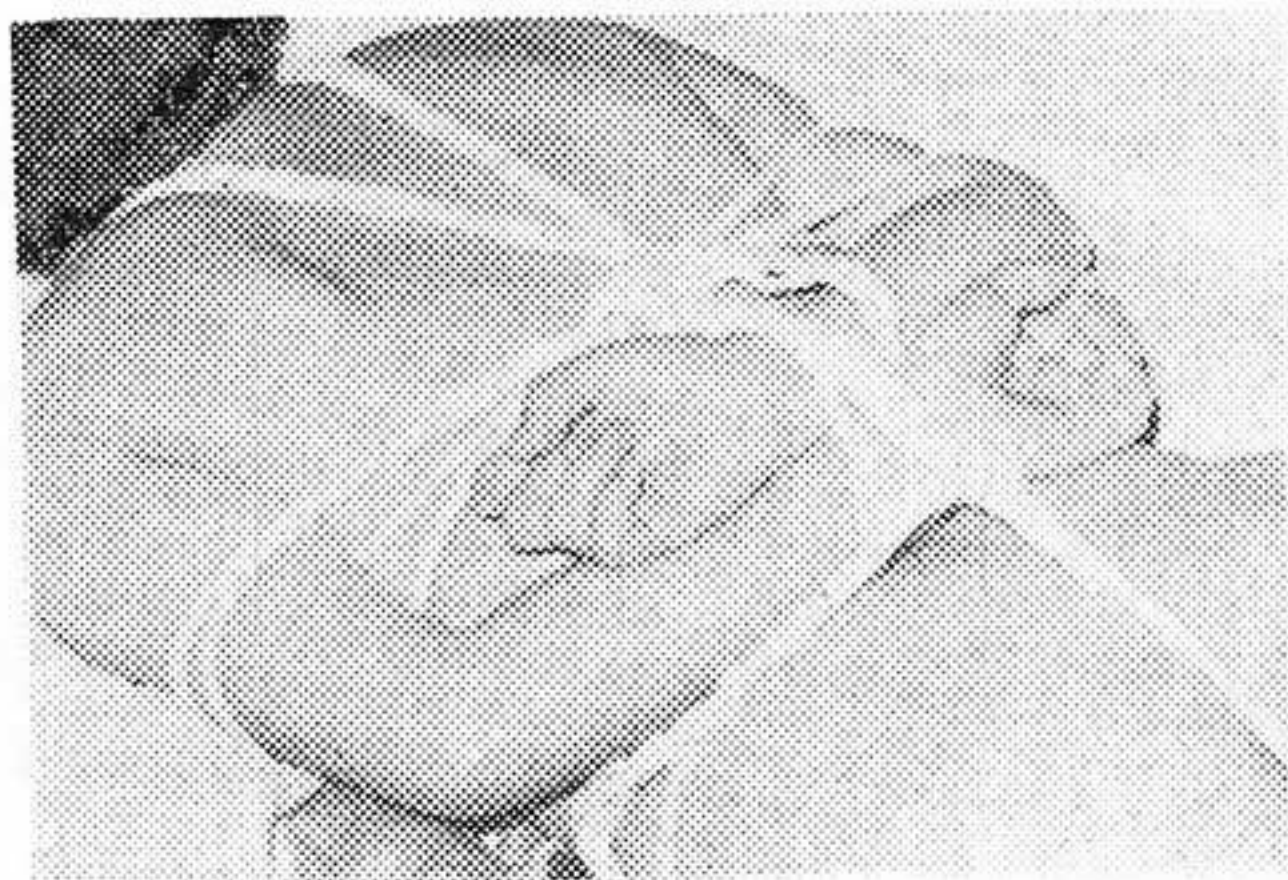
尚、前出M教授が、某女性にコングランして、グラスにとった半分ほどのそれをグイと呑んだ——ところまで説明しているが、いずれにしろ興味ある出来事というべきであろう。

短 信 往 来

拝啓、編集部殿

東 一 郎

御誌は、毎月二十五日が発売予定日となっていますが、三月号の場合、二十五日が日曜日に当るものだから、ひょっとして二十四日発売に繰り上げられるのではないかと、勝手な憶測をして書店まで廻り途を試みたのですが、みご



とに空足。……そして翌日、約束の日なるが故に当然と、その気を出直してみてもガッカリ。だが、こは未配達に違いないと気を取り直し、日曜のこととて時間がありません。電車に揺られて中央部の書店を三軒探して廻ることも出来た訳ですが、結果は空しくくたびれも受け。丁度、恋人にスッポカされた気持でした。

いらぬ憶測もとりまぜて、心中ボヤキづめだったのが、二十六日に「三月号」の文字を発見したトタンに気嫌が直り、大事に抱えてしまふんだから、われながらどうかとも思います。

そして、その三月号に、自分の名前を発見した時の興奮。

しかし、再読、三読の後、気がついてみると、添付した写真の鮮明でない事と、目次の氏名のミスプリントが気になり出しました。

どうして、こんなに白っぽくなってるんだ？ 堅焼きだったからか？ もう少し軟調印画紙を使わないと駄目かな？ と掲載されている彼女の影のうすさを嘆じたものでした。もっとも、辻村先生のカメラ・ハント写真も、私のものと同じような鮮明度なので少しは安心？ しましたが、折角のもの



が、と残念に思えてなりません。最近の御誌は、写真類がとてまもなくなくなっているのですから、せめてもう少し鮮明なものをと思うのですが、どうでしょう。

いずれにしても、私のつたない投稿が、初めて活字になった『飼育の難しさ』は感激で、その後の中間報告を、簡単に置いて置きたいと思います。

彼女とは相変わらず定期的に逢ってはいますが、縄を使つてのプレイは、その後、二回だけしか行なっておりません。それは、急テ

編集部だより

○馬族保氏の『男性虐待快楽術』が三月号で以て第十二話の最終回を飾って一先ず完結をしましたので、引続いて同じく嘗ての本誌上で活躍された真砂十四郎氏の登場を願うことにしました。第一回より早くもMの妖しいムードがむんむんと漂っています。どうか御期待の上御愛読願います。

○団先生からの便りによれば『花と蛇』の毎月の掲載の外に『鬼六談義』でピンク女優の緊縛フォートなどを混えて楽しい読物を随時提供したいということでした。

○沼正三氏から久しぶりに手紙を貰いました。『家畜人ヤプー』の著者として謎の人物とか宇宙人とか言われているようですが、細かい文字で便箋にびっしり書いた筆致は、以前に本誌へ『家畜人ヤプー』や『マゾヒストの手帖』の原稿を書かれた時のものと同一のものでした。又何回となく文通したときの手紙の筆致とも一緒です。沼正三本人に間違いないでしょう。沼氏について書きたいことは沢山ありますが、多分、御本人

妊婦マニアのたわごと

高野原美

ンポに事を運ぶ必要もないと考えているからです。でも、準備していった時には、紅潮した顔で下を向いたきりの彼女を、強引に緊縛

と自負していますが……。今後とも機をみては、プレイは重ねてゆくつもりですので、どうぞよろしく。

ぼってりと小山のように膨れた妊娠腹は、女性の魅力をひきたてる。動物的な牝の姿と云うより、生殖の偉大さを誇るように男性の目の前に誇示されると、女性だけにしかない妊娠と云う生理の前に頭を下げざるを得ないものを感じる。

肪に富んだ豊満な女の腹部マニアであった。その腹の中心で大きく深く窪んで丸い影をみせている臍には魅力を覚えていたものであった。それが蛙腹になり、この柔らかなく白い腹を切り裂いたらと次第に美しいものを虐げる欲びが女性切腹愛好となり、本誌にも「女性切腹の可能性」と云うことで、腹部ナルシズムと女性切腹について書いた。

三月号で留根氏が、妊婦マニアとして告白を書いておられたが、私自身マニアとして何度か本誌上に妊婦ものを書いてきただけに、親しみを覚えて楽しく読ませて貰った。

人間は遂に「完全なもの」を求める。それが私をして妊婦マニアにしまった。留根氏と異なるのは、このような道程を経て最近になって急激に妊婦マニアになったことである。

妊婦の小山のような丸い腹は、芸術的にみても価値高いものである。

週刊誌に掲載された第二回世界写真展「世界の女たち」の一葉の

フォートは、何と美しいヒューマニティに富んだ、作品であったことであろう。アメリカ人の作品で「母と子」と題し仰向けに横たわった妊娠裸婦の胸から下腹までをリアルに撮り、画面中央に裸の子供が立って妊婦の腹の膨みの中央を指で押している構図である。生殖、出産と云う母体の姿を妊娠裸婦の丸く膨れた腹と裸の子供で暗示的に描き、女性の偉大な神々しいばかりの生理をヒューマニスティックに描ききっていた。

私は、無条件に妊婦の便々たる太鼓腹を愛するがゆえに、戦国武将の妊婦腹裂きの心理も、理解できる。

留根氏は、妊婦のヌードを撮る機会に恵まれ幸せである。私は、まだその機会もなく、分譲フォートを眺め、それを等身大に引伸して、画用紙に丸々と膨れた腹を描き、その偉大さに感謝して楽しんでいる程度である。

今年こそ、春になれば妊婦ハントをしてみたいと思うが……。

は望まれないと考えますので、これくらいでやめにしておきます。

○本誌一月号より連載を開始し三月号までで第三回を経過しました。△地獄ホテル△は作者の藤見郁氏が雑誌編集のため急に忙しくなつたそうなので残念ながら一応、中絶ということとで休載いたします。ご期待頂いたファンの皆様には申し訳ないのですが、いずれ落着き次第再度執筆願う機会があると思いますので、その節はよろしく。

○先月号のこの欄で一と言及しておきました由利美千子さんの書かれた『被虐の旅』いかがでした？皆さんの反響の如何によつては引続いて書いて貰おうかとも思っています。とやま・かずひこ氏が家畜人やプーについて、いち早く感想を寄せられました。とやま氏と同じような疑問を持たれる方も多いのではないかと思います。敢て掲載してみました。

○今月号では塚本鉄三氏が川路叢子さんをモデルにした撮影行八片えくぼのマリア△を掲載しましたが、引続いて鞭の女王関谷富佐子さんをはじめとして新しく志望してきた女性をペンとカメラで誌上に紹介してもらおうよう手配しております。ご期待下さい。

留根氏も、「妊婦をとらえ、その腹を裁ちわって、胎児の性別を調べたという昔の淫虐な武将たちのぜいたくな快楽を思い、彼らの心が実によくわかるような気がした」と述べておられるが、妊婦マニアは共通性があるようだ。

私自身、ふっくらとした皮下脂

新聞報道……怪事件に想う……

吉田生

潮騒とロマンの地、島崎藤村の「ヤシの実」の詩で知られた、黒潮洗う伊良湖岬も、最近では東名高速道路の開通、志摩半島鳥羽へのフェリーボートの就航などで一躍脚光を浴びて、土曜日はマイカー族でにぎわっています。

さて、ここで最近珍しいナゾの事件があり、そろそろ地元の人から忘れ去られようとしている、ひとつの話題をご紹介します。

ことは昨年十月十五日。十六日付の中日新聞から引用すると――

縛られサルグツワ

農道わきに女性

「十五日午前十時三十分ごろ、愛知県渥美郡渥美町中山の農道わきに、全裸の女性がロープで手を縛り上げられたうえサルグツワをされ、しゃがみ込んでいるのを、通りがかった同所、農業石倉義夫さん（四三）らが見つけ、田原署へ届け出た。

女性は三十才ぐらいで、身長一・五八メートル、緑色のタオルでサルグツワをされ、細いロープで両手を後ろに、縛り上げられていた。石倉さんらが目を放したわずかなすきに近くの松林の中へ逃げ込んだといい、田原署は署員四十人と警察犬、地元消防団からも約百五十人が、出て捜している」――

さらに他の地元紙は、「ナゾの全裸女性」というタイトルで、一部では変質者によるいやがらせとも見ることが出来るとか暴漢？に襲われ



『雪原の女王』
東京・赤ちゃん

全裸にされて、逃げるに逃げられず発見されたものの、恥かしさから姿を消したものではないかとか報道しているが、我々奇巧の愛読者には種々な空想が湧き上って来ると云うものだ。

まず石倉さんらが（四人と云われている）発見したというのだが（失礼）四十才前後の彼らが、最近の驚くほどの若者たちの風俗の流入に欲求不満を生じて、いたずらに無責任な作り話を流したのではないか、という常識的な？へソ曲りの解釈も出来ようが、年令身長、サルグツワの色、細いロープで後手、と正確に報告している点を買って、これを前提として推測すると……

東京または大和方面よりやって来た、SMグループ乃至はカップルが大胆にも白昼、ひと目につか

ぬと思って実行した防潮林内のプレイが生んだハプニングで、発見した地区の人間より驚いたのではなからうか。百五十人に及ぶ大捜査網にもかかわらず、遺留品すらも発見出来ない点、暴行説はうなずけない。

大騒ぎになったので、あわてた彼らは、後手サルグツワから彼女を解放し、地元の騒ぎをよそに、伊良湖ビューホテルあたりに場所を変えて、白昼のアバンチュールを思い出しながら悠々と密室でのプレイの炎をかきたてたのではなからうか。とにかく、SMというもの暗いじめじめとした殻をうちやぶって、晴れてマスコミに取り上げられ脚光？を浴びつつある現在、「陽の目を見る」という意味で非常に興味のある事件ではなかったかと思っている。

ナゾの全裸女性

松林の中へ逃げ込んだ

『前田カオル』 お前を逮捕する！

井 上 雅 人

「前田カオル」よ、お前は『平和

で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象とし、編集され販売している奇譚クラブ』の誌上において、いやしくも自らの裸体を発表したのみに止まらず、己れのM性をP・Rせんがために人々の心をまどわす様な写真、ならびに呼びかけをした事——非常に冷静さを欠き、又、S人種を挑発した罪は大きい。

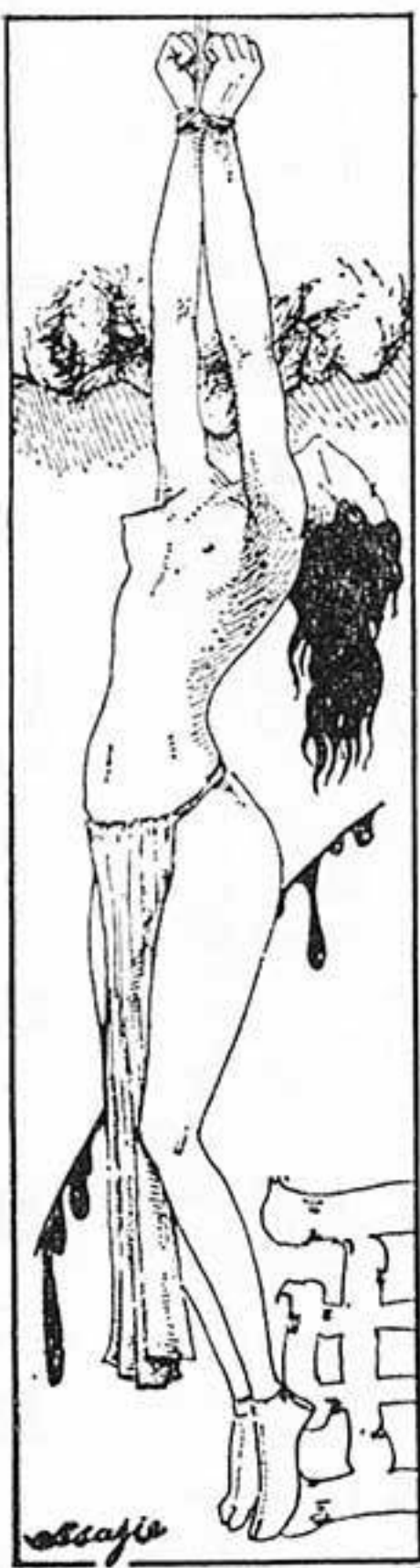
これ以上、お前を美しい東京の中に野放しにしておくわけにはいかない。他に、まだ余罪があるものと思われるので、ここに逮捕する。無駄な逃亡などをせずに、すみやかに出頭し、罪をつぐなう事

だ。

桜田門などのムードのない所では、お前も自分の罪を白状しづらいただろう。渋谷区某所に、お前を責めるにはもってこの場所がある。又、千駄ヶ谷にある一戸建ての別室ではどうか。お前の好きな方にしてやろう。

過去二カ年にわたり行なってきたお前の全てを再現し、証拠のいんめつを防ぐことがまず第一である。何ひとつかくさず、正直に告白せよ。必要とあれば、証拠写真のみではなく、声の録音も出来る様、当方で用意する。

又、お前の罰名が何であるかを決めるために当方にある資料（十



僕のイメージ画集

『苦痛天国』

室井亜砂路

数冊に細かく分類された写真・絵画によるアルバム」と照合する様になるだろうが、ウソいつわりをする事なく、申し立てるのだ。いいね。

尋問は全裸にて緊縛（菱ナワ、股間縛り、吊り、逆エビなど、尋問の内容によりその都度決定、実施する）の上、行なう。が、もし自供を拒んだ場合は、ようしやく鞭で打ちすえる。

黙秘権などを使う様な事があれば、ローソクでお前のナマイ気なくりくりした乳首をあぶり、全身をくまなく特大のバイブがはい廻るだろう。どんな叫び声をあげるか今から楽しみではないか。（カオル、お前自身もそうなのではないか）

尚、これらの事は当方で全てまとめ、証拠写真と共に尋問内容を誌上で公表する。疑問の点があれば、何なりと申し出る事。尋問はこの逮捕状が届き次第、お前の回答を待って行なう。出頭可能な場合は（当方も事務関係の職業につき、日曜もしくは平日夕刻六時頃が良い）東京駅構内まで迎えても良い。

小生、東京近郊の某所、借家に

母と妻と共に生活をいとなむ平凡なサラリーマンです。但し、カメラの方は、十数年にもなり、暗室も独立した所に作ってあります。妻とはモデルになってもらった事がきっかけで結ばれましたが、無論小生のドレイです。

写真を拝見した所、せっかくの柔らかかなうなじのあたり、髪をもう少しアクセサリー的に白い肌を用いてみてはいかが。ふくよかな二の腕や、胸を、ギョッとロープで引き絞ってやりたいものです。どうですか。

井上雅人。年令二十七才。身長一六九センチ。体重五八キロ。プレイ歴約一年半。

前文では言いたい事を書きましたが、小生、独身時代、別のペンネームで短編小説や読むためのシナリオなども「奇ク」に載せて頂いた事があります。

文章と共にピンナップ写真がフイルム出来るなら万々才です。万一、お逢い出来るとなった時は、くれぐれも事前に脱毛などしません様に。それでは又。

最後に、ひと言。『サヨウナラは言いません』

三月号を読んで

『感想』

瞳 耀太郎

団鬼六さんの手記を読んでいる内に、一つの共鳴するものが感じられるのを覚えました。奇クについては永らくの読者でしたが、今まで筆をとる気にならなかったのです。何故そうなのか、それは私にも分からない。ひょっとしたらそれは心の中にある気おくれが、そうさせたからでしょう。筆と私は無縁ではない訳で、一部プロフェッショナル機関紙には、寄稿しているのだから。

団先生を見たのはイレブンPMの時に、偶然にイレブンPMに出合い「鬼の会の会長さんである団鬼六さん」なる名を発見したのです。円熟した素晴らしい文章を書く団さんとは、こんなにお若い人だったのかと、吃驚やら感心やら複雑な気持でした。

辻村隆さんのハント記や、塚本鉄三さんのハント記はよく目を通して居るのですが、団先生のは圧巻そのものです。

SMに類する小説や単行本が氾濫しているが、何か焼直し、焼増しの感じがする文章が非常に多い

のも目ざわりな感じで、作者自身に経験や目撃の事実がなく、さながら砂上の楼閣的展望の中から、体験文学や告白小説を書いているのではなからうかと、思われるものが多いようです。その中で、頭角群を抜いて真実を探究し、事実を事実として表現し、或いは文学的表現をもって読者を引きつけ、或る意味でのセクシュアルリズムを引出し、人間性を引出して行く中で、素志の向上を計り、男女の実生活の苦しみの海の中で悩むものに、ライフブイ（救命具）を投げて、人生をより美しく楽しくしようとする意図が感じられます。

私の家には、私の小さな時代から幾つもの国の人々が出入りしてその風俗習慣も課外知識として覚え、その知識の一部を生かして、桜と錨の小さな士官となりましたが、大戦終了と共に、女性が美しく、また人間らしい生活を送ってゆくことに、心から讃歌を抱くものです。

海の男にはフェニミストが多い



イメージ画『略奪』 遠藤春一

のも事実ですが、それは海の男達が女の持つ哀しさ、美しさが一番よく体験として知って居り、造物主の作られた美の最高なるものとしての女性を認めているからでしょう。私流に定義し、解釈した「女の美しさ」は、団先生が談義で「二月号を繰って見て、女の美しさを表現した文章がなかった」と書かれていた一面とも、相通じるものを感じます。

御多分に洩れず私も、地上の美術品の中で最も素晴らしいのは、婦人の裸像であると思います。また動感の中でこの世的表現から飛

出し、恍惚の美を感じさせるのも女のエクスタシーの表情でありましょうし、未婚の女性のエクスタシーよりは、既婚の人妻のエクスタシーの表情は満ちたりた美しさそのものと云えるのではないでしょう。その角度から、妖精の記の関谷富佐子さんの素晴らしい表情は、美の極致の様に感じられます。ナイーヴなものが溢れ出る美しさに満ちています。

塚本さんの実戦的表現に文学的表現が加わったら富佐子夫人の眠っている深層のナイーヴな美しいものが、キラウエアー火山の溶岩

二月号「カメラ・ハント」読後感

葛西六郎

二月号カメラハント「あつと驚く人妻の豹変」は、まさしくあつと驚くほどのプレイぶりでした。

教養のある、そして教師と思われるほどの人妻が、カメラの前にすべてを晒して悦びに感泣するなどこれまでカメラハントに登場した女性とは趣きを異にしていると言えます。正直に云って、カメラハントに登場した多くの女性の中で、自ら求めて縄を受け、或いはムチの痛打を求める程の女性は、私の憧れる関谷夫人を除いては、数少なかつたのではないでしょう。従ってプレイも辻村先生を主にしたものであって、そこには、求め求められての火花を散らすような激しさが、少なかつたように思われます。

ところが今度登場した叢子夫人は大分、様相を異にし、さすがの辻村先生もその欲求の激しさにたじたじであつたことがうかがわれるのです。「あんたにプレイをやるめさせる気だったのさ」という辻村先生の言葉は、それを裏付けるに充分です。恐らく、やけくそに

なつてムチを振るつたに違いありません。まさに主客転倒で、どちらがプレイをしているのか判らなくなります。

ましてや、フォートを撮ったりプレイをしたりというのは容易ではありません。辻村先生位になると何んでも撮りさえすればいいというわけにはいきません。美術的良心が許しません。全く大変なことです。しかも夫人は、次から次へとプレイの要求をしたようですから、御苦労は察するに余りあります。

兎もあれ、そんな具合で叢子夫人は出色の女性です。彼女の出現は、私にとって誠に喜ばしいことです。フォートに映し出された奔放な姿態は、私のSの血をたぎらせます。出来れば辻村先生の助手を努めたい位のものです。そして彼女の欲求の極限が奈辺にあるかを知りたい位です。

それにしても、思えば女性とは奇怪な動物です。私のような単細胞的頭脳の持主には到底計り知れない心理です。昼は貞女、夜は娼

の様に、噴出するのではないのでしょうか。「花と蛇」の静子夫人の緋牡丹のような女としてのしたたりを、読者の前に落とす夫人となられるのではないだろうか。

筆は外面にしか見えないものの中から、美しさと真実を引出し、写真は再び還らないものを、その瞬間に於いて永遠に記録してゆく運命をもっています。

その希望から関谷富佐子さんの美しさ、たくましさ、心を奪われるものです。SであれMであれ、凡ての人が潜在的には持っているもので、Sがどうの、Mがどうのと云う事は、人間性を知らない傍観者の言う事で、性のめざめもその一部分ではないのでしょうか。

小杉千恵さんの文章は巧みでソツがないだけに、小杉千恵さんは婦の如くといいますが、全く女性の心理は判りません。不幸にして未だ私は、その様な女性に会ったことがありません。妻を相手にプレイの真似事をしてるのが現況です。しかし、叢子夫人の出現は私のプレイへの欲求を更に高めたことは云うまでもありません。と同時に、何時かそのような女性に巡り合わないとは云えないという

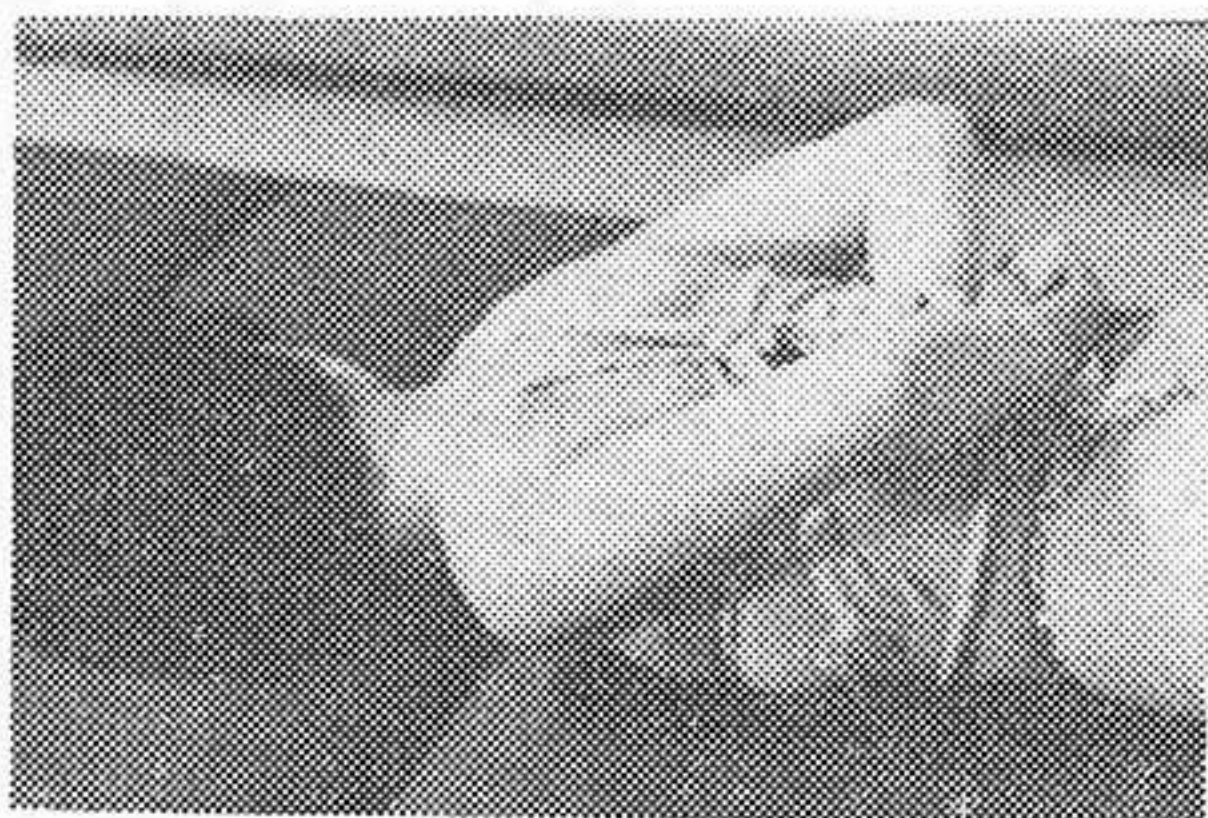
「男かな？」と感じた事もあります。同じ街の遠からぬ処にお住みのお方らしいが、文才豊かな御婦人だけに、婦人しか書けない美しい文章の表現に、明日を望みたいと思います。小杉さんの文に託した願望が願望でなくなれた時、素晴らしいセクシュアル小説や体験談が、新しい題材となつて、奇クに人間性追求の更に大なる躍進が見られる事でしょう。

今の私には体験的事実を一つの小説化し、写真記録から抽出する気力はありませんが、何時か、遠い昔に数百頁の原稿を書いた様に美しさを美しさとして卒直に表現したものを、書いてみたいと思っています。

奇クが、私の心の交りの場であることを祈りつつ。

期待感を持たせました。勿論、それは全くあてのないものですが、又、宝くじのように確率の極少のものではありますが……

現代の女性は昔と違って積極的に求める傾向があります。云って見れば夫人はその尖兵です。一切の衣を脱ぎ去って、SMプレイの醍醐味を求める女性が続々と出現することを期待するものです。



「妻を縛る」

和田平助

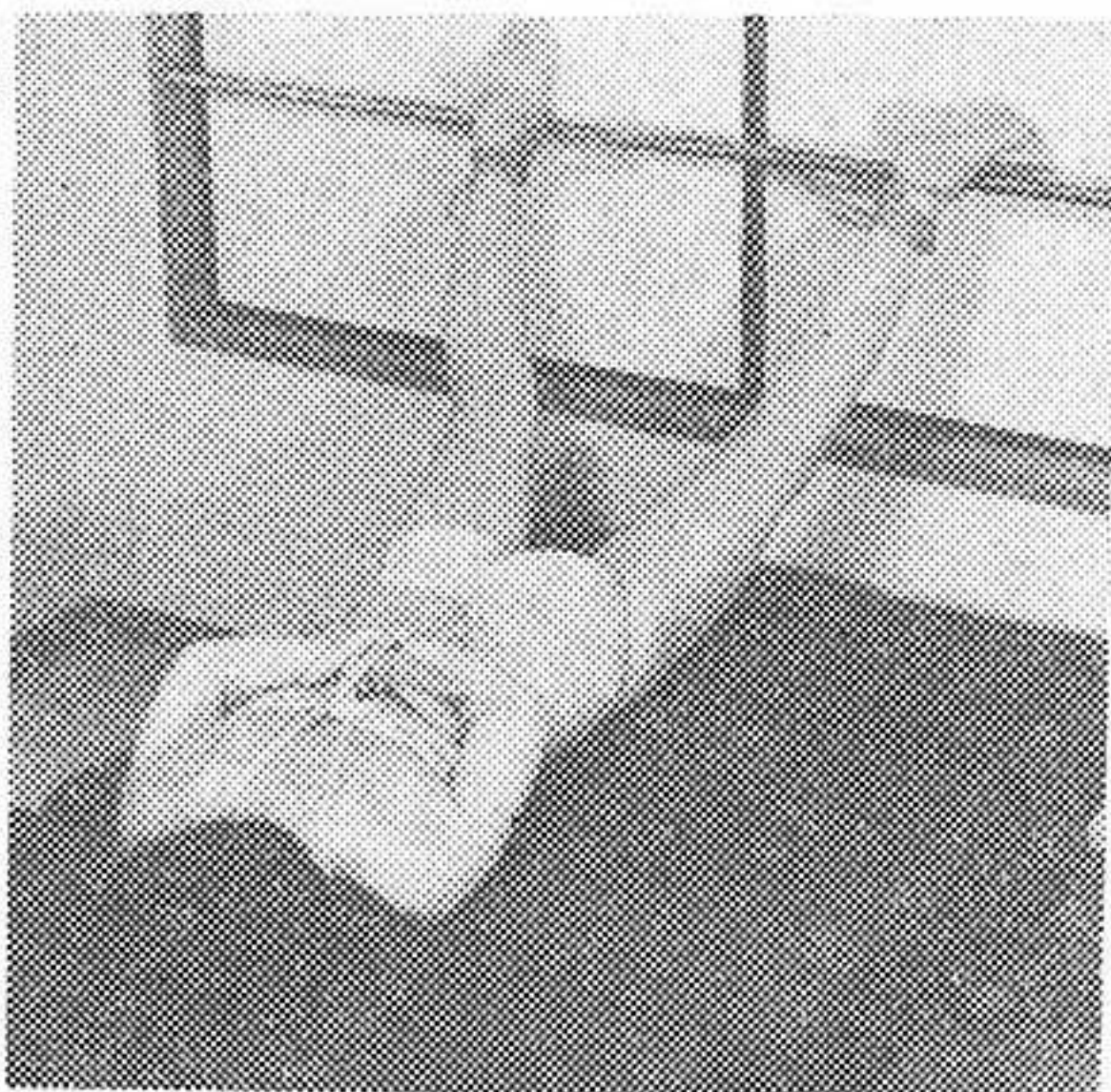
先日、妻を連れて伊豆下田へ出かけた。

結婚後一年にしてマゾの種が芽生え始め、いまやその枝葉に花を咲かせる迄に成長した妻は、近隣に気兼ねをしながらのプレイでは物足らず「月に一度でいいから、おもいきりあなたに苛められ、思う存分に声を挙げて泣きたい」という、日頃からの願望を叶えるべく一泊旅行としゃれこんだ次第で

ある。

Kホテルの、案内されたその部屋には、生憎「吊り責め」を行なう個所をみつけることが出来ず、我々の第一希望は水泡と帰した。「来月にしようよ」と、妻は事も無げに云うが、冗談じゃあない。これから毎月、吊りが可能なホテルを探すとすると、何かと大変である。

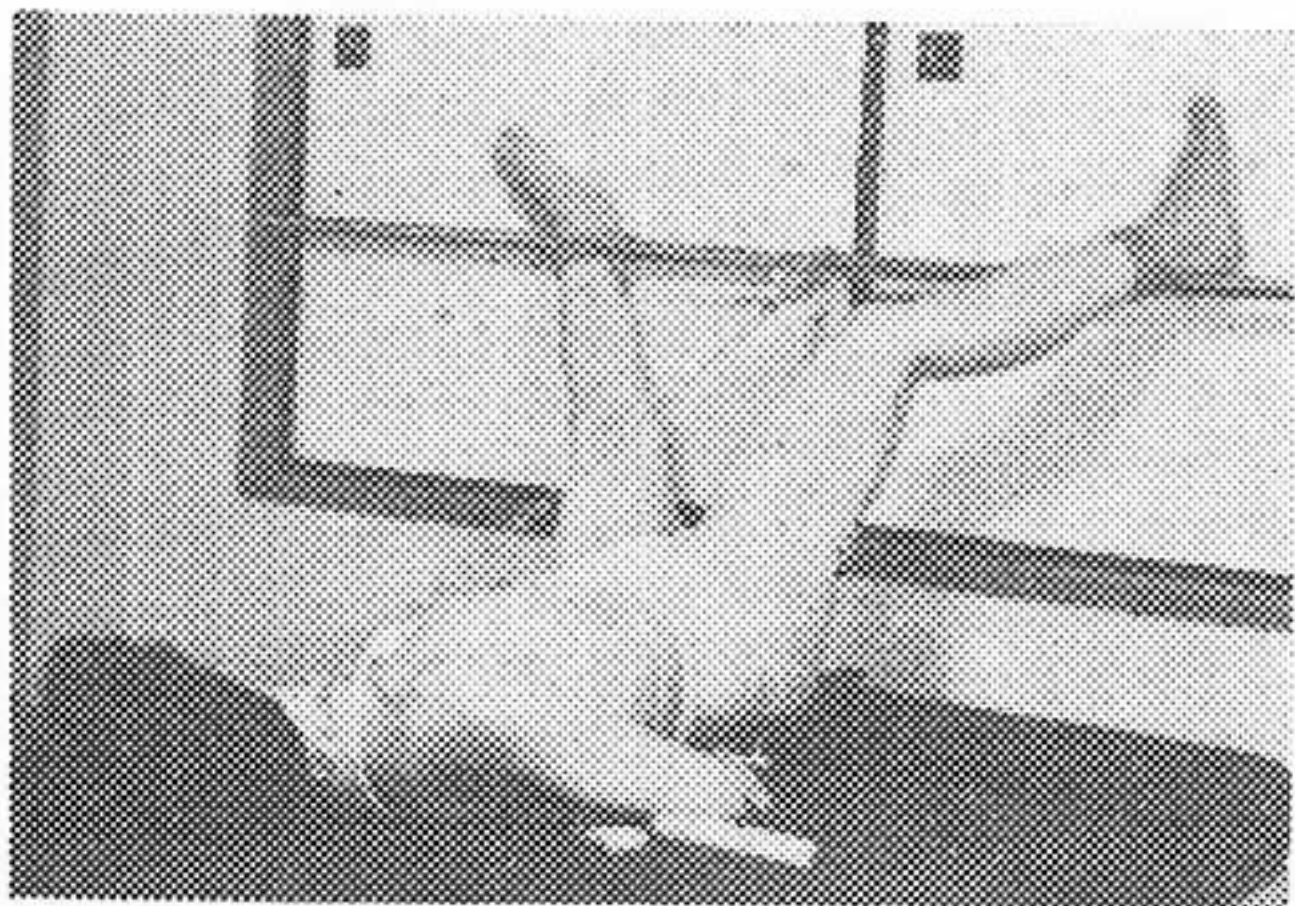
バスルームからあがった妻をソファアベッドに寝かせ、後手に縛り上げる。その縄尻は首を通して乳房上で一本に結ばれ、上下を挟みこむように胸を二廻りして、後



手と共に、再び固定する。他の一本で大腿部を縛り股間を通してそのまま胴を締めあげる。喰い込んだ縄のために、いっそう盛り上った臀部が眼前に晒し出され、鞭打ちに私の気を逸らせたが、嗜虐の念にかられた私は、鎖をとり出すと胴を縛り、前から股間を通し後で力一杯締め上げた。ロープと鎖の二重縛りに妻は悲鳴をあげる。

更に両足を左右に大きく開き窓枠に固定してある鉄棒に縛りつける。臀部はソファアベッドを離れて宙に浮く。私はバンドを手にすると、この被虐ポーズに、もはや理性を失い、強烈な一撃を加えた。妻の白肌は瞬くまに朱く染まっていった。身悶える妻は被虐の幻想を求めていたのだろうか、喜悦の声と共に失神したのである。

正気をとり戻した妻に、私は容赦しなかった。仰向けにして、両足を先刻と同じように縛り、あらたに首輪をつけ、残りの鎖はやは



り鉄棒にまきつけた。ローソク責めに始まったプレイは、夜明け迄悲鳴と感涙の中で続けられたのである。

お互いに思う存分プレイをしたその後は、更に妻との愛情がこまやかになった様である。

× × ×
久しぶりに投稿します。夫婦プレイを行なっていらっしゃる皆さんの、ご意見なり、お便りが戴ければ幸いです。

素晴らしい写真

……二月号読後感……山逸富……

文章を書く事は苦手の私が、時期はずれの二月号の感想を書こうとしたわけは、先日買った本誌四月号の「編集部だより」を読んだからです。それは二月号の感想を書いた人全員に、川路叢子さんの縛りフォートを下さるという、うれしい項目があったからです。SMプレイの実際の経験のない私は、毎号のカメラハントや、夫婦プレイの写真を楽しみにしています。

二月号のカメラハント「川路叢子の巻」毎号のことながら、辻村氏の文に魅せられ一息に読んでしまいました。

若い独身女性とも違い、又、夫婦プレイとも違う、人妻の浮気？の心理的な変化に興味を感じました。あの素晴らしい川路叢子さんを奥さんに行っている御主人に嫉妬を感じます。というのも、川路叢子さんのような人と、思いきりプレイしたいと思っているからかもしれない。



S・コレクション 『排物』 豪城二

れません。

二二二頁の窓枠に腰を降ろし、両手を鴨居に万才に縛りつけられている写真の素晴らしいさ。だが、あの白線がにくい！

次頁の写真、足を吊られ、悶える姿。これも圧巻！

文章によれば叢子さんはこのあと豹変し、痴態の数々を辻村氏にさらしたそうだが、海老縛りで頭を倒しての逆立ちをさせ、腰高にしたポーズを、ぜひ見たいものだ……。

その他も、トイレでの見られながらの排泄！ 片足吊りのムチ打ち！ 鴨居から手足を吊られて揺れる女体！どれも素晴らしいものばかりである。これも人妻のなんともいぬ色気があるからでなかろうか。私もこのような良いパートナーが欲しい等の夢を持たせてくれた。

二月号にはもう一つハントがあった。塚本氏の、関谷富佐子さんを撮ったものだったが、この写真はパンティをうまくつかっていて全裸と違ったムードがある。

逆さ吊りにされ、座布団に頭をつき、胴にめり込みそうな首。パンティから出た剃玉子のような臀部。それへめがけてのムチ打ちを

自分がしているような錯覚にとらわれる。

関谷さんは、剃毛されているとか。スベスベの肌は素晴らしいだろう。それを見たい。いつだか塚本氏の助手を募集されたが、プレイ経験のない私ではと、応募出来なかった。もし許されるなら、プレイ写真撮影の時に見学でもさせてもらえればと思うが、それは虫のいい話だろうな……。

その他で二月号では、井上雅人氏夫人の写真も良かった。とくに二二二頁の鴨居に両手を吊られ、伸びきった脇腹、手を吊られてるため少し小さめの乳房、これも素晴らしい。

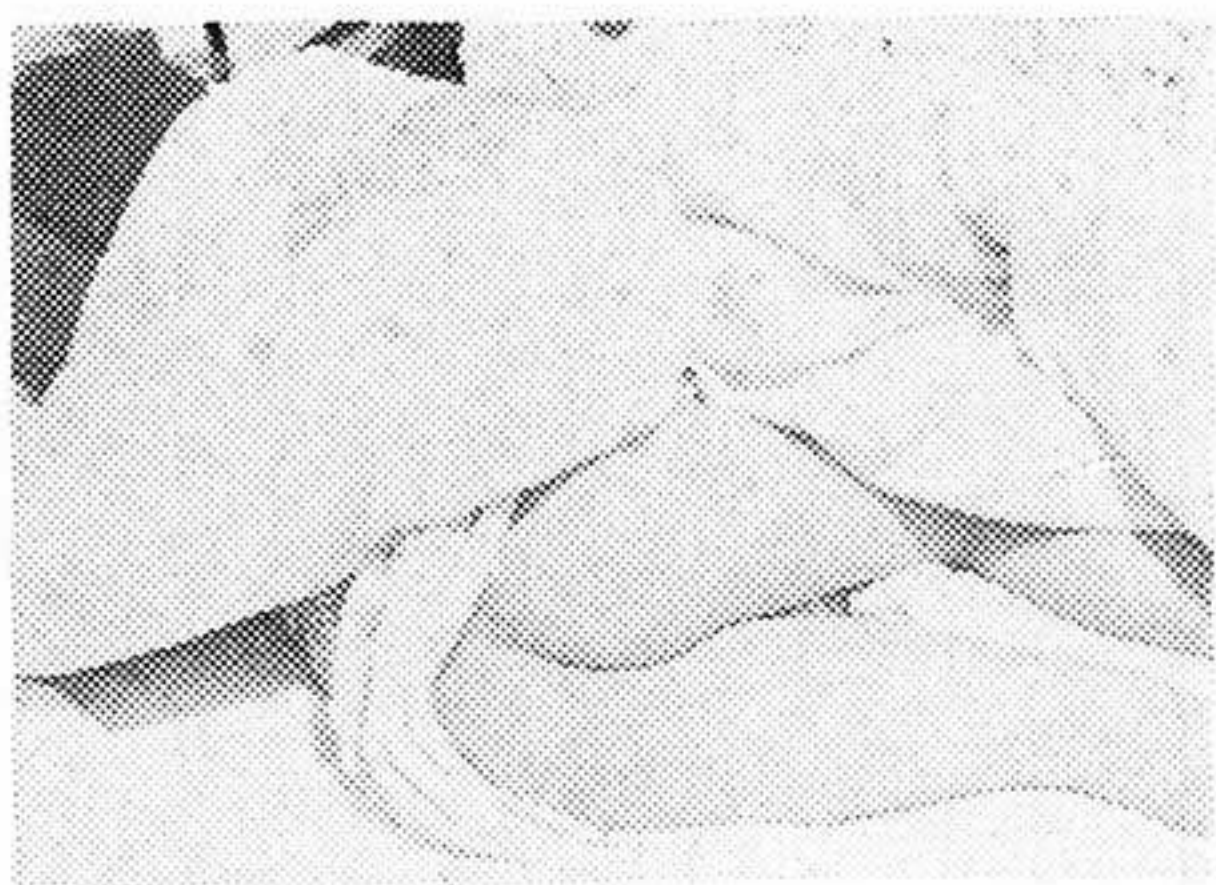
又、奇クサロンに、なつかしい木戸悦子さんの写真と文がのっていたが、木戸さんのステキな縛りポーズが、誌上にのることを期待する。同じ奇クサロンに安沢達子さんの奴隷志願があったが、誓いの言葉に興味があった。もし事情が許すなら奴隷にしてみたいが、経済的に余裕のない私では無理。読みものでは、風流極道軒氏の「女緊縛師」の第二話「人妻」がよかった。このようなSMプレイの会が、もし本当にあるのなら見学してみたい。

盗み撮りの魅力

桂 木 洋 介

私は今、一枚の写真を手に持っていて迷っています。「同封しようかやめとうか……。いや入れなければ本当の私の気持がおさまらないだろう……。だが……」と一人で迷い続けていますが、実際には、その写真は人が見たら大した物でもないかも知れません。

別に縄で女性をギリギリと縛りつけて逆さ吊りにしている写真で……



ありません。オールヌードでもありません。ただ、そこに写っているのは一日の家事に疲れ果ててぐっすりと寝込んでいる私の妻の写真……というだけのものだからです。

でも私にしてみますと、それを撮る時の楽しさ、あのコッソリと写すひそやかな喜び等を想うと、その一枚の写真の姿態には、雑誌のグラビアを飾っているヌード写真とは比較にならぬ生活的な色気とでもいえるでしょうか、ムードを感じてしまうのです。

こっそりと本人の知らぬうちに盗み撮りする楽しさや興奮は、カメラをいじくる者のみの一つの特権とでもいえましょうか。

勿論、プライバシーの問題が起こりますが、それは公開しないでじっと自分だけの心の奥に蔵しておくことにより、いくらか騒ぎの種にはならぬでしょう。然し反面こっそりと撮ったものを人に見せたいという欲望も、又、一段と強く人にはあるものでしょう。

又、逆にそれを見たいと云う人

もあるでしょう。男女の秘密の時間の場面とか、女性の生理的な欲望を果たしている時の姿態とか、それを見たい気持、他人が先にそれを写したらそれを見せて貰いたい気持……。不健康かも知れませんが、こっそりと写す楽しさは仲々止められそうありません。

でも、夜の夫婦生活をこっそりと撮りたくとも、フラッシュの灯りが必要ですし、妻もそんな場面を撮るなどといったら嫌がることでしょうか、それは実現不可能として、疲れて眠っている妻の姿態だけは、時々コッソリと愛機のシャッターを押しております。

子供達も昼間の遊びでぐっすりと寝入っておりますし、テレビの深夜放送の音を小さくして流してでもおくと、シャッターをきいてもフラッシュを一発やっても目立たなく、作業がしやすいと云うものです。

谷崎潤一郎の小説に「鍵」というのがありました。以前にそれを読んですごく興奮したものです。こっそりと撮り写したり、他人の姿態や行為をのぞき見るということとは、思う度に高ぶりを感じる私なのです。

この小説は、自分の妻を酒で酔

わせて青年と共に介抱し、その後こっそりとカメラで妻の裸の体を写し撮り、青年に現像を依頼し、青年に自分の妻の美しさ、秘密の姿態まで見せて青年の心が接近してゆくを見つめている夫……。この様な、異常な夫婦と青年の三人の話でしたが、自分の妻の寝乱れ姿をみて興奮し、果ては全裸にして股を開かせ、肛門まで写し撮るといふ場面に、私は異状な胸の高鳴りを感じたものです。

世間には数多くのカメラファンがおりますが、私の様な欲望を持っている人がおられないものでしょうか？

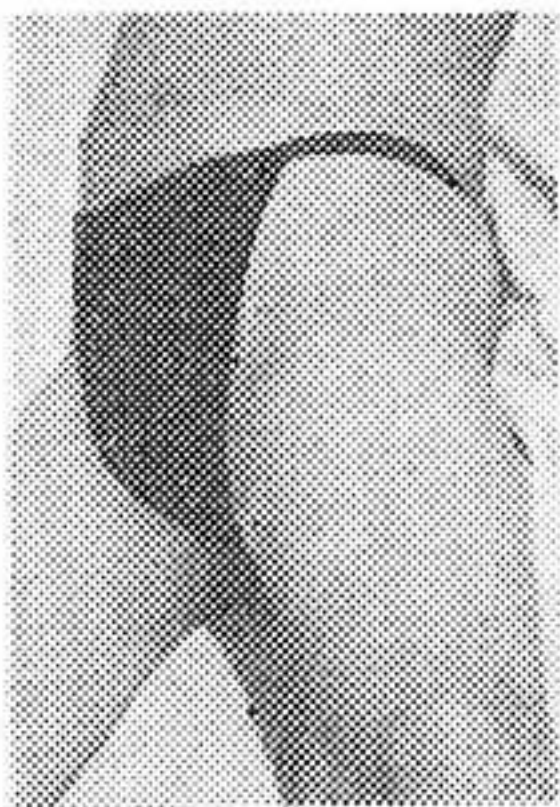
今まで秘かに撮ったものは一度も、妻にも他人にも見せたことはありませんし、話もしたことはありません。しかし、一方では同好の人に見せたい気持が高まって止まないのです。

写真の束の中からこの程度のものなら公開してもいいのではないかと思うものを手に取りました。片方の手には、全裸のままで眠っている姿を開股で撮ったものがあります。これはとてものこと、同封できるものではありません。

写真そのものは、とても期待に応じられる様なものではありません。

んが、このままソツとしておくのが一番いいのだと思う反面、他人に見せたいという欲望が強くて、やっぱり同封します。

縛りでなくしてお気の毒ですが、私の興味はあくまでも日常生活の



ふんどし愛好 長い布

間和志の男

サマースポーツからウィンタースポーツへ変わり雪と氷の状況を気にし出すと、もう春の気配が漂い始めている。まったく一年が流れ去るのは早く季節の変わるのはめまぐるしい思いがする。だが変わらないものが一つある。それは愛用の「長い布」である。わが身体の一部を包み、一年を

中の、ふとした躰の露出に欲望が起ころので故意に行なうヌード撮影にはあまり興味がありません。三〇才を過ぎた女性、特に四〇才近くの豊満な（といってもブクブクの肥満体は大嫌いです）女性

通じて気持を引き締め続けてくれる「長い布」その布も、一年も経つと真白だった色が少し変わっている。でもそれが愛着というものであろうか、自分の手では捨てたり切ったりということが出来難い気持になり、つい大切な品物として保管してしまうのが、われながら不思議だと思うことがある。誰が考え出したのか、「長い布」のこの魅力。愛用してみてもつくづくその不思議さに考えこんでしまうことがあるのだ。

『長い布よ、おまえは今日も、おれの大切な部分を、しっかりと包み通してくれた。有難う。また明日も頼むぞ、緩むことなく守ってくれよ、おまえ一本が頼りなんだからな』……締めなおす毎に一言つけくわえてみたい気持は、愛用した者でなくてはわからないだろうと思う。

去年の夏頃には、ずいぶん「六尺褌」という言葉が流行したよう

の寝乱れポーズには最高の感じを持ちます。

山登りをした際、この年代の婦人が、岩蔭で用便を足しているのを偶然、目の前にした時のショックが大きくて、今だにこのような



だった、それほど、実際の愛用者が増えたわけではないだろう。あまり見かけなかったようだ。ただ、ファッション界で、だいぶ煽りたてて話題を呼んだようだが、六本木（東京）のあるスナックで「フンドシ・ファッション・

迷いを、この年代の女性に特に感じていたのかも知れません。私のような性癖を理解して、共鳴して下さる方はいないものでしょうか。

「ショウ」などが開催された記憶している。だからといって、若人の間で「六尺褌」を締めているのを、風呂や海水浴場で見かけたことも、聞いたこともない。流行という言葉だけで終わってしまったようで、さびしいきわみといわねばならない。久しぶりで原稿用紙を前にしたもの、思うようにペンもすすまらず、ただ、六尺褌と相撲マワシに明けくれた、わが一年をかえりみるのみである。

同封の写真は、小生と妻のフンドシ姿であるが、妻の方は、この写真を撮るまでに三年という長い年月がかかり、最近、ようやく成功したばかり。相撲マワシの姿もあるのだが、まだ発表には同意してくれない。この一年を通じての最大の収穫といえるのだが、六尺褌とマワシに生き甲斐を持つ友の現われることを望む。

〔秘蔵版特選SM資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひV

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせV

女賊笞打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆV

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめV

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よすV

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よもV

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よきV

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさV

女囚拷問 木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もとV

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへV

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もにV

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もちV

美人女囚笞打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほV

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬV

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もりV

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もはV

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なのV

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむV

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあV

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きすV

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせV

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそV

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きてV

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きとV

鼻責め 悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きなV

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあV

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めくV

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆV

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めやV

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえV

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あひV

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あはV

素足を縛られる快感

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あふV

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△むこV

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△るねV

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえV

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそV

鼻いじめ 三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はねV

鼻責め 万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はたV

乳房責め 五態

大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てらV

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いねV

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつV

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこV

可憐島田鬘全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみV

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひろV

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほかV

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほきV

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z 組 百 態 大手札型印画紙 (9×13 寸) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

☆

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均齊のとれた体(佐々木真弓)
32 蛾涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの搾り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 敵しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円

全裸アグラ縛り

長野 良子 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

長野 良子 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フット

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円

乳房責の苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円

色禪の開股縛り

長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

長野 良子 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 四〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原・鈴木 略号(はた) 二〇〇円

碧玉裸身緊縛

刑部 典子 略号(のん) 四〇〇円

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

東浦ひかる 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号(一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号(一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
大塚 啓子 略号(へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
山原 清子 略号(かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号(一三〇〇円)
山原 清子 略号(かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号(一二〇〇円)
山原 清子 略号(かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号(七〇〇円)
大塚 啓子 略号(けか)

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
大塚 啓子 略号(けひ)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号(一五〇〇円)
山原・東浦 略号(かも)

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号(七〇〇円)
大塚 啓子 略号(けま)

浣腸後カバー装着

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
大塚 啓子 略号(けさ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原・東浦 略号(かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原・東浦 略号(かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原・東浦 略号(かち)

アーヌス浣腸幫助

大手札四枚一組 略号(七〇〇円)
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号(六〇〇円)
美木乃々子 略号(ぬか)

捜入された嘴管

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
大塚 啓子 略号(ると)



奇ク愛読者のS女性の方、どうか私の女王様になって下さい。Mプレイの経験は全然なく、ですから奇クによってのみ、自らのM願望を満たしている、四十近い男です。まだ独身者です。一寸足が悪く力では女性にもかないません。二十才になる姪と相撲をしました。が押さえつけられました。先日も街で三人の女学生とぶち当りしましたが、私の方がひっくりかえってしまいました。全く非力な男、M

です。絶対無抵抗です。S気は全然なく百% M一辺倒です。同性からの責めは気持悪く、美しい女性からの責めのみを、望みます。少年期からのM願望『女学生からの凌辱』の幻想を、未だに持っています。私のようなものでも支配して下さる女王様がございましたら、お便りお待ちしております。

(東京都世田谷区・間 真人)

初めてお便りします。ぼくは二十才になったばかりの青年です。つい最近までこんな本があるとは知りませんでした。友だちから見せてもらって初めて知りました。今までいろいろと本はよく読みましたが、これほど興奮した本はありませんでした。ぼくはマゾに興味を持っていましたが、今まで経験したことは一度もありません。浣腸を受けたり、全裸にされてしばらくムチでなぐられたり、また除毛されたり、ほかにぼくの知らないことをやってほしいのです。Sの女性の方どうかぼくを奴隷にしてください。ぼくはどんなことにも心から従います。

(岐阜県中津川市・太田安夫)

毎月楽しく貴誌を愛読しております

ます。二月号では塚本様の「妖精を鞭打つ」で関谷さんの見事なボリウムのある惚々とするフォトを拝見して悦に入っておりましたが更にすばらしい女性に会うことが出来てうれしくなりません。それは川路さんの緊縛写真を見たからで、川路さんこそ典型的なM女性だと信じて疑いません。美しい女性である上に見良い肢体には甘い人妻の味があふれているように私はこの文を書かずにはいられない気持ちにかられました。川路さんの緊縛姿態はどうしても被虐の狂態とは思われません。この世の中に生き続けてゆくためには、心の中より求めたいものを求めるのが一生のためには良いものと思えます。良いものを良いと言われたい人程悲しいものはないとつくづく感じております。教養のある川路さんの素直な気持を私は汲んであげたいと思っております。全裸になれば教養も容貌もかなぐりすてて二月号の誌上にその麗しい肢体をあらわした川路さんがうらやましくてなりません。五月号には川路さんの二度目の肢態をどうか発表して下さいお願いいたします。

(新潟県五泉市・淡路 清)

御誌を愛読しだしてから五年になるフォトマニアです。自分でも撮影もしますし、御誌を中心に相当のコレクションを集めました。前に辻村隆先生も書いておられましたように通信で申込んだものでインチキ物が非常に多いので同好の方はご注意くださいがよいと考えます。新聞や雑誌の広告で申込んだものは殆ど駄目でした。特に日刊Kの広告に出ていたものは、全部複写したものでばかりで見られたものではありません。雑誌の口絵などを複写した不鮮明なもので、何の値うちもないもので大金を損してしまいました。御誌のように直接原版から焼付けたものは、どれも鮮明で写真として価値があるものです。私もちにコレクションしています。今流行している複写物は、自分で写真を撮影しないで他所の写真を無断でコピーして販売しているもので、こんなインチキ物をつかまされると、お金をドブへ捨てるようなものです。今後そういった情報は、マニアの方々に伝えたいと思っています。辻村先生の一層の、ご活躍をフォトマニアとして大いに期待しております。

(東京都八王子市・若松築郎)

○ このたび初めて投稿いたします
札幌に住む一愛読者です。最近になり私の性癖を理解して頂ける女性がいれば、ともにSMの悦びを分かち合いたいと思うようになり勇気を振るって投稿することにしました。私は女性が、どうすることもできない羞恥に懊悩する姿こそ最高に美しいものと考えます。私が空想の中で求めているのは精神的マゾヒストであり決して肉体に苦痛を与えて悦びを得るという型のマゾヒストではありません。だから女性を鞭で打つなどということとはできないと思います。実際の経験はありませんが、いつも想像することは、浣腸責めにして排泄を見つめられ、羞恥にのたうつ女性のことなどです。札幌に住む方で私の性癖を理解して頂ける方のお便りをお待ちしております。

〓御送金についてお願い〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替等の方法もあります。ご利用下さる封書の場合には、切手代用（一割増）でも結構ですが、なるべく小額切手に願います。

（札幌・マルキドサド）

○ SMプレー希望の女性、またはお夫婦の方へ。私達は？ 中年夫婦ですが、現在は子はなく、将来も子宝に恵まれぬと、医師の診断を受けました。そんな訳で以前から本誌の愛読者となり、夜毎SMプレーを楽しんでおります。妻はグラマーで、子なき故か、バストも大きく色白で、しかもおとなしく私のどのような命令、責めにも決して悲鳴をあげず、従順に服してくれます。しかし、その二人のキザシが見えつつあり、新しいプレーにより新風を得たいと思い、ペンをとりました。妻を責め、妻に責められ、また共々の責めを満喫してくれるM女性のご協力を得て心ゆくまで責めの樂園にひたりたいと計画しております。そこで関西在住のSM女性またはSMプレーを好む四十五才ぐらいまでのご夫婦の方をプレーフレンドとして交流を求めます。

（大阪・関西たかし）

○ 小生は女性のゴム雨具姿にあこがれをいだきつつ、いつしかこれにSMの気持が強まりながら、な

かなか発散することができない環境にある、今年三十四才のSM 2程度の凡才です。三年程前に初めて貴誌の存在を知り、梅川様はじめ菅原、森中、津田様など、私と殆ど同じ性向を持つておられる方々のおられることを知って、意を強くするとともに、かねがねゴム・プレイを楽しみたいものと、はかない願いを抱いていた矢先、二月号の梅川様の誌上からの呼びかけに、矢もたてもたまらず厚か

ましくもペンをとらせてもらった次第です。古都の人知れぬ一隅でゴム雨具装束の貴女を思いきりいたぶり、恥かしめ跪かせたい……と夢にまでみています。お互いのプライバシーは十分に尊重し合うという条件で、存分にゴム装束同志でプレイしたいと念願しています。

（大阪・島野土夫）

△飼育の愉しみ▽小池美喜嬢分譲写真

本誌九月号のSMカメラハント紹介された純情可憐な小池美喜嬢での緊縛姿態を好事家に限りごらんにいれます。女優とかヌードダンサーにない素人じみた初々しさを彼女の中から見つけて下さい。

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 四〇〇円
小池美喜 略号ハれる▽

羞らいたを含んだ幼い膨らみに情容赦なく縄目が喰い込んで素肌がわなわなとふるえている。

柔肌の高手小手縛

大手札三枚一組 四〇〇円
小池美喜 略号ハれる▽

生れて初めて縛られる高手小手に後手首を高々と掲げながら、むちむちとした全裸の肌を染めた。

後手首を縛られて

大手札三枚一組 四〇〇円
小池美喜 略号ハれる▽

瑞々しい全裸の肌を惜しげもなく晒らして柔軟な後手首を背後で背負った少女のあどけなき表情。

飼育された美少女

大手札一組 四〇〇円
小池美喜 略号ハれる▽

自分の裸身を縛られるという好奇心がいつとはない興味に変化してきた美喜嬢の縛られ姿態。

本誌の愛読者となって二年もたちました。私は女性の自由を束縛して、その悶える姿を観賞したり、浣腸など羞恥責にして人間の心の底にある何かを表現したいと思っています。どうか私の良きパートナー、プレイメイトになって下さる方のお呼びかけをお待ちしています。秘密は必ず守り決してご迷惑はかけません。

（岐阜・太田 宏）

奇クを読みはじめて三年、SMに興味を持つ、二十三才の青年です。昨年、盛り場で知り合った二十七才の人妻とつき合ったとき、その女性から豊満なお尻を顔にのせられ、思いがけない御神水をお恵みいただき、Mに開眼させられました。そして女性の神秘の世界に魅せられたものです。それ以来女性の用を足す場面に興味を持ち誌面を開くと、まずその場面を探すぐらいのマニアになってしまいました。年上の女の方で誰にもみせない自分だけの世界を見せてやろうという方はいらっしゃいますか。また、ご夫婦との三人プレイの経験もありますので、刺激を求めるご夫婦の方、ご交際願えたかという事です。同好の方の便り、

首を長くして待っています。

（東京・山田光男）

私は一年前「映画『花と蛇』への一考」という表題で拙文を載せていただきましたが、その後、今もって期待する本格的SM映画「花と蛇」は完成されません。大小説「花と蛇」ファンの私としては残念でなりません。最近、原作者の団鬼六先生が鬼プロダクションを作られたそうですので、ここで製作されれば好都合であると思います。出演者は後記の女優さんでもハント女性の方々でも可能と思いますが、何人かの候補者を発表して読者諸氏の投票によって適任者を選んでよいと考えます。私の夢に終わらず、大作が完成されることを祈っております。私の希望する配役は、静子―美矢かおる―旧姓左近麻里子。桂子―祝真理―美波恵子。京子―二条朱美―佐々木真弓。美津子―高鳥和子―長井葉津子。小夜子―紅真知子―岡本優子。珠江―大月麗子―安井喜久子。美佐江―安田朝子―浅井優子です。最後にちよっぴり不満を言わせてもらいますと、なぜ本誌だけがグラビア写真を掲載しないかということ。どこでも売っ

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

髪吊りで強烈ムチ打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

片足首引きつけ縛り

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

痛打にもかく美女体

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

あぐら縛りの羞恥責

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

片脚挙げて晒す裸身

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浣腸液の注入直後

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

強制浣腸の各姿態

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浣腸責めの美態開陳

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浣腸を待つポーズ

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

ている週刊誌や雑誌には堂々とグラビアの頁があります。私は本誌を見るたびに大変、淋しい思いがします。多くの愛読者諸兄は再びグラビア写真が掲載される事を願っているのではないのでしょうか。ぜひグラビアが復活されるよう願っています。(東京・板橋高志)

最近の本誌は、M女性の告白等がふえてきたのではないのでしょうか。大変喜ばしいことだと思っています。ところが、S Mに関する雑誌といえはやはり本誌が最高だと思っています。文章といい、写真といい、本誌にまさるものはないと痛感しています。つぎに映画ですが、この頃はS Mおおはやりです。昨年暮「ジユステイヌ」を見にいきました。が、外国の映画はS Mのシーンになっても、表情の変化もありませんし、悲鳴も聞こえませんでした。何か物足りません。私のよく行く映画館は、いつも古いのを上映しています。S Mシーンが沢山出てくるので喜んでいます。最近見たものでは「女肉の悦楽」で美矢かはるが乳房への電気責めで悶える姿や「人肉の市」で、これ又、美矢かはるがベッドの上で上半身、

裸で縛られ乳房を愛撫され跪くシーンなどが、とてもよかったと思います。(上守純)

カメラハントの大先生、辻村様は美女麗人を私達に代わってピンとハントしてその実感を報告して下さるので、その文章を読むのが唯一のたのしみです。辻村先生の筆は全くイヤラシさがなく新鮮そのものです。自分ならば、それまでに記事にできないようなことをするでしょう。先生は糖尿病というヨロイを着用していられるから、その点、大丈夫ですね。でも少しぐらい、いたずらして私達をたのしませて下さい。私はフオトを大分集めました。もっともっと、ふやしたいと思っています。カメラハントのものは必ず求めていきます。内容記事と照らしつつフオトを見ていけば、たのしみは余計増えます。しかし女優たちのカメラハントしたものは全然、分譲してくれないのは淋しい限りです。仕方がないので本誌の切り抜きで辛抱しています。また本誌にグラビア頁のないのがかえすがえすも残念です。(本田一郎)

神戸の大西様。ゴム禪大賛成で

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆめ

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆえ

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆひ

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆあ

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆも

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆに

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆほ

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆみ

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆる

全裸縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆへ

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆわ

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆよ

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆぬ

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆる

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれ

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よそ

全裸高小手の麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よの

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よや

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よい

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よふ

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よえ

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よぬ

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よあ

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よた

す。ゴム製の越中、モッコ輝を始め、水泳用バイク型などのゴム輝を私も懇意なオムツカバー・メーカーに依頼して特別に作っていただき、すばらしい使用感を味わっております。最近、バイク型で前袋が二重になっているものを作りました。内側の前袋には切れ目を作り、外側の前袋にはヒダを十分に作ってあるため使用して見ますと、まことにオツなものです。また山口市の安田様、特急寝台でカーテン一枚外の音を気にしながらのオムツカバーの着脱はリズムカルな振動と相まって最高ですね。ところで、ゴム輝ご希望のマニヤも多くおられるようですが、私のと同じ型でよろしければ、ご紹介いたします。また前開T型、黄色生ゴムがパッチリと取りつけられている生理帯、まだ少々手持ちがありますのでご一報下さい。

(名古屋・加藤)

○ 京都の藤川勉様。小生宛のお便り、楽しく拝見いたしました。貴殿も小生と同じ趣向で大変心強いです。小生は二十一才です。まだまだ同好の方が沢山おられると思います。貴殿も今後、通信にどんなお便り下さい。それはそれで

同好の者にとって、大変楽しいものです。一度貴殿とお会いしたいですね。女王様に仰向けに寝かされた顔の上に、巨大なお尻を乗せられ押しつぶされ、いやというほど強烈な臭気を嗅がされた末に、物足りないばかりブスツと顔の上にはふきつけられる強烈なオナラの臭気。考えただけでもワクワクします。ところで貴殿が小生に体験があれば、きかせて下さい。その事ですが、貴殿と同じです。座ぶとんの移り香を嗅いだだけです。早く体験したいものです。東区の方、小生の顔を座ぶとん代わりにして下さい。貴女様が小生の顔を押しつぶし、グロッキーになるまで、香り高い強烈な臭気を嗅がせられることに、小生は最高の喜びを感じます。このような小生の願望をかなえてくれる女性の出現することを願っております。

(札幌・池田一夫)

○ 女性から好意でも示されようものなら、たちまちギコチなくなってしまう、意気地のない二十五才の会社員です。そんなぼくの夢は中年のおばさまへの奉仕です。時にはS的奉仕、時にはM的奉仕と

「緊縛女体美のシリーズ」

大手札印画紙焼付

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もえV

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もゆV

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もよV

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もすV

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もせV

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もれV

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もるV

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もてV

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もなV

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もねV

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もむV

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もうV

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もきV

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もこV

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もみV

浴後の剥玉子縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はゆV

投げたす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はよV

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はてV

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はおV

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はのV

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はひV

おばさまにリードしてもらって奉仕したく思っています。ただ、縛りとか鞭打というような肉体的責めは勘忍して下さい。おばさまの汚れた下着を頭からかぶせられたりする羞恥責めは嬉しいですが、いずれにしても一方的で残酷なプレイは、するのも、されるのも嫌です。
(堺市・藤たかし)

本誌のフンドシに関する記事は嬉しく愛読しています。最近鈴木ゆり子さんを始めとする勇ましい女性のフンドシ愛用者が増えて喜ばしく頼もしい限りと、大変喜んでいきます。フンドシの記事がないとがっかりします。どうか毎月号、必ずフンドシの記事をのせて下さい。私とフンドシとのなれそめは、まだ小学校に上る前だったと思います。水泳のときはもちろん六尺フンドシをしめて泳いでいました。それ以外のときも、ときどきしめていました。戦時中は物資が乏しかったので、フンドシは越中フンドシ式にし、前後を逆にしめ、後ろを細くまるめて尻に食いこませしめていました。戦後は六尺フンドシをずっとしめていました。この頃は海やプールへ行ってもフンドシで泳ぐ人は、ついぞ見

かけず淋しい思いをしています。フンドシの効用は沢山ありますが下腹部を引きしめ内臓を安定させ胃下垂を防ぐなど色々あります。また臍下丹田に力が入り、力仕事るときふんばりがきき、気力が充実します。まことにフンドシはすばらしい衣類です。
(風洞士)

東区の女王様。初めて名乗りをあげます新参者です。私は一年ほど前から女王様のことを胸の中に描き続けて参りました。私は十九才、身長一六〇センチ、体重五十三キロの小心な男です。女王様の奴隷となって足下に跪く日を心待ちにしております。どうか私に君臨して下さいよう、お願いいたします。
(童貞犬)

ぼくは都会の立ち並ぶビルの谷間、板囲いの中の土木建築工事場で汗を流しながら働いている二十才の独身青年です。身長一七〇センチ、体重六十五キロで、Gパンに地下足袋、ヘルメットがぼくの作業姿です。ときには地上二十メートルの鉄骨の上が作業場になります。一年のうち、飯場とアパートが半々という野郎ばかりの生活です。毎日が太陽の下の仕事で

開股縛りに喜ぶ女

大手札四枚一組 略号△はわV
中河 恵子

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふV
中河 恵子

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほV
中河 恵子

悦唐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあV
中河 恵子

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はうV
中河 恵子

柱に立縛りてさらす

大手札四枚一組 略号△はさV
中河 恵子

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめV
中河 恵子

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はしV
中河 恵子

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はもV
中河 恵子

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむV
関谷富佐子

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめV
関谷富佐子

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はもV
関谷富佐子

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△はさV
関谷富佐子

両手吊りて痛める女身

大手札四枚一組 略号△はしV
大島 照代

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はすV
大島 照代

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせV
大島 照代

両手吊りてあえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆV
大島 照代

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はたV
大島 照代

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はちV
大島 照代

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつV
大島 照代

竹棒の胸絞め責め

大手札四枚一組 略号△はてV
大島 照代

竹棒開股胸絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はとV
大島 照代

すので、浅黒く日焼けし、気分を引きしめるため真白な六尺フンドシをキリキリとしめ、さらしをしっかりと腹に巻いて高い足場の上へのぼると、なんともいえない緊張した気分になります。どなたか同好の方で入れ墨、SMに興味ある方がおられましたら、ぜひ遠慮なくお知らせ下さい。

(東京杉並・村山重雄)

ぼくは豪城二氏の流腸絵画に拍手を送る。これを眺めているとスカッと便秘が治ったような心地がする。ある有名な評論家が、「更年期をすぎた女たちに喜ばれるような政治家は駄目だ」といっていたが、健全か否かの基準は人によって異なるものだ。現代の抑圧されたストレス解消のための大人の雑誌奇クの存在は尊い。もう一歩前進した自由がほしい。

(神戸市・恵尻 剛)

私の創作「パンティ・バイト」を載せていただきましたが、自分の雑文ごときは、まさか掲載されようとは考えていませんので、本誌を開いて自分の名前を発見したときの喜びは、たとえようのないものでした。しかし、あらためて

自分の文章を読み直して感じましたことは、短編にもかかわらず、内容的にフェチ、サド等と少し欲張りすぎたように感じ、反省している次第です。さて私は本誌を読みはじめてから八年ほどになりますが、その間に随分と多くのモデルさんの名が消えたり、また新たに登場したりしております。そして内容も一号々々、号をかさねるごとに充実感を増し、変化に富んだ内容は我々を十分、楽しませてくれ、大変勉強になりました。これから機会あるごとに投稿させていただきます。そしてSMの世界について、もっと理解を深めたく思いますので、M女性の方で私のお相手をして下さる人がおられましたら名乗りを上げて下さることを心から念じております。

(東京・中山久司)

私が平凡パンチを何気なく買って読んでいると「マゾヒスト沼正三を捜せ」という文章が目についた。それは「家畜人ヤプー」という大マゾヒズム小説らしい。昭和三十三年から本誌に二十回にわたり連載されたそうだが、まだ私はその頃、本誌を知らなかったもので残念でならない。三島由紀夫氏ら

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 大塚 啓子 略号八てきV	後手裸身柱縛り 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八てかV	縄目にあえぐ裸女 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八てくV	豊麗な裸身をくびる縄目 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八てこV	後手・高手小手縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 大塚 啓子 略号八てまV	長襦袢の緊縛色模様 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てみV	緋の腰巻緊縛色模様 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てむV	猿ぐつわに呻く女 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てめV	柱宙吊り強烈縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てもV	ポリウムを縛りあげる 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てんV	縄に苦悶する裸女を狙う 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てろV
--	--	---	--	--	--	--	---	---	---	--

真紅の腰巻着用姿態 大手札二枚一組 略号八〇〇円 大塚 啓子 略号八うおV	縄に悶える緊縛色模様 大手札二枚一組 略号八〇〇円 東浦・大塚 略号八うてV	真紅の腰巻着用縛り 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八うこV	華麗なる緊縛裸身 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るむV	みだらな開股縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るのV	責めに疲れた諦観 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るおV	真紅の腰巻姿で緊縛 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るまV	羞らしいの真正面縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るけV	若肌に喰い込む縄目 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るふV	高手小手後手縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るやV	股間縛りの開股姿態 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 中河 恵子 略号八れよV	羞らしいの股間縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 中河 恵子 略号八れにV
---	--	--	---	---	---	--	---	--	---	--	--

が激讀したらしい。私は本誌を讀んで文学的価値のある小説が大変多いことを知った。いわゆる耽美派であるこれらの作家連に対し、私は本当に尊敬する。文学の根本が一方がユーモア的な場合、他の一方は耽美的な物であると言い得る。団鬼六先生の「花と蛇」は独得の女性心理を鋭く描いた一大文学であると思ふ。そして辻村先生のカメラハントも私の目を楽しませてくれる。本誌を支える二大黒柱である団氏、辻村氏のこれからの活躍を期待する。

(東京・小便小僧)

鈴川露子様、四月号通信を拝見いたしました。私は貴女と同じ県内の川之江市に住みます二十二才の女性でございます。お便り拝見して、ますます私と同じ興味をお持ちのようですので、よろしければ貴女に男性パートナーのSさんをお世話したいと思ひます。Sさんでしたら信用もでき秘密を守って下さいます。きつと貴女は嬉しさと恥かしさで気が遠くなるほどのプレイができることと思ひます。貴女が私と同じ県内に住んでおられ、同じ趣味をお持ちのようですので、お便りしました。

(愛媛県川の江市・越智かおり)

〇 ぼくは二十六才のSに目覚めた男です。自分がSであると明確に意識したのは今から二年ほど前からです。ぼくは特殊な女性の集まる京都の遊びの中心ともいえる祇園に育ち、美しく装った女性の裏面を見知り、家業がまたそれらに関係深く、ぼくの家にも多くの女性が出入りしてました。ですから、それらの女性とも多く関係をもち、それが原因かどうかは知りませんが、一般的な女性とのつき合いには興味も感激もなくなり、その反面SMに対し急速に興味を覚えはじめました。ちょうどその頃、母の店に勤めるM子にさそわれるままSMプレイのまねごとのようなものを行なうてからは、ぼくの気持はそれに走ってしまいました。でも一昨年の秋、M子はパトロンを持って独立しました。ぼくとプレイできる京都近辺のM女性の方、ぼくにお便り下さい。

(京都・吉岡敏行)

〇 四月号の佐野みさ子様。貴女の投稿を拝見し、さっそくお便りしました。私は都内に住む今年二十三才になるS男性です。ぜひ私と

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第14号天星社宛へ願います。

(東京都渋谷区・武田常夫)

二十六才の貿易商社マンです。

(明石市・谷田宗一)

加古川の小山様、
読者通信拝見

しました。一度、夫婦プレイをしたいと思います。私どもも現在まで、お互いを昇華するために努力してきました。ご一緒に人生を楽しくさせるためのプレイを研究し合いたいですね。花も手を加えてこそ、美しく咲き匂うものです。貴女方も、きっと私達に勝る技術

くなり、絵画的な、詩的なハーモニ―が奏でられ、楽器は楽器としての最高の高鳴りを見せ、恍惚の耽美の時が作られると思います。
(神戸・瞳耀太郎)

○

京都市右京区の梅川幸子様。ゴムマニヤのマゾ趣味とは全くうれしくなります。小生自身も、それにあこがれを持ち、また数回、知人のマゾ女性とプレイした体験もあり、貴女とその調教されたレイ子さんというお手伝さんと三人で思う存分プレイを致したいと存じます。もちろん私自身、社会的なある地位にあり、会社の役員も致しております関係上、プレイバシ―は厳守いたしますし、ご希望であれば、その方面のベテランで本誌上にも数回、登場されておりますMSのベテラン紳士も知人です。ので男女二組でのプレイ等もご希望通りにできることと存じます。ぜひお目にかかりたく存じます。

(京都市上京区・南戸一郎)

愛知県の杉本様。同性の同好のお友達を得られて、とてもうれしく、また心強く感じています。ぜひ文通したいと思います。私の場合、浣腸はもう単に心理的な喜びではなくて、生理的な快感になっています。施術されるときのポーズは大たい仰臥で、足を強く屈曲した形をとられますので、時間をかけてゆっくりされますと、反

応する姿をすっかり露呈することになります。また、お酒を注入されたこともありすが、直腸は吸収が早いので直ぐ酔ってしまいます。浣腸ではありませんが、いろいろなものを詰めこまれたこともあります。お恥かしい次第ですが体内に注入されたりするときの快楽から、もう逃れることができなくなってしまうました。貴女様の赤裸々な告白、おきかせ下さいませ。なお、沢山の方からお便り頂いて有難うございました。末筆ながらお礼申し上げます。

(横浜・藤田春枝)

○

奇クファンの皆様初めまして。

小生は十余年以上のマニヤで、毎月皆様の勇気ある言行に、ただ目を見はるばかりです。けれど、三月号の編集後記の「世の中でマジメなことほど面白くないものはない……」というのを読んで、悩んでいた小生もペンをとる勇気が湧いてきました。小生は文章がアンバランスなら悩みもアンバランスで女装と下着フェチです。それも小生はヨゴレタ下着ではなく、せみの羽根のような薄く輝くばかりのナイロン・ランジェリーです。パンティ・ストッキング、ネグリ

ジェ、そのそれぞれに身を包むとき、女性に変身したことだけでなく、もっとそれ以上の、自分自身に力を得た喜びを感じます。小生は機会あるごとに、様々な夜多き下着を購入しています。勿論、それは私の唯一のゼイタクですので一流品のみを集めています。同好の皆様、ランジェリー・ファッション、女装など、お互いの心を分かちあいたいと思います。下着と女装に理解のある方、またこのような小生のパピ的存在になって下さる方、どうか小生の悩みを救って下さい。

(埼玉・飯塚保男)

○

大川恵子様。十一月号のぼくの

通信読んで頂けたでしょうか。初めて買った本誌で、あなたの「独りだけの浣腸プレイ」を読み、それ以来、あなたは、ぼくのアイドルになりました。あなたの一週間の浣腸の日課表もやってみました。グリセリンを原液のまま、一びん分注入は強烈でした。便意などというものではなく、直腸が外に押し出されるような感じでした。十一月号で、ぼくはプレイするとき女になりきってプレイすると書きましたが、それは正に恵子様なのです。体の構造は、ぼくも恵子様

も同じですからね。恵子様に対しては大変、失礼なことで申しわけございません。お許し下さい。自分が女だという気持ちを高めるためまず裸になってメンスバンドをつけベッドの上を悶えまわります。気持ちが高ぶってきたところで、プレイに入ります。プレイの様子はセルフタイマーで写し、アルバムに貼って保存しています。恵子様誌上で拝見するあなたは男とのプレイは嫌いなご様子ですので、プレイを、などと厚かましいことはありません。せめて誌上でアドバイスなどを与えて下されば大変嬉しく思います。

(東京都目黒区・橋本義也)

○

夫婦プレイの記事を、いつも楽しく読ませて頂いております。四月号、渡部好美様の「私はどうしてこんな女に」は、妾の性向に近く、嬉しく思いました。夫は三十才、妾は二十四才、結婚三年目です。妾が、こんな性向になったのは、結婚当時に夫が冗談に妾の手首を軽くハンカチで縛ったのが、そもそもの始まりです。そして次第に複雑な縛りにすみました。夫の好みで妾は思いきり派手なお化粧をし、奇抜な服装で外を歩き

次号（六月号）は四月二十五日に発売いたします

また夜はとびきりセクシーなランジェリーで装います。夫のいうように、つとめて観賞用、愛玩用女性になりきる様にしております。ただ一つ、心配なことは、最近になって、夫が他の夫婦を混えて交換プレイをしてみたいなどと、ときどき洩らし、妾の同意を求めはじめたことです。夫の前で他の男とプレイすることを想像するだけで興奮をおぼえます。しかし、いったんこの道に踏み込んでしまうとどのようなことになるかと心配です。その方面にご経験をお持ちの奥さま方に、誌上でご意見うかがわせていただきたいと思います。

（東京・小山美登利）

渡辺好美さん、私は貴女のような女性を妻にしているご主人が大変、うらやましく思います。もし貴女の夢を実現させることができたら、私は、ぜひ貴女の方のプレイを見学させて頂きたいものです。もちろん秘密は絶対に守りますから、私の願いをかなえて下さい。

（東京・大橋生）

オシメカバー用薄ゴムは近年入手し難いものの一つですが、扱っている店を発見しましたので、お知らせします。東京都台東区鳥越一丁目一六朝日商會がそれです。私が買ったのはクリーム色の巾十六センチのもので、単価は一メートル百五十円でした。ただし小量というわけに行かず、店の規定により一卷買いか、見本として五メートル以上買うようになっていきますので、私は一卷、約十七メートルを買う羽目になりました。もちろん、こんな大量を使う当てもないので、少量ご入用の方におゆずりしたいと思います。ただし、あくまでもゴム布であって、その

ままでは何の役にも立たないものですから縫製技術かゴム細工の心得がないと無駄になるでしょう。なお、五メートル以上ご希望なら直接前記の店に在庫問合わせをおすすめします。このとき、単にゴム布とだけいうと、他の品物と間違えられますから、「オシメカバー用の薄ゴム」と指定されるのがコツです。私が買ったときも、店員が何回も見当違いの品をとり出

すので、ついに真の用途を白状して、やっと目的のゴム布を手に入れた次第です。さてゴムの良さを知る人は、ゴムを消費する義務があると思います。ある程度の生産量、販売量があれば灯を絶やさないですむからです。ゴムマニヤの皆さん、せっせとゴム布を買おうではありませんか。

（東京・岩永正雄）

伊藤圭子さん、本誌上で貴女を知りました。若い貴女のMの世界が受難と現われ、傷心の毎日を送っておられると思うと、自称S男と認める小生は貴女が可哀想、気の毒と、内心、三十男の似・山田吾一紳士をうらみます。しかし小生も三十男の妻帯者のこぶつきです。人三十にしてSMの願望を知る男のする行為とは、あきれはてます。人には理性というものがなければなりません。ましてや貴女のように自分の姿を明け放った勇氣あるM女性に今一つの思いやりがなかったものかと思うと、SMの世界は、お先まっ暗です。伊藤圭子さん、SMを理解する者の中で、彼のような人間ばかりではありませぬ。本当のSMの世界を新たに求めて下さい。貴女のその夢

を、真の花園へ招きたいと思えます。SMを大いに語り合いませんか。小生は、すでに貴女と気持ちの上でSMプレイをしているつもりです。ぜひ、お便り下さい。

（岡山市・キク同人会S男）

四月号掲載の「浣腸によせて」という関悦子氏の文章の一節を読み、ぼくは大変感動した。坦々と抑制された素直な文章です。哀しい中にも真実のもつ美しさを感じられて来ます。見る雑誌から読む雑誌へと移行している本誌の姿が、よくわかります。またSMカメラハントの辻村隆氏の筆力は、いよいよ冴えていき「続金原奈加子の巻」では、男と女の心の真実の一端が、夫々見事に描き出されて、正に読みごたえがありました。SとMという所詮は不条理の世界に於いても真実の持つ美しさがあります。それは淡い紅色の如き妖しい美しさかもしれませぬ。が、しかしそれにより読者はより一層深く悲しくも本誌と結ばれていくのでしよう。

（東京都・水井清十郎）

○ 佐野みさ子様、四月号の「プレイをして下さい」拝見しました。

編集後記

○「近頃の奇クはおとなし過ぎる」「この原稿を載せる、但し削除はするな」「添削のためには骨抜きになった」「究極は性交が当然」「ワイセツ基準は変わっている」「セックス物の氾濫を見よ」「SMを伴った春本を期待している」「能動的に振舞いたいが警察があるもので、やむなく本誌で我慢している。そのつもりで赤裸々なものを載せろ」……等々。激励、叱咤、苦情、要望の数々に接する毎に感謝の念とともに同感を覚えます。

○出版物の使命……なんて、肩肘張らなくても、複雑な性衝動の一端を偽りなく発表することは、当然の権利でもあり有意義であることには違いないでしょう。にも拘らず卒直に

書いたものが、勝手に添削されている腹立たしさは、痛いほどよくわかります。その経験のある方は、きっとお思いのことでしょう。「編集部の意気地なしめ!」「警察がなければあコロシてやりたい」……などと。

○なるほど、最近は一様に相当なものが大手を振って出廻っています。性の解放も遂にここまで来たか、の感もありますが、法律に関する革命が成ったわけではなく、ただ、当局の物分りのよくなったのを喜ぶだけのことで、殆どの人間の胸底にあるものと認められていても、「謳歌」は忌避されているのが、残念ながら現状の「SM行為」でしょう。つまりSM自体がまだまだ奇異視されているとみるべきで、徒らにSEX謳歌の波に同調するのはどうかと思えますが如何? (S)

「懸賞原稿募集」

△体験、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万元迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めにに応じないことになっております。故悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿▽

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の榮 ☆

に限り 予約

一月分(1冊)	三五〇円	送20円
三月分(3冊)	一〇五〇円	送共
半年分(6冊)	二一〇〇円	送共

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

五月号

(第二十四巻第五号)

昭和四十五年四月二十日 印刷
昭和四十五年五月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 吉田稔
印刷人 北村俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

郵便番号558
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努めております。青少年の健全なる育成に努めております。青少年の健全なる育成に努めております。